續群書類從

第拾九輯中

東京
續群書類從完成會

續群書類從第拾九輯中目次

蹴鞠部

鷹部

續群書類從第拾九輯中目次終

續群書類從卷第五百三十六

總檢校保己一集
男源忠寶校

蹴鞠部一

内外三時抄目録幷序

諫議大夫開國縣公藤原朝臣雅有撰

夫蹴鞠者三國翫好の藝。万機安寧の術なり。是に依て聖帝明王もこれをすてず。忠臣賢士もみな用う。この故にかみ禁中洞裏よりはじめて。宸遊代々すたれず。下民問洛外にいたるまて。興宴家々にさかり也。こゝに拾遺亞相といふ人あり。この道に獨歩し此藝に尊長たり。このありわざ古今にこえ。其德神明に通ぜり。ふかく末萠をてらして。我跡のつくべからざる事をかゞみ。とをく未兆を察て。他家のつたふべきことを存す。しかるに高祖父刑部尙書幸に此藝に達して。ついで其譽をあらはす。亞相これを感て譜第の跡とし。これを推して聖皇の師とす。夫よりこのかた。當家相續してほと〳〵國師たり。予はじめて五歳にて早く此道にたづさはり。七歳にして天骨の名かりて柳營の歡宴に接し。十二にしてしらく〔ば脫歟〕代及の業をうけて茨岫の勅喚に應ず。自爾このかた猶數ヶ年。廿五才の冬にいたるまで。もはら嚴君に事こと晨昏にをこたらず。枕を扇ぎ席をあたゝむる事。こゝろざしかの純孝におよばず

といへども。造次顚沛にあひしたがひて。其勤勞をわすれずといふ事なし。しづかに學窓にむかふ時は。ひとりこの藝をさぐりとぶらひ。廣く宴筵にまじはる日は。人と此道を談ずることをきく。日夜に嚴旨をうけ。旦暮に敎訓をかうぶる。其詞ふかく神に約してわすれざれば。其説猶筆を執ても未記。しかるに年々に子孫に災して。日々に心肝をなやます。たゞ綿々たる悲涙の不休のみにあらず。また恨らくば代々の秘傳のまさに絶なむとすることを。こゝに一子を養育して。吾道を付屬せむとするに。彼猶幼稚にして我已に老たり。仍書記の外に一期にうくる所の口傳を記して。三十卷の秘書をつくる。名て内外三時抄といふ。内外に嫡庶をわかち子弟をへだつ。三時には初中後の分を定て次第梯登を辨ふ。しかりといへども事多は三時にわたりて三卷にわかれ。説少は三時におよばずして一兩卷に檢す。内後は嫡家一人これを存し。外初中は庶弟おなじくこれをさづくべし。しかれども志したがひ。器によりて猶淺深あるべし。又庶子弟たりといふとも。器瑚璉にかなひ。心ざし金石に類せば。後分内篇たりとも。少し是をさづけよ。凡これは假令の大綱なり。未及再話。たゞそらに思案して次第にこれを記す。内外の分猶錯亂をいたし。三時の別また前後せしめむ歟。いかにいはむや。崑玉つくることなく鄽金餘あり。漏脱さだめておほく。廢忘又しるきをや。但内外の篇を存し。三時の分を勘て。幽微の類をばすべからく可准知事はことを盡さず。ことばはこゝろをつくすことあたはず。是舊典の所載なり。只心情をみがきて先達の心を得よ。筏をすてゝ岸につき。指をわすれて月を見るは。内敎の所談なり。ふかく義理に本づきて。一端の

文にとゞこほることなかれ。文非文。々々文なることを存せよ。其年首尾前後なけれども。書記には首尾前後あり。如此のたぐひ。ねむごろに思量すべしといふことしかり。目錄略之。不抄出。

鞠場篇

庭作　塞緣下　石疊　傍前裁
懸樹　蔀　明障子　綱
鋪設　日隱　竿　鞠屋
鞠足屋　緣

庭作

朝云。鞠場之廣狹は定分なし。屋により所にしたがふ。先高下なく平地なるべし。いたく堅はわろし。石なきを能とす。砂ふかき沓入て惡し。もとの土をすこし取のけて。能土を砂にまぜて。よく〳〵突かたむべし。繩を引。水はかりにて高下なくすべし。さて雨の下時水のたまりたるを見て。くぼき所をうむべし。其上にあらからずこまかならず。よき程なる砂を一重まくべし。砂は川河海濱かはれり。其を計べし。凡庭作はよき程して先可立木。庭作しおほせてのちに木をたつれば庭損。懸をうへおほせてのち治定すべし。木のもとは昔はすこしこうもりて尻をとりを蹴けり。今はむかひつめによりにくしとて平地にす。人のこゝろによるべし。

書云。鞠場は家に隨て心に任せずといへども。むねと庭を結構すべくば。四方なるを能とすべし。其故慥書云。圓鞠方場云々。然者四方なるべし。分量は屋にしたがへば無力ことなり。

夕云。庭に廣略二あり。式の寸法はわざと懸を本として屋を立さしむ。外には更に不可有其分。又懸の寸法によりてまた增減あるべし。然

而先式の寸法二丈三尺ならば。惣じて鞠場の略は竪横五丈六尺なり。廣は四方八丈九尺なり。木の間若二丈五尺。若二丈一二尺ならば。其に隨て增減すべし。是家秘說なり。この寸法の子細は。懸のところにてこれをしるべし。

塞緣下事

朝云。外塞なからむ所は不及子細。さならぬ大床若緣下鞠ころび入ぬれば煩也。ふたぐべし。竹を二にわりて。雛の樣に二ふちに柱をも二にてすべし。又ひきゝ緣には一にてもす。また竹をまろながらも。木をも四方に作りてもす。緣の高下に隨ひて一も二も三もすべし。如此事は大綱を存ぬれば見能樣に計ふべし。さりとて先例なき今案はすべからず。此一段のみにかぎらず。自余もみな此義存べし。

石疊

朝云。溜の石疊は庭廣く懸遠くは取のくべからず。檐ちかき懸ならば可取去。但し五六尺ならばのくべし。七八尺ばかりならば。庭のかたばかりをとるべし。又二ならべあるは一巡をとることもあり。庭に隨て計べし。

鞠場之傍之前裁

朝云。庭廣からむには取のくべからず。口傳集にも前裁を不損して鞠と有。されば有無庭の樣によるべし。宗教卿白河宿所にぞ朝芝をふせたりと聞。未見先例。かたぐ\其謂なし。朝鞠雨後の會に露ありて鞠しめる。人の居ためもわろし。木外鞠延などするにもすべりて返く\無用事なり。但懸遠く前裁など有て。野に山などにふせたらむを取のくべからん。

懸樹

朝云。式の懸とは櫻柳松蛙手といふ。是兒女士の說也。また說。櫻柳松かへでと云へり。此說に付て。宗教卿（予時殿上人）。去安貞二年四月廿四日將軍

家（大納言入道今御所也。）南庭に切立の事有き。下官相共に奉行を承る。然に彼の所行をみむがために。一向彼卿に打任せて一義をも不出。前修理權大夫（時房朝臣）。むねとさたせしむ。此説に在之。艮櫻。巽柳。坤松。乾鷄冠木なり。後に羽林（教韶朝臣）。京にてきゝて以外難之。しかるに其後一巻書といふものを作出て。件説とてまた改て。艮柳。巽櫻。坤蛙手。乾松。如斯立て種々の才學をいふとかや。今按。新儀之條顯然歟。前後相違勿論なり。自元相傳之説ならば。何ぞ將軍家の南庭晴儀にしかのごとく立ざらむや。以て可知々々。當流には艮櫻。巽柳。坤蛙手。乾松なり。是南庭の植様なり。また同木若大小各二本あらば角ちがへにたつべし。また同木四本又同木三本常事なり。雜木は榎椋梨槐。これみな有先例。公庭に猶被立。況私所哉。式木雜木植まずる事また常事なり。木之間二丈貳三尺。なめやかの大木などは四尺にも可植。また庭せばく木少くば二丈にも可植。二丈の内は未見聞。但如法の好士の庭せばくて。さりとてはなど頻に懇望せば沙汰の限なり。植もすべし。木の面裏を見ることよく／＼沙汰すべし。やすくみゆるもあり。又見わきがたきもあるなり。枝のいだきたるかたを面とす。枝一切つればはたと面かはりする事あり。よく／＼木を廻て案計べし。木よりのきなく。繩にて寸法を取。ゆがみをも直べし。木すがたは大様犬の居たる様なるべし。本と梢とかはりたる木あり。様に隨て本につきこずゑに付て可立。またよく切成ばなをる事もあり。是等は練習にて被知なり。檐の寸法は定出る事なし。庭の廣狹による。いかさまにもすこしはのきによせて立也。凡庭の様。木の寸法。穴を堀こと。人に問ことあるべからず。但一流の宿老もしは可然上手故實の

人などあらば相談すべし。木を透事は。われ達すとおもふとも。人々に相談して可透。是故實なり。木を透ことは上手の所爲なり。然ば我も卑下し又人をも賞するよしなり。寂下の枝は寸法定たり。立烏帽子のうへ一尺余に可計。假令七尺余ばかりなり。後枝は切べし。其も様によるべし。ひきくとも木にそひておいのぼらばくるしからず。若屋の上簷の下に指入。よこさまなる枝は尤可切なり。木を透はむねと鞠の道あらせむため也。こすべきところ。ながすべき所。つたはすべきところ。はしらすべき所。いかすべき所。はねさすべき所。鞠になへかゝらすべき所。加様の所を存て可透なり。何となくしげきところ同様にて。かさなりまた並たる枝。さか枝。若はみにくき枝。ゑぼしにさはる枝等を切べし。凡枝一切不切に善悪出來物なり。よく〳〵可思惟。又切かぶの口。

皮のはげたる所などに。壁をぬり芝をふせたるなどすること。間々近來出來。これ鞠方の故實にはあらず。樹植方の才學也。所詮これら雨露におかされて朽損すれば。からせじとする事なり。まことにさるべし。但切立の松などに壁ぬることぞ心得ね。是はひがごとなり。箒杜に膠する風情か。

予云。數十年懸を植かへ〳〵して見るに。古木の大柳を切かぶにして立れば。其切口より雨水入て中朽。虫食て不幾損ず。切口に枝を打付て。そばよりも雨不入やうにして。蠣灰の壁をぬりたるは。はるかに久しく不朽なり。能々水入ぬやうにすべし。

自餘三方の懸事。いまだ式の木植たる先例をうかゞはす。然ばいづれにても同木四本若は兩三本を植。又雜木を立さすべき歟。凡當道の法義分口傳あれども。先規不分明の事をば常

にはせぬ事なり。可得心云々。
書云。樹は安宅の術。懸は鎮屋の方なり。然ば懸は尤可植物也。されば昔より蹴鞠の家ならねども皆植なり。凡懸は四面に立れども。南庭を以て式木とす。其植様初段にいふがごとし。南面を本とする儀に付て。當流に才學たつる。是心法師今案の說に。南方は鬼國なり。其故に怖魔鎮護の爲に懸を植云々。此義内典はしらず。外書には不可然。其故は書云。聖人南面治天下と云り。南方は朱雀火明の方也。内典には南方灌頂智の方とて宗とするとかや。然ば禁裏仙洞よりはじめて。式屋等皆南面なり。是を恐て木を植たる事なし。左近櫻などは中古より出來歟。其も鎮護の故にはあらずや。大極殿になし如何。又南方には寶生佛の淨土若は補陀落山觀音の淨土云々。必しも鬼國とばかりいふべからず。四神相應の儀にも。南には池を堀水をながせり。池水なき代には椿を九本植と云々。其も四方に植木あれば。南方の恐に植といふべからずや。又四條流には安貞には艮に櫻を立。今は柳を立。巽に櫻を植云々。傳聞。柳は夘の木と書たれば春の木とすべし。（春は卯の方也云々）又艮は鬼門の方なり。柳は内典に號魔怖木云々然ば鬼門の方に立て。鬼魔等を防べしとかや。是誠に一往其謂あるに似たれ共方々難あり。懸は四本を四方四季にかたどること勿論なり。柳の字は誠に［　　］

冠

朝云。鞠の裝束とて別に無殊事。只尋常之裝束に聊用意計をするなり。冠は不落樣によく〳〵したゝむべし。冠懸は紫糸にてかた手かへしと云組の中の中程に。穴をくみわけて巾子を入なり。さておとがひの下に結也。近來は紙捻にてしあひたり。時儀によるべし。されど

も家には組を本とする也。緌は衛府の人行幸の後朝御會若は警固之時懸之。但警固之比も禁裏の外にては卷纓計にて不懸之。おとなしき公卿は衞府なれども卷纓計にて不緌。（是禁裏御會事）也。人の心によるべし。

夕云。冠は烏帽子よりは落やすきもの也。よく用意すべし。其様。冠の巾子の本の前に。細き穴を二ならべて開て。紺のいとをよりて本鳥に結つけて。件之穴よりとほして。前にま結にして切也。人に不可見。揚馬に乘人も如此するとかや。冠懸は紫勿論也。但依年齢初中後によりて色に淺深あり。（若はふかく。壯は中。老はあさし。）又五旬以後などには。紺糸にてよつくみ。但紺は汗こき人は顔よごれてわろし。宿老は馬尾をより合てす。故大刑部所被用也。わかきより次第に老者になれば細くなる也。狩衣の袖の結などもさにこそあれ。又次第に大くすべしと云説あり。其故は若壯之人は本鳥もふとく。額もあながちにはげず。されば細とも可足。老者は髮もなく額もはげあがりて憑なければ。太してつよく結也。細はつよくするにはいたくてわろしと云々。所詮兩説たるべし。太刀二三分計也。管絃せん人は琵琶の三絃箏幷和琴の絃を用ゆべし。此三絃のを紙捻はわななし。冠の巾子の本に。前よりつのをこしてか〔お歟〕く。組はわな有ばわなのうちへ巾子を入てす。年闌て額はげたる人は。わなのうしろを一二寸ばかりのべて。前のかたをいそびたひの上にかけてすればあぶなからす。俄なる御會に無用意なるには。會者の中に親類弟子若は下人之狩衣水干直垂などの袖括の組を取て懸べし。凡冠懸は初蒔繪弓に卷たる組を取てし出たる也云々。色の淺深大さの程など誠にさりとおぼゆ。

予如法及幕天參東宮御方たりしに。御跳蹴

ありき。冠あやうく覺しかば。下人の烏帽子懸をとりてしたりき。是雖無先例。假なりしかば懸たりき。有興よし人〴〵申き。

束帶

朝云。只如尋常卿高く可着之。前のふくらの下をすこし帶にはさむ也。（直衣々冠同之。）下襲の裾をばふまれぬほどに。うはてに懸て。不落之樣に計べし。有口傳。

劒は撤して鞠場に出べし。笏檜扇同之。韈は常時の絹韈なるべし。又鞠韈をも用事恒のこと也。結緒は例革なり。無用意之時は。車の後の簾のあげ皮を可用。

夕云。大底初に畢〔同兼〕。但下襲裾に有秘曲。帶につよく下うらをはさむ也。人に不可見。爲不落也。韈同初段。但絹韈もまりの韈の形にたちて。うらに白革を付也。絹ばかりはすべりて惡也。白革の韈は束帶之時着べしと云說あれど。大臣の可令着之由。既に庭訓抄に書れぬれば。たはやすく難用歟。又相公は無苦之樣に被記畢。可有時儀。且申入などして着せん事勿論也。結緒も白革云々。但實尋が記には。諒闇也と難じたる事あり。凡諸事吉凶通用のことのみて歟。〔マヽ〕常の結緒また更若なし。

直衣

朝云。禁中后宮春宮坊常事也。仙洞にもまゝ着之。行幸御逗留日。若朝覲又警固之時御會等。皆可着人は直衣卷纓。若綏有人兵衞府事也。凡直衣禁裏にてはゆりたる外は凡人の公卿は無左右着事なし。然而當家には公卿の後又未昇殿の時も。御鞠之時は着直衣也。衣冠は鞠にあつくらはしき故也。

予以此法公卿之後推而可着之由。申談花山院前內府之處。家例雖然。諸事古今異也。無左右着之者。若及御沙汰者。爲後不可宜。可

伺歟云々。仍奏聞之處。所　勅許にて着之。甚長侍從爲未昇殿。禁裏御會着之。爲先規註之。

衣冠

朝云。直衣不着人は禁裏の御會等着深之。(誤字アラン)無別子細。只如直衣。凡直衣々冠の下には冬春は袙。夏秋は單帷等如常。若き人は四月始は若かえでの衣。秋は生の衣など着べし。但鞠に生の衣いたく先規少歟。又雖着何有難乎。猶あつくらはしくやあらん。凡束帶直衣々冠等は。皆はた袖ひろくして。布衣などにはにず。然しはた袖と大袖との縫目をとる也。衣文は束帶はいふにおよばず。直衣々冠は始はかきてかがむとて。起座之時引ぬきて出べし。衣文かきたるまゝにて蹴はみにくし。又責伏ればいかにも亂るゝ也。されぱみだす也。されども老人ど〔の誤歟〕く若は上ざまのいたくをれこたれずして。やがて可入人などは。衣文引やぶるなどさてはすべからず。着單事依時人に隨べし。委は有布衣所。又警固之時。武官は卷纓緌如右。

布衣

朝云。布衣は尋常の服。當道に所執也。其も只よのつねにたがふことなし。但香の色をぞ長老の用る色にて。荒凉には不着。若重代若さるべき人の此道も相傳たしかに故實ぞむじためる人着べし。こき引のりうらなど汗にわろき間。右のみ用ざる歟。其外ことなる事なし。口傳集等のごとく。尻は常よりはみじかく。四何以前指貫より一寸ばかりみじかく。强仕已後はさしぬきと同分なるべし。指貫は口傳集には恒よりはすこし廣くみじかくあるべしと云々。されど近來短くする人なき也。故相公ぞ短を用意有けると聞し。長をば或腰を折反。或は括さしを折反。又くりあげなどすくりあげと

いふは。わきへをし下て。括にてまき上て。指貫をもをしあげて括也。小俣必縫べし。不縫ば延足などの時袙のすそ出ことあり。括たる指貫の長さは。足のくびより一寸半許たかゝるべし。指貫足くびにしかれて鞠あたるをば。指貫のまりけると云て見苦事也。さればとてあまりたかくて。韈と指貫との間赤脛みゆる殊に見ぐるし。只見よく蹴よき程を計べし。右の方のしたぎをばうしろへをしやりて。ひざにまりのさはるに。あやまりなき程にすべし。又股立はさみ上事常〔當歟〕家にはせず。四條の流にし出たり。成平拾遺亞相以下さる事なし。子細口傳集分明也。故宗長卿雅賢卿に習てしはじめたり。乖說（クワイエツ）は彼の佐々木野の家の說也。且親任入道語しは。故四條入道殿後刑部。承元に召出されて見證時。被のそはたさまれたるをみて歸て之後。是は誰說を傳たるぞとて大に被申き。即親任が又〔父歟〕親教入道まさしく承之きと云々凡此外も彼卿雅賢卿より相傳事少々有之由。世以所知也。故宗長卿は一期にそはたらざる事一度云々。然に宗教卿は常不取之。父子不間〔問歟〕。是當流の兼尊律師に宗教卿は傳受之。故上手人執心者絹上めしき。

水干

朝云。是又無殊子細。能くびを折付べし。頸紙の肩よりすそを直に折付れば能也。布の單水干などはすきて。わろく折ぬればみにくし。すぐに折付ぬれば。透か四ほそにて能也。紐を結に三說あり。尋常にはうちむすびて。うはかへの下へ入なり。是はまりの時はむねあく也。一には右の紐はうしろなれば。前へ引くだして。うはかへの紐は下なれば。下より左の方より引いだして。むねの上に結之。一には右の紐をば右の下かへの内へ入て。左へ引廻てたもと

より引出て。又左の紐をば右のたもとより引出て。兩方よりむねの上にもろわなに結也。又片わなにも結。三說ながら同也。後說を能とす。これあら馬などにのるも如此するとかや。葛袴常には白き葛也。刷時はすそごとにそめ。或股立腰ぎはなどに繪書事もあり。又練貫の袴是も只白く。又必先繪などもかく。袴をば革にて閉也。我はく韈の革の分也。鞠の取革のごとし。四條流には不閉。これもあら馬などに乘人は閉とぞ申。股立前の縫目を閉也。前の膝よりうへを閉也。さがりぬれば延足の時膝に當ていたきなり。冬春は袙。夏秋は帷は白又地白淺黃藍摺などを着也。幼稚人又童形などは水干上下を着也。

〔押紙〕書云。狩衣は白裌二藍常物也。香は宜物也。老者若人皆用之。但此道に我はと思人着之。

香は共裏又白裏。布單狩衣皆然るべし。柳櫻等若人尤有興。刷之時は白裌。布衣には冬の帶を裏がへしてする也。是裝束方にも所執也。花田に優の物也。縹白裏おとなしき人用之如此。うらまさりの狩衣をば。端袖と吹反とを折事あり。又夏二藍の布の單狩衣に。白き生の帶をする事あり。是等も裝束の方執する事也。三月はうりより帷を着たる事も有。四月の十日比迄着袙事もあり。可依時之寒暑也。若人は夏白單を着。又四月上旬若かえてとて萠袙〔黃服〕を着す。宿老は鞠には冬も帷を用と云說もあり。されど可斟酌。予云。當世依新制上下皆冬夏用帷。赤汗取帷着用尤有興有例。予云。當世每人帷着用之。古は師匠家同免後着之。色布衣のなべらかなるを臨刻限着改事有例。尤可執事也。

直衣

朝云。是殊無別義。京都には如法內々私會之外

不可有事也。承元にぞ故成勝寺にて直垂の御會とて上下結構事ありき。革匊記にみえたり。是にも葛袴。狩袴。張裏袴。侍などは襖袴などを着也。直垂上下は袴しあつかふ物也。結を上ばみじかく。たゞはながし。或は腰を折反。或はそばをはさむ。革匊記にも勅定如若。仍御股立をはさまる。仍故相公夾之。今は其を例として。當家にも直垂の時はさむ。何事あらんや云々。又常色を弟子二人などにきする事あり。承元に御弟子二人醫王寧王着之。賀茂松下露掃者。當家爲弟子蹴之。

烏帽子

朝云。只やはらかなるをよしとす。こはさは鞠あたればやれ損じ。歸足の時も鞠を走しきて。かたく／＼わろき物也。うすぬりぞよけれど。若人は當時の風儀にそむくべし。油塗とかや云物にてぬらすべし。やはらかなる也。引入事は可斟酌。古くはわざとも有其興けり。又常にしければ無苦。承元のころ有雅卿は毎度に引入けり。たゞあるよりは能見ければにや好けり。當世は人わらふ作法なればとて。すれば嘲哢の基也。猶豫すべし。只不落之様に能々したゝむべし。老者は馬尾にて烏帽子懸をす。幸平が所行也。革匊にみえたり。烏帽子を引折てもかく。又額留に結てもかく。是はみにくき也。

扇

朝云。鞠にはいつも夏扇を持也。當家には束帯の時も夏の扇を持也。彫骨尤爲宜。ことに指ためよき也。細骨勿論也。骨多かさなりたる扇は。指時まろびてわろし。此道の長老ことに年闌ては檜骨に檀紙をはりて持之有例。かゝる振舞はいかさまにも五旬以後事也。仍荒凉に不可持之。扇仕事は。初參又極信之時などは。いかに炎暑なりともたやすく仕べからず。を

のづから仕時は左にてつかふべし。凡扇は身をはなつべからず。座などに打置ことせぬこと也。但懐中も煩し。指もこと〳〵しければ。近來每人座にかくしをく。非例のよしは存ながら。誰々もさてもある也。是よき事にはあらず。指事は彼篇に載之。

夕云。直衣々冠に指扇事。普通には無其儀といふ也。然而實には有也。如刀左腰に可指。在扇篇。努々人に不可見云々。

疊紙

朝云。疊紙は能々用意あるべし。落しぬれば失禮也。不持にはしかじ。不持して難澁の事あらば能々懐中すべし。晴に取出てたかくかむみぐるし。かた〳〵にむかひて用意してかむべし。木に立て疊紙取出てかむ事なし。若はなたりし。衄(ハナヂ)など常にたる人は。ふかく懐中にはさみて持べし。それもあらはにてかみなどすべきにあらず。木の後に立かくれ。もしは便宜の所にゝげいてゝすべし。疊紙は廣くはせず。懐紙を四に折てすべし。三に折人あり。それは餘にひろくてわろし。

予云。宗繼朝臣相州之亭舎に。常に木に立ながら不憚高聲にかむ。諸人難之。歸問其之間後々止之云々。比興事也。

手巾

朝云。老者若は肥滿の人。わかき人もことの外に汗多たる人などは。無力事なれば。持こと何條事有哉。あらはにひろげひらめかしなどすべからず。

夕云。若は老者若は肥滿の人は可持之。さればとて露顯しひらめかしなどすべからず。凡由緒有。應和二年四月廿八日。御仁壽殿。侍臣蹴鞠。昌子親王以汗巾令賜侍臣等云々。於鞠先例殊に殊勝也。可秘之。

沓

朝云。履は堅柔人の好によるべし。古も然あり。又庭の様によるべし。鞋道若はいたくかたき庭の然も小石まじりたるには。かたき履わろし。あやまり有。やはらかなるよしとても。やがてひらみぬるもわろし。平みぬる沓は延足もわろく。又ぬけやすき也。普通の沓よりはちと廣くて。はなすこしながきが能也。はなながきは平に見ゆる也。それを近來の人鞠の沓はく。なをひらむるとて。わざと押平めなどけしからずする事あり。不可然。きびすは淺がよき也。深が内へまくりたるなどは。いかにもきびすの上のほどくはれてわろし。淺ければとて落やすきことなし。よくしつくべし。凡履は縫目よりとく損ずる物なれば。先ぬらぬさきにとりよせて見て。ねりくりの糸をもて縫直さするがよき也。白木にてみるが第一の事也。こゝかしこつぎなどえせず。さて思さまに精好してぬらするが能也。履は思々なれども。何をもして試たるに。只蒲を一寸ばかりに切入て。其上に長をはなに折反して亂入て。鞋を堅様に三四枚一重づゝかさねてとぢて。紙をまきて。これも鼻に折反てしたるがよき也。ふみならすに随て。足におもひ合てよし。又左右取かへてはくにも。又足のかたにふみなをされて思様也。自余の或か衣をくみ或木履。如此類は足に随てとなりかくなる事なくてわろき也。履は如常法指貫の切にてする事もあれども。鞠にはいかにも厚紙がよき也。されば上さまにも紙也。猫搔若すべる庭雨の後などは沓の用意あるべし。新くそりたかきわろし。すこし平みかゝりたるはよき也。沓は極て輕有べし。

韈

朝云。韈は古くは口傳故實おほかりき。承元の程品以後任彼又無別子細。但件式云。有文燻革韈。不論尊卑。不謂緇素。三十以後可着之云々。此文然而故實に無左右不着之。凡稽古の物とも世にも聞。人にもさる好士としられ。師說もたしかに受たる物。長者の免を蒙てはく也。任雅意て着する事なし。是を習とす。藍白地のぢをこく燻たる。故相公申請云。我等子孫紫色は未聽之程。平民に混じて藍革藍白地を着用無念也。然ば此色を白後はり之候べきよしを申て。勅使をかぶりたりし也。其後漸弟子の宗とあるにはかせなどしたりしをみて。行忠入道行景が嫡子法名寂緣。故少將致雅朝臣。に懇望してゆりたりしより流布したる也。今はかへりて無念也。藍革藍白地は同位の色なれども。藍革をむねとする也。初參ごとくの時もはくべし。韈の形四條の流は裝束のごとし。沓はかで韈計にては。あゆむ時などはまことによかりぬべし。くつにては御まりてわろき也。當流の形は鼻ひろくこゝかしこ足よりはくつろぎて。はきにくかりぬべけれど。沓をつめてしかも足はつまらでよき也。はきて試べし。只うちみたるもよし。かたがた德有樣也。黃白地は好用べからず。地燻革に混ず。文も赤く錦革にも混亂する也。禁色ゆりたらん人は不可有苦。韈はうらを付也。上さまには顯文紗などをも付れども。いかにも不宜。只白革を付也。面を內になして。うらあはせに付べし。切入の韈は禁色事也。とのかへる時は燻革以下にも切入事も又不及別。韈は文も色も可存年齡。燻皮の色は若はふかく老はあさし。中年又折中を好よ。文は若は滋く。老は一文などを可用。隨齡可相計也。韈をば何足とは不言。量と云べき也。結緒は當家有文無文ともに用也。四條方には無文許を用云々。

依之兄弟相論及勘例。故相公之說被用之畢。已後鳥羽院有文を令用御畢。其後當代同前也。切様口傳集のごとし。韈と同文異文同色不同色皆用之。藍革。あゐしらぢ。むらさきがは。錦革。韈と混亂しても結也。いづれも苦なし。結様着沓篇在之。

晝云。白皮の韈大臣の可令着云々。束帶之時は凡人も有何事哉。無文藍皮は廷尉又如法の宿老。若は法師。或諒闇之時などに可用。故相公重服之時令着賜也。其時の記。白革。件革事被載之。如此事吉凶共に通用之。准例不可勝計云々。又伏組縫物等貴人のめすべき物也。但當家にも可着之。且有先例。見革紺記。韈なくて結緒ばかりにて蹴事あり。革紺記にみえたり。又堂上の鞠の時。韈ばかりにて足を左右同結之。結て立事あり。大刑部の所行也。雪朝の南庭鞠云々。夕云。程品の次第に猶有奥儀。初位に藍革藍白地云々。所詮以藍色爲本。藍色は蒼（ミドリ）也。蒼は五行大義云。東方の木之色。萬物發生。第葉之色云々。四季の始四方之首也。依之初之色とす。第二有文燻革也。燻革本煙之色也。則陽炎之赤色也。第二之夏の色に當之。第三錦革紫白地也。同書云。西方金色。白秋爲煞氣。白露爲霜云々。錦革も紫白地も本之地は白色也。然に赤色を白色に混ず。以南方之間色西方の正色に次ぐ。白色之間色也。第四有文紫革は北方之間色也。同書云。以南方之赤色北方之黑色に合云々。是有文之至極也。第五無文燻革は中央之黄色也。これ君王の位也。尤道之長老に付べし。專若之貴服に被定。其色雖同第二これ金體大常也。仍其色白第二卿可薄。彼は赤色により是は黄色なるべし。第六無文紫革は是又雖同有文。金輿椀各別なり。紫を賞する故程品にのせ畢。賀茂人有文無文燻革紫革不着也。

小袖

書云。鞠足は小袖に用意すべし。只出仕といへども可用意。寒天にはあまた重きるに。鞠仮にあるに。其まゝにてければあつし。かねてぬげば始つかたはさむし。このあはひ尤大事也。常の小袖を仮にぬげば煩し。されば小袖の帯する程より切たるを着たれば。仮にぬぐにわづらひなし。可用意。又春の季つかたあたゝかなるには。すゞしうらの小袖を用也。はるかにすゞしくも又た汗たるにも。身につかずして宜物也。

抜袖結

夕云。狩衣水干直垂等の袖の活[括歟]をぬく事あり。若は勝負若は人に争。又袖忠節之時事也。其作法。木の後に立入て或蹲踞。或は突膝。(如指扇作法。)又等輩之時は。乍立木の方の袖之結を抜也。此作法を用時は兼可令用意。結は常は閉付。續飯付にする物也。この時は不然。抜やすき様にすべし。必非木平れども。木の近邊。或中門。或垣際。如此便宜の所に立よりてぬくべし。抜様。片手にて袖の下の縫目を取て。結目をときて。うへの折目の結を取て可抜出。若澁などして不抜ば。何ともして目安く抜とりて。ふかく可懐中。[本ノ](不可落之。)如此抜て後忠をぬき曲を盡べし。ゆめ〳〵のざなるべからず。端袖を折反も如右。

單[押紙]

夕云。初に重て着事あり。宗長卿度々着之。後鳥羽院又着御あり。相撲次郎時村數相公の弟子として院參之時着之。大底下括て宗々臣。臨御會剋限て上結之時着之。自宿所上結て着たる例は少也。

予云。宗繼朝臣自兼日上結着事度々。結句卅余にて紅單を重たりとて諸人嘲哢也。

主上御裝束

書云。御冠懸は未見先規。但御冠難澁の御事ならば。縱雖無先例不可有子細。紙捻は無下也。組もあまり下ざまの心地して。にくひけやせん。弦あそばされば尤可優。又くみも何條ことあらんや。御直衣に御大口はさみ上らる。又御指貫建久八年に諸卿に御たづね有てはじめてめす。帳臺試夜着用ありとて被准。其節御沓めさる。後堀河院御時。御沓に錦を押て。御草鞋のやうにせられけり。誰が計申たりとは不聞覽。建久より御履を被用上は不可然歟。御韈は有文紫革錦革以下。藍白地藍革如恒。伏組縫物等あるべし。うらは顯文紗美絹也。但絹はいかにも御足にまつはれてわろし。白革能物也。主上などは御檜扇尤よろしかるべし。下ざまこそ不持故はあれ。所詮扇はまりをかき入れし筆仕はん折扇を差む折也。しかあれば上ざまなどはかやうの御事あるべからず。御檜扇なりとも何事かあらん。又可爲叡慮。

予云。新院御在位。當今刷之時。令着御赤御袴て。御紐を入られて被上。是若自禪林寺殿御在位之時始此事不審也。元無御紐。仍始て鞠之時計被入て〔之歟〕哉。且當今御沙汰之時。予申出此事之處勅定候。誠無其謂。雖然御袴者不混俗之間被用之云々。

○上皇

書云。御直衣。冠御烏帽子隨節。御布衣。若內々會之時。御小直衣御狩衣等也。無殊儀。後鳥羽院は御直垂御葛袴御狩袴。是は別儀也。蹴道建保之比被用之。予云。其比行幸之比也。即御會有之。其時蹴道後被用。其上非故儀。

春宮

書云。先例希歟。大底同先段。

親王

書云。是又無殊儀。同上皇。能宗記云。後白河院親王御時。被用蹴道云々。是不審。

攝關付大臣

書云。只如尋常之法。小直衣小狩衣皆有例有謂。其外無別儀。但常の出仕も下紐らるゝ事なれば。俄御會之時。乍下袴上紐て。右下袴の前をばほころばして。後へ押やりて令立賜先例あり。後鳥羽院後御宇。賴實公如此。古くは指貫を沓にふみ入て立。これ其の時は裝束なへ〳〵と有ける時なればこそ然らめ。當時如木いかでかけらるべきや。韈。むかしは禁色を着する人は韈も禁色也き。然而程品之後は上下ゆるゝ事なれば。公宴には不可叶。私會には有何事哉。當家だにも初度の韈始には錦革を用事也。況執柄家哉。

大理 付殿上地下廷尉。

書云。大理以下廷尉。於鞠會者上紐更無憚者也。忠信卿。有雅卿大理之時上之。重輔一藹判官之時上之。又後白河院御時。仲頼。知康上之。更不可憚者也。

予云。先年與宗教卿依此事及訴陳了。然勅判有當流。又爲方卿廷尉佐之時。一白赤衣襖袴上紐事。大理之時近習之間。朝夕上紐祗候勿論事也。當家紅袴用之。

鞠時可持夏扇也。韈は何革も雖無苦。大滑尤可宜。忠信卿大理之時着之。然御弟子也。無文藍革も可然。地下廷尉足袋に無文燻革不用之。鞠之時不可着之。引入烏帽子。廷尉作法に未見先規。此外裝束如恒。松下有文無文燻革韈袴不着也。

地下侍

書云。是も無殊事。只公宴には一向布衣也。行景所行如此。雖直垂御會猶獨布衣也。革韈記有之。禁裏猶然。況仙洞乎。主上立御時被召。立時は前に非足の六位などを立て其後に仕也。是榼代々號革韈に見へたり。賀茂松下絹上色袴

不着。弟子取事無之儀也。

童

書云。狩衣水干尋常之法也。直垂に袴又論〔勿歟〕也。革翎記に。但狩衣はいたく不着歟。然而尋常之人尤宜。又恒出仕さこそあれ。御前に祗候の童部は。直垂上下にかみを上。頭髮搔上之。僧坊より參する童部は髮をあげず水干袴也。又直垂常事也。騎王尋王布之。同色に而同括をぬきなどしき。賀茂人童時は絹上不着。

僧

書云。僧は昔沓はく事なし。尻切に疊紙をあてて結てき。始て着沓事は。保元四年五月三日。實尋自院賜沓韈着之しより今は沓なり。源九入道は花園左大臣より沓を賜て始てはく。是入道の始例也。又僧は鼻高をもはきけり。法眼は打任ては有べからず。但御持僧若は公請に參たる名僧などを俄被召立之時。無力其まゝにて立こと有先例也。袈裟はぬぐべし。法衣也。されど承元三條座主の坊に御幸の時。仰頻なるによりて。座主あからさまに立たまふ。不及撤袈裟。又沓韈にをよばず。依人境べし。是は只如法如形たち賜へば。撤さては猶こと〳〵しきによりて。うるはしく蹴べき僧はとるべき也。僧裝束も別尋なし。常法也。法服の時の韈は絹勿論也。結緒ばかり革なるべし。取あへぬ事なくば。車のうしろの上革又常をも可尋上。鈍色の裝束恒事也。指貫を着之時裳をば撤也。是結所にて可撤て。こと〳〵とひらめかさずして可取にやすき樣に。かねて衣のうへに着之參べし。刻限にとるべし。新制裝束は裳をとらず。されど後鳥羽院御時。裳ひらめきてうるさしとて。可着指貫よし仰下さる。裘袋絹衣これ着指貫事。荒涼の所爲にあらず。可隨人。布ころもにさしぬき。兼尊律師院參之時常

用てき。衣袴常服也。下袴の用意如俗このなりは何所にも可通用也。但參内には除之。可然所には無左右不可用。是等つねのごとし。衣には大口なりぞ如法褻服なるを。院參の僧用たる例多し。雖然非尋常法歟。香帷は卅以後可着用之。蹴鞠之日此色を重ずる事如俗之法。縱卅以後なりとも。荒涼に不可着之。ぬの衣に絹蕉の袴又はり袴常事也。侍僧は等身衣に指貫之外無例。仁〔俊乙〕後法橋後鳥羽院御時百足也。次々會合は別事也。可依時儀。勝圓法橋寧王。二條關白家にて布衣衣袴を着て參たりけるを。人〳〵とがめて止たりけり。されど後々には蒙御免て又着けり云々。後院御時增圓法印薄墨絹衣袴にて御會に參りたりけるをば。法印以上の房官などは。さてもありなんと御沙汰云々。是房官は不可准侍。仍衣袴着用不及子細者也。

予云。行誓法橋院參には布の衣袴也。

侍僧も當道名譽あり。好士に成て年久く世にしられたらば。中程の晴などには。長淨衣に括上などしたらん有何事哉。鞠日不嫌時節用帷事通例也。是宿德之所爲也。僧又同前。

遁世人

書云。中墨染衣袴。練色のうらまさりのきぬ可重帷。白香隨人。衣の頸を折也。仍たゞ人の頸折事はせぬ也。襪は鹿革蝶丸。遁世の襪に用によりて。俗人は不用之。件革は凡何にも不用之。仍弃世しるしと也。其外は如俗人いかさまにもはなやかに裝束事事不可然也。源九入道は花園左府會に沓襪葛袴をきせられたりけり。此なりふるさまは如侍入道は諸事に引入烏帽子に布狩衣葛袴なりけりと云々。是有識入說也。

予後嵯峨法皇御時。于時建長二三年也。予幼少にて御會に參仕之時。小野宮侍從入道。諱信。俗名俊平。資雅三位入道。皆薄墨染衣袴なりき。三位入道は普

用錦革き。

諒闇

書云。不可違出仕之法。彼識者に訪べし。出仕する人々は猶しゝら烏帽子を着也。庶品絹狩衣。平絹指貫。生白帯。沓は黒赤可随時。後鳥羽院御時。故相公并故刑部宗長卿共に黒沓也。範茂卿相公に弟子也。朱漆の沓のうへを一はりぬりかへして着之。韈は故相公無文藍革也。宗長卿は或うらがへし或又有文を用に。有文をば相公難ありけり。革羽に見へたり。束帯直衣々冠等只如出仕之法。冠は纓を巻也。季服之時は纓をたまひて如六位之纓する也。諒闇之時はたゞの巻纓也。此作法尋常の人不存知。平家の人〳〵に訪て可存事也。且又可尋先規也。爲不吉事之間。毎人委不沙汰也。冠懸淺黄糸可然。扇淺黄也。凡此不吉作法は普通の人は不存知。其識者の人〳〵にたづね訪べし。

〔右内外三時抄目錄以内記閣錄課本校合〕

蹴鞠條々大概　一名蹴鞠十ヶ條

身體事

書云。凡人のうけたるところ。性に利鈍賢愚あり。體に好惡大少あり。父よけれども子かならずうけず。師妙なれども弟子又まなぶ事かたし。人の心同からざる事其面のごとし。面々各々也。かならず一樣を執し一隅をまもるべからず。たゞ生得のすがたを存べし。但不得方をも好て直せば。たゞ打すてたるには似ず。はるかによくなる也。

身體といふに。先くせなきを吉とす。目おそろしく見なさず。顏持うなつきかろ〳〵しかるべからず。手持ひきからずみにくからず。たをやかにこはく持すくみ。手ひろげず。腰ひざく

まず。むね出ず。足のくびよはくして。鞠けるに内外へふらず。足ひきくあるべし。想相身はいさゝか立おほひたるやうにて。頭すゝみ足ころなる様に立ならぶべし。けはじめにひろき所にてけあげむとおひありきて。けならふべからず。しかればいかにものけはり。あしたかくひざかゞまりくせ出來也。こしより上はたはやかにて。腰より下すぐにつよく有べし。凡以自心難量。借他眼可知云々。

鞠の庭に可立事

人數さだまりて後着座も。上首よりすゝむこととなれば。木の本へより侍ることとも。庭に廣略二あり。凡木と木の間は二丈一尺二尺までに可植。但庭廣によりては此分可然也。又せきばならば。たゞ略義にて二丈より内一丈八九尺にも可植歟。そうじて木より外方も垣と木の間一丈ばかりなくてけ見ぐる(は欤)しかるべし。能々はからふべき也。軒の母屋の柱より木の間一丈三四尺なり。無子細。但それも向の庭ひろくば可相計也。

懸は先南向を本とす。但今は家に隨てさだまるべからず。懸うしとら方に櫻。ひつじさる楓。たつみに柳。いぬゐに松也。猶色々の植様有べし。可隨口傳なり。

道仕事

凡懸の中をばたゞの時もとをる事可斟酌。いはんや會之時覺悟すべき也。貴人の御前御後をもたやすくはとをるべからず。とをらで不叶時は。いかにもとをくのきて。垣のきは見物衆のそばへつめよりてとをるべし。鞠をつめよる時。かゝりの中半分過ば。木の外へいでゝ。我木のもとへ歸るべき也。かやうの進退は大分の法をだにも心みぬれば。時に隨て見よ

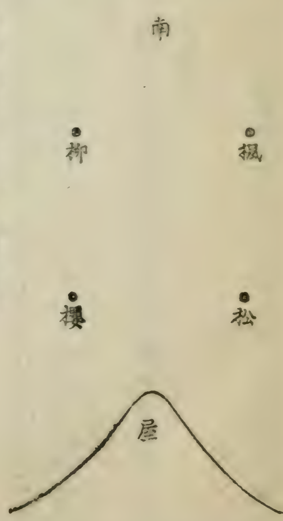
き様にふる舞事。此道に限べからざる也。

鞠長事

人の鞠長は。弓の精兵に兵のごとくに。すべてたしなむにもよらず。生得なることあり。但大かたまりたけは一丈四五尺の物なれば大がい心うべし。されぱとて鞠ごとに此丈數をならでけぬ事にはすべからず。時により所によりて甲乙有べし。其に隨べし。立所のことは。其身の心よせ便宜に隨てすゝみよるべし。但軒懸の方は主人上方なればさうなくよるべからず。それも便宜に隨てしだいすべきにあらず。又時の堪能又上首主人などもはからひたつる事あり。

自他分事

鞠庭にをきて自他分事肝要なり。八境面にみえたり。



懸の枝にとゞまる鞠落事

竿にておとすに。鞠をつきおとすべからず。枝のあはひへさほを入てかきおとすべし。いかにひきゝ枝なりとも。木をゆふる事あるべからず。手のをよぶ所ならば。たゞ手にてかきおとして。さてとりてあぐべし。縁の上にあがりたる鞠も同前たるべし。

三段事

鞠に序破急の三段あるべし。はじめは我木の下ふかくたちて。分にしたがひて。まり長のび

やかに。ことさら自他分よく見わけてけるべし。是は序分なり。破分にはいさゝか木の下を立いづる樣にて。鞠長ひかへて。時々曲をもまじへてけるべし。晩景に及て急分にならば。いかにも數をもはげみ。木にかけず。猶まりたけをもつめて。たがひに忠をつくし興をもよほすべし。しきりに自他分あざやかにこひ。とり〳〵こゑの色をそへて進退みだれぬ物から。にぎはしくけなすべき也。

扇事

鞠場にいでゝ。さうなく初心の人など。心にまかせて扇つかふ事有べからず。極暑などにつかはて難治の時は。左の手にて三四間ばかりひろげて。身に引そへてつかふべし。座にをきて立時は。左の方に疊圓座などの下にをきてたつ也。むかしはあふぎをさして立事あり。いまもはれの時はさす事あり。色々口傳ある事也。

文章博士成光申云。蹴鞠は軍陣より出來たる事なり。武士を練せさせむと也。心はやく身かろく足きゝて。しかも無病の術也。

歸足　延足　傍身鞠

歸あしは左にかけて右にかへり。又右にかけて左に歸る。いづれも大事の足なり。

延足はとをく行鞠に身をなげてのべかゝりて。猶又遠く人つかずばかさねて延る也。これをつくね延とはいふ也。

身にそふ鞠は。身にかたより。むねはらこしまでものどかにしづかにながくかけてけいだすなり。

此三いづれも肝要の足也。能々けならふべき也。

右一卷者所授案東次郎兵衛尉道俊也。努々

不可有聊爾者也。
永正五年重陽　　　　宋　世（華押）

續群書類從卷第五百三十七

總檢校保己一集
男源忠寶校

蹴鞠部二

晩學抄

嚴命云。最初にやがて庭鞠を蹴は。いかにも身によせ有。先無鞠とてよく〳〵姿を作ためつけて。空鞠を日ごとに何十度ともなくけさせて。其後鞠を細繩にて釣さげて。自板敷一寸計成べし。閑に一足づゝ蹴て。姿を能々たゝしうせよ。身體といふは顏。頸仕。目。口。手。胸。腹。腰。膝足等也。顏持はかるからず。うなづかず。あふのかず。ゆがまず。をもらかにうらゝかにて。くせ有べからず。頸仕はなへずゆがまず。すこしかまくび有に似たるべし。さればとてこはく目だゝしく有べからず。目はおもふさまにはたけ。きら〳〵ととゞやき見めぐらすべからず。用意して見よ。每人目のおそろしくみゆるくせの有也。第一にみにくし。見あげ見おろす目ばかりにて不仰俯。うらゝかにみるべし。左右をみるも長閑に心を持て。先其程を思ひはかりて後。目にて見さだむる也。顏持頸仕の善惡は。目の見やうに隨て。よくあしくなる也。よく〳〵其心をうべし。口くせ有べからず。手持は臂つよからずよはからず。次第ひぢかいなこぶしまで難なくみにくからず。内外出入ゆが

みねぢず。無高下平等になし。下たをやかに持べし。下に持もいやし。高もこと〳〵しく。又依人有善悪。一偏に不可好左様に。鷹を居て鞭を打様。いかにも右計後へふりていやし。大樹を抱様。又あまりゆがまずしてしなゝし。成平が様。左右之手几帳之手のごとしといへるもこと〳〵し。是は彼古賢をそしるにはあらず。上手達者は諸道に置て何としたるもよきを。無骨の者彼をまなべば。をのれが本の失よりもはるかにわろくみゆる也。西施が隣女のごとし。すべて人のまねをするが諸事に悪事也。大方何となきやうに持て。蹴時聊たはやかに持て。目だゝしからぬぞよき。手をふり又蹴ぬ時も持すくみ。或臂かゞまり。又そりうて仰俯し。拳をつよくにぎり。又手をひろげ指をさし出。手前にすゝみ後にゝげ。銅拍子などをつくやうにしかある皆以わろし。只肝要抄の文のごとし。以自身難量。借他眼知云々。是眞實肝要也。凡身體よく立おほひて立人は。いかにも手持は高き也。のけはりて立人は。手身にそひ。膀胱のもとに左右の手すはる也。身體は父祖にも似ず。何にもよらず。只我身のこなりに隨てよきやうに可持。身持立おほはり又腹腰膝足等ぞ定圖にて人によりてよける事なきなり。胸腹はえりたる様にて。内ほらに有べし。腰をすふるとは腹をまきいるゝ也。腰を居てこしをかゞめずとは是也。口傳なき人は腹をよきすふる事をしらで。腰を居とては尻を出し。或は腰をにがして膝をすゝむ。是第一の僻事なり。膝すゝみぬるはいかにもかゞまる也。腰より下は殊更すぐに立おほひて。腹をまきかゞむれば。腰はたをやかにてよき也。尤秘事は腹也。ゆめ〳〵かろ〳〵しく不可露顯。凡何事も其宜によりて其形有べし。懸は犬居に可

立と云々。然者其木に立人も。隨て立おほひて可立也。人の身は頭に過てをもきはなし。頭のき足すゝみぬれば。いかにおもへども次の足かなはず。はやき事なく。頭すゝみ足にげぬれば。次の足はやすくはやき也。老人も頭をすゝむる也。されば式にも大木の本よるといへども猶よられず。得其心腰をかがめてよれと云々。これも頭をすゝめむためなり。式にも唐丸のさかくひしたるがごとし。是又立かゝりたる姿也。膝をそらすは只はそらず。足の大ゆびをそらせば必すぐに成也。ひざ足のくびよはければ。鞠を見當といへども。足ふりめきてちがふ也。さればとて足の大指あまりそらしはぬれば。鞠つまさきにあたりてわろき也。鞠高もひきく又まりがつかるなり。足のくび延ぬれば。鞠の音はよきにゝたれども。うるはしきにはあらず。わろくまりものく也。よきはすこし指をそらして。沓と足くびと兩方半分に當るが。音もしだらかながら。やはらかに丸く聞ゆる也。又鞠色もよき也。能々蹴て氣味を知べし。膝足のくびよはきは。或は內へちがひて。鞠は足の外のかたに當りて右へのく也。或は外へちがひて。足の內かどにあたりて。まりは左へきるる也。足を持あぐる程は。鞠の目ほどをすぐる時。足をあぐる也。足高はみぐるし。失錯も出來也。鞠の失は所詮足のはやきより出來也。足のひきくて失はなし。但あまりひききは物氣なくぞみゆるを。ひえ足も時々出來にや。只足ごとに心を入力を入。つよくねばくはねて。やがておこたらず。足をかろめ腰をぬきて踏かふる也。走等は一度に用意する事なれ。とかくになればケ樣に前後出くる也。足踏は所々によりてふむ事なれども。大吉は同事也。右の足に付て左は必ふみかふる也。鞠をけ

たる足をば本所にはをかず。構にすゝめて置て。やがて左を猶すゝめまして。右足を置事きはめたる僻事也。努々有まじき事也。一寸一歩をもすゝめむと思ふべし。右ばかりをすゝむれば片合になる也。左を頓而すゝむべき也。是は眞實事也。上手はたゞこれにあり。書云。一寸といふともしり足踏べからずと云々。能々識可心得よ。左足すりこそめかすこと下手の所行也。左足うかばずしてしかり。上手は左足うかびて。いかなる時も拍子合て踏よき也。ふみわろき事あらば。いまだ左足しつかうかばずかなはぬ分を可知。足踏は第一の大事也。拍子合不合も上手は別の事也。下手は拍子合はかたはらいたく。不合ば亂かまびすし。只あざやかにうかびて。大くれにしかも拍子合て面白也。入たゝぬ人の儀に膝をつよくすくめぬればこはくて惡と云々。是きはめたる僻事也。先達のいはく。沓のきびすより踏て。はなにいたりいたり踏べしと云々。是膝のつよくてくつはかぬ故也。只人のあゆむは皆膝を折て歩也。鞠足は膝をすゝめて歩あいだ。沓にてあやつりて。きびすよりはなへ踏は此故也。態きびすよりはなへ踏とすづからず。只膝だにつよくたてゝくつろがさねば。自然にさふまるゝなり。膝をくつろげずして歩人は。俄に鞠膝にあたる時。くつろぐる隙なくて。えけぬ程におとす也。これはいつも膝をつよく持たれば。俄にあたる折も。本より用意したれば。ながれてよくけらるゝ也。たゞ鞠は膝のかゞまらで。すぐにつよきが。いかなる鞠もけられて。尤第一の秘術也。身にそふまり自在也。人は多少遠き鞠はけれども。身にそふまりかなはぬ也。膝だにすぐなれば。身にかゝるまり相違なし。當家には殊に身にそふ鞠をよくけるは。只膝によりて也。

如此心得身體をつよくしつけて踏習べし。釣下たる鞠最初に尤よし。後々もなへ枝にもたれよとむ鞠時足踏大事也。それをし習には。枝にてはさのみさやうには心にまかせねば練しがたし。鞠を釣てければ。あちこちふらめきてよどむを。彼枝に准じて拍子を合てふみならふ也。尤秘事也。

釣鞠にて身體足踏等能々しつけて。後すみの員鞠を蹴べし。或胸或腰之程膝之程なるに鞠をけるべし。角に向て一方に立ふさがりて。手をさしひろげ立おほひて。物にけかくれば。其鞠かへりて身にかゝるを。いそがずして足を踏かへて。足本までながしかけて。はね〳〵すれば。身にそふ鞠自在也。姿も立おほはれて習なり。立おほふ程は。柱に後を當てたちそひて。頭身踵等を柱に付て其程をしつくる也。これは全く立おほふ程にはあらず。只すしに立分なし。さて其よりはおほはんとおもふべし。さびすをふみつむべからず。たちうかぶべし。身にそふ鞠のはしりながれぬは。皆くせの有と知べし。鞠にて身をため直す也。矢細工のゝためといふものにて。のゝゆがみをば直すやうに。鞠にてたむる也。胸の程より腹腰もゝ膝はぎ足のくびまで。うつくしく身にそひながれ落る也。

腰かゞまりぬれば腰にはなれて。鞠のきて弓の張が本のやうにある也。膝かゞみぬれば膝につかれて。鞠にこよりながれすはしかりのく也。いづくにも鞠をつけんとおもふ所にては。鞠のすひつくなり。されば自在に見て人にこと也。歸足の時ことに大切事也。すこしも相違なく思ふ程にし習べし。鞠をすいつくる人は様々に有故實由をいへども。腹などこそ鞠あたる所をばたはめて下をさしふくらかしなどもすれ。殘所はいかでか如此事あらん。只心

にとゞめむとおもへば。切入ぬればとゞまるなり。常にしならふべし。かなはずとて物うくする事なかれ。すいつくを期とすべし。數は千にならばたりぬべし。但角の小鞠も只なをざりにすく〳〵とやはらかに蹴て。身につよくかゝらずば。縱何方をけるとも。身にそふ鞠は自在なるべからず。一二百にてもよく蹴て。何に當る鞠も我物に覺て。たゞの鞠よりは身にそふはやすく有べし。身にそふ鞠不叶のけはるくせあらば。膝の下のまり角にて好べし。次第に立おほはるゝ也。此事返々なをざりにすべからず。中の小鞠は我身を懸にて。身に蹴かけ〳〵してけるべし。さしのけてける人あれども。それはわろき也。風の吹日くらき夜などけるにわろし。身をばかゝふとしてこそ分際はおぼゆる物なれば。時々は懸をむすび。時々は遠く蹴ゆき。緣の上に蹴のぼり蹴くだり。或は障子やり戶など蹴てあけたて。家の中を蹴ゆき。みすすだれなどけて卷おろし。ごすご六盤の上。圓座上。或輿之中。車の下。門のくわ木などの上をけてとをり。馬場弓場を行かへり。如此事どもをして可持。又ひきく天井につよく蹴當〳〵して員鞠有。腰の切入事なり。大事也。能々しつくべし。是はひきく大枝の下の料。又はつよく身にそふ鞠の料也。又鞠は長の數鞠このむべし。木の外の鞠中の鞠自在に覺ゆ。後鳥羽院の御書にもそのやうのせられたり。かやうの類多し。いづれもをも練習して持べし。居ながら數鞠ける事有。延足若はゑんの下懸の邊に。橘柑子椿やうの枝しげくひきなる木など有所にて。件木にかゝりたる鞠の木づたい落るを。下へくゞりて膝つきながら蹴などする時大切事也。又先段にいふがごとく。何足も練習內鞠に過

たる事なしと。毎人に逢ていへども。しばしてそわれ。ことにくるしく倦ことなれば。これがげに第一の練習にて有けりとまで蹴知人大かたなし。たゞ萬の事はさりげなるとばかりにて。眞實の骨髓の氣味を人はさぐりしらず。無本意事なり。若は獨若はあまた立ても同事なり。ひきゝ天井あらくければ。早歸身にかゝり。身をうちけづり。おちつきてのくをば突延に蹴つきて。かへるをばくゝり歸に蹴。急に當てつよく落るをば。はやく枝の下に入。障子などにそひおつるが。上はそひて下ははなれ。上はのきて下はそひ。上下ともにはなれ。又上下ともにそひおつるは木のそふ鞠の大事に准ずる也。常に是を練習すれば。更に木の恐なし。身もくるしく力も入事なれば。しつくるに庭の鞠は無下にやすし。凡身たはやかに足ふみうきて。左足もたやすくなり。種々の曲等是にて蹴習はる。第一の稽古これに有。懸はさのみ心に任て。枝にあたり〳〵せむる事有がたし。されど常にも練習せられず。內鞠は思ふ樣に其足此曲蹴らるゝ事也。能々この氣味をけしるべし。未此氣味をしらぬ人は。させることなしと思へり。只身をかろく足をうかべて。虛空を步やうに心をかゝやく身は本所にて足計をさし出て蹴事返々わろき事也。身のけはられをもくもなる。かた〳〵惡き事也。

一　木練習

嚴命云。內鞠も所詮は懸の料たれば。木をよく蹴習にはしかず。初分は只かくいふ計にて不能委細。木一本に四五人も兩三人も立廻て。つねに習べき也。一本に八分有。其分も見定てけ習也。八分とは八人の儀也。又走所。流所。つく所。そふ所。もたるゝ所。よどむ所。はぬる所。さはる所。こす所。此等をよく〳〵蹴知。自在

にけべし。いかなる木をみても。こゝはかゝる所。かしこはいかなるべしと兼て存に。蹴折も無相違たがはぬ程に可存知。依所用意有。足のまうけ。足踏蹴所。はぬる所。のする所。つよくあらく蹴所。やはらかにける所等あり。能々蹴知べし。兼ては教がたし。只木數をけて。いかなる木も不審なき程に兼て存べし。所詮只木をよく我物にしてしたゝむるに有。いかにも餘人は木を恐也。上手は我木にかけて自在に振舞也。依木面々各々にかはる也。多蹴てみるにはしかず。ながるゝまり。若木若枝。或縁ながれ落を普通のやうにければわろし。足にのせおほせて後はよき也。突延はいかにもかねて存也。突て後初て延とおもへば。かはきて後井をほるがごとし。上に枝有てつよく蹴ば。さだめてつくべき歟の用意ありて。しかも不恐してつよくける足を。やがて延んとする足のまうけにして。體をつゝめ心を急速にして。みゝをむなしくしてよけば。あたる音に付て。雖不見足。只身をすてゝ延也。鞠のおもむきは枝の樣に隨て兼ておぼゆる也。只兼てあたらば延んとおもひて。兼て心にまうくる也。さればのびらるゝ也。延持は先拍子を合て踏ざまに。右足を力にして地を踏放て。左足あがきて身をなげてのぶる也。けてゆく鞠枝に當て。なげ返して頭の上をこゆるをば。力足をつよくふみて。其力足にはじかれてとびかへる也。力足よはくけぬればおそく歸る也。木にそふ鞠は。もしは枝もしは節などのありて。鞠さはらんづらんと思ふ所を念すぐしてあしをあげよとて。上ば一定火打出來也。能々用意有べし。すゞなる木の木末より本まで。けつりさまにそひて。つよく落る鞠が大事の物也。さはるべき所なくば。いかにはやくとも目をふさ

ぎ心を急にして。足を蹴かへてたゞつよくけよ。心中に猶用心有べし。恐るればたま〳〵あたる鞠なれども。そばへ蹴切す也。かやうの事は詞にも筆にもいはれぬ事也。大方の趣ばかりをこそ如斯いはるゝ事なれ。眞實の秘曲は心中に分明也。それまでいたらぬ足はちからなき事也。いはれぬ所を知ほどに成べし。急成大事は初心なるほどは似よく蹴出たりとも。何としてけつるとも不覺。達者は心中に分明なるのみにあらず。前後明に心にうかびてみるがごとし。只練習の功入なば。我とさとるなり。自覺も又有善惡。覺語〔悟歟〕と所作也。玉理と相應ずるを實覺とすべし。但心に相應すとおもへども。人にゆるさずば所理にそむき實覺とすべからず。所詮は姿不亂。足踏拍子合て。たをやかにみにくゝして。しかもつよくやはらかにゑむにみえて。足ごとに思入ておちさるが大事なり。一はよけれども一はわろく。かやうあらば猶不達と思ふべし。上は長閑にてはやくするがよき也。されば上手の鞠は淀河のごとしといへり。返々先達のいひたるをおほくもちて。常に案習すれば。をのづからさとり出し蹴出し。若は夢にも見うつゝにも了簡し出す也。心にかけねば功なし。蹴ては案じ案じては蹴べし。凡此事の我はかなはぬといふ事はなきなり。たとひ遲速拔群不拔群こそあれども。眞實心に入てつねに練習すれば。かならずし習也。不叶打置事なかれ。諸法は心の所行なれば。せられずといふことなし。垂枝にかゝれば。枝の下に入て。鞠をいたゞきて。拍子を合て踏かへてまつ也。すぐに落るとはねのくと二を用意すべし。枝かゝる時は。先前に落るを宗として。又後へ越事を心にかけて待也。一方ばかりを存れば。ちがふ時かなはぬ也。又雨

方をかけて疑ば。おもはぬに落時えならぬ也。宗とあるかたへつよくおもむきて。しかも左右後を存ずる也。心は四方を明に察し。情は宗と趣方へ存ずる也。このちがひ樣を能々存じて。一心に兩方をおもふべし。走枝は自梢卷て後などにこゆる鞠。又つよく走枝の木にてうたれて。はねこえむとする。迯あへこめがたく覺ば。むずと枝の本に立ふさがれば。まり身に當てよどむ時。足を蹴なをして靜に蹴也。身にそふまりかなはぬ人は此足を得ず。又わが立たる木にそひ落るなり。我は迯こめむと後へ迯時。鞠は内に落るを。人はよらぬをば木にそひてたはやかに木にそひなびきて。足ばかりを木にそへて。さしやりて一足けて。次の足に直て。人にゆづる事あり。品有たけやう也。かまへてなべて木にたはれしたがふべし。木にそひて足斗をやりてけばなさけなく。又平懷にも見えてかたくわろし。かやうの事はかまへて品あり靜にえむにしなすべし。木にそひてながるゝまりをば。木を踏てけるなり。左足をたてよせて。頭をすゝめて立ば。左方へもちがひ落るに蹴よきなり。足の左右をならべてのけはりたてば。左右へちがひ落る時蹴にくき也。たとへ一兩足こそけらるれ。それより多く小鞠にて蹴からかふ時は。只のけはりになりて。えすくひあげられず。凡一方にむかはゞ。餘の三方八分明に存べし。心と情との分也。先段にいふがごとし。又木の下に別としは流るゝ鞠をはね出さんとするにあがりやらぬを。こそ〳〵と三四足もけばことに見苦也。心ざしつめて一足はつよくたかくけんとおもひ。次足はこしらへてすくひあげむと。おもひかへてけんとおもひければ。其こゝろをのづから色にあらはれて。おなじ蹴長の鞠もこせ

めかず。所存ありと見えてかさ出くる也。足ごとに上手下足のけぢめみゆる事也。唯諸足は所詮の大惡はのけはりて。足はすゝみ出。頭はよらぬ也。頭すゝみぬれば。いかなる難所もやすく汝足けらるゝ也。是尤秘事也。かやうの難所等おほしとはいへども。さのみ書つくしがたし。是等の大旨をもちてぞ見に准知べし。

一　鞠長員鞠

嚴命云。是は秘事也。等閑の人には不可示。凡鞠は常すぐなるを可好也。上足下足各別に見。別大事の物也。萬人曲節をける時こそ人にはすぐれてみゆれ。只すぐなる鞠の時は勝劣更になし。それは此鞠をおもひいれぬ故也。上手は一足なれども人にたがひて。まり上下ねばく。靜に降昇してふりめく事なし。ふりめくは鞠のあたまをけるゆへ也。腰革をみ定てけべし。但鞠によりてかはるも有べし。足はもとより力を入たれば。つよくしかもねばくはねあぐれば。後まで名殘有心ちなるべし。然者其沓音も丸くしとやかにて。降昇數百色もぬれ〱として上下する也。膝足のくびつよくて。足にのせてあげよ。けやうは小鞠の所にて沙汰畢。所詮達者體一足の鞠に不拔群ば。更に長者のおもひをなす事なかれ。只上下身にそひて靜に落しあげよ。一段三足を中高に甲乙にけて。人請取きてゆづれ。ゆづるべき人をおもひ定てつねにゆづれ。其人或は上手或は可然人。或は又いたくあてつかぬ人に時々やるべし。是等口傳集にも見えたり。詮は練習也。

鞠高の數鞠を常に好べし。

後鳥羽院勅定にも侍し。立蔀の内にて二三百もける程にてこそ上手とはいふべけれと云々。尤有其謂哉。さほどならずとも四五十もすぐにちらさでけるほどにすべし。鞠高く數鞠は

殊に大事の物也。足踏思ふやうに蹴つくべし。晴に出とては必内鞠。此數鞠をかねても其日もけるべし。それが自在に覺て能蹴らるゝ也。又曰。勅定云。他人の鞠は名足の時人にことなれども。只よのつねの時は上足のかはりめなし。相公刑部兩人に平懷の一足他にことなりと仰有。是眞實の肝心鞠の精魂也。上鞠一足も人にかはりてかさあり氣味有のやうに蹴べし。上手の所行を見聞ては。わが及ざる事を歎べし。たゞ歎て何の益か有。蹴にはしかじ木四本の内にて。外へ出さずして三百程もけば。自在には覺ゆべし。古人も初ははしり廻て。一庭に損ずるまりをば我ものとおもひて。物さはがしくも可蹴云々。尤可然。但雨方を相兼て蹴べし。急なる時は如電光暴風。又閑成時は鴻王之歩獅子之眠をおもふべし。急に振舞とも閑なる事を不忘。靜なれども急成事をおもへ。更に一偏に練習することなかれ。又我不得方をばしばらく一偏にも可修也。雜亂して練習すれば。何足何曲こそ次第にあがれども。不覺一を宗として。余事をば忘れぬほどに。次第に梯登して稽古すべし。〔本ノマヽ〕大文云。ひとへに日てる時は木草枯。ひとへに雨ふれば木草くち損ずといへり。然者五日の風十旬の雨。天下泰平之基也。練習も如然よく〳〵おもふべし。

一　足踏

鞠の一大事の至極は足踏也。初心にもしは得口傳。若は上手を見て足踏はかくしけりとて。なまさかしくすれば。不具にて却てわろし。假令ば布に錦を立入たるがごとし。哥も又しかり。哥人之凡卑の詞の中に。先達の金句をとりたるに似たり。されぱとておもひすつべきにあらず。常に心にかけて案習しながら。かれをまねばずして。さむ〳〵に蹴ならふて。自然に

左足うかびて。踏あしき事なくなりて。次第に功入まゝに。心にかけし所はをのづから忽然とさとられしいださるゝ事也。小鞠こ高の數鞠内鞠にしつけて。緩急折にかなひ。遅速時にしたがひて踏べし。鞠高さし延。ゆるく落る時は。蹴たる足をすくめてをく。やがて左足を蹴かへて。鞠のおちかゝる時。拍子を合てふみてけるべし。拍子といふも拍子不合といふも。只ふむ事は同時也。然而鞠と足相應して拍子のごとし。同足踏も拍子をふむ事は別の事也。とするもかく踏も只三拍子也。然而序分破分急分等を踏かへて。目にたゝず又聞よく踏也。ことに拍子を踏てきこえさせてよきは。突延の足踏。梢に當てなげかへす時。拍子を踏合。又まりしみたる時。兩三足ひかへて我物にけなしてこひながしたる一段などに拍子をあざやかに聞させて踏たるなど殊面白き物也。かゝる拍子は下足はかなはぬ事也。大木の本に制ながるゝをはね出すに。鞠沓のはなにのせ。かねて二三足もこせくりける事あり。そのとき上手はことに足踏合てこせめかず。下足は同樣にこそ〳〵としてかしがまし。上手は同鞠長にひきけれど。一足はあしく一足はこしらへて甲乙をける。又枝につく鞠若足はいふに不及。拍子を合て延べし。老足などはえのびあはねども。上手は鞠のつく戸に拍子を合て踏たれば。延たるよりも面白くみゆる也。是は見知人なし。唯神と佛の境界也。足踏は所詮庭上にうかびてとゞこほる所なく。やす〳〵としてしかも念有之。下足はやすければ念なく。念あればたしなめりとみゆ。如此類甚多けれども。さのみ書のぶべからず。以一察万。態踏とみゆる口惜事也。浮といふは水とりの浪上を往反し。鰹虫の池面を進退するがごとし。凡詞

にのべがたく筆に書がたし。拾遺亞相之鞠庭にたゝれたるは。物を上よりつりさげて、地のうへ五六寸ばかりあがりたるやうに見えけると同じ。普通歩は膝を折てあゆむ。鞠の歩は膝をすぐにて。左右の足同時にする〳〵と進退するやうなり。彼蝘虫の水上に逍遥したるをみて可意得。所詮鞠は前後左右進退往還徘徊。或所により或は折により。無盡にかはれども。簡要足踏一なり。いづれの鞠も蹴よきやうに踏也。又三拍子を小躍といふも。先にいふがごとく拍子を合てふむ也。口傳集に三拍手と書。又三拍子の小躍と別の遍に有も。三拍子は惣相の大綱也。小躍ぞ最上手の踏曲也。一庭に兩三度に過て人めに立ほどに不可踏。只隨時依折。如斯事は可用捨。よく〳〵練習して持べし。奏枝にもたれてよどむに。拍子を合ておどり踏てける。殊に面白き事也。

一　延足

嚴命云。延足あく足つよく地にかきて踏放て。左右の足虚空にとびあがりて。身をなげて延也。足だに土につきぬれば。遠く延られず。延足はたゞつき延が第一大事物也。兼而存じて突をとを待て。身をすてゝ延べし。突をとす。偏身の筋急速につゝまる。たとへば血取馬の針引するがごとし。口傳集にも是をのせたれどもくはしからず。尤秘事なるゆへ也。これ功入ぬれば自然にせらる。至我心に思はるにはあらず。心にさき立思にすゝみて突音をきけば。足が我にもあらずのぶるほどに練習すべし。是は師も教がたく我も習がたく。心にふかく約束し。功入に隨て足たましゐ出來て。心をまたず思にしたがはず。鞠について足自然に振舞也。これほどにいたらざらむ人は突延叶がたし。高枕して臥たるよりもやすしといふ

は。かく足りぬしをまたずふるまふゆへ也。針引は自然の所爲也。しつけぬれば見證の時も人の枝に蹴あぐる時は居ながらせらる。まして立合たるにはいふに及べからず。

一　歸足

歸足に混亂して人おもふまがふは。むきあふ足向直る足也。是等をよく可ㇾ分別。先向合といふは籠鞠の事也。頭上を越て外に鞠出を走遮て。內へ向合ざまに蹴之。向直足は大底歸足におなじき也。所詮歸足は鞠長烏帽子たけ以下也。鞠若は扇をこし。若はすぐに落せば。おとしたてゝくゞりとをりて。鞠或肩又背或は腰にかゝりて。身をよこさまに一たびうつりて。さまに拍子を合て踏て。身にながしかけて。腰鞠は身をまとひ。身はまりをかゞみて。むかふをよりてねばくはね出す也。えかなはぬ人〳〵の少々を見とりて歸に。身に能かゝれども。足踏なくてはねかへり。蹴さまにしりゐにたふれ。或は足踏よくふみたれども。まりのきて身ひとつめぐる。如此事相應尤難有。歸足に大事は左歸くゝり歸等なり。ひそかに歸は對縮の木の下也。常には一足けて次足歸を一足蹴ばもし鞠のきて木の外へいで。又軒の下へ入事其恐あれば。不蹴しておとしかけて。其下を身をかゞめてくゝりをとる也。是不蹴して歸る計はなちに物をするやうにて大事なる也。連歸は木の外の鞠に有もちて。入鞠枝にあたりてなげ返して肩をこすを。歸合は庭をそむくを。やがて次の足にかへりむきているゝ也。是二足の連歸也。三足の連歸も有。是大事の足也。

一　傍身鞠

身にそふ鞠は。先達云。腰の功也云々。是によりて無門傳輩みな腰をやはらかにするとおぼし

くて。腰を持あつかふ也。大底腰かゞまる。所詮腹の功也。膝をそらずに足の指をそらすがごとし。はらをため。やはらかにしなひ合すれば。腰のすふる也。肝心抄に。胸をよせてむねをいださず。腰をすへてこしをかゞめずといふも。所詮はらをまぐる也。胸を寄ば腰そり尻出。腰を居れば膝かゞまり身のけはる。是自然の理也。さればすぐに立て。腹計をたはめくり入れば。胸出ずして腰膝かゞまらずして居也。かくてこそ胸よりながるるまり腹腰につたひ。もゝ膝足のくびまで。水の樋に流るゝごとく思合所有。能々これを心得てながし習べし。當世態胸を持合て。腰をかたそらしにひねりてはね。或はのけはりて胸腹までながして。腰より下ははなれ。或は足ばかりをながく指出して。腰より下流れて。足のくびにのる時。力を入てねばくはねよ。如此はねつる鞠はゆる〳〵とあがりて。たかくはあがらず。それを見しりて人よりてたすく。若たすくる人なくて落ば。無念なれどもはねつる足をやがて力を入てすゝめ踏て。身かろくぬきあげ。足を早踏よれば。をのづから蹴らるゝ也。なをざりにおもふべからず。これ等大事の足也。凡身のいづくにても。しばしまりをよどませむとおもふ所にては。よどまする程に練習すべし。これは故實なし。只功也。身にそふまりこゝろにまかせぬれば。歸足はやすき也。亞相之譜にも一段にかゝれたるは此義也。抑身に傍鞠とまり合は人思亂物也。能々分別すべし。肝心抄に又分明也。

右一巻努々不可有聊爾之儀者也。

飛鳥井雅康御筆押
後號二楽軒宗世

（花　押）

九里伊賀守殿

蹴鞠百首和歌

心持之大體

身をちかく足をばひきく上るとも先あたらぬは下手のうちなり

たちゐゝふかたちといひてさのみまたかゞむもわろしのけそるもうし

ゑりよりも出いるさまにけなしつゝ苦しさもなき鞠の上手さ

分足の數は三ッなりしぬて（いてけ）にはかへる鞠（一居）まで四ッ五ッなり

外よりもうけとる鞠とけはなして渡すまりをぞ他足とはいふ

我方にこぬまりとても立足はかへすぐ\もむやくなりけり

軒のまりよし落るとも身にかけてながさば流せ軒の永きに

我まりはうばゝるゝとも人のまへたゞかりそめも斟酌をせよ

かなふべき鞠にあらずば中くにけぬべきとするふりもよしなし

ふきつたふながれはあまた難波江の鹽風よりもたゞ飛鳥かぜ

庭作大體

庭のうちは七間まなか四方なりかゝりの内は二じやう三尺

桐生の松はいぬいの物なれば楓のかたはひつじさるなり

青柳は辰巳の角の物なればさくらの花は丑寅ぞかし

我宿のおものはしらの程よりも植木のあひはは八しやくぞかし

鞠かきは二丈なりけり横ぬきのあいだくは四寸五分なり

まり垣の柱は深く立るなりあいだ〲は間中
なるべし

玉つばきかきほの垣や梅檜の木ゆるしあらで
はいかゞ植べき

二もとも三本も松は我家のゆるしのなくば誰
か植べき

たつ人のゑぼしにさわる枝ならば花も紅葉も
をらん青柳

みな松の四本かゝりは位ある人のたてたる庭
とこそきけ

鞠名所之大體

ましこきはましこ額やましこかたふくらまな
こに上下ぞある

とり皮やこし皮のめやこしかわやもしりかた
あるぬいめとぞいふ

天照す月日もよしや此鞠の人と我身のまへさ
きぞ有

とり皮は一寸貳分のものなれどさききるさま
は四季にかわれり

あいかはにさゝら波たつ水まきは只世の常の
まりのぬい皮

こめむ皮またにしき皮むらさきは以上のまり
のけしやう皮なり

こいふすべ長者皮とて我家の外にはたれかま
りにつけなん

上鞠之大概

谷(若)輩の役に定る上まりを斟酌するは知ぬゆへ
かは

上鞠はふたり(三ツ敷)のわきと位有人(くみあけて敷)といふにはさら
にけざりき

あげまりの高さの程はいかならん一身半ぞお
よそなりける

ふたつとも三ツともならば上鞠はあひみて禮
にとりてけなをせ

木にさわり袂にかゝり身をこすもまづ上まりにけぬとこそ聞

我足の上よりおつる上まりを人のあけなば一禮をなせ

我手より渡して上るあげ鞠のわきへひそかばちぢよくならずや

聟入やよめいりなどの上まりは軒と向はゞさらにけぬもの

上方の役にあらざる上まりをとりてめされば禮義あるべし

枝の鞠わりこのまりの上まりは〔缺字〕

詰の大體

正分のつめといひしは面つめすみと〳〵の人をいふなり

すみならでむかひて立る人をこそ次分のつめといふべかりけれ

上方の詰は是非なしあひかゝり木こしもよしや斟酌をせよ

正分のあいてならぬぞ中つめは返す〳〵もびろうなりけり

わきの人つめてゆくとも右左ふたりは跡に殘るべきなり

正分に詰てもひまの明ならば〔缺字〕

詰のまりよしさわ數のおほく共身をはなれずばいかでけぬべき

わきつめや自分他分の鞠とてもかつてへ落ば乞てけぬべし

つめ過しかゝりをぬくる折にしも人と植木のあひはとをらず

い堺のさかいをこしてつめたらばかゝりの外を立歸るべし

三十三曲之大體　烏跳沓加返卅五曲

のべかゑり又のべしくも延あしもぬしなきまりの曲にぞ有ける

すり鞠や身にそふまりやながし鞠三ッの曲に
はかず有もよし

おひまりや思ひ返しといふ足は主さだまれる
曲とこそきけ

おほくなき足と聞なり貫足はたゞ一くれにひ
とつなりけり

ひんすりやうつぼ流しは曲足の中にもまりの
大事なりけり

軒のきは御蘆のまへを折しくは馬路の足とこ
れをこそいへ

おひまりを受ながしつゝ折敷てけるをぞ三ッ
の曲あしといふ

順逆にまはりあひつゝける鞠を左右のかへり
の足といふなり

順逆にその儘おいてけるをこそ左右のおくび
の鞠といふなり

浪分の曲とは高くけあげつゝはづむをおひて
けるをいふなり

たかくあげ雲いるまりに目を付てけしむるを
こそ上手とは見れ

軒よりも落くるまりを立まわりかゝりにむか
ひける他眼曲

けあげつゝ一ッやふたつまはりつゝ拍子をふ
みてけるも曲なり

身のたけにけ上てめぐりけるを社枕かへりと
いふべかりけれ

おり歸り又かけかへりわけ歸りはなちかへり
といふも曲あし

かのこおり木の根まくらの折歸りいづれも鞠
の曲と聞也

猿はしりうけおひのまり追返し鬼神かへしと
いふも曲そく

ひさ渡し衝門ながらや瀧落しいやしく見ゆる
うつぼつげ哉

自まりをばけもせで曲にするを社まり拜言といふべかりけれ
むば玉のからすおとりといふ足はたゞ曲足のほかと知るべし
調伏の鞠にけぬべき沓かへし聞にもつらし見るもうるさし
曲足のかずはあまたに有明のつきなき時はけけるも由なし
自鞠さへすなをにならで曲たれはかへすぐも無用成けり

禮法大體

軒のした用ありとても横さまにまりけぬをりもとほらざりけり
軒の方あがり成けり何事もかゝりによりてさがりもぞする
圓座をば中より一二三四五と左右に分ておく物ぞかし
沓はくもあしを包も傍に立よりてせよ庭の禮なり
沓の緒は七まとひして結びつゝうちつむふしの上にはさめり
鼻紙にあふぎをそへて砂の上なをる圓座の右にはさめり
わきざしも刀も抜て立時はなをる圓座の脇にをくなり
幾度もやすむといゝてのくおりも刀をさすは俗の法なり
茶を呑と酒をのむとも圓座をば少しくだりてつゝしみをなせ
鞠のうちよし茶はのむと庭の方手をおゝひつゝ呑物ぞかし
一丈も九尺もよしやまり掉の長さの程は二間なりけり
鞠掉の傍にさゝればかりそめも左を先へ持も

のぞかし
留りたるまりさへ落ば其儘にかゝりの方の手をつきてのせ
きつさしの竹は一丈二尺なり枝をば半に葉をしごくべし
節のうへ一寸五分のこしつゝたゞ一もじにきるものぞかし
きつさしの竹の下ふし地ぎわより一寸五分上におくなり
きつたてのさい下枝はすみちがへかゝりのうちにむく物ぞかし
鴨沓もくずのはかまもゆるさずば誰かはきまし誰かはかまし
つゝ皮の五めむむらさき錦皮ゆるしのなくばいかにはくべき
懸緒にもかみのひもにも紫はゆるしなくては更にせざりき
おもたかもともゑの丸も我家の紋としりてはたれかつけまし
誤りて鞠をふみなば左あしのうへにをきつゝ馬路してのけ
まり扇子いつゝばかりもひらきつゝ身に引添てつかふべきなり
ありといふ聲より外にいふ事は鞠のかゝりにせぬとこそ聞け
ありやともありやおつともやくわん共ならひなくてはいかゞ言べき
庭の中たかくあげつゝ手に受てつまりはやとて退散をせよ
數上るならひはやすし御數十御數廿と高くいふべし
忌中なるまりにはくべき白なめしたゞよのつねはみるもうるさし
見物も參る禮衆も鞠の庭立居につけてならひ

ある哉
足つゝむならひばかりはいわね共難波の事か
君に殘さむ

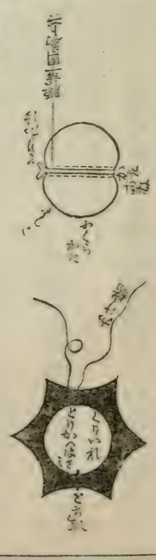
蹴鞠百首和歌之終。

右仁和寺御室御所樣御所望從被成候。蹴鞠之大體を百首之哥につらね。永正三丙寅の歳彌生之中の五日に令御書上覽に備ふ。且は上意もだしがたきにより。且は一流の者後代の當論をやめつる爲に詠之侍りぬ。當家之門子遺葉之輩は。尤此道の至寶として。明鏡に守るべき者也。深く是を秘すべし。穴賢〳〵。

飛鳥井二樂在判

天正十九閏正月下旬之比。和州宇多之郡井足殿に御坐候を申請候て書之寫畢。

越前之國吉田之郡田谷寺之住僧童誉



表紙云。

蹴鞠百首和歌。秘書也。

表紙袖云。

立よるも心にかけてかりそめも人の身につく鞠はけざりき
水の上にうきたる鳥をみても猶わが足ぶみのみちをしぞおもふ
角ならで向ひにたてる人をこそ次分の縮といふべかりけり
みな松の四本かゝりは位有人のたてたる庭とこそきけ

續群書類從卷第五百三十八

總檢校保己一集
男　源　忠　寶　校

蹴鞠部三

蹴鞠百五十箇條

鞠の次第

目　錄

十九　帷子をきるべき事
二十　葛袴きるべき事
廿一　沓はきてけるときの事
廿二　あせぬぐふ樣之事
廿三　鞠を庭に置やうの事
廿四　まりを庭に置てかへる樣之事
廿五　鞠をつくる木の事
廿六　木の朶に鞠付る樣之事
廿七　木の枝に付たる鞠持て出るやうの事
廿八　木の枝に付たる鞠その日蹴べきを見しる事
廿九　朶に付たるまりに短冊を付る事
三十　太刀にまりを付る樣之事
卅一　枯木に鞠つくる事
卅二　上鞠する樣之事
卅三　ふさほしの上鞠の事
卅四　上まり仕そんじたる時の事
卅五　あげまり仕かけまじき人の事
卅六　上鞠する時日つかひの事
卅七　貴人あげまり遊したる時の事
卅八　他家と參會の時鞠ける事
卅九　親などゝ鞠蹴る時之事
四十　兩分のつめといふ事
四十一　詰ひらきの事
四十二　ひらきの事
四十三　鞠ける樣之事
四十四　身なりの事
四十五　立おほふ姿と云事
四十六　かほもちの事
四十七　目つかひの事
四十八　手持之事
四十九　足つかひの事
五　十　あし出し樣の事
五十一　左足之事

五十二　左足にて鞠蹴まじき事
五十三　鞠けるとき一だん三足の覺期と云事
五十四　序破急三段之事
五十五　鞠あらくけまじき事
五十六　初心の時はあらくけならへべき事
五十七　うきあしといふ事
五十八　まり色の事
五十九　つまさきの事
六　十　こひ聲の事
六十一　ありやとこふまりの事
六十二　まりに手をつくまじき事
六十三　まりける時心づかひの事
六十四　烏帽子着てまりけるときの事
六十五　懸の外へ出て落たるまりの事
六十六　まりかきの外へ出たる時け入るゝやうの事
六十七　枝にとゞまりたる時まり掉にて落すやうの事
六十八　まり朶にたまりたる時の事
六十九　枝にまりあたりたる時の事
七　十　貴人の御足よりまり落たるときの事
七十一　貴人の遠きまり遊しそんじたる時の事
七十二　貴人の遊しそんじたるまりけるやうの事
七十三　貴人御身にあたりたるまりの事
七十四　貴人御見物のときまりけるやうの事
七十五　會の時人數めしたてらるゝ時の事
七十六　貴人のけまり見物するやうの事
七十七　花の下にてまりけるやうの事
七十八　風ふく時けやうの事
七十九　緣よりころびおつるまりけやうの事
八　十　ゑんのうへゝあがりたるまりの事
八十一　木にむかひてまり數けざる事

百十四　むちたるまりけあげよといふ事
百十五　まりをば一足二足といふ事
百十六　よきまりを逸物と云事
百十七　夕べのまり今宵のまりといわぬ事
百十八　まりを人にいだすやうの事
百十九　まりを受取様之事
百二十　まりみやうの事
百廿一　まりのかた穴をぬふ數の事
百廿二　取皮付るやうの事
百廿三　鞠のなどころの事
百廿四　まりたけの事
百廿五　高きまり頭上に落る時けやうの事
百廿六　枝まりのけやうの事
百廿七　まり數取事
百廿八　懸のうへやうの事
百廿九　かゝりにうゆる木の事
百三十　懸の木ずへをきるまじき事付枝すかす事
百卅一　かゝりの木枝のなの事
百卅二　あみの仕やうの事
百卅三　あみはしらの立やうの事
百卅四　切たての事
百卅五　まり竿のこしらへやうの事
百卅六　庭はく事
百卅七　庭に水打事
百卅八　まりの場に立てものいふまじき事
百卅九　膝にてまりとむる事
百四十　肩をまはすまりの事
百四十一　曲足の時も懸にそむくまじき事
百四十二　まりをけはづしたる時の事
百四十三　のべたるまり膝の上へ落たる時之事
百四十四　ひざつきてけはづしたる時之事
百四十五　かたに付はづしたる時の事

百四十六　まりをみうしなひたるときの事
百四十七　葛袴鴨沓之事
百四十八　庭の地こしらへやうの事
百四十九　兩分の圖
百　五　十　八隙の圖

一足つゝむ事。引合を四つにおりて。大ゆびよこにまくなり。先をうへゝ折返して。水ときしたる紙よりにて二卷まくべし。扨ゆびの外にてまむすびにする也。用心のためふたむすび三むすびもむすぶべし。又別のゆびもいたむ所あらば。つゝみてくるしからず。もし又足つゝみたる紙やれたらん時は。懸の外へ出て。いくたびもつゝみなをすべし。主上の御あししたむるやうは。いさゝか口傳多き事なり。

二座につく時の事。左の手に扇を持て。柳ニ向ひてつくばひ。座上の方を手をつきて。貴人のかたへあふぎをむけぬやうになをるべし。左の足をうへにおくなり。扨貴人御立あらば座の上をおるべし。貴人の御立ところさだまらば。本の座になをるべし。他流には座につく時右の足をうへに置といふ。當流にはしらざる事なり。

三懸へ入時は。左の足あしより入なり。軒のかたより先へ足をふみ入ぬものなり。

四木の本に立事。貴人より御立ありて。次第次第に立べし。しきたいなきものなり。座につく時。上首よりすゝむなれば。懸の本へより侍事もそれにしたがふべし。立所の事は。其身の心より便宜にしたがひてすゝむべし。松木のかたは貴人主人のかたなれば。さうなくよるべからず。それも貴人の命をうけ待らば。辭退すべきにあらず。凡立所におき

て上下はなし。貴人の立所を上とすべし。中比の事やらん。或家門邊の説に。人數の立所とて一二三と次第して。八人の立所をさだめおかれ侍るとぞ。とかくはまり足の方によりてはからふべし。未練の人のそば。或は老者などのかたはらには。はやきあし。さほうの人を立べきなり。

五懸に尊異する事。木の方の手をつくなり。但貴人あひ懸に御立あらば。貴人のかたへ手をつくべし。

六座にて刀おく事。右の手にてはながみをとり出し。左の手にて刀をぬき。ひとつに持て。はながみを下に成やうにして。刀のさきを我座より下の座のかたへなし。柄をわが身のかたへなして置べし。刀のむねをわがかたへなるやうに置べし。

七懸にて扇つかふやうの事。初參の人などは心にまかせて扇つかふべからず。一段の貴人などは御つかひあり。其次の人は二三間ひらきて。むねのあたりをそろ〳〵とつかふべし。初參の人も極ねつなどにつかはでなんぎの時は。左の手にて二三間ばかりひろげ。身に行そへつかふべきなり。

八扇を座に置て立事は。ちかき世よりおこれり。昔はかならず扇をさして立侍る也。今もさゝん事申におよばず。さしやうは。あふぎを左の手に持て座に付て。扨まりはじまる時座をうごきて。左の手にて刀さす處のはかまのおびをくつろげて。あふぎをさすなり。是を刀さしといふ也。又座をうごきて。ゑもんをひきくつろげて。左の手より右の手へ。すわうの袖の下より取わたして。やがて左の手にてはかまの帶をくつろげて。右の手にてさゝず。鞠さすやうにさすべし。こ

れをやなぐひさしといなり。あふぎのねこまを身と帶とのかたへなるやうにさすべし。又しやくさしといふは。うしろのはかまの帶にすぐにさすなり。是は公家かたにのみ御さしある事なり。武家がたにはにやはぬとなり。又扇をさすとて懸の下へたちてさす事もあり。それは木の本一行間にさし合たるがよし。是は同輩の儀なり。貴人などの御かゝりにては。木の下に立かくるゝやうにして指べし。左のひざをつきて指て。木の下に立べし。刀さし。やなぐひさし。しやくさし。いづれも同事なり。

九扇を持て木の下へ行時。すわうの袖の下にかくるゝやうにもつべし。

十扇を木の本にて指たらば。木のもとにてぬきてかへるべし。座にてさしたらば。座にかへりてぬくべし。

十一まりの人數多く入かへてける時。座にかへりてやすむ時。重てけんとおりつゝ[illegible]。あふぎばかりもちて。刀をもはな紙をも本のまゝ置べし。かさねてけまじきならば。刀をもさすべし。左様なりとも貴人今一足と御所望あらば又けべし。

十二貴人とまりける時。座につきやうの事。貴人はや御付ありて後は。次第〳〵に付也。若我より上に付べき人なくて。みな下でなりとも。何れにても座を一ッのきて付べし。是は若われより上たる人あらばとの氣遣なり。但しよく見合て付べし。

十三貴人とまりける時。座にて刀おく事。貴人左のかたに御座あらば。右のかたに刀おくべし。刀は少うしろよりにおくべし。あふぎより下になるやうにおきたるよし。あふぎと刀と別々におく時は。なかみはあふぎに

そへておくなり。

十四貴人とまりける時。斟酌すべき立所の事。貴人の御あひ手にまいる事。正分のつめのこと也。貴人とあひかゝりに立事。又木こしに立事。是三ツを斟酌すべし。其外はくるしからず。御あひかゝりよりも椛木こしはしんしやくすべし。貴人の御身にちかきいわれ也。こゝろへべし。

十五貴人とまりける時尊畏の事。木こしとあひかゝり。同程なる貴人御立あらば。あひかゝりのかたへ手をつくべし。

十六軒はとをらぬものなり。但貴人よのかたに御立ありて。軒かたあきたらばとほるべし。その謂は貴人の御うしろをとほる事はゞかりある故也。よく〱見合て軒をとをるべし。軒をとをりたくもなきときは。時宜を見合。縁のうへをとほる事もあり。くるしからず。

十七凡かゝりの中をたゞの時もとほる事斟酌すべし。況や會の時貴人の御前御後。幷しかるべき人の前後をも。たやすく通るべからず。貴人の御まへとほらで叶ざる時は。いかにも遠くのきて。垣のきわ見物の人のそばなどへつめより。貴人の御かたを除てとほるべし。主上の御前後は申におよばず。家禮の人之前後にてそんこしてとほるべし。

十八軒もわが家にては賞翫すべからず。おかしき事なり。人の家にては賞翫するともあり。貴人の御にわなどにては。軒を賞翫仕るべし。其外はさのみせうぐわんすべからず。よく〱心得べし。

十九まりける時は冬も帷子をきるべし。雪霜の中にもけるものなり。小袖または袷などきるとも。はだにはあせとりとて帷子をき

るなり。

廿葛はかまきる事。すわうをきずば葛袴をきるべからず。

廿一沓をはきてける時も。すあしのときの如く。あしをつゝみてよし。沓をあまりにひきする事わろし。足ぶみしてあゆみたるよし。

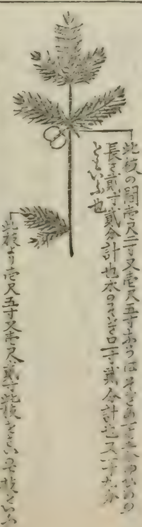
廿二あせぬぐひをばおちぬやうに懐に入て持べし。あせかきてぬぐひたき時は。かゝりの木よりはるかにのきて。かしこまりてうつむき。手のうちにみえぬやうに。ちいさくしてぬぐふべし。

廿三まりを庭におく事。取皮を人さしゆびと大ゆびとふたつにてとり。のこり三ッのゆびにて。まりのましこひたひをかゝへて。左の手をそへて。我目のとをりにさしあげて持て。軒のむかひに置べし。

廿四まりを懸におきては。左へまはりて歸るべし。たゞし貴人右に座時は。右へまはりて歸るべし。これは貴人へあとをむけまじきためなり。

廿五鞠を木の枝に付る事。櫻。柳。楓。松。いづれも付べし。さりながら松が本なり。よの木は枝のあふ様になき間。まつをもとゝするなり。

廿六木の朶に付るやう。まりの取皮のくみめより。水こきしたるかみよりを引とをして。さひの下枝のかたをそぎてつけるなり。



軒

木　木

木　木

此木のもとにてまりをときて此木にまり付たる木をよせかけてまりをかゝりの内へ持ていで眞中に置てかへるなりやがて取人ありて本の座にかへるなり

廿七木の朶に付たるまり持ていづる事。ひだりの手にてまりを付たる木のゑだのうらをかゝへて。右の手にて木のもとをとらへたるがよし。

廿八鞠を木の枝に付て。いづくにもおけ。その日けべきまりをみる様。まりをゆひつけたる紙よりのさきを一もんじにきりたらば。其日けまじきまりと思ふべし。又まりに付たるかみよりを。一方のかたながく切たらば。其日けんまりとこゝろ得べし。そのまりとく様あり。のきの正めんにはおかぬものなり。

廿九枝につけたるまりに短冊を付る事。例式の短冊にてはなし。うすやうをたんざくより少しせばく切てこしらへ。先をひねりてむすび付るなり。鞠付たる枝に付るなり。亦短冊のごとく。先にあなをあけて。かみよりにて付る事もあり。いづれもうすやうはたゝみたるかさねの紙なり。たゞなるかみにてすべからず。紙よりもはくかみなり。

卅太刀にまりを付る事。太刀のおびとりをむすびて。其あひへまりのこし皮を入。まわしてむすびて。花は何花にてもあれ。さしそへべし。人に出す時も。かやうにこしらへべし。

卅一かれ木にまりを付る事謂あり。たゞの時は付べからず。

卅二上まりするやうの事。下れる人。初參の人まりを懸におく時のごとくに持て。懸の本を立出。むねのほどにさし出し。少まへゝかたぶけてそとけべし。木などにあたらぬやうにするものなり。上まりの事。例式のふさほうのまりとて本にあたらず。本上まりとて一段の子細ある事也。口傳あり。

卅三ふさほうの上まりは。懸におきたる人やがてまりを取。二足三足歸りまたあゆみ出て。あひてにかけべし。

卅四上まりしそんじたらば。まりをとり上げ。座にかへりて仕なをすべし。はしりけりなどしてはけぬものなり。

卅五上鞠を仕かけまじき人の事。あひかゝりに立たる人に。又木こしの人。此二人にせぬものなり。又貴人にせぬものなり。もしけかけまじき人にけかけたらば。ひざをつきてせきめんすべし。

卅六上まりするとき。あまりに目などを見合て。それといわぬばかりにはせぬものなり。其時は目など見合てけるときに。あげまりのよそへちる事あれば見にくきものなり。たゞ何となくしたるがよし。

卅七貴人もし上まりをあそばされ候とも。さのみしんしやくなくけべし。くるしからず。

卅八他家と參會などのときまりあらば。御屋形樣などの賞翫の人には同座する人もあり。おふかたは同座すべからず。よく〳〵心得べし。

卅九貴人なくて親などゝまりける事あらば。親にも同座すべし。くるしからず。

四十正分の詰といふ事。すみと〳〵あひ向ひたる人を。正分のつめといふ。角なくてむかひに立人を次分のつめといふ。正分のつめは親子のごとし。次のあいては兄弟ほどの事なり。正分のあひてにまりを七足けかけば。次のあひてには三足ばかりけかけべし。

四十一詰つめひらきの事。つめてはまりをけてもまたけずともすみやかにひらくべし。まりをふかくつめてけるとき。こつめうしろへつめかけて。ひらかぬ事あらば。木のそ

とをひらくものなり。木と人との間はとをらぬものなり。人と人との間をとをるべし。それもしげくはをらぬ事なり。

四十二ひらきの事。木をまはりて詰たらば。まはりて歸るべし。すぐにつめたらばすぐにかへるべし。大よそまりをつめよるとき。かへりの中半分にすぎ侍らば。木の外へいでゝめぐるべし。木の外へいづるとき。人と木の間を破るべからず。つゝしむべし。但その木のともに立たる人のいまだ立なをして。幸にあきたらんときは。木の本へひしとよりてとをるべし。又まり落て道ふさがらん時は。庭中をかへらんに子細もなき事なり。まり落たる時も。木のもとをめぐりてかへる事。いかめしくみにくき事あり。所詮は大かたの法をだにも心得ぬれば。ときにしたがひて見よきようにふるまうべし。

四十三まりのけやうの事。其しなおゝしといへども。大ようあしのこうに一ぱいにあたるやうにけべし。つまさきにあたればとぶものなり。むねをほすべからず。折入るやうにすべし。子細ある事なり。ひざをそらして。きびすより足をふみ。よくまりを見おろしてけべし。まりによわ〳〵とあたるときは。わざとひざをかゞむることあり。

四十四身なりの事。先くせなきをよきとす。いさゝか立おゝひて。かしらすゝみ足うしろへ成やうは立習べし。けはじめにひろきところ庭などにてけあげんと。おひありきてけならふべからず。のけばりて足たかくひざかゞまりくせ出來也。すみにてけならふべし。こしより上はたをやかにて。こしより下はすぐにつよくあるべし。まりの左右へきるゝ事。足のよはくて。あしくびの内外へ

ふるゆへなり。さて身のかどにてまりをけるやうにけるはわろし。けはなちて身もちのろくになるやうにけつくべし。

四十五立おほふ姿のこと。先段にもいへるがごとく。立おほふひて立べし。懸を裁にも。いぬいにたてよといへるなり。したがひて人の立たる姿もすこしおほひかゝりたるやうにあるべし。さればとてうつぶきこしかゞみて立べきにあらず。凡人の身はかうべにすぎておもき所なし。かうべのき足すゝぬみれば。いかにも思へども。次のあしかなはず。かうべすゝみあしにげぬれば。次の足はやきなり。走人もかしらをすゝめてならではしられず。心得べし。

四十六かほもちの事。あをのかずうつぶかずかたぶかずして。まろくにあるべし。かうべもたげうちうなづきなどして。かろ／＼しかるべからず。目おそろしくみなすべからず。目のみやゝにて。くせなきかほもくせのあるやうにみなさるゝ事あり。

四十七目づかひの事。あがるまりをも目ばかりにて見あげ。落るまりをも目ばかりにてみ下すべし。かほにてみあげみおろす事あしくみゆるなり。たかきまりの色のかはるときなどは。かほをすこしかたぶけてみるべし。一心二眼とて。心持第一の事なり。次てはまなこをかんようとす。されども心と眼とふたつなるべからず。心とまなことは二にしてひとつなるものなり。よく／＼たんれんすべし。

四十八手もちの事。何となくたへ／＼としたるがよし。こわくすくまず。手さきひろげず。こぶしにぎりかためず。たをやかにしてみにくからず。ひきからずもつべし。鞠の足

にあたるとき。すこし持あぐるやうにあるべし。凡身體よく立おほひて立人は。手持はたかく見ゆるなり。のけばりて立人は。手身にそひてものけなくみゆるなり。いかなるくせまりをけるときも。手持はゆる〳〵としてはたらかぬがよし。五尺のかつらに水をながすやうにあるべし。こぶしはもちてもたざれといふこゝろへべし。

四十九足づかひの事。いかにもひきくて失なかるべし。まりの失は只あしの高きよりおこれり。まりをけたるあしをば。もとの所にはをかず。やがてすゝめて置て。左をもなをすゝめまして立べし。右ばかりすゝめぬれば。まりにかたあひになりてあしゝ。足くびにはちからを入るべし。つまさきはひらかぬよし。

五十あしの出し様の事。つちふまずをすりて。すくひあぐるやうにあるべし。まりの右へきるゝとてはあし。さきを内の方へいだし。左へ切とては外のかたへ出すと。きはめてひがごとなり。いかにも〳〵まろゝに出すべし。まりの左へきるゝは。あしのそとがはのうくゆへなり。右へきるゝは内のうく故也。先へゆくはきびすのあがるゆへなり。うしろへゆくは。つまさきのうくゆへなり。左足はひざがしらよりいだすべし。口傳有。

五十一左足の事。よくふみちがへ〳〵して立たるがよし。ふみかへずしておけば。たち足とて高足がけられぬものなり。人のけるときも。わがこゝろの内にてふむがよし。あまりにこと〳〵しきはわろし。なをつまさきにちからを入べし。

五十二左のあしにてかりそめにもける事なかれ。精大明神のしんりよにもそむくと也。わ

すれてもけべからず。又ひだりにてまりをはねて右へうつせば。曲の内なり。かなはぬまりを左りにてすくひ。右にてけはなす。第一のめい足なり。一暮に一足とぞ。

五十三まりをけるとき。三足つゞける覺期をもつべし。謂は一だん三足とて。受取鞠壹足。手分のまり一足。人のかたへわたすまり一足なればなり。けられずともそのこゝろ得もつべし。足づかひにもこゝろ持あるべし。受取まりはやはらかにしのぶべし。手分のまりはするどにつよくあるべし。わたすまりは足をひかへてよはらすべし。

五十四まりをけるに序破急とて三ッの心づかひあるべし。まりはじまるときは。木のもとを立出ず。分にしたがひ。まりをたかくゆふ〳〵とけべし。こゝろにはゆだんあるべからず。これを序分といふなり。なかばにはちいさきまりと大なるまりとまぜて。三足ばかりつづけべし。これ破分のときなり。晩氣におよび。くれもおしきときは。木の本をたちいでゝ。まりのたけをひきくけて。數を持てあしぶみをしげくして。木にまりのあたらぬやうにけべし。これ急分なり。序破急三だんの心づかひといふ此事なり。

五十五　まりをあらく物にけつくる事仕まじきとなり。むやくのあしなり。たゞしあらくけかけて。そのまりのかへるところをおもしろくければしかるべし。中〳〵あらくけてのちあしくければ比興なり。そのこゝろ得あるべし。またまりに氣をつけんとて。あらくけつくるとあるべし。

五十六　初心のおりはしりちりてあらくけならふべし。しづかにやはらかにけんとすれば。しづみすぎて。あしはたらかぬものな

り。けそめしとき。ふつそうにけんは又わろし。時節によるべし。

五十七　うきあしといふ事。水鳥のあしぶみのごとくするとなり。いさゝか子細あるとなり。口傳をまつべし。大かた地にすはりつかぬやうにこゝろ得べし。

五十八　まりいろの事。いかにもけんそにつよくけて。まりはゆふ〳〵とあるやうにける事なり。

五十九　つまさきはそらさへぬものなり。又かゞむ事もすべからず。ちからを入てけるべし。沓はきたるときとはだしと少しこゝろ得あるべし。

六十　まりのこい聲の事。ありやおう。かやうにこふなり。おうとこふ事は。初心のときはしんしやくすべし。口傳に在り。

六十一　ありやとこふまりのと。木のえだなどにあたりて。興ありておつるまりの事なり。

六十二　まりは何ときれてゆくとも。手にていろふべからず。おゝよそ手をまりにあつる事あしき事なり。もしまたびんぎよくおしなをしなんどし候はんは。しなによりてくるしからず。又あまりの手にかゝり候を。つけじとするもわろし。をのれ也とまりにしたがふべし。

六十三　まりけるとき心づかひの事。かゝりにてけるに。外へ切て出るまりを。懸の内へけ入るゝやうにこゝろづかひあれば。まり落てころび入てもくるしからず。内より外へまり出たらば。段よきところにあたりても。きづかひおかしき事なるべし。

六十四　まりを人のゑぼしなどにけあてぬやうにたしなむべし。又われも人にあてられ

ぬやうにきづかひすべし。ゑぼしはのきすぎぬやうに。ふかくきなすべし。

六十五　かゝりの外へ出ておちたるまりの事。懸の内へ持て參。上まり仕りたるもよし。又まりをかゝりの外へなげ入たるもよし。禮などはなきものなり。もし又垣ごしになげ入る事もあり。これはまりをはやくけさせんとの儀なり。

六十六　まりかきの外へ出るとき。座に人あらばけ入るべし。そのときありとこふ事あるべからず。座に付とき。左の足をうへにをく謂は。まりの外へいでたるときは。內へけ入るゝためなり。

六十七　枝にまりのとゞまるを落す事。棹にてまりのたまりたる枝をわけて。まりに棹のあたらぬやうにおとすべし。つよき枝などにまりとまりて。枝のわけられぬときは。枝のあわひへ棹を入てかきおとすべし。つきおとすべからず。たとへひきゝ枝なりとも。木をゆふりて落す事不可有。手のおよぶところは手にてかきおとして。更にとりてあぐるなり。棹にておとしてはかしこまらず。禮などもなきもの也。

六十七　枝にたまりたるまりを。下にてまはる事。中〳〵おかしき事なり。

六十九　枝にあたりたるまりをば。かならずこふ事なり。但し木しげりてうちおほひ。枝ごとにまりしげく當て。落るまりをば度々にこふはわろし。

七十　貴人の御あしよりおちたるまりをばこふもの也。そのいわれはおちたれどもおちぬとゆふこゝろづかひなり。

七十一　貴人遠まりをのべあしなどにてあそばされ候時。そのまりおち。又かゝりの外へ

出る事あらば。たとひけにくきまりとも。ありとこふてのべてみるべし。こゝろづかひなり。

七十二　貴人とをき御まり又能御足をもあそばされ候とも。そのまりよくあがる事なくば。はしりよりてつきてける事あり。貴人とわれとの間ちかき事あらば。ひざをつきたるよし。立ながらはわろし。

七十三　貴人の御身にあたりたるまりける事あるべからず。但し御身にあたり候とも。御足あがりてあそばしそんじたらばけべし。御足あがらずばけまじきなり。又同はいの人の身にあたりたりとも。そうじてけまじきなり。

七十四　貴人御見物もあれ。又座にもあれ。その御前ちかくゆくまりをばとをすべし。但し御座の間とをくばけべし。貴人の御座はたゝみ本也。また圓座もくるしからず。

七十五　まりの時御人數をめさるゝに。次第〳〵にまいるべし。碁などおしきとき。さのみしきたひしておそくまいる事わろし。第一くわんたいの事なり。

七十六　貴人の御まりをみる事。ゑんの上よりみる事。所によりてくるしからぬ事なり。大かたは下にてみるなり。貴人の御まり。こゑをあげてほめぬ事なり。たゞかんじ入たる體にてみるべし。貴人のめい足をあそばしたらんときは。そのまりの内の宗匠たらん人。まりをとりていかにもかんじ申すべし。さあらば殘の人數も。そとしきたいあるべきなり。

七十七　花の下にてまりをけるとき。むげに花をちらすべからず。きよく足ならば華をいとふべからず。はなの枝又は花のふさな

どおちたるをこしにはさみてける事あり。これもおもしろきとなれどもむ用の事なり。

七十八　風吹候ときは。まりだけひきゝて。たしかに人のもとへにわたすべし。沓さきまで見あはせて。ひざにちからを入てけべし。上手をば風したにおくとなり。

七十九　椽よりころびおつるまりけまじきといふ事。さしてなけれども。貴人御見物あるとき。みすなどにあたりて。椽よりころびおつるをける事。あまりにぶこつなるにより。けまじきといふなり。たゞの時はくるしからず。

八十　椽の上にあがりたるまり。まづ手にてかきおとしてのちに。取てあぐべし。

八十一　木に向ひてまりかずをけぬやうにすべし。これはわが立たる木の事也。懸のうちよりむかう事なり。

八十二　まりのすみへゆきたらんとき。すみやかにいだすべし。人數をうしろにしてける事。一足はゆるすべし。二足とはすべからず。かなはざらん時ははねべし。

八十三　とをくおつるまりは。かしらをさきだてゝとくよるべし。まりも身もちかくなる也。行懸て身にそふる事は一段わるき事なり。

八十四　袖こしとていむまりの事くるしからず。但し下品たるべし。

八十五　軒にあがりたるまりをける事。落るほどをはからひ軒へ立入て。かゝりにむきてけべし。のきにむきてけべからず。

八十六　軒にたちたるとき。高きまりの家のやねへあがりみへぬ時は。むかひの人のかほをみるべし。まりのあるかたへ日が行も

の也。それを心がけてけべし。
八十七　いむまりの事。あひおひ又は大なる木などのまたを。あひての人すぐに木のうしろへけ入るゝを。ひらきながら。あひてのかたへすぐにけ入を申也。心得あるべし。
八十八　雨の後露はらふ事。さほにておとすべし。又御會には露はらひとて。御まりあるべき前には。人してまづける事有り。
八十九　まりの身にあたりたる時は。こしを折てしなひあふべし。若竹にすずめのとまるやうにあるべし。これをながしといふ。左りの手を身にそへてながし。又右のかたをながし。又左りへながすを左右左といふ。
九十　身にそふまりといふも。むねよりあしの甲へそろりと落るまりをけあぐる事也。
九十一　うつぼながしといふ事。身を直にいかにもけんそにおつるまりをいふ。
九十二　のべあしとは。遠まりをけて。左のあしを折しき。すべるやうに行事なり。いかにも身をつよくもちて。こしをつきいだすべし。身をなぐるやうにすべからず。身のくゞまりたるはよし。むなそりたるはわろし。
九十三　のべあしを仕ならふ事。つねにたふれならふべし。まりはあしにあらずとも。かへりみずしてのべならふべし。足ぶみひやうしだによければ。なりやすきものなり。
九十四　のべて落るまりを。たちあがらでそのまゝのぶる事を。つらねのべといふなり。
九十五　のべて遠ざかるまりを。たちあがりてのぶるを。かさねのべといふ。
九十六　つきのべといふ事。木の枝又は何にても。ものにあたりてきぶく遠くゆくまりを。のべてけるあしの事也。
九十七　のべかへりといふあしは。のべて行

足にまりのあたりて。そのまゝかたへかゝりて。かへり足になるとなり。

九十八　歸りのべのあしの事。かへりあしをけて。其まゝ遠く行まりをのぶる事也。

九十九　かへりあしの事。左よりかたにかけてまはるをば左がへりと云。右よりかたにかけてまはるを右がえりといふ也。惣じてつねの人はけぬあし也。しんしやくすべし。

百　軒がへりといふあしの事。軒よりおつる鞠を。のきの下へくゞり入て。身にもかけよ。亦身にかけずとも。懸のうちへけ入をいふなり。

百一　のべあしはのべたほるゝがあながち本意にあらず。もろあしをそろへてのべ。左足をしかずにけるを半のべと云。左のあしをしきてのぶる時は。左の沓さきの内のかたのするゝやうにけべし。沓あとのすぐなるをよしとす。

百二　かへりあしはいかほどもひきく。かたほどにけあげて。かへりあひてけべし。高きまり足ぶみをして。きびすをたてゝまはりてける事。むきなをりと云。

百三　かさねつめといふ事。ごづめの人の事也。

百四　きぶくおつるまりをきりこゑとて。きぶくこふものなり。

百五　我分足をすぐにあげて。又も我分足なれども。けまし體をして見をくり。まりおつればつとよりてけるを。みをくりのあしと云。ひきよくなり。

百六　ついじのきわ又ゑんの下なんどをはしりころぶまりをいぬばしりと云。いかにも沓さきにてそとはねべし。

百七　沓かへしといふあしはなき事也。但し

他流にいふか。
百八　懸の木しげりて。枝などもかさなり。まりのみへぬ様に落る事あり。それを葉がゝりのまりといふ。またいてのまり共いふ。
百九　いごくのまりといふ事。夏山のかゝりば青ばがちにて。鹿の出るをみわけにくきものなれば。木のはのゆるぐかたをみるなり。それにより茂りたる葉の内より出るまりをいごくのまりといふ。
百十　はがゝりのまり。いごくのまりと同前に。木のはのゆるぐかたをいよ／＼こゝろにかけてけべし。
百十一　からすおどりといふあしの事。さしてもなきあしなれども。まりによりて足をふみちがへて。おどりよりてける事あり。そのあしをいふなり。
百十二　おひまり。びんずり。ひうちおりまりなどゝいふ事。ゆめ／＼といふべからず。ひまりと云事。他流に申よしなり。
百十三　雲入りのあしとて。大きなるまりたけをける事暮にあり。たゞしむやくのあしなればけまじきなり。暮に一足のものなり。とに初心の人はしんしやくすべし。
百十四　おちたるまりをけあげよと云也。ほるといふ事。又すくふといふ事あるべからず。
百十五　まりをば一丈貳丈又一ッ二ッといふ也。一足二足といふ事わろし。まりを一足二足といふは。けるときのまりをいふなり。
百十六　まりのよきをば逸物といふなり。生物ならねども。まりにかぎりていふ事也。いさゝか子細ある事なり。
百十七　人ごとに夕べのまり今宵のまりなど云事申まじきとなり。いわれぬとなり。昨日

のまり。昨夕のまり。今夕の御まり。今日の御まりなどゝいふべし。

百十八　まりを人にいだすやの事。取皮を上へなして。こし皮を左右へなるやうにして。兩方の手にのせて出すべし。

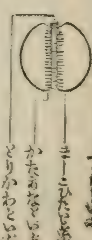
百十九　まりをうけとるやうの事。右の手にて取皮をとり。ひだりの手をまりの下にあてゝうけとるべし。

百廿　まり見やうの事。右の手にて取皮をとりて。左の手をそへて。こし皮をみまして。左の手のひらにのせて。ふくらをたゝきてみるものなり。

百廿一　まりのかた穴をぬふ事。七。九。十一。十三。十五。二十一。

百廿二　まりの取かわのつけやうの事。こし皮のかへり二ッ三ッめに付るなり。

百廿三　まりの名所の事。



百廿四　まりたけの事。大概一丈六尺のもの也。さればとてまりごとに此丈數ならではけぬ事にあらず。時によりて甲乙あるべし。木の下簷の下などにては、いかにもつめてひきくけべし。その外は長ののびたるよし。長のひきゝはかさもなくて。いやしくみゆるものなり。

百廿五　たかきまりの頭上にある時は。むきなをりてけべし。まりのほどをみはからふて。ものさはがしからぬやうにめぐみあふべし。あまりのどかにまはれば。おそくてまりおつる也。右へむくにはきびすをたてゝまはるべし。ひだりにむくには。きびすたてられぬものなり。

百廿六　かずまりのけやうは。つねより足をたかくあげて。數を本にけべし。

百廿七　まりの數とる事。五十までは口の內にてかぞへて。五十めにはじめてかぞふと云なり。かずの字をひきて。こゑをあぐるなり。御數とはいふべからず。其後は六十。七十。八十。九十。百。百十とあげべし。とをとはいわぬもの也。

百廿八　懸のうへやうの事。松はいぬゐ。楓はひつじさる。柳はたつみ。櫻はうしとらなり。たゞし軒のかたをば北にとる也。木のうへやう。すこし內へふすやうにすべし。其謂は木の本に立人も。其なりにそふて。立おほふやうにあらんためなり。これは普通のうへ木なり。まづ四本は四季ともに用ゆ。位ある人の庭なり。

百廿九　かゝりの木の事大かた定れり。こと木などうへまじき事なり。人により梅椿などうゆる事あり。梅四本は上位の庭なり。𣏐の木紅葉おもしろきとてうゆる事あり。つねにはうへべからず。又さくらをかゝりの木の余に。なみ木などにうゆる事有。くるしからず。

百卅　木をばそのまゝをくものなり。末をきるべからず。あまりにながきは切ともあり。木のえだをすかす事。大事のものなり。すかさぬ枝あるによりての事也。れうじにすべからず。

百卅一　かゝりの木の枝の事。さいの下枝はいづかたへも向ふべきなり。但うしろのさいの下枝成をばいむなり。枝の末のあがりさがりはくるしからず。身木よりさし出たるを本とす。さいの下の枝といふは。下より第一の枝の事なり。又身木よりなりとも。

又枝よりなりとも。さかさまに地へさし出たる枝をばいむなり。此えだの名はさか枝といふなり。但柳はくるしからず。九枝十二枝とて謂有り。口傳おゝし。よのつねの人のさかひの枝といふは。うしとらのかたの木の枝のひつじさるのかたへさし出たるを申なり。

百卅二　あみのめの事。四寸五分也。又四寸ともいふ。目はむすびたるよし。ひきよせてゆひたるはわろし。まりがきのあみの高さ。土より一丈六尺。のたけのぬきとをしのひろさ四寸也。

百卅三　あみぐしとはいふべからず。柱といふべし。立るほどらひ壹間計おきて立るものなり。

百卅四　切たての事。竹を末をきるもの也。

百卅五　まりざほのこしらへ様の事。尺八竹ほどなる竹を長さ壹丈五尺にきりて。上下にふしを置て。ふしより三分ばかりおきて切て。竹をあふなり。ふしに數はさだまらぬものなり。おきどころは座のうしろにおくべし。

百卅六　庭のはゞきめの事。色々さほう有りといへども。定まらぬものなり。其にわのなりにより。いかやうにもはくべし。くるしからず。

百卅七　水をうつ事。春夏は水うちてはき。又けしやう水を打なり。秋冬はけしやう水をうたず。

百卅八　まりの場に出ては。こひごゑの外。うむの事いわぬものなり。

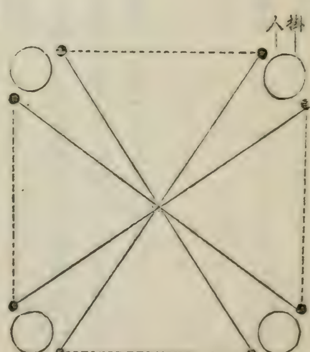
百卅九　まりをひざにてとむる事あり。其時ひざをもちあげてあつべからず。こしをすへてうくべし。されど下品の事なり。かなは

ぬときはけべし。つねにはすべからず。
百四十　肩をまはすまりの事。すこしそりめにして。しなよくすべし。あまりすぐに立て。まりばかりをまはしたるはみにくきもの也。
百卌一　曲足のときも。かゝりにそむかぬやうにすべし。歸りあし。むきなをりなども。かゝりのかたへむき候はんと心がけべし。
百卌二　まりをけはづしたるときは。しなによりたをるべし。たをるればのがるゝ也。
百卌三　遠まりをのべたるとき。わきへゆかて。ひざの上に落るときは。左のひざにてまりをそとはねこぼし。さて右にてけあぐべし。
百卌四　ひざつきてけはづしたるまり。わきへゆかぬときは。まりの上よりあしをこして。きびすにてけあぐべし。他流にては飛うちがへしのすくひといふ秘曲のうちなり。
百卌五　かたにつけはづすまりのそばへ落るとき。きびすにてけあげて扱けべし。そばあしといふ曲のうちなり。
百卌六　烏帽子のともうしろなど。思の外にかゝりて。見うしなひたるまりける事。いかにもこゝろをしづめてまつ〔べ歟〕たし。ものさはがしくゆきあふべからず。
百卌七　くづばかまはくずぬのにてつくれるものなり。鴨沓は水鳥のはし〔ら歟〕にたればるとし侍り。かたぎぬのつゆ。沓のつゝ皮などは。ふすべ皮は用ゐぬものなり。その外は色〳〵そのしなおゝし。まり足の上下にしたがひてさだむべき事なり。
百卌八　庭の地こしらふ樣の事。五尺ばかりほりて。庭一尺ほどは土尾にてつき。水のぬくるやうにすべし。扨かゝりをうへ。なかほ

どにかめをうつぶせて。三ッばかりふすべし。沓をとひゞきて興あらんためなり。その上はこまかき砂にやま土を三ッがひとつほどまぜてつくべし。まはりにいかにも〳〵まろくにして。中は少高めにすべし。中ひきければ水たまりてあしく。其上〔な歟〕中はすなゝがれてひきくなりやすきものあり。そのこゝろ得有べし。

百卅九　人の分のまりをあやまりてける事未練の義なり。これをばい足といふ。おほよそ自他分のさかへをしらざるゆへなり。圖をもちてよく〳〵わきまふべし。もし我分を人にとられんとせば。かさねごひとて。我分のよし聲をかさねてこひもどすべし。なをももちひずば。ちからなくうばわれてのくべし。あひかまへて他の分をとる事不可有。

兩分之圖

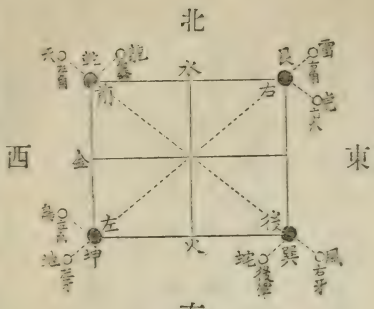


黑は正分也
朱は次分也
〔朱今用……〕

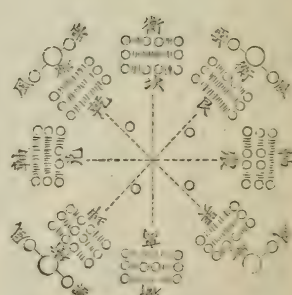
百五十　夫まりと云事。もろこし黃ていといひしみかどの蚩尤といふ逆臣をたくろくといふ所にて退治し給ひし後。武をならはしめんがため造れり。まりのかたちはしゆうがかうべにかたどれりと也。しかるゆへに魔障をはらい逆賊をしりぞけ。四海をたいらげ一天を治る器とし侍るとぞ。さればまりの庭に八人立ならぶ事も八陣の圖におこ

れり。八陣の圖といふは。むかし孔明といゝしかしこき人のつくれる軍法なり。此八陣の圖はすなはち黄帝の臣下風后といゝし人。握機の法といふをつくれしにもとづきてはじめしと也。八陣の圖をみて。つめひらきをよく／＼しるべきこと也。これ第一のかんようなり。

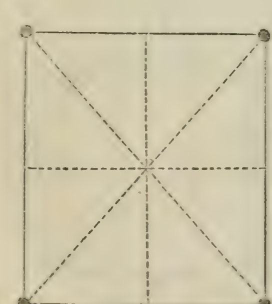
八陣之圖

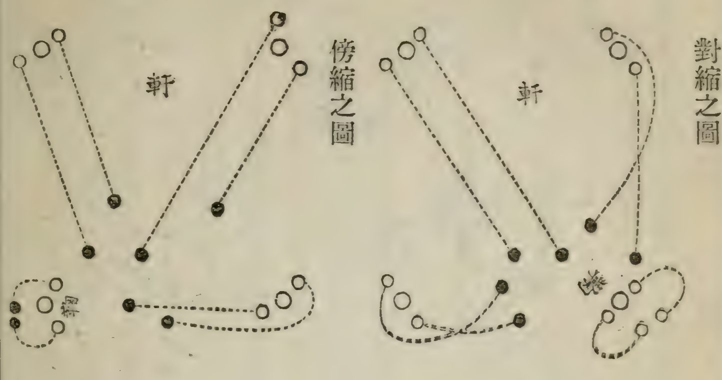


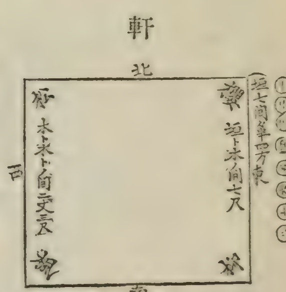
握機之圖



八境之圖







鞠道三十首之和歌

身をちかく足をばひきく上る共まづあたらぬは下手の内なり

立おほふ姿といひてさのみ又かゞむもわろしのけそるはうし

正分の縮といひしは向ひつめ角と／＼の人をいふなり

角ならで向ひにたてる人をこそ次分の縮といふべかりけれ

相生の松は戌亥の物なれば楓の本はひつじ申なり
青柳はたつみにたてる物なれば櫻の花はうし寅ぞかし
みな松の四本懸は位有人のたてたる庭とこそきけ
おひまりや思ひかへしといふまりは主定れる曲とこそきけ
分足の數は三ッなりしゐてけば反哥足とて四ッ五ッなり
軒まりはよし落る共身にかけてながさばながせ軒の禮なり
軒の方まりけぬ時も横さまに用有とてもとほらざりけり
軒の下あがりなりけり何方も懸によりてさがりもぞする
多くなきた足なりけりぬき足はたゞ一言に一つなりけり
木にかゝり袂にさわり身を越もまづあげまりはけぬとこそきけ
有と云聲より外にいふ事はまりの庭にはせぬとこそきけ
立よるも心にかけばかりそめも人の身につくまりはけざりき
一丈も九尺もよしやまりさほの長さの程は二間なりけり
足つゝむ習ひ計はいわねどもなにはの事か君に殘さん
水の上にうきたる鳥をみても猶わが足ぶみの道をしぞ思ふ
吹つたふ流れは二つなには江の鹽風よりもたゞ飛鳥か風
鴨沓も葛の袴もゆるさずば誰かはきましたれかはかまし

庭の中は七間まなか四方なり懸の中は貳丈三尺の大事なりけり

立人のゐぼしにさはる枝ならば花も紅葉も折ん青柳

縮過し懸をわくる折ふしも人とうへ木の間をとをらず

幾度もやすむといひてのく時は刀をさすは俗の法なり

はながみに扇をそへて砂の上なをる圓座の脇にはさめり

上鞠は二ッの脇とくみいあり人といふには更にせざりき

むば玉のからすをどりといふまりは只曲足の外としるべし

脇指も刀もぬきてたつ時はなをる圓座の脇にをく也

びんずりやうつぼながしは曲足の中にもまり

這三十首飛鳥井家（法名三榮中納言雅康。）述作也。以前大納言（雅章卿。）本書寫校合矣。同作之和歌百首也。其内五十首或卅首書分之本有之。仍三通也。今二通追而可寫者也。

寛文六季林鐘九日　　正三位藤實豐

五十首は寛永十一年比飛鳥井雅章卿自筆之本令懇望所持ス。然而先年燒失。仍又寫之者也。

右一冊以正親町中納言（公通卿。）本。仰家僕令模寫。予加校合畢。

天和二年十月三日　虎賁中郎將藤（花押）

續群書類從卷第五百三十九

總檢校保己一集
男　源　忠　寶　校

蹴鞠部四

蹴鞠之目錄九拾九ヶ條

第一

一懸の上下の事
一八境之圖事
一兩分圖の事
一對縮圖

第二

一きほひ鞠ひらき詰の事
一横詰の事
一棹を庭に置事
一足を包事
一沓をはく事
一扇を持事
一圓座を敷事
一着座する事
一庭に鞠を置事
一扇帖紙置事
一懸に立事
一上鞠之事并請取事
一棹にて鞠落事

第三

一鞠長の事

一鞠棹の事
一分足と云事
一鞠を云事
一暮の事
庭の事
一主人に沓を着せ奉事
一足を包事
沓をはく事
一沓を人に出し參する事
一襪の事
一沓の事
一鞠蹴時賓禮の事
一懸に立替る事
一懸へ立人數配の事
一鞠を落し候時禮義事
一縁に上りて落ル鞠事
一簾に當鞠事
一軒より落る鞠の事
一貴人へ上鞠すべからざる事

一上鞠請取時曲蹴ス事
一鞠をほす事
一鞠を庭に置に四季事

第四

一鞠を人に見する時渡事
一枝に鞠を付る事
一ふすべ鞠の事
一枝の鞠渡請取披露する事
一枝の鞠を軒に置事
一枝の鞠庭にて解事
一軒の向木の間にて枝の鞠とく事
一曲足名の事

第五

一懸を拵事
一四本懸を植る方角の事幷圖
一木を植始納の事
一木の間廣狹事

一軒と木の間の事
一鞠垣の高サの事
一網の目大小の事
一抜とをしの廣サの事
一軒に網を張事
一竹切立の事
一庭に水を打事
一一本懸の事
一二本懸の事
一三本懸の事
一六本懸の事
一龜の甲の六本懸の事
一八本懸の事
一十二本懸の事
一序破急三段蹴所の事
一四本懸本尊の事
一鞠の本尊の事

一懸木の枝名の事
一枝をすかす事
一庭を掃事
一雨降しめり取事
第六
一鞠かまへの事
一かたびやうしの事
一三拍子の事
一待拍子の事
一千鳥足の事
一はり引足の事
一腰と膝との間鞠の事
一抜あしの事
一鞠の目つきの事
一鞠を落し立事
一鞠蹴所の事
一鞠をひつ付蹴事

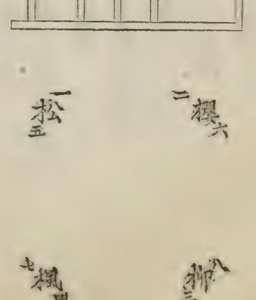
一〔耳家説〕足の事
一腰をすへてすへざる事
一手持の事
一あふひの日に向事
一水鳥の浮事
一左足の拍子事
一鞠の三聲の事
一序破急三段の事（同鞠數の事）
一鞠を取事
一鞠蹴納る事
一鞠數とる事

第七

一鞠之起事（天竺大唐日本）
一懸始る事
一根本鞠足次第事
一鞠の精與成道問答の事

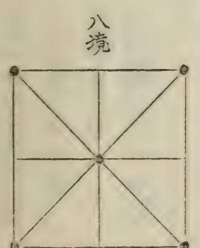
第一　蹴鞠口傳之抄

一懸の上下の事



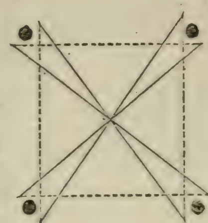
但貴人によりて一の向詰二になる事も有。口傳有之。

一八境圖の事



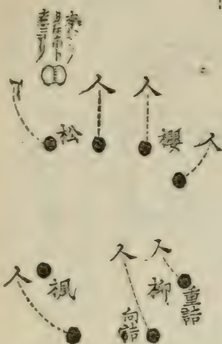
我人の境の鞠はけかたへ任すべし。他分たらば袖を引てしりぞけ。自分たらば聲を出てすゝめ。きほひの鞠とで。身をはなれずば。四方へもけて行也。猶口傳有之。

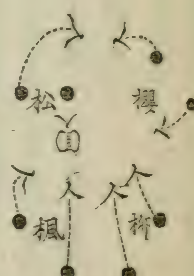
一 兩分圖の事



〇以墨爲向詰　〇以朱爲横詰〔今用……〕

一 對縮圖





右令相傳候之處。不可有他言外見者也。賀茂流秘傳奥書。各別之卷在之。

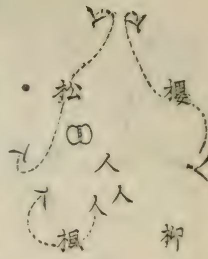
右本書校合仕候。少茂相違無御座候。以上。

寛永八年　　松下掃部助

九月廿九日　　致久　判

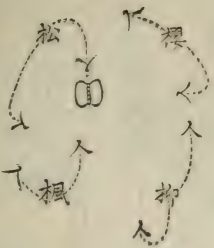
第二 蹴鞠秘傳之抄

一 きほひの鞠ひらき詰事



かやうに身はなれずば。いづかたへもけて行時。一所に數をけはこび取べし。あゆむ間はいかほどもひらくべき也。猶口傳有之。

一横詰の事



かやうに各足をけ出候時。向つめ堪能にあらざる人と相かゝりにたゝむ時。向詰をさし置て。よこつめして鞠をこひ取てける也。然共まりも不堪にて。此詰事有まじき也。其人數の内にて上手自然とつむる事あるべし。但上手といふとも。細々はつむる事なかれ。なを口傳有之。

一棹を庭に置事
堺中門の方へよせ。上座へ末をなしておくべし。なを口傳有之。

一足をつゝむ事。
杉原を一枚よこに折て。それを三分一ほどたつに折て。大指を三まきしておりかへし。かみよりを二[三イ]まとひして。小指の方へよせむすびて切べし。是に眞行草あり。結目に猶口傳有之。

一沓をはく事
右之足よりはきて。左のあしよりぬぐべし。

緒のとめやうに口傳有之。とめ樣第二巻ニあり。

一扇をもつ事

左の手にふか〳〵と持べし。口傳有。

一圓座を敷事



如此軒の左右に貴人の座をしく。平の座は貴人の座より一間半二間ほど置。それより次は圓座一ほど間を置敷べし。又軒の向の上座には。貴人より少さがりたる一廉ある仁體を置樣に敷也。圓座のとめばをうしろへなして敷べし。口傳。

一着座する事

庭へ出時。衣裳を刷て。塀中門の外にて貴人をうかゞひ。貴人着座あらば。塀中門をいらんと思ふ時。各へ目禮なして塀中門を入。貴人の方へ手をつき禮をして。我つくべき所へ行。圓座をいさゝか引さぐる樣にして着座して。右の足を上に組也。軒の向を往還る人は。簾中の禮有べし。軒下又懸の内をとをるべからず。かよふの人も同前也。但主人は通りてもくるしからざる也。是も貴人軒下に御座あらば用捨有べし。猶口傳有之。

一庭に鞠を置事。

つま戸のきはに有鞠を。右の手にて大指と人さしゆびにて取革をとり。左の手を扇のとをりにそへて。軒に向たるかゝりのまん

中のとをりにて。軒を見る様にして。左足よりふみ出て持て入。かゝりのまん中にて左のひざをつき。同手をつき。腰皮を軒に向。鳥の子を左右になして。とり皮を上になして可置。さて歸る時は左足より三足しりぞき。さてこして貴人の御座を前になして左右に向事。貴人の圓座により奉り。但むは(一本無此二字)ぬやうに歸也。是落役のそなへなり。猶々口傳有之。

一扇たゝふがみ置事

各々目禮有て。紙を取出して。扇の下へ取そへて。左の圓座の下へ半分計入置也。貴人の左の御座あらば。右の方に可置也。口傳。

一懸に立事

扇を置ていしやうかひつくろひ。懸へよりて袖の木にさはらぬほど。左のひざをつき。少貴人の方の手をつくべし。猶口傳。

貴人懸へよらせ給ふ時。平人は各圓座をはづす也。本の木に立給はゞ。やがて本座すべし。口傳有之。

一上鞠之事并請取事。

八人立終て。若輩の人鞠を取木の本へ歸り。向詰を見左右を見廻候時。請取人立あがり候也。左右の人も其時見合て立候也。又上鞠の人三足ふみ出す時。請取人すゝみより。一間半ほど置てうけとるべし。殘の人も三足すゝみ出鞠かまへすべし。今一の上まりの様如前(蹴イ)。八人立終て。上鞠の役人まりを取。そんこながら向詰を見て。三足しりぞきて一足ふみ出し渡す也。請取人はしりぞくを見て。則立より請取べし。殘の人もすゝみ。まりかまへすべし。猶口傳有之。

一棹にて鞠落事

竿を右の手に持て行落す時。左の手にて棹

の本をにぎり。右の手を上に成て。まりをはね落す也。さて三足しりぞき禮有て。棹の本を前になして。左の手にさげて歸。本のごとくになして可置也。口傳有之。

右賀茂流如斯。奥書別卷有之。

右本書校合仕候。少も相違無御座候。以上。

寛永八年

九月廿九日　　松下掃部助

第三蹴鞠式法之秘傳

一鞠長の事

一丈五尺也。これよりたかく不可蹴。

一鞠棹の事

竹の二三寸よきほどなるをためて。一丈五尺に可切。すゑの節ぎはより三分計をきて〔い置歟〕。筩がしらの様にかどをおろし拵也。さて本をば節ぎはより一文字に切也。又末の節一そろゆる事も有之。又他説二節そへ切る事有。但そろへぬる能也。なを口傳有之。

一分足といふ事

三足けて渡すを云也。若四足けば。第四足目の時。必やの聲にて請かへすべし。

一鞠を腰はさみにかけておきたるを。一二とも一丸とも一果共云也。一足二足とは云べからず。蹴時は一足二足と云べし。

一一暮とは其夕べを云。七日を云といふ事にあらず。

一鞠一庭とは。七日の稽古の內を云也。

一主人に沓をはかせまいらする事。

先筒を引立て。右の沓をまいらせ。さて左の沓をまいらすべし。緒のとめ所は外の方なるべし。左は上より下へはさむ也。右は下より上へはさむべし。

一沓を人に出し參らする事
襪子は内へをし入て。緒をもわけて内へ入。左右の沓をそろへ。右の手にもちて參るとき。左の手にのせて渡す也。きびすのかたを人の前になして渡す也。下にも置也。請取人一足そろへたる中を右の手にて取べし。猶口傳有之。

一襪子の事。賀茂沓に襪子をしつけて。是をつゝとも。たてあけ共。ひつたて共言也。根本は襪子と云也。

一沓のつゝの高サの事四寸也。襪子の色々は紫皮也。ふすべ皮の無紋は主上の御襪子也。錦革紫の有紋は親王家樣の御襪子也。黄皮。白皮。藍革。五めん皮。平人のしたふず也。さる故に紫。ふすべ皮。常の人着する事あるべからず。沓の緒の長さ三尺五寸也。但常には三尺よし。

一鞠ける時賓の禮儀の事。鞠を踏ひらむる事。貴人の顏へけつくる事。此二ヶ條のけがは其目斟酌すべし。座へ歸り扇と疊帋を納べし。然ば其日の蹴まじき禮也。余人つよくあそばせなどゝ會釋有べからず。但人によりて善惡あそばせとて。又庭にたつる事も有べし。又貴人の身にあつる時。すいかんの紐のとくる事。袴の緒の解る事。指つゝみたる紙のぬくる事。すだれにけあつる事。木をける事。延ずしてころぶ事。鞠がきをけこす事。火を打事。あせぬぐい落事。加樣のけが出來あらば。圓座へかへり。扇ばかりを取。余の人を立てけさするもの也。また人たちかはらば。其時やがて出て可蹴也。

一懸に立易事
上八人より立蹴て。其内のひきなる人より氣遣有て座にかへり。餘の人を可立也。たゞ

し上手といふとも。失あらば座へかへるべし。また人數の多時。長立有べからず。其以後は次第〳〵に立易也。また二八ともあらば。上八人立て後一段蹴て。其次の八人を一度立易べし。一人宛易時は。鞠外へ落たる時のくべし。鞠の數ある時に立易事なかれ。口傳有之。

一懸へ立人數配の事

主人または家の先達の人のはからひたるべし。

一着座の人數定や否の事。十人も廿人とけての有次第に着座する者也。人數不定。但勝負の鞠の時は。兼て人數を定て置。着座可有之。

一鞠を蹴落し候とき禮儀之事

我けをとしたる鞠を人取時に。二三足あゆみより。蹲踞して禮有べし。また取人も其禮を見て。鞠を地に付禮をかへす。鞠を落したる人の禮を見ずば。禮やあるらんと思て。木の本にて鞠をおき。前に立よりて上鞠すべし。また鞠落したる人の禮なくば。まりを地につくべからず。

一緣にあがりて落る鞠の事

つくばひて可蹴。緣に留ば取て地に付て上鞠にすべし。またはかきをこして鞠を取上べし。

一簾に當鞠の事

かまへてけべからず。其故は高座の簾の内に。必貴人御座有べき氣色也。我け當てば膝を着捨る也。自然とつよく當て。遠くさりかへらば。請おひてければ無上の秘曲也。覺悟してはたしなむべし。五間も三間も簾のかゝりて。下つかたのみすなどにあたり來ば。けてもくるしからず。但用捨肝要なり。

一軒より落る鞠の事
軒へふかく鞠のあがり。軒下よりみえぬ鞠をば。他眼をかり其下にて侍べし。さて廻てかはりの方へなをりてけ入なり。軒ひきくばつくばひてけべし。はやく落ば。身に引請て。懸に向て一足にて蹴入べし。ふぜいなくてはけぬ物也。猶口傳有之。
一貴人へ上鞠をすべからず。其故は御顏身にもけあてゝはとおもふ用捨也。
一上鞠たらずして我前に落共けべからず。中にて取べからず。落して上なをすべし。
一上鞠請取とき。たらざるまりをのべ足にけべからず。身に當らでながしける事なし。後へこしたるとて。まはしてけまじき也。是は最初より曲にけぬものなれば。曲になさじとをもふ氣遣也。
一鞠をほす事
春夏は軒かゝり遣木にかけべし。秋冬軒にかけよ。空くもらねども時雨る事有。ぬらさじため也。軒にかくる事。時を不嫌。懸にかくる事なかれ。
一鞠を庭に置に四季の置様



加様に置事一段の秘事也。猶口傳有之。聊爾々不可置者也。
右賀茂流如斯。奥書爾別之卷有之。
右本能校合仕候。少茂相違無御座候。以上

寛永八年　　松下掃部助
九月廿九日　　敎久判
進上ィ　休齋様ィ

第四蹴鞠作法之事

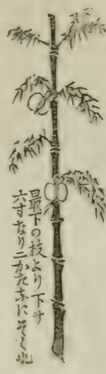
一鞠を人に見する時渡事
箱に入たりとも。腰はさみに有鞠なり共。まり計取出して。右の手にてとり皮を持。左の手をいさゝかそへて。さて渡す時。左の手にすへ。右の手を鳥の子にそへ。取皮を上になして渡す也。請取人は左の手よりさし出て。鞠の下をかゝへ。右の手にて取皮を取べし。さて見る時はましこの體を見て。しやうぞくを見。又皮の善悪を見しりてほむる也。また貴人にとりてきづかひある時。御前に置かへる也。口傳有。

一枝に鞠を付る事
枝四重有べし。一の枝より下三六寸也。一の枝に向て本を一刀にそぐ。わな二ふせ也。引かた三ふせ。長きかた四ふせなり。



かに結びといふ。是をとく節共とく日の節共云也。またはとんぼうむすびといふはとかぬ節也。近日括ざる鞠を枝に付て他所へ贈る時。とんぼう結びに可付。是かれざる鞠と心得させんため也。かまへて〳〵けべからざる者也。又花の時は櫻。夏は柳。秋は紅葉可付。但松と竹は四季にわたりて可然也。櫻柳紅葉はまりをのする枝より上には。枝二重も三重もあるべし。不論之。松竹には一付二付によりて枝の重定也。櫻柳紅葉は本の長一尺五寸計也。そぎ日は壹寸五分計也。

また壹尺二寸たらば。そぎ目も一寸二分計也。まつの枝最下のより上のふしに四方に枝さすべし。一付は枝數以上十三也。二付は枝數十四也。竹のうらは節より一寸置て。枝の向をそぐべし。枝數は一付は以上七なり。二付はえだ數八也。二付如此。繪圖あかす也。上はとんぼう結び也。下はかに結び也。



一ふすべ鞠の事

昔は日本に鞠大切也。さる故春のふるき鞠を送るかたを打なをして。四月初のころふすべ出して。五月中旬まで用。又秋は紅葉の時分。冬は雪のあした。春は花のころ賞翫して蹴也。但内々稽古の時之ふすべまりけるに。何時も不苦。此二段の折節時分はづれては努々不可蹴。白鞠とふすべ鞠と枝に二付は。花の比夏は四月一日より五月中旬まで。秋は紅葉の比。冬は雪の朝の鞠に。ふすべ鞠を下に付也。正月一日人の本へつかふ時。八朔の時は白鞠下に付ル。五節の時は白鞠下に鞠賞翫也。あたらしき鞠をふすべたれども。他所へ送る時は。ふるき鞠の心得也。また白鞠を二付時も有。口傳在之。

一枝の鞠を請取披露する事

えだの鞠を人に渡には。枝の末を右の方へなし。本を左へなして。右の手にて鞠をかゝへ。左の手をそぎ目のきはにふせて。左の膝をつき。鞠上に成て渡也。また請取人によりて手の禮可有之。次の枝の鞠を請取人は膝をつき。左の手にて枝の本を取。右の手を上になして。えだの末を右になす様に請取て。貴人の御前へ持て參。披露する時に。貴人の

右にまりのあるやうに。我左の手に取なをして。右の手をつき御目にかけ。押板角によせかけて置也。但花など有て押板さし合ば。便宜にしたがひ可置也。

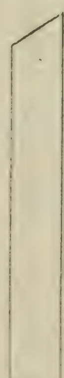
一枝の鞠を軒に置事

まづ塀中門より侍枝の鞠持て庭へ出蹲踞。然所に着座の内。若役とて出て枝を請取て。縁の上に屏風をかまへて置。それへもよせかけて置。本座へ歸る也。又縁にもよせかけて置也。つま戸の方に可置也。枝の持やうは。右の手にて枝ごしに鞠を抱るやうにて。左の手にてそぎ目の上を手をふせて持て行。置時蹲踞してかゝりを前に成て歸べし。貴人の方を後にすべからず。猶口傳有。

一枝のまりを庭にて解事

縁にあるを蹲踞して右にあるごとくに持て。軒の本にて蹲踞して。枝より鞠の落ざる様にしなをあらせ。枝の末を右の方へなし。紙よりの結ひ目を上に成て。左のひざにておさへ。右の手にて紙よりを引。左の手を副解て懐中して。さて鞠を右の方へなし置。次に枝にかかりによせかけ。また鞠を取て。庭のまん中に如常置て。歸さまにたちながら枝を取。塀中門のきはにて最前枝を持て出たる人に渡也。また軒の向木の間にてとく事も有之。筒を五六寸にして土へ打入。枝をさしてとくも有。木間又木の本に筒をさすなり。口傳。

木の本に有筒は如此そぐなり。



木の間立筒は。如此すぐに切て。土より少も出ざるやうに打入て置べし。

一軒の向木の間にて枝の鞠解事
かねて筒をさし置たらば。軒に可置枝をすぐに軒の向へ持て行。其筒にさして置歸べし。さて解人其枝を取て。末を右へ本を左へなしてふせ。膝にておさへて。右の手かたかたにて。紙よりのみじかき方を引。左の手をよせ解て。帋よりを懐中して。鞠を右の方へなをし置て。枝を左の手にて左のかたの後へ其まゝ引なをして。また鞠を取。左足よりふみ出して。眞中につねのごとく置て。左足より三足ふみのきて蹲踞して。歸さまに右の手にて枝を立ながら取。枝の本を前になしてかけて。其まゝ指出て。寂前塀中の外より出たる人に渡す也。其枝を三足ほどまで。右の手にて聊はさむやうにて持て。塀中門を出。家内入。人の見ぬ所に枝を置べし。筒立ざる時も如此能也。猶口傳有之。

一曲足の名の事
歸足過去。身〔劍歟〕別足現在。延足未來。是三曲足と云也。大籠足。小籠足。向直も足。左右のながし鞠。左右のかたをこして廻す。あかし櫻かさねとも云也。くゝり歸り。沓かへし。鴨の入くび。うつぼながし。延歸。新歸。かたの鞠たひ歸し。うけ歸。おひおもひ歸。衣紋流。逊籠。追籠。半廻籠可負。何の曲足の時も。左足の聲なくば。まり身にそはぬ者也。能々口傳有之。

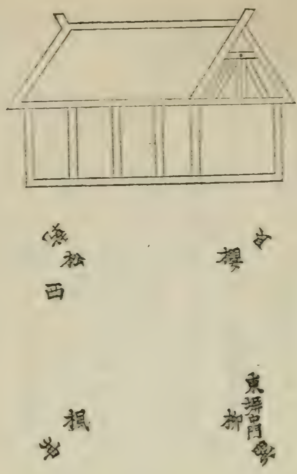
右賀茂流如斯。奥書別之巻ニ在之。
右本書校合仕候。少茂相違無御座候。以上。

寛永八年
九月廿九日
松下掃部助
教久判

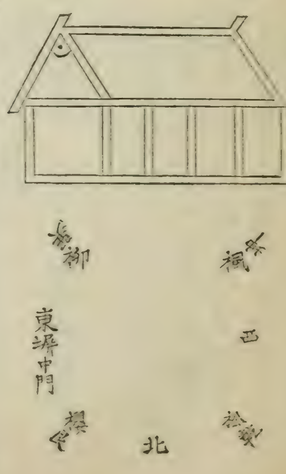
第五　懸を搆事

一南向にして七間々半四方なるが本なり。但一方へ長く共不苦。又軒も所によりていづかたへも向ふべし。猶口傳有之。

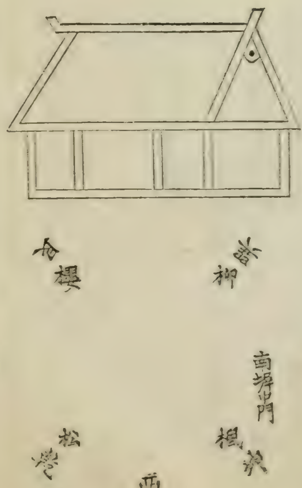
一四本懸を植る方角の事



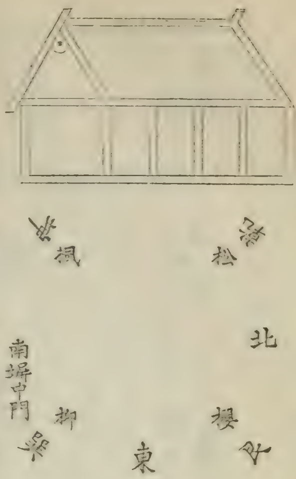
一北向の掛の事



一西向の掛の圖



一東向の掛の圖



何も塀中門の向軒の方上座也。軒はいづかたに有とも。かやうに方角を本に植也。猶口傳在之。

一木を植始納方の事

艮より植初て。巽の木を植。坤の木を植。乾の木にて植納之。木をすかすも同前なり。猶口傳有之。

一木の間廣狹の事

掛の間二丈二尺本也。但庭せばくば二丈一尺。二丈。一尺九尺。一丈八尺。又は一丈五尺までも。一尺づゝひかへて。三合て植る也。猶口傳有之。

一軒と木の間の事

一方の面屋の柱を請て木を植也。雨露より一丈五尺本也。但庭によりて一丈三尺。又緣のつか柱よりも一丈三尺。猶せばきはたゞ八尺までもつゞめて可用也。猶口傳有之。

一鞠垣の高さの事

一丈四尺。一丈五尺。兩說。何も可用。

一あみの目の大小之事

糸網のめ四寸にすきて。あひにてそむる也。又縄網の目は五寸に編用之。網をはる柱は竹も木も可用。口傳有之。

一ぬきとをしのひろさの事

一間ヅヽに柱をたて。一二寸の竹をよくた

めて。横にぬきとをす。其間四寸に可用。地ぎわより四五尺斗は竹の五六寸なるを。四寸間を置。竪にひしととをして可用之。猶口傳有之。

一軒に網をはる事

正面の縁にあみをはるには。折くぎをひしと打て。いさゝかそらしてはる也。

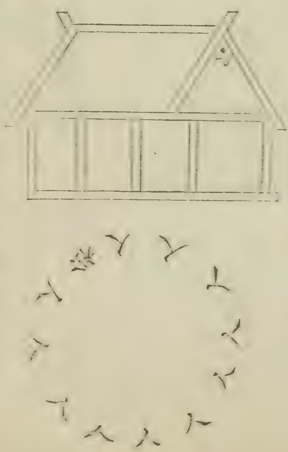
一竹切立の事

高さ壹丈五尺。すゑの節ぎわより一寸計置て直に切也。最下の枝へゑぼしのさはらぬほどに置て。けかたへなすべし。あひをひに立時。お竹め竹と立也。最下枝一め竹と云也。一本づゝ四本立る時も。男竹女竹と陰陽を心得て可立也。枝數は九曜七曜を表する也。但數さだまらず共くるしからず。

一庭に水をうつ事

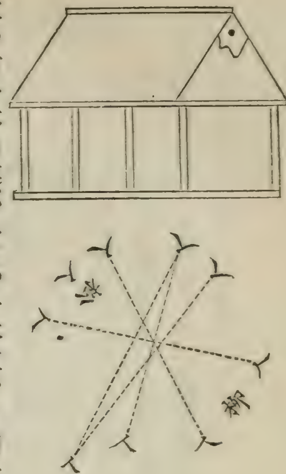
夏の庭に晴の鞠の時は。砂を中へはきよせて中高にする也。鞠あらん時は。砂をはきちらして。高ひきもなきやうに用意すべし。はうきめは軒を横に後へしりぞきながら。これあとのなきやうにはく也。掛の内は中にはくべし。何もさゞ波のよするごとくにはくべき也。

一本掛の事

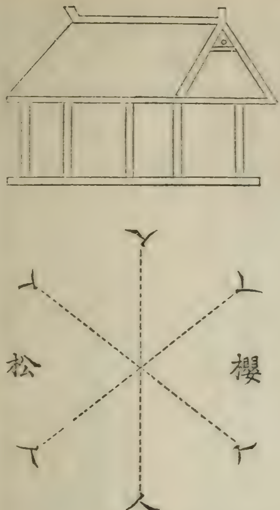


家の右に植也。立様は如此。九人も十人も十一人も。人數さだまらずける也。

一二本かゝりの事



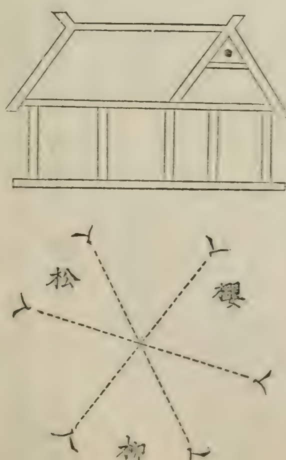
家の右一本角違がへて。一本立やう四本懸のごとし。



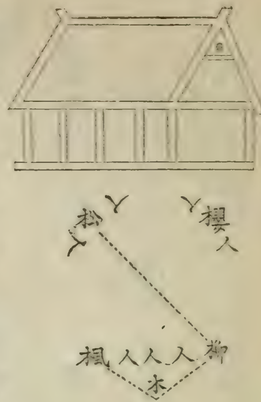
六人詰の時立様如此。八人の時は四本懸のごとく立也。

四人詰の時は。兩人は木を後になしてたつ也。

一三本懸の事

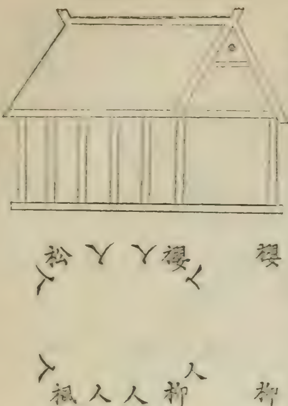


立様六人詰なるべし。



如此九人立也。木を後にして立人を野伏と云也。

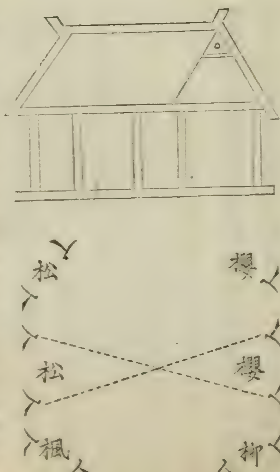
一六本懸の事



立様常の四本かゝりのごとし。又にげ木のかたにてける時は。松楓二本をのぞき置也。

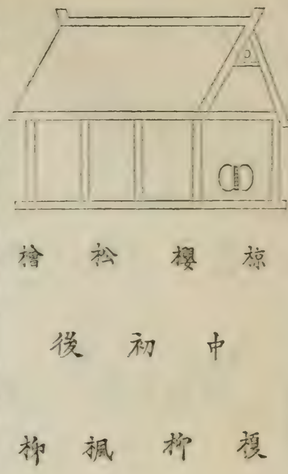
一鞠のかうの六本かゝりの事

五本かゝりのごとく寸を取植也。



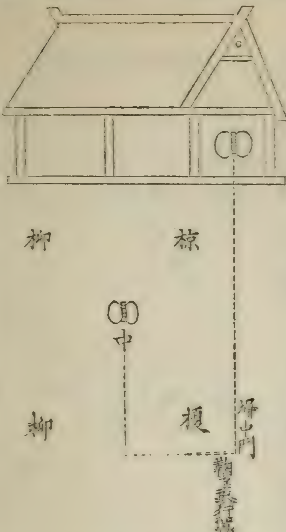
か様に拾二人立也。又十人立時は。野伏に立ごとく。木を後になして立べし。殘りは常の立やう也。

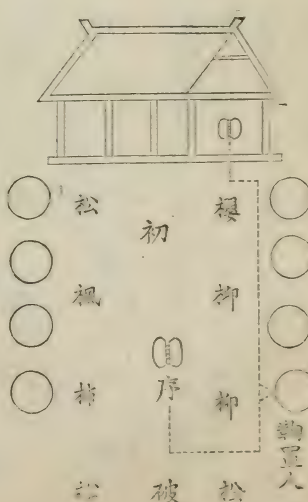
一八本懸の圖は苦煩惱也。



序の時は中間。破の時家の左方。急の時は家の右にてける也。

一十二本懸の圖者十二神。十二月。十二因縁也。

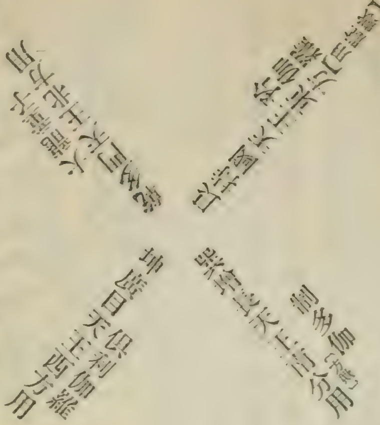




序の鞠は圓座を敷たる方にてける也。破のまりをば鞠を置たる懸にてける也。急のまりは松二本有懸歟。柳二本有かゝり。此兩所何のかたなりとも。其時にしたがひ用ける也。軒の方の懸も序分たるべし。此十二本の植やうは。まづおくの家本やゝに用之。軒の

かたに四季の木を植て。さて前後をかくる木をば。柳をもつてへだつべし。椋は櫻の代なり。榎は柳の代也。柿は楓の代也。檜は松の代なり。此心をたがへずしてうへる也。

一四本掛本尊の事



然則鞠の行者をば即身を不動明王と觀ずる心有。又云。艮櫻は藥師。東方春にかたどる也。巽柳は觀音。南方夏にかた取。坤の楓は阿彌陀。西のかた秋にかたどる。乾の松は釋迦。北方冬にかたどる。是則生老病死也。春の梢の緑に立花のさく所を生に取也。夏の梢の茂り合たる所を老にとる也。秋は梢の一葉宛紅葉して。物あはれなるけしきの見ゆる所を病に取也。冬は梢の葉こと〲く落葉して。物すさまじき所を死と取。然ば世間に無定相。以不定爲定といへり。されば乾松を用植事。霜雪にも色不變所を金剛正體に用。無量壽佛祝言に用仰所なり。蓋さとりを可得者也。

一鞠の本尊の事

南無普賢菩薩也。口傳云。鞠の上(アガル)は一切衆生の生也。下るは一切衆生の死也。中間は人間也。鞠の體は六道輪廻也。腰皮は命根也。生死病死の四節也。甚深可思者也。

一懸の木の枝の名の事



一枝をすかす事

櫻は下枝鞠の留べき枝をすかし。椙はすかさず。花賞翫のため也。柳は空へのぼる枝を切。下へたるゝ枝を用。これも鞠留ざるやうにすかす也。楓は本木にそひたる小枝切。ふとき枝を貽し。鞠留ぬやうに透。餘にさびしくはせず。秋の紅葉を賞翫する也。松は上中下よくすかし。古葉を取也。但軒へさしたる枝の内に。小枝一ッふる葉をとらず。やうがうの枝に殘す。何の木もしんをさす枝地をさす枝を嫌也。松は切たき枝あれども。一方かれなんとすれば。木のすがたあしかるべきと。松もはゝもぢり枝なりとも置物也。たゞすがたのよきやうに。かゝりはすかすべし。後枝は最下の枝より上にあるべし。但同じとをりにても苦しからず。松は六月に古葉を取すかすべし。

一庭を拵事

まづ懸をうへて後。三尺ほど堀て石を取のけ。土に砂を合て鹽俵をうづみ。四方には坪を埋み置也。但中につぼ壺つうづみてもよし。さて土をよく〳〵ならして砂をまく也。また高ひくきをなをす事は。雨降天涼のたまりたる所にしるしをさし置て。水のひきたる以後。土を置ふみ付て。かゞみの面のごとくに。すぐになをす也。砂を用意して縁の下に置。細々まくべし。雨降てながれうするも

の也。

一雨降て庭のしめりすぎたる時は。大鋸くづを用意して置。庭にまき。しめりを取。はき取べし。

右條々一段爲秘密間。聊爾不可有他人相傳者也。

右本書校合仕候。少茂相違無御座候。以上。

寛永八年　松下掃部助

九月廿九日　教久判

第六　蹴鞠秘傳之抄

一鞠かまへの事

左の足をさきにふみて。右の足を跡にひかへて。少前へかゝりて鞠にあふべし。かりそめにものけける事なかれ。左はつまさき。右はきびすふす心にて。姿は直になるもの也。猶口傳有之。

一かたびやうしの事

鞠かまへにして。右のつまさきをそらして鞠をけて。また左足をすゝめて。道をあゆむがごとし。

一三拍子の事

鞠かまへにして。右の足をふみ出し。左の足をふみ出し。次に右にて鞠をける也。大鼓がしらの拍子たるべし。高き鞠の時の拍子也。猶口傳有之。

一待拍子の事

一段と〔ち[illegible]〕高き鞠の時と。又懸の枝にまり留り。ひやしをくれにならんとおもふ時に。三拍子に又三拍子をふみそへ。七足めに鞠をけべし。但口傳有べし。

一千鳥足の事

鞠には拍子のあまりたるがよき也。いかに

もこまかにはやく〳〵ふむ足也。延足籠足の拍子口傳有之。

一はり引足の事

鞠の上よりうるはしく下るには。胸出してむねを出さず。あたるを引。あたらぬを出す。こしよりむねの間の鞠の心得なるべし。曲足のごときも。此心得なくては。まりは身にそはぬ物也。猶口傳在之。

一腰と膝との間の鞠の事

こしとひざとの間へあたる鞠をば。いかほども心をしづめて請て。つよくあたらば。はづみさる所をけべき覺悟かんよう也。又よは〳〵來あたらば。ながしかけてはねべし。又木にそひ落る鞠もはね足成べし。猶口傳有之。

一ぬき足の事

ひざより下。すねうつ鞠來る時。左の足を後へはね。右の足を後へぬきながら鞠を蹴也。又ひざのとをりへ向よりつよく來らば。飛あがり左の膝をつきける也。何も口傳有べし。

一鞠の目つきの事

掛の枝をぬけて上たる鞠を。おつる時に枝にとまるが。ぬけて來ると思ふとき。其あやしき枝の下五六寸を心にかけ守べし。大かたの人は枝より上鞠ばかりを心にかくるによりて。ぬくるまりをけはづすなり。軒をすりて落る鞠。同心得なるべし。かやうの分別肝要秘事也。猶口傳有之。

一鞠を落し立事

たかき鞠を見あぐるこゝろは。さきへのく歟。よきほどに來る歟。後へこすか。此三を心にかけてよく見て。その色にしたがひて拍子をふみそへ。さて鞠のおちかゝるとき。

かほのとをりより鞠を大事にかけて。足のつまさきまで見くだすを落し立といふ也。顔より上のまりを目にかけながら。足をあぐるによりて。いそがわしく足たかく成て鞠きれのく也。但鞠あたりは足のたかきによらず。ひきゝによらず。足にまりのあたるしな。稽古の人に器用不器用ほど拍子の功夫有もの也。

一鞠を蹴所事

枝のひきゝ所。又は軒下懸の外也。行鞠。垣ぎはのまり。何も蹴取べし。是をひきゝ数まりの心持にける事をいふ也。かん所を得ずして。がひに任せてければ。ふかく有もの。口傳在之。

一鞠をひつ付て蹴事

一大略の人は大またげにして。およびこしに足をさし出して。のけそりてけるにより。鞠身にとをくして數けられず。見苦き也。所詮まりにつきより。其所に足をたて。つまさきの當る所。膝に力を入て。つまさきよりあぐれば。鞠身にそふ也。まりのきさらば。ひつ付て足をあぐる事肝心也。鞠におくるゝ事なかれ。をくるゝといふは。鞠をけ上て。其足を其儘置て。まりの落下までさらぬ體にて。扨ける時についそぎゆく也。さあるによりて進退ふためきて。足當相違する者也。能く可心得也。

一耳家足の事。

鞠枝にかゝり。軒よりくだるまり。拍子ちがひ。大事の鞠出來の時に。膝を少くつろぐる也。枝のひきくして蹴にくき時此心得有べし。又體をつゝむる共さがるとも云也。是大事の秘足也。口傳有之。

一腰をすへてすゑざる事

腰をすゆるとは。むねを引入。ほかみをはる。まりたけたかく。まむきにくるまりをば。腰をすゑて鞠に逢べし。身にそふ足同前。聊心得有也。すゑざると云は。まり横にきれ。急におふ時。千鳥足の時。又曲足の時。すゑずしてさしかゝりてける也。腰をすゆる鞠。すゑざるまりの色をよく見分蹴をもつて。堪能の足とは云也。腰をくづす事耳家あしなり。此兩條秘事也。口傳在之。

一手持の事

大指と人さし指をにぎりて。殘りの指はからしを持ほどにかけて。握らではなへず。又すくまず。たゞ何となくさげて持べし。もちてもたざれと云事口傳。

一あふひの日に向事

葵といふ物は日につきてまはるといへり。其ごとくに鞠に身をそむく事なかれ。

一水鳥の浮事

水鳥の水にうかぶるは。誠にゆふにみえ侍れども。足にて水をかく事はひまもなしといへり。其ごとく鞠に向て足をうごかすべし。立足して不可有油斷。

一左足の拍子の聲の事

まりの遠はゑいと云。進〔近〕鞠はやつと請。何も曲足のときは。此聲なくてはまり身にそはぬ物也。口傳有之。

一鞠の三聲の事

やの聲は請取聲也。うかゞひ聲と云。ありの聲は自分の聲也。定聲。人に競望なさせじとて請聲也。應の聲は渡す聲也。名殘の聲といふ。うれひのこゝろあるによりて。祝言の庭にては。細々おう聲呼べからず。當世の人此聲をさるゆへに。となへうしなひて不知事也。猶口傳有之。

一序破急三段の事

序の鞠の時は。いかにも進退をたしなみ。まりを高足に蹴上。請聲はありの利の字をはりながく引。あの字をば口の中にてけしして請てける也。され行鞠をしたひけべからず。たゞすぐなる鞠ばかりをけちがへぬやうに心にかくべし。分足をたがへずける也。是一段也。破の時に木にも軒にも鞠をけかけ。聊荒くけなし。切るまりを追延。姿惡共まりを落さじと馳走して曲をつくし。男足女足にはまりの〔[illegible]〕色をもしろく聲をそふといへり。互に人に見じと心に懸。油斷有べからず。是二段也。急の時は鞠をひきくつめて。分足をひかへ。二足にて他分にわたし。一足をひかへ。一足にてゆづり。八人おなじ心に有之。數を上みちて。與ありて鞠を納べし。又序破急の段を分ずしてけつくる時は。段のうつり聲有べし。序より破のうつりはやゝおふと請也。破より急になさんと思ふうつりには。ありをふと請也。かやうの聲をきゝしりて。三段の心を分別してけるべき也。此聲のしなをば。一葉を三に時分よく見はからひて。先達の人か主人かこふ聲也。秘事也。口傳有之。

一時を三に分。序分に三百六十蹴候。取て圓座に歸り。又まりを置かへて。さて儀式有之。破の分に三百六十上みちて。又取て圓座に歸り。鞠をかへて置べし。急の時も三百六十あげて納る也。

一鞠を取る事。

主人振舞をいたすべきとおもふ時に。序分のまりをとり圓座に歸れば。各も心得て可然也。堪能先達貴人を任て可取。

一鞠を蹴納ル事

惣別始て鞠を庭に出したる人。後にも取可入事本儀也。されどもをさむべき時に立あはせずば主人納べし。又堪能先達の人。貴人より來るまりを。左の袖を右の手にてひろげて請取納ル本式也。但其まゝ手にても取べし。祝言の庭城寺などにて落してをさめぬ也。歸足おひ鞠にて可納。又只の時は天然余へ落たるまりを其儘おさむるもよし。又可置と思時。鞠をけあげて身ま近く落るを。足を引しりぞきて。まりをおとして。其儘おさむるもよし。木に留まりを其まゝおさむる事もあり。軒にとまりたる鞠を其まゝおさむべかず。とりて上みちておさむべし。口傳有之。

一鞠の數とる事

廿より初め又五十より初候事も在之。先廿迄は口の內にてよみて。廿に成たる時。御數とあげ。いく度も小數をば口の內にて讀て。卅卌五十と讀て。六十をいくたびも口の內にて可讀。七十。八十。九十。百共讀也。又五十より以後百までを口の內にて讀也。百とあぐる也。百十をも口の內にて讀て。百二十とあぐる也。百の文字をばなさで。三百六十迄を右のごとく讀也。三百六十の時聲を高ク上。十の字を引あぐる也。是を一足と云也。千も二千も如此よむべし。又貫のよみとて。九八七までを十によみなす事有。大數を讀入事。百より後又は名足などあらん時に。九十。八十。七十をも貳百とよむべし。一段としたる名足ならば半足に入なり。三曲はさだまるあいだ。五十の內をよみ入也。猶口傳有之。

右賀茂流如斯。奥書等別之卷有之。

寛永八年　　松下掃部助

九月廿九日　　　敦久在判

進上

休齋樣ィ

第七　蹴鞠之起之事

一天竺に大曇王といふ惡王有之。さるほどに臣下大臣是をなげきかなしむ時。或人云。よきはかせの奇特なる事をうらなふ者有。かれをめして占はせ給へと申れければ。各同心ありて彼博士を召て。大曇王のほろび給はん事を問たまふ。彼相人占ていふ。鞠と云事を拵て。大曇のかふべと名づけて。足にて蹴て調伏あらば。ほどなくほろびうせ給はんと云。各ふしぎなるうらなひとて鞠を拵へ給ふ。又彼相人に問給ふ樣は。鞠をけんにはいか樣にあらんと尋させ給へば。庭を南向に七間々半に四天四本懸を植て。持國天王。增長天王。廣目天王。多門天王。此大四天王を本尊にして。不動明王の八代童子と形取て。是を蹴させ給ひ候て。御望はかなひ候べしと申。各可然とて。はかせ申ごとく鞠を賞翫し給ふ。さる故大曇王ほどなくほろび給ひて。國土安穩にして世を治天佛法繁昌也。彼曇王は善事をそねみ惡事を祝。佛法をさまたげ國土をなやまし。萬事に惡事を好み給ふ惡王也。彼王ほろび給ふ事も。國家を治佛法をそだてんが爲の事なれば。鞠は佛法より出たりともいふ事有。

一大唐にて鞠の初。黃帝の御敵蚩尤が頭也。其故は惡魔の大將災難の家〔宗歟〕主也。上天の爲に敵國をまて(マヽ)。人民の命を失。其身鐵にして却て矢太刀たゝず。思ひのまゝふるまふ。黃帝對治の術を失ひ給て。天に祈給ひしかば。無双の相人出來てうらなひて云。蚩尤が頭と

かたどり。鞠をあそばし給へと。大曇王のほろび給ふ様をとく〳〵申上間。彼博士申ごとくに鞠を拵て翫給ふ。ほどなくたくろくの野にて蚩尤と合戰有しかば。天のせめを蒙て。鐵の身皆とけて。調伏のゆへにそこにてうたれほろびうせ畢。蚩尤は東より出て東へにげうたれぬる間。東の方に四本の外に植る木をばにげ木とも云。又草を分たる故にわけ木ともいふ也。黄帝は西の方より出給ひて待せ給ふ間。西の方の木を待懸と云。又西より追たるによりて追懸共おひ木とも云。鞠の三柏子は天地人の三才也。蚩尤が頭を鞠にして黄帝蹴給ひ。眼を的に立て射給ひて。國を治給事也。

一日本にて鞠の始は。皇極天皇の天下を治め給ひし時。甲申の歳申日。大唐より始て渡り侍る。然共女帝にて御座有間。天智天皇いまだ皇子におはしゝ時。大職冠と相共に興福（法興寺イ）寺の砌にして始て蹴鞠御會執行なはるゝなり。甲申の日渡故に。甲申の日申の時あそばし始る也。然者歳の始のまりあそびに。必申の日申の刻を可用也。然間天智天皇より以來文武清和相續し。延喜天暦の帝此極を中興し給ふ。そのゝち朱雀一條代に是を續。代々是を翫給ふ。順德院は此藝を達し。人數八人にて御遊ありて。襪子の色を八品にさだめらるゝ。せい魂を三けの井にとゞめ。松本の明神とあらはれ。當道の好士を守らんと誓ひまします也。依之日本にて鞠を翫ぶ心は。國を治るはかりどなれば。めでたきものとて翫たまふ。また懸に立て鞠より外他念もなき故に。祈禱とも後世の緣とも成と云也。

一懸を植。蹴鞠の道を定ておかるゝ事は。後鳥

羽院の御宇に不殘定置給ふ也。天狗楓とて賀茂松下庭にいまだ有也。此懸は後鳥羽院始て植給ひしかゝり也。

一根本の鞠の足の次第の事

賀茂成平。其弟子成通卿。其弟子頼輔。その弟子宗長雅經此人也。宗長は〔難波アランニ〕飛鳥井の雅經は弟也。自是難波流飛鳥井流と道をたてられけり。頼輔までは賀茂流也。〔御子左の流足も後鳥羽院の御說をあづかり給ふゆへに賀茂流と同意也〕成通卿始て成平に鞠相傳有とき尋被申ける樣は。成平はいかほど稽古ありて。かやうには上手と成給ひしぞとありければ。成平こたへていふ。されば常の稽古の事は不及申。日をかゝさず。百日稽古申て上候之由物語有しかば。成通卿我は一千日稽古有べきとて。三年日をかゝさず稽古ありて。天下無双の鞠足と成給ふ也。或時に大内の御鞠ありしに。成通遲出仕有之。主上御氣色あしかりけり。鞠はじまりて出仕有ければ。其儘かゝりの本へ立たまふ時に。いかなる事ぞや。まりきれて七足のべたまひ。他へ入鞠をけかへし。わが身も後へ飛。まり懸へまりを蹴入ぬる。かゝる奇特なる事ぞと。主上もおぼしめして。御氣色よくなをらせたまひて。是をばとんぼうがへりと名付給ひ畢。關白を始め奉りて。かやうの名足は末代のためしにとて。名書留てをかれ侍と云々。種々の不思儀共有之。鞠の明神となり給ふもの也。

一鞠精與成通問答の事

成通卿まりを好みけらるゝ事。いく千万と云事をしらず。其中に日をかゝずけらるゝ事一千日。滿する日の鞠の時。賀茂の成平。小野忠資。次有。源九。この上手を集て。殊更引

相て鞠あり。三百六十上て。白鞠を取。各執事にて棚を二ッまふけて。一にはまりを置。一には樣々の供具を備て。一交の御幣を奉りけり。其幣を取て棚の鞠を拜す。種々にたなこゝろを合。觀念をこして。其後各皆着座す。鞠の人數皆喰をすへて。三獻して後各身の能を奉。五獻之事訖て。鞠の人數に祿をあたへたまふ。さて各皆退出す。夜に入て。其日の鞠事。又一千日の間奇特共を一々に書付んとおもひて。燈臺を近くよせて。墨をすり筆を執處に。棚に置たる鞠其前にまろび來有樣。あやしく思ひながら。是を見られけるほどに。顏は人にて手足身は猿に似たり。三四歳計の者の勢にてかぶろなるが一人。此鞠の括目にいだき付て。おしてきたる四人あり。成通卿不思儀にあさましく思て。あらたに何者ぞと問給へば。我は是此程翫給ひし

鞠の精也。昔より鞠好み給ふ人はおほくましませども。かやうに御心に入て程に。誠をいたさせ給ふ人未御座。千日の終に種々の供具を贈給を。いかで悦申侍らざらん。御悦の余に參り候。且は又我身のありさまをも申さん爲に今參りたりと申。さて在所を問給へば。我等は鞠を家とし。四本の懸を一人ヅヽ主付て住也。我等が名を御覽候へと。まゆにかゝりたる髮をかきあぐれば。一人の額には春陽花と云金色の文字有。一人には夏案林といふ文字あり。一人には秋色園と有。一人には冬庭殘と云文字あり。皆金色也。驚ながら又精に其故を尋給へば。重て申。我は是昔唐朝の黄帝に被退治たてまつりし蚩尤が頭也。天下を擁護したてまつる也。鞠好せおはします世は國さかへ。好人は司を執。來たる災難をはらふ病なし。福をあ

たへまつりて。命長く後世までもよかるべきといひければ。又云。余の事はさもあらん。後世までもといふは如何。又申曰く。誠にさも思召べき事なれ共。人の身に一日の中にいくらともしらず懐念のみあり。それに鞠を好せ給ふ人は。懸の本に立たまふより。鞠の事より外に他念なし。譴而人を惡かれと思はぬ故に。自然に後世の縁と成候也。又鞠のおこり因縁も能御了簡候へ。鞠の時は我名を次第によばせたまへ。木傳來て宮仕すべきと申。今より後はかゝるものありと御心にかけさせ給候て。鞠もあがり守りともなり侍べき也とて。形も見へず失にけり。又成通卿靜に此事を案ずるに。陽花と云聲。案林と云聲。皆鞠の精の名也。額にありつる文字也。尤故あり。成通卿既にかゝる覺を得たり。すべて鞠を好み懸を植。家中に鞠を置は。鞠の精の其家を守護して。病患止。横死の難をはらふのみにあらず。三界天人。四海の興通。一切諸神。皆其人其家其國其里を守護したまふて。息災延命。增長福壽。滅罪生善の理たる者也。或經云。蹴鞠者是福德自在。現世安穩。當來作佛。好蹴鞠者此經文を讀誦すれば。諸佛照鑑。故拂災難者也。如此の文を見る時は。現世たのもしく後世も疑ふべからず。

凡蹴鞠の德不可勝計之。誠に不遑注納。好まんと思はん人は。能達者子相傳爲肝要有也。

右簡要有增記之訖。抑世俗犯言綺語何事歟。不歸第一茂成。況蹴鞠之業和漢世之根源在之者歟。今所令遊興面白云々。有爲轉變眼前歸依。淸以悉皆爲讀佛乘緣者也。可秘云々。

右本書校合仕候。少茂相違無御座候。以上。

寛永八年　松下掃部助
九月廿九日　教久在判

此書巻物七軸也。縮今一冊ニ書寫功終。

極意集八

一八境は八人の領分なり。他分をば斟酌あるべし。但人油居のときは可請取。雖爲自分。人請ばゆづるべし。互に鞠を請あらそふときは。後の聲に可任なり。

一正分次分は。正は本向詰。次は横詰也。ときによりて横詰してけるなり。

一上鞠は貴人へと又木こしと。あひかゝりの人にはわたすべからず。悉貴人のときは。其内にて末の人にけ可渡なり。

一懸より外へいづる鞠の事。一足にて内へ後さまにけいるとは。マトイ足とてけぬもの也。けとりてかゝりへ向てけ入也。但落し候はんよりは。一足にてもはね入べし。とりてをとさぬやうにけべし。

一鞠を陰陽にかた取事。ふすべ鞠陰。白鞠陽。春夏も陽。秋冬は陰。

一鞠取は右の手大指人さし指にて取皮をとり。殘りはかたのうへに置て。ひだりの手をもかたにそへ。鳥の子を些(スコシ)上になして持者也。

一鞠の庭にて。かりそめにも右の膝を付べからず。

一のきの下をとをらぬ事は。家を賞翫の義也。主は通りても不苦。またみすの内に貴人御見物あるかとおもふ用捨も有。貴人無御座としりたらば。自然通事も有べし。

一懸にて手を付事。貴人のかた付也。膝は貴人のうやまひなし。

一ゆびつゝむ紙やぶれたらば。何度もかへてくるしからず。

一座につくとき。貴人のかたを後になすべからず。

一上鞠は可然人するなり。常の上鞠は末の人なり。

一あせぬぐひはふところに持也。あせぬぐはゞ。かゝりにかへりて。かゝりをうしろになしてぬぐふ也。

一まりをわたすとき。あらくはなす事惡。うつくしくにじのたちたるやうにけ渡す也。たとひ余所へ行落候共。あらく渡人の落しに成候也。

一上鞠をけ渡は如常。鞠を持左の手をはなして。右の手より落かけ。うけ足にてつまさきをさげ。ちとはねるやうに。一足にてけ渡なり。

一上鞠請とりにこうべからず。

一座の事。疊は大もん小紋赤へりの圓座しく也。大紋は大臣。小紋は大中納言公卿。赤へりは殿上人。圓座は地下又すへ／＼の者もくるしらず。自然ふとの御會のときは。疊しき皮などをもしかれ候。圓座は大臣も御着候。又下﨟も座候而。上下候はて可然候。

一人數かわりて座にやすむとき。あふぎばかりをとりひだりに持べし。まり過ば扇疊紙を納て。末座よりしだい／＼に一人づゝ退出。自然鞠半に用事ありて歸共如斯。

一鞠けるとき見る事。たけ高時は右のましりにて見るべし。但惡心得ばくびゆがむべし。ひきゝ時はまむかふに見るべし。頻にうなづくもあしゝ。緣の上より落るまりは。必緣をそばさまに左の膝を付ける者なり。又は緣に向ても。けるまりきうに落るときは。立

ながらもけて。後に膝付かしこまるもくるしからず。縁に留たる鞠を。手にてかき落しけまじき也。かき落して取上まりになすべし。縁に留たるをとり地に付上べし。

一人の身に當たる鞠は。我みにまたうけて蹴也。しからずば地に落して取てけべし。

一貴人のあそばし落したる鞠。木こしあひかゝりの人機遣ありて。ありとこうてすくひたすくべし。等輩のひと成とも。鞠數あがり候とき。油斷なくすくふべし。わがけ落したるは。我とはすくふべからず。但時によるべし。勝負の鞠のとき。心にかけすくひあぐる也。但聲なくばせんなし。

一正分の人まりけるに詰よりて候時。他分て渡り候て。まりのかたへ身遣なして。二足三足横さまになりて歸り。扨鞠來ば可蹴也。まり不來ば身をなをしすぐに歸る也。又詰よりたるに。向詰よそへ落たびは。後さまに三足のきて。由ありてすぐに歸る也。道ふさがらば。かゝりをまはりて歸るべし。木と人とのあひを通るべし。人と人との間を通べからず。

一貴人の木こし〔甚與〕あひかゝりには。初心のものは斟酌あるべし。

一冬なりといふとも。若輩はかたびら着すべし。老者あはせを可着也。

一鞠の當所は爪前。足のこう。三手所をかけてけべし。つまさきばかりに當れば。鞠色ふりて惡し。向へ行也。但暮のまり爪先にかけてふりめかしく蹴がよしとす。

一鞠さうにてあしがなびかぬは。向にあたる物あらば。け付ても他分に渡事心づかひ肝要也。たゞし所により斟酌あるべし。

一小袴にくゝり入る事。自然俄に鞠ありて。ま

り道不及ときは。くゝりを入る事くるしからず。

一露はらひと云事。鞠にかぎりたる事也。大内の御まりのとき。加茂より鞠足をそくりて鞠を初る也。鞠を少あらくけて。えだにけ付て。色〳〵まりのゆくふぜひを御覧ぜさせて。其御心へなさしめんやうにける物也。

一きう成まりをけ出事。心にも覺えず覺悟なきは。常にけいこのこうなき故也。心懸常にけいこすべし。

一鞠數之事。三百六十に定といへども。けいこのとき百六十足。また百廿。二百八十。五百とも。數を定てける事あり。數取ひとは鞠の人數のうちにても取。またよみて一人さだめて圓座に着しよむ也。

一歸りあし鞠のかゝりを背とき立廻なり。ひだりのかたへかけては歸り。右のかたにかけて左に歸也。膝を付歸る事もあり。

一軒歸り。軒よりころび落を。軒に向待て。落時むきなをりてかゝりの內へけ入也。

一身にそふまり。腰をすへて鞠をまちて。身にまりの添とき。腰をくつろげ。爪さきをそらし。きびすにて地をふみ。哥云。ければとぶけねばあがらぬまりなれば踏て心のつよきをぞしる。大事の鞠也。猶口傳在之。

一まりふむとき進退の事。若ふみては必ころぶべし。膝を付て鞠のつぶれたるをなをして。かゝりの內へころばし入て。足をくじかしたる樣にて座へ歸るべし。

一一段三足のこと。まり數一段三足づゝ也。請とり一足。自分に一足。人にわたす一足是也。されども思ふやうにならねば別なり。また態一足にて人にわたす事もあり。三足より多ける事は。木のしたまたはかん所にて。

鞠をけなをして人にわたさんと也。三足以後のまり。人のこひけんとするをしたひて蹴ことひがごと也。

一木の外のまりかゝりより出てのかたき鞠。えだにつきて出るは木の隙より入べし。鞠をさき立て身を後にする也。但身をさき立て心を殘す事。上手のわざ也。

一鞠を請聲のしな。自分にこふ聲。たかくあがり。ゆるゝ落ときは。聲を引長くこふ。ひきく付て俄に來には。きり聲にてこふ也。人とあらそふとき。人も我ももろごゑに請時は重請に有興に乘じてつらねこひあり。梢に留る鞠をあふぎてこひ。むなしく地に落るまりをおしみて猶こふ事あり。人により樣によるべし。

一數鞠の事。勝負にもたゞもける事あり。其け樣鞠たけをつめて引ぐすべし。足數をそんじ樹えだにかけざる樣にける也。足をば少高くすべし。鞠よはくせん爲也。

一鞠とやなひ箱又物のふたなどにすへて人渡事もあり。其ときは常の物を請とるやうに取也。物のふた共に受取べし。

一やなひ箱は柳の木を三角にけづり。紙よりにて十文字にあしに組付て用。ながさ一尺二寸なり。また六寸にも用也。廣さはすへ物の大小によりて也。木の數は五ッ七ッ九ッ十一半に用る。鞠にかぎらず用也。

一まりのとき。ゑぼしかけをつよくすべし。むらさきのかけは。ゆるしなきにはかけず。位有常は白かけ也。武士のゑぼしかけはかはる事なし。葛ばかま着せぬ人は。すほうの下着し。もゝたちとる時。内より紙を丸めても。石をはさみてもよし。

一かゝりへ鞠打入る事常の事也。或は簾の中

よりも。或は縁よりも。軒の向ひ木の間より
も。人數座に着せざる以前。庭のまん中に
て。とり皮の上になる様に打入也。まとをく
鞠落。暮になせたるに持て行ば。遲しとおも
ふときに。上鞠すべき人のかたへ打入也。貴
人のそばへおとしたるを。貴人とりて上鞠
にせよとて。ころばし入らるゝ事もあり。

一寺などにてかゝりなき庭にてまりあらば。
かゝりのあるときのごとくたつ也。

一常に延はつゞけて延をいふ也。

一鞠にまいりあふ事。鞠に目をはなさず。まり
の落左〔マヽ〕ま井りあひ候と同程にあるべし。ま
り色によりゆうにもきうにもまいる也。

一鞠右のかたへゆくとき左へまいり。左の方
へ行ば右の方へまはりてけるを。鞠にもむ
きて逢といへり。鞠の行ごとくに向候へば。
大木なみ木にへだてられ候によりて。そむ
きて逢と也。

一しりおとりといふ足は。木の根高所。或は石
さしの上など落時は。まりを地に落しつけ。
一ッおどらかしてける也。

一木をふむ足といふは。鞠木をすりて落ると
き。そのしたに足を木にすけてはねべし。

一うつぼながし。鞠のまへいかにもすぐにけ
上て。むねよりけるなり。おのづから來るま
りけてよし。

一とんぼうがへりと云足。堀などの上へまり
行とき。中にて其まゝ後さまに歸るあし也。
成通卿より外ける人なし。

一座に着たるとき來るまりをば必けべし。但
聲をばかけまじき也。一足にてけ出べし。そ
れも心にまかせずば。二三足にてもかゝり
の内へけ入なり。扇持ながら也。

一貴人の御体のときも。御立のときも。鞠をけ

ずして御けしきをみて可然也。
一簾中に貴人又は女房など御座のとき。みすに鞠あたるを。内よりみすを扇などにてうたるゝ事有之。けよとのことなり。けしくべし。
一貴人にけ渡。また請取時は。いく度もけしくべし。但こゝろにまかせざれば。けしかぬもちからに不及候也。
一座して居前へころび來る鞠をば。持たる扇にておし出すべし。けよとの心也。されどもけまじき也。人によるべし。手にてはいろふまじき也。
一扇をひらきつかふべからず。但人數によりつかひてもくるしからず。三間ほどひらきて。前にて少つかふべし。
一軒まりを初てけるをば沓おりと云。沓おろしなり。

一鞠の時庭にて茶まいるとき。貴人の座に御座候はゞ。それへ持てまいる也。かゝりに立て御座のとき。御圓座のきはまでもちて參て可待也。平人は茶どものむ事あるまじき也。ほしきときは立て門外にて含(呑歟)べし。また持て參るをも。塀中門の内のきわにて畏待べし。のむ人はそこまでゆきて含(呑歟)べし。何も趣によるべし。
一あひをひと又二本立の木の事。あひをひはねより二本立るを云也。二本たちとは地上にて二本立をいふ也。
一一足をけるとは。常に曲あしと云を申也。初心の人はけまじき也。
一かゝりうへ様の事。木は安宅ののき。かゝりは鎮宅の方也。南向の庭を專とす。しかれども東西北のかゝりまた常の事也。また南向のごとくに。軒の左に櫻。右に松を植。南向

の分に用事他流に有之。當流は只方角を本に可用也。

一懸の木之事。式々のかゝりとは櫻柳楓松なり。式木不足して同木二本植て不苦。又雜木をうへまずる事先例是あり。雜木には椋榎柳檜也。代の植樣定なり。

一木の高さは一丈六尺ばかり。但不定。木年〳〵大になるもの也。切立は松三本。柳一本。または柳三本。松一本。何も可然。二づゝも子細なし。雜木を栗の花時分に立なり。本をそぎ合。かすがひにて付る也。一所にあひをひのごとくに立也。竹をも可立也。高さ木も竹も一丈五尺也。竹の末をきりて立事本なり。自然またきらで立事も有之。

一えだにかゝりたるまり。我領分へ枝を分て來らば。必聲にてける也。またけはなすまり。えだにあたりてもどるは我鞠也。

一疊數たるとき扇疊紙置事。たゝみの上の後の方に可置也。

蹴鞠之終五十七ヶ條。

蹴鞠三流通抄　第九

一蹴鞠の簡要といつは是にすぐべからず。定足は初心にかへるべし。たけ候心もち候て。よろしき事不可有候。心付にしたがつて大せつと可心得。たやすく思ひなし。案のうちに心得候へば。鞠必あまるべし。定足のたしなみ朝夕無油斷。鞠を忘て稽古をおもふべし。足踏なども領人目にたち。かど〳〵敷はよろしからず。唯何となくゆたかなるよしとせり。

一初心の心得。定足とはうら白と可心得。蹴鞠の御人數。蹴て〔マヽ〕ても候へ。人を日の下にみて。心をゆるやかに持て庭に立べし。あひて

其外をかうちやうに思ひなし候はゞ。肖徒まり他立ゆるやか成べからず。心をば廣持。庭をばせばしと心得べし。定足も初心も庭をば此兩條を以可則。

一立やうの事。前よりみれば〔之歟〕けりたるやうに。後よりみればたをやか成事本とせり。そりけるは鞠にあふ事とをしとて嫌候。またうつむきたるは。まり當り候へ共。ゆゝしからず候とて嫌候。唯すなほにちと〔マヽ〕腰すへて立べし。背をいだす事つよく　よはくつよく可心得。只一すじにあてがひ候はゞ。まりにつまるべき也。ゆるやかなる事肝要なり。

一鞠をみる事。あをのかずうつむかず。ゆるまずおどろかず。かほにて見べからす。目にてみるべし。第一木の下軒のしたにてふりあほのきてみる事不可叶。木葉また〔マヽ〕　のほとりなど目に入べし。其日のしつ也。またあをのきてみるまりは。みをとさずしてかなはねば。かほもちゆるやかならずして。身なり立やうまでのさはり也。定足初心にも朝夕可心懸也。

一は地のかた地といふ事。右とは曲也。地とは地たちの事也。地鞠思はしく候とても。曲たひがひ成を。右のけてといつるなり。地を蹴てと云事。地鞠大概無相違候得ども。曲にうときけてを地のけていへる也。地鞠も曲も無相違事を天地和合といへる事。鞠筋をみて沓なをす事。是沓は目にあると也。また目は沓に有といふ事。是は沓の上より日付所をしる也。是目は沓にありと。兩條不安候間。委敷事は口傳〔マヽ〕。目をば天といひ。沓をば地といへり。沓かうとしといへども。めをそふして不叶。鞠にはやく見つき候はゞ。沓の上

たゞ〳〵しくて不叶候。目と沓と相應なる事。天地和合是なり。初心は是のみ事とすべし。

一鏡のまりといふ事。鏡に向て顔をみるごとく也。鞠に向て形をみべし。鞠向へきれ候はゞ。立やうそりたりと心得。やがて立やうかへ。こしをすへ立べし。

一鞠或むね或かほなどにあたり候はゞ。立やううつむ〔衍歟〕つむきたりと可心得。腰おれたりと心へ。立やうをかへ。手持に心有て。ちとそる心にたつべし。

一鞠左へきれ候はゞ。下足のつまさき左へ向と可心得。また沓のうちかどにあたると心得べし。右へきれば。下足の爪さき必右へむくと心得べし。さなくしてきれ候はゞ。沓の外かどへあたりたると心得べし。左右へきれ候はゞ。鞠此兩條に不可過候。

一身にちかくすなをに鞠あがり候はゞ。立やうを忘る事不可有之候。萬惡き事をのけ。よき事をもとむる事。初心も定足も朝夕心得。けいことといつは是に過べからず。たゞかひ〳〵しく嗜なくして蹴候はん事。以後のけいこのさはり也。稽古なしとも。かたきなどみる事第一也。

一三段のゆひめといへる事。うへのゆひめかみをゆふ事也。中のゆひめ帯上下きる事。下のゆひめくゝりいふ事。是三段也。かみつめてゆふ事。必かほにくせ可有之候。惣而鞠をける事。ゑぼしをきてまりをける事本也。かみをいりてゆふ事ゑぼし體也。去間鞠けるとき。けりにて蹴べからず。もとゆひをゆる〳〵とかけ。おりかへしてゆふべき也。かみをつめて結べからず。

一上下をきる事。先下衣をに〔い歟〕かにもゆる〳〵

と同前。後をもうしろこしにてちとしめべし。帯をつめてゆひ候へば。必すこしおれうつむく也。常に鞠かほにあたるべし。上下の大事是也。

一したの結めくゝりゆふ事也。つめて結候得ば。まり左右へきれ候。とくる事なきやうに候はゞ。いかやうにもゆる／＼とゆふ也。三段共につまり候得ば必くせあるべし。何もゆるやかに三段和合にいふべし。

一つはさみと云事初心の専也。はかまなく候はゞ。足たゞしからず。切々つまづくべし。紙をまろめて。ゆひめのしたよりはかまを引あげて。上下の帯の間に入べし。さなくしてつはさみと云事不可有之。いかにもはかまながくとも。もゝたち其外取事嫌候て。もちを本と心へ候へばとて。はかまとる事有まじく候。

一十心といふ事。庭につき候より。まづかこひの樣體を見合。鞠蹴べきやうをよく／＼見べし。是かこひのこゝろ持をしる也。また立べき木のえだ葉さし出。こはきえだなどあるべき皮えだにあたり候鞠をば。いかやうにあてがひ候はんと。木の心をしる事是也。また鞠心智（知識）事。また七人のあひて。序のときは心しられず候とも。破のときはいづれのまりはいづかたへきれ候とも。七人のかたき心をしる事是十心也。かれらをよくあきらめ候へば。一入まりのくつろぎ也。よく／＼可心得。

一四節によつて庭に可立。春秋は北南可立。夏冬は西東に可立。是かぜを靜るなり。たとへ目にみえず候とも。春は東風。秋は西風と吹也。去ほどに春秋は西東に不可立。夏は南。冬は北風に向て不可立。鞠多くそんずべし。

其をいとひてかぜ上に立事不可有。もつぱらまりにあふとまれなるべし。常鞠は西東に立事。かぜをそばめる心也。常に沓をかぜにむかはせでをく心にけべし。足かぜをもらさゞる心もち也。庭につき候とき。此心もち第一とすべし。

一風上に立候心持。何よりも心をすへ。いかにもまりつまさきをそひしてけるふる心に蹴べし。まり身にちかくあがり。かぜにさそはれて。あひてのかたへよきほどに出べし。このこゝろもちにてかぜのおもてに立べし。

一風下に立候事。惣てそりて立候事嫌候得ども。〔マヽ〕風下に立ときはそりて立べし。鞠常に向へ　出べし。かぜに出合によつて。其まりあひてのかたへよきほどに出べし。又かぜ下へすゝませて。風にむかはせる心にもけべし。是はよく〳〵口傳可有之。

一日にむかひ候事。是も風下同意也。目をそばめ沓を日にむかはせ。鞠をせく心に蹴べし。沓の上を本とすべし。鞠ばかりはやくみてそばたつべし。日にむかひ候て。必其まり何ときも右へも左へも沓をせく事第一也。

一網ぎはかこひにたかくつれてあがり候。鞠不安ふりもなく立て落し候事。鞠との外かひなく見候べし。よく〳〵見合て。立のくやうに見しりぞきて。むきなをりてあふべし。あまり候者。曲のうへにて落したるはくるしからず。初しんも定足も此心もち朝夕に候者。かこひぎはあまるべからず候。

一そりてける大に〔マヽ〕きらひ候。左者折節によるべし。あひてのこを詰。かぜにむかふとき。ちとそりてけ候へば。必鞠とをく出るべし。此外そりて遣候事このむべからず。

一ひく沓に大に嫌候。左さかこひぎはうらね

る鞠にけこめば。こひあし定て是より外へけべからず。
一いそぐべしいそぐべからずといふ事。心をいそぎ身を急ぐべからず。人のけ候ときは。沓の上より鞠にみつき候事。朝夕にかけ候者。是にすぐべからず。
一鞠すじを知事。正分次分をよく〳〵心得べし。木をもつて分すくなし。木なくて分おほしといへる事口傳。
一たかくばかろく。ひきゝはおもくといへる事。鞠たけたかく候はゞ。さのみ沓下あらくふまぬ事也。つまさきをたてゝ待べし。
一ひきゝはまりには下足おもかるべし。和合のくつの心にけ候者。地たちつよかるべし。ひきく候鞠につまらぬ也。心がくべし。
一和合の沓といへる事。まりをけすてたるしたあしをつまさきにかゝり。左の沓をうけてまつべし。鞠またるとき沓をふみ候へば。鞠にあふべし。是和合の沓といふ。
一左足つめといへる事。鞠をけ捨候下足のつまさきにかけ。前へ左の沓をすゝまする也。鞠いかやうにきたり候とも。少も驚くべからず。まりを忘(志歟)て稽古を思へといへる事。此しめしを以てあきらむべし。朝夕心がけ候はゞ。第一まりゆゝしかるべし。初心も定足も不可過之候。
一地分の沓自分の沓といへる事。庭へつき候者。自分の時は鞠をけかふる心もち是也。他分のときは沓をふりつめにけわたす也。是をいへり。此心もちを以鞠すじ知也。
一ちかくは遠く。とほくはちかくといへる事。かこひぎはの大事也。鞠かこひにちかく候者けつけ候とを。ちかくはとをくといへり。遠くはちかくといふ事。かこひに遠く候は

ど。沓のうへをたしかに身をそへてけ渡して有之候。遠くはちかく。ちかくは遠くとしめす也。

一三段のつめひらきといへる事。立様身なりの大事。序の時は開の身とて。常よりもそる心にて。ありのまゝにあてがふべし。破のときはちと腰をすへ身をつむゑにてあてがふべし。詰のつめとて。いかにも腰〔マヽ〕蹴候へば。たとへ身に付候まりなりとも。すへ沓をすゝませけわたす事。つめのつめとへり。秘事也。

一つめの詰。ひらきの開と云事。詰開の大事也。詰にあらず開にあらずといへり。秘事也。

一すつべしすつべからずといふ事。よろしきまりなどをけ候得者。たとひ身に付るまりなりとも。惣じてあしきまりなどるける折ふしは。まり色をけなをし渡すべし。

一鞠をけ候とき。留メたき客人候はゞ。渡候とき人の方をみ合て。帰あしをけて。其儘庭分石の上に置。我木に帰一禮して罷可出也。其ときよろこび候やうを顯し。其日は留り候はて叶まじく候。

一忘ても庭分いしを踏ぬ事也。若ふみ候へばとなふる文あり。鞠の大事にしるす也。さなき人は沓ちがひの座替といふ曲あり。庭分石を延〔越歟〕を候へば。鞠にとりあひ候はゞ。合てまた延べし。たがひに手をとりちがへて立所を替也。不安曲也。口傳。

一初心のほど沓身なりたしなむべからず。あたるを本とすべし。鞠たんれんによつて。上手か蹴手歟相手たるべし。めづらしからぬ詞ながら。たんれんの二字おもつてとすべし。

一百度のけいこをたんといひ。千度の學をれんと云々。

蹴鞠之終三十五ヶ條。

十

一綱ノ事。天下治國をしづむる事にかたどる子細有之。尤目出義〔變說歟〕也。板屋には軒の上にもはる。辻〔築地歟〕の上。塀上。軒下。何かたにもはる。糸藍染なり。目は四寸。繩ならば五寸にすく也。

一蹴足高かるべからず。沓下の拍子を本に心がけぬれば。おのづから足のひきくなる也。寸法不及定。

一足をあぐるは。爪先よりあげて力を入。又□□をおし入てよし。

一鞠をける〳〵後へしざり。また人けかくるに。後へしざりてける。殊更惡き也。身にかゝらば奥あしのまうけたるべき也。又後へこさば籠てけべき理なり。

一沓をまさごにさらり〳〵と音のたかく引する事あしき也。只足をかろく。沓下をきびすよりふみ落してよし。

一鞠たとひきるゝとも。手にてさへかくしてけべからず也。

一垣をこしたる鞠をば。外よりなげこす事はひきゝ垣の事也。本式の鞠垣を自然けこさば。もちてゆきころばし入也。またはしたにすき間あらば打入べき也。

一籠足の事。右のうしろに落ば左へかへり。左の後に落ば右に歸りてけべき也。おのづから前にをつるを。かへりてける事。其謂なき事也。

一鞠の扇の事。當流は八ほねなり。ねこまも惣のほねも常の扇より大也。くろ染にぬる也。

繪は家の紋をかく也。

一樹を植歌

うづみおく土は草木のいのちにてうごかすかぜや心なるらん

此歌をかきてえだにゆひ付おく也。

一野伏之事。立人のぶしといふは。五本かゝりにして。まちかゝりとて植。其木を後になして立。色け曲足をつくしてける也。八人は伏ふしにけ渡しける也。野伏よりは鞠くばりを專とする也。こひ聲なし。いかにも／＼堪能達者の所作也。また立木野伏といふは。立所は或は年禮いひさして木の大に成。いかにもけにくきなどには。其木の外五尺計後に立也。また其領にも立木のせいにも可隨也。或は幼年の足本不定に。〔足[illegible]〕其後に立事。是も五尺ばかり也。とかくかゝりの外のかたに可立也。野ぶしの人木より内にいらず。殊上鞠せず。外へきるゝ鞠を内へけ入て。たすけん爲ばかりの人の數なれば。尤堪能の衆の態也。必貴人も人の催促に可隨也。

一神祇の鞠の事

上鞠のあし。踏出す五足。あとへ三足。扨まり構にして掌を合。觀念をなして。一丈五尺に鞠長をけ上て。未落間に我木の本へうしろさまにはやく歸り。扨便宜の人鞠を取。八にけわたすなり。神前へ向て足を不上。いさゝかふみちがへける也。上まりの人兩膝を付也。三曲の外さのみくるひ鞠などはけべからず。請聲なし。又社のかゝりなりとも。法樂ならずば請聲もあり。上鞠も不定。猶口傳有之。

一私宅にて神祇の鞠をける事。塀中門にしめをはり。のきに棚を二重まうけてしめを引。上の棚には五色の幣帛を立。供具を備。下の

棚には鞠を置て。扨ける人數は三日以前より精進をすべし。鞠あしの人埒中門をいるときに。祓の役人有之。一尺二寸の幣にて祓也。蹴ての人數は埒中門を入時に此哥を唱也。

ちはやふる神のいかきは我なれや出入いきは外宮内宮

夫より圓座に着す。人數悉如斯有之。上座より次第に。棚に有幣を取。二度拜す。扨此哥を唱。

般若經吾ガ心ヨリ成業ナ何神カ餘所ニ見ルベキ。

二返よみて二度拜して圓座へ歸る。けやうは右の注するごとく也。鞠蹴みちて圓座に歸り。また神をくわんぢやう申。棚に向て幣を取。如前に拜して着座して退出す。

一拂前のまりの事

上鞠兩狭をつきて鞠を取。左の手をいさゝかそへて諸手にて持。後へ三歩しりぞき。扨鞠かまへに左足をなをし。無念無相にして諸手にて落かけて。三足け上て。落ぬさきに後さまに本の立どへかへりて。鞠落ば八人ながら袖をかき合てちと禮あるべし。其後たれなりとも。深足の人鞠をとり。常の上鞠にしてをの〳〵けべし。

一七夕の鞠の事。鞠を付えだは梶也。七度の上鞠のときは。上座よりしだいに手向也。とをくまり落行ば。上鞠したる人の本の所へ打入也。上鞠一人のときは。七足け上て落て。其以後常のごとく各けべし。獨の上鞠のときは。八人かゝりにたち終ての事也。

一座さまさきの鞠の事

三八の人數にて。上衆よりしだいに立かわり〳〵日暮までける事也。

一三時の鞠の事。朝は辰のとき序の鞠也。ひる

は午剋破のまり也。夕は申剋急の鞠也。かうはん置て時を可知也。休間哥また色〳〵のあそび可有。

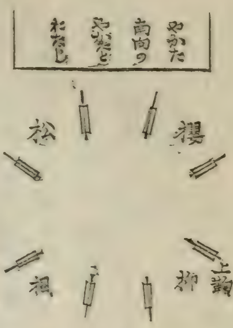
一老若の鞠。卅より上は老たると定。そめ(れ歟)より下を若に定。二八にて老若あらそひてける也。

一勝負の鞠の事

上鞠五度とも十度とも兼契約して數を付る也。二八の人數たらば二度。三八の人數たらば三度に分べし。鬮にても分べし。又其中にけてある人々を。或は左右。或は初中後。或は一二三に分て定る事もあり。紙を横に折て。勝負數まりの事とかきて。またちと引さげて一共左共初共。扨あげまり十度共十五度共。如ニ契約ニに最初の上まりより付もて行て。其期に終上鞠のとき。此度に及と人數のまゝ(マヽ)やうに書て付る也。鞠終て日記の以上をかぞへ合て。過上たるを勝とする也。此鞠には土に落たるをけず。軒木などにかゝりたるをばけるべきと。兼て人數の中に申定ては可蹴也。土に落たるまりの事は。いさゝかもけべからず。但土に落たるをけかへすやうあり。よくければ數にも入也。落と同じ。ありとこひて則あがれば數とす。すくひあしくば上鞠になるべし。土に落す事堅制之。さる故此まりけいこの最上也。尤細々可有興行事也。みすに當まりのときはけべし。貴人御ざあるともくるしからず。

一扇鬮の鞠の事

上より次第に八人の扇を物のふたにうけて。軒の向ひのかゝりの間にて畏三度。扇をまぜて木の本に歸りて置。次第繪に有之。



貴人よりかゝりへたちて扇をさす。口傳しやう〳〵。さしかたな。さしやなぐひ。法中は懐中する也。かゝりの上下なしに。我扇ある所へ行可立也。

一軍陣の鞠の事

座に花敷を敷事如常。緒のかたを後へなして。もの[毛歟]かたを地へなし。後を少上へ折返して敷也。皮ならば毛のかたを上へなす也。白も座下のかなへ可成也。かゝりによりてひざを不付。酌とりも同前也。盃一あらば取渡し〳〵呑也。東のかたに一本かゝりを切立にして取まはし。數人不足にける也。鞠のときにかぎりて。東のかたは[マヽ]る方に用也。子細有之。

一ちうゐんの鞠の事

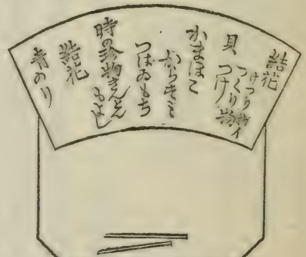
鞠の人數みな色をきてける。まりの取皮なし。たゞのときかりそめにも取皮なき鞠けぬ事也。かた穴はふすべ皮またくろ皮にてぬふべし。上鞠は佛前の如し。聲をばおうのこゑよりこひはじむる也。

一鞠の庭へ破子出事

人數の前に悉出てすゆる也。扇のなり又はすはまかたなどに。だいを色〳〵にして。足を高く付。いろ〳〵に繪かき色どり。中には種々の物をつみ。きんとんなどをつみ。餝花結び松などのもとには青のりをちらし。はくにて露をおき。座敷へ出に替事なし。また足付にあふぎの破籠をのせても出す。はし

は足付に置也。ちやうしをばひざをくみながらはしを取。きんとんを一いろくひ。驗而はしを置也。盃を人の前に引也。扨さけをのむとき。右の手かた〳〵にて盃をとり呑也。三ばいより外は不可呑。目禮一禮也。座しきのやうに禮をふかくあるべからず。庭の置物には折にかうたてをして。まんぢうをつみ出。又魚類にて六角につみて。まんぢうにつかはせて上座に置也。酌はひざを不可着。くわへは貴人の御前にてくわへべし。末座は酒のつくるとき計くわへて。木ちかくかへらぬ事也。酒は三返なり。ときによりてたゞ一返よし。鞠一だんすぎて出なり。かよふの人破籠可上。

大かた如此。いづれも肴は時の珍物を調出べき也。必晴のにはは出る者也。はしは足付に置也。



一鞠の庭にて酒あるとき。さかなに雪を硯のふたに入て。春物なんどには取出す事もあり。

一鞠場へ可出物之事。あまのり。たゝみ。つばゐもち。是は椿の葉につくりてのするもち也。をもゆつけかわらけに入て出す也。常のゆつけもよし。其後は何かと出しても不苦。

一鞠の庭へ柿ひたしを取出す事

春夏の鞠の時に。へいしに柿ひたしを入て。口をつゝみて出す事秘事也〳〵。其つゝみやうは。へいしに柿ひたしを入て。紙のはし兩方を下へなす。酒をへいしに入て出時は。包み帋の兩方のはしを上へそらする也。男てう女てうにかたどる也。是秘事也。また柿ひたしと酒とをへいしに入。かた〳〵づゝ出事もあり。つゝみやうにて柿ひたしと酒とを心へ分べし。柿ひたし。酒さかな。盃をからびつのふたに入て。塀重門の内へかき出す也。それより盃を壹ッづゝ人前に引。扨柿を一盃に入て引。其後へいしの柿ひたしをてうしに入て出す。次に梅ぼうし黒鹽を入。さんばうにつみて出して。其後色々のさかなを出すべき也。

一柿ひたしを鞠の庭にて呑事

右の手かた〳〵にて盃をとりて。左の手をばいさゝかもそへずして。貴人の御下ため呑ごくに。右の手かた〳〵成べし。一はい呑人はうけたる柿ひたしばかりを呑て。盃に有柿をばとりてかげへすつる。二盃のむ人は。一はいの後にすつ。三ばいのむ人は其後すつ。三ばいより外は不可呑候。昔爲雅卿の時。人數八人にてまりの會有しとき。柿ひたしを呑に。彼道をしりたる人三人あり。殘りはのむ道をしらで失面目也。柿ひたしと酒と出す時は。柿ひたしよりすゝめて。酒は後に呑也。大成秘事也〳〵。他人に不可有相傳者也。

一柿ひたし拵事

串柿をきざみ摺て水を入て。布にてこして。すみたる酒を水と等分に入て用也。古酒ならば水を三分一可入也。

一柿ひたしからびつのふたにすへていだす事



梅ぼしくろ鹽かはらけに入。ふたをして。角ちがへておく也。盃をあまた重ておく也。

一柿ひたし飛鳥井流には絶也。柿ひたしをかもにはしるべきとて。有とき飛鳥井中納言雅安卿貞久に尋參らるゝといへども不申。よく／＼心得て可置也。晴の鞠のとき可出なり。

［頭書］宗直考ニ。貞久社務森神主ニ正四位上益久男。文明十五年十二月十日叙正四位上。長享二年三月朔日叙從三位。

極意集終九拾五ケ條。

右依御所望相傳仕候訖。永爾不可有御他見者也。

十卷之外

鞠當位即妙表德之事



一因三觀果三身ト尺ス。凡衆生ハ一心ニ空假中三觀明了ナルヿチ不レ知迷レ之故ニ。三界流轉シ苦域沉輪ス。然今此見レ鞠。中ノ虛ナレバ虛空佛性トテ。我等ガ一心本源也。心本源ナレバ无色无形。非レ長非レ短。如ニ虛空一同ニ法界一正ク。如シ鞠中又如ニ此空ナル物一ト言トスレバ。而一切萬法周備。森羅萬像歷々タル假體ナリ。忽有リト言トスレバ。万法悉ク皈レ空ニ无ニ一物一。所詮空モ假ニ中道實相眞如ナリ。サレバ佛身法身猶如ニ虛空一ノ眼チ打開レバ。空觀果德顯ニ報身佛一。假觀用ハ顯ニ應神佛一。中道果德ハ成ニ法身如來一ト。緃是權門ノ心。似ニタリ圓頓實教ノ心一。三諦一體。

非三非ナレバ一。三身即一佛性。一鞠ノ上見顯タル。柳ハ綠花紅ニメ。已々分々。一トメ。无シ下爲レタル漏ニレ法性ノ物上。是即鞠ノ當位即妙ノ心歟。猶更ニ可レ問レ之。

一鞠ノ庭寸法七間餘ノ表德之事。佛家ニ付テハ號ニ過去七佛道場ト一。神國ニ付テハ天神七代ノ形ニ取ル守護ニ。或鞠ニ付テハ猿ノ日ノ會日トメ翫レ之。故ニ猿ハ即一乘鎭護。山王七社ノ爲ニ法體ニ間。七社表賓前七間タルコト。代々口決タリ。七間餘ニ成ルコトハ世間ニ无ニ定相一。以ニ不定一爲レ定ト云ル深意有レ之故歟。勝云々。

一八本懸事。蜜教心ヲ以號ニ八大童子ト一。八大童子ト者矜伽維。二制多伽。三倶利伽羅。四ニ大龍童子。是ニ四天ヲ加テ八大童子ト云々。然則鞠ノ行者ヲバ即身ヲ不動明王ト觀ズル心有レ之。不動明王无レ有レ所レ居。但住ニ衆生一念心中ニ矣。思レ可レ之。一代聖教ノ心ニ付テ八本懸リヲ即八境界トス。教ニ約束スル時ハ號ニ八教一。八教トハ如ニ次手ニ。三藏教。阿含。通教。方等。別教。花嚴。般若。圓教。法花。涅槃。頓教。花嚴。漸教。阿含。方等。般若。不定教。約ニ衆生機ニ。秘密教。是亦約ニ衆生機ニ。已上八教。是ヲ庭上ニ莊嚴メ鞠ノ行者ノ一身即三身之佛陀ナリ。衆生爲メニ利益ニ流布ス。之言ル觀念有レ之云々。深旨有ニ口決ニ。更問レ之。

一三足事過現未之三也。（世歟）本法流轉還□□三ツ爲三身ノ表德。三寶ノ表示。轉ニメ三毒ニ顯ニ三身ニ。甚深沙汰有レ之云々。

一一切ノ諸道具。其外序破急表示。皆以非凡慮遊戲。月氏且我朝。其元由神明佛陀ノ內證ヨリ事起。故四智。五智。六佛。七佛。三身。三千三觀。八教。此等之深旨ヲ含メリ。懸聲ノ三聲。阿梨ヤ應ノ口傳。サル事アリト可レ得レ意。故ニ上始ニ一人ノ天帝ヲ一。下至ニ萬人地民ニ。翫レ之賞レ之。

廻ニ佛神ハ守護ニ。惡魔ハ退ニク遠方ニ。最此謂歟。
般若經吾ガ心ヨリ成ス業チ何レノ神カ余所ニ見ルベキ。

大日經云。

我本无有言。但爲利益說矣。

拜上

私云。
天竺靈山ニテハ金毘羅神トテ猿ノ形ニテ佛ノ說會チ守護シ。大唐ニテハ天台山ノ麓號ニ神僧ニ。智者大師法花經會座ヌ守護。於ニ我朝ニ者比叡山麓ニ號ニ山王ニ。一乘御法チ守護シ玉フ。三國共ニ佛法ノ流布ハ猿ノ形ニテ守護シ玉フト見タリ。殊更日本神國申日チ會日ト定而鞠チ用事。最神慮之內證ニモ相叶者歟。申チ示ノ神トスト言ル意。尤其由在ル者歟。

蹴鞠條々

夫蹴鞠は皇帝蚩尤が亂を平げ。天竺大唐我朝三國之翫好家の式也。先第一天下を治。國をしづめ。神慮に叶子細あり。又皇帝此道を作りて武を陳ず。天地人をかたどり。則鞠は日月を表す子細あり。我朝翫事天智天皇の御時也。さて後鳥羽院の御とき。雅經卿撰レ之直レ之。子細有レ之。其時分迄は家々兄弟難波兩流なりしが。得ニ勅意ニ道をきはむる事也。しかれば八境兩分定し口舌相乘之事專一也。

• また君臣合體之道といへり。君も人も袖をふるゝ也。第一敵を平げまた身を安くす。葵藿の日にむかふが如し。精大明神と申也。長久の術。又鴨之水の上にうかぶがごくといへり。かつをむしの水の上に往返するが如しといへり。猶口傳かんようたりといへり。

一庭作の事

鞠庭の事。ひろさ家により所に隨べし。先高

下なく平地なるべし。かたき悪し。石なきをよしとす。もとの土わろくば取のけ。能つちを砂にまぜて置べし。惣別土をふるふこと可然。砂一度ふかく置ぬれば沓入てわろし。すくなくなる時。置そへたるが可レ然也。庭を作りおほせて樹をうふれば庭そんずる也。まづ樹をうへてしかるべし。また口傳あり。

一懸の樹の事

式の樹といふは。櫻。柳。蛙手。松也。又雜木をも植ことあり。榎。椋。柿。常の事也。賞翫の木には梅也。

一懸の植やうの事

木は安宅術。懸は鎮屋の方也。南向の庭をもてもつぱらとす。しかれども東西北等のかゝりに。軒の左に櫻。右に松を植ることあり。當家の秘說なり。師匠の許なき人不レ可レ植。常の木は南角を本に植べき也。

蛙手　松
柳　櫻
南　蛙手柳　松櫻　虚　蛙手柳　松櫻
蛙手　松
柳　櫻

軒と木との間一丈四尺三寸ばかり。母屋の柱よりの事也。ひさしあらば。緣よりひろさをくはゑて丈數をうつべし。

木と木との間は二丈ばかりしかるべし。猶ひろく植たからむには。二丈一尺二尺にも植べし。又にはせばからん所には。一丈六尺七尺八尺九尺にも植べし。又口傳あり。

一切立の事

御厨子所預

享保十六年九月晦日　釆女正紀宗直

宗直云。

難波宗建卿ニ相尋之處。松下掃部助敎久作云々。寛永八年九月作之云々。

右宗直朝臣本令借得書寫訖。

安永三年二月　大和守大伴積興

〔右蹴鞠九十九ヶ條以野宮家本(外題松下十卷抄)校合〕

續群書類從卷第五百四十

總檢校保己一集
男源忠寶校

蹴鞠部五

松下十卷抄

蹴鞠條々

懸の樹事

式の懸とは櫻柳楓松也。此木不足して二本うふる事くるしからず。又雜木をも師のゆるしを蒙る人植ますべし。雜木には椿榎椋柹これ植べし。椿。櫻の所。榎。柳の所。椋。同前。柹。楓の所。なるべし。

懸植事（安宅素）

木は宅宅の術。懸は鎭屋の方也。何方にても櫻。うしとら。柳。たつみ。楓。ひつじさる。松。いぬい。なるべし。軒と木との間二丈なるべし。庭せばき所ならば。一尺ばかり二丈のうちへもつゝむべし。しからば軒と木との間も一尺斗つゝむべし。㝡下の枝は地より六尺五寸ばかり有べし。高さこずゑへまで一丈五尺斗可然也。但うへて後年〳〵高くなれば。一丈七八尺まではくるしからず。猶高くなれば梢をつゝむ。㝡下の枝はわきへむくべし。兩方のつぎにありてよし。むかいつめのかたにあふ事わろし。惣而枝のかすることなし。鞠さはりて見苦數枝などつめ候べし。本木を見きる枝

など。つねに有ごとくつめ候べし。

切立の事

松三本柳一本。又は二本づゝも子細なし。又竹をも立とすべし。丈數はうへ木におなじ。又竹はすへをふしのきわより切也。地より梢まで一丈五尺なり。竹は四本四所にも立る也。冣下の枝も木におなじ。木のときは四本。同木はわろし。竹の時は四本ばかりよし。末を切事ことなる儀なし。ふしのきわより切まで也。

一段の事

三足づゝけて人にわたさむ事也。これ一段也。されど四足五足をける事は。鞠色よくけなして。人にゆづらんとてける也。又一足にても人にわたす事は。或はけがたき所をもけいだし。木の外の鞠などは。わざと一足にても人にわたすべし。三足の後人こはん鞠を。なをしたひける事有べからず。けがたき所。軒の下。かきのきわなど。惣而懸の外の鞠など。上手にて有とも。一足又は二足□□にてけわたすべし。

三段の事

序破急の三段有べし。鞠始まる時は序分也。鞠長の鞠をけて。のびらかにのどやかにけ付すべし。破分は中ほどのけやうなり。鞠長に甲乙あひまぜて。高さとひきゝとを同じほどにけて。時々曲をもけるなり。急は晩景のけやうなり。ひきゝをけて。鞠たけの鞠を少々ける也。曲をもけ數をもはげみ。忠をつくし興をもよふし。いかにもにぎやかにけなすべし。

鞠長の事

一丈五尺なり。それより高くける事詮なし。

綱事

便宜にしたがひて。何方にもかくべし。苧を縄にして。あいにそめても用る也。又わらはも外にかくるはくるしからず。目のひろさ四寸也。高さ地より一丈六尺也。目の寸高さの尺まで也。ことなる儀なし。かけやうなど人のこのみたるべし。

鞠垣の事

高さ網におなじ。ふちのあはひも四寸也。立竹のあはひも四寸。方四寸たるべし。ふちの數なし。いかほども結次第たるべし。家のやねなどのあはひゆひきる事。此ごとくたるべし。家のなりにつれべし。地よりあとへつるかきは。所ともなるはわろし。いかにもすくなくがよし。

あしつゝむ事

紙壹枚をふたつに折候て。又よこさまにおり。大ゆびのうへのそばよりほかさまにまき。又上にてまきとゞめ。紙あまり候はゞ。うちへおり入て。かみよりにてふたまき〳〵。ゆびのうへにてまむすびに二ッむすび。一文字に切也。鞠はて候はゞ。いかにもこまかにきざみてすつべし。かみよりにて二まき巻。ゆびの上にて二ッむすびて切也。扨つゝみ紙のさきをおり返し一文字に切也。

鞠を庭に置事

先ふくらの方を上になし。兩の手にてかゝへ。中門より出て。軒のむかふより庭なかに持てより置時。左のひざ左手をつき。右の手にて取革をとり。よこさまにふくらの方を軒左右に成やうに。いかにもしづかに置て。左に歸るべし。又貴人など御座候いゞ。其御方を前になし歸るべし。鞠をかゝゆるは。人さしゆびと大ゆびにてとり革を取り。のこり三ッにてこしもとをかゝゆるやうにする

也。鞠はて候はゞ。いだしたる人取て歸るべし。まりいだす人は若輩の役たるべし。枝の時は替よろしく。鞠をかゝゆる様は。右の人さしゆびと大ゆびにて取革を取。殘三ッにて腰の本をかゝへ。左の手は左のこしのもとへそとそゆる也。

けあげする事

軒のむかふよりも又何方へも仕候。先大方は軒のむかふと心得べく候。其上下たる人の役也。各□〔空一〕につかれ候て。そのうちけあげつかまつるべき人さしよりて。左のひざ左の手をつき。右にて取革をとり。又兩の手にてかゝへ立て。そのむかふに目合。一足も立さらずけるとき。左をはなし。右にてあしにおとしかけてける也。所とも手にて上てける事有べからず。我がまへにかゝり候へば。何度も仕なほし候べく候。又木こしにてだにもなく候へば。我ともに五人にはつかまつるべく候。又貴人などにはつかまつりかけぬ事にて候間。其時のけあげはそばへ仕べく候。自然貴人御むかふにまいり候はんずる時は。此心得肝要也。能々分別たるべく候。難波にも鞠置もすぢかへに〔返點〕をけあげも後に立たる人するといへり。けあげをする事。我むかふの人さしあふ時は。むかふの木をあい懸り。又わが相懸りの人にて仕候。此外三人の木こしの人には仕まじく候。

一けあげを人よりけかけられ候はゞ。うけ取て一ッもおとさぬ事にて候。そのまゝけべし。殊其鞠をけあげ候人に。一足にて又けかへさぬ事にて候。

圓座しく事

其衆により候て。圓座多候はゞ兩人。すくなくば一人にて然るべく候。先鞠なきまへに。

庭の下のかたへ二所にかさねて置也。鞠有べきはじめに。鞠衆の分。かの兩人いでゝ。彼圓座をかゝへ。上座より一枚づゝうちをき〳〵敷也。間をさのみせばく候はぬやうに。よきほどにみはからひ敷べし。かさねたる圓座我下のかたへ置。一枚づゝとり〳〵敷也。又別にも敷やうあり。鞠衆十六人。又は十人十二三人もあらば。圓座二所に置。二人にて敷べし。八人計ならば一所に置。一人にて左右の間いづ方へも廣方へ敷べし。又別にも敷やう有之ば。先ならべて敷べし。一こしにさきさまに取こし〳〵敷也。ケ様に候へば。廣さざうさなくしかるゝ也。是はさのみこのみて敷まじく候。圓座の結の方後になすべし。

圓座敷べき所の事

軒の左右。能々軒の左右せばく候はゞ。何方へもひろき所を用る也。又貴人御本所など御座候はん時は。軒の左に疊一帖敷べし。貴人あそばされ候時。疊敷べきやう。軒の左の方にたてさまに敷べし。

圓座につく次第の事

先中門にて次第を定て一人づゝつく也。扇を左に持。軒のとをりにて一禮候て。又圓座のもとにて蹲踞して。上首の方へ一禮にて。軒にうしろをなさで。手をも上首の方をつきて圓座に居べし。何時も左の足を上にかさね候べし。圓座につく時。軒の通りの禮は。左の方に着座候はゞ。軒のとをりにては左の手をつくべし。ひざはつきつかずによし。是も左のひざたるべし。圓座のもとにては。右の手をつき。左の足ふみ出しなをるべし。右の方に着座候はゞ。軒のとをりにて。右の手をつき候也。右のひざつきつかずた

るべし。圓座のもとにて。左の手をつき。右の足をふみ出し直るべし。刀。扇。はなかみ取合たるを左に居候はゞ。右にてかゝへ。左の手を前より下さまに入てとり置べし也。右に居候はゞ。左にてかゝへ。手をさきより下さまに入て取。其まゝをく也。

刀たゝふがみ置事

扇を左に持ながら。右にてはなかみを取いだし。扇にかさね。左にて刀をぬき。はなかみにかさね。刀のさき軒にならぬやうに左に居て。我が左の方へつかの方を軒になし刀置也。軒のむかふに居候時も。大方其心得有べく候。

一かはりて圓座に付候ても。何時も扇を取て左に持て居べく候。あつく候はゞ。二三げんひろげてつかひ候べし。

一圓座に居候ても。鞠をちかゝり候はゞ。居ながら一足を立つゝ。一足も可仕候。

鞠ふみ候ての事

一其時いかにも靜に鞠を取。たゝきふくらめ候て。ころばかし出し候て。やがて座になをるべし。自然貴人などめし出され候はゞまいるべく候。可秘〳〵。

正二位

鞠條々

一鞠の庭をば當家には鞠庭と云。のゝ字をばいはぬなり。

一鞠を見物するに。我前にころびくるを。そのまゝにてをくもいかゞなれば。手にてはゆめ〳〵いろはで。左の手に持たる扇にておしやるが能候。扇にておしやるは。鞠衆かはりて座に有時も如斯し。又見物する人も如斯鞠衆ならば。おちかゝる鞠をば心蹴〔[illegible]〕べき也。ころびきたるを扇にておしやるべし。見

物衆ならば。鞠かきのうちをひ。かゝりそとに居て蹴べし。鞠かきの外ならば。取てころばかし可入なり。

一けて着座の事。公家武家ともにかはる事あり。公家には刀を御さしなく候間。扇を左にもち。たゝふがみを取出し（右は所によりて上首の方におく也）。扇の下にかさね。我が左の後の方の圓座の下に入て。扇のほねを我まへになすやうに是を置也。武家は刀をさす間。刀扇をはなかみに重ね。右の方におかるゝ也。刀のさきいさゝか我まへになるやうに置也。鞠けまじきと思ひ候へば。たゝふがみをおさめ刀をさす也。かまへて〳〵刀のさき貴人の方へならぬやうに置也。能々可心得もの也。出家は公家同前。公家に扇たゝふがみかさねて圓座の下におかるゝは。左の手にて右の方にさしこしてとりて。かた手にて圓座の下におかれ候也。武家には刀左座の衆はたに置也。

一立所の事能々分別たるべし。先圓座より次第に一人ヅヽ立候て。木には付候。其人々の位により圓座にも付候間。木に付候時も。圓座の上より被付候べし。又そのうち堪能の人又は貴人など御下知有べし。下知なくして付候時は。先其内宿前の人軒の左にも可付候。其次よりは先懸の間〳〵に立ふさぐべし。五人めより其心得可入候。又宿前被付候人のむかいつめ〳〵になるやうにも付候也。それは所々もとの依體可爲分別。又貴人などのむかひつめ。懸のきはゝ可斟酌。必堪能の人たるべく候。さりながら貴人などのしきりにまいり候へと被仰候はゞ。さのみは斟酌すまじく候。懸の度々に立ふさぐべしといふは。宿前の人軒に付候。其次より軒の向にてもあれ。又左右の間どなたへも先

一人ヅヽ付べし。軒に御付候て。其後の衆軒の左右軒のむかひつめいづれもあがりさがりなし。又軒の左右に着座の時。かゝりに付候事。一番に左の軒。二に右の軒。三に左の軒の木こし。四に右の軒の木こし。五に左の軒の木こしあひかゝり。六に右の軒の木こしのあいかゝり。七に右の軒のむかひつめ。八に左の軒のむかひつめ。此上有之貴人の向ひつめあひ懸り心得入べし。圓座一方にしきたる時も如斯心得べし。此立やう常によし。軒に付候はゞ。其次より間〳〵に一人づゝ立ふさぐもよし。

一懸の上下は先二人賞翫也。其内にもなを軒の左の人一の賞翫たるべし。されば貴人相懸軒より左の方しんしやくといへり。

一懸により畏は。木と我があひだ三尺計。いさゝか外かどに。懸の方のひざ。懸の方の手をつき候て可畏候。又貴人など相懸に御座候はゞ。其方のひざを可付候。難波にはいつも右の手ひざをつくといへり。

一懸に寢前も又いつも付候時は。一禮もせぬ事にて候。去ながら貴人など御座候御まへは一禮も有べし。

一外へおちたる鞠を取候て。懸のうちにころばかしいるゝ事有。若輩として行て懸へころばかし入たるを。いまだ人の取てけぬを。又よりて入たる同人取てけ上らるゝ事は不可然候。

一軒なき庭は松櫻上ると可心得。

一軒上候又とをらぬと言事。大方は如斯なれども。惣別は客人の亭主賞翫の心得にて。客人は軒をとをらず。亭主は軒をもとをりてもくるしからずといへり。

一貴人など其外の衆はや木につかれ候て。貴

人の木越にまいり候べし。あるに斟酌かと頻にと候はゞ。其時まいり候時は。貴人の御後をとをらぬ事にて候ほどに。其時は軒をとをり候ても不苦也。

一鞠の人數八人よりおふく候てかはる事あれ。そろはてはじめまじきか。されども自然或は七人或は六人などにてはじむる事あらば。其内の堪能の人などを二本の木の中に立てけべし。それも畏時は右の木のもとによりて可畏。六人懸にむかひ合候べく候。これ式々にはあるまじき事なれども。しぜんのために尋申て注し侍る也。六人にてけ候時は。軒に一人。軒むかひつめに一人立べく候。雨の脇に二人づゝ可立候。

一懸の上下定まらず。貴人はあそばしよき所へ御座候間。いつも貴人御座候方をあがりと可心得。大方は軒左右上にて候とも可心得。

一圓座に付候時。手は何時も貴人の方又軒の方を大方付候。

一圓座に居候はゞ。上座を見合候て。刀たゝふ帋を可納候。

一圓座に付候時は。左右の敷(マヽ)うならば。一人ツヽ左右にかけて付候がよく候。能々可心得。

一刀をよく我そばへ圓座の下に置事もあり。それは下座のかたへ可然候。

鞠之一書

正二位

一けかたの事。先木に立候時も。平生のごとく身なりなどもつくらず立候。去ながら左足少さし出候て。け足を少後にひきて立候也。いつも蹴足さき立候事わろし。それを立あしとてきらひ候。鞠け候時は。少腰をすへ。むねをいかほどもひきこみて。目づかひも

右のかたをそばめに見。鞠に落かゝるまで見くだし。足によく〳〵落付てけべし。人のける間も鞠上候へば。其人の足まで見くだし候て。少も〳〵無油斷やうにける事にて候。つまさきにてけ候へば。鞠しやきり候てわろし。足のかうにおとし付。いかにもむくやかにけなし候がよく候。人體もしやきり。まりもしやきり候て色わろく仕候事。第一きらひ候。いかにも〳〵ゆう〳〵と仕候。乍去又にぎ〳〵と仕候がよく候。

一むね出候事又そり候事。又くゝみ候事。何れもわろし。たゞいつもの立すがたよく候。

一いかに鞠にあたり。おきつころびつ仕候て。しらぬものゝめには見事と申候へども。かたきのわろき鞠はまりにて有まじく候。いかに足たかく。しらぬものゝめにはわろく立候とも。かたきのよきまりは鞠たるべく候。第一かたきを本にすべし。乍去其人によりいかになをしてもなをるまじきくせあるものにて候。又すがたも有ものにて候。それは無才覺候之間。其なりのまゝけさせべく候。如此の儀何も可用捨候。

一鞠に三徳と云事は。是もけかたより出候也。

一手もちの事。身よりも少さきに出候やうにもちたるが能候。いかにも手のうちより鞠出候ごとく。身ちかくけなすべきためにて候。手少さきに出候へば。をのづから鞠もちかくなり候。

一三びやうし肝要にて候。三びやうしは右左右とふむ也。なを〳〵口傳〳〵。

一いつもけ渡しをたしなむべし。

一三段三足之事。右一卷に在。能々可分別。又人の鞠けはなしかぬる事あり。それはそばよりこい候て可仕候。

一かさねごゑは我まり人よりけられ候時かくる事にて候。又面白き時は静にかくべし。ばいそくの時ははやくこひ候べく候。

一きよくおもしろがらせて。身なりをくづしける事わろし。殊にうつぼながしなど。け候て。めをそともひき事も。其鞠はけぬうちよりとり候。能々可心得。殊に平生もかたこしをくずしける事わろし。

一貴人の御身に鞠をけあて候ても。又御身にあたりたる鞠など仕候ても。け候て後ひざを少付候。

一鞠請取候てけ候鞠は。我まへゝまる〔本異〕やうに仕候て。分のまりいかにも色よくけまはして有やうに蹴上。又はなつ鞠をば外にまいるやうにけあぐべし。但心にまかすべからざるか。されば分足三足とは。請取候て一足。分のまり一そく。けはなつまり一足。以上三足なり。三足の外人のこひ候は。いかに我鞠なりとてもすて候べし。

一ける人のむかひつめのつむる時。相懸の人もおもはゞ。半分ばかりまでつむる事也。尚入境にしるされ候。

一鞠をつめてもひらけ。ひらきてものけ。はなしてものけ。我立所へ歸る時。うしろしざりにはかへらぬ事にて候。左右にかへり候べく候。

一懸にわがけ上たる鞠はいまだ我鞠也。つめてけべきか。但け上やうによるべし。木の左右の後へゆかんは是非に及ばず。能々可心得。

一鞠をこふ事。ありやと云は春のこゝろ。但うけとりはじめはこはず。おふと云は夏のこゝろ。有と云は秋の心也。分鞠をあふとこふ也。切こゑといふは。まりなどのけふなる

を。あり〱とこふをいふ也。おうと云はけはなつ時の心也。但たか〱蹴上て。こゑをひきて。おうとも我懸にけ上て。又軒にけかけての時は。必々おうのこゑ成べし。ありとはこふべからず。乍去又おうのこゑはそこつに有べからざる儀也。今は飛鳥井殿などの外いかにもこふべからず事也。

一一段三足と云事又あり。右の一巻にもしるし候也。尚こま〱の事在。けあげを一段といふは。け上て其足にてふむ足まで也。□而其足を後へふむ一足。さて左の足をさきへふみて鞠を待。是一足。三足之儀也。可秘〱。

一花のもとの鞠はしんしやくすべし。仕候とも心得可入也。

一風吹のまりは風吹候方へきふく仕候也。其内こうしやを風下に可立。

一雨の後のまりは。はかまのくゝりをつよくゆい。身ごしらへをいかにもよく仕候事候べく候。何も〱可心得入なり。

鞠之一書

一御前の鞠は久敷仕候はぬ事にて候。惣而かはりてのおほく候はゞ。平生も早々かはり候事にて候。それも上座より次第〱にかはるべし。御前のまりもかはる衆あらばの事にて候。かはる衆なくば。いか程も可仕候〱。かはりて可仕候時は。賞翫の人御立候つる所も不苦可立。けられ候人かはらんために着座候へば。やがて立候鞠衆。いか程もあれ。上座の人左右より四人づゝ先けられ候。四人の下□□□上座より次第にかはるべし。

一鞠垣つゐぢゑんなどよりころびをち候鞠は。何時もひざをつき候て可仕候。殊ゑんな

どより落候まりは。むかひてけ候へば。鞠内へ入事候。初心の人はそばむき候てけいださるべく候。軒よりもえんよりもころび落候はずば。さほにておとし候べく候。又手にてころばかしいだしたるがよく候。えんに上たるは。立ながらあつかぬ〔は脱歟〕事にて候。すこし腰をかゞめ候べし。

一軒にあがりてお〔な歟〕ち候鞠は。是非に何時も軒の下に入候て。ゐをり合候てけ候べし。軒にあがり候て落候時。はやくなをり候へばわろく候。軒のとをりにころび落る時直りあふがよし。

一鞠たけの事。先三足の内。序の時は前をほそく。後二足を大にけべし。急は後をほそく可仕候。猶右一巻にあり。

一さくらの花などは。いかにも〔け歟〕けちらさぬやうにけべし。楓松などのしきりて。かゝりたる鞠のみへぬ事あり。さ様なるをば葉がゝりの鞠とてけにくきもの也。又葉がゝりの鞠常葉木のもと遠く見よと云。木にけかけたる鞠。色々けうに落。けうになる所をけなをして。静に人にわたすべき心有べし。是又鞠のやうによるべき也。葉がゝりのまり常葉木のもと遠く見よといふは。ちかくよればみえぬほどに。遠くより見るべきなり。

一軒のむかひつめの人。軒にけあげたる鞠をば。軒に立たる所のむかひつめの人。ころび出る所をけ出す也。軒のうへをころびまはりて。遠くよ所へ落るは。其きわに立たる人の鞠なるべし。定まるべからず。又軒にけ上たる人も。鞠の軒より遠くころび落候へば。むかひつめのけべき事も在。軒にあがるまりは必軒の人のなれども。遠くをちば其軒のむかひつめの鞠なり。むかひつめの人油

すまじき也。

一（猶可有吟味）むかひつめの人につきて。とをく外へ出たる時は。むかひつめに付てつむるなり。猶もやうによりて二足三足程は出もすべき也。先木のとをりより外へはさうなく出間敷事也。若懸の外に遠く出候時は。遠き鞠をのべ候てはくるしからず。此時はさうなく軒につめてけまじきと覚たり。されば軒にけあげたる鞠は。軒の下の人はむかひの人のかほをみると云儀あり。

一つむる人むかひの懸に外に遠くつめて出たるに。其鞠よの人のけ入られて後に。つめたる人ける時は有べし。さやうならねども。遠く出たる時は。懸のうちをばかへらで。すどをりとて。かゝりの外をまはりて立所へかへるべし。其時も軒の方は可有心得。又其時懸の外まはりて行時も。人のける鞠に心をかけ目をはなさず見候てまはるが。無油断可見能候。よく〳〵可心得事也。

一袖越とて。左の手を身にそへ候て。手の外にてけるを云也。このまぬ事なり。

一鞠そとへ出たる時入事。ころばかし入るは。木のもと三尺ほどをき候て。手をつきてころばかし入る也。是は見物する人。又はまり衆かはり候はんずるためにのき候人の事たるべく候。け衆はとりたる人やがてあげまりすべき問沙汰に不及也。

一汗のごふ事。かはり衆あらば。圓座につき候て。そとかげむきてのごひ候べく候。又かはり衆なくば。かゝり三尺ほどのき候て。かげにむきてのごひ候べく候。

一すあふのひも。懸四尺ほどのき候てつかひ候べく候。とけたらんずる時の事也。

一はなかむ事。是又同座にてそとかげにむき

てかゞよく候。

一鞠を請取渡候事。枝の儀は右一卷に。いつも渡候は。庭に直候やうに。かゝへて出候て渡候時。こし革を左の手にすへ。右の手をふくらにそへて。取革上になしさし上候。さてうけとり人は右にて取革をとり。左を下へそへ候て。其まゝかゝへて取べし。

一鞠人に見せ申時。持て出わたす事は大(右歟)のごとく。うけ取人も右のごとく請取也。先こしかはをみまはし。さて左にすへ。右の手にてふくらを二度うち。又右にすへ候て。左にてふくら一方を三度ばかり打うち候て。近來見事の鞠といひて。本のごとく指出し候。惣じて鞠はこのふた能候。こし革を見まはし候は。先わが前の方を見候て。さきをのちに見るべし。

一主人の御目にかけ候時は。まりはこのふたなどにいれて見せ申候べく候。自然手づから掛御目候時は。右申ごとく仕候て。手をいかにも地に付て。さし上候てみせ申べく候也。

鞠一書

一野臥の事。堪能の人たるべく候。其衆はかはり衆圓座にあるときも。きるゝ鞠を立てけれらるゝも野ぶし也。三段にけいれらるべし。此時の三段とは三曲の事也。三段にけいるゝほどの堪能ならずとも。かわりたる人數のうち。圓座にあらばけもいるべし。先のぶしと云は。八人のけてのうち。よはきけ手の後へ立て。よはきけての合力にするをいふ也。可立ほどらひは一間ばかり後に可然。但そのよりのきによるべし。着座の時もきるゝ鞠をけいるゝは只見物者の心得也。只一足にてけいるゝは是非に及ばず。必三曲

のうち一曲もけべき也。內裏にて御鞠の有けるに。三條の內府人數にてはなくて見物ありけるに。外へきるゝ鞠をつゝと立てけいれらるゝに。有とこはれ候。飛鳥井の分の鞠なるを。こはれ候事不可然とありけるを。內府ことの外なる着座にて。りようしやう有けるとの事。尤可秘〳〵。かはり衆の着座の人にてもあれ。又見物衆にてもあれ。きるゝまりをける時聲をかけぬ事也。又八人の衆のうち。よはきけての後に立野ぶしの人も。常には聲をかける也。されどもとをくゆきたる鞠のときはかけもすべし。着座衆のける鞠は。いまだ八人のけての鞠なれば聲をかけぬ也。

一圓座に着座の時。貴人役などもめし候へ。又寂前木に御付候時は。各座よりをり一禮すべし。木に御着候てより又圓座に居候べく候。

一懸は何れも相生たるべし。其內二本立の木二本もあればむかひあふべし。いづれも相生なれば是非に及ばず。同木相生二本あらばむかひ合べし。さて殘る二本別々の木にてもあれ。又同木にてもあれよし。松櫻柳楓の時は。有時に相生をむかひ合せずともうへべし。

一露はらひと云ふ事。 禁裏。 仙洞などにて賀茂人はじめ候を云。懸の露をおとすべきため也。常には初心の衆も仕候。露はらひとはおもてむきの申事也。內儀は又色々にふるまひ候。懸の枝候へば。彼枝にあたりて行鞠のやう見候はんために仕候。露はらひのときばかり。木などにあらけなく仕かけ候也。平生は無其儀候。賀茂人とはかもの社人也。

一鞠高く候へば。ひきごゑに傳かけ候。ひき候時は切こゑたるべし。

一並木は庭のひろき方にならべてうへ候べく候。高さ二丈ばかり也。庭のひろき方に植べしと云はいつもの植木也。おひ懸りの方。かまへざるかたの事。

一ふすべ鞠は春夏秋冬にかはると申候へども。中にも雪花の時用る也。但ふすべ鞠はひめむすに不斷用る也。其故は日月にたとへ仕候時ある間。必又雪花にもかぎるべからず。

一鞠庭は一尺あまりにほり候て。土をふるひ。すなをふるひ候て作る也。

一人に當座にて鞠あそばせなどゝ云事。一足あそばせなどゝいはぬ事にて候。鞠そとあそばせと云がよく候。遠く文などにて鞠仕度などゝ云時は。一足參會仕度などゝいふてもよし。

一鞠ほす事。ざうさなく木に付候てほす事わろく候。鞠箱のふたなどに入候てほし候べく候。鞠箱のふたに入べきが必可然。ほし所まり庭のうちは何たる所も不苦。懸四本の内外。またつゐぢのうへなどもよし。只の庭なればはしちかくほしたるはわろく候。鞠箱のふたにもいれず。たゞものにかけたりなどしてほさば。物かげに可然。又くかいにほすとも。鞠の置やうなどさのみ有がたし。懸の内外などならば。けるとき置やうにしるべし。

一こしはさみは內は鞠のほどらひたるべし。內より外のあいの廣さ一寸八分。あつさ貳歩斗也。八角にも六角にもよし。

一庭をはく事のさのみ口傳有べからざるもの也。乍去口傳も有か。足かたもなきやうに。

うしろしざりにはくべし。いくたりにてもはくべし。懸四本のうち又軒なども通りてくるしからずはくべき也。はくべき人いか體の者のやうなどゝいふこともなし。鞠あるべきとかくごすればはやくはきてよし。ふとの時は其刻もはくべし。

一圓座はさぬき圓座たるべし。今はたゞ竹のかはもよし。ゐもよし。いづれも可用。廣さは一尺七寸ばかり也。莩のかたうしろたるべし。廣さの寸肝要也。莩はかけて置やうに付べし。なかをあけず□□もよし。ゆひとめに緒は付べし。

一三曲の事

一のべ。一歸あし。一身にそふ鞠也。すりをひ又こむる足といふも。うつぼながしびんずりなどゝ云も。ことなる身にそふ鞠のうち也。

一かへし足と云は。立足なるとき。ふとくる鞠を。けあしを後にひきて。土をふまて其まゝける足也。例式はけ足を左の足よりそとひつこみて。後にふみてまちてける也。

一歸り足はおひ鞠の事也。惣じておひまりすりおひなどゝ云事有べからず。

一うつぼながしはをのづから身にそへころばかし。足までころばかしくだし候へば。やがて〱むかふのまりたるべし。

一こむる足といふは口傳在。

一曲足の名の事

一のべかへり　一軒がへり　一くゝり入足
一うつぼながし　一右歸り　一左歸り
一左右の歸り足　一ひざをつきて歸足
一木をふむ足（烏蹴）　一はね足　一しりおとり
一秋津島歸り

一きらひ足の事

一竹ふみ　一千鳥足　一くつくだり
一木をのべきるあし　一みすの鞠
これら能々可分別。
一のべかへりと云は。とをき鞠を延候て。其鞠遠くはいかで。やがてうしろへ落るを。其まゝのべながらなをり合て又のぶる鞠なり。
一軒歸りは軒にけ上候て。軒の下に入候て。なをり合てけるを云也。
一くゝりいり足は。一足けて。さのみたかくはなき鞠を。下にくゝり入候て。又なをり候てける事。
一うつぼながしは。右に申ごとく。いかにも身をちかくすらせける也。
一左がへりは。一足け上候て。いかにもくる〳〵とめぐり鞠にめぐりける鞠を身ちかく可仕候。左に歸る事也。
一右がへり足は。一足け上候て右に歸り。いかにもくる〳〵とめぐり候てけるをいふ。
一左右のかへり足は。一足け上候て。一足の内にて左右に歸してける也。
一ひざ付歸りは。一足ひざ付て歸りて後にちかく行を。又歸りてひざつき候てけるをいふ。
一はね足は。鞠ふところびくるを。足をひき。もろあしともにはねてけるを云。
一木をふむ足は。木に懸すりてくだる木に。足をつけてけ上るを云。
一のべ足は。左を敷。いかにもとをきをのぶる也。
一しりおどりは。延候様に又のべにてはなくて。つまさきを立敷候て。いくたびもいながらをどりより〳〵ける也。
一あきつとり歸り。そばへ行を。ひきかへるやうに仕候。猶口傳。

一懸四本可植事。

八本十六本などもあり。是は　内裏。仙洞などの事。皆松皆柳など。同木四本植る事。是は皆木と云。いづれの庭にてもくるしからずといへども。但ところによるべきか。皆木も兩木の間か。

一木を植事

右の御一巻にあり。雖然色々の儀也。木と木の間二丈にも。又二丈二三尺にも。そのうちいかほどもつゞめて。猶もせばき庭ならば其心得可有候。軒と木の間も懸におうじ候べく候。二丈二三尺などは常の庭にはひろし。多分二丈がよし。庭せばくばいかほどもつゞめ候べし。

一なをもせばき庭には。家の軒を軒の懸に用て。むかひに木二本植る事もあり。柱と軒の懸の間も庭によるべし。木のたけ不定。さりながら大方定候。いかにも大なる木をも用ひ候なり。おも柱のとをりにはからひて可植也。但尙口傳。家の軒を軒のかゝりに用ひて。むかひの木二本植る時。一色の木も不苦。皆木の沙汰なし。木の高さ庭いかにひろくとも。一丈五尺には過まじく候。せばき庭には。猶もひきく可然。庭におうじ其心得有べし。おも柱のとをりにはからひて。木を植る事も庭の體によるべし。せばくば沙汰に不及。

一切立の事。雜木は右御一巻に有。但いづれにてもしな〱としたる木可然候。梅などはしやちけてわろし。又はそこつに不植木なり。屋形又は飛鳥井殿に有べく候。

一いづれにても當座のために切て立たるをば切立と云べし。

一竹を立たるを竹切立といふ也。

一皆松皆木などはそこつに不植候間。松三本の時は竹植ますべく候。其内柳一本もあればば子細なし。たらぬ時の儀なり。竹を三本も植也。三本植れば。三すみになるやうに。一のかどを外かどになして植る也。竹は切立の時ばかり也。木のごとくしかと植る事なし。木三所竹一所にもあらば。竹は必軒のむかひたるべし。左右の間いづ方も可然。木二所にもあらばむかひあふてよし。但二本の木によるべし。二本同木ならばむかひ合すべし。木により有所にたてむかひ合候よし。しからずば竹一方に有ても不苦。竹斗四所にて立候。ばかり立ても。皆木のさたなし。くるしからず。

一二本竹を植る事も有べし。能々可心得。

木　竹三本の時は如斯植る之

木　木

木　竹二本の時は如斯枝を左右になすべく候如斯本うゆれば二本立の木とて心得

木　木

一四本懸とは柳櫻楓松をいふべし。

一同木を二本。又別の同木を二本植もす。又同木三本。別の木を一本と植たるは。何れも木を二色也。是は二本懸と云べし。

一同木二本。別々の木二本植たるは三色也。是は三本懸りと云べし。かやうなるを又必三本懸りと云にはあらず。又壹本懸二本懸とて。いたつてせばき庭に。軒を一方の懸りになして。二本植る事も有。立様つめひらき替也。秘事也。植様もあり。四本も二色なるは二本懸と云。又四本三色ならんも三本懸と

云。只木を三本植ることはいかゞ。但あるが軒を軒の懸に用ひ。むかひに木二本植候時。立様。軒の方より木にむかふて四人。木の方より軒にむかひて四人立也。つめは其むかひ〳〵也。六人の時は木二本のあはひに二人。軒に左右に二人。軒と木のあはひに一人づゝ二人立べし。是も軒の方よりは木にむき。木の方よりは軒にむき。其むかひ〳〵つめべし。そばの人は又其むかひにつめべし。是は略儀なれば圓座の沙汰などなし。あげまりは軒のむかひつめよりいつもごとくたるべし。如斯二本植る時は何木もよく候。右一巻にしるされ候。雜木のもくるしからず。又同木を三本うゆることはこのみて無用也。事かけてはちからなし。切立の時はくるしからず。

一同木二本又同木二本植る時は。同木を向合に可植候。切立のとき二本立のいかさま木あるべし。竹も二本立の切立の木にむかひに。竹二本可植事也。

一おい懸と世間にいふをばにげ木と云。軒なくて鞠のきれべき方に植るといへり。一本も植。二本ばかりも植る也。本懸の木のとをりに可植。間も大略同。軒のこゝろへかにげ木四本のうちならずば雜木たるべし。是もしやちけて見ぐるしき木はわろし。殊に梅などこのまず。にげ木は本懸の木のとをりに二本植て。其二本のあはひに一本植。以上三本もよし。本懸とにげ木のあはひは。軒と懸との間ほどたるべし。懸四本のうちの木は植まじき也。懸皆雜木ならば。櫻柳楓くるしからず候。如斯木植たる時はわけ木といふ。植たる時はおい懸といふ。

一四色なるをば四本懸と云。四本一色なるを

ば皆木といふ。皆木は　内裏。仙洞。飛鳥井どのに有。四本は四天王の心也。されば寺社などに可植也。

一軒の木を必面柱のとをりと云はなんばか。

一妻戸の落の間のとをりに懸を植る事はいかゞ。人の出入あるによりて也。惣而右の一巻にしるし候ごとく。軒などのあながちとをらぬとは申まじく候。主人の御後をとをらぬ時。又堪能の人などは何時もくるしからずと申侍る也。

一竹を二本にても候へ。三本にても候へ。立そへばさし合候枝二三ばかりおとし候。丈數も植木に同かるべし。

一切立にも植木にも。みのなり候木をば。みをおとし候て可仕候〳〵。

一鞠仕候間。懸にかゝりそめにも手をかけず。又はあらけなくあたらぬものなり。惣而四天王と何もくわんねんすべし〳〵。無聊爾者也。

正三位

一鞠のおこりの事。抑鞠の初まりの事。天まつり地をまつりあそばされ候事。皇帝〔黄帝〕の御時よりの儀也。其後日本にて天智天皇被遊候。さればけあぐるを天。おつるを地とがうす。白鞠を月。あか鞠を日と號。同白鞠を陰。ふすべ鞠を陽とがうす。されば足にて仕候物とて。少も聊爾にすべからず義也。猶口傳あり。あか鞠といふもふすべ鞠の事也。ふすべやうはこしがはを紙にてはりてふすぶる也。ましてひたひにちとかゝるやうにはり候也。此ほか皆ふすぶるなり。うすふすべなるべし。

一飛鳥井りうと云事。天智天皇より此方之儀也。

一木を植る事日本にて始候事。大唐にてはなきよし申傳也。

一ふすべ鞠は春夏。白鞠は秋冬可用也。これ大方陰陽を表する儀也。ふすべ鞠は春夏。白鞠は秋冬と申せども。雪花の時ふすべ鞠にてしとらざるゆへ也。いづれもくるしからず。

一佛も鞠は被遊候事あり。それは佛法の方より他心有まじき心得候。されば鞠仕候間。他心わろき事也。他心あらんずる人。其人數にくはふべからず。さればしやうとくふもんにて。足にて落たる鞠はけるにならず候。鞠に心を入ず。油斷にて心にて落したる鞠をけるなるべしと被仰聞候。能々可心得事也。

一懸は四天王のかたち也。是又れうじにすべからず。右一巻にしるし侍るもの也。

一沓。くずばかまのたちあけ。つゆの革上下の事。一番無紋のふすべ革。二番紋の有ふすべ革。其次無紋の紫革。其次紋ある紫革。其次錦革。其次紋のあるにしき革也。錦革とは甲斐國革の事を申也。是は御ゆるしなく候ては付べからず〳〵。人々へ今被下候。又付てはき候は藍白地又は青き革のすぢ。又黄革の紋のある革也。何も如斯次第。御ゆるしなくして。ふすべ革あか革むらさきのあいだ。かりそめにもすあふのひもにも付候まじき事也。よく〳〵可心得。

一鞠のみちゆるされ候事は。扇をゆるさる丶といへり。此時のあふぎは。十ほねにしろほね黒ほねの間にねこましてさしほねに仕候。譜のかきやうさしやう右一巻にあり。黒ほねは一賞翫也。十ほねとは鞠扇と可心得。猶口傳。

一鞠しやうぞく革も事ある革わろし。是又右一巻に在。

一懸植専右御一巻にあり。さりながらみのなり候木をば。何れもみをおとし候て立候べく候。是は雑木を切立又植候時の事也。

一鞠箱の作様。まり一ッもいるやうに仕候。又二ッもいるやうに可仕候。二ッ入はながくさして。中にへだてを仕候。一ッ入。其まゝ一ッ入やうにさして。上は黒も仕候てぬりなどしたるがよく候。内のこしらへやう寸法などの事口傳に有。鞠の入ほどにひろさもふかさもすべし。ふたのふかさなどとかくの儀なし。しぶはりにして黒くしたるがよし。内は鞠のそこにあたらぬやうに。こし革のなりにしあわせて板をはむる也。扨うちは皆紙にてはるべし。惣而鞠にしあはするまで也。別に寸法などなし。緒の付やうたいなどことなる儀なし。たゞ鞠入る用計也。緒の革はことなるかはゝ無用也。紋ある赤革黄革などに繪を書てよし。すぢのある黒革などもよし。

一鞠はさみの事。こしはさみと云なり。あつさ二分。廣さ一寸八分斗に仕候。兩をみがきて柳などもかき候。又うちくもりなどにてはりてもよく候。又しろくも仕候。黒漆にして蒔繪にも仕候。うちのふとさ鞠にあい候やうに仕候。緒のながき〔さ歟〕三尺ばかり也。是は紫革何もよく候。八角にもすべし。六角にもすべし。緒はもん有革赤革よし。紫がはゝ無用たるべし。こしはさみは內儀のものなるほどに。又何にてもくるしからず。うちくもりにてはりたる時は。青き方うへになすべし。鞠はさむ時は。とり革を上になすべし。こしはさみ。上のかたはすみちがへにし。おもてにてとゞむべし。とりやう二むすび〳〵て切也。ちがひ目は上下ともに左の方上に

成やうにちがゆるなり。下のとぢめはすみちがへにして。上下よこにとをすべし。緒は三尺なるを。二重に取候て。とぢめにてむすび。又さきにてむすぶべし。下のとぢめは一の下にてとゞむべし。かけておく時は。一むすび〳〵て二重に取てよし。かやうにあれは以上四重也。

一鞠庭に敷たゝみの事。御本所などはあかり成べし。院など鞠あそばして着座候はゞ疊しくべし。

一鞠遠國へ遣候時は。鞠箱に入遣候が能候。又ちかく候へば。やな〔宮歟〕ひばこに付て遣すがよく候。鞠箱のうけ取わたしやう無物也。

一柳筥の寸法の事。其物々によりて廣さ不定候。長サは大方一尺二三寸ばかり也。あしは一寸八ぶ計也。上の木は柳たるべし。しろく三角にけづり。紙よりにてくみ候。くみやう口傳有。足は下をばかどをたつるやうにしてまろめて。上の木のあたる所はひし〳〵けり候。鞠付候やう右一巻に有。是又口傳たんざくなどすゆる事も有。是も同前。

一鞠庭に敷革敷事はいつものごとく。毛の方を上になして敷也。圓座同前也。弓方のごとくたるべし。

一鞠と云字はまつるともよむ。よろこぶともよむ。納ともよむ也。是は子細ある義也。大方は先口書の心得候。口傳よみの子細は。天をまつり地をまつり。皇帝のあそばし出され候に付てまつるとよむ。又しゆうといふ鬼をたいらげ。かしらを切て。鞠とかうしてけられ。天下をおさめられ候に付て。よろこぶともおさむるともよむなり。

蹴鞠條々

一數とる事。五十までは心のうちにてとり。五

拾のとき。かずといかにもずの字をながく云べし。それよりは六十七十。其上あがり次第いか程もとるべし。百十の時百じうと申也。二百十のとき二百じうと申也。惣而いつも百のうへの十の時はじうと申べく候也。それよりは五百も千もあがり次第に能候。三百六十の時。數三百六十と申也。そくをばいはぬ也。數三百六十と云事は。三百六十と定りたる鞠の時也。さなければ三百五十よりいひつゞけて。三百六十。三百七十といふべし。大がい年頭には三百六十にておさまるべし。惣而御數といはざる事也。何時も御の字をいわずして。かずと斗いふべし。なんそくともいふまじき也。又鞠は八人にあまり候はゞ。數もまり衆のうちの人取べし。八人までならば別人とるべし。

一鞠さほの事。一丈五尺ばかり也。枝をばいかにもうつくしくおとし。うらほそき竹のさのみ大にも又さのみほそくもなく。能ほどの竹を用る也。末はふしの上四分計にきり。いかにもうつくしくかどをまろめて切也。もとはふしより下三分計をき。一もんじに切。いかにもかどをたて。かためをあらせて切也。ふし數は不定。つねにはもと末を紙一枚にてふたつにおりつゝみてよし。つゝみやう。足つゝむごとく。紙一枚をたてざまに二に折。それをよこざまに又二に折。そのまゝさきにきせ。ふしのきはを紙よりにてゆひ候。ふしはゆひめのうちになし。二重にゆひ候。一方はわな。一方は雨のさきをそろへて切べし。わなは左になすべし。もとうら同前也。惣而不斷如斯つゝみてをくがよし。御本所など鞠庭にもたせられ候時までも。つゝませられ候由候。庭に出候時。とかせたる

がよし。もとうらの寸をみせまじきがためか。

一さをあつかふ事。惣別は役者さだまるといへども。いまはかはり。圓座にあらば。其衆によりつかまつり候事。能々先懸に鞠留候へば。さほをとり軒をうしろになさで持て。何時も座をまへになしあつかふべし。左候間左の手さきに成時も有べく候。又右の手さきになる時も有べし。立ながらいかにも静におとし候べく候。鞠とゞまり候枝を。鞠にはそともいろはで枝をおす也。それにてもおちずば。つきもおとし候べく候。又庭の内にてはなをさぬ事也。自然人のかほなどにあたる事もあり。庭の外へ出る〳〵。何となくなをしたるがよく候也。右にしるすごとく。役者は鞠衆内たるべし。又見物の人もする也。鞠衆八人のうへ有之。着座の人あらば其人の役たるべし。不然ば鞠衆のうちたるべし。着座の人もそこもとの時宜あしくば無用也。蹴衆の近邊にあらば。け衆の内からおとすべし。懸にとまりたらば。立ながらおとして。其後さほのさきを地につけて。こしをそとすへ候てかへるべし。懸よりも其便宜次第におとすべし。又えんなどにとまりたるは。はじめからひさきつきたるがよし。此時はさほさきを地に付ずとも也。（貴人口左の時）

一さほ置候はんずる所の事。何時も軒の方にさきをなして置也。又さやうにもをかれぬ所は。みはからひて置べし。

一かきとりとて。さほ取のごとく。竹のさきにちいさきかまをつけて。鞠のかゝりたる枝をそときりおとす也。但かきとりは今は用ざる也。以前難波流などには。さほとりとて。一人着座して有つるよし也。

一鞠を一足二足とはいはぬ也。一ッ一ッ〔二獻〕と云が能候也。又ふみは一顆二顆と書べし。三顆まではよし。四になれば四つと書べし。去ながらことばには顆とも又そくともいひたるは耳にたちてわろし。何となく一ッ二ッといふべし。

一枝の事。〔可爲吟味〕春夏秋冬にかはる事。春櫻。夏柳。秋楓。冬松にて候へども。いつも松よく候。其ゆへは何もかはらぬものにて候間よし。彼枝のこしらへやう。先上に枝を四ッ置也。しんともに五ッ也。又下に大枝一ッ有べし。以上枝五ッ也。彼下の拔よりしも一尺五寸也。又一尺二寸にもよし。又下の枝のとをりをそぐ也。枝の下一尺五寸の時は。そぎぐち一寸五分也。又一尺二寸の時は一寸貳ぶ也。上のはは一所より四ッさし出候がよく候。枝の體別の一巻にこまかにしるす也。

一鞠を枝に付る事。紙よりをいかにもうつくしく。上にのりをひきたるが能候。付るやうは。下の枝と上の枝とのあはひに。鞠をおしはさみ。とり革に紙よりをとをし。四つの枝のうちに引とをして。しんにかけてうらにてとゞむる也。とめやうはたゞひとへにかたわなによし。わなのかたを松の梢になし。くちの方をもとになす也。

一とく日の時節。とかぬ日の時節と云事あり。鞠を枝に付てをく時。その日鞠有べき時は。紙よりのかたへ地をながくしておく也。又其日有まじき時は。紙よりのくちをそろへておく也。よそにて見るべき時も此心得にて。其日の鞠の有なしをしるべし。可秘〳〵。又紙よりながき方はとく方也。とく方は五分ばかりながくすべし。

一こしはさみは大方略儀也。鞠をそんさじ〔世獻〕が

ため也。かけてをくも。かみよりをほそくこゆびほどにして。きれぬやうになるを水ひきにして。上をふくさにしかとよりてながくして。まんなかを取。二人にしてつばを取革をとをし引しめて。又あはひをくぎ一むすび〳〵て。其上を兩方つぼに成やうに。たとへばいつもおびをむすぶがごとくして。さてかけておくがよく候。又人の方へつかはし候時も。其まゝくるしからざる也。あまたかけても置也。又其中に其けるべき鞠は。紙よりの一方のさきを長くすべし。枝のごとし。ゆひやうはこしがわのきわを二重まはして。取革のもとにてしるしつけにする也。かみよりを一重とりかはにはとをす也。中にてもあれ。さきにてもあれ。たゞ一重とをす也。

一鞠を人のかたへ遣候時は。木に付遣事も有べし。竹に付るとも云。是は尤秘する事也。又時として雜木にも付べし。木のこしらへやう。何も枝に同前。又四きにかはる事も有。春夏秋冬四本懸の木のごとし。去ながら是も何時も松よく候。又花の時は櫻などもよし。付やう。いつものごとく紙よりふくさなればきるゝ事有。間中を水引にして。うへにふくさなるがよし。是は故實也。又木に鞠を二ツもつくる事あり。其時はあなたこなたへうちちがへて付候べし。付るやうはまへに同じ體也。又自然下の枝にしたふづをつくる事も有べし。其時は一足を取合。一方つぼに成やうにして。一むすび結びて。一の下の枝にうけかくる也。若おつる事あらば。一まきもまきつくる也。能々可心得也。又枝にしたふづは楚忽には付べからず。竹に鞠を付る事は。本の木の枝を秘する事。竹はえ

だの體廿本の枝のごとく。式々になくともくるしからず。下のもたする枝計はをきてもよし。付るやうは木に同前也。また雑木に付候はゞ。かゝりに植る木たるべし。又鞠木に付てよそへ遣候は。いかにも賞翫の方などに有べき也。又したふづを枝に付る事は。公家などの義たるべし。

一御前の鞠は必三顆一枝につけられ候といふ儀也。それも右に申ごとく。あなたこなたへ打ちがへ〳〵付るなるべし。一の下の枝に付候は。上の衆のあそばされ候べく候。二ッ三ッかなるに。かならずふすべ鞠一ッ有べし。其内にてもとかぬ日とく日のさた有べし。能々可有分別也。



これ御まえに申鞠をかけてをくかゝりの有やう也

一下着用の事。さむく候へばきる物を。一ッのうへを白かたびらにてつゝみて能候。何時も下着は白かたびらよく候。冬は必小袖を白かたびらにてつゝむべき也。何時も白かたびら也。

一枝に鞠を付候て人に渡す事。早晩庭にいだし候時のごとく。もち出渡し候時。木末をなをして可渡候。請取人其まゝ請取也。わたし候人枝を取なをさずば。請取からとりなをすべし。

一柳筥に鞠すゆる事も。かみよりにてあしのかたをさきになして。とり革をとをし。是もかたわなに。わなのかたをさきになすべし。くちの方はまへたるべし。柳筥の寸法はひろさはそのおきものもかはるべし。長さ一尺二三寸ばかり也。柳箱にすゆる事は。人に遣候時の儀也。けられ候時の義にあらず候。

枝につき候ごとく。取革ばかりをとをす也。柳筥の木ふとくば一ッにつけべし。ほそくば二ッに付べし。枝に付るごとく付べし。紙よりのさきはそろへて切べし。渡しやうはわなの方をさきになして持て。其まゝ渡すべし。請取人請取て取直すべし。又渡す人取直しても渡すべし。柳筥まりすゆるは四角なるがごとし。

一圓座の寸法。大方一尺七寸ばかりによし。さぬき圓座本たるべし。

一あたらしき鞠を。文などには新鞠と如此かく也。よみはしんきとよむ也。

鞠之一書

一足かためはさゆつけと大方可心得也。去ながら又定るべからず。足かためとは。鞠有べきまへに物をまいり候事也。常の體也。別にことなる義なし。鞠庭にはなし。内にての事也。

一鞠座にて御酒すゝめられ候事。是は子細ある事也。鞠はて候て。各圓座に被付候て。さかなはわりごなどよし。又おり候やうにも仕候。もり物は色々の菓子等を用る也。中にももちいなどよく候よし申候。わりごの鞠と申時。圓座にてわりごをめん／＼にすへ候。又其時のわりごは扇なりに能候。又いつも何となく仕候へば。折を二ッこしらへ。左右の上座になをし置也。それは彼貴人堪能の人兩人計きこしめして。其まゝをかるゝ事もあり。又各はさゝみ候てまいらせられ候ても能候。それは其時の依體はからふべし。さて其後てうし持出る也。人數おほくて圓座兩方なる時は。兩人めしつかはれ候べし。くはへの衆も兩人たるべし。貴人など御座候ときは。くきやうに盃をすへて。貴人の御前

にまゐりて。同座に目禮までにて。御酒きこしめし候て。其盃をてうしの口に御すへ候て。くきやうをそばへ直しをかるゝ也。それよりはいづれも給ひ候て。から銚子の口にすへらるべし。貴人御座なき時は。㝡前より盃は銚子の口にすへ出すべし。しやく取は兩人たるべく候。如斯酒すゝめられ候事は。勝負の鞠年頭七夕などの義也。惣じて作法の鞠の時たるべし。肴を兩方の上座に置候は。折にてもくきやうにても。いづれも可然。惣て御酒をたべ。しやくなどし。肴を持て出てはさむ事も常のごとく也。鞠はて候て。御酒はまいり候間。いづれも刀をさし候。扇は手にもちて酒のみ候とき。何となく下に可置。給仕候人も刀さし候。酒は只一ぺんにて候。くわへ候はず候。ほしき人は我々のこのみ也。一献ときり候はゞ。しやくは其まゝ立べし。又肴をはさみ人にまいらせ候ても。そのまゝ持て可立。

一庭にて御酒給候事。只目禮までにて。二ッも三ッもほしきほどたべ候べく候。さてやがて銚子の口に土器を置也。又貴人の盃は圓座より下て給るべし。

一めしつかはれ候事。もろひざをつきて。銚子に酒をつはとつぎ候て。いかほども有次第につぎ候べし。細々はくわへぬ事也。銚子になくばやがてくわゆべし。其まゝ一ぺんたるべし。わりごは色々に奔走すべき事也。酌は必もろひざをつくべし。

一椿もちいは黄にそめてもよし。又いつものもちいを椿の葉に付てもする也。折などにつみてもよし。

一枝鞠を庭に出し□□□先各圓座には着て。枝鞠を鞠楽を外の人中門の口まで持てよる

也。さて其衆中より役者定而。彼枝を請取。庭を前になして枝をもち。左の手さきに成時も有べし。それは庭の前になるやうに仕候間定るべからず。扨軒の右の方か左の方にか置也。それは後の役者左圓座にあらば軒の右に置也。後の役者右の軒にあらば。左の方の軒のそばへたてかけて置べし。歸るとき貴人の方を後にならぬやうに可歸。中門まで持ていづるやう。左の手にて鞠の付たる所をかゝへ。右にて枝のもとのさきを手を下さまにむけて取。左の手をかたのとをりにあるやうにさしのべ。右を乳の下のあたりに有ほどにひつつけてもつ也。軒左右いづかたにをかれ候とも。左をさきになして持。我もそむくやうにして。左のひざをつきつかずにして畏候。鞠を軒の左にをかるべきにて候はゞ。其まゝわたすべし。右にをかるべきならば。枝のもとを地につけて。右にて鞠の付たる所を取。左にてもとを取て渡すべし。さて其もとひろくばしざり。せばくば其まゝも有之。後の役者枝をわたさるべきまで堪忍すべし。又請取人は座より立てより。左の軒にも置候へ。右の軒にも置候へ。左のひざを必つくべし。左の方に鞠を置て。右の手をさきになし。鞠付たる所をかゝへ。左にて枝のもとのそぎ口を。手を下さまにむけて取て。扨軒のもとにて右のひざをつき。持たるまゝ枝をおくべし。座になをり候時。㝡前なをり候ごとく。圓座のもとにて手をつき置候。右の方にをき候はゞ。左の手を鞠のつきたる所にやり。右にてそぎ口を手を下さまにむけて取べし。軒のもとにて。左のひざをつき。其まゝなをるべき也。右の軒に鞠を置べき時。中門まで持て出た

る人。枝を取なをさず候はゞ。請取てより取直すべし。取直すやう。もちて出たる人のとり直すごとくたるべし。請取て軒のもとに持てよるべし。手持も寂前の人もち出たる様體たるべし。又鞠をときて庭中に置。役者左右いづ方よりにても可然請取て。軒のもとにをく。役者左右にいづ方よりといふ儀もなし。こなたよりもくるしからず。軒に置。左右の間と後の役者左右の間の事ばかり也。

一後の役者の事。貴人か堪能の人などの役也。先圓座より立て。彼枝のある所へ行枝を取。いつものごとく持て。軒の向の木本より枝の本を土につかせ。枝をうつむけに鞠の方を下になして。まりをとき。左にて木をとらへ。右にて紙よりを二ッ三ッにをりて。ふところに入。扨枝を木に立かけて。鞠をいつものごとくかゝへて庭中におく也。さて歸りてひざを付枝をとり。左にて木をとり。右にてやがて右の脇の下へひきたはめ中門まで出る也。其後はじめ鞠中門まで持てより候人さしより彼枝を請取。やがてもろひざつき。兩の手にて請取。もと木さきになして。右の手にてひつさげて歸るべきなり。其後の役者は座に直るべし。其後各一人づゝ木につかるべし。枝の鞠軒の左右いづ方にもあれ。請取手なをしたる人のごとく。もちやうひざのつきやう有べし。左にあらば右の手をさきになし。左の手にてもとを取。右のひざをつきてとるべし。持て立たる時は。かゝりうしろに成べし。軒の向の左の懸の本により。右のひざを付。枝のもとを地につけうつぶけて。左にて鞠の付たる所をとり。右にてときたる紙よりをふところに入。枝を

木に立かけ。鞠を庭中に置。かへりて枝を取。左さまに立なをり。中門にてわたす也。後時左の手は其まゝにて。右の脇へひきたはめたるをさし出して。兩の手ながら下さまにむけてわたす也。主人なれば立ながらわたし候。鞠右の方にあらば。左の手にてさきを取。右にて枝のもとを取。左のひざをつきて取べし。是も立たる時は懸はうしろに成べし。やがて軒の向の右のかゝりの中より。左のひざつき。枝のもとを地につけうつぶけて。左の手をはじめ取たるまゝにて。右にてとき。紙よりふところに入て。枝を木にたてかけ。鞠を庭中になをし。木のもとにより。左のひざをつき。枝の本を左にてとり。右の脇の下へ引たはめ。右さまに立なをり渡也。是も渡しやう。左ははじめのまゝにて。右の脇へ引たはめたるをさし出し。兩の手ながく下さまにむけてとりて渡候。請取人はわたし候人の手二ッのあはひに。兩の手をうへさまにむけてとりかへるべし。もろひざを必つくべし。渡候人同輩にてももろひざたるべし。左さまにかへるべし。又鞠を軒の本になをし候時も。又ときて庭中におかんずる役者。軒のもとによりてとる時も。左右ともにかゝりの方さまに直りながら。主人貴人座に御座候はゞ。懸を後になすとも。貴人の方へ直るべし。庭中に鞠を置ては。左さまに直るべし。是も貴人御座候はゞ。其方へなをるべし。

一あたらしき鞠は。新鞠と文などには書べし。

一くずばかま着次第の事。先左より足を入て右を入。先くゝりを右よりひざの下のまり目の方にていかにも留。さて左のかたを留。さてまへこしをあてむすび。又後腰をあ

て。まへこしをしかとはさみ。後腰もはさまず。兩方わなにしてはさまず。其まゝ置也。ぬぐ時は左よりぬぐべし。又武士の人まへこしうしろこしともにはさむ人も有。子細なし。

一沓をはき候時は右よりはき。ぬぐ時は左よりぬぐべし。緒はつぶゞしのもとにて。かたむすびにわなのかたをさきになし。一ッ口の方をあとの方になしてむすび。いかにもとけぬ様にしかと留候べし。是もぬぐ時は左よりぬぐべし。何もしたふづも如斯。たびはく事も沓はくごとくたるべく候。をゝとりこのふしのもとにて留て。兩方のさきをとり。とりあはせ。さきさまにひねり。むすびめよりあとの方に。下より上さまにおしはさみ候。うへの方よりはゝさみ候。少見へてもくるしからず。下よりさきの見へざるやうに能々はさむべし。左右同前也。又緒の長サは兩方わなにして。其まゝ一方づゝひねり。さきのゆひめよりさきにはさむべし。あとのゆひめよりあとにはさむべし。あともさきも緒のさき少も見へぬやうにはさむべし。中はみえても不苦。是も下より上さまにはさむべし。又緒の長さいかほどゝいふことなし。幾重巻などゝいふこととなし。とめやうまで也。又たびの革あひしらい。もんあか(マヽ)きかと黒きすぢ革たるべし。あいしらいとは。白革に繪を書たるをいふ。さゝのはをもたかなどよし。ぢもんがよし。又ひろ革にて沓のごとくぬい。たちあげ(家藏)をたちつけにして。自由にはよし。公男はつくり革本たるべし。たちあげをたちつけにしたるは。うすくあかうるしにぬりて(家藏)よし。是には繪かきてはわろし。公男にはくまじき歟。かもくつに

似たるべし。
一沓のきんはたちあげともいふ。したふづとも申也。

蹴鞠條々

一わりごの鞠の事。わりごは扇なりにも。又おりくきやうにも仕て。えん座の衆めん〳〵にすへて。御酒まいらせらるゝ儀也。もり物は何にてもあれ能候。猶口傳あり。もり物は何にてもあれよし。精進たるべし。魚類は出まじく候歟。但俗衆ばかりならば出すべき歟。

一雪の朝に鞠をける事。余の木の雪をばゝかせて。松の雪をのこしてけるべし。又しぜん松などかるゝ事あり。其時は枯木の雪をば不用也。雪の朝にける鞠を。雪土の鞠。又雪の庭にけるなどゝいふ。

一扇鬮の鞠の事。せうぶなどの時も仕候。左右の衆を定る時。鬮をかきあふぎにはさみとらする也。又くじは硯箱のふたなどにも入てとらするがよし。人數皆の扇を取あつめ。左右のくじを骨にはさみとらせ候。鬮の紙のひろさは高さ二寸ほど。よこへ一寸ほどたるべし。これをよこさまに二ッにをり。又二ッにおりてはさみ候。扇にはさみ候はゞ。とらせ候ときは。おりたるをたゞ一ひねりひねるべし。くじばかりの時は。〔に脱歟〕硯箱のふたなどに可入。扇鬮ならばそれおゝじたる入物たるべし。鞠衆各一座にあらば。扇にはさまずともとらすべし。別々の所にあらば扇にはさむべし。とりやうは我々の扇みしりてとるべき也。かやうにくじをとるは。鞠なき以前同にてのこと也。庭にてはあるましき事也。

一勝負の鞠の事。先鞠なきまへに。座敷にて鞠

衆をば十六人定め。左八人右八人のくじを書てとらせ候。其圖を以て左右をわけ。扨圓座の左右にいつものごとく付べし。くじは左と云字八。右と云ふ字八也。又上鞠何度と定め。先左衆仕候。其數日記を右衆より付候。そとも地にをちばのぞくべし。左衆の鞠はてて候はゞ。右衆よりつかまつり候。又數も日記も左衆つけきて。上鞠はてゝ左右の日記合て。かちまけをさたすべし。日記の付やう口傳。

一勝負の鞠のけやうは。いかにも鞠たけひかへて。靜に可仕候。曲なども又ほりまりすくひ鞠などはつかまつらず候。よく〳〵可心得。そとも土にをちたらん鞠つかまつらざる也。鞠たけをひきくける也。はじめより如斯たるべし。勝負の時にかぎり。序破急の沙汰なき也。又貴人の身などにあたりたるをも始よりけべき也。鞠たけをひかゆるとは。ひきくけるを云也。

一三時の鞠の事。一日に三度ける鞠也。それは一日の遊山を專にす。先朝六ツ時より一時仕候。やがてはてゝ其間に御したてあり。又八時分より一時計仕候て。やがてはてゝ。又其間に種々の御肴もて御酒有べし。又御ゆづけなどもよし。其後はいつものごとく晩景にけらるべし。あしたにはいかにも早々出て。したくなどさのみきれいになくともけらるべし。くるしからず。八時分より次第〳〵に晩景までは。いかにも〳〵きれいにしたくすべし。いしやう度々にしかへ。びんなどもそゝけぬやうにたゞしうしてけらるべし。一日の遊事なれば。がいぶん色々の儀を〔異躰〕もよふしてしかるべし。三時の鞠といふももなる義なし。只遊山專也。勝負などによ

し。いかほども人數おほくてよし。三番四番にも御けてけべきが可然也。

一年始のまりは松の枝に付て。數三百六十可然候。必三百六十たるべし。三百六十の時けおとして。其まゝをくまで也。其後酒など有之。後けべきならば如常いかほどもけべし。人數あらばかはりてけべし。

一祈禱神前などの鞠はしやうきくの心得也。乍去しやうきくはさうなくつかまつらぬ事にて候か。先常には一日しやうじんにて。鞠を松の枝に付てけべし。又神前にいかきゆひしめを引。幣棚をかき幣を置。はらひをする也。けてのはらひをして庭にいづるは。先いつものごとく中門より一人づゝ出て。彼たなのもとにて幣をとり。左一度右一度はらひて。圓座にいつものごとくつく事。いかきは軒に鞠かきをゆひしめを引也。軒よりもかきを高くゆひあげ候。勝負にもける也。あげまりも七度十二度がよし。勝負の時は左右の數を合。後日日記一ツに何一日何十法樂と書候。一たてにける時も。幾度にいかほど勝負のごとく日記に付て法樂と書候。かやうにして寶殿にこむる也。寶殿に鞠をけあてぬやうにけ候べし。此外いろ〳〵の儀有。又常に何となくけるときも。この心得候て可然候也。

一むことり嫁とりの鞠は。あげまりをてう〳〵にして。いかにも□□□祝てけるべし。又鞠を定る時は百二十か百八十かよかるべし。わたましなどにもあげ鞠は十二度がよし。祝てけるべきまでなり。別にことなる儀なし。あげ鞠幾度と定る時は十二度たるべし。數はいかほども定られ候はゞ。百二十か百八十かよかるべし。かやうにけて後けた

く候はゞ。いつものごとくたるべし。

一七夕の鞠の事。公家武家ともに七くさの遊物にて候。朝も晩景もよし。七度のあげ鞠にて。まりはてゝ後に。雲入のとて。冬木に付て。其中堪能の人立留。軒にむかひ。二丈ばかりにたゞ一足蹴候べく候。枝もかぢ葉などゝ申候へども。いつも松よく候。雲入の足と云は。星にたむくる觀念也。是を蹴べき人は。哀前木に付候時。軒のむかひの懸二本のうち。又は其木こし四所の間に立べし。かの役者座の事。左右いづ方もくるしからず。左とも右とも不定。七度あげ鞠の後。おち次第にそのまゝ蹴衆木に付畏候。鞠ちかき人中にころばかし入て畏べし。後役者も畏て又立て只一足ける也。鞠を取てけるやうゝつものけあげのごとくたるべし。是まで也。又左右よりひとりづゝかけて木に付候はゞ。雲入のあしの役者。つねに可立所へ可付。其次に付べき人左右どなたへも付べし。あげ鞠すべき所に後役者立候はゞ。そばの人あげまりすべし。

一てうふくの鞠。昔はありしよし申。今はなきよし申。さりながらあるものゝなきものゝよし。

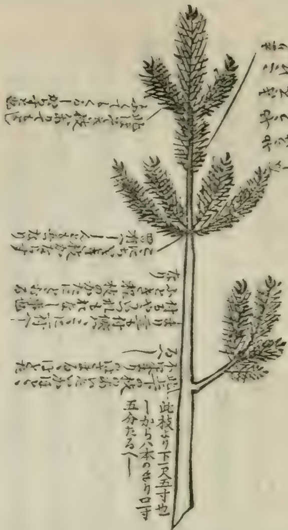
一しうたんの鞠の事。枝竹に付候こしらへやう。いつものえだ同前。鞠もくろ革しやうぞく也。すはう又葛ばかまつゆなどもくろ革なるべし。けやうも心もちをのづからうれへ心にて。まりもすこし〳〵とけなして上鞠しかるべし。

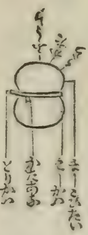
一陣中のまりの事。先てき陣のかたへ。あみのごとくまくをはしらして。上鞠も一足もしざらず。むかふに蹴かけべく候。惣じてうしろへしざるあしきらふべし。鞠はてゝ後に。

てき陣のかたへ一足けおとして。そのまゝはたし候べし。又枝はそれも松がよし。又太刀などに付る事も有べし。

一神前の鞠の時。幣棚のひろさ二尺。高さ三尺五寸也。長さ三尺なり。枝にてさしてよし。幣串の長さ二尺二寸。幣は二くだりによし。又上鞠さだめ候へばてう〳〵によし。又數定て仕候へば。三百六十か百八十か五百六十か。いづれもよし。是もうしろあし一足もひかぬなり。いかにも〳〵すなをにける也。

一太刀に鞠付る事。是又陣中の儀也。人に鞠をまいらせるゝ時の事也。付るやう。はなしもと太刀のひらにさし。花のかたを太刀のさきになし。紙よりにて鞠を太刀のむねのかたへ付。はの方にてとゞめ。是もかたむすびに。わなの方を太刀のつかの方になし。足のまゝとゞくやうによる也。付る所は足の中ほどよりそとのつかの方によせて付る也。鞠は必ふすべ鞠たるべし。請取わたしはいつも太刀同前たるべし。猶口傳可秘〳〵。花は草花たるべし。おもてのひらに付候。おびとりむすびたるうちを花とをし候。おびとりは鞠よりおもての方になすべし。鞠付やうは。取革のちがひめを紙よりとをして。むねの方にまりを付。はのかたに留候。枝に付るごとく也。おびとりのむすびめよりつかの方に付べし。花も太刀に鞠付る。紙よりにてゆひそへ候。



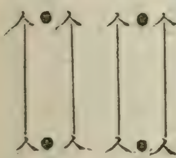


一かたあなは五七九にぬいたるがよき也。一方はさしかはの方よりさきさまにぬひ。一方はさきよりこしかわのかたへぬいたるがよし。ぬいはじめはさきをむすびて。内よりとをして。次第〳〵に内より外さまへとをす也。とゞむる所は。ぬいたるかは一ッにひとへかけて。内に出し入べし。上手はかたあな一にてもつくり候。本儀は二ッなり。かたあなぬい候かはも取革も白革に紋あるがよし。べになどにていろ取てよし。白鞠もふすべ鞠も同前也。

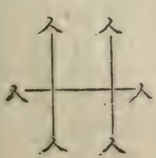
一とりかはのながさ二ッふせ。扨一文字なり。入ちがへたるさきはしかと付るなり。とりかは付る所は。こしかわのおりかへしめたるべし。乍去かたあな二ッの中程たるべし。

一鞠のまへうしろと云事なし。

軒



軒



一勝負之鞠數
一番 勝 かつと云字は後に左右の日記を合て書也。
一番二番と書所に左右とも書也。
左衆の日記は右衆より付候。右之日記は左衆より付る也。
なんどの上鞠も定一度ヅヽの分如斯いか程と書也。五度七度十度常にはよし。
以上いか程とこヽに書。

硯紙常のごとく文臺取合可出。もちて出る人は鞠衆の外也。付手は如鞠衆也。着座候て刀などをかれ候へば。やがて出る也。付手上下のさたなし。其中可然人體たるべし。貴人などにては有まじき也。此外人數おほくて。四度にもあれば四たるべし。それは一番二番三番四番と分候べし。一ばん二ばんは合畢。三ばん四番は合畢。かみ一重折て可書。

此一冊加一見。存分少々注なり。
享祿四年六月日　　左金吾判
寰公蘭若主行譽（花押）

續群書類從卷第五百四十一

總檢校保己一集

男源忠寶校

鷹部一

鷹經辨疑論上

夫鷹ハ瑤光星ノ精氣ナリ。サレバ衆鳥ニ異ナリ五常ヲ備タリ。タトヘバ春鳩トナルハ是仁ナリ。秋戮ヲ行ハ義也。食スルニ先ヲワスルヌハ敬ナリ。誅スルニ强ヲサラザルハ勇也。遠ク物ヲミルヿハ智也。蓋聞。鷹ヲ放シハジメシヿハ。天竺江南國ノ王雪山ノ麓ニテ放始タルナリ。十一月三日申ノ時ニ。大善道ト云野ニ出給ケルニ。白文ナル鷹ノ羽疾ヲ得タリ。其相形云。眼ハ明星ノ如ク。頭ハセイ〳〵トメ秋月ニ似タリ。觜ハタン〳〵トシテ鷲ノ山ヲイタヾイタルニ異ナラズ。肩ハハン〳〵トメ海中ニ二石サシ出タルガ如シ。足ハ側ヨリ見ルニ呉竹ノ節ヲ並タルガ如シ。背ハ難山ノ流タルニ似タリ。是鷹ノ王也。長瑞ト云モノ紅梅ノ紬紅ノ卷上ノ糸ニテ鈴着テ田ニ出タル也。又摩訶陀國ニテ盛戒大聖世尊。衆生ノ心散亂不同ナレバ。好ニ應メ當サニ得サシメンガ爲ナリ。此道ヲ學バン人ハ。造次ニモ諸行ハ無常ナリ。是生滅法。煩惱菩提。生死即涅槃也ト觀ズレバ。標月ノ指邪正一如ナル時節アリ。巖嶭タル峯ニ

至テ。鷹ヲ臂ニメ風度起鳥ニ抛時。南泉猫ヲ斬モコヽニアラズヤ。又諏方大明神ハ業盡有情。雖放不生。故宿人中。同證佛果ノヿハリヲ以テ鷹ヲ翫玉フ。仲尼謂事アリ。釣スレ圧網セズ。ヨクスレ圧宿鳥ヲ射ズ。又湯王ハ三方ノ網ヲヒラキシゾカシ。如此ノ理ヲシルヲ此道ノ上智ト云。サレバ和漢鷹ノ術ヲ學ブ人多シト云圧。後周ノ魏收宿其名ヲ得タリ。吾朝ヘハ神代ニモ一度ワタル。人皇十二代景行天皇ノ御宇ニモワタル。シカレ圧術ヲシラズメ鳥ヲトラズ。爰ニ十七代仁德天皇ノ御宇。始テ鷹術ヲ傳シヨリ以來。代々聖主是ヲ賞シ給ヒテ。禁野片野ノ御狩。宇多芹川ノ逍遙タユルヿナシ。然ルヲ今鷹政廢リ其術ヲ亡シテ。異端ノ說繁多也。是ヲ以或問ヲタテ得失ヲ記シ。掌飼ノ奥旨ヲ述テ鷹經辨疑論ト號ス。

世云。仁德天皇十六年ニ摩訶陀國ヨリ越前國敦賀ノ津ニ着。其名ヲ駿王鳥ト號ス。鳥飼勾陣又名采毛ト云。姿ハ僧ノ如メ。大霰ノ紋付タル赤キモノヲ着テ。下ニモ黒キサシヌキヲ着タリ。帽子ヲス時ニ。公卿僉議アリテ其人ヲ選ミ。藏人政賴勅ヲ奉テ彼津ヘ行向トアルモノハ不㆓相應㆒歟。

或問。鷹ハ良相ヲ先トセンヤ。其術ヲ先トセンヤ。

答云。良相ヲ先トスベキ說モアリ。又其術ヲ先トセヨト云義モアリ。故ニ鷹經ニ仲尼ノ語ヲ取テ云。以㆑言信㆑行失㆓之宰予㆒。以㆑貌度㆑性失㆓之子羽㆒見タリ。タトヘバカタチヨキ物ノ其心アシキモノアリ。カタチアシクシテ其心ヨキモノアリ。シカレ圧識量ノ及ベキニアラズ。其掌飼熟手心術ヲ試テ好惡ワカルベキ歟

又問。鷹ヲ相スル法イカヾアルベキヤ。

答云。先タカハ其體大キナルヲ良トスベキヤ。經云。體ハ魁岩ナルヲ得ント欲セヨト云リ。大ナルトキハ威勢ヲ以テ鳥ヲシノギ。小時ハ鳥鷹ヲシノグナリ。然バ魁岩トシテ岩ノ大ナルヲミルガ如クナリ。

或問。前ニテミレバ胸腹アリテ羽翼ナシ。ソレルコト軒ノ如シト云。如何アルベキゾヤ。

答云。此文ハ鷹經ノ言也。胸ヒロクメムナソリタルヲ本トス。胸ヒロケレバ前ヨリ後ミエズ。軒ノ如シト云ハ。漢土ニ大夫ノ乘車ハ軒高シテ上ソリタリ。タトヘバヱガケル鳳凰ノ胸ノ如クナルベシ。羽毛ハウスク骨太カルベキナリ。

或問。鶱翥上ニ向タルヲ良ト云人アリ。又下向ヲホムル人モアリ。如何ワキマフベキヤ。

答云。經ノ文ノ如ク鞴ヨリ上時鶱翥上ニ向フヲ佳トストミヘタリ。下ニ向トキハ肩サキヲ以タカノ首スリテ拙トス。嫌タルナリ。經ノ說ニヨルベキ歟。

或問。軒羽ウツト云コトハ如何アルベキゾヤ。

答云。軒羽ウツト云ハ。鶱翥アガルヲ云ナリ。人手ヨリ飛退ントスルコトナリ。三條院ノ御鷹飼忠兼北山ノ邊ニ妻ヲ思ヒ懇ニカタラヒケルガ。思ヒスサメテ後。彼女ノ許ニ餌袋ヲ忘ケルヲトリニヤリケレバ彼女云。

　軒羽ウツマシロノタカノ餌ブクロニヲキヱモサヽデカヘシツルカナト詠メ返シケレドモ終ニ行ザリケル。此哥ノコヽロモ。思ヒノク鷹ト知タラバ。ヲキ餌ヲモチテナツケン物ヲトナリ。眉白ノ鷹ト云ハ。惣ジテウツクシキコトニ云付タリ。忠兼ヲ鷹ニナヅラヘタル哥ナリ。其時ヨリ置餌サヽズ餌袋ヲ思妻ト名付テフカク忌コト也。軒翥ト書テ軒羽ウツトヨムナリ。又アガリ羽フルトモ

ヨムナリ。文選ニ子虚ガ賦ニモ軒ノ字ヲアガルトヨムコト常ノコトナリ。鷹經ニモ軒翥ト書タリ。又云。西園寺相國ノ御哥ニ。餌袋ニカレカハキタル古置餌サシテ用ナキ身ヲゾ捨エヌトアリ。此心ヲモ置餌モサヽヌ餌袋ヲ忌コトナレバ。古ル置餌ナレドモ捨ズシテサシ置クトナリ。又云。キノフマデ野心アリシツミタカノイツシカケフハ軒羽ツツナリトアリ。是ハ掌飼ノ家ニ狩場ヨリカヘルトキ。呼カケテカヘルニ。家ノ軒ヲ入トテ。軒ヲスリテカケルヲ云。人ニナレタルタカナリ。又云。異説ニ野際ウツトモ意得タリ。

或問。鷹ヲ毎ニ飽メヨキ歟。飢メヨシトスヤ。

答云毎ニ上肉ヲバ其中ヲハカルベキナリ。白氏文集ニ樂天云。鷹ノ性ヲ制スルコト飢飽ノトキニアリ。飢スルトキハ力タラズ。飽タルトキハ人ヲソムクト云。又云。魏文帝曹太祖謂陳登曰。吾呂南布ヲ畜フ事鷹ヲカフガ如シ。飢スル則用ナシ。飽スル則揚去トアリ。長飢長飽コトヲ嫌ナリ。又文選云。飢タル鷹ハ吻キ瀆。寒タル鵙ハ雛ヲ赫トアリ。

或問。良相ヲ委別ルハ如何ヤウナルゾヤ。

答云。鷹經ノ如バ三段ノ鷹トテ。頭アヲノキ體ウツブキ腰タレタリト云トモ弱カラズ。此外ノ相形ハ他ノ良相ニ同ジ。蔓菁ナリノ鷹トハ上下毛羽トモニ短ク。剪ツメダルガ如クナルハ。鳥チカク起バ則トリ。遠ク逐フコトカナハズト云。鳧居ノ鷹ト云ハ。髀ト脛トヽモニ短ク。肘ノ骨カヾマリ。腰ツヨシ。古人是ヲ良トス。今ハ不可ナリ。但其人ノ好ニヨルベシ。凡良鷹ト云ハ。カシラ大ニシテ。頂平ニ中高ク。口ト頷トモニ大ナルハ良ナリ。眼ハ觜ヲハナレテ後ニ近。是ヲ鷲顔ト云

也。眼ノ光淸ク利ク。明星ノ如ク閑ニシテ動ジ。物ヲ見テ向ガ如シ。鼻ノ後眼ノ前溝フカク畝タカク軒廣シ。カヤウナルハ大物ヲ捉テ壽ノ相ト云也。幽明錄ニ云。楚王ノ鷹ハ頭ヲ軒眼ヲ澄テ遠ク雲際ノ鵰ノ雛ヲ下スト云リ。是ハ眼ノ光ノタヾシキヲ云ガ爲也。鵰トハ金翅鳥ノコトヽモ云。又金翅鳥ニ似タル鳥ナリト云說モアリ。威勢ノ大ナルコトヲ比シテ云リ。鼻ハ穴大ナルヲ良トス。鼻ハ息ノ出ル處ナレバ。トヲク飛トキハ。息ナガキニヨリテ良トス。愁毛ハ立ザルベシ。鳴聲ハ響タカキヲ良トス。觜ハ本濃末細ク黑シテ潤ヲ良トス。上觜ハ鸚鵡ノ觜ノ如ク。上ハ狹ク下大ナルモノヽ。下觜直ニシテ廣ク開テ見ルニ善ト云リ。頸ハ濃シテ長サ短サハ其タカノ體ニ相カナヒ。上頸ハタカフシテ鳥ノ卵ノ如クシ。又頸長スギタルハ樹ノシゲリタル中ヲ通飛コトヲ得ズ。短ハ又眞ノタカニアラズトソシレリ。肩ハ剛厚ク。二ノ翼節ハ薄クタレタルヲ佳トス。骨ハ大ニ長カルベシ。筋モ同ジ。ハラハ綻トテ器ノ中ノ如クウツケタルヲ良トス。腹大ナルハ壽ノ相ト云リ。腹大ニ骨筋短キハ飢易ク労易ケレバトモニ短命ナリ。背ハ溝アルヲ良トス。翼羽長シテ直ニ。鳩ノ羽ノ側タルガ如ク。尾ノ上ニ置タルヲ良トス。腹羽覆羽重鏤羽ハ皆薄クシテ覆ヘルコトツヽメ着タルガ如シ。羽葉ハ厚剛カルベシ。羽幹ハ甲ノ如ク又方ニシテ。羽次キビシキヲ良トス。凌風ノ羽ハ正ク翼ニ付ルガ如クナルベシ。尾ハ本末𪜈ニ濃カルベシ。承尾ハ柔ニシテ細ク白綿ノ如ク。尾魁太カルベシ。尾ハ班文箭像町像ナルヲバ古人是レヲ吉凶ニ關スト云リ。箭像尾ヲ凶トアレドモ。今按ズレバ吉也。臀ノ穴

大ナルヲ良トス。矢ヲツグトキ。漸ク尾ヲ擧テソルヒ動テ頭ヲ低遠ク放也。是臀ノ穴ノヒロキ故也。股ハナガクシテ外隆ンニオコリ甲ノ如ク。手ヲ以テサグリミレバ。肉ハスクナクスジ多ク肉タヒラカナルベシ。蒺藜ノホネハ背大ニ。肘ノ毛ハ後ニナビクベシ。脛ハ濃クミジカク。傍ヨリミレバヒロク。前ヨリミレバ細ガ如ク。肌皮鱗次イロコノ如クナルベシ。足ハ孫楚ガ鷹賦云。足ハ雙枯ノ如シト云テ。枯木ヲ二ツ並ベタルガ如シ。踝節大趺平ニシテ。若肉オホクシテ色ノ地黃ノ如クナルハ腫ヤスシ。指ハ節ヲ放テ大ニ間開テ十字ノ如クナルベシ。大指ハ前ニシテウチヽガヘヨ。爪ハ本フトク末細ク。上高ク下平ナルベシ。

右良相ハ鷹經ノ說ナリ。今按。此文ニ違ズバ最是ヲ良トス。但カシラ眼鷹經ニタガハズバ。餘ノ相形ヲバ云ベカラズトナリ。

或問。惡鷹ハイカヤウナルゾヤ。

答云。惡鷹ハ醜鷹ト云ナリ。(四字イ无)其形ハ頭ハ少シテトガリ。眼小ニシテ露ノゴトク。眼ノ後ハ溝穴ニシテ頂ニ近ク。鼻ノ穴窄シテ鳴聲美ナラズ。觜ハ小シテ仰ギ。頂細シテ撓。或ハ曲鉤ノゴトク。一ノ翼節骨ハ小ク。翼羽ハ短ク曲レリ。翼曲タルヲバ鈍羽ト云テアシキ也。腋羽覆羽ハ亂オコリ出テ。腰細ク尾ハ本細シテ末ヒロク。脾ハ短ク脛ナガク。兩ノ肘ウスク。兩ノ脚ハナレカヾマレルハ醜鷹ナルベシ。

或問。巢鷹羅鷹ヲ分別スルコトハ如何。

答云。巢鷹ハ鳥ヲ捉テ毛ヲ立人ヲフセギ。(五字マヽ)羽ヲ以テトリヲカクシ。人ノ手ヲトリ鳥シタルシ恒ニ鳴聲シゲシ。毛羽ニウルヲヒナシ。眼色足ノ鱗次ノ色カハレリ。羅鷹ハ毛羽ウ

ルソシク。サレタルガ如クニシテ鳴聲少シ。經ニハマレナリトイヘドモ。今按ズレバ。羅鷹モ手馴。又ハ巣鷹ニ繋並タレバ。聞ナラヒテ鳴コトアリ。又年ヲ經テモ毛羽ノ班文變ゼズ。少鷹ノ如シ。又眼色脚鱗次古クナラズ。

或問。巣鷹放ヨキヤ。羅鷹放ヨキヤ。

答云。巣鷹ノ性不同也。天性羅鷹ナレドモ快モアリ。巣鷹ナレドモ惡モアリ。今按。掌飼ノ上手ナルニヨルベシ。羅鷹ハ病付クコトシゲシ。飛アガリ面白キ羽ハ羅鷹ナルベシ。

〔原本此處ニ次ノ三挿圖アリ〕

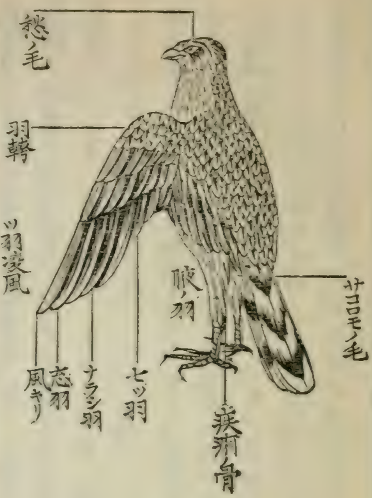
或問。昔天子ノ御狩ハ其列次第アリヤ。

答云。仁德天皇百舌鳥野ノ行幸ヨリ以來。代々宇多芹川所々行幸。其行列左ニ記ス。

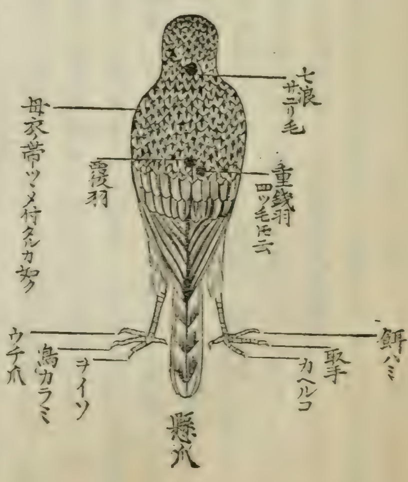
行幸次第

狩子ヲ先ニ立。犬飼ヲ次ニス。





犬飼。右ニ犬ヲ牽。左ニ白木杖。　鷹飼。鵠ヲ居随身也。　近衛次將列。
狩子。
犬飼。道ニテ鷹ヲ居。　鷹飼。鵠ヲ居。　近衛次將列。
殿上人童部餌袋ヲ付。馬ノ跡輿殿上人。
犬飼。道ニテ鷹ヲ居。　鷹飼。鵠ヲ居御。　近衛次將列。
狩子。　童部餌袋ヲ付左。
犬飼。右ニ犬ヲ牽。左ニ白木杖。　鷹飼。鵠ヲ居。随身。　近衛次將列。
御輿ノ後ヘニ中一行ハ公卿殿上人供奉也。



童部ノ裝束ハ狩衣大口ニ餌袋ヲ着也。随身ハ錦ノ帽子ヲ折烏帽子ノ上ニ着也。水干ニ下濃ノ袴。烏頭ノ太刀ヲ帶シ。猪ノ皮ノ尻鞘ヲ入。赤漆ノ餌袋ヲ着ル。何レノ色モクルシカラズ。鞴ハ青色也。絛ハス芳綟也。殿上人ハ冠纓ヲ巻テ。青キ狩衣ニ腰アテヲ帶ルナリ。

石ノ帶。野太刀ヲ帯シ豹ノ皮ノ尻鞘ヲ入。トラノ皮ヲモ用。赤ヌリノ餌袋ヲ着。條ハスハウ絨。韝ハ青色也。山ヘ入ルトキハ左ノ鷹飼先ニノボル也。右ノ鷹飼モ狩ニイリテ後ハ左ニ鷹擎ベキ也。源氏云。ミコタチカンタチメナドモ鷹ニカカヅラヒタマヘリ。珍シキ狩ノ御ヨソヲヒドモヲマウケタリト。李部王ノ記云。鷹飼親王公卿地摺ノ布衣及袴ヲ着シ。或紫木蘭地色綾ノハカマヲ用。小襖子ニ餌袋ヲ着トナリ。今按。是ハ王卿ノ鷹飼ノ裝束ナリ。布カリギヌノ摺ノ文アルヲ着ズ。ハカマモ用之。或ムラサキ木ラン地ノキヌノサシヌキヲモ着ハヨシトミヘタリ。襖子ハ下ニ重タル衣ノコトナリ。餌袋ヲ付ベシ。冠ハ纓ヲ卷也。又伊勢物語ニ云。昔仁和御門芹川ニ行幸シ給ケルトキ。今ハサルコトニゲナク思ヒケレド。モトヅキタルコトナケレバ。大鷹ノタカヽイニテサフラハセ給ケル。鶴ヲ付タル摺狩衣ノ袂ニカキ付タル。

翁サビ人ナトガメソ狩衣今日バカリトゾ田鶴モ鳴ナル。若カラヌ人ハ聞ヲイケルトナリ。行平ノ詠ナリ。又源氏云。ソヘノ鷹飼ドモハ。マシテ世ニ目ナレヌ摺衣ヲ亂キツヽ。イト氣色異ト見ヘタリ。又昌泰元年十月片野ノ行幸ニ。左ノ方ノ鷂飼赤白ノ橡ノ地色ノ摺衣ヲ着ス。右ノ方ノ鷂飼青白ノ橡ノ地色ノ摺衣ヲ着ストナリ。又西宮抄云。鷹飼。地摺ノ狩衣。綺ノハカマ。玉帶。鷂飼ハ青白ノ橡ノ袍。綺ノハカマ。玉帶。冠卷纓。下襲ヲ着シ劒ハ尻鞘アリ。王卿ノ鷹飼野ニ入テ後行騰ニ餌袋ヲ着ク。承保三年大井川ノ行幸ニ。鷂飼兩人皆雲客也。卷纓色々ノ狩衣ニハカマハ錦。タカヽヒ隨身四人錦帽子。狩衣ハカマ餌袋ヲ着ク。各犬カヒ帽子ヲ着ス。今

按。諸衛ノ鷹飼ノ装束先例イササカ不同也。又鷂飼ト鷹飼トノ狩衣不同。又云。昌泰記ノ赤白ノ橡ト云ハアカ色ノコトナリ。黄櫨ト茜トニテ染タル狩衣也。青白ノ橡ト云ハ青色ノコト也。苅安ト紫トニテ染タル狩衣ナリ。ハカマハ綺ノサシヌキ。玉帶。卷纓ノ冠。劒ハシリサヤアリ。此外ニカラニシキノ攝腰韝ハ承保ノ記ニ見エタリ。諸衛トハ六府ノスケ以下ナリ。源氏云。御サウゾクドモ皆直衣冠ノヨソヲイナドニ改給タルホドトヽ見タリ。

西宮鈔云。天皇白橡ノ御衣。注ニ延喜ノ御トキ。右近ノ馬場ニテ直衣改給フト見タリ。又云。昌泰元年片野行幸ニ赤白橡ノ唐綾ノ御衣ヲ着。御野ニ入テ後ハ狩衣ヲ着ル。今按。野ニ入セ給テ後。主上ノ御服ヲ御直衣ニ改ラレシ例モアリ。又狩衣ヲ召レシコトモアリ。

或問。武家ノ狩装束ハ如何ヤウナルゾヤ。

答云。武家ニヲヒテモ將軍家ノ御事ハ殿上人ニ准ズベシ。但トキノ位ニヨルベシ。其外地下ノ武士ナドハ其例慥ナラズ。隨身ニ准ズベシ。官位ニモヨルベキ歟。又無官武士ハ狩衣以下其例ナケレバ記スルニアタハズ。又犬カヒノ形ハ中卷犬ノ部ニ出タリ。又神家ニ云。鷹カヒノ装束ハフシクヽリノ水干ニ。大目結ノ赤根染ノ衣ニ。末濃ノハカマ帽子ヲ着ル。黒色。腰蓑ヲアテヽ毛沓ヲハク。餌袋ニハ雉ヲサシ。下毛ヲミセヨ。

或問。請取禮イカヾアルゾヤ。

答云。先韝ヲフトコロニ入テ出テ。右ノヒザヲツキ。タカヲ擎タル人ニ向テ。羽色息アイヲ暫ク見定メテ後。身ヲヒラキ袋韝ヲサス。口傳アリ。サテ開キ直テムカヘル人ノ右ノヒザノ

トヲリニ我身ヲ寄。右ノヒザヲ地ニツキ餌袋ヲ請取。身ヲヒラヒテ腰ニツケヨ。又下ニモ置。口傳アリ。次鞭ヲ請取テ腰ニサス。下ニモ置ク。次ニ右ノ手ニ條ノ末ノ人ノ手ヨリ餘リタルハシヲ取旋テ。左ノ手ニ條ヲ取テ足緒ノ際ヘセメヨセヨ。急ニ用足ヲフミコシテ吾拳ニヲクベシ。サテ本ノ如クヒラキテ條ヲカラミ訖テ。ムチヲ以テ掌前身寄ノ羽並ニ尾ヲナヲシテ禮ヲナシテ。口傳アリ。ヒダリヘ開テ立。又云。神家ニ云。餌袋鞭條何モ先ノ如シ。何モ貴賤ニ付テ上手下手。前ノ如クウケトリ訖テ。其マヽムカヘル人ノ左ヘ通シテ。人ヲ吾右ノ側ニナシテ。條ヲ卷終テ鞭ヲ以テ前ノ如ク禮ヲナシテ。右ノ身ヲ開テ立ナリ。口傳アリ。

或問。渡ス禮如何アルゾヤ。

答云。先右ノヒザヲツキ。餌袋ノ緒ヲトキ出ス。口傳アリ。次鞭ヲ以テ羽ヲ前ノ如ク直テ。ムチヲトリナヲシテ渡ス。貴賤ノ禮アリ。後ニ大緒ヲ解テ末ヲ指ニ纏。上下差別。サテタカノ方ヲ出スベシ。右ノ手ハ予ガ右ノヒザノクチニヒカヘヨ。渡シ畢テハ則遠クシリゾケ。但座敷ニヨルベシ。

或問。架ニツナグコト定レル樣アリヤ。

答云。定ル樣アリト云ハ。タカヲ居ル人先右ニ身ヲソバメテ。格ニ近キ右ノ手ニナガキ絆ノ兩ノ頭ヲトリテ。左右ノ手ハ格ニ及サズシテ三尺バカリ有テタカヲ放ヤレ。飛ニ隨テ拳ユルメヤリテ。旋子ヲ通行メタカノ架ニ集ル比ニ。左ノ手ヲ以テ格ニ支ヘ。右ノ手ヲ以テナガキ絆ヲトキ。則右ノ手ヲ以テナガキ絆ノ片端ヲ格ノ上ヨリトリトヲシテ。兩ノ手ヲ以テ共ニ帳ノ前ニツナギ付ヨ。若タカ遙ヨリ格ニ望テトビ向ヘバ。再三牽トヾコヲツテ後ニ放ヤルベシ。若飛向コト

ナクバ直ニ格ニイサシメヨト見ヘタリ。

或問。タカヲ格ヨリ下スヤウイカヾアルゾヤ。

答云。先トラント擬スル人ハ。身體ヲシヅカニシテ。右ニ身ヲソバメテ漸々ニスヽミ。肩ヲ格ニ近ヅケ。絆ヲトキテ右ノ中指ヲ以テ絆ノ片頭ヲ一纒メ。左ノ手ヲ以テ脚絆ヲ引貫テ。脚ヘ逼テ右ノ手トモニ攣。高クサヽゲテ格ヲ急ニサレ。若脚絆ヲ牽逼ザレバ鷹軒翥テ格觸テ悪シ。

右鷹經ノ語也。

或問。タカヲ放ツニ定ルヤウアリヤ。

答云。鷹經ノ如キハ其趣アリ。田ニ入テトリヲ捉ンナラバ。峯ニタカヲ放テ後ニ。靜ニ馬ヲトヾメテタカヲ送リミテ。目ジルシ訖テノチ。鞭ヲウツテ馳ヨ。未數歩ニイタラズ。轡ヲ案ジテ漸々ニ迫ヨ。タカノ草ヲ出テ起バスナハチ犬ヲ走ラシメテ嗅セヨ。若艸深メタカイマダ立ズバ。馬ヨリ下テ呼上テ後ニ犬ヲ縦ニヤレ。タカ早ク艸ヲ出テ木ニ集バ。即タカノ眼ノ向處ヲ明ニミテ犬ヲヤリ。嶮ヲ越エ鳥ヲ尋行バ。峯ニ立テ遙ニ聲ヲ揚テタカヲ呼ベシ。犬ヲ還呼ブニ。鷹或〔此下以經當入〕ハ呼ヲ待ズシテ犬ニ隨テ飛來ルハ搘「コトヲ用ヒザル者也。犬ト年ヲ經テ」調ヘ習ヘルガ致ストコロ也。如此ノタカハ先林木ノ中ニ放テ後ニ。犬ヲ走シテ鳥ヲ鬪シムト云リ。今按ルニ。文ノ如クニシテヨシ。若鳥疲頓ニ犬ニ噬ルベクバ。犬ヲヒカヘテ疲タル鳥ヲ起テ延テ放ツベキ也。若早キトキハ犬ニアヤマタル也。

鷹經ノ語也。

或問。タカヲ水鳥ニ放ツハ如何アルベキゾヤ。

答云。經ニ云。水鳥ニ放タント思バ。岸畔ノ陰ヨリ身ヲ踞鎮テ近ク倚テ。忽然トメ聲ヲ

揚ゲテ鳥起バ。即放テ遠近ニ替アリ。鳥ヲ獲テハ背ノ肉ヲ啄シムトナリ。今按。如文最也。畔ノ陰ヨリ聲バカリヲ揚テ鳥ヲ起ル也。鳥人ノ聲ヲウカヾヒテ人ノ上ヘ飛向ナリ。平場ノモノ何レモ其掌飼ノ心ヲ本トス。

或問。鳥ヲ獲テハ何モ同ジ處ヲ與フベキヤ。

答云。如經。雛雉ヲ得テハ先鞭ヲ腰ニ挾テタカヲ取リ。清水ノ上ニ往テ安座シ。左ノ手ヲ伸ベ鳥ノクビヲバツバサノ中ニツヽミ加ヘ取テ。鳥ヲ側ヲイテ鷹ヲ上ニ集サシメテ。刀子ヲ以テ胸ノ肉ヲ擺テ水ヲ灑テ啄シムルナリ。今按。文ノ如ヨシ。但數ヲ得テ捉トナラバ。鳥ノ丸ヲ抜テ百口啄セヨ。吻ヲスラセ手振ヲサセテ。息ヲ能ツカセテ又放ベキ也。肥タルタカニハ翼裏ノ肉ヲ少ヅヽ啄セテ行ベシ。血氣淺メ肉トナラハ(一ス雙鷹)。雌ヲ得テハ右ノ胸ヲ啄セヨ。雄ヲ得テハ左ノ胸ヲアタヘヨ。鵠ヨリ已下ノ鷹ハ皆小鳥ノ腦ヲアタヘテ狩ニ行ベシ。又鴨ヲ得テハ翼裏ノ肉ヲアタヘテヨシ。鴨ハ脂濃シテ血氣多シテ肉トナルナリ。又丸ヲ飼事ヲクハセスルト云ナリ。西園寺相國ノ御歌ニ云。

起鳥ヲ艸トルタカニクハセシテ觜スラセツヽ又ゾ狩行トアリ。丸ヲカクルトキモ。必水ヲソヽギテアタヘヨ。又云(一本)。

結ブベキ谷水モナク凍井又雪ヲクダキテタカヤカハマシトアリ。冬ナリトモ水ヲヨク飼ベキニコソ。

或問。タカヲ常ニ擘ベキコト如何ヤウナルゾヤ。

答云。羅鷹巣鷹ノヤウハ前ニ委ク起シ了ヌ。惣ジテ採繋ベキヤウアリ。古人云。鷹ヲ擘ント思バ睡眠シテハ先手ヲ洗也。酒ニ醉フコトナカレ。朝擘ヲセントスルトキハ。闇屋ニ

入テ架ニ倚テ鷹ヲ驚セ。若タカイマダ寢タラバ。ゼン〳〵ニ靜ニ驚カシテ。先明白ナル處へ出サズシテ。屋ノ裏ノコモリタル處ニ擎居テ。聲ヲ少開テ。夜ヲ明ルヲ見テ後ニ野ニ出ヨ。暗夜ヨリ俄ニ明白ナル處ニイヅレバ。鷹ノ勢ヲ失シテ魂ヲ亡スル也。魂ヲ亡スルニ依テ鳥ヲ取コト鈍キナリ。又云。夜明白へ出テ後ニ暗處へ俄ニ擎入コトモ亦勢ヲ失スルナリ。架ニヨルコトモ。野鷹ヲ取心ヲ以テ擎ヨリテ。朝日ニ向テ已ト羽毛ヲソロヘテ。手振シテ後ニ外架ニ繫グベシ。只拳ニテ日ヲ暮シ夜ヲ明スト。タカニ知セント思フベシ。常ニ架ニアルトキハ置餌ヲミスルコトナカレ。又生トリヲ見スルコトナカレ。每ニ呼テ甘餌ヲ少ヅヽ拳ニテカヘ。古人云。手骨ヲ飼ト云リ。手ノ内ニ食物アリト知セテ。人ノ拳ヲミテハ鷹ノ來ルヤウニセヨトナリ。又云。架拳ト云モ。動カサズメ架ノ如ニ臂ヲ可持ナリ。又朽(椿イ)木ヨリ枝ノナシ出タルヤウニ臂ヲ持ベキ也ト云リ。

或問。鷹ニ禁忌アリヤ。

答云。經ニハ十一ノ禁忌出タリ。一云。悲ノ本タル凶喪ノ家ナリトアリ。今按ニ。人ノ悲歎喪ノ人家ニ鷹ヲ擎テ行ベキニアラズ。古人獵ヲ止テ執擎コトナカレト云リ。二云。格帳ヲカケザルニ暫モ繫ガズトナリ。架格ニ觸テ傷ヲナス。三云。目病癡血痢ノ鷹ト〔平(此擎)(以擎書人)鷹ト格ヲ同スベカラズ。鷹ト〕鷄ト同ジ架ニツナグコトモ亦禁ム。大小ヲ害スル心アランガタメナリ。四云。喧塵燎煙燻徹戲謔ノ屋ヲ忌ム也。五云。鷹ヲ放トキ前ニアル物ヲ候ベシ。韝ヲ離テアタルニ依テ忌ナリ。六云。哺養ノ道ニ毛ヲ吐ヲ要トス。未ダ毛ヲ吐ザルニ早ク肉ヲアタフルハ。積漸ノ後終ニ勝

ヲヤブルナリ。七云。觜ヲ拭ニハタカノ進止ニ任セヨ。强ニ拭テアゲザレバ。觜ノ傍ノ毛脱テミニクキナリ。八云。タカヲ擎テ馬ヲ走スルコトナカレ。又驚懼スルコトナカレ。九云。穢タル器ヲ禁ズ。醎臰物ヲ忌。十云。汗膩タルモノヲイム。哺養ノトキハ手ヲ能洗ベシ。十一云。酒ノ毒熱ヲ禁ズ。最淵醉ノ人タカヲ擎ルコトナカレ。今按。條々不愼有ベカラズ。古人云。欲心ノ鷹飼ト不數奇ノ人ヲ嫌ト云リ。鳥ヲ得テ食フニ。道ハ如何ヤウナリトモ。又タカハ後ニ害アリ𪜈。我物ナレバ人尤ベキニ非ズト云ホドノ人ナラバ。無益ノコトナルベシ。

或問。鳥ヲ得タルニ首ヲ左ニスルコトハ便アルヤ。

答云。子細アリ。禮記曲禮云。禽ヲ執者首ヲ左ニストアリ。是ヲ以首ヲ左ニスルナリ。

或問。タカニ水ヲ浴スルコトハ如何哉。

答云。毎ニ水ヲ浴スルヲ良トス。シカレ𪜈經云。鷹ノ慾否ニマカセヨト云リ。水邊ニ擎ヨリテ見テ浴セントセバ浴セヨ。但タカノケガレタルトキハ。强ニ浴ヲ良ト見タリ。今按。鷹經ノ語最宜シ。但シ肥タルタカニハ冬ノ日モ浴スルコトヨキナリ。ヤセタカニハ寒日ニ浴スレバ餌ヲ持コシテ肉ヒクナリ。冬ノ日ニ鷹ヌルレバヨク〳〵アタヽメヨ。

或問。タカニ水ヲ吹コト如何哉。

答云。水ヲ吹コト經ニハ不見。古人用之タリ。今按。是ヲ試ムルニ。肥タルタカノ肉タカキトキニ。先口ヲシゲク漱テ。タカノヨクヌルヽホド吹ベキナリ。ツカフトキハ湯ヲフクナリ。サテ外架ニツナギテ朝日ニムカヘヨ。油引ヲセバ野心モウセ肉モヨクナルナリ。又痩鷹ニハ嫌フ。

或問。タカニ夜アラシヲカフヿ如何哉。

答云。古人モ萬病一藥トホメタリ。然バ常ニ夜嵐ヲカフベキナリ。今按。心アシキタカニハ飼コトナカレ。巣タカニハ心ヨキナリ。羽筋モツヨク觜爪モ潤澤ニシテ誠萬病一藥ノ證アリ。爰ニ古人云。羅鷹山回ナドノ心アシキニ夜アラシヲカヘバ。醉狂人ニ酒ヲスヽムガ如シト云リ。何ゾヨカランヤ。

或問。常ニ擘ヲヨシトスルヤ。又架ニツナイデヨシトスルヤ。

答云。タカハ常ニ擘コトヲ良トス。古人云。愛〆其惡ヲシリ。惡テ其善ヲ知ルト云リ。今按。タカヲ擘ルヲ良ト云ヘドモ用捨アリ。心フカキタカハ常ニ擘ベキナリ。常ニ味ヨキ口餌ヲカフベシ。人吾ヲ愛〆アハレムトシラセヨ。掌飼モ朝夕擘テコソ鷹ノ性ヲバ善トモ惡トモ可知コトナレ。コトニ鷂已下ハ朝夕擘レバナツケ藥トナルコトナリ。

或問。火ニ近ヅクルコト如何アルゾヤ。

答云。瘦鷹又ハ小タカナドハ寒夜ニ繋ヲケバ。寒クシテ餌ヲ持越テ惡シ。架ノ下ニホノカニ火ヲ置テ終夜ヲクベシ。又火邊ニ居テヨイノホドヲルコトモアリ。又曉スベテ火ノ邊ニ居ナリ。但古人ハ荻ノタキ火ヲバ七間ヘダツト云リ。今按ニ面ヲ火ニ向フルコトナカレ。

或問。夏養ノ鷹ノ出入ノ比アリヤ。

答云。經ニモ羽毛初テヲツルトキ入ヨトアリ。四月下旬五月上旬也ト云リ。又四月八日。十三日。廿五日良辰ヲ撰デ。狩場ニテ北ヘ起ツ雌ニ合。取飼テ鳥屋ニ籠ナリ。是ヲ忘飼ト云ナリ。又云。五月五日ニ鳥屋ニコメテ九月九日ニ出スコトアリ。又云。鳥屋ヲ出スニハ。七月十五日ノ靈供ノ箸ヲ。タカヌシ生

氣ノ方七軒ノ家ノ箸ヲ取テ燈テ。戌ノ日戌ノトキ出ス也。或ソト婆ヲモ燈也。鳥屋出ノタカヲ捉飼ニハ。南ヘ起飼ニ放テ取飼也。是ヲ初鳥狩ト云ナリ。十月ニ鳥屋ヲ出スコトモアリ。巣鷹ノ毛モロキハ四月ヨリ入テ七月ニ出〆ヨシ。羅鷹山回ノ毛カタキハ五月五日ニ入テヨシ。六月ニ入テ十月ニ出ストキハ。炑風ニアタリテ毛羽ヨク落ルコトアリ。然バ白氏文集ニ十月ニ鷹籠ヲ出ヅト見タルモ此意ナルベシ。

或問。タカノ歳ニヨリテ文字替ルコトアリヤ。

答云。先周禮ノ說ニヨラバ。一云題肩。二云往鳥ト云也。陸佃云。一歲ヲ黃鷹ト云。二歲ヲ鴘鷹ト云。三歲ヲ鶬鷹ト云。今通〆是ヲ角鷹ト云也。其故ハ頂ニ角ノ如ナル毛アリ。シカレバ角鷹ト號ス也。タヾシ近クマタカニ用ナリ。又云。左傳ニ云。爽鳩トハ鷹ノ名ナリ。又云。毛詩云。本ハ雁ニ作ル。後人鳥ノ字ヲ加ルナリ。今按ニ。黃鷹ヲ若鷹トヨミ。鴘鷹ヲ片カヘリトヨム。鶬鷹ヲモロカヘリトヨム。尤タヾシキ說ナリ。野曝ト云ハ今年ノタカヲ冬取タルヲ云。山回ト云ハ年ヲ越テ毛ヲ山ニテカヘタルヲ云。小山回ト云。若鷹ノ歲ヲ越テ二才ニナレドモ。毛ヲイマダカヘザルヲ云儀也。タカノ字ハ大タカトヨミ。兄鷹ト書テハ少トヨミ。隼鶻ノ二字ハ、ヤブサナリ。又花隼ト云。隼ヲバ大小ト云也。又鶻ノ字ヲ大タカトヨム也。又鷂ハハイタカ也。又兄鷂ハコノリ也。雀鷂ハツミ也。鷂ハサシバ也。又差羽トモ書也。零鳥鶉ハエツサイ也。兄又鶉モエツサイトヨム也。又俗ニハ悦哉ト云也。兄又鶉ヨリ細クチイサキタカヲ木ノ葉鷹ト云也。カヘリタルハ木ノ葉カヘリト云ベキカ。雄ヲ兄鷹ト書コトハ。巣ニテ

鷂ヨリ早ク大ニナルニヨリテアニ鷹ト書也。又佐保姬鷹トハ黃鷹ヲ春トリタルヲ云也。昔奈良ノ京ノトキ。佐保山ハ都ヨリ東ニアタレリ。春ハ東ヨリ來也。然バ春得タルタカヲ佐保姬鷹トハ云也。

或問。代々ノ奇鷹アルニヤ。

答云。唐善トハ甲斐國ノ山中ト云所ノ巢也。古宇治ノ寶藏ニ唐善ヲ曝涼セルヲ野鷹來リテ捉去ヌ。其後彼山中ノ本巢ニ此善アリ。シカレバ唐善ト號スル也。又云。韓巻ハ唐國ノ鷹也。小一條院ノ御鷹也。小一條院ト申ハ三條院ノ御子。諱敦明。即但シ給ハズ。寬弘八年十月五日親王トナリ三品ニ叙。寬仁元年八月九日號ニ小一條院。鷹政ヲコトヽシタマヘリ。藤澤。藤花。山娥ナドモ此御時ノ奇鷹也。又云。人皇六十六代一條院（御諱懷仁。）即位七才。此御時ハ鳩屋。（出羽國平賀。）赤日。鶴腹。（鯉丸ナリ。）如此名鷹アリ。鳩屋トハ廿鳥屋ト書タルモアリ。此タカ兄鷹ヲ鷲ニ捉ラレテ。思イキドヲリテ一夜ニ紅文トナリ。後ニハ八幡ノ寶前ニ鳩トヒトシクコモリテ。ツイニ神力ヲ以テ彼鷲ヲ捉タリ。是ヨリシテ兄鷹鳥屋た又鷲取トモ云。又紅文トモ云也。クレナイフト云コトハ。此タカニカギリタルコトナレバ。今ノ世ニアルコトナシヤ。夫木集云。

カクモコソ鳩屋ト名ヲモイハザラメ八幡ノ宮ニ鈴奉ルト。僧正公朝モヨミタリ。又二條攝政ノ連哥ニ云。

ケシキハイカニ紅ノタカ

トアリ。

又云。鶴腹ト云ハ鶴トヽツギテ生タル鷹ナリ。神泉苑ノ池ニテ鯉ヲ取テヨリ鯉丸トモ號スル也。又此トキニ獺丸トテ獺トヽツギタル犬ヲ奉ケル。江州大津ヨリ出タリト。哥

云。

アライソノ鵤ノ巣タカトリカヒテ獺ノ子
姙ム犬ヲ尋テ

又云。野守ノ鏡ト云コトハ。昔雄略天皇ノ御時。春日野ニテ御狩シ給トキ。御鷹ミヘザリケルニ。或翁タマリ水ヲミテ。御タカ是ニアリト申スニ。ヲボツカナク思給ケレバ。上ノ木ニ御タカアリテ。其形水ニウツリテ見タリ。

或説ニ。唐ニ箸鷹野ト云所ニ鬼有リテ。往來ノ人ヲ取食故ニ。四方ヨリ火ヲ放テ燒トキニ鬼ガ云。我君ヲ守ラントト誓テ。マス鏡ヲ出シタルニ依テ也ト。是ハ鷹ニハ用ヒザル也。

或問。葱文ト云ハ何トキリタル文ゾヤ。

答云。葱文ト云ハ尾ノ文ニキルナリ。葱艸ノ文ノ如キナリ。



是ハ今ノ世ニ葱ト云ハ古ノ忘艸也。今ノ忘艸ト云ハ古ノ葱艸也。故ニ今ノ忘艸ニ似タルヲ葱文ト云也。伊勢物語ニハ萱艸ヲ忘艸ト云。又萬葉集ニ葱艸ヲ紫苑ト云。又鬼ノシコ艸トモヨメル也。又説ニハ葱艸ト云ハ一艸ニメ二名アリト云リ。又詩ニハ忘憂艸ヲ川タリ。

或問。箭像尾ト云ハ如何ヤウナルゾヤ。

答云。箭カタオト云ハ箭ノ像ニ似タルヲ云ナリ。鷹經ニタシカナリ。背文トモ云。



又云。屋像尾トモイヘル也。鷹經ニハ差ト云

尾。代々ノ哥人モ屋ノ像ニヨミナセル上ハ。何ゾ捨ベキニアラズ。シカレバ二ツナガラ用タリ。新拾遺集云。
ミシマノヤクルレバ結ブ屋像尾ノタカモ眉白ニ雪ハフリツヽト。前大納言爲家ノヨミタマヘル也。
又左ノ如クナルヲマ子屋〔尾像〕ト云ナリ。

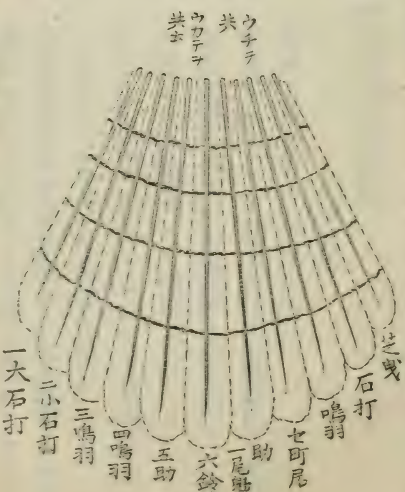


或問。町像尾ト云ハ如何ヤウナルゾヤ。
答云。町像尾トハ田ノ町ノ如クキリタル文ナリ。鷹經ニ幢ナリ。



如此一文字ニキルナリ。又タガイチガイニキル如左ナルモ云ベシ。





或問。白タカニハ見所アルコトニヤ。
答云。白タカトイフハ見所アリ。毛羽ノミナ白キヲ雪ト云リ。背青メ鼻ノ毛白ク。七ツ羽

ノ端ノ白深ク。重錢ノ毛七浪ニイタルマデ。毛サキノ白ミ深キヲ青白ト云リ。
又云。白キトコロイヅレモウスアカキヲバシボト云也。夕顔ノ花ノ白ミ深クウスカキノ色ナルハシボナリ。尙ウスキヲ小シボト云フト。シカラザルハ大シボト云ベシ。
又云。先雪白ト申ハ。永和ノ頃二條關白良基公ノ白鷹ノ記ニ委ク見タリ。其語云。爰ニ甲斐國武田伊豆守信春奉ル所ノ白鷹。其相鷹經ニ叶ヘルノミナラズ。其毛雪白ト云ツベシ。誠楚王鵰ヲオトセル良鷹ニコトナラズ。首頸ハ白綿ヲカブレルガ如シ。羽毛ハ班綾ヲ着セタルニ似タリ。首尾三尺ニヲヨベリ。遠クシテハ羽毛多ク。近クシテハ羽毛少ク。前ニムカヘバ腹ノミアリテ羽翼見ヘズ。ソレルコト軒ノ如シ。項平ニシテ中高ク目光明星ニ似タリ。眼ウヽゴカズメ人ニ對セリ。亂鼻愁毛白糸ノ如シ。目前ニ溝隴タカク瞻ヒロシ。鼻ノ孔廣ク大ニ。嘴クロク潤ヘリ。頸アツクヌケ出テ鳥ノ卵ノ如シトナリ。雪白ト云ハ觜爪ハ黑シテ全體ハ白キナルベシ。
又云。白タカヲシラ毛トモ云也。惣ジテ文ガハリトモ云ベシ。千載集云。

ヤカタ尾ノ白毛ノタカヲヒキ居テ鳥タチノ柴ヲカリ暮ツヽト顯仲モヨメリ。

又云。羽筋白クシテ夕顔ノ花ノ白ミフカク。四方フクリンノ如ク白シ。觜根白ク羽裏ニシルシアリ。

鷹經辨疑論中

或問。田ニ入テ鳥ヲ捉コト多少何ヲ好トスルヤ。
答云。經ニハ田ニ入テ鳥ヲ捉ニ。或多或少。少ヲ好トキハ「快コト常ニアリ。」（上下朱分經ニ幣在慣常見タリ）故殿後チ

ニ流利ニアラズ。多ヲ好ム則ッカレ繋ヲ厭フ。終ニ快キ理ナシ。故ニ多ト少ト時ニシタガッテ中ヲ折ベシトアリ。今按。古人云。一日ハ一ッ。二日ハ二ッ。三日ハ三ッ。四日ハ一ッ。五日ハ五ッ。六日ハ一ッ。七日ハ二ッ。八日ハ二ッ。九日ハ三ッ〔ツ歟〕。十日ハ一ッ。又五ツヲ提飼ト云ヘル。五日ヨリ多ハ嫌ヘルナリ。然バ中ヲ折ベキヲ善ト云ナリ。爰ニ楚ノ使ニ子虛ヲ齊ニツカハス。齊王事々シク車騎ヲ發シテ使者ト出テ畋ス。田罷テ子虛烏有先生ニ語ル。時ニ烏有先生問云。今日ノ畋タノシカリキヤ。子虛云。樂シカリキ。獲多ヤ。云。少カリツ。シカレバ何ゾ樂シカリツル。云。齊王僕ガ爲ニ車騎ノ衆キヲ以テ而モ對スルニ雲夢ノコトヲ以テ事トシツルヲ樂ムト云リ。其ヱモノ多ヲ思ハズ。其畋ノヨソホイ嚴重ナル趣ヲ擧タリ。

又云。寛平ノ宮瀧ノ御幸ノ儀式ニハ。都ヨリ出御ノ日ハ先栗栖野ニテ小鷹狩アリ。左右鷹飼九人ヅヽナリ。左ノ方ハ小鳥ノ數九十四トウサギ一ツトル。右ノ方ハ小鳥九十一ト鶉一ツヲトル。コノ時兎ハ小鷹ノ獲ニアラズ。鶉一ツハ小鳥五ツニアタルトテ。右ノ方勝ニ定ラレテ勅祿ニ預ル。如此勝負ナラバ多ヲ厭コトナシ。是モ小鷹ノコトナルベシ。此儀式ハ北野天神紀。長谷雄卿ノ記シ給テ末代ノ龜鑑タルモノナリ。

又白氏文集ニ百ニ擲テ一ツモ遺スコトナシト云ルハ。タカノ心術ヲ美稱シテイヘルナリ。アナガチニ放テ捉コトニハ非ズ。然バ上卷ニ禁忌ヲ立タルニモ慾心ノ鷹飼ヲ出タリ。可愼者也。

又云。兄鷂ニ百寄ト云コトハ。子リヒバリノ時分放テ捉セラル。又春ハヱリヒバリト云

ベシ。其故ハ巢立シタル雛ノ羽弱ナルヲ撰テ放スレバ撰雲雀ト云也。

或問。脚絆ヲ着ル法アリヤ。

答云。定レル法ハナシ。然ドモ經云。先正ク鷹ヲ擎テ背ヨリ傅之。鷹經ニ舊絆ノ上ニツクト。抉ヲ以テ革ノ表ヨリ抉。脚纏ノ本ノ孔ヲヨク抉リテ。脚纏ノ末ニ指入テ紙針ヲ牽通シテ。次ニ杖ヲ以テ脚纏ノ末ノ穴ヲ抉リテ。繫把ノ末ヲ指入テ逼來。若澁バ鐵筋ヲ用フ。洗革ノ和ラカナルヲ以テ繫把ノ末ニ蠟ヲツケヨ。革ヲ裁コトハ。礁ノ上ニ革ヲ置テ。一寸五寸分刀子ニテ脚纏ノ本ヲ割開テ。翦裁テ山形ハ椿ノ葉ノ如ニス。長短ハ鷹ノ脚頭イ大小ニシタガフベシ。脚纏ノ末ノ穴ヨリ以三分。鷂ハ二分也。今按。經ノ如クナルヲ用ベシ。然レドモ其掌飼ノ流ニ聊不同アリ。經ニモ長短ハ鷹ノ大小ニヨルト云ヘリ。

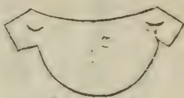
又云。足緒ノ革ハ薰革。洗革。色革。若鷹ニ用之。藍革。若鷹鳥出用之。表ヲ裏ニナスコト也。鷹ハ脚纏ノ廣サ一寸五分。長サ二寸。（二寸[illegible]）繫把ノ長サ七寸五分。鷂ハ廣サ八分。長サ五分。繫把六寸五分。經ノ説。又云。六寸二分。家説。又云。五寸五分。鷹ハ八寸二分。家説也。兄鷹ハ七寸五分。家説。短ハ脚腫ルナリ。又云。白鷹ノ脚絆ハミナ白革ナルベシ。赤革黑革ヲ用ベカラズ。

脚纏之形。椿ノ葉ノ如ク用也。



禰津神平貞直流

・又云。綴脚（ツマリアシ）ト云テ。脚纒ヲ錦金襴綾ナド重テ縫物ニシテ。引緒ヲバ綵色ノ革ヲ以テ常ノ如クスルナリ。



或問。鈴着ルコトハ如何樣ナルゾヤ。

答云。經ニ云。タカヲ捉俯テ着ント擬スル人。左ノ手ヲ以テ。右ノ手ニ錐ヲ持テ尾魁ヲ（披緊）救拂テ。水ヲ毳ニ着テ撫デフセヨ。若不伏トキハ切去テ葉ヲ鈴繫ノ尾ノ上ニ挾ム。葉ト云ハ大黐樹ノ葉ヲ煮テ陰乾ニシテ鈴持ニ作ル。凡剪葉廣方二寸。鷂ハ一寸五分。今按ニ。黐樹ノ葉得ガタキニヨリテ吾朝ニ用ヒズ。漢土ニ是アリ。方二寸ニキルト云ハ大ナリ。鷹ニ似合テ少ツヽムベシ。

又云。越前ツルガノ津ニ着ケルニハ鷹兄鷹バカリナリ。其トキノ葉ノヤウハ。尾魁ノ長サニ鈴持ヲ用タリ。表ハ五面革。ウラハ黒革ヲ合セテ蠟ヲ以テ重タリ。今世ノ笠袋ノミセカハノ如ナリ。鈴ツケノ糸ハ紅ノ卷上ノ糸也。九ツ組ナリ。總ハ尾ノ中ノ文ト同ジカリシヲ。飛ニサハリアリケレバ。漢土ニテ和戒傳ト云人切約シヨリ切裝束ト云。又燕ニ像シヨリ燕裝束トモ云。鼠緒ノハサミテサケタルヤウニスル也。（經ノ說也。）長ハ二ノ斑文ニヲヨボストナリ。是ハ半裝束トモ又和戒傳裝束トモ小革裝束トモ云也。

又云。鼠緒ハ鷹ハ一寸八分ナリ。

又云。鷹裝束ト云ハ鈴トヲシ計也。小裝束トモ裸裝束トモ小革裝束トモ云ナリ。

又云。鈴サシトモ鼠尾トモ鈴トヲシトモ云也。

又云。經ニ革ヲ裁ハ圭頭ニメ本ノ頭ヲ殺ト云リ。彩色革ノ柔軟ナルヲ以テスルナリ。マヅ右ノ革ヲ截。左ニカタナヲ側テ外ノ編ヲ剪。刀ヲ正クシテ内ノ編ヲキル。穴ヨリ端二分。鷂ハ一分トミヘタリ。今按。タカニ色革ヲ用ルハ此故ナリ。

又云。古人云。鼠緒二寸五分鷹ナリ。又人サシ指ノ長サトモミヘタリ。兄鷹ハ二寸二分也。經云。鳥莖ヲ造ラバタカノ第二三ノ羽根ヲ用ユ。長サハ一寸四分。鷂ハ鴨ノ第一二三ノ羽根ヲ用ユ。長一寸。今按。一寸四分ハ長シ。ツヾメテ八分バカリニ用ユ。鷹ニモ鴨ノ羽ノ莖ヲ用。

右條々記ストイヘドモ。其詮ヲトラバ切裝束ヲ用テ寸尺ヲ定メズ。鷹鷂ノ大小ニ隨テ長短ヲ以テ似合テ用ベキ也。特ニ鷂已下ニハ定ル法ナシ。トキニ依テ掌飼ノ心ニ任ベキナリ。

裝束ノ次第

小鳥裝束ト云ハ。月卿雲客ノ小鷹ナドニ金ラン錦綾ナドヲ以テ小鳥ノ毛ヲカサネ鈴持ヲセラレシナリ。

野小鳥裝束ト云ハ。野小鳥ノ頷ノ皮ヲハギテ鈴シキニ用ヒ。下ニハ角ヲ重ヌベシ。鼠緒ハウス紅ノ糸ナルベシ。

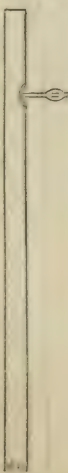
袙裝束ト云ハ。鈴シキ綾織物ヲオモテニ用テ。ウラハ柳色青地ノ錦ヲ以テスヘテ。鈴ツケハ紅ノ巻上ナリ。

子飼裝束ト云ハ。鈴着ノ緒ハクスベ革或洗革。鈴持ハ表錦革ウラハ五面革。ミナウラハ白革也。

蓮雀裝束ト云ハ。鈴着ノ緒ハ赤革。鈴持ハ連

雀ノ尾ノ前ノ赤キヲ蠟ヲ以テ並ベテ。上ニ樫鳥ノ肩サキノ青キヲ重ル也。
トッサカ装束ト云ハ。雉ノ面皮ヲハギテ着ケ。小サキ毛ヲモハギ付ヨ。スヾツケハ藍革ナルベシ。
樫鳥装束ト云ハ。樫鳥ノヒウチ羽ヲ取テ重テ鈴持ニシテ。鈴着ハ色々ノ糸ヲ組テ用ユ。是ハ若殿上人ノツカヘルナルベシ。
或問。鞭ノ寸尺定レルヤ。
答云。鷹經ニ定レル法ハ出ズ。鷹ヲ擎テ鞭ヲモツコトハミヘタリ。今按。古人云。鞭ハ或人說也。二尺八寸。二尺五寸五分。鷂ハ三尺。鷂ナドハ掌飼ノ心ニマカスベシ。本ヲ一文字ニ四方ヨリ切テ小角ヲトルベシ。前ヲ扣クベシ。漢土ニハ甘艸ヲ以テ作テ用ユ。則藥トナル也。
又云。寸ヲ秘シテ本ヲ五分ソギタルモアリ。私ニテ子細ハナシ。鄙語ナリ。

又古人云。鞭ノ寸ハ不定也。鷹飼ノ矢束ニクラベテ切テ。黒皮ヲ去ラズシテ前ヲソギテ。本ヲ一文字ニ四方ヨリ切ナリ。是ヲ神平貞直秘シタリ。餌ジミヲ洗フニハ。鳥ノ羽ヲトリアツメ。篦竹ノ如クナル竹ニ入テ。鳥ノ羽ノ長サ一寸バカリ出シテ。柄ヲバ一尺ホドニ切テ。餌袋ノ側ニ指シ入テ。ケガレタルヲ洗フナリ。
又家說ニ。鷂ノ鞭長二尺五寸。一尺三寸。三尺四五寸。一尺七寸。或八寸ニ用ユ。
又云。鞭ニ緒ヲ付ルハ。本六寸ヲキテ穴ヲアケテ。韋ヲ引トヲシテ。革ヲ二ツニ破リ。輪ニナシテ捻ノ代ニ用ユ。羅鷹又ハ心フカキ鷹ニ用ユ。


田物ナドニ用ヒテ佳也

亦云。捻ノ代ニ左ノ如ク切革ヲ以テ
輪ニス。



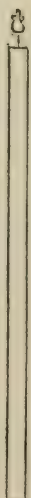
鶉ノ頸ノ入ホドニ用。

或問。捻ト云ハ何トコシラヘテ良ゾヤ。
答云。捻ト云コトハ經ニハミヘザルナリ。吾
朝ニテ鶬已下ヲ馬上ニテ放トキ。直ニ馬上
ニ擘取ンタメニ作リ出スモノナリ。尤便ア
ルコトナリ。タトヘバ後ニ記スガ如シ。又上
木トモ云也。

鶉ノ頸ノ入ホドナリ。



鏇ヲ以テ作也。ワタリノ寸　一尺ニウ
チテ。四寸ヲバ箆ノ中ヘ入ヨ。
又云。大ホウ捻ト云ハ。



ワタリノ寸前ニ同。上ノ糸ハ馬ノ尾
ヲ捻合テ鶉ノ頸ノカヽルホドニ用ル。
中ヲウツボニクリテ。
中ヨリ馬尾ヲ引通也。



又云。拔出スヤウニツクル也。



又云。竹ヲ以テ左ノ如クスルナリ。俄
ニ野ナドニテコシラヘテヨシ。常ニ
モ用ナリ。



右何モ鐵ノ七尺五寸ナリ。或五尺七
寸用之。

又云。才拔ト云ハ。巣鴿ノ鳥ヲ從テ馬ニツケ上ルヤウニオシヘ習スルナリ。長サハ鞭ニ同ジ。銅ヲ以テ鐶ヲスル也。オイマダ熟セザルトキ。ヘヲ、引トシテ拳ヘ上テ調ルクワンナリ。



右條々漢土ヨリ渡タル法ニアラズ。吾朝ニテ作リ出ス者也。掌飼ノ心ニヨリテ可用次第アルベキ歟。

或問。絛ノ尺ハ如何ホドナルゾヤ。

答云。經ニハミヘズ。御狩記ニミヘタルハ。色ハ蘇芳緂。左右ニ捻合テスヘホソカルベシ。爰ニ上古帝皇ノ御衣ノ袖ノヘリナル糸ヲ取テ鷹ヲ繋初給シヨリ如此用ヒタリ。此糸ヲ緣ノ糸ト云。又絆トモ書タリ。〔旋子バカリニ限リテモトヲシト云ベキニ非ズト云リ。〕スゞシノ糸ナルベキナリ。長サ鷹ハ五尺二寸。又六尺六寸。異說云。五尺五寸八分。兄鷹ハ四尺五寸。鷂ハ三尺五寸。或ハ八寸。

又云。カブリ革四寸二分。又シグクチトモ云也。

又云。ヒコノ緒四寸。又コツチノ緒トモ云ナリ。彦ノ緒ノ輪ノ寸二寸二分ナリ。

或問。格定ル法アリヤ。

答云。經ニハ出ズトイヘドモ其法度アリ。家ノ人々代々用ヒタマヘルハ。居架ノ高サ四尺二寸。横木六尺二寸。柱ノ外五寸也。櫪杉ヲ用ユ。架布ハ淺黃ニ犬ノ足跡ヲ白ク付ベシ。タカニ用ユ。

神家ノ說。高サ四尺一寸。横七尺。柱ノ外三

寸八分。
又云。格布ハ四尺八寸。或ハ横布三幅。或ハ廣サ三尺タテ布ナリ。
又云。二ッ架ノ長サ一丈七尺。木口三寸。木ノ本ヲイヅレモ掌崎ニ立ベシ。本ニ鷹ヲツナギ。末ニ兄鷹ヲツナグナリ。ツナギヤウ常ノ如シ。又本ニ兄鷹ヲツナギ末ニ鷹ヲツナグベキ也。
又云。條ヲ鷹ハ右寄ノ格横ニ末ヲ結付ルナリ。兄鷹ハ左ナルベシ。
又云。鷹ノ鞭餌袋ヲカケルコトハ。餌袋ヲ掌崎ヲ架ノ前ニカケヨ。口ヲ前ヘナス。鞭鞴ハ身寄ヲ架前ニカケヨ。鞴架前ニ入テヲクベシ。
又云。兄鷹ノ餌袋ハ身寄。鞭鞴ハ掌崎ナリ。
鷂ノ架高サ三尺五寸。横木五尺五寸。柱ノ外二寸五分。一方ナリ。木口一寸三分。架布四尺二寸。横布ナルベシ。
異説ニ架布ヲ末濃ニ用コトアリ。
又云。鷹ノ格帳ハ眞薦ヲ編テ用ユ。三文五文歟。格衣トモ云也。古ヘ主上御衣ノ袖ヲ解テ格帳ニシ給ショリ格衣ト云ベキナリ。
又云。挊架ト云テ差羽ナドヲツナグニハ。高サ一尺二寸。横木一尺二寸。中ニ柱タツ。廻ルヤウニコシラフルナリ。臺ニ鐶ヲシテ臺ニツナグベキナリ。
式架ト云ハ。檜木ヲ圓ニ削テ。クロヌリニシテ錦ニテ包ベシ。又綿ニテモ包ナリ。架タレニハ豹ト虎ノ皮二枚合テ兩面ニシテ。唐糸ニテ五處ツルベシ。錦ニテモ絹ニテモ皮ノ上ニカケテ。絹ノスソニ銀ノ岩ヲ綱ノ岩ノ如ニシテ。一方ニ十二ヅヽウラ表廿四ツケヨ。糸ニテ五處ツルベシ。
或問。鷹飼ノ杖如何ホドナルゾヤ。

答云。經ニハ長短出ズ。神家ノ說云。長サ三尺五寸。

又云。乳ノ通リニクラベヨ。杌指ノ下六寸。杌指ノ長サ一束ナリ。又カツ杖トモ云ベキ也。

又云。犬飼ノ杖ハ七尺五寸。或六七寸。又笠ノ端ニナゾラヘテ切ルベキナリ。杌指ノ下六寸。杌サシノ長サ一寸。或手一束ナリ。木ハ梅ナルベシ。

或問。犬飼ノ作法次第アリヤ。

答云。犬ヲ放チヤルニハ。山口ニテ草ヲ扣キテヤルベキナリ。童子杖トイフ。犬ヲ草ニ入ルトモヤルトモ云ベシ。

堀川ノ後百首ニ。

イトヾシクヲノガアリカヘヤル犬ノコヽロアリヤトヽリノナクラシト俊頼ノヨメリ。爰ニ犬ノ吾朝ヘ渡リシハ。神光ト云人黑駿ナル犬ヲ牽テ敦賀ノ津ニツキタリ。名ハトマホコト云ナリ。勞リテハイサヽカモ草ヲ踏シダクコトアルベカラズ。犬ノハナヲアヤマタザルヲヨシトス。新葉集ニ云。

箸タカノ狩バノ雉子ノ落草ヲ吹ナミダリソノベノ夕風ト中納言爲忠ノヨメリ。風ヲサヘ吹ナミダリソトイトヒケレバ。イカデカ艸ニアラクフミ入ベキヤ。又嗅捨ル犬ハ必身振ヒヲスル也。是ヲ以テ捨ルト捨ザルトヲ可弁也。西園寺百首ニ云。

寒キコト我ニヤ似タル嗅スサム犬サヘモ又身ブルイヲスルト相國ノ御詠ナリ。又鳥跡ニアタラヌホドハヤリ聲ヲセザルベシ。

又云。山ニ入テハ一町ニ一度艸ヲ打入ベシ。犬鼻ヲ付ルトキ〇掛聲ヲ揚ルナリ。エイホウタリト云。鳥ノタツトキ。鳥サケビ三聲イカニモ高カルベシ。雉鷹トサケブナリ。鳥タツト云心ナリ。勞レニ

犬ヲ入ニハ。休テ息ヲツカセテ勞聲ヲヤレ。エイ々々ト云ナリ。鳥ヨト云心也。犬勞テ疎略ニアラバ。行縢ノスソヲヤハラカニ扣テクエクエトヤルベシ。ヨシクヘト云心ナリ。又鳥ヲ見付テハ物ナシト云ベシ。タヤスク打トラエント云心ナリ。掌飼タヾ起ヨト云ベキナリ。但シ所ニヨルベシ。百首ニ。

ハフ鳥ヲ艸ニ見伏ルカリ人ノ物ナシテフハ我家ノ中。此意我物ニシタルナルベシ。

又云。犬緤ヲツクルハ惡サスト云。犬ノアシキヤウナルトキ。緤ヲトリテヒキトヾムルニヨリテナリ。是ハ鄙語也トイヘドモ。獵師用ル所イハレアルニ依テ捨ザルベシ。

又云。犬緤ノ長サ八尺。根藤也。古犬ニハ犬ノ長三長用ユ。

又云。サハキト云二尋。荒犬ハ三尋ナリ。

又云。鵃ノハ遣繩ト云。長七尺二寸。淺黄ナリ。アサギト白ヲウチマゼテ用ユ。又三尋片脇。

異說ニ云。犬ノヤリ聲ハ平鳥々ト云。犬鳥ニアタラバ鳳々ト聲ヲ引テ云。其後ハ犬ノヤウヲミテ。定ノモノゾ。走マハリタルモノゾナドヽ色々ニ云ベキナリ。奥州ノ習也。

又云。勞ノトキハ。犬飼犬ヲ制シテ。鷹飼ヲ待テ笠ヲヌイデ手ニ持テ、杖ヲ右ノ方ニツキ犬ヲイレヨ。草ヲ打テ犬ニヨシヘヨ。犬飼ハ笠ヲ頸ニカケヨ。鷹ト犬ニ鈴ヲサシテ後ニ笠ヲ着ルナリ。

又云。犬飼裝束ハ赤革ノ袖ニ。無文ノ身ニ薫革ノ袴ヲ着シテクヽリ結也。

又云。ウチカケハ主ニヨリテ長短アリトイヘドモ。ワキノ廣サ五寸五分。袖口五寸ナリ。

又云。御狩ニハ隨身ノ若黨ナリ。赤帽子ニ紫ノ狩衣。緋ノ袴。赤キ袴モヨシ。白ハカマ又

葛ハカマ。布ヲモ用タリ。
又云。鵠飼ノ犬飼ハ青地ノ帽子ニ裏赤シ。
又云。犬飼山神ヲマツルトキハ。先玉女ノ方ニ向テ笠ヲ着テ春ハ雌ヲ用。金ノ羽ト云也。秋冬ハ雄ヲ用。銀ノ羽ト云ナリ。

文云。

再拜々々。此鄕里爾祝給布有情無情乃御神達。吉日良辰乎以氐玉乃雄玉乃雌乎奉留者也。御鷹乃聽安久志氐羽早久。御馬乃蹄平賀爾志氐。犬飼乃聽安久志氐。犬乃鼻明爾。鈴乃音乎誤良須。谷乎渡良須。峯乎越須。玉乃雄乎百千數取世給止申須。春ハ金雌。秋冬ハ銀雄。

異說。

再拜々々。今日玉姫社家乃御神達。黑妙乃雄。白妙乃雌。百羽千羽取良佐世給得。一息ニ云ベシ。

又云。百首ニ。

笠ノ上ニ上毛下毛ヲタムケヲキテ今日ノカリ場ノ神マツリツヽ

又云。犬ノクビ玉ト云ハ縚環ト書タリ。韓盧ヨリ出タリ。毛詩五巻盧令三章ニ云。襄公好田獵畢弋。注ニ云。網小ニシテ而長シ。畢ト云ハ其形畢星ニ似タリ。弋ハ繳射ナリ。戰國策ニ云。韓國ノ盧ハ天下ノ駿犬也。注ニ盧ハ田犬也。纓ノ環ノ聲也。又云。盧ノ重鋂ハ。注ニ鋂ハ一環ニ二ヲ貫也。釋ニ云。韓國ノ犬ヲ獹ト云ハ田ノ犬也。是ヲ鷹犬ト云ナリ。今按。赤滑革ヲ以テ頸タマトスル也。留所ハ鞭結ナリ。

又云。ウチカイ袋ト云ハ。狩ノ犬鳥ヲ起タルトキ。犬飼腰ニ。海邊ニアルクラト云艸ヲ編テ。苞苴ニシテ食ヲイレ持テ飼也。然レバ搏噬袋トモ搏噬苞苴トモ云ナリ。又餌袋ノ如クニ作テツクルコトモアリ。

又云。狩ノ犬ニ獫歇驕ト云コトアリ。ハシノ

長ニ猿ト云。啄ノ短ヲ歇驕ト云ナリ。

又云。犬ヲ人ニ渡請取ベキコトハ定レル法ナシ。但禮記曲禮ノ說ニヨラバ。犬ヲ牽者左ニ犬ノクビタマヲトリ。右ノ手ニ緤ノ末ヲ取テ渡スベキナリ。犬ノ首ヲ左ニナスベシ。又請取人モ前ト同ジ。左ノ手ニテクビタマヲトリ。右ノ手ヲ以テ緤ノ卷目ヲ取テサシノケ請取ナリ。又柱ニテモアレ。如何ナル便ニテモツナギヲキタルヲ良トス。

或問。犬ノ毛ニ吉凶アリヤ。

答云。善惡アリ。假令如左。白犬ノ黑尾ハヨシ。白犬ノ尾長キハヨシ。白犬ノ胸黑。前足長キハヨシ。白犬ノ胸ノクロキハ善。白犬ノ口ヨリ眼ニ至マデ逆毛生タルハ善。白犬ノカシラ黃ナルハヨシ。白犬ノムネ黃ナルハアシヽ。白犬ノ尾ノ黃ナルハ惡。白犬ノ耳アカキハ大ニ惡。白犬ノカシラ黑ク背黃ナルハ惡シ。黑犬ノ前足白キハヨシ。黑犬ノムネノ白キハ大ニ善。黑犬ノカシラ白キハヨシ。黑犬ノ面白キハ大ニ善。黑犬ノ尾ノ白キハ善。黑犬ノ四足黃ナルハアシヽ。黑犬ノ四足白ハ善。黃犬ノ前足二白ハヨシ。黃犬ノ白文アルハ大ニ善。黃犬ノムネ（頭イ）アカキハ惡シ。黃犬ノ後足白キハ惡。クロ犬ノ胸ノ黃ハヨシ。クロ犬ノ四足白キハ大キニヨシ。クロ犬ノ後足白キハ惡。

餌袋事

或問。餌袋ノ寸尺アリヤ。

答云。經ニハ出ズトイヘ共法度アリ。長サ五寸。口五寸。尻二寸二分ナリ。又云。長サ二寸。口六寸。尻二寸ナリ。

又云。餌袋ノ請緒ニ帽子頭ヲ結ブ。鳥頸トモ云。

又云。懸緒ニハ菟頭ヲ結ブ。長キ後ノ緒ハ雉

ノ尾羽ヲカタドル也。神家ノ説ニハ。鵠ノ餌袋ニハ鳥ノ頭ヲツケテ。前ニハ革ヲタヽミテ着ルナリ。

韝之事

或問。韝ト云ハ如何様ナルゾヤ。

答云。韝ト云ハ。鷹ヲ擎ルトキ。腕ノ細キ所ヲ平ニシテフマセンタメニ韝ノ上ニサスナリ。青色ヲ用ルコトモアリ。是ヲ緣ノ韝ト云。寸法長四寸八分。廣二寸八分。緣ノヒロサ四分。但主ニヨルベシ。又云。長サ四寸五分。ヒロサ三寸三分。掌飼ノウデニヨルベシ。又云。袖ノ韝ト云ハ貴人ノ爲ナリ。ナベテハ緣ノ韝ヲ用ル也。錦ヲ以テ韝ヲ作ルコトモアリ。然バ文集ニ云。錦ノ韝ニ花隼ヲ臂ニストイヘリ。

鳥ヲ木枝ニ附ル事

或問。鳥ヲ木ノ枝ニ着ルト云ハ法度アリヤ。

答云。經ニハミヘズ。然ドモ上古ヨリ定メルヤウアリ。左ニ記ス。春ハ梅櫻柳。秋冬ハ鳥柴。冬至ヨリ後ハ梅ヲ用タリ。木ノ長サ五尺五寸ニ切テ枝ヲ三ツ殘シ。同葉ヲモ三ヅヽヲキテヨキヤウニスカシテ。本ヲ一刀ニソギテ少角ヲトルナリ。本ノ枝ノ下五寸藤カヅラヲ以テ結付ルナリ。第一ノ枝ヲ踏ヤウニ眞木ニ着ベシ。鳥ノ兩方ノ火打羽ノ三ツメヲ殘シ。葛ヲ以テ頸ト共ニ掛テ。シルシ付ニ結付ルナリ。木ニ付ル所ハ二巻シテ片輪ヲ殘スベシ。輪ハ鳥ノ右(左イ)ノ方ニノコスベシ。

(書入)明月記云。元仁二年二月八日。天晴。人々物語之中。長衡朝臣等說。一日一上亭射小弓。負態方雉一羽酒一瓶可進由示賴次。(非近習者只是依召繼事。自後院駈入歟。)賴次此事不思得之間。紅梅大枝雄雉雌各十羽。(如小鳥付也。)大瓶入酒送之。納受饗應云々。(書入)鳥柴。源氏河海云。普通ノ

柏木ヨリ葉セバクマロクシテ。ヲモテウラニ毛生タルヲ鳥付柴ト云ナリ。



前ニ云ガ如ク春ハ梅櫻柳ヲ用ナリ。又鳥柴ハ四季ニ用ベシ。春ハ雌ヲ上ニ着ベキナリ。



秋冬ハ雄ヲ上ニ用ベシ。又楢柏ニモ着ベキナリ。右ニシルス如シ。



一ツ着ルハ犬飼ノツケト云。如右。眞木ニ胸ヲ向ヘヨ。又木ハ楢柏又ハ櫪ナリ。木長三尺五寸。中ノ枝ニ山緒ノ結目ヲ水引ヲ以テ。人ノ髪結ガ如クニ結ナリ。片輪ニスルナリ。雌ニハ水引ヲ皆赤クシ。雄ハ半分赤ク半分白シ。

又云。人ニミスルトキハ。木ノ本ノ切口ヲ左

ノ手ノ中ニアテヽ。右ノ手ヲ以テ少シ上ヲ取テ。肩ニ少シ引掛テ。左ノ膝ヲ突テミスルナリ。又左ニ取ナヲシ。右ノ膝ヲ突テ御目ニカクルナリ。其マヽ左ヘ廻テ退出ス。其マヽ御前ニヲクトキハ物ニ寄カケテヲクナリ。異説ナリトイヘドモカヤウニモ用ベキナリ。

又云。皇子御誕生ニハ殿上人松ニ着テ献ル也。イヅレモ第一第二ノ枝ヲ踏ヤウニ着ルナリ。

又云。交野ヨリ鳥一羽（番イ）鳥柴ニ着テ献ズルハ。イホリニ入テ鳥甲ヲ着タル狩子舁テ參ルナリ。

又云。梅ヲツクリ木ニシテ付タル例モアリ。伊勢物語ニ。昔オホキオホヒマウチキミトキコユルオハシケリ。ツカウマツル男。長月バカリニ梅ノツクリ枝ニ雉ヲ付テ献ルトテ。

我タノム君ガ為ニト折花ハトキシモワカヌ物ニゾアリケルト讀テ奉リケレバ。イトカシコクヲカシガリ給テ。ツカヒニ祿タマハリケルトミヘタリ。時ノ興アルニハ。貴人ノ仰ニヨリテ少モ面影アルコトハ用ベキナリ。

又云。結ヤウハ常ノ片輪ニ結ナリ。結タル端ハ五寸。輪ニ結ビタル所ハ三寸也。又結ビタルヽ端ハ其ノ鳥ノ一ノ羽ニクラベテ切ルベシ。前ニ云如ク懸テシルシ付ニ結ブ也。其マヽ眞木ニ付ベシ。結目ヲトクトキハ。羽サキノ上ト四毛ノ上ノ結目ヲ。本ノ輪ヘ羽サキヲ入テ。輪ヲ通シテ本ノ如クトリ。カケ緒ハ木ニ殘ルベシ。

ウサギヲ附ル事

或問。兎ヲ木ニ着ルヤ。

答云。尻足ヲ一ツニトリ。藤葛ヲ以テ二巻結テ。其末ヲ頸ニカケ項ヘ引通セ。頭ヲ二ノ足ノ中ヨリ尻ノ穴ニ頷ヲ置也。鳥ノ如ク結テ付ルナリ。妻兎ハ前ノ足ヲ頸ノ如ク後足ノ間ヨリ引出テ着ヨ。前ノ足二ツニテ尻ノ穴ヲカクセ。背ヲ木ノ方ヘ向ヨ。後ニカケタル藤ノ二ツノ結目ノ末ハ。兎ノ足ノ長サニ一寸バカリアマシテ切ナリ。左ニシルス。

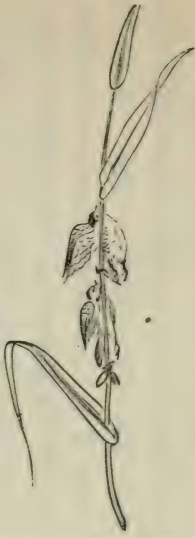


或問。小鳥ヲ着ル事アリヤ。

答云。其様アリ。荻ノ枝ニ付ルナリ。長サ五尺五寸ヨヲワリテ挾ム也。シルシ付ニ結ベシ。葉ヲバ本末ニ三残スベシ。鶉ノ頸ト兩ノ羽ヲヒラニハサムベシ。藤葛ヲ以テ二纏シテ片ツワニ結ナリ。貴人ニミセ申トキハ。右ニ本ヲトリテ左ニ末ヲ持テ鳥ノ前ヲミセヨ。又片鶉ナラバ鳥ノ後ヲミセヨトナリ。爰ニ源氏云。小鳥シルシバカリ引付サセタル荻ノ枝ナリ。一説ニハ引付サセタルチ木ノ枝ト意得タリ。荻ノ枝ヨシト思ベシ。源氏



ノ注ニ。小鳥ノ數九ツ山菅又細キ葛ヲ以付也。枝ハ七ツ五ツ三ツトモニ挾ム也。鴫ヲ一ツ挾ムコトモアリ。



又云。權中納言藤原仲平ハ菊ノ枝ニ付テ。延喜七年十月十八日清涼殿ノ前ニ於テ奏舞奉ルトミヘタリ。

又云。雀ヲ竹ニ付ルコトアリ。トマリタル如クニ付ベシ。數ハイカホドモクルシカラズ。節ヲワリテハサムベシ。



或問。鷹ノ綱ハ寸尺如何ホドナルゾヤ。

答云。經ニハ不見。諸ノ獵師ノ用ルハ。國々ニカハリタルナリ。シカレドモヒロサ一丈一尺。高サ八尺六寸。下五尺五寸也。綱串三本口傳アリ。

或問。鯁鷹ノ鷲ヲ擎ナツクルハイカヤウナルゾヤ。

答云。羅鷹ハ先闇處ニツナギテヲクベシ。サテ夜ノ一更ニ初テ火ノ側ニ擎。終夜厭ハズ擎ヨ。明旦午刻ニ至テ更ニ復繫着ケ。夜ノ一更ニ擎コト如先。カヤウニスルコト三日三夜ナリ。其馴麁ヲ候テ後ニ纔ニ餌ヲ飼テ。闇

ノホトリニ擎ヨト經ニミヘタリ。但鷹ニ依テ五日六日擎ベキモアリ。一日二日ニ心折ルモアリ。鷹ノ性マチ〳〵也。强ニ擎テ野心ヲ失フベキハ。鳥忘トテ生鳥ヲミテモ本取タルコトヽモ覺ズ。又心深キ鷹ヲ一二夜スヘテヲクトキハ。野心失セズシテ揚去ナリ。野ニテ鳥ヲ捉ツル心ヲバ失ズ。人ニ馴ルヤウニ調ベキナリ。ヤウ〳〵馴ルニ隨テ。食ヲ以テ延呼餌ヲアタヘヨ。如此數日ノ後ニ雉ヲ以テ拋テ與テ。後ニ野鷄ニ合テアタヘヨ。アラタカノ手放スル時分ハ。肉ヲソバメテ調ヘ。野鷄ニ捉飼テ後ニ。次第〳〵ニ上肉ヲモ調テ。肥痩ノ中ヲハカルベキナリ。爰ニ古人云。山回ヲ調ルニハ。先トリタル其日。微溫湯ヲ以テ鷹ヲ浴テ擎ヨ。羽ヌレテ後ニ闇處ニテ拳ニヨクスハルベシ。猶麁ヲバ目ヲ縫コトモアリ。是ハ不可也。夜ハ轆轤格ニ繫テ。曉ヨリ拳ニ擎テウゴカサズシテ鷹ヲ快ク眠セ。其夜餌ヲ飼ニ。火ヲトモシテ口餌バカリヲ飼〳〵シテ呼ベシ。次第〳〵ニ早旦ヨリ野ニ擎テ出テ。日ノ出ルニ向靜飯。次第ニ人多中ニテ擎ヨ。早心ヲルヽナリ。其後内ニテ又當ノ餌ヲ飼テ。次ノ日雞ノイカキサカヲ切テ袋ノ如クナルニ。水銀ヲ大豆ホド入テ飼。一時アリテヲモト艸ヲ粉ニシテ飼。又姜ヲ少飼テ放ツ也。爰ニ常陸國人ノ說云。雌ノ頸骨ヲタヽキテ洗テ鳥ノ肉ニ包テ飼。上餌ニ桃ホドイカニモ好餌ヲ用ヨ。ナマヌルノ湯ニヒタシテ。湯ニ觜ノヒタルホドニシテ飼ナリ。擎ナツクルコトハ廿日ナルベシ。同人云。鹽ヲ調ト云テ。堅鹽ヲ細末シテ鳥ノ肉ニ包テ豆ホド。大鷹。七粒。兄鷹。五粒。飼テ。上餌ハ桃ホド其余ハ前ニ同キナリ。同人云。干入樣ト名テ。鷹餌ヲ絕與ヘズシテ。トキ

〱口餌ニ新餌ヲ桃ホド飼テ。只藥ヲアタヘヨ。サテ山ニ出ルナリ。藥ヲ第一トスルナリ。日數ハ鷹ノ肉ノヨキホドクハンヲ期トスル也。藥云。カジカ東ヨリ流ル川ニ有ヲ用。、古酒ニヒタシテ燒。五八生等分ニ合テ雀ノ胸一包ホド鷹ニ用。兄鷹ニ半包アタヘヨ。爰ニ直渡ト名テ山ヨリ取テ即合スルコトアリ。七葉ヲ與ヘヨ。サテトキ〱スヱテ。藥ヲ三日四日ツヾケテ飼也。藥云。茯苓。生。天南星。生去毒。土豹。燒。ウクロモチ。白藥。燒。人ノサレカウベ。白馬ノ三日月骨。アシゲノ馬ノ下アチガマナリ。雞雉イノ爪。燒。鹿茸。生。フクロツノナリ。

右七種等分ニ合テ鷹。七粒。兄鷹。五粒。豆ホド飼テ上餌ヲ如前カヘ。是ハナル、藥ナリ。

又云。鯛鷹ノ肉調ルハ前ノ如シ。微溫湯ヲ以テ浴テ。後ニ闇處ニテ拳ニヲキテ。夜深ニ居テ二日アリテ鹽ヲ少シ加ヘテ。其後ニ七種ノ染藥ヲ日マゼニ飼テ。野ワスレノ屎ヲツキテ田ニ出ヅ。染藥。牛膝。イノコツチノ根。何首烏。赤ウバラノ根ナリ。峯葉ノ根。蘇芳。茶。好ヲ用。堅鹽。葉ブシ。

右等分ニ飴ノ如ク煎ジテ方一寸ニ切テ。兎ノ毛ニツヽミテ飼。肥タルタカニハ梅バカリカヘ。瘦タルニハ染藥ヲ飼ズシテ。赤小豆ヲ人ノ食スルヨリ今少煮テ。其汁ヲ以テ餌ヲモミテ能シボリカフベシ。鷹ヲ伏テカフ。只カヘバアシヽ。死セザル藥ナリ。其夕ニ赤荊ヲ煎ジテ。其シルヲ以テ餌ヲヒタシテ飼テ。其後ニ胡麻ノ油ヲ少シカヘ。スグレバ死ス。害アラバ鷹飼ノ小指ノ血ヲ出シテ飼。左チ用。イヘザレバ鷲ノ羽ヲ燒テ米朱イヲ摺テ其ト細末シテ各一分ヅヽ。飼フ。其ノチ當ノ餌ヲカヘ。又蓬萊ノ若根ヲツキシボリ。檀紙ニシメシテホシテ細ニキザミテ飼。七日ノ間ニ二三度是ヲカヘ。餌ヲ與ル度々ニ呼飼ヨ。如此ナレバ五六日ニ呼餌ニツキテ懐

ナル。ナック氣ヲシラント思バ。ヲキヱニシガミ付テ放サズシテシカモシタルシ。七日ト申ス日野ニ出テミレバ。空ヲミズシテ艸ヲマモリテ。韝ヲツヨク踏テ。頻ニ主ノ腰ヲミル也。目前ニカタブキ。黒マナコ大ニナリテ白眼ワヅカニナル也。如此有トモ其日ニ放チガタクバ。生鳥ヲ以テ飼テ次ノ日放ツベシ。七日ニ放ツ鷹ニモ。卯ノトキ白薬ヲ飼テ。申ノ時ニ放ツベシ。

又云。九日ニ放ベキニハ。流ル水ノ上ニ竹ノ架ヲ結テ一夜繋テ。次ノ日ヨリ山アザミヲ飼。男ノ小兒ノ百日ヨリ内ノ屎ナリ。燒テ棗ホドニ大ニ四ツ小ニ三ツ飼。其後ニ當ノ餌ヲヨク洗テ呼飼コヲトヾメズ。餘ハ前ノ如ク調ヨ。骨アルタカ。骨ナキタカヲミテ薬ノ多少ヲカヘ。逃ザル薬也。内ヲスカシテ放ツベキ也。モシ日數過バ餌ヲカヘ。又七日ニ合スルニハ。早ク夜捉。鹽ニヒンセウ少シ。栗粒ホド加ヨ。天地水ヲ以テ鹽ヲカタメテ。三丸鳥ノ肉ニ押合テ飼也。薬ヲコボサバ伏テカフコトモアリ。薬ノ勢ハ榎ノ實ホド。多少ハ鷹ニ依ベシ。ミドリノ架ニツナグベシ。

又云。前ノ如ク調テ。硫黄ヲ方寸ノ升ニ一升與ヨ。過タラバ小豆鳥ノ羽ヲ合セテ煎ジテ。其汁ヲ餌ニシメテカヘ。若大事ナラバ山アザミト但不燒之シテ干也。七才ノ兒ノ男女ノ爪ヲ取テ抹メ合。餌ニツヽミテアタヘヨ。其ニモ叶ハズバ忍澤ノ水ヲ目ニヌレ。内ニモ飼ベシ。鷹ニモ與アルナリ。

或問。巣鷹ヲ調コトハ何トアルゾヤ。

答云。鷹經ノ如キハ。毛羽漸々ニ調リ。繋犖スル時ニ及テ。肉ヲ以テ呼カフコト鯁鷹ニ同ジ。如此スルコト十日也。其後ニ雉ノ雛ヲ以

テ捉與ヨ。如此スルコト五六度シテ後ニ。田ニ出テ野雞ニ放テ雌雄ヲイハズ捉飼ベシ。如此シテ後ニ其肥瘦ニ隨テ飢飽ヲワキマフベシ。今按。經ノ如ク尤妙ナリ。但雛ニトリカフコトハ。其時分ヲヨクハカルベキ也。早トキハ鳥ヲ捉心ナシ。ヲソキトキモ亦其氣ヲ失ナリ。然バタカノ學習ノ月ト云テ六月ヲ本トス。此月ニ及テ雞雉ノ雛ニ捉飼ベキナリ。但經ニ捉カフコト五六度ト云ヘリ。强ニ雛ノ弱キ鳥ヲカヘパ。野雞ノツヨキヲトルコトナシ。初ハ弱雛ヲカヘドモ。次第〳〵ニツヨク飛鳥ニ捉飼テ。後ニ野雞ニ合ベキナリ。一寄ニ捉トキハシカリ。若艸ニ追落テ鷹艸ニ心ヲ付バ。兼テヨリ生雉ヲ以テ其勞ノ鳥ノ如モテナシテアタヘヨ。是ハツカレノトリナクンバ如此ナルベシ。トリヲトリタル所ヘアラクヨルベカラズ。

爰ニ古人云。巣鷹ヲ調入コトハ。粡毛ノ時ハ藁ヲ以テフゴヲ作リ。蓬ヲ多敷テ巣ノヤウニシテナスベシ。新キ餌ヲ骨ヲ細ニシテタヽキテアタヘヨ。粡毛牙花毛マデハ餌ヲ洗ズシテ飽マデカフ。但サノミアクトキハ。ヒジトツバサト曲テ醜シ。又毛村濃ニナリテハトキ〳〵洗テアタヘヨ。一日ニ一度二度カイ定ムベキ也。一ノ羽漸ク生定テ足緒ヲ着テ擎ヨ。粡毛ヨリ諸ノ物ヲミセ付ヨ。巣タカハ後ニ羅鷹ヨリモ物駭ヲスルコトアリ。足緒サシテ外架ニ常々繫テ。日ニ向ヘテ背ヲ炙ヨ。尾羽調テ水ヲ浴コト二日三日或每日浴セヨ。手ヲ放サズ擎ベキナリ。次第〳〵ニ置縄ヲサシテ呼ベキナリ。巣タカノサノミ懐タルハ人シタルシ。シカラバトリヲ心ニ入ズ。少シアラキハ好ベキナリ。手放ノ日ハ何ニテモ得ルニマカセテ捉カフベキナ

リ。毛羽調テ後。鷄ノ赤女鳥ノ臂ヲ細ニタヽキテ。微温湯ヲ多シテカフ。後ニ堅鹽ヲ少カフベシ。

或問。鳥屋出ノ鷹ヲ調ルコト如何。

答云。其説マチ〳〵ナリトイヘドモ。掌飼ノ學得タルヤウニヨルベキカ。然バ古人ノ説法アリ。爰ニ鳥屋鷹ヲバ六日ノ内ニ放ト云ハ。鳥屋ノ内ニテ鷄ノ赤雌ノ胸ヲ宍ヲ細ニクダキテ。水ヲ多クシメテ飼テ。後ニ屎ノヤウヲ見テ。堅鹽ヲ少カフテ水ヲバノマセヨ。水ヲカフコト一日ニ三度ナルベシ。但スギテハクルシカラス。當ノ餌ヲ橘ノ大キナルホド與ヨ。或人云。堅鹽ヲカフテ其夕ベニ及テ。牛膝ノ根。鳥ノ羽。藤瘤三種ヲ末ニシテエヲヒキカフ也。湯ヲ常ニカフテ。其後常ニ夜捉澤ノ水ヲカヘ。六日ノ内ニ水ヲ三度アビセヨ。イヅレモ三日前ヨリエヲ洗テカヘ。

又ハ十日前ヨリ肉ヲ調テ出スベシ。次ノ日ハ心ヨク休ヨ。其後ニハ掌飼ニ心ヲ任。鷹ノ思ヲナシ調ベキ也。呼聲ハウヱイ〳〵ト呼ベシ。出テ三日メニハ曉ヨリスヘテ。日ノ出ルニムカヘアテヽ後ニツナグベシ。四日五日メノ雨夜ハ終夜ツナゲヨ。六日メニハツナガズシテ休ムベシ。七日八日雨夜ハ終夜通スベシ。九日メニハ當餌ヲ以テ延呼ベシ。何モ洗餌ヲカヘ。夜撃ノヤウモ其タカノ心ニヨルベキナレバ定ガタカルベシ。

條々藥ト云ハ其掌飼ノ心ニヨルベシ。醫ト云ハ其掌飼ノ心ヲ云ナリ。上智ト下愚ニヨルベシ。

或問。鳥屋ヲバ何トコシラユルゾヤ。

答云。經ニハヒロサ一丈余ト云リ。一方ノ中ニ石ヲオク也。是ハ大キナリ。常ニ用ルヨシ。

例式ノヲバ放鳥屋ト云也。

又云。ムシ鳥屋ト云テ。毛カタキ鷹ナドニハ。イカニモ鳥屋ヲ細クツクリ。水ヲ入ズシテ。マハリノ内ニ檜ノ葉カラ蓬ナドヲカケテ。外ヨリ雨ノモラヌヤウニシテ。下ニ鳥(馬イ)ノ屎ヲアツクヲキテ。日ノアタルコトハ何モ同ジ。此鳥屋毎ニ人參散ヲアタヘヨ。

或問。タカ一聴ト云ハイカホドゾヤ。

答云。數七ツノコトナリ。古ヘ巣一ツニ七ツ生タリ。其ヨリ一聴ト云也。一架トモ云ベシ。鈴一サシト云モ七ツノコト也。但一羽ニ用之。

又云。鷹一足ト云コトハ鄙語ナリ。又口傳コレ有。

又云。一羽二羽ト云ベキナリ。只一ツ二ツトモ云也。

又云。タカノ鈴ヲバサセトケト云ヒ。犬ノ鈴ヲバカケヨハヅセヨトイフナリ。又高所ヨリ呼タルヲバヲキヲトスト云ベシ。平地亦河ナドヲ隔テヲキタルヲバ呼渡スト云也

又云。條ノアルトキハヤルヲバ。ヒツキラウトハヤルト云也。

又云。足緒バカリノトキハヤルヲバ。ヒツキテハヤルト云ベキナリ。(時ハヤルチバ此句ヨシ。ノ指ヤウ可尋也。時□ハヤルチバ若如此ナリ。)

或問。タカノヲキ聲ノヤウアリヤ。

答云。其シナアリ。家ニ云。ヨウ〱エイエイヲウ〱。聲ヲ引テ七聲半ニ呼ベシ。神家ニハトウ〱〱トウ〱〱トウ〱ト聲ヲ引テ。是モ七聲半ニ呼ベシ。

又云。鳥屋出テ又ハ鯁鷹ナドノヲキ聲。ハウエイ〱ト云ベキ歟。

或問。鳥又鶉ナドヲバ何ト起タル。又何ト取タルト云ベキゾヤ。

答云。鷹ニハフツトタツ鳥。ハツト放テトウト取タルト云也。鶉ヲバヒツトヒツタト合テ。チウト取セタルト云ベキナリ。

或問。カリ屋形ナドニテ。假ニ架ナドヲバ何ト結テヨキゾヤ。

答云。定レルヤウナシトイヘドモ其法度アリ。先チイサキ柴ヲ廿バカリ切テ。本ヲソギツキ立テ。木ノ末ヲ引チガヘテ結テ。ホコハリニハ行縢ヲカケヨ。毛ヲ面ニナスベシ。當世ハヒツシキヲ用ヨ。



如此葛ヲ以テ三所ユフベシ。

或問。鷹ノ病ツキ色々知ベキコトアリヤ。

答云。先云ツクスト云ヘドモ其品粗シルヤリ。壽長キ鷹ノ相形ハ。面ノ毛長ク脛ミジカク。毛ウスク毛スジフトシ。皮アツナルベシ。壽短キ相形ハ。面ノ毛短ク脛長ク。毛ムク〳〵トシカモ繁ク生タルベキ也。

又云。兄鷹ノ相形ハ鷹ニ同ジ。サリナガラ頭眼コトニスグレテ大ナルベシ。

又云。鷂ノ相形ハ瓶子ヲ立タルニ似タルベシト云ヘリ。又ヤセタル牛ニ板ヲ駄セタルガ如シトイヘリ。

又云。病ツクヲ辨ズルニハ。日比ヨリヱヲツヨクハミ。又常ヨリモクハザルモ病ツクナリ。

又云。愁ノ毛ヲ立テ目ヲホソク見。頭ヲツネニフラバ。觜ヲウチタルト辨フベキナリ。

又云。マメニ愁毛ヲ立テ胸餌ヲハマバ病ツ

クト知ベシ。又ヌスミハミヲ思出テモスルコトナリ。
又云。眼ヲ細クシテ毛ノ根ヲタテ。手振ヲシカネバ胴ヲ打タルト辨フベキ也。又胴ヲ打タルニモ品多カルベシ。
又云。夜知毛シメラバ必病ツクベシ。サラサラトアラバ心ヨシト思ベシ。
又云。シルシノ毛ヲ立ハ快カト思ヘ。
又云。脚絆例ヨリクツロガバ足ハル丶ナリ。
又云。鷹ハ常ノ如ク肥テ鶱翥ヨハクバ。羽ヲ打タルト思ベシ。
又云。尾ヲ常ヨリモヒロゲテミヘバ。鳥尻ヲツキタルカト思ヘ。
又云。何ニテモヤマイツクタカハ熱氣有ベシ。シカラバ朝外架ヘ出スニモ。素手ニテ鷹ノネツキヲミルベシ。
又云。熱氣ヲサラセント思ハヾ。突金ノ根。

鳥尻ノ上ニ灸セヨ。（灸點以下繪之）ネツキサルベシ。
又云。ヤマイツキタルタカ。雑ノ小鳥ヲミテハヤリ。又水ヲミテハヤラバ必ズ死ヌベキナリ。
或問。鳥ヲ臺ニ居ヤウアリヤ。
答云。其様アリ。タトヘバ左ニ記ス如シ。
貴人ノ前右ノ膝ノ本ニヲク。





春ハ雌ヲ上ニ置。雄ヲ下ニヲクベシ。秋冬ハ雄ヲ上ニ置ベシ。折敷ノ角チガヒニ置ナリ。又云。鳥一ツ置トキモ如此角チガヒニ居ベシ。

鷹經辨疑論下

陶弘景ガ言ルコトアリ。曰。夫生民ノナス所。大ナル患ハ疾疹ヨリ急ナルハナシ。疹而モ治セザルハ。火ヲ救ニ水ヲ以テセザルガ如シ。人既ニ如此。物モ亦宜然。鷹ノ病ノ如キニ至テハイマダ前論アラズ。後周ノ魏收近シテ略述タリ。今又引テ是ヲ後ニ別ツ。

或問。鷹ノ病ト云ハ幾般カアル。

答云。經ニハ十三病ト記サレタリ。秦皇ノ論ゼルハ六十一病トシルセリ。近代ノ傳古人ノ語粗後ニ記ス。

經云。目ノ病ハ調養ノ精カラザルガ致所ナリ。ウカヾヒ見ルニ。眼ヲ以テ肩ヲ摩ハ。眼ノ輪漸々腫。眼幕（幕ノ字以下[illegible]）オコリ出テ黒人滲ル。是ナリ。

藥云。黄連ヲ煮テ鳥ノ羽ヲ以テ肩ニヌルベシ。目ニ及テ驗アリ。又鹽ヲ研テ酢ニ和シテ塗ベシ。是ハ劣レリ。

又云。目翳トハ目ニマケ生ズルナリ。

藥云。龍膽ヲ採テ折レバ汁ノ出ルヲ塗ベシ。一方ニ數ノ蠅ノ首ヲ取テ。銅ヲ以テ研テ付ヨ。

右經ノ說。

又云。目クサト云ハ。眼ヲ初ハ閉テ肩ヲ摩リ

仰也。目ノ前腰ノ本ヲ合テ灸ス。油尾ノ上三寸ヲ灸セヨ。

薬云。丁香。生姜。是ヲ煎ジテ洗ベシ。

又云。打目ヲ治スル方。

鷲ノ羽。黒焼。柄。粉。杏仁。粉。明礬。スキタウサ。唐墨。

右等分ニ合テ。タン中ノ水ヲ以テ解テ目ニヌル。

一方ニ龍脳。熊ノ膽。麝香。

右等分ニ合テマブタヲ引上テ入ヨ。

一方ニ鵜ノ羽。黒焼。朱。明礬。エン砂。麝香。

右粉ニシテ吹入ヨ。

一方ニ柄ヲ粉ニシテ吹入ヨ。

一方ニ唐墨ヲタン中ノ水ニトキテ入ヨ。イユ。

一方ニ紫金香ヲ入ヨ。

又云。目ノ悪ヲ治スル方。ソレヲ見ルニ。目ヲ引涙ヲタレ尾ヲサス也。目カシラヨリ淡立テ盲(メシイル)也。目ノ前ノ旋毛(ツシケ)ニ灸ス。

薬云。野老ヲ洗テ削テ熱湯ニ入。中ヘ温ヲ通ス。ワサビヲオロシテ皆抹シテ。鵜ノ羽。黒焼。鶏羽。焼。唐墨。

右等分ニ合テ目ニ入ヨ。又粉ニシテ吹入ヨ。

又云。病ノ相。目ヲフサギ頭ヲタレ。餌ヲ食セズシテ毛ヲサシクツログルナリ。初ハ目ヲシゲクヒク也。

薬云。鴨ヲ餌ニカウ。同血ヲモカヘ。

一方ニ犬ノ尻ト云草ヲモミテ汁ヲ吹入ヨ。

一方ニ鳥ノ羽柄ヲ粉ニシテ入ヨ。

一方ニ貂ノ骨ヲコソゲテ木壺ノ水ニテ入ヨ。

一方ニ膽ヲ煎ジテユデヨ。
一方ニ雨鳥屋ニツナグベシ。雨トヤト云ハ。上ニ小ザヽヲ伏テ。其上ニ蓬ヲフケ。檜葉ヲモ良トス。
一方ニ好檜脂ニ黄蘗ヲ粉ニシテ合テ付ヨ。イユ。
一方ニ水銀ノ淡ヲ掌ニテツバキニマゼテ入ヨ。
又云。目ニヒノイリタルニハ。
藥云。葉甘艸。燒。ヒル。蒜。燒。卯ノ木ノ白皮。燒。
右等分ニ合テカヘ。茗荷ノ汁ヲ入ヨ。又ツキタルニモヨシ。
又云。麻ツ〔マヽ〕アラバサイカジノ汁又ツヽジノ汁ヲ入テモヨシ。
或曰。鼻ノ塞ヲバ如何スベキヤ。
答云。種々ノ療治アリ。重キトキハ害アリ。

鼻氣ノ方。鼻ノ塞ル時ハ鳴聲美ナラズ。鷹鶱ノ後急ニ喘ギ鼻ノ孔鳴ルナリ。即鷹ヲ偃臥〔臥ノ字以意補フ〕テ。紙針ヲ以テ清タル胡麻ノ油ヲ著テ。齶（アギト）ノ孔ニヌリテ。鼻ノ孔ヨリ吸トリテ油氣ヲ去ベシ。其後藥ヲ入ヨ。
一方ニ口ヲ漱テ冷水ヲ含。タヽシク鼻ノ孔ニ吹入ヨ。愈ルヲ以テ限トス。但水ヲ吹コトハ昏ト曉ヲ用ル也。晝ハ吹ベカラズ。水ヲツノグニ習テ常ニ人ノ面ヲ恐ル也。
一方ニ突金（トッキン）ノ上。額ノ下毛ノ際〔[illegible]〕ニ三炷灸セヨ。猶イヘズバ兩目ノ旋毛ヲ夾テ三炷灸セヨ。猶病重ク目ノ上トロノ中頷ノ下強ク腫ルモ。即亦鷹ヲ偃テ刀針ヲ以テ割出セ。口腫レバ旣ニコレヲ割テ。後ニ鈎ヲ以テ是ヲサルベシ。其色ハ赤ク白ク凝ル。熊ノ脂ノ如シ。又腎ノ塞タルモ此候アリ。
右經ノ說。

一方ニ灸所ハ前ノ如シ。紙ヲタヽミテ溫メ。紙ノ裏ノアタヽカニナルホド三炷アツベシ。但火ノ氣ヌルキ時ハキカズ。過レバ不可也。

藥云。檜(カイ)。苦辛。百艸。

右煎ジテカヘ。ウスク煎ズベシ。灸スルニハ餅氷ヲ嚙テ平メテ。其上ヲ艾ニテ灸スベシ。アトツカヌヲ良トス。

一方ニ先紙ヨリヲ以テ孔ヲヒネリ通シテ。後ニ丁香ヲ粉ニシテ吹入ヨ。餌ヲバ榎ニ卷タル木通(アケビノツルナリ)。ヲ煎ジテアラヒテカヘ。

一方ニ芹ノ白クキヲ以テ通ス。

一方ニ芹ノ根ヲ剉テ。一錢酢ニ淸胡麻ノ生油ヲ等分ニ合テ浸テ。夏ハ三夜。冬ハ二夜。鼻ノ孔ヲヨクツキ通テ。腭(アギト)ヲアケテネバリヲ取テ此藥ヲ入ヨ。又紫大根ヲ細クケヅリテサスベシ。

一方ニ口ヲアケテ上ノ觜ノヒサキノクボキ所ヲ夾テ。兩方ヲ火針ニテ燒ベシ。又目ノ前ヲ檀紙燒ニ灸スベシ。夏ハ常ニアメニアツベシ。胡麻ノ油ヲ鼻ニ入ヨ。

一方ニ辛薤(ニラ)ヲ粉ニシテ兄鷹ニ三丸。鷹ニ五丸。毎朝七日飼ベシ。

一方ニ丁香。麝香。田ノ澁。

右等分ニ合テ餌ニ合テ飼ベシ。

一方ニ川芎。丁香。何モ粉ニシテ等分ニ合テカヘ。又鼻ニモ入ベシ。

一方ニ蛭ヲ餌ニツヽミテ飼。

一方ニ人參。甘艸。干棗。

右煎ジテ能餌ヲ混メカヘ。大事ナラバ偃テ紫大根ヲ細クケヅリ鼻ニ入。如何ニモヤハラカニ捻リ入テ。後ニ辛蒜(ニンニク)ヲコソゲテ少鼻ニ入ヨ。

又云。鼻茸ヲ治スル方。鼻タケト云ハ孔ヨリ物ノ白ク生出ナリ。
薬云。七月七日ノ午ノ刻ヨリ前ニ蟬ヲ取テ。陰干ニシテ粉ニシタルト銅粉。何レモ木坪ノ水ニ解テカヘ。猶イヘズバ河蓙ヲ細ニシテカヘ。鳥尾ノ上ヲ灸ス。
一方ニ沉香。銀ノ屑。朽タル梨子。
右等分ニ合テカヘ。
一方ニ朽タル梨ヲキザミ。小豆程ニ三丸カヘ。多時ハ悪シ。
一方ニ熊膽。丁香。干姜。
右等分ニ合テ酢ニトキテ入ヨ。灸所ハ突金ノ根ナリ。
一方ニ柑子ノ汁ヲ少入ヨ。又葵ヲ細クケヅリテ。火ニ焙リテ鼻ノ孔ニ入ヨ。
一方ニ山モヽノ粉ヲ少シ孔ニ入ヨ。何レモ過レバ悪シ。
一方ニ丁子ヲ細クケヅリ。楊枝ノヤウニカミテ。鼻ノ孔ノソコヲハラフベシ。底ニハ鼻カタマリ有ベシ。取テ後ニ薬ヲ入ヨ。
一方ニ頭ノツキメヲ並テ小指ヲフセテ隔テ兩方ニ三炷灸ス。サテ夜ハ外架ニツナギテ露嵐ニアテヨ。
右四ケ條ハ鼻氣ニモ用ナリ。
一方ニ微溫湯ヲ以テ鼻ノ穴ヲ洗テ。楊枝ヲ以テ鼻クソヲ取テ。細大根ヲアナヨリクチヘヒネリ通シテ。後ニ丁香。莪木。米ノ酢ニトキテ穴ノ中ヘサスベシ。生姜ヲモ加ヘヨ。
或問。屎ヲツカズシテ面目腫ル丶病ハ何ト云ヤ。
答云。是ハ悪キ餌ヲカフニ依テ。痢結シテ尻フサガル也。十死一生ノ病ナルベシ。
臀ノ塞ルヲ治スル方。尻ノフサガラント

スルトキハ。常ニ餌ヲ嗜。夥カラズシテ飽キ。後ニ尾ヲアゲテシバ〳〵搖フナリ。其矢放(ウチツキ)難シ。頻ノ毛寒ク立テ目ノ輪及背眼ノ間腫ルナリ。即鷹ヲフセテ紙鍼ヲ以テ清胡麻ノ油ヲヌリテ孔ノ中ニ入。（病オモキ時ハ紙針ノ前ニ鹽チ付テ穴ニ入ヨ。）然後ニ好餌ヲ調テ與ヨ。其矢ノカタキコト石ノ如シ。

右經ノ說。

今按。我此病ヲ見ルコト繁シ。其形ハ先架ノ上ニシテ眠テ頭ヲ低ル也。涎ヲコボシテ次第ニ腰タヽズシテ。尾バカリヤウ〳〵搖スナリ。前ノ如ク治シテ差ルコトヲ得タリ。初ハ紙針ニ油ヲ付テ入テ。後ニ鹽ヲ少ツケテ入ルナリ。サテ孔ノ中ヲサグレバ硬物アリ。其ヲ少ヅヽホリ取テ鹽ヲ又サシ入ヨ。屎ツキ出スヲ見レバ石灰ノ如クナリ。又ウス黑シテクサシ。其後水ノ如クシゲクツク時ニ。米ノ粉ヲ下氣ノ療治ノ如クシテ飼ベシ。鷹心ヅカバヨキ餌ヲ少ヅヽ飼〳〵シテ平ナリキ。

藥云。犀角丸ヲ豆ホドニ餌ニマキテ哺ベシ。此藥ニテ平ナリキ。

一方ニ解毒萬病圓ヲ飼テ平ナリキ。又ツラ腫レバ犬ノ尻ト云艸ヲモミテ汁ヲ面ニ吹ベシ。此病ハ惡キ餌ヲカフニヨレリ。

一方ニ大ゲキ(戟)。五倍子。藍ノ葉。葉ヲンチ。銅。シタン(紫檀)ノ木。麝香。鹿茸。甘艸。大黃。

右粉ニシテ哺ベシ。

或問。足ノ腫ルコト其源何ニヨリテ發ゾヤ。

答云。アシ緒革ノフルキニヨリ。又生得鷹ノ指肉多クシテ色ノ黃ナルハ腫ル也。又架ノ上ニ久ク繫ニヲクニ依テ腫ルナリ。

脚ノ腫ヲ治スル方。（付股引又魚目。）先鷹ヲフセテ針ヲ以テ周遍腫ノ上ヲ刺。悉ク滑液惡血

ヲ去テ。即銅ノ針ヲヤキテ針ノ孔ゴトニ二三度サシテ猶イヘズバ。火針ヲ數ナク燒ベシ。然ドモ重クテ治シガタキハ終其脚曲損ス。此病ハ羅鷹ニ稀ナリ。巣鷹ニ稍多シ。格ニツナグニハ。柔愞ナル物ニテ架ヲ卷テ繋ベシ。寒キ時ハ葦ノカハヲ用ユ。暖ナル時ハ薦ノ蓐ヲ用ユルナリ。脚蚸ト云ナリ。初兆時ハ鹽ヲ酢ニ和シテヌルベ（一曰又[illegible]所用而者研[illegible]和酢塗之　三字經ニナシ）シ。夕部ニヌリテ朝ニ洗ベシ。鷹鹽ヲ食テ害アリ。

右經ノ說。

今按。針ヲ用ルコトナカレ。藥ヲ塗テ鳥屋ニ放ベシ。

一方ニ猫ノ骨ノサレタルヲ粉ニシテ。上ヲツヽミテ火ニアブルベシ。

一方ニ辛螺ノカラヲヌリテイユ。

一方ニユリノ根。卯ノ木ノ白皮。黏。（不入油用之。）漆。辛螺ノ蛻。

右等分ニ合テツケヨ。酢ニテ付テ上ニ紙ヲモミテ付ヨ。

一方ニ滑海藻。サイカジノ實。伊豫砥屑。

右等分ニ合テ古酒ニ銅ヲ出シテ其汁ニテ付ヨ。

一方ニ鳥貝ヲ繫ニテ上ヲツヽミテ。土器ニ入テ燒テ米ノ酢ニテ付ヨ。

一方ニ爪ノサキヨリ血ヲ出シテ。指ノ頭ニ銅ノ焇ヲ以テ溫テ。雄黃ヲ酢ニテトキテ付ヨ。

一方ニ猫ノ頭ヲ燒テ酢ニ合テ付ヨ。又スミレ艸ヲ酢ニテトキ付ケヨ。

一方ニ犬蓼ノ穗ヲ陰干ニシテ粉ニシテ塗ベシ。

一方ニ南星蜷ヲネヤシテ交テ付テ。上ニ紙ヲ付ヨ。

一方ニ鹽ヲ温テ以テ能々ユデ。後ニ冷シテ菟ノ角ト鹽ト等分ニ合テ。阿膠ヲトキテ續飯ノヤウニ合テ塗テ紙ヲ切テ付ヨ。

一方ニ雪ノ下草。燒。早稲藁し燒節ヲ用ユ。酢ニテトキテ付ヨ。

一方ニ栗ノ木ノ蟻ノ子ヲ取テ。檜脂ニテモ押マゼテ付ヨ。

一方ニ腫タル所ニ灸ヲス。燒所クヅルヽ程燒ナリ。其後ニ蛯。藤瘤。粉。麝香。沉香。粉。朱。松茸ノ石ツキ。粉。用之。各等分ニ抹シテ阿膠ヲトキテネヤシ合テ付ヨ。其上ニ紙ヲモミテ付ヨ。又上ヲ麻ニテ巻テヌルデヲ付ヨ。但痩タル鷹ニハ麝香ヲ不入也。藥ヲカキテ餌ニウトムコトアリ。

又云。足カラミト云ハ腫テ瘤ノヤウニ出ナリ。藤瘤ヲ煎ジヲ冷シテ。タライニ放チ入テユデヨ。サテ銀刀ヲ以テ足ノ裏ヲ刺ワリテ。餅ノ粥ノ如ナル物ヲ去テ藥湯ニテ洗ベシ。

藥云。牛ノ皮。燒。鹿茸。粉。雪下草。燒。唐墨。天南星。粉。麻ノ根。燒。カラムシヲモ用ナリ。各等分ニ合テ阿膠ニテ解テ付ヨ。

一方ニ車前草。蓮ノ葉。藤瘤。是等ヲ煎ジシテユデヽ後ニ。脱文歟

藥云。南星。雪ノ下艸。唐ノ芋ノ根。丁香。牛ノ皮。燒。鹿茸。各等分ニシテ阿膠ニテトキ付ヨ。餅ソクイモ少入ヨ。

又云。魚ノ目ノ出タル方。黄蘗ヲコク煎ジテユデヽ。脱タラバ小麥藁ヲ黒燒ニシテ付ヨ。

一方ニ銀針ヲ以テ彫取テ。芋ヲ燒テヌルデニテ合シテ跡ヘ入ヨ。銅ノ焇ヲ上ニアツベシ。

又云。足ニ物ノワキ出テ。瘤ノヤウナルヲ治スル方ハ。堅阿膠ヲトキテ續飯ヲ合テ付ヨ。其上ニ紙ヲ付テ置バイユ。

又云。井切ヲ治スル方。金毛ノ狗脊ノ毛ヲモ
ミ付ヨ。
一方ニ百艸ノ霜。茶。等分ニ合テ糊ニ合テ
付ベシ。何モノヽツクリ足ヲヽサスナリ。
一方ニハウクリ蘭ノコト。根丸ク角ノ前ノ如ナ
ルヲ紙ニ包。ヌラシテアツキ灰ニ入テ。暫
ク有テ取テ皮ヲ剝。布ニ包テシメ出シ。糊
ノヤウニネヤシテ。蛇骨ヲ合テ等分ニシ
テ付ヨ。藥ノ上ヲ綿ニテ卷ベシ。其上ニモ
ヌルデヲ付ヨ。其上ニハ土器ノ粉ヲ付ヨ。
一方ニ柹ノ核ヲ燒テ茶續飯ニ押合テ付
ヨ。
又云。脛ノ折タルヲ繼グ方。カントコロ干。
檀皮。燒。等分ニ合テ疵ニ付ヨ。井柳ヲケヅ
リテアミテ卷テ蓬ノ葉ヲ以テ卷ベシ。鳥屋
ニ放ベシ。
一方ニ井柳ヲ削テアミテ卷テ。銅屑ヲ餌
ニマゼテ哺ベシ。
一方ニ王不留。行草ヲスリテ塗リ。上ヲ井
柳ヲ以テ卷ベシ。內藥田蕎麥ヲ燒テ酒ニ
テケシテ哺ベシ。リウゴ錢ヲ粉ニシテ加
ヘヨ。又伏龍肝ヲモ加ヘヨ。
一方ニ前ノ如ク井柳ヲ以テ卷テ。苦菜。
蛭。天南星。
右苦菜ヲスリテ殘二色ヲ粉ニシテ酢ニテ
解テ付ヨ。チガヒ藥也。內藥ニハ疵ノ內藥
ヲ哺ベシ。
又云。股ト蹇タルヲ治スル方。葦毛ノ馬ノ
血。カントコロノ干粉。右竹ノ切口ニタマ
リテアル水ヲ以テトキテ飼也。
一方ニ茯神。甘艸。沉香。藥師草。右等分ニ
粒ニシテ井柳ヲ煎物ニテカヘ。チガヒ藥
ヲ付ヨ。
一方ニ袋角。銅屑。伏龍肝。三種等分ニ合。

便々蟲一疋ヲ三度ニカヘ。堂宮ノ下ニホリ入テ角二ツアル蟲ナリ。羽ヲカキタルニモ良之。

又云。脚ノ疣ヲ治スル方。先鷹ヲ伏テ杏仁十枚ヲ研テ絹ヲ以テツヽミ付ヨ。再三付カヘヨ。愈ルヲカギリトス。

或問。股腹ノ毛ヲ嚙脫事ハ何ゾヤ。

答云。療治アリ。巴豆（[illegible]）一枚。中ヲサキ一片ヲ取テ。其三分胡麻ノ油一合（[illegible]）。水銀粟ノ子。三枚（銀杏菓子三枚雜之）交テ是ヲカヘ。

一方ニ葵ノ莖ヲ日ナタニホシテ燒テ。湯ヲ以テ淋テ良之。

一方ニ雄黃ヲ酢ニ和シテ毛ヲ洗ヘ。但未試ナリ。

一方ニ鷹ヲ偃テ毛ヲヌラシテ。銀針ヲ以テ瘡ノ如ク赤キ所ヲ少ヅヽサシテ血ヲ出シテ。水銀ヲ掌ノ內ニ置テ丹ヲ合テ腹ニヌルベシ。

又云。羽ヲ嚙脫ニハ熊ノ脂（經ニ脂作膽）苦瓜（又瓜作茶）ノワタヲ研テ和シテ塗ベシ。

一方ニ山茄子ヲアクニ燒テ。雄黃ヲ酢ニ合テ付ヨ。

又云。毛ヲカルニハ紅花ニシユイ（リヤウフノコト也）ノ木（[illegible]）。等分ニ合毛ヲヌラシテ塗ベシ。

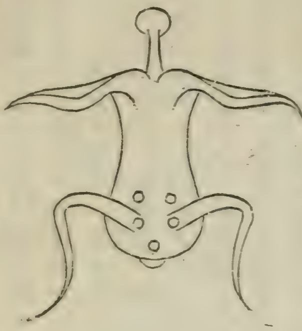
或問。痒ト云ハ何ト療治スルゾヤ。

答云。經ニ云所ハ。痒ヲ治スルニハ。鷹ヲ伏テ先淸水ヲ以テ洗テ。竹ノ筵（[illegible]）ヲ以テ膚ノ上ヲ掻テ殆血氣ヲ出シテ。更ニ溫湯ヲ以テ淸ク洗テ。水銀膏ヲ掌ノ上ニ置テ。唾ト混雜シテ無名指ニスリテ塗之。

一方ニ酢ヲ以テ雄黃ヲ研テ癬ニヌル。或脚付ヨ。或身體ニ付ヨ。毛ノ浮沉ニ隨テ奔（[illegible]）行ナリ（[illegible]）。大事ノ病ナリ。ツトメテ治スベシ。

或問。血ヲ瀉スル鷹アリ。何ノ病ゾヤ。
答云。血ヲヒルコトハ經ニハ血痢ト曰。其病ノ源ハ熱宍（日ヲヘダル宍ナリ）ヲ與ルニ依テヲコルナリ。然ドモ餓ニヲコル事モアリ。諸ノ鷹ニ轉移スルヲ見レバ人間ノ疫病ノ如シ。初テキザス時ニ。生鳥ヲ以テ營哺テ肥スベシ。鷹ニハ鳩ヲ與ヘ。鷂ニハ鶉雀ヲ與ヨ。十死ノ病ナリ。古往今來治スル方ナシ。
或問。犬ニ噬（經云治被犬噬害熱方トアリ此文可ナリ）レ鷹ニ採ル、疵ヲバ何ト療治スルゾヤ。
答云。鷹ヲ偃テ疵ヲ露ニシテ。其中ノ毛ヲサリ燒テ。牛馬（經ニ馬ヲ作鳥可ナリ）ノ脂ヲヌルベシ。又鵄ノ脂ヲ用ユ。鷂ニハ鶉ノ脂ヲ用ルナリ。或ハ鷂ノ疾ノ重キニハ牛ノ脂ヲ用ルナリ。凡此病ハ早ク治スベキナリ。遲キ時ハ害アリ。
一方ニ山桃ノ皮ヲ削テ煎メ。コレヲ堅クネリテ付ヨ。
一方ニ犬ニクハレタルニハ。犬ノ毛ヲ黑燒ニシテ付ヨ。銅屑莧角ヲ餌ニツヽミテ與ベシ。
又云。犬ノ牙ノ當タル療治。藤瘤。夜採タル楊ソクツ。胡葱。石菖蒲。各煎ジテ鹽ヲ少シ入テユデヨ。早ク洗ヘバヘラズ。一兩日過テ洗ベシ。サテ藥ヲ付ヨ。夜ハ鳥ノ脂ヲヌルベシ。
一方ニ檜ヲ黑燒ニシテ付ヨ。
又云。犬ニクハレ木ニ當テヨリヲコル病ハ。經ニハ内痒ト云ナリ。背ヨリ上頭ノ岐ノ下（左ニ圖アリ）左右ノ凹ナル處ヲ夾テ二灶。（左ノ圖ニハ三灶トアリ）
一方ニ腰ニ三灶。又二ノ腋ノ下。五臟ノ穴ニ各三灶灸ス。然後芒硝。虎珀。牛黃。龍骨。四種等分ニ合テ。胡麻ノ油ニ和シテ。豆子ノ如ニシテ。葦ノ管ヲ以テ口ニ入テ。後二時バカリ有テ食ヲカヘ。但餌ヲ早ク

飼ベカラズ。又短氣ナラバ頂上ヲ三炷燒。
又云。痍ノ方。蠶蟲(蚕蟲)。白粉。カタバミ。人參。甘艸。藤瘤。沉香。但犬ノ噬メニハ蚤虫ヲ除テ。龍腦熊膽ヲ入ヨ。
一方ニ蚤虫。七。鼠糞。七。カタバミ。麝香。白粉。人參。
右抹シテ等分ニ合テ與ヘヨ。
又云。餌ツヽミ破タル方。先ヅ破タラバ人ノ髮ノ毛ヲ以テ縫テ。痍ニハキヤウリセンヲ



塗ベシ。内藥ニハ銅ノ屑ヲ與ヨ。
或問。胴茸ト云病ハ其形如何ヤウナルゾヤ。
答云。俗ニハ胴茸ト云。經ニハ肉瘤ト云ナリ。人間ノ癥瘕積聚ノ如シ。調養ノ精シカラズシテ此病ヲコルト云ヘリ。病ノ相ハ初兆時ハ繁身振ヲシテ毛ヲタテオサム。或ハ振ヒ中ニ振止リ。或時ハ毛ヲサシユルメテ亂シ。或時ハ毛ヲツヽメテ斂。如此ナルコト重シ。眸子寂寥トシテ黑眼チイサク。白眼大ニシテ遠物ヲ見時ノ眼ノ如シ。食ヲ哺フニ日々ニ減ジテ。轉瘦癯テ食ヲ斷バ死。其害癥ヲ披見バ或腫テ腹ノ下ニ着キ。或五臟ノ裏ニツク。悉皆乾損スルナリ。腹ノ下ニ着者ハ刀ヲ以テ披割テ。馬ノ尾ヲ以テ縫ト云ヘリ。未試ナリ。凡此病ハ羅鷹ニ多得タリ。巣鷹ニハ希ナリ。古往今來治スルニ方ナシ。
已上經ノ說。

爰ニ予此病ヲ試ニ。經ノ如ノ煩ハ第二三ノ骨ヨリ五倍子ノ如ナル物生出タリキ。又病ノ相ニ食ヲ例ヨリ哺コト日々減ジテ。身ヲスクメテ振コトナクシテ尾ヲ時々フリテ。暫アリテ身ウゴキノ時ハヲビヘ。少シ身ヨリヘカヽリテ居タリ。其肉瘤ハ第五六ノ骨ノ間ヨリ五倍子ノ如キナル物生出タリ。屎袋ニ生付タリ。經ニ云ル如ク。中ハ乾テ空ニテアリキ。哺餌ヲオスコトナカリキ。十死ナル病ナリ。灸治最妙ナリ。

藥云。家ノ中ヨリ生タル笋干。大麥。家ノ中ニ生タル。鼈甲。各抹シテ夜取澤ノ水ニ合テ。十七八ノ月水。大ニ三小ニ二ツ哺ベシ。若シ瘥ズバ初雪ノ降タルヲ竹ノ筒ニ入テ蓋ヲシテ。內ヘ水ノ入ヌヤウニシテ土ニ埋テ。六月中旬ノ比ニ取テ。上ヲ洗テ廿日バカリ乾テ取出セバ。朱ノ如ナルヲ鳥ノ羽ニテハキテ鼈甲ト等分ニ合與ヨ。

一方ニ問藥曰。苧ノクズ。滑石。粉。苧ヲ引ハリテ刀ヲ以テ刮テ屑ニシテ。滑石ノ粉ト合テ。豆程ニ丸メ飼ヘ。生タル茸ヲツキトヲスナリ。然レバ食ヲ與テ治スベシ。ソヾロニ打タラバ治スベカラズ。

一方ニ餌ヲオス藥ニハ。谷川ノ少蟹ヲタヽキテ細ニシテ。○ホドニシテ二丸バカリ哺ベシ。食ヲ押黏テ哺ベシ。

或問。胴氣ト云病ハ源ハ何ヨリ起ゾヤ。

答云。物ニフレテ血滯テオコルナリ。候見ニハ豚アリ。脾骨サキト屎袋トノ間ニウゴキヲトルベシ。指ヲ按ヘテ試ベシ。

藥云。人參。甘艸。生。地黃。茯苓。沈香。丁香。鷹。円焼。藥師艸。右等分ニ合。麻ノ皮ヲ剝テ卷合テ。黒焼ニシテ餌ニツヽミテ哺ベシ。又鼻氣ニハ川芎ヲ粉ニシテ加入

ヨ。萬病圓ト號スルナリ。

一方ニ猫ノ頭。燒。人參。抹。甘艸。抹。鷹。圓燒。藥師草。燒生。右等分ニ合テ哺ベシ。

一方ニ地黄。生。茯神。燒。人參。生。甘草。燒。藥師草。燒。麻。燒。桂心。生。川芎。生。右等分ニ合テ與ヨ。

一方ニ灸治方。三年ニナル茄子ノ香ノ物ヲ熱湯ニ入テ鹽ヲ出シテ。紙ヲヌラシテ毛ヲ分テ骨四ノ間ヲ灸ス。紙ノ上ニ香ノ物ヲ重ヌベシ。七火灸ス。鳥ノ尻ツキタルニモ此灸良之。

人參散。人參。一兩。甘艸。一兩。巴豆。三粒。木香。三兩。忌火。藿香。三兩。檳榔子。一兩。縮砂。一兩。沉香。一兩。桂心。一兩。忌火。丁香。一兩。茯苓。一兩。藥師草。一兩。麝香。一朱。野菊。一兩。

右粉ニシテ甘葛ニ合。勢ハ黍ホドニスベシ。大。五。小。三。鴿。二。雀鴿。一。雀ノ胸ノ宍ニツヽミテ哺ベシ。ヤカラ瀉藥ヲ哺ハツヨキ間。瘦鷹ニハ用捨アリ

神家。人參散。

人參。一錢。藥師藥。同。忌火。巴豆。三粒。去油。甘艸。半錢。丁香。一字。銅屑。半錢。土龍。同。兎角。一錢。蛇骨。半錢。麝香。同。沉香。同。右合テ丸コト茱萸ノセイナリ。大三。小二。哺ベシ。

一方ニ麝香。甘艸。梨。柑子。兎角。松ノ根。猿ノ居敷アルヲ用之。蛭。各等分ニ合。餌ニツヽミ七ヅヽ毎日七日哺ベシ。痊ズハ三七日良之。

一方ニ兎角。蚫細腸。黒燒。麝香。各合テ雀ノ胸ノ宍ニツヽミ三裹ニシテ哺。息氣ニモヨシ。萬病圓ト用之。

一方ニ人參。一兩。甘艸。一兩。茯苓。一兩。鹿角。一兩。藥師艸。一兩。麒麟艸。一兩。虎肉。二分。干麻。二分。沉香。二分。右此內干麻ト

虎肉トヲバ半分入ベシ。何モ粉ニシテ餌ニツヽミ哺ベシ。

又云。胴ヲ打タル方。藥師艸ノ青汁ヲ揉出シテ哺ベシ。餌ニツヽミテ三丸與ヨ。□草ヲキザミテモ哺ベシ。

一方ニ堅鹽ヲ哺ベシ。ヤガテ水ヲ與ヨ。

又云。胴血ト云テ物ニ觸テ血腹ノ内ニ止テ喘ナリ。白鳥〔馬イ〕ノ夜眼ヲコソゲテ哺ヘ。惡血ヲ瀉ナリ。

一方ニ銅屑。竹茹。三ツ葉。卯木。青皮。鷄膓草。粉。右合テ大ニ三丸。小ニ二丸。上餌桃餌ヲ哺。溫血ヲ忌。

又云。胸ヲ撲タル方。夏蟬。胡葱根。水澁。以絹コス。人參。等分ニ合テ飼ベシ。

又云。身ヲ物ニ觸タル時。口ヨリ血ヲハキテ毛ノ根ヲ立テ目ヲ細クナスナリ。先ヅ例ノ鹽ヲ哺テ。後ニハ水澁ヲ三朝哺ナリ。鹽ノ過タルニハ摺粉ヲ哺ベシ。

一方ニカヅラ草ヲ押モミテ青汁ヲ哺ベシ。藥師草ヲモ一藥用ルナリ。是ヲ神平ガ青藥ト名ナリ。

一方ニ生草ノ白根ヲ洗テツキシボリテ。其汁ニテ餌ヲヒタシテ哺ベシ。是ヲ萬病圓ト號ス。胴ヲ打タルニモ亦藥ノ過タルニモ良ナリ。

又云。頭ヲ撲タル方。川大黄。巴豆。赤鼠糞。各等分ニ合テ大ニ三丸。小ニ二丸哺ベシ。桃餌ヲ哺ヘ。

又云。身ヲ物ニテ打タルニハ屎ヲ弱クツクベシ。然ラバ木賊節。栗ノ木。朽タル黒燒。澤蟹。細ニタヽク。金薄。少。合テ水ヲ以テ哺ナリ。一日ニ三丸□。

又云。聲ノカレタル方。架ホドニテ身ヲ打タルニ依テナリ。又ハ拳ノ下ニテ胴ヲ打タル

故ナリ。小兒ノ屎ヲ哺也。シクヤクト號スルナリ。
一方堅鹽ヲ常ノ如ク哺ベシ。
一方石伏ノ生ヒタシヲ扣テ。餌ニツヽミテ三朝哺ベシ。
一方伏籠肝ヲ水ヲ以テ哺ベシ。

或問。大風ト云病ハ如何ヤウナルゾヤ。
答云。大風ト云ハ經ニハ見ヘズ。人間ノ中風ニ同ジ。先ヅ其病ハ拳ヲシメテ羽ヲアヲルナリ。時々振ヒワナヽキテスクム病ナリ。灸所第一ナリ。桑ヲ煎ジテ湯ヲ哺ベシ。
一方桑ヲ燒テ水ヲ懸テ消炭ヲ哺ヨ。
一方銅ヲ出シテ一日ニ二度哺ベシ。
又云。中風ヲ治スルニハ。先青石ノ大ナルヲ燒テ。其上水精。一コ（稽イ）。鹽。麻。井柳。杉葉。車前草。桑木。牛膝。蓬。各等分ニ石ノ上ニ置テ。湯ヲ掛テ鷹ヲ伏テ蒸ベシ。起シテ蓬ヲ敷打籠テ置ベシ。內藥云。鳥頭。黒燒。香色。生。各粉。三種ニナシテ椑機ノ粉ヲ入テ。大ニ二小ニ一與ヨ。
一方煎ジ物ノ方。ソクツ。大ハコ。藤瘤。杉。雪ノ下草。桑。木瓜。桃。井柳。藿香。各煎ジテ蒸ベシ。內藥云。船虫ト石龜ニ麝香ヲ交テツヽミ哺ベシ。
一方。垣通。茯苓。麝香。等分ニ合哺ベシ。

或問。羽ヲカキタルニハ何ト治スルヤ。
答云。羽ヲ物ニ觸テ痛テ惡血滯テ後ニトブコトヲ得ザルナリ。ソノ惡血ヲ未オサメザル時ニ。カキタル處ノ續目ノ小羽ヲ拔テ。銅ノ針ヲ其羽ノ根ニ少サシテ血ヲ出シテ。艾ヲ細ニシテ灸三炷スベシ。藥云。大薙。銅。粉。等分ニ哺テ闇所ニ繫ベシ。
一方。地黃。沉香。柚核。白馬ノ爪。車前草ノ根。各等分ニ合テ黒燒ニシテ餌ニツヽミテ哺ベシ。
一方。カキタル羽ノ節ヲ引直テ。後ニ眞弓

皮。燒。蚤蟲。生ナガラ。右餌ニツヽミテ哺テ。

荷葉。藤瘤ヲ煎ジテ蒸ベシ。

一方。蝨カハ。燒。蘩。燒。人參。甘艸。藥師艸。燒。麻。燒。柹核。燒。葛粉。茯苓。各等分ニシテ黒燒ニシテ哺ベシ。

一方。リウコ錢。虎骨。古錦。燒。等分ニ合テ哺ベシ。

一方。土器ヲ燒テ酒ニ入テ。蘩ヲ揉テ包蒸ベシ。

一方。穴ヲホリテ穴ノ底ニモ廻ニモ鷹ヲ敷テ口ヲ塞ナリ。但蓋ニ穴ヲ明ルナリ。餌ヲ少切テ小毛ニ交テ哺。カキタル羽節ノ毛ヲ拔テ小石ヲ燒テ蒸ベシ。今按。本文不分明也。彼堀タル穴ニ小石ヲ燒テ入歟。

一方。リウコ錢七日飼テ闇所ニツナグベシ。

一方。蚤虫。五。眞弓皮。粉。合テ哺。但鷹ノ大小ニ依テ虫ノ數ハカラヒテ哺ベシ。

一方。カブラ錢。一錢。白粉。古桶カハ。燒テ一錢。蚤虫生ナガラ三ツバカリ。入テ哺ベシ。

一方。虎骨。錢屑。リウコ錢用之。古錦。燒。達タル所ノ小羽ヲ拔テ。銅ノ鍼ヲ以テ少シ刺テ血ヲ出シテ。表裏ヲ小艾ヲ以テ灸テ此藥ヲ哺ベシ。田蕎麥ヲ燒テ酒ニテケスベシ。リウコ錢。伏龍肝。等分ニ合テ哺ベシ。

一方。前ニ云如ク。土器ヲ燒テ酒ニ漬テ蒸テ。井柳ソクツ煎ジテ銅ヲ哺テ鷹屋ニ籠ベシ。二七日許コメヨ。

一方。蛭。粉。天南星。粉。苦菜ヲスリテ前ノ二色ニ合テ。米ノ酢ニテ解テ達タル所ニ付ヨ。此藥ハ達藥ナリ。何ノ所ナリトモ達タル所ニ付ヨ。

一方。柚ノ葉。榎木ノ廿皮。等分ニ合テ水ニ出シテ餌ニ混ジテ哺。

一方。蛔細腸。蚕虫生ナガラ黏シテ合用ユ。虫ナクバ柚ノ葉ヲ粉ニシテ。リウコ錢等分ニ合テ餌ニ包テ與ヨ。

一方。芥根。葝萱根。藤瘤。笋。家ノ内ニ生ジタルヲ用ユ。カウゾノ根。桑木。甘草。各煎ジテ餌ニコメテ與テ屋ニ入ヨ。脾ヲ引タルニモヨシ。達藥也。

或問。羽ノホロ〳〵ト落事アリ。何ト云病ゾヤ。

答云。羽虫ト號ス。時トシテ尾羽ヲ落コトアリ。尤大事ナリ。藥ニ云。苦參。苦木。黄蘗。胡桃根。皮。水銀。ナクバ不用。等分ニ合テ羽ノクキヲワリテ入ヨ。ツキタル兩ノ羽ニモ入ヨ。

一方。水銀ヲ檜脂ニトキテ羽クキヲワリテ入ヨ。

一方。羽クキヲワリ屎スル所ノ虫ヲ一羽ツニ一ツ入ヨ。

一方。目ハジキノ汁ヲ入ヨ。

一方。漆檜脂。香煙。煤。各合テ入ヨ。

一方。檜脂ヲネリテ鹽ヲ少入テクキニ入ヨ。

又云。ゴセト云病是ニ似タリ。

一方ニ。大根ヲオロシテ鹽ヲ加テ可塗。

一方ニ。麒麟草ニ草ニ鹽ヲ交テ揉テ。其汁ヲ羽莖ニ入ヨ。

一方。雌黄ノ灰ヲ解テ入ヨ。今按鷄糞八湯也

一方ニ熊ノ脂。檜脂。雌黄。鹽。四種等分ニ押交テ羽莖ヲワリテ中ヘ入ヨ。切タル口ニモ入ヨ。兩方ノ羽ニモワリテ入ヨ。

一方。熊膽。雌黄。麝香。南星。檜脂ヲトキテ上ノ四種ノ藥ヲネリ合テ羽莖ヲワリテ入ヨ。羽莖ノ殘タルニ檜ノ抗ヲ削テ藥ヲヌリテ指ベシ。

一方。ツキタル羽ヲ切テ檜脂ヲサスベシ。

又ウルシヲモサス。但漆ハ羽ノ生ズルコト止ルコトアリ。苦木ヲ煎ジテ洗ベシ。

一方。コシ油。一分。檜脂。二分。合テ。節近キ菖蒲ノ根ヲケヅリテ。抜タル羽莖ホドニシテ。此薬ヲヒネリ入テ兩方ノ羽莖ニ塗付ヨ。三十日バカリ有テ取ベシ。其傍ノ羽ヲ一ヅヽクキヲワリテ入ベシ。黄檗白粉ヲモ入ヨ。

又云。羽ミソ治方。羚羊角。硫黄。檳榔子。各等分ニ合テ羽莖ニ入ヨ。上ニモ塗ベシ。

或問。卒ニ物ニ狂事アリ。如何心得ベキヤ。

答云。汗穢(汚穢)ニ依テ俄ニ狂スルト云説アリ。治療更ニ古法ニ出デズ。先ヅ架ヲ高ク構テ。棟ヨリ高キ所ニ上テ。幣ヲ以テ舞ヲマヘバ則平愈スルナリ。

一方。鷹ニ衣ヲ着テ急ニ餌ヲ哺。其衣ヲ幣ニ交テ四方ノ神ニ奉ルベシ。何モ是ハ諸獵師ノ語也。用ベキコトハ其人ニ依ベシ。

藥云。蟬。蝶。銀竹ノ節ノタマリ水ニ合テ哺ベシ。

一方灸治アリ。百會。三炷。肩ノ次目。左右三炷。頤ノ下凹。一炷。藥云。荷ノ葉。カタバ。金銀草。人參。右湯ニ出シテ餌ヲヒタシテ哺。必平愈。

或問。虫ヲヒルコトアリ。何ノ病ゾヤ。

答云。腹ノ病トテ物ニアタリ鷹ニトラレ。鳥ニモアラク當リタルニ依テヲコルナリ。灸治妙ナリ。中骨ヲ中折ニクラベテ。小指ヲ側テ一炷ヅヽ燒入ベシ。藥云。垣通。燒。銅澁水。右鷹飼ノ血ヲ以テ合テ哺ベシ。

或問。瀉氣ト云病ハ其源何ヨリ起ゾヤ。

答云。惡キ水鹽ナドヲ飼タルニヨリテナリ。穠米ヲ白ク杵テ井華水ヲ以テヒタシ。夜ハ水ニ入。晝ハ干テ。廿日經テ粉ニシテフルイテ。甘艸。人參。梨子。右合テ哺ベシ。上餌ニ

温血ヲカヘ。
一方。赤イバラノ果ノ上ノ皮ヲムキテ。米粉。甘艸。等分ニ合テ餌ニツヽミテ哺ベシ。
或問。息氣ト云ハ源何ヨリ起ゾヤ。
答云。胴氣ヨリ起コトアリ。大根。黒焼。耳カキニテ一ツ口ヘ入テ水ヲ哺ベシ。
一方。丁香。麝香。谷蟹。蟬。大根。焼。等分ニ合テ七日哺ベシ。
一方。茆(チカヤ)根。一把。一ハツノ根。三片。入テ煎ジテ哺ヘ。愈。
或問。虱ト云病ハ何ヨリ起ゾヤ。
答云。ヨゴレタル時水ヲアブセザルニヨリテナリ。硫黄。白粉。丁香。黄蘗。等分ニ合テ苦木ヲ煎ジテ洗テ竹ノ管ニテ吹入ヨ。愈。
一方。苦木ヲ煎ジテ洗ナリ。又細末シテ酢ヲ以テ塗之。
一方。甘艸。椊橡。五倍子。硫黄。抹シテ塗之。
一方。土器ノ粉。口傳アリ。白粉入ヨ
一方。熊脂。猯カ貉油ナリ。白粉。硫黄。右等分ニ合テ。米ノ酢ニテ合テ。鷹ノ觜ノヨラヌ所ノ毛ノ根ニ付ベシ。
一方。丁香。韮。白粉。一錢。右好酢ニ合テ付ヨ。薬ヲ付ニハ頭ノ四毛ノ中ニ入ヨ。中一日アリテ水ヲ浴ヨ。
一方。好綿ヲムシリテ鷹ヲフセテ衣ニ着テ置ベシ。ホメキテ綿ニウツルナリ。
或問。萬病治氣ノ病ト云如何ゾヤ。
答云。先病ノ相。脳ヲ垂テ涙ヲコボシ。羽ヲヒロゲテ架ニフス。大事也。
薬云。六月ニ蒔タル麻ノ根ヲ洗テ粉ニシテ。方寸ノ升ニ一升哺。一時ニ愈ズバ大事也。

一方。六月一日ニカヽリテ蒔タル大根ヲアラハズシテ。土ヲコソゲテ方寸ニ哺フ。

一方。石艸薬(イシハイ)㊂。水中薬㊃。野中薬(フクリヤウ)㊄。合テ哺。萬病ニ良ナリ。

一方。蚫細鴫。燒。兎角。麝香。合テ哺ヘ。萬病ニ良ナリ。

或問。風ト云病ハ其相如何ヤウナルゾヤ。

答云。先頭ニ毛ナクシテ耳ノ穴アラハニナルナリ。鷹ヲフセテ生温湯ヲ以テ浴シテ。檜ノ刀ニテコソゲテ捨ヨ。薬云。檜脂堅鹽ヲ合テ塗之。煤ヲ加ヘヨ。內薬ニハ小豆ヲ煎ジテ汁ヲ哺ヨ。

或問。野摺ト云病ハ如何ナルゾヤ。

答云。先餌ヲ食テ痩毛。羽美色ニシテ荒鷹ノ如シ。架ニ繋バ旋子ヲ捉テイサマシゲナリ。薬云。女ノ尿壺ノ上ニ黒キ土ヲ取テ抹シテ哺。此病ニハスカシヲ哺ベシ。

一方。腰ノ次目油毛ノ上ヲ灸スベシ。秦皇ノ秘灸トス。

或問。アツキト云病ハ其相如何ゾヤ。

答云。倒ニナリテスクムナリ。薬云。鮒。蕪ノ根。澤瀉。生草。芝。葛葉。曳藁。赤荊。各等分ニシテ澁田ノ水ニ銅ヲ合テ哺ヘ。垣通ノヲ取テ灰ニ燒テ合テ三丸哺。

或問。羽タケト云病其相如何ナルゾヤ。

答云。尾羽ヒシゲククダクルナリ。薬云。鳥羽。燒。生朽。粉。等分ニ合テ目ニ入テ縫塞テ。三日アリテトクベシ。

一方。鼻毛ノ辻ヲ火針ニテ灸セヨ。薬ヲ飼ニハ木坪ノ水ニ合テ哺ベシ。

一方。井柳ヲ煎ジテ其汁ニテ目ヲ洗ベシ。

一方。血ヲアタヽカニシテ哺。

一方。井華水ヲ早朝ニ吹ベシ。上治ナリ。

或問。フクシヤウト云病ハ其相如何ナルゾヤ。

答云。腹ノ色青ナルナリ。中骨ニクラベテ中ヲ折テ灸ス。指ヲ伏テ左右ヲ一炷ヅヽ燒。藥云。垣通ヲヤキテ生姜ノ水ニ合テ與ヨ。

一方。生艸ノ白根ヲ土氣ナクシテ哺。藥ニマケタルニモ胴ヲ打タルニモ良ナリ。

羽ノ生ズルヲ留ヲ治方。赤子屎。夏蠶種合テ留タル穴ニ入テ。桑ノ枝ノ針ヲサスベシ。

一方。薫陸。粉。蠶ノ種ニ合テ用之。

毛ノ落ヲ治方。南天根。山宇津木。甘皮。牛膝。赤松葉。四種煎ノ餌ヲモ混ジ盥ニモ入ヨ。

一方。狐肝。尾長鳥。〔五八草考〕コハツノ肝ヲ與テ。ハシ鳥屋ニ水ヲ居ズシテ入ヨ。

一方。夕顔ヲ燒テ上ノ皮ヲコソゲテ水ニヒタシテ。其汁ヲ混ジテ哺へ。

一方。土龍ヲ黒燒ニシテ哺。生タルヲモ哺。

羽落ルヲ治方。

スカシ藥方。

唐ノ白藥ヲ哺。ジヤ香ナリ。鼠屎。髮垢。何モ餌ニツヽミテ哺へ。

一方。〔此一方誤字アリヤ不分明〕餌ヲ洗物早旦ノ屎ナリ。

一方。茯苓。袋角。何モ粉ニシテ等分ニ合テ。宍ニヨリテ哺ベシ。

一方。女ノ尿居タル所ニ黒クタマリタル土ヲ一重提テ。ツカハント思ハン時。早餌ニツヽミテ哺。其後水ヲカイテ屎ヲツカセヨ。

一方。鹿角ヲ粉ニシテ二錢バカリ餌ニツヽミテ與ヨ。

一方。赤イバラノ根。莿萱ノ根。二種コク煎ジテ檀紙ニ留テ。細ニキザミテ大豆程哺へ。放日ハ五丸カへ。

萬病藥スカシニ用之。

赤蛙ノ肝。羚羊角。鼠ノ脾。〔[illegible]〕狐肝。鯉ノ脂イ。

蓬瘤。松ホド。鶇ノツ羽。各等分ニ合テ。夏ハ荒川ノ水ニホトバカシテ良。秋ハ芋ノ露ニホトバカス。冬ハヨク〳〵ウガイシテ。温キ水ニホトバカシテ一日出テ。木ノ葉ニ置タル露ホドニ丸シテ與ヨ。サテ木通ノ實ヲ三ツ與フ。放タン日ハ三日ノ間三度ヅヽ與ヨ。壽長シテ耳安シ。

ツクナウセン方 是モスカシナリ。

何首烏（イ）ノ根。茢萱ノ根。羚羊角。狐肝。鯉ノ脂。髮ノ垢。山女實。鶇ノツ羽。各粉ニシテモ與ヨ。煎ジテ餌ヲモ混ジテ哺ベシ。壽長シテ病ツカズ。肉上テ内スクナリ。耳安キ藥也。

小人參 鶻鷹ノイラレ藥。主チワスレヌ也。

人參。三兩。檳榔子。三兩。胡椒。半。巴豆。半。甘艸。三兩。丁香。半分。桂心。等分。縮砂。等分。各粉ニシテ丸スベシ。衣ニハ白粉。夏ハ茶用之。勢ハ〇大ニ五小〔マヽ〕ニ三ツ。雀ノ胸ノ宍ニツヽミテ可哺之。是亦スカシニヨシ。

骨ヲツク方

柚ノ核ヲ出テ。白荏ヲ四十九粒河水ニスリテ。餌ニツヽミテ一日七粒哺ベシ。七日ニヨシ。

ナツケ藥

夜提澤ノ水ヲ檀紙ニシゲク混ジテ。ハキ〳〵メキザミテ哺ベシ。又タンヲ常ニ哺。

土龍マル病ノ方

烏ノ血ヲ三日バカリ哺。其ニイヱズバ谷カコ〔エ歟〕ヲ哺フ。但餌ニマクベシ。猶愈ズバ庭柳ヲコク煎ジテ餌ヲ洗テ哺ヘ。

舌ヲ出ス病ノ方

薙ヲ哺。

一方。ツグミヲ三日與ヨ。

一方。硫黄ニテフスベヨ。内ヘハ銅屑ヲ哺

ベシ。
一方。舌ノサキヲ少サシテ血ヲ出テ。汁ニ堅鹽ヲ少シ合テ。舌ノサキニ付ヨ。
肉ノ損タル方
好梨ヲオロシテ檀紙ニ巻テ三丸哺フ。サテ其夕部ニ飼ベキ薬ニハ。赤フチニ鳥ノ血ヲ出シテ哺。鳥トハ白鶏ノ雌ナリ。又篠竹ノ下葉ヲ哺ヘ。
追切テ鳥ヲ不捉方
鉛ヲ大ナル梅ホドニ丸メ。口ニ銜テ温ニシテ餌ニ巻テ。其上ニ息ヲ吹カケテ可哺ナリ。ヤガテ鳥ヲ追ナリ。是ニテモ鳥ヲ捉ズバ下氣ト知ベシ。サアラバ長ニクラベテ中ヲ折テ。中ノ程ヲ一炷灸セヨ。モミ雀ヲ與ヨ。又此餌ヲ哺テ米ノ汁ヲ銅ノ入物ニテヌルメテ。餌ニ混ジテ與ヨ。
骨鉗ノ方
人ノ山ナドヲキム時ニ。常ヨリ鷹ノ振舞ヲヨク見ヨ。物數ヲセン爲ナリ。雌ノ頭ノ骨鷹ニハ三ツ。兄鷹ニハ二ツ。堅キ板ノ上ニアテヽ。刀ノムネニテ細ニタヽキテ油筋ヲトリ。布ニツヽミテ温湯ニテ洗テ。サテ好餌ヲ半ヨリ少サキヤウニ合テ。湯ヲヒタ〳〵ニ入テ哺ベシ。サテ又次ノ日好餌ヲ脇餌ニカケテ心ヲナヲスベシ。其日ハ何ヨリモ鷹ノフリカハルナリ。
耳安放ルヽ方
鷹ニハ牛膝烏ノ羽ヲ合テ煮出シテ其汁ヲ與ヨ。兄鷹ニハ鼬ノ血ト烏ノ羽。是ヲ出メ四五日哺ベシ。
一方。楊ヲコク煎ジテ餌ヲ洗テ哺ベシ。
一方。干野老ヲ粉ニシテ哺ヘ。
一方。兄鷹ニハ鼬ノ尾ト烏ノ血ヲ出シテ哺トモアリ。何レモヨシ。

尾味噌ヲ治方

右酒ヲ以テヨク〳〵（等ヲ酒ニテ浴スルコトカ）ユデヽ後ニ。苦參。粉。熊ノ脂。檜脂。等分ニ合テ傅ヨ。

タケト云病方

口ヲアケテスダクナリ。木瓶ノ水ヲ哺。又水澁ヲ哺ベシ。薤ヲ粉ニシテ與ヨ。生タル小鳥ノ血ヲ哺ヘ。烏ノ血ヲ雜テ小鳥ノ血ヲ哺ベシ。

山忘方隼差羽ニ限タルコトナリ。

其腦。ツクノ眼。何モヨク〳〵干テ粉ニシテ。一ツニ合テ水ヲ少シ入テ。其ニタツシテ鳥ノ羽ヲ以テ口ニヌルベシ。

組藥鷹ニ用之。

酒ノ傳干ノ波龍。五八草。各等分ニ合テ放タント思ハヾ日中ホドニ哺ベシ。

惣藥方

山ニ赤キ土ノアルヲ取テ。蘩ヲモミテ其汁ニテコネテ。大ナル梅ホドニ丸シテ久燒テ粉ニシテ。又鮑ノ細腸等分ニ合テ用之。

黑藥法

人參。甘艸。生。川芎。地黃。茯苓。桂心。沉香。或ハ麻ヲ加エ。右七種各藥師草ヲ以テ上ヲイカニモ多ク巻テ。其上ヲ麻ノ糸ニテ巻。土器ニ入ヲ燒ベシ。

同法

麻根。甘皮。女髮垢。同毛ニテモ良。荷葉。クヌ木。陰干。右等分ニ黑燒ニシテ哺。胴ヲ打身ヲ物ニ打タルニモ妙ナリ。古血下ナリ虛捉シタ時ハ養性ニ哺ベシ。

三藥法

猿骨。葛粉。上品用之。麻。黑燒。七月七日午ノ時取テ良。各等分ニ合テ雀ノ胸ノ宍ニツヽミテ哺ベシ。羽ヲカキヌルニモ。腦ヲ打タルニモ。骨ヲ打折タルニモ良。何ニモ妙ナルベシ。

青藥法

藥師草ノ葉ヲ陰干ニシテ粉ニシテ哺ベシ。息氣ニモ。拳ニテ胴ヲ打タルニモ良。アヤマチシタルトキハ。口ヲ引アケテ半錢許水ニテ與ベシ。

通テ鳥ヲ捉ヌ藥方

寒野老ノ根ヲ方寸ノ匙ニテ三升哺。又石灰五升哺ヘ。此藥ハ放時モ五日ニ一度哺ヘ。石灰。寒野老ノ根。等分ニ合テ常ニ哺ヘ。

鳥ヲ捉セヌ藥法

狸ノ油。煤。鳥ノ肝。右合テ哺。忽シラムナリ。是ヲナヲス藥。北尻ニ流タル川ノ石伏。山菅。（日ニモアタラヌ根ナ用ユ。）赤荊。是ヲ細ニ抹シテツヽミテ哺ヘ。三日ノ内ニヨシ。又日ニモアタラヌ山菅ナクバ。鳥ノ羽。川ニ薙。髮ノイロコ。石灰。木坪ノ水。銅。右煎ジテ餌ヲ哺ベシ。抹シテモ哺。

隼ノ相合藥（鶻鷹ニモ用ユ。ナツケ藥ナリ。）

茯苓。ツク眼。髮垢。赤蓁。鶉足。等分ニ合テ三日前ヨリ一褁哺ベシ。

隼ノ主不忘藥

ツク眼。ゴマメ。銅。各抹シテ雄ノ胸前ノ宍ニツヽミテ與ヨ。餌ノ程ヲイハ橘ホドニシテ。餌ヲオサバ雌ノ陰穴ノ宍ヲ口餌ニヒカセヨ。三日與ヨ。

隼ノ手放藥

大犬ノ牙。人ノ足ノ爪。ナモミノ實。右等分ニ合テ中ノ大豆ホドニシテ與ヨ。

餌ヲウタスル藥

唐ノ白粉ヲ少シ哺。過レバ煩アリ。

一方。クツワヲハメテ闇キ處ニ繫ベキナリ。悉フルナリ。能程ニシテ轡ヲ取ベシ。其後ニ澁田ノ水銅ヲ合テ哺テ。一時アリテ鉛ヲ抹シテ哺ヘ。一町過レバ手振二三

度シテ。水屎ヲツキテ必鳥ヲ追ベキナリ。

煎物方

垣通。ソクツ。大ハコ。三種ナリ。

山回ノ隼ノ住所ヘ飯藥

ツク眼。ゴマメ。銅。等分ニ合テ雄ノ胸前キノ肉ニツヽミテ與ヨ。住所ヘ歸ナリ。

一方。雌雄ヲ陰干ニシテ百日メ能〱洗テ。鼠ノ血ト鷄ノ血ヲ合テ。乾鳥ノ宍ニヨク〱塗テ哺ベシ。キハメテ放ヌ鷹ニハ。柚ノ皮ヲ上品ノ絹ニツヽミテ汁ヲシボリ出テ。雀ノ内脾ノ肉ヲ犬ノ涙ニ合テ哺ベシ。

山回皫シテ不放藥

赤ハギノ根。硫黃。人ノ頤下垢。掌飼左右ノ睫。各等分ニ合テ小豆ホドニシテ二丸哺ヘ。若ハ三丸與ヨ。

餌ヲ振事

蛇ノ臍ヲ陰干ニシテ抹シテ幾ニ一分哺。過タラバ銅屑ヲ水澁ニテ哺ベシ。

一方。餌ニウトミタルニハ。餌ヲ三日七日見セズシテ置テスカシヲ哺テ。サテ鷹ノムキヲ窺テ生鳥ニテ哺ベシ。前ヨリ生鳥ニテ哺コトナカレト有也云々。

文龜三年七月十日　諫議大夫藤基春

右鷹經辨疑論三卷得某家藏書而謄寫焉以爲帳中秘云。

安永七年戊戌清和幾望　藤原覃識(花押)

〔右鷹經辨疑論以帝國圖書館本校合〕

續群書類從卷第五百四十二

總檢校保己一集
男源忠寶校

鷹部二

小倉問答「一名定家問答」

夫鷹は世のまつりごと雲の上の翫び。上意をやはらげ民をたすけ。花實さうおうの遊興也。然ば和漢にも是を專とせり。西園寺此道を信ぜらるゝ。定家卿彼風をしだふによりて。芦原の代々にいたりて松の葉の散うせず。青柳の糸のたゆる事なし。ある時定家卿小倉山に一のいほしめて住給ひしに。爲家卿比は神無月廿日あまり。風さはがしく雲半天をちらす。爲家よき折からとおもひ立。彼言葉の山を尋申さんとて。面を時雨にそばだてゝ彼閑室にわけ入。折節定家は時雨の哥吟味し給ふところに妻戸をたゝき給へば。みづから立てひらき給に。燒香ふかうして畵圖の屛風によこをれ。漸有て入給ふに。そのゝち何となき物語。さて定家卿云。此寒風に山中に分入事あやしゝ。爲家卿云。過し比より鷹一道に望ありきかまほしき實正をとひたてまつり。後生のためにもとこゝろざし侍ると有ければ。定家卿云。志無底江のどし。今は秘するにをよばずと云々。

一鷹は日本に渡る事いつの御代にや。

答云。人王十七代仁德天皇の御宇に始て渡

りしなり。是鷹根本也。
一始而渡りし鷹の名は俊鷹と申也。大國にてあまたの中よりすぐれたる鷹也。紀州那智山にはなさるゝ。是西南の鷹の根本也。
一唐より鷹持渡之人はシユンクワウ光と云し也。和國三年住けるに鷹道不相傳。然時コチクと云美人を對してとはせし時。歸朝の時鷹書一巻コチクにあたへしなり。
一二番渡りし鷹は人王三十代欽明天皇の御時なり。鷹の名からくつわと申也。富士山にはなさるゝなり。今の富士の巣是なり。又一説に云。宇治の寶藏に唐の轡を納置けるに。七月七日寶藏を開。萬の物を風にあてるに彼轡も出たり。然を虛空に鷹來て取てゆく也。其後富士山の鷹の巣をおろす時。里人巣の内より彼轡を見つくるなり。さて其鷹の目に轡の十文字有也。是によつてからくつわと申也。
一三番に渡りし鷹は人王三十一代敏達天皇御時なり。からまくと云たか也。兩州の鷹の根本なり。羽州羽黒山にはなさるゝ也。兩州の鷹の根本なり。
一白の鷹は日本の巣にありや。
答云。白はからいの國より渡るなり。日域に巣鷹なし。白は佛神の尊體なり。
一はし鷹と申事如何。
答云。鷹はもろこしにはしこくと云所より出來中に付而はし鷹と申也。然間鷹の惣名なり。又箸橋の兩說有。
一鷹をくちと申事如何。
答云。是は大國にて鷹の名なり。たかの異名あまたあり。
一野守のかゞみと申如何。
答云。野守の鏡に三說あり。一にはむかしゆうりやく天皇の御かりの時。おきなのあげ

たてまつる鏡なり。二にはたまり水。三にはからすなり。いづれも鷹の秘事なり。

一三本のむちと申事如何。

答云。一本はとふきの鞭といふなり。鷹のにげてまふ時。何木にてもとふきのむちとくはんねんして。手のひらに天と云字を書て。大緒を居るごくにつまひて。彼むちにて天をさし地をさして。むちさきを鷹のまふかたへまはして文を唱るなり。

ういくてん〳〵と三度唱べし。又此歌を唱なり。

箸鷹の今も心のかはらねば立歸るらん有しこぶしに

一本はさゝやきの鞭とて。夜ふせにしたる鷹の方へ彼鞭をさしあてゝ歌を唱るなり。

くれは鳥かさねし夜はの朝よりふしぞ稀なるこちくゝ一よね

鷹すゞをならさぬ間は。幾度も此歌をとなふべし。

一五の小鳥と申如何。

答云。せんにう。ほうあか。頭くろ。白小鳥。赤小鳥。是なり。

一三の小鳥と申如何。

答云。小鳥。こあかり。こはかまとて三なり。小鳥とは赤しとゞ。こはかまとはひばり。こあかりとはせんにうを申なり。

一鷹によりてをき聲のかはる事如何。

答云。鷹をよぶ事は大日のはじめ給ふ也。あはんうむの三字を含なり。おほ鷹はお字。はい鷹ははん字。はやぶさはうんの字なり。いづれの鷹もみな佛體なり。

一なりひらのみよしおもかげと申事如何。

答云。業平春日のにへの勅使の時。仁明天皇よりつたへ給ふ。かるがゆへに業平鷹の上

手雲の上にすぐれたり。鷹に一代あやまりなし。是は秘傳あり。

一むこ鳥と申事如何。

答云。是山鷹の時もとよりめん鳥の有所へおん鳥の飛來るをむこ鳥と申也。陰陽を含詞なり。

一よめ鳥と申事如何。

答云。右之道理に同也。皆鷹場の詞なり。

一源氏の三の生鳥と申事如何。

答云。鷹のつかひ方の秘事也。光源氏須磨の上野にて日々に御鷹がりなされ候へども。この三の生鳥を御心にたもち給ふゆへによりかず御心のまゝなり。秘傳あり。

一柴やきと申事如何。

答云。昔かんばつの時。世上の民ども歎悲む。御門ちんがまつりごとをろかなりとて。庭上に薪をつみ火烟となし。すでに飛入むとおぼしめす時。俄に大雨ふり来てつめされける車をおしながし。さて世上をだやかにして民ゆたかなり。又其以來かんばつの世にはおほ鷹にて雉を取。御門に祭かひ給ふ。是を柴焼と申。車軸をながすといふ古事も此御代より也。

一三足の雉子と申如何。

答云。有時御門御なふなりし時。きう人うらなひ奉れば。かた野に三足ありし雉子。御狩ありておほ鷹にて彼三足の雉子とり給へば。すなはち御悩平給也。其後祭事に別の雉子の足を取。三足にむすび付。御祭事有けると云々。

一へをの一刀と申事如何。

答云。是は鷹にきり羽をよくをしふるを申也。鷹は切羽肝要也。

一虚空のへをと申事如何。

答云。在原行平に仁明天皇第三王子小松帝と申より傳給ふなり。かるがゆへに行平一代鷹をにがし給はぬと申なり。たとへばせうぶの狩などの時。鷹を自由につかひ。羽をとばせんとおもはば。三日前より鷹のしゝをあげ。つかふべきよひの口。したゝかに鷹にあたり餌をかふべし。さやうにいたし候へば。其日はへをゝとき候ても自由也。羽は一段とぶ物なり。是第一の鷹の心持なり。是を行平の虚空のへをといふなり。

一石のをき餌と申事如何。

答云。山鷹のとき。峯より鷹にしらせずして石をころばすに。鳥ぞと心得て鷹とばひかゝるなり。さて其日の鷹ふるまひ山口しるき也。

一なら尾。なら柴。尾にあらず羽にあらず。羽にあり。尾にあると申事如何。

答云。なら尾とはへをの事なり。なら柴とは鷹をしたてる野もせの事を云なり。是尾にあらず羽にあらず也。又尾にあるとは三めの尾をならおと申なり。又七羽の始をならしばと申也。是尾にあり羽にあるなり。

一兒鷹のもとをり。鷂のすゞと申事如何。

答云。鷹に用心のふかき心なり。せうにははい鷹の鈴をさし。はいたかにはせうのもとをりをさゝんとの義なり。

一朝とがりゆふとがりと申事如何。

答云。朝とがりは四ツ以前。夕鳥がりは七ツより暮まで也。

一順の鳥逆の鳥と申事如何。

答云。朝とがりは北より南かしらにつかふなり。是南西へ立鳥順也。東北へ行鳥逆也。夕鳥狩は(西東歟)南より北頭につかふなり。是は北東順。南は逆なり。

一遠植の取飼と申事如何。
答云。諸鷹共に木居にあがるをもろくをき取事上手のわざなり。たとへば木よりをきとり候へば。如何にもむまき口餌をふかふかと取飼て。そのまゝつかはずして家に歸るべし。是を遠植に取飼と云也。
一初春次尾。暮春次尾と申事如何。
答云。初春は雉子のめん鳥の引尾。暮春は白鳥のきみしらずを次也
一みすをのかち（らイ）と申事如何。
答云。鷹の祈念に。雉子のめん鳥の尾の上のあぶらを少あしをにくけ入る事を申也。
一鳥柴木につくべからずと申事如何。
答云。花鳥柴は春は梅櫻。松は四季共不苦なり。しかれども本木につけず枝に付る物なり。是を木に付べからずと也。付るやう有。
一ふくら柴と申如何。
答云。小鳥を萩すゝきなどに付るを申也。
一はとの鶉と申事如何。
答云。八重羽の雉子のごくに。羽の八重有を申なり。鷹にのがるゝうづらなり。
一見ると申事如何。
答云。鷹のにげ候時のまじなひ也。竹のうすやうに。不動此文字を書てをしまろめて持也。此文字はたらかずとよむなり。其後鷹のにげゆくかたへ向て此歌を詠なり。

別しをいかでか鷹にまかすらんとめんと
めじは山のまに〱

此歌を幾度もよむべき也。惣別如此の鷹には虎肉を少おろしかふべし。
一雪まろばしの事如何。
答云。鷹は三四月の比より巣ふして。七月は山をいづるによつて雪をしらぬなり。然間雪をしへんために雪にて生鳥をかふな

り。是を雪まろばしといふなり。
一山をかけると申事如何。
答云。藤を以て鳥のくぼねと羽ぶしに懸てゆふを申也。
一山をさすと申事如何。
答云。山さすとはめん鳥おん鳥の口餌かひ候かたをし合て。其方のすねの中をかた足づゝ二重かけていぼにして。はしを一寸五分いだし切也。是山をさすと云也。
一田物さしと申は如何。
答云。是は雁鴨などを草なはにてゆふを申也。ゆひやうは如常也。
一菟結事如何。
答云。菟結事は秘する儀也。ゆひやうはともの足の節より下を左を上にして。藤を二重かけていぼにして。其末を腹のかたより引出し。菟のくぼねに二重かけて上にていぼにして。又三寸計置てかいるまたにゆひ。そのすゑを菟の耳のながさ二筋通して切也。又耳にくらべぬ時。手一束に切る事もあり。かり場よりもたせかへるには。別の藤にてくぼねの藤に入。木に付てもたせる也。木のさきをばとものあしゆひ候間に入候也。餘所へ遣るには。木をばとり菟計取かひを上にしてつかふ也。
一菟の取飼やうの事如何。
答云。左の肩枝のつぎ候上を。小刀にて三ヶ月なりにまはしてそれをとりかふ也。但肩をば刀計あてべに毛を取飼。べにけとは首の耳かたの内みゝわきを取かふ也。是べに肉と云所也。
一手むき丸と申事如何。
答云。鷹のつぶ子を懐中にてはやしたる鷹を申也。いちもつするものなり。

一木ぬけの鷹と申事如何。
答云。母鷹の巣に出入を申也。
一鷹のすてかひと申事如何。
答云。巣の上より母たかゑをおとして。鷹にとりならはせんとの心也。
一火をきの鷹と申事如何。
答云。是は葎つまりの鷹をひのあかりにてをき取事也。
一鷹の心なきと申事如何。
答云。是は鷹の山を思ひ。何にてもおもひ事の有時鳴聲也。例ならぬ聲なり。
一ほの毛の鳥と申事如何。
答云。是は鳥の遠く飛たるを申也。
一犬のさかとかへると申事如何。
是は犬鳥をかみうしなひて。幾度も跡へかへるを申也。其時犬かひは聲をしきりにかくる物也。

一枯野の一羽と申事如何。
是ははい鷹をつかふに上手のわざ也。年中はしゝ鷹にてへをゝさし詰つかふによつて飛たけ知ざる也。然を一日二日前の日鷹によくあたりて。へをゝときてちとのび行。鶉に合みる也。かならず羽をいだしとぶべき也。さて春來て草にとぶ事山口しるき也。其時又如元しゝをあげへをゝさし年中はつかひ。春に成てしゝを引へをゝとき合るにいよ〳〵とぶもの也。是を枯野の一羽と云也。
一見えみ見えずみの口餌と申如何。
答云。鷹に口餌をかひ候時。或は口ゑをみせ。或はみせずしてかふ物なり。其故は自然口餌などなき時。鷹を置取べきため也。手かへる事をしへ候時のかひやうなり。
一長命短命の鷹見るやう如何。
答云。長命の鷹は毛羽ながく。とに皮あつ

く。毛はふとく。おひほうさうの毛ながし。目はちいさくまびさし少かゝる。足くもてはおほき也。かやうの鷹はつかひにくきといへども命はながき也。短命の鷹は皮うすく毛みじかくほそし。目はおほきにしてまびさしあれ。くもてちいさくゆびほそし。かやうの鷹はつかひよしといへども短命也。

一鷹は目の内に善悪をあらはすと申は如何。

答云。諸鷹共に目の内に習ひ有。大目小目と云事あり。小目と云は黒目少有を云。大目と云は黒目おほきなるを云也。ましんと云は黒目とがりて扇のかなめのごくなるを云。是いちもつ也。目はひかるを肝要とする也。惣而黒目はすぎたる吉也。目はのきめ。はしりなしめなどやうなるよき也。目うすきを本とせり。但目いづれにかはりたるをもはら用る也。目には種々の儀あれども。まづ是を本とするなり。あをくしろくみゆるは病鷹の時成べし。

一ふるきゞすと申事如何。

答云。是は雉子のおん鳥を申也。わすれかひにはかはぬ鳥也。鳥きはまで取かふべし。

一こがねめん鳥と申事如何。

答云。春めん鳥のきなるゆへに申也。

一七峇の鈴と申事如何。

答云。此鈴七峇へだてきこえたる共申。又此鈴はひらかの鷹八幡へ進上申たるすゞ也。余情さまゞ有ける也。

一ね鳥がりと申事如何。

答云。かり場に鳥を取をくれて。暮にをし鳥に取かひ帰るを申也。

一角の柱にうへ物の大事と申事如何。

答云。是は鷹を合するに。うへ物の中に入鳥はみなすみの柱也。

一小山歸と申如何。
答云。是は若鷹の春とれたるを云也。山歸の春とれたるは大山歸と申也。一段ゑすき物也。
一手はなしの日さだまると申事如何。
答云。鷹したてる事は日數さだまる物也。然間手はなしの日もさだまる也。然ども何と日次はさだまるとも。鷹鳥心なきにはたはなし如何。かるがゆへに手上は鷹のいできたる日が手はなしの日のさだまると也。如其文字もこゝろみゆるすと書也。
一鷹に始て生鳥を飼をまろばしと申事如何。
答云。始て生ものをとらする事也。然に鳥をとばせかひ候へば。自然鷹始て人の手にて取事なれば取かぬる事あり。是を鷹師の念にて鳥の羽をぬき。如何にも〳〵よは〳〵と鳥をころばしてかふ也。かるがゆへにまろばしと云字にはころばすと云字也。
一鷹の毛所に自鏡と申事如何。
答云。是は鷹のうしろの切立の下の毛也。此毛をたつる時は煩有時也。又鳥をとらんとおもふ時には毛をつむる也。然ば此毛善悪を見しるによつてみづからのかゞみと書也。
一とろ板と申事如何。
答云。是は鳥屋のゑたる。（脱字歟）
一とゞろきと申如何。
答云。是ゑまないたの異名なり。なしの木にて作る也。
一つゞり足緒と申如何。
答云。是は色ある衣を五色のいとにてこまかにして足皮にいだす也。足をいたはる心也。
一ぬすみはみと申如何。

答云。は是持にげをする鷹にあり。鷹かひをゝせずして鳥をくう。是をなをす事。ほそき糸にて口をわりて。人の見ぬ所にて一時計をきてみれば。ぬすみはみのゑをふりすつるなり。其後なまりをまめほどに切。ゑにつゝみかふなり。

一よかひの衣と申如何。

答云。鷹のふるまひの善悪を見る毛所也。青背の根に有毛也。

一ほこ羽つくと申如何。

答云。山鷹の谷より上に飛あがる羽也。鳥の落草を見んと。鷹のりこんなる心也。

一やかへりの羽と申如何。

答云。鳥を草にかけおとし。そのまゝ飛かへる羽を申也。是も鳥の草に入陰を見んと也。

一鷹の一連とかきて一もとゝよみ申事いかゞ。

答云。是は天子の御鷹十を一もとゝ云時は一連と書なり。其外の一もとには一居と書也。すれんの鷹共あり。

一木居取。木なとると申事如何。

答云。こいとるとは大物のことば。きなとるは小鷹を申也。

一山別の鷹と申如何。

答云。山別は七月廿五日に鷹雲上に飛あがる。父母にはなるゝと申也。

一鷹をつかふに。しとみ餌。あらひゑ。いづれにてつかひたるよく候哉。

答云。しとみ餌は長命にてへをゝさす。あらひゑは短命にてへをゝとく。されば此中道を心にかくべき也。

一さほ姫鷹と申如何。

答云。春三月の中にとりたる鷹を申也。春の山神也。

一葉かへりの鷹と申如何。
答云。是は里にて森林の中にて夏毛をいだしたるを申也。
一もみぢふの鷹と申如何。
答云。是は赤鷹を秋三月は紅葉ふの鷹と申也。
一くれなゐの鷹と申如何。
答云。是はひらかの鷹内裏にて一夜に紅に成たるを申也。是余情有也。
一犬の分食と申事如何。
答云。是は山鷹に犬鷹をばのぞき。鳥を食たるを申也。犬を能使入たるなり。
一鈴子さすと申事如何。
答云。しのびかりの時。かば櫻にてすゞ子をまきてつかふを申也。
一四節の架に鷹つなぎやうの事如何。
答云。是は四季のうつりゆくさまをつなぐ也。
一四節によつて鷹を居と申事如何。
是も大緒の房に四季をよそへて居る事也。
但朝夕は常の儀也。
一おゝこ取の事如何。
答云。是は鷹一度に鳥を二ッ取たる也。是はくせ事也。然ばめ鳥お鳥なれば。如常左右のむねを取かひぬれば二度に取たる心也。扨又め鳥お鳥みへぬをば右左を取かふ也。又一説には。二ッの鳥をはなして本の鷹にて合。一ッ取たるばかり取かふと申儀あり。
一狩場の七草と申事如何。
答云。是山鷹の時なり。一にをしへ草。二にはしり草。三にうごき草。四にゆるぎ草。五におぼへ草。六にふし草。七にね草。以上七也。
一狩場の五音と申如何。

答云。一に鷹の鈴。二に犬の鈴。三に轡の音。四にとさけび。五に鳥の音。是五音也。

一もゝ口と申事如何。

答云。是は口餌の異名也。口餌はこくちに數をかふを肝要とするゆへ也。

一青羽染羽の鷹と申如何。

答云。是は鳥や鷹の新敷おとしたるをば青羽と申。ふるき羽をば染羽と申也。

一鷹の毛に人毛と申如何。

答云。是は上の紫鷹にある事也。人の白色のごとくに頭こくびまはりに有也。

一卯の花にへをゝさすと申如何。

答云。諸鷹共にうの花の咲時分は鷹はゑすき物也。かるがゆへに鷹にへをゝさすといへり。

一ゑふと申事如何。

答云。是は大國にて雨風のとき鷹を入る物也。

一からまくらと申事如何。

答云。もろこしより遠路の旅にゑを入るうつは物也。幾日をきてもくるしからざる物也。

一日次のかりと申事如何。

答云。日次のかりとは內裏へにゑを日々に上たてまつるかりなり。日つぎのかりとは天子の御位をつぎ。始ての御狩を申也。

一上手はとるに合。下手は鳥に合ると申如何。

答云。せうぶのかりの時。上手は取べき鳥に計合るなり。然間鷹もあやうからず。ゆへに鳥數有也。下手は鳥ゑらまず。ゆへに鷹しらみて後はとらぬものなり。

一すゞ船と申事如何。

答云。嶋山などへ鳥をやらじとて。船にすゞを付て沖をこがすると申也。

一たかひほねと申如何。
答云。是は鷹のどう打薬。青鹿の角也。骨をも云也。惣別鴟にうたれたる鷹にもよき薬也。
一むさうかんあかた圓と申薬の事いかゞ。
答云。鷹の諸病の薬也。一あはびの赤わた。女鹿男鹿の目の玉。うさぎのみゝ。等分に合て餌につゝみかふ也。是をむさうかんあかな圓と云なり。
一忍びの里の水如何。
答云。是は鷹鴟などにうたれ。又野山にて俄に死たる時。水もなく薬もなきとき。我薬指より血をいだししぼり鷹にかふ也。よみがへりの薬也。是を野中の水共云なり。
一ひとよの水と申事如何。
答云。竹の本の一節にたまりたる水也。鷹の諸病の薬也。しゆ光こちくに是をつたふ也。こちくてふの歌も是なり。てふの字秘傳あり。
一鷹の薬は誰人つたへ申けるにや。
答云。仁徳天皇たかの薬もろこしへ御所望の時。呉の國よりくれ竹を始而渡し給ふ也。是鷹の一薬。一夜の水も又竹の青みもみな薬也。されば竹をば向涼草とて草共申也。
一鷹の三薬と申は如何。
答云。竹の青み。卯木の青み。赤がねのすりくず。是也。諸病に用る薬也。
一政頼の見付草と申如何。
答云。是はみづ草の事也。諸病に用る薬也。是をおときり草共云也。
一川な草と申如何。
答云。鷹の諸病の一薬也。是は古今の三草とて切紙の秘傳也。歌に云。
川な草は月になればおとこ山去にし命い

きける物を

一おか玉の木と申如何。

答云。大日天竺より日本へなげ給ふ木也。今の筑波の男體女體是也。又天のせうぶの時用給ふ故に。鷹もせうぶを專とする故祭事に用るなり。此木なくしては神代よりも鷹はつかはれぬ物也。古今の一木とて秘密の切紙なり。歌に云。

　おか玉の木を何木ぞと尋ぬればかた野に
　立るとしば成けり

一鶉の足をひるふさと申事如何。

答云。是は天照大神のあまの岩戸へ引籠給ひし時の事也。文字に習有事也。秘傳有事也。

右此一巻者鷹一道之秘密之問答也。皆顯神說者也。故箱外不出之秘書也。堅莫他傳事。

清原長作

山田如舟

〔右定家問答以帝國圖書館本校合〕

基成朝臣鷹狩記

鷹狩の事委もしらぬ事を。見及び聞得るまゝにかきあつむれば。定てひがどもおほからんか。好知人の見て難をもくはへんずらんと。後のみむ憚あれども。身にとりて粗はきまへ存ずる事計りしるしつゝ。又人のいまだ見ずしらぬともやあるらん。筋目かはりたる事どもを。案じ出すに隨て書つくれば。次第もしどけなく前後錯亂せんと。かた〳〵はゞかりある者なり。一所にかき付べき事所々別々にしるしぬ。但其筋目のか

はる所には朱にて點を引たるなり。

一狩の作法は行幸の御狩を本にする事也。上古には野の行幸といふ事常にあり。是は鷹狩を本とせり。今の世には誰も其子細しりたる人もあらじ。白河院の御位の時。承保三年十月廿四日　嵯峨野の行幸あり。其次に大井河の逍遙あり。其後は事絶たり。いにしへの事は日記も慥ならず。但宇多天皇御位をさらせおわしましてのゝち。醍醐天皇の昌泰元年十月に上皇宮瀧（大和國吉野郡）の御幸の事あり。京より御馬にめされたればゆゝしき見物なり。其時に北野天神の右大臣大將にて供奉せさせ給ひたる。其儀しき始終。天神と紀の長谷雄卿と日記を書給ふよしみえたり。先栗栖野よりはじめて交野へ成せられ。其より大和國の名所ども宇多野をはじめて。所々にて供奉の人々歌おほくよませらる。次に攝津國布引の瀧を御覽ぜらる。已（に無）も京を出させ給ひて。十二日といふに還御なりぬ。是ぞ誠に鷹野の狩場の本にてあるべけれども。さのみの事鷹のふるまひまでくはしき事は所見なし。今に至りて宇多野交野嵯峨野をもて狩場とするは。行幸御幸の跡なるがゆへなり。今昔奈良の皇都なりし時。宇多野は御狩場なる故に。宇多野の御鷹飼と云て當時までもありき。是は近衛の舍人にて御隨身たりしを。宇多野に三人。交野に三人置る。此職は其所につきて德分ある故に。當時までも御隨身どもが朝恩にしたる事也。さて六人の御鷹飼かはるがはる日次の供御に鳥奉る。一月に六人して廿四まいらす。六齋日をのぞくが故に。人別に四羽にて廿四を奉る。今までもたえざりし。御鷹飼どもみなすけ鷹飼に御野を預置て。鷹をつかはせ。供

御の鳥をとらする事。御野にをきてゆゝしき態なり。さて日次の供御奉る時は。鷹をすへ犬を引て大路をうち（も歟）てゆく。其ときいづくのいづれの荘よりとて。鳥を持て通るものあれば。おさへて是を取ならひなり。今も馬に乘て鷹つかふに助鷹飼をぐす。是は野にいづる時。鷹をすゑさせ。又野山にて馬のあしだち惡しき所にて鷹をあはさせ。鳥をもとりかはせんがためなり。犬飼と同じ樣に召具する也。いにしへ野の御幸ありし時は。鳳輦の左の角のはしらは立ざる也。是は主上の御鷹あわさせたまふに。さわらざらんがためなり。小鷹をめされずといへども國柱を立ざる御事也。しかれば當時にても御こしの左の角のはしらは取はなちの樣なりと。又鳳輦の御綱を張事。常の行幸には御前へ二すぢ御後へ二すぢ張たるを。野の行幸には御さきへはらずして。左右へ横ざまにはりたる。是大舍人の習なり。御綱のすげの馬打も。御こしの前へは出ずして。各そばさまへうちちりたり。是は鳥ふみ立べき用なり。御鷹飼は皮のぼうしに。水干の上にうちかけしたり。太刀は鳥頸のたち付たり。北山の亭の公卿の間の障子に。承保の行幸をかゝれたるは。うちかけせぬもあり。殊に沙汰を經て書たる繪なれば。さるべき事もあるらむ。具にはしり侍らす。犬飼も亦同じ。近衛の次將などの鷹すゑたるは。冠老懸にてひやうもん色々の水干の狩衣。あをかみしもにいちひくゝりたり。此行幸に當家の先祖（頼宗公）春宮大夫于時右中將にて鷹すへさせられたり。則此姿也。誠にめづらしくおもしろき風情也。それよりして當家（持明院）は鷹生の家なれども。其以後相續して此みちこのまるゝ

人もなかりき。西園寺入道(公經公)以後又その沙汰ありしなり。故常盤井入道(實氏公)殿は殊に鷹をよく手練し給ひけり。おもへば此條を自稱せさせ給ひしを耳に聞しことなり。又大臣の大饗に母屋とひさしの兩儀あり。母屋の大饗は大儀なるによりて。今の世にはたえたり。嘉應の比まではありし哉らん。其年の限只今たしかに覺へず。いまはひさしの儀ばかりなり。母屋の大饗には鷹かひわたる事あり。犬飼同じく相ぐしたり。そのすがた野の行幸のごし。又内々私の鷹がりには。本儀いかなる姿にてあるべき哉。たゞしき口傳才覺も有べき哉らん。憖にしるしがたし。但知足院(忠實公)關白と申は手書の法性寺の殿(忠通公)下。寺宇治左府(賴長公)等の父なり。後宇治殿とも普賢寺殿ともいふ。其御若ざかりにはきはめたる鷹このみにて。京極大閤(師實公)にはさひあいの孫也。祖父の禪閤に申させ給ひて云。鷹をつかはんと思ふの間。水干して給はらんと申されければ。禪閤鷹は大たかゝ何鷹をつかはんとおもふぞとたづねられけるに。小鷹をつかはんと思ふよし申さしめければ。大鷹をつかふ時には水干を着る也。袴は召使所の便宜の近衞舍人などがさよみの袴をかりてしたにきるべきなり。小鷹狩には秋は萩の狩衣に。女郎花のすゞしの衣など。肩ぬきかけてつかふべきなりと仰られし。これは猶昔の事なれば。今の世には何とも有なむ。いか様にも袂あきたる物ならば。袂をとぢあはせて。そのくゝりあるべきか。ひたゝれなどは袖をうしろへつる事もあり。近く文永の比帯刀左衞門入道といひしものあるも。(實名聞しかど只今忘却す。)さうなき名人也。萬の生物の比はいろ〳〵むしまでもかひしものなり。

むねとは無双の鷹生也。其子六郎左衛門尉成吉と云し者有ありしが鵃合せしには。すゑたる鷹の大緒を取て。左の袖に襷をかけたりき。大緒の二またを後へ分て。袖をゆひこめて。もろかぎに結て。その結目を右の肩のうへの少うしろの方へこしたれば。袖は左の脇の下の少前へまはりたるやうなり。結目を右のかたへ打こす事は。左にては鷹にさはらざらんため也。もろかぎにゆふも。大緒のさきをながくさはらせざらんために。かくすべきよしをいひしか。それを見ならひて。わかざかりの時。鷹つかひしける時もさ様にせし也。鵃小鷹をつかふにはむねとは繳(ヘマキ)なりと云。されどもそれは長きみじかきは人の心々にあり。十丈の繳の内におひよりて鶉とるべきなれども。繳のうちには叶わず。猶追のべて取つべきには繳のしりをすつる也。是を繳しりうつと名付たり。餘る繳の長さは巻て掌の内にあますなり。十丈はよき程なり。但小鳥に合には。猶みじかくて事闕べからず。繳さしたるはやぶにも草にもかゝりて。とるべき鳥をもにがすゆへに繳をさゝず。さし放てあはする常の事なり。鵃狩以下をばおしこめて小鳥狩といふ也。かならずこのり。さし羽。つみ。ゑつさいなどにはかぎらざるなり。箸鷹とははい鷹の事也。はい鷹と云字は鵃なり。鷹は大鷹の事なり。せうは大鷹と同じ事也。字には兄鷹と書なり。これは同じ巣にそだつなり。せうはおとゝなるがさきに成故也。大鷹はをそくそだつ故に兄とはかゝざる歟。されども萬鷹と同じ事なり。歌などには大鷹をはし鷹と讀たれども。眞實ははしたかははい鷹なり。昌泰の宮たきの御幸の記に

も。大鷹狩の日記には必鷹の字を書。鷂小鷹狩の記には鷂の字をかゝれたり。天神とはせおの卿のかゝれたる所見尤支證とすべきか。此差別すべて書たがへざるなり。宮瀧の御幸には。京を出御の日は。先くるす野にて小たかがりありしに。左右を分て鳥數を勝負にせられたり。左の方の鷹飼は小鳥九十四と兎一をとり。右の方の鷹飼は小鳥九十一とうづら一をとる。兎は獲の數とせず。鶉一を小鳥五にあつるが故に。右の方勝に定りて勅祿にあづかる。此等は興ある事也。彼時片野にて末代にはか樣の事あるべからざるよし。天神申おこなはせ給ふ。されども其後承保までも行幸はありし。但天神の申させ給ふところは。はれの行幸にはあらで。か樣のふようの御遊の事を申給ひける哉らん。其旨趣はしらず。是等は繪の才覺に入べき事にあらざれども。昌泰の記にのする所分明なるに付て。鷹狩才學の次でに書つくるなり。鷹をつかふ時節は冬を本とす。田野無爲の隙に用るなり。其よし昌泰の記にもみえたり。小鷹狩は秋の物なり。歌の題にも鷹狩は冬の物にして。小鷹は秋のものなり。されども現在大鷹も小鷹も。夏の外は三季にわたりて皆つかふ也。鳥のおほき木はつゝじ。ひさかき（柃）。少きむろ（檉）の木。小松。又何柴と云やらん。五節のたなのみのきを床につくるみのなるなり。草は一本すゝきなど。これら今しりたる中に鳥ある也。大鷹の狩場の所をかる也。但はみにつきて田畠薄苅萱。か樣の所にあらねども。大略柴の中にある物なり。

一鷹狩の行幸の時。左大臣時平公。右大臣菅家相。左右の奉行につきて。午刻已前までは小鷹狩。そ

れより以後は大鷹がり。小鷹は廿よりのつゝは一の筆に付をしわけらるゝ。勝負に至りては鶉一は小鳥五にたち。雲雀は四に立。まだら鴫は三にたち。千鳥は小鳥の十にたつ。是ははいたかの大なるわざなり。もちあがりからさひのふるまひをもちて賞翫とす。又かた羽かけのうづら。もろ羽かけの鶉のむすびやうども口傳有也。

一ひねりのさほ　五尺二寸。

一鷹の装束のすがた。もろこしにかいてんといふ虫のすがたなり。

一あこめ装束と云は。鈴持はあや織物。うらはやなぎいろ又青地の錦をもてもすべし。ねず緒は紅の糸をうちて一寸八分なり。

一小鷹装束と云は。のこ鳥とて鷲のすこしくろき様なり。此鳥の頭の皮をはぎて。下には角を重てすべし。鈴持の長さ一寸五分。ひろさ一寸。うす紅のいとなり。

一小皮装束と云は。鈴持ふすべ皮洗革をもする。鈴持錦革。下重は五面革。うらは白革にて有べし。

一れんじやく装束といふ事は。鈴著の緒は赤革。鈴持はれんじやくの頭のかはをはぎておしあはせて。いとにてぬひてする也。

一鳥かひ装束と云事。きじの鳥のくび毛をはぎて付て鈴持にする也。長さつねのごとし。但口傳在之。鈴の緒は藍革にて有べし。紅の糸をもする也。

一かし鳥装束とは。かしとりの火打羽を重て鈴持にするなり。すゞの緒は色々の絲なり。殿上人のつかはるゝ鷹なり。年廿にあまらば用ゆべからず。又むらさきのねず緒足緒は山がへり鳥屋に用るにり。

犬のくびたまは赤革なり。

一鷹の符之事。
鴫符。　鶉符。　雲雀符。小鷹にあり。
鷺白。　青白。　口傳有之。
一うづらはひつとたつ。　ひばりはひり〳〵とたつ。　しぎはしりゝとたつ。
一きじはふろ〳〵と立。此立樣不審。雌雄二羽音名目。於當家相替者也。
一鷹請取渡次第。三四の禮。うは手下手。口傳あり。此三四の禮は家の秘事也。他の手に傳べからず。
一鷹をつなぎては。大緒のさきはたなさきにむすぶなり。
一大鷹は七よりに七。是をはづさずとりたるをつゝにしるさる。
一犬をやるこゑはいい〳〵とかくる。犬物香してうたがへば。つう〳〵とかけてゆく。ちかければ聲をかさねてかくる也。犬飼の出立は錦のぼうしに。赤革の袖ぐちに。ふすべ革の袴に。いちひのはゞきをする也。わらぐつの内に革をあてゝはくなり。
一狩杖は梅木の末にまたを置て。其人の目のとほりに尺を切。梅の木は皮をむがざる也。
一隨身の御恩は御鷹の餌の所領を以て衆類をすぐすなり。又鳥をかくる次第。左はおんとり。但春は左女鳥。鳥柴にそふる次第口傳有之。
一ひと草の鶉と云事は。麥を刈あげて青草なる。鶉をとりかふて鳥屋へ入る也。是を一草の鶉といふ。
一鷹の鳥付る事。
鶉は萩につくる。　鴫は荻なり。
一かた羽かけは年の內。もろ羽かけは春也。是はうづらの事也。
一日かへりの羽と云は口傳有之。

此一卷近曾應或人之覓記之者也。
永仁三年孟夏仲旬 左中將基成（花押）

〔宮内省本云〕
一河内國於片野。政頼十卷の譜中肝要を拔書にする者也。五卷は代々御門の野の行幸の繪なり。

本云
康應元年十月廿八日　藤原基規

〔右基成朝臣鷹狩記以宮内省圖書寮本校合〕

續群書類從卷第五百四十三

總檢校保己一集
男源忠寶校

鷹部三

鷹口傳

一はしたかとは
鷹のそうみやうなり。
一はしたことは
大たかにてもあらず。又せうにてもなきを。はしたことといふなり。
一ともかゞみとは
これはこしなゑはるゝ鷹などに。ほこをひきぐして。たらいに水入てほこの下におきて。たかにみする也。わが影をみて身をもちなをして。やすくなをるなり。是を友かゞみといふなり。
一くつをむすびておつるといふ事は
大鷹小たかにかぎらず。とりをちうにてとりむすびておつるをいふなり。
一たかぬきといふ事
大鷹にかぎるべし。たかをすゆるに。うでくびにぬきいるゝ物なり。かみよりのなかに。わらのしべを入てよりて。それをうつくしくあみて。かわをもてへりをとりて。うでにぬき入てたかをすゆるなり。其長さ三寸なり。是はうでくびをつよくにぎりて。みやく

などをにぎらせじがためなり。

一山こゑといふ事

大小の鷹にかぎるべからず。あしをかはのきりめ。つねより少ひろくきりてすれば。とつてのめぐるを山こゑといふなり。

一すてくれといふ事

是は四きにかぎらず。たかのよくふるまいたる時。取たる鳥をそのまゝすてゝかうなり。すてくれしてはかならずつぎの日一日は鷹をやすむるなり。

一わすれがひといふ事

是は春夏にかぎるべし。取たる鳥を其まゝくれて。とやへいるゝをいふなり。

一たはなしといふ事。

是は鷹をつかひはじむる事をいふなり。四き又大小の鷹にかぎるべからず。

一山川といふ事

是はたかのさうぎやうをしる事につけていふ𪜈葉なり。うしろには山川をながすなどいふ𪜈ばなり。

一土こゐといふ事

是はまづ小鷹にかぎるべし。たかをつかふ時。大鷹などの土こゐをとるは。其日のふるまいわろきなり。又小鷹にはいかにも土こゐをとらせておきたつるがよき物なり。よて小鷹にはかぎる事𪜈葉此ゆへなり。

一おもてしるといふ事

是はつねにすゑたる人にてもなくて。はじめてすへてある人を見しりておつるをいふなり。

一おぼえかくるといふ事（又おぼえつくともいふ。おぼえかくるともいふ。）

是は鳥のおち分明ならぬ時。鳥のとびて行かたをそこぞとおもひやりて。いぬなどを入るゝをいふなり。又鷹にもおぼえをかく

る事あり。それも此ふぜひ成べし。

一おしへ草といふ事

是はふかき草などに鳥のかくれたるを。鷹こゐをとりて。鳥のおち草を知ておしへむとて。草を鷹のおしすりてあがるをいふなり。

一ゆるぎ草といふ事

是は鳥のおち。草のゆるぐを見て。草の上にてたかみさごはをつかひて。鳥を見る時の事なり。

一すりたつるといふ事

是は草におちたる鳥を。鷹も其草にあたりて。鳥をたつるをいふなり。

一ぬす立といふ事

是は大小の鷹につかふと葉なり。つかれの鳥のおち草よりよそへはみぬけて立をいふなり。

一くゐなとぶといふ事又くゐな立ともいふ。

是は鳥の立つかれて。ひら〳〵ととぶをいふなり。

一もゝくちといふ事

是は大鷹にかぎるべし。ゑをとりかう時。まるといふ物を一どにかわずして。百口にかうをいふなり。

一くわせといふ事又くちゑともいふ。

是は大小鷹にかぎるべからず。よきゑを少づゝくれて。おしもまでおくをいふなり。

一やりなはといふ事

是は少鷹の犬にかぎるべし。いぬにつくる縄の事なり。犬の草にあたりて鳥を立る時は手をすつるなり。

一はしりなはといふ事

是は大鷹の犬にかぎるべし。

一ながやるといふ事

是は犬の草にあたりて。しづかにかみてゆく時。犬かいも又しづかにやり。こゑをしづかにするを。ながやるといふなり。犬も人も遠くゆくによりて。ながやるとはいふなり。

一とさけびといふ事
是は犬飼の鳥のなきて立ときさけぶをいふなり。

一そかひといふ事
是は鳥の立むかいてくる時。鷹を身にひきかくして鳥になげ。かさねてあがらするをそかいといふなり。くつを結ぶなどいふと葉は此時の事なり。

一草かずとるといふ事
是は鷹のさうなく鳥をとりゑずして。草にあまたゝびあたるを草數とるといふなり。とりをあまたゝびとる儀にあらず。

一ゐかゝりにするといふ事
是は犬のながやりて行時。鷹こいをとりかうてゆくをいふなり。

一はまりといふ事
是はつかれなどいふと葉同事なり。

一つかれといふ事
是は鳥をはめて置たるをいふなり。はまりといふは。鳥を草に見ふせて置たる事なり。

一木とりにあがるといふ事
是はつかれの鳥の犬にせめられて。木竹などにあがるをいふなり。

一物ありといふ事
是は大小の鷹にかぎるべからず。鳥のおほくある所をいふなり。

一たちはしるといふ事
是は鷹のいやうをしてあるをはなちたる時。鳥にはおちあはずして。よそへ立のくをいふなり。

一とをみ鷹といふ事
是は鳥におわせたる時。鷹をとを見のみつけてよばわるをいふなり。
一山をさすとふい事
是は鷹のとりたる鳥をからくる事をいふ也。からくるにくでんあり。
一くゞゐけといふ事
是は鷹の羽にしろきけのまじりたるをいふなり。
一わけくゐといふ事
是はつかれの犬の。鷹のとりたる鳥を。たかのあしをおしのけてくうをいふなり。
一かりごろもといふ事
是は鷹じやうのきる物なり。
一かざながれといふ事
是は山にても野にても。風おもてにて鳥にあわするとき。鷹おのれと風にふかれて。犬をつかひてゆくをいふなり。
一み〻〔へ脱〕かたきといふ事
是は木ゐに居たるを。さうなくとれぬをいふなり。
一ひきとりといふ事
是はたかのとられぬ時。おきゑの鳥になわをつけて。木居の下をひきまわせば。かならずおちあふなり。
一火をなぐるといふ事秘事なり。
是は大少の鷹にかぎらず。鷹のいけみづあまつ〻みの上などにて。なにともせられぬ時。ちひさきたいまつに火をつけて。矢にゆひつけて。其あたりへいやれば。鷹おぢて立あがるをさしてとるなり。矢にていねども。たゞ火どもなぐるなり。
一野きはうつといふ事
是は鳥をとりゑぬ羽をいふなり。

一もとおしといふ事
是は大少の鷹にかぎらず。鷹の大おにつくる物なり。

一ねずをかはといふ事
これは鷹のしやうぞくをする時。すゞをむすびとむるかはなり。又すゞもちともいふなり。

一あしをがは
そう名なり。はゞきがは。てとりがはともいふなり。

一夜とる水といふ事
是はひじなり。鷹のくすりかいの時の水なり。これはなんによてつぐときのいんをとりて鷹にかう事あり。大にひすべし。

一見すゑとりといふ事（又見とりともいふ。）
是は鷹をすゑて行時。鳥のあるをおのれと鷹見つけてとばふをいふなり。

一したげといふ事
是は鷹のこしの上のけなり。したげにあたるなどいふこと葉なり。のせをなどいふもおなじ事なり。

一すゞのことといふ事（又めさしのすゞともいふ。）
春にかぎるべし。鳥にすゞの音をきかせじとて。目にさくらのかはをさすなり。たかとびて行時。ぬくるやうにさすなり。

一右羽左羽といふ事
是は鷹鳥などにもかぎらず。鷹つかふ時。山のなりによりて。鷹にても鳥にても。ひだりへゆきめぐるをばひだり羽。右へ行めぐるをばみぎり羽なり。是は山のなりによりてつかふこと葉なり。

一ひとより二よりといふ事
是は鳥を一とりたるをば一より。二つとりたるをば二よりといふなり。以下いくより

もおなじ心なり。
一さかけといふ事
是は山ぎしなどにて。鳥はひきまはせども。鷹は上へあがりて。すゑにてとりに立あひてとるをいふなり。鷹のあがる時の羽をさかけといふなり。
一火うちはといふ事
是は鷹の羽さきに別の羽のあるをいふなり。
一うさぎかしら鳥かしらなどいふ事
是はゑぶくろしやうぞくにあり。
一への事
廿いろなるべし。小鷹にかぎるべし。
一おきなは
大鷹にかぎるべし。
一木居といふ事
まづは大鷹にかぎるべし。少鷹に土こゐとあり。
一いりふすといふ事
是は犬につけてのこと葉なり。ふるき逸物のいぬをいふなり。
一つまゑてすふるなどいふ事つまふともいふ。
是は少鷹にかぎるべし。
一十よりは大鷹。七よりはせう。百よりははひ鷹。
一ほこにつなぐ事
大おの事なり。
大鷹は七むすび。せうは五むすび。
はひ鷹五むすび。
少鷹三むすび。
一ひねりさほといふ事五尺二寸也。
是は鷹の鳥をとりて草の上に居たるとき。むまをかけよせて。むまの上よりひねりさをにて。とりかはにても。又鳥のあしにて

もかけて。ひねりてすゑあぐる事也。少鷹にかぎるべし。

一下鷹といふ事
是はほこにもとよりつなぎたる鷹のあるに。又はじめてたかつなぐ時。もとの鷹を下たかといふなり。

一ますかきの羽といふ事
是は山あひなどをもすぐにとぶ羽をいふなり。

一ゑこいといふ事
是は大鷹せうにかぎるべし。

一百鳥やといふ事
是はつねになき事なり。又はある事なり。山にても鳥屋にてもたがへるをいふなり。

一たか衣といふ事又はふせぎぬともいふ。
是はしやうぞくする時。鷹をふするにきする物なり。又はよそへやる鷹などに。羽をそんさかさじとてきするなり。

一ほこ衣といふ事
是は鷹をほこの上にてまはせじとて。ほこの下にぬのをさぐるなり。

一はつとがりといふ事
是は鷹のたはなしおなじ事なり。秋なり。

一おどろき立といふ事
是は人も鷹もしらねども。人のとをるにおどろきて。とりの立をいふなり。

一むことりよめ鳥といふ事
是はつかれのとりを見ふせて犬をいるゝに。見ふせたる鳥にてはなくて。そばの草より立鳥を。おん鳥の立をばむことりといひ。めんとりの立をばよめ鳥といふなり。

鷹諸名
白鷹。是鷹。箸鷹。雀鷂。
雀鷁。兄鷂。刺羽。隼。

白大鷹（ましろたか）。黄鷹（わかたか）一歳なり。撫鵜鷹（かたかへりのたか）二歳なり。鳥屋鵜（とりやかへり）。

一鷹のとしばといふ事。

鷹のとりをくゝる柴の事なり。人のかたへたかの鳥をやる時。此しばのゑだにつけてやる也。木はたもの木也。あをつゞらにてゆひつくるなり。

一うづらなどは萩につけて人の方へやるなり。

一鷹の鳥木に付る事

付木は榊なり。一の枝より下を二尺五寸。下の枝より上三めの枝に付るなり。山をば紙よりにてうしろにかくるなり。春はめんとりを上の枝に。秋はおんとりを下の枝に付るなり。但山をながらかくる時は。おんとり一そく。めんとり三ふせにゆひて。ふくさのひとたけかみよりにてつくるなり。又めんとりはつゞらにてもかみよりの代に付るなり。又女の方より遣鳥つくるは。めんとりをいつも上に付るなり。およそ木のふとさかり枝ほどなり。付る木の下のきりやうは。まり付る木のきりやうにおなじ。

一大鷹をきなわ三四十ひろ。但なかとりをす。たかぬき四寸八分なり。ゑ袋のうけをかけをのあい四寸。

一はい鷹の大を四尺九寸。ひこのを二寸二分。大くるみおなじ。ぶちの長さ大鷹は二尺五寸。はい鷹のぶちは三尺壹寸也。

一すゞもちの長さ壹寸七分。廣さ一寸三分。すゞさし壹寸七分。あしおはゞき七分。こより六寸。但しやうぞくは大鷹せうにしたがふべし。

一はい鷹のへを廿ひろ廿五ひろ。ひねりは多分弓のほこにおなじ。

一鷹をとりつなぐ時は。左のかたをよせて。手

をほこにやすめてとははせてとる。ほこにつなぐ時は。右のかたを先によせて一むすびして。我方へおしむけてつなぐ也。

〔舊本以下前卷所收基成朝臣鷹狩記之全文也故今從省略〕

〔右鷹口傳以宮內省圖書寮本校合〕

鷹聞書

鷹秘抄

ソレタカハ仁德天皇ノ御時百濟國ヨリ始テ渡ル。仁德天皇八十七年タモタセ給。四十六年ノ御年渡ル。タカノ名クリテウト云。十二卷文書ヲ相ソヘテ奉トイヘドモ。ヨム人カタシ。使ノアリサマ僧ニテ□□カタリホウシヲス。其後仁德ノ御門ニ傳マイラストイヘドモ。口傳猶クラシ。政賴ガ時カラノ鷹飼ツルガノ津ニワタル。セイライ彼人ニアヒテ。十二卷ノ書ヲヒラキテ。十八ノ秘事卅六云ハシタモノニ。長モチ二カラ相ソヘテタブ。請取テ悅テ鷹生ノ裝束。鈴。餌袋。カリ杖。ウチカイブクロマデ奉ル。政賴ノボル時ニ。サブライ政世ヲツカヰニテコチクガ許

へ捨タルフミヲツカハス。
コチクテフコトカタラハヾ笛竹ノ一ヨノフシヲ人ニ知スナ
ト云ナリ。此歌彼夜ルトル澤ノ水ト云薬ノ心云々。ヨルトルサハノ水ノ事。皆人シル事也。但大方注者也。竹ノヨヲ雨ニフシヲコメテ。トウスニ百日入テ。百日メニ取アゲ。キリニテモミテ水ヲトリ。其水ニテ餌ヲアライカウ。大ナル秘事也。諸病ニヨシトイヘドモ。取分イキケ。ハナゲ。ヤブタカ。クダリケ。エウトミ。コヘノカル丶。カタシ丶ノスリ。

一餌ヲ作事。新シキエナリトモ。キリメムザ〱トスレバワルキナリ。切目タヾシクスベキナリ。

一山ワスレ薬トハ吉口餌也。口餌カウ時ニ山ヲ忘ル丶トナリ。

一鷹ヲスヘナヅケテ仕入タルタカヲバ。アナガチニ隙ナクバ。朝ハ七時ヨリ外架ニツナグベシ。サテエヲ飼テ後。クラキ所ニツナグベシ。餌ヲカウ時。イカニモチカクシテヲキテ。ヲソクワタル事アラバ。立ノキテヲクベシ。遠クヲキテ。ワタラヌトテヨル事アルベカラズト云々。

一夏淸水ニツケタル餌ヲ飼ヘバ鷹中風スルナリ。少ヌルキ湯ナドニテアライテカウベシ。

一スギタル鷹ヲバ朝夕ヨキクチエニテ居。コブシヲハナサズ。ヨキクチエニテアツカウベシ。如此過タルタカヲナヅクルト云ハ。朝七ノ時分ヨリ野ニスヘ出テ。四時マデ居アルクナリ。サテ歸リテクラキ所ニツナギテ。又晩景七ノ時分ヨリ六ノ時分スギマデ居ベシ。スユル時ハ口餌ヲハナスベカラズ。タカヲナツクルナリ。

一山ワスレ薬トハ吉餌也。（口說豫）口餌ヲカウ時。山ヲワスルヽト云ナリ。別ノ口傳ナキナリ。

一ツカレヲシミスルヲバ。イソガシクトモ。ヲキヲトシタラバ。フカ〱ト口餌ヲカウベシ。ツカレヲ惜ミ。耳カタキヲナヲスベキ事。エヲカウベキトキ。ナニ鳥ニテモトルマジキ物ニ合テ。取ズシテ木ニアガリタルヲ。ヲキヲトシテエヲカウベシ。四五度如此シタラバモヤスクナルベシ。

一足カハノナガサ七寸。一寸ハハヾキノ分也。カハノ色ハ。フスベカハヲヨク酒ニテ洗テ。ヤハラゲテタツベシ。クロカハノ事ハ大臣ノ鷹ニ用ナリ。紫革ハヤウアル事也。錦革ハ帝皇ノ御鷹ニ用ナリ。又小鷹ハ紫革不苦也。只ノ人モ用ナリ。但其モ人ニヨルベキナリ。

一ツヾリ足緒事。ハヾキツナギヲ別也。ハヾキハヲリタル物。革二ヲカサネタル物ナリ。カサヌル二ノ口傳有。（ヌルテニテ作也）ツナギヲハスヾシノ糸也。クミ様口傳アリ。（左ハ左ヨリ右ハ右ヨリ三クミニヨルナリ）常ハ只ノ足ヲナリ。又本式ノアシヲハ切様サシヤウツネノモノナリ。アシヲニハカハルナリ。常ニサスアシヲヽバモヂリアシヲト云ナリ。

一本式ノ装束ノ事ハ大タカノコトナリ。切革。シヤウゾク。半シヤウゾクモ同。但兄鷹ニハ大鷹ニカハル事口傳アリ。又シツクル様ニ口傳アリ。シヤウブカハ。ゴメンカハヲカサネテ。三ハリサシニ縫ベシ。ナガサ鷹ノ尾ノヒシヤク花ニトヾクホド也。

一半シヤウゾクト申ハ。シキノシヤウゾクト同體ナリ。ソレハ尾ノ中程マデトヾクナリ。

一キリカハ装束ト申ハ。ウヘノ鈴モチ斗ヲシタルヲ申ナリ。スヾイタノカタチアルベシ。スヾノナリアルベキナリ。ネズヲノナリ。如常切テ中ニテ引合テクケ

テ。サテ鳥クキヲカサネテユイツクベシ。小鷹同ネズヲナガサ一寸五分也。

一小鷹ノシヤウゾクニハ。カシ鳥裝束。ノゴ鳥裝束。トサカシヤウゾク。フクサ裝束トテアリ。シキノ裝束ヲバセズ。紅ノ糸ニテネズヲヽウツヲバ。マキアゲノネズヲト申ナリ。

一カシ鳥シヤウゾクト申ハ。レンジヤクノ尾ノアカキ分ヲイダシテ。ウヘニカシ鳥ノカタ。サギノウハゲノワキノ靑キ小羽ヲ重テ。又其上ニ金ランヲカサネベキナリ。但キンランノウラニ。此カサネモノヲシテ。ソノアマリヲウチカヘシテ面ヘナスナリ。カサネニ口傳アリ。ヌルテニテツクル口傳ナリ。ノゴトリシヤウゾクハ。ノゴ鳥ノ喉ノ下ノ赤キ毛ヲカハトモニハギテ。エボシノヂヲスヾモチノヤウニキリテヌリテ。ソノトニ此毛ヲスルナリ。

一鳥サカシヤウゾクニハ。キジノ鳥ノヤウニスルナリ。

一フクサシヤウゾクトハ。何ニテモウツクシキ物ニテシタルヲ申ナリ。定マル物ハナシ。但大タカ小タカニスルシヤウゾクモ皆フクサ裝束也。

一鞭ハ長サ二尺五寸。大小鷹共ニ同ト云々。但小鷹ノブチナガクスル事アリ。カリツエノ代ニ用子細アリ。甘草ヲブチニシテ。サキヲヨクタヽキテ。水ヲモツベキタメナリ。ナガサ一尺二寸斗也。是ニテ鷹ヲナブル事ヨキ也。

一鳥屋事。ヒロサ四尺四方。高サ四尺五寸ナリ。ムネノトヲリ三方ヲカベニヌルベシ。屋ネハ一方ヲ小麥ノワラ。一方ヲ檜ノ葉ニテフクベシ。マヘハサシコノゴトク。シノ竹ヲサスベシ。其上ニワラニテコモヲアミテカ

ケベシ。ウチニハクリ石ヲシクベシ。舟ニ水ヲ入テ日ニ一二度カヘベシ。ホコニハ何ニテモナマキヲサイ〱ニヌキカヘヲクベシ。薬ニナルキ可然也。同ハサンセウノ木可然也。ホコノ高サ地ヨリ一尺二寸斗ナルベシ。鳥屋ヲバ東向ニスベキ也。但所ニヨルベシ。此東向不審也。本書ニハ北向トアリ如何。ムクロモヂノ黒焼。エニツヽミ可飼也。

一鳥屋ニテ尾羽落サヌ鷹ニハ。ヒサゴウリノツルヲモミテ飼ベシ。又セミノヌケガラヲコニシテ甘草ノコ等分ニ合テ。エニマゼ細々飼ベキナリ。鳥屋ニテ餌悪ケレバ病鷹ニナルナリ。ヨクカヘバ命長也。

一ホコノ事。タカサ四尺。ホコヌノナガサ同。ホコ布ノコハキモワロシ。又ヌノハ自然ツメカヽリテ悪事アリ。サナカラン物可然也。アナガチナニヲトハ不定ナリ。

一カリホコノ事。木ノ本ヲ東ニ北ニアルベシ（不心得南向ノ時東本北分テ可斗）。南向ナラバ東ニ木ノ本アルベシ。如此方ヲ追テスベシ。

一鷹ヲホコニツナグ事。兄鷹ハ木ノ本ニ。大タカハ木ノスヱニツナグベシ。セウハヲン鳥ナル故ツナグトアリ。此説以外也。不可用。大鷹イラレテ兄鷹ヲトリタガル間。末ニ大タカヲツナクト云事ヲカシキ事也。木ノ本ニ大タカ。末ニ兄鷹アリ。

一ホコニツナグタカヲウシロサマニホコニスエテ。サテツナグ也。大タカハ七ツクサリテツナグ。兄鷹ニハ五ツクサリテツナグ。小鷹ニハ三ツクサリテツナグベシ。鳥ニ合スルヤウニ。鷹ヲホコヘヤル事アル事アルベカラズ。

一鷹ヲ人ニワタスベキ事。アラタカニテアラバ。ホコニツナギテ。ユカケトブチヲワタス

ベキナリ。シヤウゾクシタルタカヲバ。ユカケヲサシテ。餌袋ニ大タカナラバメントリ。兄ナラバヲントリヲサシテワタスベキナリ。マヅエブクロヲトキテワタシテ。サテタカヲワタシテ。後ニブチヲワタスベシ。小鷹同。小タカハエブクロニクチエニウヅラヲ入ナリ。

一マリノカヽリアル所ニカリホコヲイフ事。春ハ櫻ノ木ヲ一方ニシテイフベシ。カリツエヲ一方ノ柱ニモスルナリ。大鷹ナラバカリツヱナリガタシ。何ニテモスルナリ。

一ヤリ繩ノ事。ワラノスヘナフベシ。ナガサ二〔七與下同〕イロカタワキナリ。サワキヲモスルナリ。サワキトハ藤ヲ云。山ニテハ藤ヲツクルナリ。物ニカヽラサ〔マヽ〕シ用也。七尺也。小鷹ニハ藤ヲバセヌモノナリ。ハシリトツネニ人ノユフコレナリ云々。

一ヲキナハノ事。五十〔七歟〕イロナリ。左繩ニナフナリ。アヲクソムベシ。

一ヘヲノ事。廿尋ツネノコトナリ。又十五尋。是ハヲキタツルヘヲ歟。

一鷹フカハリノ事。一目ノ色。二口箸ノ色。三足ノガンギノ色。四ツメノ色。五羽スヂ。六フクリン。七ハナゲ。此七種白クバシロナルベシ。七所ノ内六所白クトモ。ハナゲ黒クアラバ白ニアラズ。六所黒クトモ。ハナゲ白クバフガハリト可申也。此六所ノ色白クシテ。ハナゲ斗クロキ鷹ノアカキヲバアカタカト云。此六所クロケレドモ。ハナゲシロクテアカキハシホト云也。七所白クテアカキモ。大タカ小鷹皆白也。

一尾ノ名ニカヽリタル分。マチカタノ尾。セマチヲ。ヤカタヲ。シノブヲ。シトヽノヲ。此外如何樣ニモアレ。皆メヅラシキ尾ノフヲバ

マ子ヲト云也。彼本ニ尾ノフノ圖ヲ不出。何タルヲ何尾ト云ト云ベキニヤ。但別ノ書ニ尾ノ圖ヲ出アリ。名ハ同者ナリ。此内マチカタヲトアルヲ。マチカタノヲト〔ノ歟〕ノ文字ヲ入タリ。又シト丶ノ尾トアリ。是モノ文字入ル如何。

一狩杖ノ事。鷹生笠ノハトヲリ也。木ハ梅桐桑ノ木也。イバラヲシトテ。木ノマタ三寸斗ヲクナリ。サキ五寸斗サキニスルナリ。革ヲシトモ云。此本ニハナシ。他本草ヲシトモ云ナリ。

一笠ハアミガサヲキルナリ。タカノ羽ノ用心ナリ云々。

一アラタカニ山忘草ト云ハ。ヨキクチエノ事ナリ。ヨキクチエクフ時。山ヲ忘ルトアリ。鷹ヲナツクルニ。ヨキクチエホドノ事ナキナリ。

一ラントリノ事。山ノラントリト云ハ。ウサギ山鳥ヲ云ナリ。田ノ物トハ鴈鴨也。其外鷺鶴。何ニテモアレトルヲバ田ノラントリト申也。

一巣ヨリヲロシタルヲバス鷹ト云。スハタヲフミ枝ウツリナドスルヲ。コアミニテトリタルヲバカレキツキト云一説アリ。巣ヨリタチテ母タカニツキテマハルヲ。アミニテウチテ取タルヲ巣マハリト云。巣ノアイダハ夜ル〔衍歟〕ハスニカエリトマルナリ。ス山チカキ所ヲウチマハリテ。スニハトマリモセズシテ。スノホトリヲマハルヲトリタルヲバ。ス山マハリトモ云説アリ。秋ノキニナリテ取タルヲバアカケト云ナリ。冬ノキニ成テ取タルヲバノサレト云ナリ。又年中如此ノ若タカハヤ春ニナリテ取タルヲサシホヒメ鷹ト云。是ハ此抄ニハ此分アレドモ。他ノ抄

物分ナラバサホヒメ歟。サシヒメ不審。夏ノキニ成テ取タルヲ小山ガヘリト云説也。但春取タルヲ小山ガヘリト云説常ノ儀也。兩説之儀也。夏ノキニハ鷹ヲウツ事ナシ。巣ニ子ヲモツ故也。又云。ス山マハリノゴトクニ近所ノ山ヲマハルヲスチカキトモ云。五六月ノ事ナルベシ。此説モアリ。巣山マハリヲ兩説ニ申儀ナリ。

一鷹ノフガハリノ事。白フノタカト云ハ白也。又マ白ノ鷹ト云ハマユノ白キナリ。コトナルコトナシ。

一大クロフ。小クロフ。是ハ白キ所ナクテ。トコロ〳〵ニシノギゲノスヂミナルヲ云ナリ。又ウヅラフ。フヂフ。シギフナド云フアリ。

一スヾノコヲサス。櫻ノカワニテツクル。作樣誰モシルナリ。鈴ノメサストモ云。犬ノスヾニモサスナリ。

一鷹トブ事ニフルマイドモアリ。

一マスカキ羽。是百首ニアリ。左羽右羽。カヘリ羽。アガル羽。ノボリ羽。ミサゴ羽。コモツチコエ。ヲシヘ草。ノキ羽ウツ。此ノキハウツト云コト説アルコトナリ。

一万セイノタカトハ。マエヨリミレバアヲノキ。ウシロ〔ヨリ脱歟〕ミレバウツブク樣ナルヲ云也。

一カモイノ鷹トハ。扇ヲコシニサシタルヤウニ。一文字ニヰタルヲ云ナリ。

一サンダンミヲレノタカト云ハ。ドウハカモヰノゴトクニスクヰテ。カシラウツブケル。ヲニテコブシヲサスルナリ。如此ノ鷹逸物ナリ。

此聞書可有用捨。不審事等多。

〔右鷹聞書以宮内省圖書寮本校合〕

続群書類従巻第五百四十四

鷹部四

總検校保己一集
男源忠寶校

鷹秘抄

夫鷹者仁徳天皇自神武十七代御時。自百済國始テ渡ル。而自始つかい給皇。
天智天皇。自仁徳二十七代 二十二代歟。御鷹有。
嵯峨天皇。自天智十四代。十三代歟。勢羅ト云御鷹有。
醍醐天皇。中納言在原行平。此時之鷹飼也。かちんのすひかんのたもとに鶴をぬいてきたる。おきなさび人なとがめそかり衣と云歌仕けり。
一條院。自醍醐七代。はとやと云御鷹有。小。又みさご腹の御鷹此時也。大。
小一條院。自一條四代。春宮ニテカクレ給。此御時鷹好事法ニスギタリ。
凡此道をはじめ學する者。下臈にをゐてはその數有べからず。然ども指重代にあらず師にあはずといへども。相傳先達のあとをほのかにたづねて。このむをもつてとくとし。あいしる事を少々注。
一山歸を三日五日に合するやう。なまぬるなる湯にてよく／＼洗おとしてすゑべし。如此あらひつれば。いかにあらき鷹も手に居事を得也。但極めてあらき鷹は猶いぬ事も有。それをば目をぬひてすへべし。さて夜に入ぬれば。ひきゝろくろほこにつなぎて。しばらくもやすむる事なかれ。ひまなくほこをまはして。はたらかしてねさせざれば。夜

半におよぶ程に。あまりねむたがるをねさせずして。東しらみほの〲と明る時にのぞみて手にすへて。はたらかさずしてねさすべし。さて夜明になれば一日野山をうちありくなり。その夜を見るに。ゑをはむ鷹をばやがて火をあかくともして置わたして。口ゑばかりをかい〲して一夜の間置なり。あらくてゑをはまぬ鷹をば。先のごとくまはりほこにてよとるべし。夜あけなば又先のごとく野にすへ出て一日ありくべし。馬にのり野に出る心は。里にてかち人の手にいぬ鷹も。馬にてすへて野に出ぬれば。手にゐるが故也。さて夜をかるゝ鷹をば。つぎの日野に出たる時置縄さして。おきなわのすゑを腰にはさみて。ふしき若は家の上岸の上なんどに捻すへて。さしとりては口ゑかい〲して一日置べし。さて鷹いられて

見へば。朝に先赤鹽を飼べし。さて水を飼。當のゑかいて次の日。鵜のいかきの様なるさかを切て。中は袋にてあるに。水がねを大豆ばかり入てとりのゑを捻入。口をふたぎて鷹に飼て一時ばかりあるをり。おもと草を粉にして。からはじかみばかりを互につゝみて飼て後に合するなり。但鷹によりて其日は合すべし。其日合せまじき鷹ならば。其日ゑをかはずして。其夜一夜おきて口ゑばかり飼て。次の日あはすべし。委は口傳にあり。

一荒鷹をとりかはんには。鷹を持てぬくめ鳥をとりて。人のふところに入て。さまさずして持べし。其後荒鷹をば合するなり。そのゆへは鳥をはめたるを。かならずそのつかれをとりかはんとすれば。あしき事の有なり。そのゆへはひきゝ柴木居などにかけてゐた

るに。犬もちかくとをり。あらくもうちよれば立のく事もあり。又河や船戸にはめつれば。遠はしりぬけてたちつれば。なまさかしく落合て。其度は能もはめずして。とかくする程に久しくなりて悪也。さればたゞさきに鳥追つる所にてぬくめ鳥をかいつれば。追たりつる鳥をはみたりと思なり。努々不可疑。されば其ね鳥を飼に過たるとはなし。大方鷹は鳥を追つれば。手とらねどもゑをかいつれば其鳥と思也。さて次日はいりいりとするなり。さればとて一定取つべからん鳥をとらせずして。ね鳥を飼には不及。木居に高くかゝりて。つかれをにがしけもなく一定取つべからん鳥におきては。そのつかれを立てとらせて飼なり。

鷹置事はあかけをば構てすらせじと可置也。高所に鷹置て。ひきゝ所のすゑ遠きすきたる所にゐておけばかならずくるなり。すゑのふたがりたる所に居て置べき也。里にては家などを後に居て置べし。野にては塚若は岸小山などを後にあて置べきなり。又巣鷹をばおきゑをすりて。すりをせさせんと置べき也。何をもたかたぬきを持てをきつけて。あたらしき別足のつきめ。若は小鳥なんどのあたらしきを持。たかたぬきにてかいならはせべきなり。又火をともして夜置つくべき也。又鷹のいられたらん時は。鷹を谷に置。嶺にてよびあぐべし。さればとて鷹のそらくならん時はさ様には不可置構。鷹の心をたかふべからず。一度も心をたがへつれば。其によりてくせのつく事あるなり。

一又常のしゝを調薬には。鹽にかみの垢をこまかにくだきて。垢を等分に合せ。但鷹も肥すぎて。今少はやき薬を飼とおもはん時は。

七種の染薬をかふべきなり。

一染薬と云は。　牛膝根。　堅鹽。　赤苅根。　はぶしくぬぎ也。三子〔みねばり歟〕はの根。　當歸。　すわう。　丁子。

是を等分に合て。糖の様に煎て。方一寸に檀紙を切て。此煎じたるしるを染干〱。檀紙のはだのみえぬまで染干ておきて。かはんと思はん時おしまろめて。うさぎの毛をうへにつゝみて三口かうべし。又ぬすみはみしたらん鷹にも是をかうべし。たゞしぬすみしたらんが。こゑたる鳥のあぶらをおほくくらいたらんには。梅ぼうしのみばかりかふべし。

一鷹の病は百濟の本書のどくば十七と注せり。秦皇の秘書のどくば六十一病をあかせりといへども。其科やまひのおはりならずよりは見しらるゝ物なし。又悟がたし。然ども百千の薬の數をあかせりといへども其詮なし。うちまかせては毛のねのさきゆるぎてあゑぐやまひあり。常の説にはたけと云也。彼病には先鹽を可飼。次にひるを可飼。七つゝみ。兄鷹には四つゝみ。かたしほ飼事。ぐみのさねばかりにて大鷹には三。兄鷹には二也。大方の薬と云はしやくやくなり。しやくやくと云はあか子のくそなり。又鷹主のゆばりを女會したる日の中のをば飼べからず。但赤子のくそをばゑにつゝみて可飼。ゆばりをば一度の分のゑをぬらして飼也。又たにかこ三つゝみ。石の下のかに也。蟬三つゝみかふべし。三つゝみと云は鷹のくう程にして三つゝみなり。いづれも〱ゑにつゝみて可飼。又あさの根をはいに燒て三つゝみ飼べし。又ちやうじ一きざみてかふべし。大鷹には一。兄鷹には半。是を常

にかふべし。鼻たけのはじめにも吉。はなたけとたけとのつきはじむるやうはそのすがた一也。あひかはらず。故に二の病の藥をかねてかふべきなり。此二の病には兩方かねたる藥を可飼。謂此二の病付はじむる時。口なめつくりをしてとばいて。時々いきあらくしてこくちをあくなり。これをもつてしるべし。

一常なる病のしかも療治しがたきは。野すりといふやまひなり。此病は毛のねかたくひきて。みめよく成て。あふのきて手ぶくろをひく也。人病としらず。但れいよりもみめよく成。又鳥をもおいきり。ゑをもはみおとらば此病としるべし。此病は次第にゑをはみおとりて。漸々に疲つまりてしぬなり。藥には吉野鹽をくだきて。れいしきに飼やうにかふて。時々とり〳〵餅を餌に包て可飼。せひはぐみの實の程にて六可飼。時々主のゆばりを可飼。但ゆばりは餘に早藥也。然者つちにゆばりをしゝめて。その土を能々日にほしさらして。堅鹽を飼やうに。おほさも同樣に可飼也。此藥と云は秦皇の秘密の藥也。又人に傳事なかれ。此病はいそぎ燒べき也。中骨をはさみて。あばらきものしりかしらを燒べし。又あぶらをのつきめをやくべし。又腰のつきめを燒べし。

一はなたけには此野すりの病と同藥なり。やく所は口のあきのうち三方をやくべし。

一羽の虫惡には能ひでをあめのやうに煎て。鹽を三分一入てつくづし。又こせと云病も是同藥也。但とや鷹などのよごさじと思には。大根をおろして鹽を半分すりくして可付。ごまのあぶらを入るゝなり。

一羽をかきたる病をば。あなをほりて。あなの

そこめぐりにもこもをしきて口をふさぐべし。ふたの中にあなをすこしあけて。ゑかはん時あかりを少入よ。ゑをばつくりてちいさきけに入て可飼。まづかきたらん所のふしを水にぬらして。けをおしのけて。石のちいさくひらなるをやきて。紙をぬらしてつきめを能々むして。かのあなの中に入ておけばよくなるなり。

一くそたけと云病は。しりのかたまりて。くそをつかぬなり。それも鹽を飼て先の染藥を飼て。かのしゝのはらおらひのあぶらを可飼。めとりのあぶらにても可飼。

一みゝずをつく病あり。又ちいさきむしをま〔生歟〕る病あり。是も同藥をかふべし。但是にははらおらいのあぶらはかふべからず。

一とや出しの鷹のしゝの堅には。にはとりのかしわ鳥のひぼねのされたるをこそげて七日かふべし。又もかりのこめのしるをかふべし。してこかはらけ三ばかりかふべきなり。しゝはいよ／＼かた〔衍歟〕ゝまれども。中もすき病の心も吉也。大方船にもゑい。又何にもゑいたらむ鷹にも。すりこをこまかなる物にてこして。はるのめとりのあぶらを等分にあはせていそぎ可飼。さて後ゑを五きれにすぎて不可飼。をすにしたがひて少能々可飼也。物にゑいたる鷹をしる様は。させる病とはみえねども。目ほそめてくせもなきゑをうちすつるなり。

一鷹の足にいちこ肉の様にて。しかも堅くこぶる様なる物のいづるには。天南星をねやして。かたにかわをときて合べし。こぶの上にぬりて。紙を切ておし付ておけば。はげてうするなり。

一とばふとて羽ぶしを打腫て。あまさへうみ

うつく事あらば。ほこ布こはき故なり。ほこ布にぬのをして。件のうみたる所能々洗て。其めぐりにひるを五六かいつればやがてなをるなり。

一もゝかりする鷹にも。其かるゝ毛の根にひるをかふべきなり。いづれも鷹をふせよ。もゝかりはつくろはざれば年どにかるゝ物なり。とやの時こぜにつくるがどくくすりをつくべし。

一めわくと云病は。とうしたるはまわたしのくろくてあつく見ゆるなり。いまだおいざるは涙をいだしあはをいだすなり。薬には鳥の羽にても鵜の羽にてもはいに燒て。なまところにねやし合て。吉酢のすみたるに。しほゝ人のくう程に入て。鷹のかたにぬりて後に。目にすりいれさすべし。まづかたにぬりてのちに日に付よ。

一鷹の足の腫たるれうぢには。天南星をかたにかわに合て付て。上に紙をおほいておくべし。又にしのからみをねやして可付。若足のうらかへるほどにはれて治方なからんには。腫たる中を指わりて。へいしやうをすこしかうがいのさきにつけて入べし。若へいしやうすぎて足もくろみ。又すねもかるゝと思はゞ。とうしみをにいだして能々洗て。くぢらの油を可付。すこし付てたらずば又つけぐすべし。

一足のはれてこぶになりたるには。一なつはなちとやに入たるに過たるはなし。

一鷹のこゑかるゝには。ほこなんどにても筒を打たる也。然どもしやくやくをかへ。又しほもかふべし。又河にあるいしにしを三なましにてこまぐとたゝきて。ゑにつゝみて三朝斗かへばよく成也。またかまの下の

土をこそげて水にたてゝかふべし。

一とや出し鷹には鹽を可飼。うちまかせては ぐみの實のやうに作て飼なり。さやうに作たるをこまかにくだきて。かみのあかを半分合て。ちうさうにてつゝみて。ゑにつゝみてかふべし。あかを半分に合する事は鷹によるべし。心も惡くしゝもたかからずと思心には。あかを三分が一あはすべし。其後水をのまんにしたがつて可飼。是はけふあはせんと思はん朝とく可飼。まへの日かひたるもよし。なひ鳥などにはもともまへの日可飼。夜中ばかりにかふ說もあるなり。

一とや出しの鷹のしゝをしるやうは。さしゑをはまずして。あらいゑをはまん時をもつてそのどくしるなり。それをはまざらんかぎりは。いくかもたゞのゑをかふべからず。

一しりふくらをとりかうやうは。別足を可飼也。其ゆへはひな鳥は極てほねゑにてあるなり。然ども別足は吉所にて有をもちてこれをかふなり。

一鷹のもゝひぢなどをそんじたらんには。やはらかならん所につなぎて。構てはたらかすまじきなり。さて鹽を飼て水飼て。ゑにじねんとうをすりてまぜてかふべし。又釜の土をかふべし。

一鷹の羽のおいとまりたる藥には。赤子のくそにかいこの夏このたねひちくりて。かのとまりたるあなに入て。桑の木の枝のはりを作てさすべし。

一ゑつゝみをつきそんじたらんには。人のかみにてぬふべし。ゑにじねんとうをまぜて少づゝかふべし。

一ゑをも惡く飼。のみかけをもしたらんには。

口よりゆびを入てとるべし。それはこゝろうべし。

一犬にゆびつめなどのきはをくひきられてあらむには。則水にて洗て。彼疵の口に犬の毛をはいに焼て付べし。うへを綿にてつゝむべし。ゆにてとゞむべし。

一鷹の身にいづれにてもくいなんどのたてたるあとあらば。きやうりせんをつくべし。

一いきりのきれたらんには。つちはいきをして。きれめにきんもうくじやくのけをつけべし。きんもうくじやくとはたうじんもちたり。又おにわらびのけをもいふなり。

一ちんのゑといふは。もゝきくちをきりて。からすみを粉にして。猪の油にひちくりて。もゝきをくちのなかにひとはたいれてかふなり。大鷹には二。兄鷹には一かふべし。但し大しよくたんの鷹ならば大鷹には三も四もかふべし。

一こきやゑ(こきやくイ)と云は。あかしほになまりをこそげて。一字かなからをぐして可飼。赤鹽は常にかふほどなり。一字かなからと云は錢の文字の一が事也。たとへば錢の半分が一なり。

一たかの白虫のいできたらんには。いわうくすりをちきやうのねに付るなり。いわう藥と云は能水がねと。まじる物なきゆわうにすりとりてのち。猪のあぶらにてながれぬほどにとき合て付るなり。すり取と云は。しらちの鉢にまづゆわうを入てすりくだきて後。水がねを入てよく〳〵すり合するなり。くわしくはくでんにあるべし。

一ゑのこ犬を引入る次第。鷹の邊に置て常に鷹を見しらすべし。さて鷹をみしりたりげにあれども。物さわがしくもあれば。忘てあ

やまちなどもすのは（丸散）。たゞおもづらをはけてかますべし。さてよくもあしくも二日に一度。三日に一度野へは具べし。其故は善惡も毎日に具すれば物くさくなりてわろきなり。おのづからそのとしはよけれども。つぎの年はうたがひなくわろきなり。努々不審あるべからず。

一新修鷹經者余病余灸所注。今秦皇文のどくば。一藥をもてあまたの病をれうぢ。きうしよのすくなきをもてそのせん有故に。その萬が一を記申。

一相經はめのまへのながきをもつてせんとす。

已上　上卷畢。

此秘書及告文相傳畢。御判。此一行名者攝政殿御自筆自判。直令書寫者也。

鷹文　十二卷秘事

此土鷹越初事。

仁德天皇御時。　仁德天皇八十七年保世給。四十六年の御歲。百濟國より日記をあひそへて鷹を奉。其使の有樣僧ニ似帽子をす。鷹名はくりてうと云。文書をあい副て奉といへども。文書讀人かたし。其後せひりんの御門につたへらるゝといへども口傳なをくらし。正賴が時唐土の鷹飼つるがの津に渡る。唐人名は米光と云也。正賴彼人に合て文書を開て。十八の秘事三十六の口傳を習とゞむ。正賴かの悅にこちくと云はした物に長持相具て唐人にたぶ。給て地に臥して悅て。鷹飼の裝束。犬飼の裝束。鈴。ゑぶくろ。狩杖。うちかいぶくろ奉。正賴のぼる時。侍正世を使として。こちくがもといひねりたる文をつかはす。

こちくてふとかたらはゞふへたけの一夜
のふしも人にしらすれ

一鷹本名
摩伽陀國にはくゆん王と云。けいたん國にはませんと云。新羅國にはこてうと云。百濟國にはくりてうと云。唐土には鷹如本しゆてうと云。日本國には鷹と云。

一鷹の尾名
鈴付。
次尾。たすけ。
次尾。をはかり尾。
次尾。ならしば。
次尾。石打。
次尾。小石打。
一説には小石打をばしはひきと云。

一足の指爪名
後爪はかけ爪。
前爪はうち爪。一説には。ゑはみの爪とも云。
中指はとすゑ。一説鳥からみ。
外指はかへるこ。

一十八の秘事云は。
一らんひの毛とは鼻毛也。あいぬればそらくにてにぐる事あり。鷹のちるまへは神なり。
一ひげつけとは鼻穴也。てうこうのごとしと云。つかあなのごとしともいふ。鼻廣かるべし。
一がもんとはおとがいの下也。かいなたてよと云はおとがひの下ゑれと云心なり。しやくしを指擧たるがごとしと云なり。
一くろもんとはまかくし也。ひさしをさせといふは出よといふ心なり。
一かあもんとは眼也。箱に入たる鏡のごとし。又明星のごとしともいふなり。四毛トモ云
一てうせん羽は鈴をひしけと云。かさなりて尾の上をおせと云也。
一うんかいのくだれるはしゆんわうのどしと云は。つばさをたれたるを云也。女犬如牙トモ云はつばさきはとかれと也。
一しりくわんはつめのごとしと云は。尾のたゝめるは人のつめのごとしといふなり。

一かくたいは雑馬をとをせといふは。足二があひはひろかれといふなり。又てうなんしやうとも〔也脱〕や。

一うれへの毛と云は額毛也。心むつけて立毛なり。つねにみてさとるべし。

一かねつけの毛といふは。あをはしの上の毛なり。心よきおりはたつる毛なり。ひきたらんおりははたらかすべからず。よく〳〵すゑべし。

一よき毛と云はもゝの上におふる毛なり。ねれたる様におぼえん時はつかふべからず。

一ひすいの毛と云はむねの毛也。きはめてなかるべし。

一さごろもの毛と云はおすげ也。又はらんしとも云。おほかるべし。此毛れいよりもすくなく見えむ時は事ありとしれ。能々ゑを飼て一日つかはざれ。

一くれは鳥の毛と云はかたのひらの毛なり。あやをたゝめといふこゝろなり。

一ほうきやう毛と云は。ひぢの毛也。ながくしてしもへくだるべし。此毛そゝけてかはることあらば。七日つゞけて能ゑを飼べし。

一うけら毛と云は。かたさきの毛なり。此毛きはめてこはく。毛さかいさわやかなれ。

十八の秘事とは是なり。

十二巻文内三十六の口傳事

一三十六口傳と云は。鷹の病のつくは是皆鷹飼のとがなり。能ゑを飼よくすれば野に有鷹のごとし。とりつなぐ時によく〳〵おそれて。荒鷹をとらんとするがごとくに思ふべし。鷹になまめくあたれば。みるためもあしく一定そんずるなり。能々これをつゝしめ。

一鷹をつとめてごとに手にすゑてみれば。れいにもにず足あたゝかにおぼへば。病おこるとさとるべし。

一れいならずとばいして後しづかならば。物

にあたりたりとさとるべし。能ゑをつゞけて三日可飼。

一愁の毛をたてば思事ありとさとるべし。

一日ごろよりゑをもすくなくはみて。まみに思事有て口なめつくりをせば。たけのおこるかとさとれ。口なめつくりとはむなゑをはむといふなり。

一はなを常にひば。鼻たけのおこる。ひるのはなにあるとさとれ。

一まわたしをせばしりのかたまるか又めわくるとさとれ。又蛭のまなこに入たるか。ふせて見よ。

一日比より鳥をもをいきり。又おかんにもいくよりもおそくをかれば。事ありとさとるべし。

一鷹の足をのかわ。れいよりもくつろぐと見ば。足はるべしとしれ。藥をつけて二三日つかふべからず。

一身をすくみてあくびをせば。病のつきたるとさとるべし。

一愁の毛を立て月をほそくみて。頭を常になして身をはたらかさば。かしらを打たるとさとるべし。

一鷹そゞろにやする事あらば。米のしるにてゑをあらいて飼べし。又小鳥のちを飼へ。またこつぼの水にてゑをかへ。

一ゑこりしたる鷹にはゐのしゝのあたらしきをかへ。又もみすゞめ小鳥の血をかへ。

一紅雪と云はくれなゐの雪なり。はつ雪をとりて置たる水なり。足のはれ日の前のはるゝくすりなり。

一さわのみくちと云は山しりながれぬ水也。

一夜取やなぎと云はゆやなぎなり。

一こつぼの水とは木のうつろの水なり。ゑの

木。くわ。ゑんじゆ。是等能也。

一むなゑをはむと云は　くちなめつりを云。なにの病にてもさだまりてするなり。

一山かへりは毛のこはき也。羽がいのしたの毛は殊にこはきなり。夜なども此毛をなぶりて山かへりとはしるべし。

一鷹のなにの病も付事は。くさきゑを飼。あしき水にてゑをあらい。煙にあたりわろくする故なり。

一鷹に水をふく事は。能々くちをすゝぎてのち一くちをふく。一度はうがい一度ふくなり。三度には過べからず。但小口にふくなり。

一若鷹の目きになす事は。あまとやにつなぎて蓬檜木葉をふけ。又すゞめの血小鳥の血常に飼。雀の血はつゞけてあまたゝびかいつれば悪事有。おゝゑを水にひたして一度かへ。

一鷹のゆびはながくてあいはたらかんと思ふ。

一鷹のとばふに吉さう（やうによきイ）は。空に向て羽音たかくとばふを。はい鷹とばいと云なづけて第一相なり。

一手の下にとばいおちて。つめをもちてたかたぬきをかきてとばふは。つるべとばいと云て。みめあしけれども能相なり。

一羽骨はふとからんとおもへ。是ははやくとび。又とやまさりする相なり。

一鷹のかほのかわはうすかるべし。眞心につかはるゝこゝろあるさうなり。

一秋とやを出さん時は。とやにてしゝをさけて。後鷹主の生氣の方にあたらん方の七家かへる木はしをとりてともしていだすべし。若生氣の法ふさがりにあたらば。天井福德の方も吉。さてしばしばよひあかつきに

すへよ。

一とや鷹のしゝを調て合事は。廿日よりとくあはせつかへばわろきなり。しゝをさけてとりかいて次第に飼上。こやしてつかふべし。

一荒鷹をこしらへつかふやう。よいあかつきにすゑべし。手にはかへりをさし。身むしりをして手袋をひきなどするなり。能ゑにてをふをたけ置はじめて。すこしづゝ遠くて置。おきなわを付てすてをきをせよ。をかれざらん時には。しいて置事努々なかれ。耳かたくなる故也。よく／＼置たてゝ後。装束をして鈴さしてよひつき／＼置べし。さてまろばかしを飼て後。何鳥にてもはやらん鳥にあはせよ。努々ひかすな。

一鷹を鳥に合方。けふは一をかふ。次日二をかふ。次日三をかふ。又次日一をかふ。次日五をかふ。又一をかふ。又二を飼。又一をかふ。又五をかふ。其後は努々五には過べからず。過は悪也。この定につかへば鷹も能なり。いのちもながし。是は此定にかりあふ事かたしといへども。かやうに心えてつかふべきなり。

一鷹に鳥をかふやう。水のあらん所にて。笠をぬぎてひざまづきて。犬をのけてかい。かたのほねの左をかきわりて。うへをひきて鷹を置わたして後。鷹のかほに水をうちてかへ。あはけ心おりほねまろきをもかふべし。（あはけは悪く飼ぬれば鷹の心かはる事あり。鷹の心に随て可飼。）

一荒鷹を初て執飼には座をさだむべからず。鳥をとりたらん所にて。やがて能々鷹にあづけてむしらせよ。鷹をこらす事なかれ。その夕さり家に帰て少ひかせよ。思かいをすべし。

一鷹の鼻をひて。鼻よりきなるしるたり。かゆがりてはしをすりまわせば。ふせて鷹のあき口をごまの油をぬりて。はなをくゝみてすいとるべし。すいとりてはうがいして。又たび〳〵すいとるべし。さて酢にて銅をいだして。かうひねりにてひねり入よ。おそくつくろへば目の前はれてわろきなり。
一鷹をにがしたらんには。朝には東をもとめよ。夕には西をもとむべし。
一兄鷹の相大鷹と同。但かはる事あり。かしらまなこすぐれて大なるべし。かほのかはきはめてうすかるべし。
三十六の口傳是なり。
一この文は正頼鷹のすいさうを記文なり。十二巻が中のせんの巻なり。おぼろげにては人に傳べからず。實子なりといふとも。其道を好まざらんには傳べからず。他人といふともこのむにはつたふべし。
一小一條院鷹このませ給。
御鷹飼二人。忠兼。信親。
御犬飼四人。峯任。平松。峯松。狩山。
本云
後醍醐天皇嘉曆三年二月廿三日書寫畢。
此鷹譜者自禪藏寺殿西鄉殿參ルナ大巢殿御相傳自其寫畢。
右一狀者彼家之秘傳云々。雖然此內流布之抄也。文字誤無正體事多之。非用捨者不可用之。如本寫留者也。
永正十三年六月十九日
左金吾藤　（花押）

續群書類從卷第五百四十五

總檢校保己一集
男源忠寶校

鷹部五

養鷹秘抄

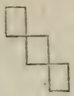
一山ことばの事
しもへをるゝはふみくだれといひてよし。
山のこしをば必さもとゝ云べし。
一山へあがるをばふみのぼれと云べし。
一うちへかへるをばふみひらけと云べし。やまのとばにはをちた又は過たといふ事かたくいふべからず。
一山へ出るやうは。一さきへいぬやり。そのあとへとを見。同たかじやう。其あとへせこの衆なり。又山より立歸ルには。さきへせこ。其あとへとを見。同たかじやう。其あとへいぬかひ。かくのごく也。
一たかのをきかゑの事
大鷹は　ほう〱と四こゑ。
せうは　おう〱と五こゑ。
はやぶさは　ゑひ〱と六こゑ。
はひたかは　はう〱と四こゑ。但つみ。ゑつさい。このりは七こゑもくるしからず。さしば。かつさいなどは　きやう〱と八こゑばかり。
一さしさほの長サ七尺の物也。但日つぶし壹

尺八寸。

一ゑのつくりやうの事

大さいはひ。こさいはひ。ほねゑ。たゝきゑ。いため。まさめ。こゞめゑ。さくらゑ。ゑのつくりやうかくの分也。但口傳あり。

大さいはひとは三ッにつくりかくる物也。



こさいはひとは二ッにつくりかくる物也。



ほねゑとは。かはをむきて。かたなのむねをもつてみぢんにたゝき。きりてかふべし。

たゝきゑとは。むくげをぬいて。かわともにさんざんにたゝきてかふべき也。

さいめとはよこにつくる事。

まさめとはたてにつくる事也。

こめゑとは米つぶほどにこまかにつくる事也。

同こゞめゑとはいかにもこまかにつくる事也。

さくらゑとは。かたなをふせて。うすくつる（く歟）るもの也。

なにゑにても候へ。わるきゑをばさくらゑにつくりてかふべし。やがておしはらふ物也。

一よきゑをば。うちにもつやうに。大さいはひにつくりてかふべし。

一よろづやまひたかにかひ候やうは。こさいはひも吉。なまぬるにてさつとあらひてかふべし。

一あらたかのおりふしは何ゑにても候へ。さいめにつくりてかふべし。さいめとは□四かくに作りてかふべし。つねにゑのかひや

う。大鷹にはすゞめ十二。しやう。はやぶさには十。はひたかには六。つみ。ゑつさい。このりには四。かつさいには三ッ。此分にかふ物也。但時によるべし。

一田物のかけやうの事。なわを以てまへから雨のはの〔四字衍歟〕下へまわし。うしろにてひらむすびにむすびにむすび。二そくふたつぶせ。上をおとこむすびにむすびて。そろへて三ぶせにきるべし。



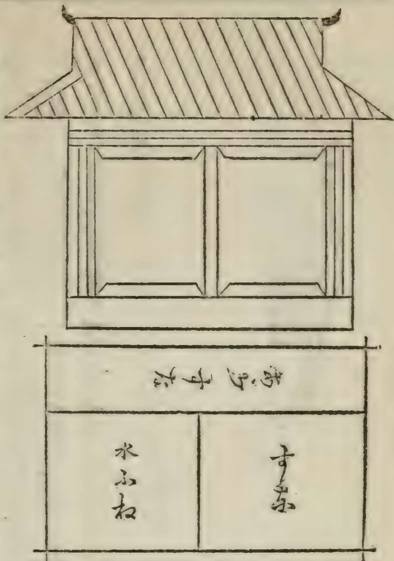
一山の鳥はわり藤をもつてまへにかくる也。



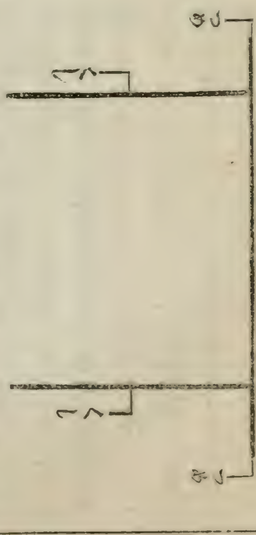


一ねづの神平大事の鷹のだうぐの寸尺。とや。ひろさは四尺六寸の物也。高サは四尺のものなり。おくへは四尺二寸の物也。ほこ木の高サは六寸なり。もと木は鷹のたなさきへなせ。おなじくゑまどは一寸五分の物なり。但四はうたかくし。何町ももと木のかたにあぐる物也。中にはあらきすなをまくべし。

三分一程水ふね同ふだん水を入ておくもの
なり。二日一どづゝかつ〔ゆ脱〕べし。



一禰津神平とほこの寸尺の事
二間二尺のものなり。くし〔な脱〕は四尺二寸。つめ
一尺。もと木はたかのたにさきの方へなす
べし。何時も藤ゆかけをばもと木にかくべ
し。



ほこたれの長サ二尺六寸のものなり。あみ
ふは六ぶのものなり。口傳あり。わらにてす
べし。
一いづまひの事。とひゐとはまつすぐつとた
つてゐるを云。
一かもいとは。かしらをさげてをしあげたる
を云。
一とつ手みる様の事。きなるは黄とつ手と云。
あをきは青とつ手といふ。黒きはくろとつ
手といふ。

一とつ手のきかうは身もなくてほそきをいふ。同あぶらとつ手と云は。きらめいて水をかけたるやうなり。

一もかたかろうとは。さひ〳〵に手ぶくろをひくを云。もやすかろうとは。とひゐにゐて。あくびをしげくするをいふ。

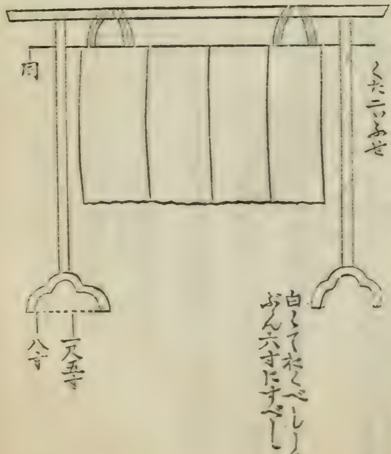
一かりつゑの寸尺の事。四尺六寸。同とりかけ四寸。いばらさし〔く恐衍〕二寸。鳥かけといばらさしのあい。一そ三ふせの物なり。

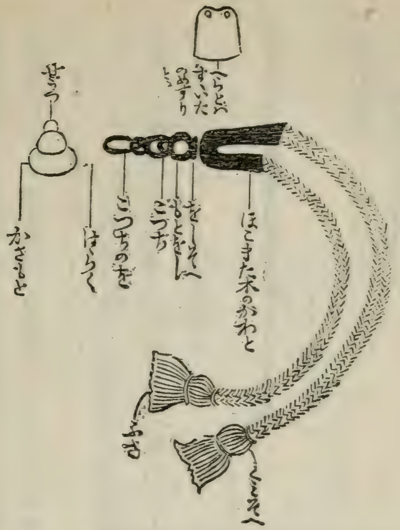


一神平秘書のだいほこ
だいのあつさ六寸。
くし三尺二寸。つめ六寸の物なり。ほこの木。ふとさもと木は八寸。木にはくぬ木を用ゆべし。但ひの木もくるしからず。あとさきの木めをかちくもりを以てはる物なり。もと木のかたをばあをぢ。すへ木かたをばあかぢにてはるべし。可秘なり。

一同ほこたれにはぬのを水色にそめてよし。長サ三尺。同水うち六寸をばしろくておくものなり。

ふさは手一そにきるべし。

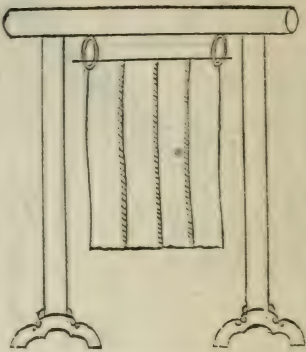


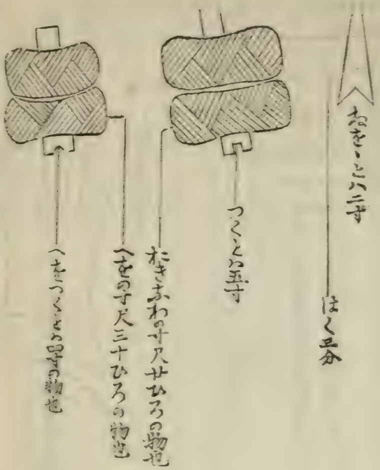

へらとい
すいた
のあすり
ほこまた木のかわと
をしそへ
おとをし
こづち
こづちのを
はらく
かざると
ふさ
くゝそへ


もかたき鷹に十火ほどすべし
目をうちたるたかニ三火すべし
ゑうもみたる鷹ニハ五火すべし
ちうぶ鷹ニハ米つぶほどニ十五ほどすべし
くだりけにあつゆにてかねをあたゝめて必あつべし
いきけにハ米つぶ半分程にもぐさをくわへて五火やくべし
たかけにはかねをあたゝめてちくとすたび程あつべし
くだりたる鷹ニハにゑゆをわかしてかねを入てあたゝめて必あつべし
目ひろに五火ちいさくしてすべし

たかをつなぎわくる事

もと木にはは
いたか
同何鷹にても小鷹
同大鷹
同はやぶさ
同しやう
ふちゆかは
すゑ木に
かくべし

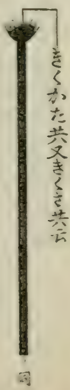




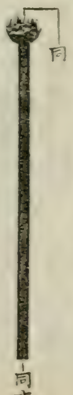
一大鷹のぶちの事。二尺三寸。



一しやう。はやぶさのぶち二尺六寸の物也。

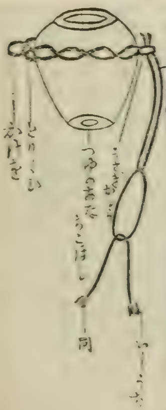


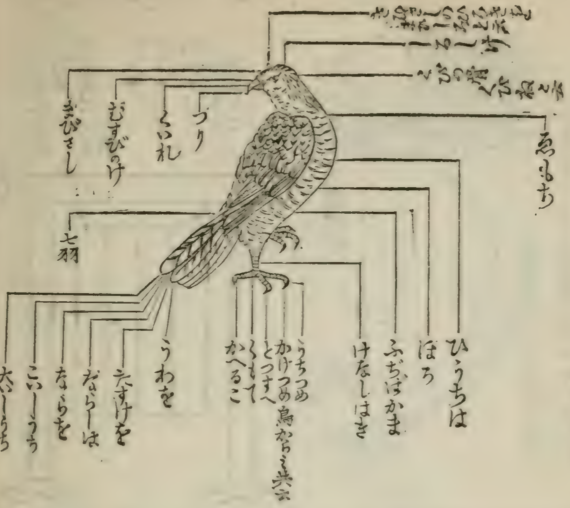
一小鷹のぶち。二尺八寸。

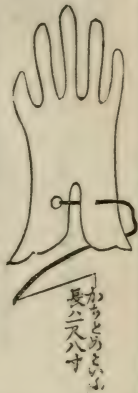


一あらしきぶちの寸尺事。四尺五寸の物也。









一らんひの毛。鼻毛也。あひぬればそう〳〵にて迯ろ事有。鷹の燭也。

一ひきつけ。鼻孔也。てうこうのごとしとはつか穴の如しいふ事。鼻孔ひろかるべし。

一がもん。おとがいの下也。具を立よと云。しやくしをさし上たるごとし。

一くろもん。まかくし也。ひさしさせよと云は出よと云事也。

一てうせん羽。鈴をひしけと云。かさ・なりて尾を押せと云。

一うんかいのくだれるは。しゆんわうの如しと云。つばさはとがれと也。

一しりくわんは。爪のごとし。尾のたらぬは人の爪のごとしと云。

一かくたき。雑馬通せと云。足の間ひろかるべし。

一うれへの毛。ひたいの毛也。

一かねつけの毛。青はしの上の毛也。こゝろよき時はしる也。

一よき毛。もゝの上の毛也。

一ひすひの毛。むねの毛也。極て長かるべし。

一かあもん。眼なり。鏡の如し。

一さごろもの毛。をすげなり。必多かるべし。

一くれは鳥毛。かたびらの毛也。綾をたゝめと云心なり。

一ほうきやう（け歟）毛。ひぢの毛なり。長く下へくだるべし。

一うはら毛。肩先の毛なり。極てこはく毛さかいさはやかなれ。

以上十八。鷹匠の秘事也。

根津清來りうの大事の書の事

一なつけぐすりの事

いもりのうちのだうぐをとりすてヽ。三日かげぼしにして。身のきうに一夜つけてくろやきにして。

ひすひのはらわたをとりすてヽ。野中のし水に一夜つけ。十日かげぼしにしてくろやき。むかでのあしをのけて。野中のし水に一夜つけ。かげぼしにしてくろやき。

きりんけつといふむしをかげぼしにして。野中のし水に一夜つけ。くろやきにして。

しかのふくろ角を野中のし水に一夜つけ。かげぼしくろやき。

ことくたみのねばかり。しろ水をもつてあらひて。かげぼしにして。

草のわらしろ水に一夜つけ。かげぼしくろやき。

しゆろのねを白水をもつてあらひくろやき。

せんきうをこにして。

よやうしをこにして。

なんによのあかを日にほしこにして。

右等分に合て。二兩の内へ水がねを二分くわへて又くろやきにして。大鷹にはこうがいのみヽか(衍歟)きに三すくひばかり。しやう。はやぶさにには二すくひ。はひたか。又つみ。ゑつさひ。このりには一すくひ。是をゑにつヽみかふべし。日に二た(ど歟)づヽ七日飼べし。是はしやう。大鷹。はやぶさの事也。同はいたかは二日。つみ。ゑつさい。このり。かつさひには一日に三度づヽかふべし。

是はせひらひりうの秘密の藥也。禰津りう

にははやおりともいふ。又はせひらいりうにはなつけくすりともいふ。いづれも㝡上の藥也。よく／＼可秘々々。何もくすり一しゆもちがひにてはかうべからず。こたかにもなを／＼よしさいじやう也。小鷹にはあしたとくしたのあかをとりて。それにてねり合よ。〇是羽ににく(マヽ)わんし。三りうほどかいて。くらき所に一日ほどおくべし。㝡上可秘可秘。

せいらゐ秘書のすかしの事

いのこつちの根ばかり。白水を以てあらひてかげぼし霜。やくしさうのね同こしらゆ。かどみ草の葉ばかり同。いつたちのしのきといふ草の根かげぼし霜。もつかうをくろやきにして。水等分に合。藥の分兩はまへのごとし。大鷹にはみゝかきに三すくひ。しやう。はやぶさも同前。はいたかに二すくひ。小鷹に一すくひ。何もゑにつゝみかふべし。すかし也。たとひゑをかひても。此すかしをかひにてかならずうちを五つきつきたらば。しゝがあたりたとおもふべし。すかしおほしとは申ながら。天下一のすかし也。よく可秘也。

くみぐすりの事

さるのかしら又はきもにても。かげぼしにして黒焼。くろねこのかしら同。あしげ馬のこへをかげにおけば。かならず上にくさびら生る物なり。くさびらをとりて。田水をもつてあらひ。日にほしてくろやき。よきちん香をこにして。右等分に合。藥の分兩まへのごとし。是はたかとりしらみ一羽おひ(候歟)にては又おいきりて。鳥などゝゐならびてゐる時。此くすりを

かひ候へば必とりくむなり。
一つめだうのくすりの事
ちゑはりの葉ばかりかげぼしにして。野中のしみづに一夜つけて。かげぼしにしてくろやき。
とくさね葉共に同。
かんざうこにして。
わうこんこにして。
右等分に合て。藥の分兩はまへのどし。是はほこにてうち又は物にあたり大事なる時。此くすりをかひ候へば則よき物なり。㝡上可秘也。
一氣ぐすりの事
こうもりのはをさり。霜にして。
きじのあし同。
天なんしやう同。
川大わう同。

くゞゐのほね同。
ふとりら（か歟）す同。
おもとのね同。
もつかう同。
右おの〳〵等分に合。藥分兩まへのどし。何な（や歟）まいにても候へ。此藥㝡上なり。是はきぐすりと申にて。一段のひみつぐすりなり。
右せいらいりうのおくの五ヶ條の藥也。可秘なり。
一羽をとめたるをいだす藥の事
ひきがへるのはらわたをとり。野中のしみづに十日ばかりつけてくろやき。
こうしのほそのをゝ。をんなのちゝに一夜つけて。くろやきにして。
くらげをかげぼしに（衍歟）にしてくろやき。
とうさい子のすりおとしたるかみのおち霜。

右等分に合。薬のかいにうはまへのどし。日に三どづヽ五日かふべし。此くすりをかいにてはなにしても候へ。小鳥をさくらゑをつくりて。なまぬるゆをもつてあらひてかふべし。さくらゑはかたなをふせて。ふきちるほどにうすくつくるなり。

一水すひくすりの事

あかにしのみを野中のし水に廿日つけて。かげぼしにして二兩。

くじらのひげ二兩。

をんじやく二兩。

かいつぶりの内をとりすてヽ二兩。

川おそのかしら。又はきもにてもかげぼし十兩。

しかのはらごもりのかしらかげぼし三兩。

右等分に合。めしわんに水十入て一ぱひにせんじ。さぬにてこし。十日日にほしくろやきにしてこにして。三兩うちへ水がねを三分。又しやくだうをなり共。又こがねを成をくろやきにして。薬のかいやうは。みヽかきにすこしづヽかひ候へば。ゆき又はあられ。少々雨なこにもくるしからず。可秘也。

一右此七ヶ條の薬大事の薬也。此りうは奥州の國しのぶの住みつのせいらひ秘々之書也。

一五いこさきにつかれたる事。同せんやく。はぬもちのあまはだ。せんたのみ。ふぢこぶ。

右是をとり合。日に三どづヽあらふべし。

一付くすりの事

かうふしのつるかげぼしくろやき。

みやうがのはなかげぼしにして。つくるかねに一夜ひたし。くろやきにして。

くまたかのうちを日にほしてくろやき。

右當分に合。つくるかねを以てねり合て。日

一どづゝ十日ほど付べし。薬を付候あいだは。つちゑをかふべからず。
一ねづのせいらいりうの薬かひの事。
一だうたけ見様の事。つねに身の氣をつめて。いきあひを内へばかりする物也。同薬の事。
田からしの根かげぼしくろやき。
むめぼしのあんにんをくろやき。
右等分に合。大鷹にはかうがいのみゝかきに三すくひ。同しやう。はやぶさに二すく〔衍字〕ひ。小鷹に一すくひ。但ゑつさいなどにはみぢんほどかふべし。さいじやう也。可秘々々。
一たかけの見やうの事。つねにたぶるひをして。いきあひをそとへばかり出す物也。同薬。
ころも革のすゝめかくれの時日にほし霜。
うどのねをかげぼしにして。野中のし水に一夜つけて。くろやきにして。
ちやうじをこにして。
右等分に合て薬の分兩まへのどし。これは日に一どづゝ五日ほどかふべし。かいにてはつちゑをかふべからず。何にても小鳥をまさめにつくり。なまぬるをもつてさつとあらひかふべし。最上也。
一いきけの見やうの事。つねにまたゝきをしげくして。かしらをふる物也。同薬の事。
せきしやうのねを五月より内にとりてくろやきにして。
もくれんじのかはをつくるかねに一夜浸霜。とりう(ウコロモチノヿカ)霜。
かんざうの粉。
右等分に合。かいやうはまへのどし。日に一どづゝ二日かふべし。最上なり。
一はなけ見やうの事。つねにたぶるひをして。

かしらをつよくふる物也。同薬事。
みそはぎの根をかげぼし霜。
くろごま霜にして。
はしふとからす霜。
右等分に合て。薬のかいやうまへのどし。日に一どづゝかふべし。
一もゝひきの事。薬。
ゆふがほのさね。いかにもかげぼしにして霜。
けんごしのかはをむぎ。
右等分に合。くすりのかいやうまへのどし。日に一ど五日かふべし。
一なかじゝにあたりたるには。ほこ木にせきしやうをまき付ておくべし。五日程おく。内薬事。
ぎぼうしのわかき葉をかげぼし霜にして。
せんぎう粉にして。

右等分に合。薬分兩まへのどし。日に三どづゝ三日かふべし。
一羽みだれのみやうの事。身よりたゝさきによらず。はさもちこぼす物也。同薬事。
五つはのつるをかげぼしくろやき。
いゐなもみのみをかげぼし同。（み脱歟）
じゆずたまの同。
右等分に合。二兩の内へかんざうを三分粉にして加へてかふべし。かいやうまへのどし。日に一どづゝ五日かふべし。
一はふといふやまいの事。身よりたゝさきによらず。はなとをもちこぼす物也。又はそうの身をもはらして毛をたつる物也。又はくちよりあわをもふく物也。
同薬事
さねかづらのねをかげぼしくろやき。
すげのしろみばかり日にほし同。

きこくのさねばかり同。
右等分。分兩まへのどし。
一ゑうとみの事
ひるものねばかりかげぼしくろやき。
をぐるまのねばかり同同。
かんざうこにして。
右等分まへのどくかふべし。
一わくものふきくすり
いちやうの葉。いかにも日にほしくろやき。
しこはうのねをいかにも同同。
ゆわうをこにして。
小のつちをこにして。あかつちの事。
右等分に合。みよりたなさきのはをふりわけてかけべし。日に一どづゝ三日ほどかふべしとあり。
一あしのはれけのくすり
田つぼくろやき。

くさ木のむしくそくろやき。
はまぐりのからくろやきにして。
右をの〳〵等分に合。つくるかぬを以てねり合て。はれたる上に付べし。
一いきれの付くすり
あんずのさねをくろやき。
田にあをしらみ草同。
あかにしのから霜。
右等分に合。ゑの油を以てねり合。日に一どづゝ五日付べし。
一つめのぬけて出ざるを出すくすり
たぬきの丸をかげぼしにしてくろやき。
山せみのはをのけて同。
わらんべのほそのを〳〵同。
一（か歌）うらたこのぬきぐすり
きり〳〵すの内のだうぐをとりすてゝくろやき。

かたつぶりのいゑをのけて日にほし同。
ろくしやをこにして。
右等分に合て。つくるかねをもつてぬり合。
日に一どづゝ五日付べし。但からたこ上ばかりの事なり。

一ちかふ鷹の見やうの事。つねに身のけをに(た歟)てゝふるう物也。但ほこにもたまらずして。つよくて手ぶくろをひく物也。同薬事。
川にあるかにの甲をのけてかげぼしくろやき。
つばめのはらわたをのけてかげぼしくろやき。
きりのみかげぼしくろやき。
右等分に合。分兩まへのどし。日に一どづゝ八日かふべし。

一はむしのくすりの事
はゑのうるかをとりて日にほしくろやき。
にはもゝの木にあるやにをとりて同。
うしのひづめをこそげて同。
右等分に合。はぐきをわりて。其わりたる中へふくべし。二日に二どほど。

一はみその見やうの事。とくかくみよりたゝさきのはをしめきる物なり。薬の事。
てんの皮。とり。霜。
うのそくろかげぼし霜。
ゆわうこにして。
右等分に合て。つくるかねを以てねばくとねり合。日に一どづゝ三日つけべし。

一しんき鷹の見やうの事。身よりたなさきによらず。毛をかき切る物なり。同薬の事。
なめくじりのとちをとりすてゝ。同うちへ
にんじん一分。同せんきう一分。同ちんかふ一分。
是を巾へ入てくろやきにに(衍歟)して。くすりの

分雨まへのどし。日に一ど五日かふべし。
一はをおこ（と歟）す薬の事
くち草の花をかげぼしにしてくろやき。
くりの木のほや同同。
石ばいをやきて。
右等分に合。分雨まへのどし。是をかひ候へば羽をおとす物也。此くすりはたかをとやへ入るときかふ物也。さいじやう可秘也。
一もちをとる事
かうじのはをかげぼしくろやき。
うるしのはを同同。
つばきのみをかわをむぎ。みばかりくろやき。
右等分に合。つくるかねを以てぬり合て。もちのつきたる上に付べし。つけて一日ほどをき候て。水を以てあらふべし。
一てんかう鷹の見やうの事
つねてそうの毛をたて。かしらをさげ。あはをかむ物なり。但まなこの内もあをくして。かしらをつよくふるものなり。
是はこいかつかりての病也。同薬事。
くろなまづ川の。かげぼしにして。野中のし水につけて。くやろきにしてもちゆ。
たこの八のあしを一寸かみきりて。かげぼしにしてくろやき。
しちくの竹の子をくろやきにして。
くろねこのくろやき。
右等分に合。薬かひやうまへのごとし。日に一どづゝ五日かふべし。
一がんなどに目をうたれたる時の薬の事。
やまぶきの花をかげぼしにして。つくるかねに一夜つけてくろやき。
せきしやうのはなをかげぼしくろやき。
ゑびづるの中にある虫かげぼしくろやき。

右等分に合。つくるかねをもつてねり合。日にほしてこにして。女のちゝを以てねり合。日に一どづゝ五日さすべし。同鳥のはをもつて付べし。

一つめのぬけたる藥の事

こいのいろこを日にほして。野中のし水に一夜つけて霜。

あしげ馬のつめを〔衍歟〕かげぼしくろやき。

右等分に合。ごまの油を以てねり合。つめのぬけたるあとへ一どづゝ付べし。

一くそ鷹の見やうの事。常にゑをも〔か歟〕かけてもやする物なり。但うちのいろはあるき物なり。これは一段わるきやまい也。同藥事。

きんせんくわのわかきはをいかにもほし霜。

ぶだうのわか葉を同同。

けいしんこにして。

右等分に合。分兩まへのどし。日に一どづゝ五日かふべし。

一鷹の見やうの事。はをとばうするとは。羽たけみじかく。いかにもはくきかすを申也。

一つちゑのつくりやうの事。ひらりとさくらゑにつくる物也。

かのしゝは　いとめといふ物にほそくつくるべし。

いのしゝは　まさめにつくるべし。

なまづは　かわをのけてこゞめゑにつくるべし。

ねこをば　大さいばいにつくるべし。

ねづみをば　小さいはいにつくるべし。

いたちをば　たゝきゑにつくるべし。

てんをば　さいめにつくるべし。

一鷹にかわぬ物には。

馬。　うし。　兎のさうの身。　たぬき。　さ

る。　むくいぬ。
是をいかたくかふべからず。
一鳥のうちにかわぬ物には。
くひまき千鳥。　あをしとゞ。　みそさゞい。　もず。　るり。　ひく鳥。　ひたき。
是をかふべからず。
一わくものくすり
いくちのかわ。石つきをのぞき日にほして。
いばら。しやうびのねをこにして。
あかゞねのせんくずやきてこにして。
右等分に合。二日ほどかふべし。
一いきれの薬の事
ひきがへるのだうぐをとりすてゝ。
かまきり。たうらうの事也。
たうごま。
右等分につくるかねにねり合付べし。
一せいらいりうすかしの事
一すかし
やくしさうのねをつくるかねに一夜つけて霜。
くろがねのさびをやきて。
ゆわうくろやき。
せん大わう。
各等分。
右大鷹にもみゝかきに三ずくひ。はやぶさに二すくひ。はいたかに一すくひ。つみ。ゑつさい。さしば。
このりにはみぢんほどゑにつゝみてかふべし。
是はしくあてしたる鷹にかふべからず。いかにもこゑたる鷹にかふべきすかし也。
一くみぐすりの事
さるのかしら野中のしみづに一夜つけて霜。

むかでのあしをのけてほして。
右等分に合。薬のかひやうまへのどし。
一山のだうぐさはきの事
根ぶちを二つにわりて。長ケ(サ歟)七尺六寸の物也。
はなかへ(く歟)しのを一尺八寸の物也。二すじ合て三尺六寸の物也。
ゑつゝみの事。大鷹のは六寸。あみふは六ぶの物なり。
一しやうみこをなわになふて。あみふはをゝあをく染て。
一いぬやりのつくりうちかひの事
すげをやわらかにうちて。三ッくりになふて。長サ一尺貳寸にあむ物也。同あみふ十二。ふつくるを二尺六寸。あわせて五尺貳寸。
一ゑまないたのはゞ一尺貳寸。長サ二尺。

一ゑかうしの事。ひら木をうちおくりて。上をくろうるしにぬりておく物也。長サ六寸廣サ四寸也。
一段きらふ物也。上へあがるゝをばふみあがれ。ふみ上下へおるゝ事はふみくだれ。山の尾をばさむしろと云物也。上をばかならずかさと云物也。
一いぬの事。たかぜうよりしていぬやりにつかりをたてよといへば。さはきをはなしてやる物也。いぬをとめうずるにはおさへよと。せこ衆につかわうずることはゞかれといわうするには。山をうてといふべし。まてといわうずるには。ふみとめよといふべし。鳥のをちをば必つかれといふべし。
一す鷹をしたてべき事。三ふせばかりにみる(だ歟)れあしをゝさし。ほわをかのうちゆひて。少づゝもゝをひかせ。お羽とゝのへて。七日あ

りてかごより出し。やわらか成るほこに五日つなぎ。其うち少しゝをひきて。あすゝゑんけふ。ゆのかん心へてあびせ。もしあびずばだぶと鷹のぬるゝほどふくべし。犬がひくちゑにつかん時分しやうぞくして。七日にとりかうべし。まるはしの事。あすつかわ〔ん無〕へけふ七時〔ミ無〕まるはしかふべし。もし心おさなくてとらすれば。かさねてつぎの〔ハ無〕日まるはしかふべし。まるはしは野へはてんあしたかひたるもよし。かやうにしたつるの。よきとりかひしほどは。草木のうごくにも。はいり馬のけあげのつちのあがるをみても。鳥かと心へて。こぶしにもたまらずはやるをよきとす。此時は善あく日をきらはず。鷹はしほのまだしき時分にあわする事也。たとをるさになる十分〔心無〕のしほをすこすもたとふる。よく〳〵是をつへてしたつべし。す鷹はいかにもしづかにすふるをよきこぶしといふ。こぶしあらはればもゝなへて。犬なるとりにほゝよれてあしきさうなり。すたかしたてべき次第大かた如此なり。

一山かへりをしたつる事。鷹をよく〳〵ふせて。一時ばかりおきて。せんじ物にてたかをあらふ。せんじ物の事。

せきしやう。　おはこ。　ほしは。　ねづみのふん。　はこべ。

右よくせんじかんを心へて。小がしらばかりを出し。ふせながらゆにをしひてゝ。半時ばかりありて鷹をおこしてすへて見れば。まことに程をへてなつきたる鷹のごく。身の毛をさしゆるめて身せゝりをす。よきぞと心へ。すゞめをおしむき。たふ〳〵と見せて口ゑをかへば。なづけくすりをかふから。二三まいといふ薬を。みゝかき四ばかり三

つゝみ。すゞめのむねにつゝみてかふべし。又おもと草のねをゆにいだして。むちにてさひ〳〵かふ。もし此くすりなくば黒ねこの黒やきをかふべし。又あるせつには。には鳥のかしは鳥のとつさかを切りて。中のへた〳〵なるに。ゑんのみづがねを入て。口をすゞめのたるはにてぬいかふべし。是にもおもと草をさひ〳〵かふ。これ三いづれもよきなづけ薬也。鷹をあらふ事兩三日なり。内藥も三日かふべし。三日過てかへば鷹あしきとあり。かやうしたてゝくちゑにかゝらば。うちにて少づゝおきたてゝ。さうゐなくわたらば。人をのけて外にて二三どおきたてべし。たかをおく事三ど七どには過べからず。犬がい山かへりをしたてる次第如斯なり。

一はいたかつだふ事。さひ〳〵ざしきにてむちあがりをする事。はい鷹つかふべきやう是なり。又いき鳥をなげ出してとらせ。其時すゞめをおしむきて。とりたる鳥をこぶしにておしかくし。むちにてあぐれば。此くちゑをみて鳥をさげながらこぶしにあがる。ふる〳〵とかへばのち〳〵はさうゐなくもちあがりをする。鶉をへをにてつかふ事。くつわの水つきをにをる事。又まめの四方されずしてとをる事。しんぺんふしぎ也。是につかひあたらん輩は。諸神のかげ成佛とくだつともいへり。是を心がけん輩。老若いづれもつみあらず。

一はやぶさをかんにしたつる事。よひあかつきかたちとや木つなぎ。同ゑをほこにてかふべし。ゑの事。鳥たゝきゑにして。あしたのしやうべんを以てよく〳〵ほとぼし。是をしためずして。あすつかわんとすけふ八

時ばかりにかいて。ゑをおさんめひだ少しすゑまはして又つなぐ。かふべきすかしの事。

いなどをちや一ぷくばかり。同けんこし甘つぶ。是みやつゝみにつゝみてかふべし。

一くみぐすりの事

りんす。野草。ちや一ぷくほど。こふ子の死たるしたを百日かげぼしにして。さめにておろし。ちや一ぷくほど。あひつかわんとおもふこよひかふべし。此薬は何れも一薬也。此うち上下あるべからず。二種共に合れば薬つよくしてあしき事あり。はやぶさにあひのゑといふ事あり。自然ばけんい鷹よはくして鷹にはやらぬ事あり。其時すゞめを三ばかりつくりて。しのはにつゝみ。是をかいてすこしおせば。鴈にあはする。かならずくむ。はやぶさの二鷹つかふべき次第。一ほこに大小つなぐ。ゑをも一ゑからしほそのをゝゆにひたしてゑをあらひ。七日かふべし。すかし同くみ薬の事は何も同く。はやぶさのなづきかぬるに。あぶらをつかする事あり。一よき茶一ぷく。一おしろい半ぷく。一かたしほ半ぷく。一うつ木のあまはだ薬一ぷく。此四を丸して。雀のみにつゝみてかふべし。かふべきは分あした日出比にまなこうる〳〵と成て。さひ〳〵たぶるひをす。そのときたゝみのうら木つなぎ。びやうぶをひきまわし。しづまりて見れば。口よりこきあぶらをつきあげてのち。ゆをたび〳〵かひて。三時ばかりありて。雀を毛ながらきざみかふ。かやうにしたてゝつかへばにぐるかたし。此時もしゝ□めてちかづく。しよせんなし。はやぶさのねりつき薬是なり。

一目にくの事。まなこよりあかきすじおひ出

る。たまにかゝればれう治かなひがたし。薬の事。
べに。　よきちんこう。
右是をすに合て三日さす。いかにもめたき〔つ脱歟〕水にてまなこをあらふをやうじやうの本とす。

一目わくおこるを治する事。はじめはつめにてめをふさぎかく。こうすればかたさきにて目をすりつぶす事あり。薬には。
大とも。　わし霜。　きわたのこ。　ちんかう。
見〔是歟〕を合て三日ふ〔ま歟〕なこにふけばよし。くすりさん〔す歟〕まへに。つめたき水をまなこにふけばよし。
ゑをゆにてあらふ事あるべからず。此やうじやうひやすをもつぱらとす。灸所目のまへのつじ三火づゝやくべし。

一たとふる鷹をしたつる事。いのしゝにてしゝ〔ろ歟〕をかひあげ〔討歟〕けて。くらきとやに二七日つなぎ。そのゝちすへ出し。しゝをひてよきほどになれば。角鷹ならばにわとりのかしわ鳥をなげ出し見する。これはもとより吉なり。もしいまだ心なくば。其鳥をおしよせ。すゞめに二ツばかりかひて。それをおしはらはん時分。かふべき薬の事。
わらびのはな。　せきれいのはい。　りつすのはい。
右等分に合。すゞめにつゝみ。角鷹には三つゝみ。兄鷹には二つゝみ。是をかひて又うちこめてあかりも見せずつなぐ。あすあは〔ど歟〕せんよひ過がたに。すこしせうべんを二にばかりかふべし。かならず鳥にはやりの心あるべし。其時鳥は大小をきらはず。たとへとらずといふとも。かならずひかずしてあわ

する。もしひきたらんは二どゝはいる事かたし。此心得をもつてたとふる鷹したつる。大がいかくのごとし。

一とりしらみたる鷹あわする事。廿日ばかりきりかひて。一向あかりをみせずつなぎ。そのゝちすゑ出し。しゝをこしらへて。鳥を見する時分かふべき藥。

いたちのほね。　の草に。　五はつさうをみぢん程くわへて。兩三日此くすりをかひしめて。一兩度おきたてゝ。野に出る時分。人のゆびの血を一露ばかりゑにぬりて。口ゑにかひて。うちを三しりばかりつかせてそふ。田の水を一くちかひて。半時ばかりすゑまわして。物ごしに鳥のすがたをみせ。はやらばあはすべし。鳥に見するならひあり。しらむ鷹をさしむけて。ありのまゝ見すれば。鷹の心おくれてはやらぬ事あり。いかにもほの／＼と見するを肝要とす。はやらぬになげ出す事あるべからず。又ひく事もあるべからず。此心得をもつてしらくる事也。

一どうけ〔め黒〕を治する事。どうけはさひ／＼口なつくりをし。穴毛をさひ／＼にたて。たぶるひをせんとみへて又ひきさす。是をどうけと心得て。もろ／＼の藥かふべし。

二たん。　人じん。　金のせんくづ。　すげのね霜。　きつねのきも。　あかいぬのきも。　あまがいる霜。　ふるおけのかわ霜。　しかのまこごの霜。　りつす霜。　かんざう。　よきちんかう。

右どうけの藥おほしといへども。此藥よき藥也。このもろ／＼の藥をかふといへども。鷹をひやうたらんはかなひがたし。とはゝする事もひせつなり。鷹をはたらかぬを第一のやうじやうとす。此くすりはいづれも

一藥といへば。灸所はつぼうしにあり。いづれにても三色ばかり合てかふべし。ゑをかふ事。一度におほくかふ事あるべからず。ゑをあらふにも。よく〳〵しぼりてかは〳〵としてかふべし。ゑに水のこればどうけに寂上のどくなり。

一どうたけの事。へいぜいは鷹に見ところなくして相違なし。とばひてしばらくいきあひあらし。又鳥にあわする時も。はじめより尾羽相違なく。とり二め三めより少づゝよわく。おふのちはけつくおひとまりて木に居てはおけ共。そこつにわたらず。是をどうけと心得て。先よきゑにてしくをくれあけ。しばらくやすめてかふべき藥の事。

金のせんくづ。　じやかう。　よきけとくも。くるしからず。じやかうの事はよき藥といへども。しぜんわろくつゞきて。鷹あぢわひてゑうとみする事あり。是もゑをなましぼりにしてかひたらんは。此藥のしよせんあるべからず。灸所は左右の羽のおりめのふしぎわを火しん(針)にてひる(蒜)をしき七火やくべし。二七日のあゐだに灸三どばかりすべし。三ど三どめをばさのみあつくやくべからず。此藥かわん間に。あらひるをこまかにきざみ。日び一どづゝ三七日かふべし。此やうぜうの間。鷹をはたらかすべからず。

一とやのおち藥の事

夕がほの中のさねのみ。　とりう霜。

右等分に合。つばめのむねのみをおし合。同つば(衍歟)はめにてつゝみてかふべし。此藥かふ時分。つきめのおちたる時分。七日目に一度づゝかふべし。しばらくありて又毛羽の半分おちたらん時分七日かふべし。はや大がいおちたらん時分七日かふへし。是三七日

より外にかいたらんは。かならず又おとしてあしき事あり。此薬をかひたらんは鷹に最上の薬たるべし。よつてせう〳〵のやまひはとやの中にてしそぎ。羽しやうもつよく。尾羽の色もいかにもぬれ〳〵とあるべし。そうじて夕がほはたかの第一の薬なれば。必夕がほのあらんほとりに鳥屋をうつといふ事。古人のいひおけるなり。

一いきるを治する薬

あかいわしのわた。　女のかみのおちの黒やき。　きぢのめん鳥のとしりのあぶら。

是を同ごまの油にてときつくる。鷹とはゝする事あるべからず。又あるせつに。いのしゝのあぶらにぜんまいの黒やきをねり合付る事あり。

一ゑちがへを治する事。ゑちがへは薬なきといへども。そうやくをかふべし。そうやくの事。

人じん。　かんざう。　ちんかう。　やくしさう。　かつほぶし黒やき。

右是をよくし合て。わらびの花をねりて此薬を丸し。上にきんぱくを衣にかくる。丸べきせいまめほど。角鷹に三りう。兄鷹に二りうかふべし。此薬何やまひにもあたるによつてさう薬とす。ゑちがひの鷹に此薬を加へて。古のせいしやうにたまりたる水を一どかふべし。あまりにつよきくすりなるによつて二度〔か欠〕とりわす。

一鹽をやくべき事。海なるかたしほをとり。いかにもよくこまかにすりて。はこべをこくもみて。此しるにて何十度もあへて。よくほしすまして。なまたけのよに此鹽を入て。同じく野草のされたるをうちくだき。このしほにまぜて。七日火をけさずして。くぬ木の

なま木にてやく。火の少もきへぬやう。きへたれば此藥きかず。此鹽をかふ事。山かへりのなづきかぬるにもよし。又うちのつまりて。くそをつきかぬるにも是をかふ。とりわけどうけによし。但しほをかひて皮湯をかはざれば鷹くたびるゝ事あり。諸病に良藥也。度をかさねてかふ事あるべからず。おほくは三度にすぐべからず。七日の內に兩三度かふべし。

本云。文安〔後花園〕四年仲夏日。御所鷹飼波多野筑後守以自筆本寫之畢。

豐後守尙政在判

永祿元年六月三日。備好景大德筆寫之。

一色內藏助親行判

此書不知何人所著。後題云々。豐後守尙政。內藏助親行。其人未勘。意室町氏近臣乎。古書之傳者。寫得於其時者乎。或其時成此書乎。未審。凡記事以假名字。寫手惡拙。應知訛謬之多焉。盖聞鷹鶻之所産。絕域殊方。峻嶺深谷。人跡稀到之地奚〔矣〕。此書所記。人爲難製之食。加之藥材調製。其初何人試其功驗有無。而後錄之以示後人。其事可疑。雖然造語頗古樸。可觀非後世僞古之比。若夫事之虛實。用之有無。臂蒼牽黃之人。能辨其是非。吾輩不其人。々々々々々。辛巳秋世恭識。

近衞東求院入道殿下鷹百注云々。

鷹の名所多く記錄し。相形圖にて淸來秘藏の書也。見る樣。取樣。鷹の能惡。大諸病灸所迄しるし置也。見る樣取樣の事は。秘密の條々をば淸來養性之部とて。藥飼。肉むけ。餌飼。作る餌の次第。病の名見分樣注之書。尤

重寳也。鷹の秘書不可如之。其上に口傳多之。此說此書にヤヽニタリ。或ハ是ナランカ。可考。書ニ題號ミヘネドモ相形圖ト云ベシ。此百首跋幷奥書アリ。跋ハ略シテ其奥書ヲコヽニ抄錄ス。

右愚詠鷹百首者。秀吉公幷家康公依懇望之染禿筆。外見雖令停止之。山岡主計頭深執心之上書寫者也。固鷹道悉相傳之而已。

于時慶長十年霜月日　　龍山在御判

跋ノ奥書。天正十七年卯月仲旬龍山作トアリ。秀吉公ハ慶長三年八月十八日薨ジタマヘリ。後ノ奥書ハ此百首山岡主計頭へ書寫御免許ノ時再書ナシタマヘルナランカ。是ニテ年月相違ノ不審ナシ。

文鷂鷹書云。ほつせの露とは。いぬの上にたまる水なり。子つぼの水とは。五子のみとをよくらんこきに入て。なしをきりひてヽいだして其しる取。どうけの藥をかふべし。ひつぼの水とは。あかつちをくり程に丸めて。四五日火にやきて。ちやわんにあつきゆを入て中へ入て。其しるを出して餌をかふべし。子つぼのあかすひの水とは。女の廿より内の月すいをいふ也。但はじめの月すいなり。よりとるさはの水とは。廿より内のをんなの媱なり。

小笠原鷹書云。ふるきどすとは雉子の男鳥を云。大海の中薬には。鮑の新敷を赤腸を取て陰干にするを云。さりつぼの水とは。梨に木の切目に溜りたる水也。こはほの水とは。榎の切日のくぼき處にたまりたる水也。紅の水とは月水也。忍ぶすの水とは。女の交合の水を云。石しやうとの名とは。五りんの中

に溜りたる水なり。

鷹の上毛とは左の羽。下毛とは右の羽なり。青羽とは新敷羽。染羽とは古き羽なり。さくらい羽とは古き毛の殘る也。屋形尾の鷹とは十三尾の鷹也。

夜飼の衣。鷹の毛所也。ねとり飼とは。鷹の鳥を差おはぬ時。死ニ鳥を取出し飼申を云也。もゝ口とは口餌の事也。志餌とも云。人毛と申事。是は紫鷹に限有之也。すてかひ鳥とは。山にて餌を落しこふを云也。わすれ飼と云。鷹の鳥屋に入前に。取飼くはするを云也。

鷹の尾の三ッ目をなら尾と云。又へをの事をも云。四ッ目の尾ならしば〔と歟〕と云。又鷹に物をおしふるをも云。木な取ニは小鷹の木に居を云。大鷹をば木居鳥と申也。朝とがりは四ッより前。夕とがりは七ッより暮過迄也。

北より南頭に合するは順の鳥と云。南より北へ合するは逆の鳥と云。くひな飛とはこたちするを申也。切立鳥とは鳥の足音を聞て立上るを云。小鳥のこあがりは赤しとゞ。こははかまは雲雀也。田もの指とは水鳥をかけ留る也。泥板とは餌まな板を云也。とゞろきとは〔季歟〕餌板を云也。鳥柴懸とは春は梅櫻。松は四角に用ふ。くら柴とは萩を云也。位の鳥とは五位を云也。犬のさかくりとは犬の鳥を失て跡に歸るゝを申也。やり繩とは馬上の犬引時の繩也。さはし繩とは犬引の引繩也。

續群書類從卷第五百四十六

總檢校保己一集
男源忠寶校

鷹部六

責鷹似鳩拙抄 持明院十卷書之中

鷹の名之事

まかだ國にては　　すん大といふ。
きいたんこくにては　きせんといふ。
しんたんこくにては　こてうといふ。
はくさいこくにては　くちんといふ。

鷹物之具寸法之事

一鷹をつなぐやう。大鷹は七むすび。兄鷹は五むすびなり。ほんしき此分なり。いまはたゞれいしきつなぐべき也。

一ほこのたかさ四尺一寸。きりくち三寸。ほこの長さ七尺八寸。五寸とも有ふたつたかのほこ一丈二尺。ほこのぬの四尺八寸。ひろさ三尺二寸。ほこのもと鷹の右になるべし。

一かりつゑはぬしのたけにくらぶべし。いぬかいは我目のとおりにあてがいてきるべし。たかじやうは我かたとおなじくきるべし。

一ほこにたかつなぐ事

大鷹はほこのもとに。兄鷹はすゑにつなぐべし。

但ほこぎぬを付るつぼがねをうたねば。

大鷹をうらに。兄鷹を本につなぐなり。故
實なり。

一あしをの事
大鷹は六寸六分。兄鷹は五寸五分。鷂五寸
歟。

一鷹たぬきの事
ながさ四寸八分。ひろさくち二寸七分。へりのひろさ四分なり。たゞし大かたぬしのうでによるべし。

一大緒のくけがわの事
左右へ二寸五分。兄鷹は二寸一分なり。はい鷹一寸八分斗也。

一大をの事
大鷹は六尺六寸六分。兄鷹は五尺五寸五分。はい鷹は四尺八寸なり。いづれも二へにとりての事なり。其ほかちいさき鷹どもははからいてすべきなり。

一はい鷹のくけかわの事
ひだりみぎへ二寸二分なり。

一こつちのをの長さの事
大鷹は三寸一分。兄鷹は二寸七分也。はい鷹は二寸一分なり。

一みゝずかわの事
大鷹は二寸三分。兄鷹は二寸一分。はい鷹は一寸八鷹なり。

一むちのながさ三尺一寸。兄鷹は三尺。又いづれも二尺五寸。

一はい鷹のむち二尺八寸。
但此說ありといへどももちひず。小鷹はむまにてつかへばむちながし。大鷹はみじかし。はい鷹は三尺一寸。あるひは三尺二寸。大たかは二尺五寸又は二尺八寸と云々。又むちはかたかへりよりこそぐる也。鷹小鷹同前。

一ひねりはながさ七尺五寸。又五尺二寸。又は六尺五寸と有。

一うさぎの山をの事

藤にて四ゑだをうしろあしをまへあしのあはいへ入て。左のあしのかたにてとむべし。かけやうは。二まきまきて。しぼりむすびにむすびて。うへをばそろへむすびにして。下を六寸に結すびて。うへを四寸にきるべし。

一おなじくくはせの事

もくときは左のべにしゝをかうべし。

一鳥の山をの事

おんとりは五寸。むすびめよりうへ一寸八分。めんとりは四寸。むすびめよりうへ八分。いづれもまるふちにてかけべし。かけやうは。まへにて二むすびむすびて。すゑはそろへむすびなり。めん鳥はおんなむすびにむすぶべし。又おん鳥は六寸。むすびめのうへ二寸五分。めん鳥は五寸。むすびめのうへ二寸とあり。むすびやうはいづれもおなじ事也。

一田物にはなわにてうしろへかくべし。田物のときは田をといふ也。

一うづらはさむ竹の事

長さ五尺二寸。あひを三寸ばかりづゝのけてはさむべし。十づゝはさむ。又は七もはさむなり。是を一さほといふなり。とりよりした一尺五寸なり。竹のきりやうは。まりをつくる木のごとくきるなり。かみよりにてかたわなにむすぶなり。ふくさのかふみねりなり。口傳なをいろ／＼あり。とりかいたるうづらをば。さきのこりの鳥にむかはせてはさむなり。ことりほねをぬきてはさむ事も有。とらでむかはせつくるもくるしから

ず。
一ゑぶくろのたかさ四寸六分。くちおなじ。
一がんのくわせまるをかはず。つねのくはせよりはあげて。むなさきをかんじのせいほどまろくかふづし。鷹には田をゝばかけず。又田をゝかけくわせをする事もあり。雨様なり。
一しぎのくわせはうけかひをかふ也。
一しぎをばしりゝとたつといふべし。
一うづらをばひつとたつ。
一ひばりをばひりゝとあがるとも。又ひりひりともいふ。
一きじのおんとりをばふつ〳〵とたつといふ。めんとりをばほと〳〵とたつといふ。
一千鳥のくわせ秘事也。
〔此間數行闕〕
あらん所をあらふなり。是もこゑたるにかきをきりてあらふべし。
一同藥。ゆわうとまつかうと等分に合て。しらみのある所へ。筆のぢくにて。それにもうせずば。ふせてあたゝかにして。あたらしきわたをむしりて。能よく包みておくなり。
一打目藥の事
はこべをもみて。目に細々にぬるべし。其後にいかのこうをおろして。筆のぢくにてふくべし。
一いられ藥
よもぎのね。いばらのね。いのこつちのね。是をせんじてかためて。あつき〔さ歟〕半分程にかためてかふべし。
一鷹を鳥屋へ入べき日の事
四月八日。四月十三日。五月五日也。又或説四月一日とあり。其外に入は吉日を撰て入べきなり。

一出す日の事
七月十六日。同廿日と云々。其外又吉日をえらぶべし。

一わすれかいといふ事
四月八日に南へ立めん鳥にとりかふて。鳥屋へ入をいふなり。

一荻に鶉を付事
二本のあはひにはさむ也。すゑのほをばきらずしてそのまゝおくなり。もとの鶉よりした一尺五寸。切やう竹のごとし。かうみねりにても。又かづらにてもゆふなり。かみよりはかたわなにむすぶなり。かづらにてむすぶ時は。まむすびにして切なり。

一きじの山をゝ三寸斗に。おん鳥めん鳥ともにして。うへをばまむすびにして。ほどけぬ程にみじかくきる事もある也。又むすびめよりうへをおん鳥は左へ。めん鳥は右へなびくやうにむすぶなり。是はむすびよりうへの二寸五分。二寸などと。前にかきたる山をの事なり。

一鷹のうちたる薬の事
へうたんのくろやき。ふるおけのかはのくろやき。りうこ錢をやすりにておろして。いづれも／＼等分に合て。かうがひのみゝかきに二すくひほど。

一鷹のふの名事
しぎふ。うづらふ。ふぢふ。ひばりふ。是は小鷹にあり。

一鷹のしろの見ところの事
らんひのねしろし。四毛にふくりんふかし。羽すぢしろし。ひしやくはなふかし。あしのがんぎこまかに。いろうづらのあしのごとし。目の色うすし。羽うら白し。

一白に色々あり。ゆきしろ。あをしろ。あか鷹。

しろみ同。す鷹にしろあるべからず。白ははくさい國の鷹なり。かうらい鷹なる故なり。

一鷹にねとりかうといふ事
野に出て鳥をとらせて。いたづらにかへる時。いき鳥をもちてかうをいふなり。

一ますかきの羽の事
谷わたしの羽におなじ。たゞし谷にてなけれども。もちより林へとびわたる時もあるべし。

一鷹の大緒の寸法。又一説五尺六寸二分。是をば四尺五寸二分なり。

一兄鷹は四尺六寸三分。是は三尺七寸。ふさをばこの内へは不入候。

一かり杖の事。
主のみゝのひくにあてがふなり。梅木本なり。犬かひのかり杖は。主の目のとをりなり。せこは我たけなり。

一犬のはりなわ一尺五寸なり。

一さいとりさほのすん一丈五寸。

一人に鷹を見するやう。くちゑにかけて出るなり。をきなをして身よりを見せて。其後たなさきをみせて。其後むちにて尾をすゑべし。くちゑにかくる事は小鷹の事なり。大鷹兄鷹などはくちゑにかけぬものなり。

一足緒の寸。或説大鷹は五寸五分。小は四寸五分。

一山をの寸おんとり六寸。うへ三ふせ。めん鳥五寸。
うへ二ふせ。まろ藤にてかくるなり。結めおん鳥は左へ成やうに。めん鳥は右へすべし。
切様。そぎて刀を返なり。

一鳥のかけやう。春冬にかはるなり。春はめん鳥をさき。冬はおん鳥をさきにかくるなり。

一鷹をすへあぐると申事は。鳥をひきくたて

たるを。たかき所よりあはすを申なり。ほこよりすへあぐる。鳥屋よりすへあぐるなどゝ申べからず。

一尾の名の事

数十二枚なり。或説也。

一すゞつけ。　ちから尾。わき尾とも。たすけ共。

一ならしは。ならはとも。なりぬうとも申。

一ゑひき。　一すけお。

一いしうち。

一しのぶ尾。是はしのぶの鷹の事也。しのぶ尾はふの切やうたてさまなり。

一屋かたおと申もあり。ふの切やう別にしるす也。まねび尾などいふもあり。是はその物にあらざるをまねび尾と申なり。

一ひさわと申。(毛無)鷹の尾さきのしろき尾なり。さごろもと申けかたに一とおりあり。くすはれと申毛あり。わきにあり。ふぢばかまと申毛あり。

一夜をける鷹わきにあり。さゆるけ。是も同前なり。

一もちにげといふ事

鳥をとりてかたかげへにぐる事をいふなり。

一はやぶさの取はねと申事あり。風にふかれてとりえぬを申也。風ながれとも申也。風ながれの事そうじて鷹にあり。

一山歸ののぼりはねと申はねあり。是は山へのぼりさまにはやくとぶを申也。逸物成べし。

一ほしけと申毛あり。つねにはなし。

一かりつゑと申事はきりの木なり。ほんの物。

一もちふと申毛あり。鷹のそばにあり。

一はつかりと申事は。九月九日に鳥屋をいだして。南へたつおん鳥に取かふ事なり。

一山歸の鷹をあみにかけて候とも。ほそかけと申べからず。やまかへりと申也。

一うづらふしたふと小鷹にあり。

一或說。ほこのすん横七尺。くち三寸。高四尺一寸。

一或說云。足緒大六寸六分。小五寸五分。

一或說云。むち三尺三寸。小二尺七寸。にんぢん。かんざう。てん。しろがね。六〔本ノマヽ〕かくかんはるまつしち。

一雪しろの鷹と申事あり。尾をも羽をも雪にすぐれて候を申也。

一おきゑすりと申事は。鷹ゑをぬすみて。別に又うちあがるを申。かりばの事なり。

一そくそむると申事は。風にむかふ時を申。さてそめたるとは申なり。

一さるゝと申事あり。鷹のしぬるを申なり。

一草に見ふする鳥ゆるぎぐさ。おぼえぐさ。くさほ鷹。そでぐさ。とりの下ぐさ。ふしぐさなど申事あり。けはなちらすといふ事もあり。是は毛をとりちらす事歟。

一鷹のふに。とふく。ふぢくろふと申。是は鷹のむねの邊にあり。

一鷹のもどり羽うつと申事あり。鳥に合する時。鷹とびちがひて候時。やがて鷹飛なおりて鳥をとる。それをもどり羽うつと申なり。是はつねにあるべからず。逸物なり。

一おきゑをひきそばめてといふ事は。あら鷹を取かふ時の事なり。

一鷹につらふと申事は。鷹をいたはりて。またみゝのかざりに。足をのもと色々のにしきしやきんをかさねてさす。それをつゞりをと申也。

一とまりがりと申も。鳥山と申とおなじ心な

り。

一鷹の尾の名

鈴つけ。　たすけ。　せまち尾。　ならしは。　石打。　小石打。

一説に。小石打をばしはひきと云なり。

一爪の名

うしろのつめをばかけつめ。まへの爪をばうちつめ。(一説にはゑはみの爪ともいふ。)なかの爪をば　とすへ。そとのつめをばかへるこ。

一鷹の目のくすりの事

ふぢを手一そくに切て。三ばかんざう少入てかうべし。ゑをあらいてもかうべし。しうせきとはかわらけにしとをし入て。火の上におきそいりつけて。此せんじ物を入てかうべし。妙也。

一鷹のあを薬の事

やくし草とはこべをしほにまぜて。竹のつゝに入てやくべし。其後こまかにまつして。にんじんかんざう少入合てかうべし。鷹のそうやくなり。

一鷹の薬の事

げんじのうす色と名付薬也。かんざう半せん。ししのふくろつの三せん。くろやき。いづれも〳〵さいまつしてかうべし。たぶるひせず。ゑうとみ。身をすくむるに能薬也。

一鷹の羽虫の薬の事

ひて。くまのゐ。かわにな。びんらうじ。此四色を等分に合て付べし。羽のねをわりても入べし。

一鷹のほねおれいたむを治する事

あかゞねのせんくづをかうべし。のみむしをかふ。又ふるおけのかわをくろやきにしてかうべし。

一どうけの血をくだす薬の事
かまのやけたる土。とくさのくろやき。はこべのくろやき。てんのくろやき。しろいもの。此五色を等分に合て。ゑにつゝみてかうべし。其後あを薬を飼べし。

一いきけの薬之事
どうけにもよし。藤こぶ一分。にんじん二分。かんざう少。等分に合てゑにつゝみてかうべし。

一ゑうとみの薬之事
かんじの木のねを粉にしてかうべし。又ゐのしゝのあたらしきをかうべし。

一鷹のしろくすりといふ事
あけびのみをほして。さねとかはとをのけて。

一ゑこひのがるゝ薬之事
川にあるかにをかうべし。

一ちうぶの薬之事
雨露にあたらぬさゝの葉をくろやきにして。桑のほやに合てかうべし。くわのほやもくろやきなり。

一なづけ薬之事
あしげ馬のよめ。よるとるさはの水。千鳥。尾長鳥。かみのあか。あしげ馬のきば。いづれも〳〵あらんにしたがひてかうべし。

一尾羽をとむるをいだす薬之事
からすうりのねをこにして。くわのはりに付てさすべし。久しくなるをばそとさしわりて入べし。

一五日七日になづけてつかふ事
おなが鳥をくろやきにして。ゑにつゝみてかうべし。それなくばくびたまちどりをもかうべし。妙也々々。

一鷹のねすみはみなどしてゑもちたるを。當座にうたする薬之事。人のかみの虫をかうべし。

一どうけの薬之事

にんじん。かんざう。おもと草くろやきにして。あかねのこ少入て。此四色を合せてかうべし。

一ちがひ薬之事

なのはを能〱もみて。しるをしぼり出して。そのしるにふぢこぶとゆや・なぎをきざみ入て。能々せんじて。鷹をふせて能々ゆでべきなり。

一鷹のうち目の薬之事

まづはこべをもみて。しるを能々ぬるべし。其後いかのかうをすきたうさに等分に合て。筆のじくにてふくべし。

一つき目の事

あをはととちとをそくいにねやして。目の中へ入て。馬の尾にてぬひふさぎて。三日四日おきてとくべし。

一足けの薬の事

まづはるゝをば針にて血を取べし。其後よき時にかもしゝの角をおろして。よきすにあかゞねのどくを出して付べし。又それにわろく候はゞ。いぬたてをかげぼしにして。よきすにあはせてかうべし。

一どうけの薬之事

しゝの角をこそげてと。てんなんしやうをかげぼしにして。ふくりやうと。此三色を等分にして合てかうべし。

一羽のおれたる薬

白きゑのみ。ゆのは。かみのいろこ。かぶらぜに。これをかげぼしにしてかうべし。

一なづけ薬

たけり草。よるとるさはの水。あふち。いもりのかげぼし。かもしゝのつの。是を等分にしてかうべし。

一かけらぬくすりの事

まるすゞめを毛ながらたゝきてよひにかうなり。又あしたよりまへに五八さうを三くちかうべし。

一雁にくませ薬

いなぐきと又すゞめのはしをくろやきにしてかうべし。

又田にあるみゝむしをかうべし。一くすり也。

一いきりの薬

ねこのみゝのちをとりてさい〳〵にぬるべし。

一ゑにわろき物ども。はと。もず。けらつゝき。いなかひたか。たぬき。さうなくかふべからず。には鳥もわろし。

一よき物は。ねこ。ねづみ。しゝほしてもよし。いしかめ。どうがめをばかはず。

一足のやうじやう。田にあるあかき水をとりて。しほを入て能々せんじて。さい〳〵にぬるべし。

一夜とるさはの水とは。竹をふしをこめて切て。わさわらにてうへをつゝみて。とうすの水に百日つけて。其後あげてたまりたる水にて薬を合かふ。是をかくいふ也。最上の秘薬也。

一あしのはれてこぶになりたるをばわりて。あくちを能々さらへて。うるしのあぶら。ひさけたるしるに能々合て中へ入て。くらき所に置べし。

一しりのふさがりたる薬。かみよりをして。あぶらをぬりてしりへさすべし。其後すかし

薬をさいさいにかうべし。
一鳥屋出す時。つちゑをさい〳〵かふべし。
一鳥屋のゑによき物馬牛也。可秘なり。
一惣薬によきはむつけたる時しろがねをこそげてかうべし。げどくそうじてよき物也。
一七月のせみをくろやきにしてかうべし。どうけの薬也。
一土用のかつほぐさをとりて。かげぼしにしてかう。どうけの薬なり。
一惣薬にはほらがいのわたをかげぼしにしてかうべし。妙なる秘薬也。
一木つぼの水の事
ゑんじゆ。ゑの木。桑の木。是は木つぼの水也。又こつぼの水の事。竹のきりかぶの事也。しちくの水よきなり。又から竹の水はむつけ鷹にかふ也。
一足をひきはらしたる時の薬。どくだみをすりてよき酢に合て付べし。はれたる上をゆやなぎのあまはだをあたゝめてさするなり。
一羽をかきたる薬
しほをよくあたゝめて。ほそきぬのにつゝみて。さい〳〵にむすべし。
一羽うちたる薬
から竹をきりて。中にしほを入て。わせわらをたきてせんじ。竹の口より出るいきをいたむ所にあてゝ。さい〳〵にむすべし。
一かしらをやむ鷹は。うしろをみてはなよりしるをたらす。それをばあをはしのねを三くさ必やくべし。
一大かぜをやむ鷹は尾をひろげてすくむなり。それはこしのうへを三くさやくべし。つぼは五所なり。●●●●●此ごとくなり。
一目をやむ鷹は。目をふさぎて。はなよりしる

をたらすなり。それをばちきやうのかどを三くさやくなり。

一腰をちがへたる鷹は。べつそくのねを三くさやくなり。雨をやくなり。

一どうけやむ鷹は。りやうの羽のねを三くさやくべし。わきのした三くさ。•••此ごとくにやく也。

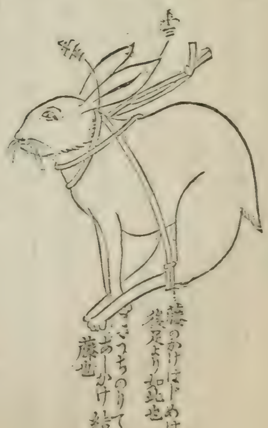
一犬のはのあたり所には。かし鳥の血をとりてさいさいにぬるべし。

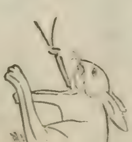
一内をすかす薬

よき茶にしほを少入てかうべし。又しろき米をよくかみて。そのしるをかうべし。又ばなうちをすかすには。たかなのはをちぎりて。くちゑにつつみてかふべし。

一しらみの薬。にがきといふ物をせんじて。しらみのゑにつゝみてかうべし。

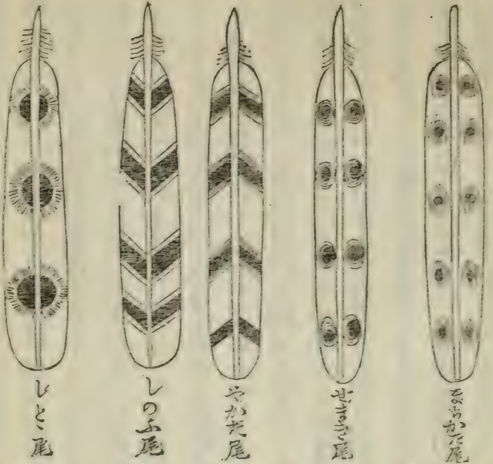
此ちいさき兎二つの山緒うしろ足の間へかしらを入て。くびとあしとを二巻まきて。鳥のごとく上下ともにむすぶべし。まへ足はうしろ足のそとになるべし。但しりをかくすとてうしろ足の間へ入るといへり。又兄鷹の兎をば。鳥の如くむすびめをかけて。大鷹のをはくびぎはを縄ゆひむすびにして。頭と足の間にむすびめあるべし。又大概は前の







如くにて。後足のふし上ばかりをむすびて。くびにかけずしてもかくる也。又兩樣あり。但他流なり。



此外かはりたる尾をばまね尾といふなり。

鷹之書（註）此書も所持之抄也。旅宿のため抜書に注之。秘する抄物也。仍有之抄に附加者也。

一神社奉幣のために鷹を奉には。架を社の左の方に。かぶきの木を社の方になしてつなぐべし。つなぎやうは常のごとし。大緒のふさを逆にする事を殊に禁べし。鞭餌袋は宮司に渡すべき也。常のごとし。又鷹の祈禱のために參詣中つなぐ事有。つなぎ樣は小鷹つなぎなるべし。

一架のたかさ四尺三寸一分。かぶき同。柱のふとさは二寸三分。かぶき柱より外にあまる分四寸八分。惣の長サ六尺二寸。臺のたかさ五寸六分。おもてのひろさ六尺二寸。だいのたかさ五寸六分。おもてのひろさ六寸六分。おもての兩のはしをおとすべし。長サ二尺五寸二分。かぶきにつぼがね四ツ。はしらに一づゝうつべし。下のよこ木は臺の間にして。はしを臺のうちにさしとむるなり。作木

なるべし。二架の長サ一丈一尺六寸。つぼがね五ッ。柱のつぼ同前。鷹は本。兄鷹は末につなぐべし。坪がねうたずば鷹末につなぐべし。架（鼓イ）の木は檜柞をほんとする也。

一架布敷は柱の間にしたがふべし。竪様にして三尺三寸二分。上は竹にぬいくゝみ。布のはしをうらになすべし。すそは少はづすべし。縫合は合縫にして。二とをりづゝぬうべし。すその方を三寸二分縫にしてきくとぢあり。くろ革にておもてのかたにむすびめあるべし。ぬいめより上はみじかく下長。惣長さ八分。上の竹のきわにとんぼうむすびあるべし。口は上になるべし。布あさぎにそむる也。むらさきは斟酌者也。もんをつけば虎豹を付べし。とらは本木のかたにあるべし。かぶきと架布の間一寸八分。

一架のあみきぬ藁薦也。先藁に苧をまぜてなわにして。わらのもとを縄にかけて引おりて。一に取て縄のきはにて編すべし。此なわ架布のたけに准ずべし。仍筵をも用也。編目五とをり也。一は縄のきわ。二は上の編目より一寸二分。三は二のあみめより三寸二分。四は五寸六分。五は六寸八分。かやうに間を置。苧縄を青くそめてあますべきなり。すそははやすべし。惣のたけ布に同じ。小鷹をばすこしみじかくすべし。布のごとく革にて坪に付べし。

一結架法式不定。おりにしたがふべき也。多分さしほこの寸法たるべし。かぶきは柱よりおもてに結べし。柱のかしらかぶきのうへに同。結目おもてにあるべし。なわをすみちがひに二重にかけて結べし。廣縁の合目のごとし。陣にての架。敵陣の方へ鷹の後を不成様に。陣所の左方に可結也。

一鷹野へ出る時祓をする樣。南無山神。南無土神。南無水神。散供再拜と三べん唱て。たかを鞭にて打祓て出べし。但田物には水神を一番に唱べし。人の見ざるやうに勤べし。

一山中の事。此文を三反唱て。梅の直枝(ズハイ)を一立て。草を苅たて横に七重にしきて。白餅七鱅(コンシロ)

一酒を備べし。殘たるをば鷹匠犬飼迄食べし。女にいろはすべからず。鱅なくば鰯を用。是一年に一度始而野に出る時おこなふべし。寅申の日をよしとするなり。

一鞢(ヘチ)一がらの長廿尋。淺青柹染成べし。鞢(ヘチ)しりを放てつかふをばへをしりうたするといふ。手に引とむるをばうたせぬといふ。豹尾ともかく。鞢に付る革を虎革(コカヘ)といふ。豹筒長四二寸分。上の方にあなをあけて。下の方をほそく削なり。竹のかわ半分にのこすべし。

一がらといふは一ッ。一しりとは三ッ又きれたるをつぐは口傳あり。

此の鞢事當流に相違なり。一がらと云は心を云とあり。廿尋の事多分如此。當流には廿一尋也。

一虎縄(コツナ)事

兄鷹大鷹の物也。竹には卷ざるなり。おき縄ともいふ。

又此事不審なり。おき縄四十尋とあり。こ革などの付樣。鞢にいさゝか替也。返々こつなの事とあるは不審也。

一鷹請取わたす事

一番に鞭右の手にて太刀を人に遣す樣に出すなり。手より末は賞翫。本は下とす。うけ取人その心得をなすべし。取てやがてさすべし。二番に餌袋うちをゝときて。口にゆびを入。緒を引出して。緒を手にかけてにぎりて。大指を口に入て。一にとりて鳥がしらを

いだすべし。口は上になしてすこし左の手傾て出す也。鳥がしらを取は賞翫也。兩手にて尻のを拘て請取て。大ゆびを口に入て腰に付べし。請取人は上を取ずして。手に一わけ取たる所をとらんとすべし。上下によりて渡すなり。うけ取人は條をとりて。やがて人さしゆびに一巻して。そのゝち左の手をうつて條をとり。あしをのきはまてこきあげてうけとるなり。鷹こぶしにわたらば。左のかたへひらきて。大をゝ手に巻べし。さて鞭をぬきもつて。鞭の本をつきて禮をして退也。もしつまらば右へもひらきて退て大をゝ巻べし。三指の禮といふ事あり。上とす。口傳在之。

一鷹の鳥を木に付る事

春は梅椿。冬は松榊。秋は楓などに付也。一枝より切口まで一尺ある枝を用。鳥二付るには春は雌上雄下に付べし。雌ばかりも雄ばかりも不付也。一付にはいづれも用也。時節にも不拘也。二付には木を隔て同方に向け付べし。一付るにはくはせの方を外になして。鳥の右を木にそへべし。二付るには上なる鳥をくはせを外になして。下なるをばくはせを木にそへべし。上をべ山をと羽と頭(頸イ)との間へ枝の切くいをさし入。山緒の上の結目をときて。一方をば羽の下へまわし。一方をば鎖〔頸歟〕もへまわして木にゆひ付べし。結ばずしてよりて下より上方へねぢかふ也。下をば足二にかみより一づゝ付て。枝にゐたる樣に結付べし。足のくもてのもとに。後より紙よりをかけて。指三の俣より枝の下へまわして。足のおもてにてかたわざに結べし。左右ともにわざの方足の間になるべし。又云。蔦にても足を枝に巻付べし。本

木より巻はじめて。又本のかたへ巻返してとむるべし。わざ五分さき五分に切べし。ろしろはかけ爪をまたげて。紙よりまわすべし。口傳なくばしる事かたし。上の山緒に入枝なくば針をさすべし。是を鳥柴といふ也。伊勢物語には梅の作花にも付ると見へたり。鳥柴をうけとりわたす事。大概弓に同。鳥を人に向て出すべし。又木に付ざる鳥を請取わたすには。左の手にくわせを上にしてすへて。右の手にて足をとりて山をゝ人に出す也。請取人山をゝとらずして。左の手をとくさ毛の下へ入。右の手にて胸をかゝへ請取て。やがておしまはして。前に人のもちたる樣に。左の手にすへて戴て退べし。但奏者はいたゞくべからず。鳥一の時は如是。あまたあらばたゝみの上にくはせを上にして。頭を人のかたへなしてならべ置て渡すべし。此時も雌をば春は雄の前におくべし。冬は雄は前なるべし。當世は臺に居て送らるゝなり。此時も居樣同かるべし。かやうに數多時は。手を鳥に付て其手をいたゞくべきなり。

一尾を曰尾にてつぐ事

春野のものなり。若物にかざるべきなり。

一春うちたる鷹をば。若ものをも小山かへりと云。又野され佐保姫とも云也。茅藁にて。竹を巻て架にすべし。常に霜の水をかふべし。

一ゆがけの緒をとむるやう。まづ緒のさきを一緒（結歟）べし。如常外の方へ二巻して。上より下へおし入て。わさにとりて。末の緒めを一まとひして。わさの方を下より上へおしいる。委不能記。口傳すべし。又鷹を人にわたすに。ゆがけを渡す事なし。鷹を渡て後。やが

てゆがけをとりて懐に入べし。もし所望せば緒を右の手にて指にくる〳〵と巻て。ゆがけの手掩の中へおし入て。左の手に指をさきへして。手のかたちのごとくおゐて渡すべし。請取人ゆびをとらずして。左の手にて手掩の方をとりて。やがて左の掌に如前すへて右の手をつき禮をして可退。あいてによりいたゞく事。常のものにおなじ。

一鷹を人に見する次第。先おもて。次に身より。次にたなさき。次背也。左右の羽と尾にむちをそへ。刷よしにて見する也。三の鞭と云是なり。鷹渡す時。かくのごくして見せて後わたすべき也。

一鏇の事

こつちのをながさ大鷹は三寸二分。兄鷹は二寸八分。鷂は二寸三分。けしやう革大鷹は四寸二分。兄鷹三寸六分。はい鷹は三寸二分。ささを釵形に切てくゝる也。こつちと同革なるべし。瓶子形をば瓶子鏇といふ。ぬためあるをば引切鏇といふ。角にてせめをいるゝ本也。革にて結は略儀なり。

一打(ウチ)抛飼(カヒフクロ)裹之事

苧縄を細くして。長さ七寸につゞらおりにして五とをり編也。おり返しめのふさへ縄をとおして。くゝりつめてきわにてまむすびにして。その縄のあまりをこしに付るなり。栜ぞめにすべし。

一鷹のふの事

よこふは藤 萮。竪 萮の鳴ふ。ぢの赤は鶉ふ也。しほ赤鷹は同物也。私考。赤鷹しほ同物にや。此抄にカリ爪ニ替事アリ。口傳也。是等大事也。別ニ注。兄鷂をばこのりと云。以上小鷹にかぎるべし。又上毛四毛覆輪ふかくあるをば覆輪白と云。上が青きを青白と云。尾羽の生散て白きをば雪と云。鼻毛しろかる

べし。已上大小ともにおなじ。

一餌袋に鳥さす事

山緒を取て尾を出して。木賊毛人の身にそふやうにさすなり。惣て人に鷹を出す時は。別足にてもたゞ小どりにても入るゝ也。

一大鷹の鳥屋作事

横五尺三寸。竪六尺三寸。高さ六尺。はなし鳥屋も同事なり。小鷹はその次第に縮べし。

一ひねりの事

かねにてもする。また篦のさきにまたのあるを用てもするなり。又から竹のもかりを一節枝を二ッ立ながら一寸にきりて。よのふしをばうつくしくけづりて。篦にさかさまにさし入て。つぎめに針をさすべし。總長さ六尺に切て用べし。つけ心のある鷹に專用なり。大概くまでのごとくなり。

一田をの事

稲にてもわらの繩にてもかくべし。稲はほの方を結合て。とりの前にあてゝうしろに結べし。結目はいづれもおとこ結たるべし。鶴は七寸上の結をすべし。あまり三寸に切べし。其外の鳥はいづれも六寸二分たるべし。鴈には田をゝかけず丸をもとらず。左のむねさきを毛下すこしあけて飼て。やがてかはを引きすべし。上より見へざるやうにするなり。菟丸をぬかずして。左の類さきのかはをむきてかひて。又かはをきする也。

一鴈の丸をとり。くわせをするには。田をゝかくる也。

一吉日事。寅申。凶日戊午未酉。此日は人にも不出。とりもせぬ日なり。一段とある事せざる也。本命午日。行年は未の日也。別而愼日なり。

私考。戊午。乙未。癸酉此日也。或秘抄にあ

りと云とも註付者也。

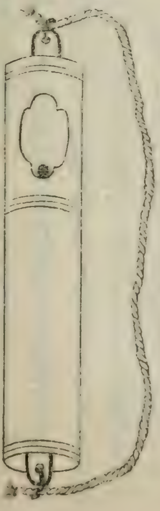
一小鷹のひねりの事

鐵にても銅にてもするなり。是も本あり。鶉のくびを入て引あぐれば。たかも付てあがるものなり。混本は竹にてありし也。是も別に本あり。ながさ五尺七寸。又大法のひねりとて。銅にてする矢の篦の手かけのほそさをもつて二尺五寸にして。かねを能つめて入べし。又篦のいかほどなる竹を矢の笈のごとくにさきをして。長さ三尺二寸にして。かねのいりたる篦を入て。本をとむるやうにして。はしらかして鷹をとる樣にすべし。馬にてつかふ時の事なり。

一白の裝束の事

鼠尾。率。韘已下鏃の裝束までも白革にてすべし。條は白糸の組たるべし。大小共に同じ。

一水筒之事。ふとさ八寸。節三。長さ一尺四寸なり。上下の節の外に五六分斗に乳をいだして穴をして。くびにかくる繩をとをして所持すべきなり。中の節と本のふしの間六寸あり竹を用て。鷹に水かふ口をすべし。口のながさ節の間にしたがふべし。口のかた如此。。中の節に油筒のごとくあなをあけて。水の出入をすべし。口に物をさすやうにすべし。竹のかわの外は皆うるしにてぬるべし。私に考。水筒之事諸抄に定而法なしとあり。



水つゝの寸法不定と諸抄にありと云へど

も。有秘本にしるし置間書加之。犬かた寸ぽう等前に注分可可然歟。可禁外見者也。

右抄者爲旅宿隨身。諸抄取合注付之。秘說等之條可禁外見。於于外題新作。汗顔々々。

永正三年春二月日　左金吾將軍藤（花押）

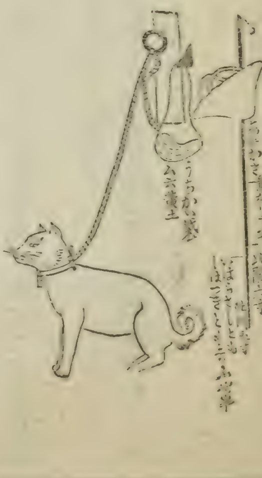
持明院十卷書九本者。吾子神村子所藏秘本也。其在世之日。邦也未皇而弗預聞焉。安永二年於遺書中終繕寫訖。

六月　稻葉通邦

〔右貴鷹似鳩拙抄以宮內省圖書寮本校合〕

齋藤朝倉兩家鷹書

一犬かいのかりつゑはぬしの目のとをりにきる。四季にかはるべし。鷹師せてにはかるなり。

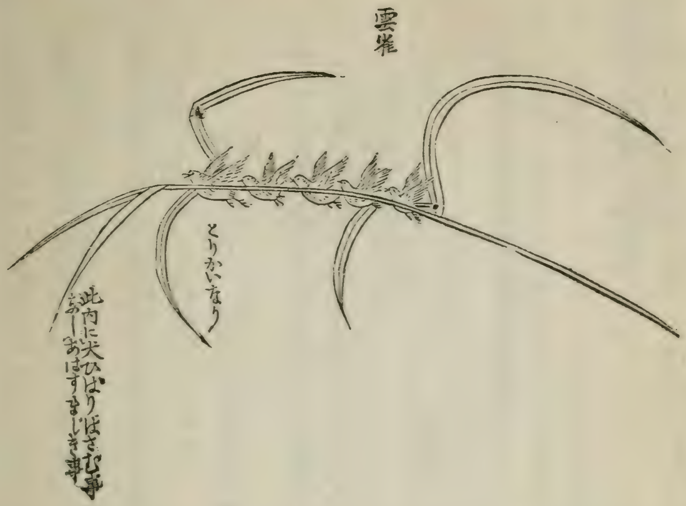


一犬のそうから事

かくのごとくなる犬よし。色々口傳ある也。いぬいかにも目のまえをれて。尾をよくまげて。はしさきながきは吉。又犬の尾をける事有。口傳有。ひすべし。

一鶉雲雀小鳥をはさむ事

野はさみといふは。からたけのよあひをひだりのかたよりそぎかけて。五ッ七ッ九ッ



十一にても。又ひだりの方にてはさみおさむるなり。しぎのはさみと云は如此。あし又はしの竹など云々。どれもかみえりにて二えにゆひて。おもてにてきるなり。

如此はさむなり。五ッの時は竹五尺。七ッの時は七尺なり。數にしたがふべし。うづらも同前也。

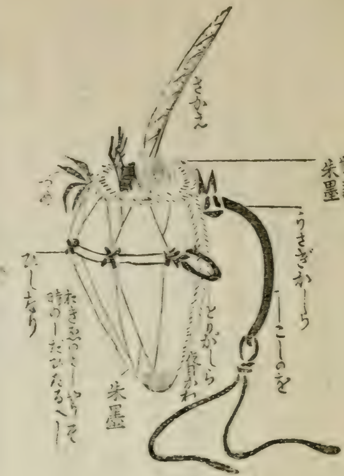
一竹の時はいづれもさきにはを二枚ばかりのこすなり。よしあし如此二本にてはさむなり。

一えぶくろの名の事

おきえきさゝざる時は。うつせみとも又もぬけとも云なり。うけ取ぶくろとてべちのやう有。

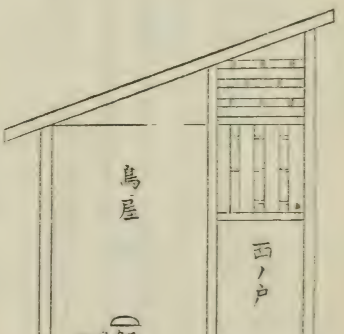
一おきえの事

三色あるべし。其外はとりの名をそえて云べし。



一鳥屋の廣さの事

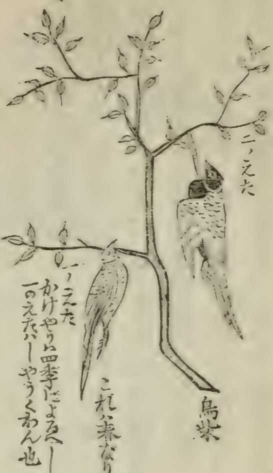
鷹によるべし。下にはくり石をしくべし。やねはとりおきたるべし。とやのたかさ三尺五寸。ひろさ三尺也。ほこの高サ七寸にも一尺二寸にもすべし。とやは東むきたるべし。ほこ木はゆやなぎをすべし。やねはこむぎわらびのきの葉をとり合てふくなり。又板にてのしぶきにもすべし。但はなしとやとて一間四方にも二間四方にもする事。病鷹をくつろぐべき用也。ひじ也。常はすまじき也。



一としばに鳥つくる事

木はさだまらず。梅。櫻。松。しばの木。ならの木。ほうその木。ひの木色々なり。たゞし

何時もいちゐの木に付る事本儀なり。



犬はさみの鳥かけやう口傳在之。右の足のゆいやう。面にひねりかう也。種々口傳有。足をいう事。藤をわり二えにゆひ。おもてにてひねりかう也。同田物かけ也。一段秘すべし。つねにはかけまじきなり。

一犬はさみ鳥を如此かくるなり。たゞしつねにはすまじき也。一段秘事たるべし。又水の中にて取てぬれたるに口傳有。



一鷹をかくる事。つねはすまじき也。野かけとてはらにかけずして。はしねとはとをかけ。はしさきにくらべてきる也。

四季のかけやう如此なり。野かけ。初鷹。歸鷹。何れもかけやう口傳有。同じくなわの先をあぶらおにくらべ。かけむすび二ッにしてきる也。同左なわさきをまわしてかけべし。鶴同前也。

鷹



四季のかけやう如此なり。足をからめ。ふしぎわより手一足をき。かみゑりにてふたゑにして。ほこまたげのごとくいふべし。

一鶴かくる事。つねはかけべからず。足をからめ。かみゑりにてほこまたげのごとくゆふなり。ささを三ッかけむすびにすべし。はしにふたへにかけて。そのなわたきをひだりのかたをひだりにつはし。うしろにむすぶべし。これはまな鶴なり。黒鶴も如此かくるなり。はねは野かけとてくびと羽とをかけべし。あをさぎかけたるごとくなり。しぎのかけ様一段ひじ也。をろそかにかくる事あるべからず。但所望ならばかけて見せよ。一大事の秘事也。

五月より七月まで。その外にかけまじきなり。たか羽ぬたてむすびつねのごとくかくる事もあり。

鶴



かさゝぎかけ

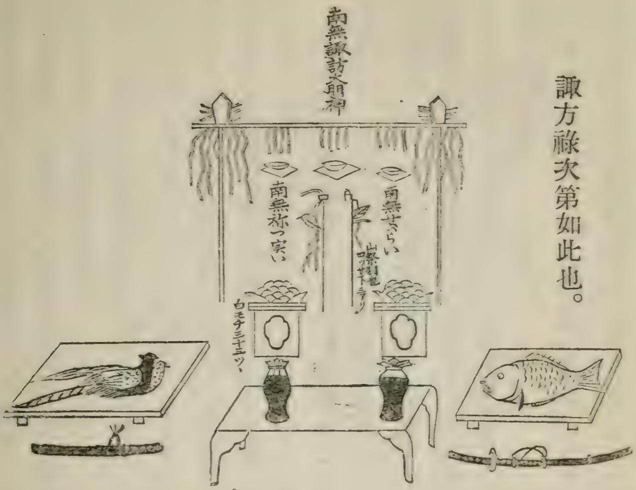


鳥屋へ鷹をいるゝ時。又出す時も。鷹にあしき事あらんにも。如此らべて諏方を可祭。三盃にて諏方へ参時鷹主御しやくなり。又御盃鷹主へ参時鷹かひ御しやく。同犬かい御くわへ。鷹かい給ふ時犬かい御しやくなり。

諏方贄懸様

可懸あひことり。又にわとりのさるのごとくなるとりを鷹のとりたる時如此。諏方に

諏方祿次第如此也。



參候わねば鷹主同鷹かいあしかるべし。とりかいやうつねにはあらず。口傳有。諏方のにえかけといふは。きじにはかぎらず。うさぎもかくべし。たぬきも同前なり。



一すわのにえかけの事。色々口傳有。鷹を遣ふ人は。諏方のにえかけをつねにかけてまいらせられずば。鷹遣冥加あるまじき也。七月廿六日七日にはとりわきて如此

に取かけて。すわをまつりをすべき事かんやう也。能々すわ大明神をしんかう申べきなり。

一常のうさぎはかけやう如此。

但結様三所有べし。三所いづれもかはるべし。口傳有。



一常のうさぎをかくる事

前足を如此。ほこまた木のごとく。ふたえにゆひてきり。うしろ足の中のふしの上をふたえに女むすびにして。前あしの中へひきとをしをして。〔[illegible]〕手一足おきてかけむすびにしてきる也。常たけまじき也。野かけとて何となく四足をもゆふなり。とりかいめのことははうのごとくたるべし。そうじてはれなる處にて。うさぎをとらする事むようなり。いさなどよりおちかゝりてとりたらば。何となくべにしゝを少かいておくべし。日くれてとりかい時にとりたらば。そうしうを如此かうべし。

一四ツ耳のうさぎかけやう如此。むすび目三所也。いづれも口傳有。



一四ツ耳のうさぎの事

うしろ足を左を上にうちちがえ。ふぢにてふたえにをんなむすびにして。うしろてにてくびをさきませ。くびの上にてをんなむ

すびにして。手一足かけむすびにしてきるべし。當流の秘事也。かけやうの第一なり。おろそかには物語にもすまじきなり。秘すべし。

鷹飼の秘みつ。うさぎをかくる(る歟)とは。七日しやうじんしてかくらといふ事有。



一四きのうさぎかけやう如此。むすび目四所也。いづれもかはるべし。一段(口歟)は秘事の口傳有。秘すべし秘すべし。かいくちをぬふ事。藤をほそくわりてさきをむすび。かはらのかたより尾の方へぬふなり。同とりかいめの事。ひだりのそしゝを三日月なりにいりてとりかうなり。べにしゝをはうさきの口のごとく三ツくちにわるなり。ぬいめのかず五ツわりなり。藤のさきを身とかわとのあいへをしいるゝなり。秘すべし。かいくちをぬふ事もつねはすまじき也。とりかいめもさのみひろく(た歟)はあけまじきなり。べにしゝかになめは丁如此。ちやうといふ字のごとくに刀めをつくるなり。鷹にくひやぶりする事なく。能々とりかふべし。

一本の兎



うしろ足をふたえにをんなむすびにして。手一足をきて又をんなむすびにして。前足ををんなむすびにしてくびにかけ。又をんなむすびにして。そのさき手一足をきてか

けむすびにしてきる也。まえ足にてくびをはさますするなり。むすびめ四所なり。いづれも替べし。一段の秘事たるべし。種々口傳多し。

三ッうさぎの事。常のうさぎ。四ッみゝのうさぎ。しきのうさぎなり。以上いづれも一段秘事。中々書置にもかぎりなき秘事なりく。

右此卷物結方之奉書也。出羽國之住人齋藤助右衛門。朝倉太郎左衛門秘傳也。兩家之被究如此被注置也。實子タリ𪜈此道ヲ欲ザランニハ不可傳者也。

永正三年三月吉日　天羽　吉盛在判

續群書類從卷第五百四十七

鷹部七

根津家鷹書　一名根津松鷗軒記

〔右根津家鷹書與正編卷第三百五十七所收同書也故今從省略〕

續群書類從卷第五百四十八

總檢校保己一集
男源忠寶校

鷹部八

荒井流鷹書

目録

一出入に氣つかふべき事
一鷹請取渡しの事并猪の目の事
一鷹に添物有て鷹請取渡しの事
一鷹を渡してはやくゆがけをぬく事
一餌袋渡す事并鞭渡す事
一新鷹請取様の事
一伏鷹請取様の事附籠鷹の事
一はた綱と云事
一座敷にて鷹居様并内板持て出様の事
一貴人兩人御坐候時鷹居て出様の事
一貴人へ鷹渡し申事
一座敷へ出す鷹廃様の事
一人望共出す間敷鷹の事
一鷹に丸箸飼様の事
一鶴を丸はしに飼やうの事
一あがけ山歸り取飼事
一鷹やわせ様の事

一鷹に經緒を指事
一鶉鷹野に犬入様の事
一犬に鈴付る時の事
一犬引綱の長さの事
一鬭の犬と云事并鬭の外の犬の事
一雁菱喰取たる時の事
一蒼鷹の鳫をうとむ事附萬鳥うとむ事
一鷹鳥を不取して舞事
一鷹大き成ものを取て事後うとむ事
一鷹鳥を取て放事附放し曲の事
一思ひ返しの事
一急ぎ鷹こしらへる時藥の事
一つよき鷹一夜に拵る事
一鷹拳初に取飼事同鳫に取飼様の事
一人をおづる鷹の事并雪水をおづる事
一なづきて新鷹の様成を使事
一新鷹の氣こわくなづかぬ事

一鴨取飼やう事
一鶴白鳥惣じての鳥取飼様の事
一青鷺夏くわせ様の事
一黒鴨くわせ様の事
一鷹のさげ曲なをす事
一初て鳥取たる鷹の事
一鷹ふきに逢て附取飼之野より歸る事
一同取飼て大緒指事
一貴人の御前にて鷹に鳥を取せたると云事
一鳥心無鷹の事並取忘の鷹取飼事
一鷹にかへり足緒と云事
一鷹鳥を取たる時の事
一鈴の指様の事同鈴あげ様の事
一鈴板付様並鈴板の寸法の事
一鷹草へ入かぬる事
一心能鷹を鳫に取飼事
一鷹に大物をとらせ度と思ふ事

一鷹に肉當る事附餌つむる事
一肉に當りたる鷹の事
一肉色見様の事並肉をすかす事
一鷹つよく肉引たる時餌おさぬ事
一山わすれ薬の事
一女鳥をこのむ鷹の事
一鷹蒜にかゝりて取飼事
一鷹肉に當りたる時を見様の事
一鶴をとるべき鷹のとらざる事
一菱喰に組薬の事
一ひとのあましたる鷹使様の事
一蒼鷹の雛子に取入鳫を不取事
一蒼鷹便に犬聲掛る事
一せこつへ寸尺の事
一同せこいへかたぬる事附山言葉の事
一野へ出る鷹にゆがけと鞭置様の事
一野すかしの事附足皮とく時の事

一日ふさがりの事附嫌日の事
一鷹にがしてしきふせやうの事
一貴人の先へ鷹居てあゆむ事
一鷹野にて貴人馬上御座に鷹上る事附足皮斗の事
一同馬上にて鷹請取事
一鷹に口餌を飼事
一鷹の置聲の沙汰の事
一置餌を渡す事
一主人へ餌袋付させ申御事
一鷹客人の事附我鷹と客鷹の事
一鷹あまた有時賞翫すべき鷹の事
一構の陰陽の次第の事
一架のゆひ目の事
一構の裏表の事
一若木の構の事附大鷹の架木の事
一蒼鷹兄鷹摩べき事附摩やうの事

一染分の事
一構の寸尺の事附指架の寸尺の事
一惣而鷹の大緒鎖數の事
一大緒留る露の事並惣而鷹の大緒寸尺の事
一惣而の架またぎの事
一小つちむすび様の事
一惣じて足皮の寸の事並切やう
一糸裝束の事
一白鷹摩鞭置様並鞭の寸の事
一泊り鷹摩様附通り鷹つなぎ様の事
一祝言の鷹摩やうの事
一構ひとつに鷹幾聯も有時摩様の事
一鷹のくらゐにより構に摩様の事
一夜つなぎの事
一鷹の相かたちの事
一鷹の六脈の事並無病の事附火を焼〔灸歟〕見事
一羽のつぎ様の事

一血虫の薬の事附から子さんと云事
一鷹の内見様の事並内をすかす薬の事
一古うちつかする事
一萬病一薬の事
一内もちつきたる時の薬の事
一骨續の薬の事並あぎれの薬の事
一鷹に餌をうたする薬の事
一手さき打たる鷹の事並後打候鷹の事
一をへ物の有鷹見様の事
一身を打たる鷹見様の事
一餌をはやく押さする事
一けつしたる鷹の事
一いれ薬の事
一鳫にうたれたる鷹の事
一くそたけと云病の事並ゑふと云事
一鷹の尾羽留りたる事附尾羽ぬけ候時の薬事
一鷹のはちかをしげくする事

一胴内胴たけしげり氣に飼薬の事
一人參散の事並血下しの事
一餌生板の木並寸尺の事
一餌の作り様の次第の事
一骨餌を作る次第の事
一鞭水飼様の事並餌の洗様の事
一鷹に飼間敷餌の事並飼汁の事
一鷹よごす間敷事
一大鷹伏様の事並ふせ衣の事
一鶻伏様の事附ふせ衣寸法の事
一鷹を煩はせ間敷事
一鷹の病を見生死の大事見知事
一惣じて鷹に薬飼様の事
一鷹の五臟三腑の事
一鷹の灸所の事並名所の事
一鷲王神の御事
一神前に鷹をつなぐ事

一神前に構ゆひ様の事
一神馬鷹の事
一鷹の鳥神へ御にへに上る事
一鷹の鳥に綱掛やうの事
一同鳥釘に掛様の事
一同鶉雲雀串にはさみ様の事
一鷹の鳥と云事
一鷹構にて死たる時の事
一鷹放時の事
一替り鷹見様附尾羽の次第之事
一鷹の尾繼様の事
一十三尾の沙汰の事
一鷹に三長三短の事
一隼の七所の事附はんの鷹の事
一兄鷹を貳つ鷹にいるゝ事
一相子鳥の段の事
一鞠のかゝりの事

一まびがみ鷹を使間數事
一長命駿の見様の事並短命事
一くびながと云事
一鷹置たつる時の事
一子鳥の内持やうの事
一鷹の鳥屋入鳥屋出しの事
一遠山毛と云事
一相木並とひ相木見様の事
一山忘れ八つの口傳の事
一鷹に印迦取と云事
一諏訪のきもんの事
一水の異名の事
一鷹犬に子あらさする事
一遊掛の緒をとめる事
一餌ふごの緒をむすび様の事
一大鷹の餌袋の事
一鶻の餌袋の事

一雀隼なづけ藥の事
一隼に藥の事並隼に嫌言葉の事
一主人より鷹拜領の次第の事
一ゆがけと鞭と架にかけやうの事
一あがけの鷹搉やうの事
一巣鷹搉やうの事
一胴氣の藥の事
一鷹に虫のわく事
一鼻氣の藥の事
一鷹餌うとむにくすりの事
一羽かき鷹の事
一惣而鷹の病見る事
一餌袋に置餌を指事
一鷹を取飼始る事
一相木の構の事
一諏訪の御前に鷹糜ぐ事
一早中風の付たる鷹見樣の事

一惣藥の事
一虫付うつ時飼藥の事
一大風のくすりの事
一身分の藥の事
一餌うとむ藥の事
一羽がきのくすりの事
一寒夜の鷹のぬくめ鳥の事
一大物に組する藥の事
一毛かりと云事
一鷹餌を押ぬを押さする藥の事
一鶺野すかしの藥の事
一鷹の足の裏の魚の目の藥の事
一目わくの事
一鷹使に主を忘れぬ藥の事
一蒼鷹の餌袋に鳥を指事
一弟鷹萬の鳥をうとむ事
一あがけ山歸りを初心にて取飼時藥の事

一鷹の大腰の事
一疵ぐすりの事
一鷹をさなき心有時の事
一くれなゐの水と云事
一山中の薬の事
一鷹の中風見樣の事
一胴打胴たけの薬の事
一あがけ山歸りに常に可飼薬の事
一下り氣の薬の事
一鷹の鳥喰樣の事
一萬病一藥の加減の事
一鷹に胴氣と云事
一鷹つめとをといふ事
一胴たけの事
一だうなりとて胸の內に聲有事
一鼻氣と云病の事
一はなやせと云事
一しらみ落す薬の事
一鷹の羽留りたるを三鳥草飼事
一鷹に大禁物の事
一日中居餌の事
一弟切草の事
以上貳百七拾壹ヶ條

荒井流鷹之書

一惣じて鷹の相形見樣之事
鷹のはし丸く。黑觜短く。あをはしに肉有て。鼻の次せばく。くい入あさく。目の前あつし。亂地亂飛孝く。まびさし薄く頭丸く。目の前遠くうけがひくらず。首尾孝くかね付の毛ひねり上。首短くそり。ひ骨にしてひ骨薄く短し。羽前に寄て付き。七並に肉有て尾筒長く。尾性羽性やはらかにしてはゞ廣く羽筋細し。股ひきく付。かくたいせばく肘

より毛なし。はぎ長く骨太く。指短く爪大に。蜘手に肉有てがんぎ荒し。取手は小取手の大取手也。目も小目の大目也。

一大鷲かをの鷹見樣の事

此鷹必一曲有物也。藥には一芦毛馬の血。一芦毛馬の三ヶ月骨。一あいかけ。一大くち鶉頭。黑焼。等分にして半錢餌皮に包飼也。

一鷹に陰陽と云事

黑駮に骨太く毛厚く。亂地亂飛つよく。羽性能くい入深く鼻次廣く。まびさしかゝりたるを陰の鷹と云也。地白に赤駮。亂地亂飛よわく。毛薄くくい入あさく。鼻次かいなく。ひ骨みぢかく。まびさしかゝらず。羽性かいなし。是を陽の鷹と云也。

一鷹の本來の事

鷹は是大日也。地藏菩薩化身共申也。鷹の姿は須彌の姿。再眼は日月。雨の羽節はこんたい兩部の躰也。つむは七は七ようの星。十二の尾は十二神。尾の五の駮は地水火風空。亦五知の如來共がうす。二の足は不動毘沙門二天是也。四の指は地國多門增長廣目四天是也。惣じて毛の數に三世諸佛の御名有。歌云。

身寄より手なさき相の毛數社三世諸佛の
御名は籠れり

去程に鷹は天を父とし地を母とす。女鳥をば右に縻。雄をば左に縻。故に蒼鷹をば末木に縻て。大緒を木先へ留る也。

一善鷹見樣の事

黑觜薄く。觜にひ有之。青觜に肉なし。鼻す廣。亂地亂飛薄く。くび入ふかく。まびさし深。かゝるさんめん深頭なりかどして。後頭ひらきてうけがいくり。首長毛うすにて。首高く付き。ひ骨長く同厚く。胸指出て羽後へ

寄て。付股高く付同(胴歟)太し。毛なし。鼻短指長。爪ちいさし。がんぎうつくしく。かつかうより蜘手に肉なし。骨少細く。かくたい廣。小肘ひらきて尾筒詰り。尾性羽性毛性鶏のごとし。尾助孝く亂し亂て。前後脇より見ても鷹孝く見へ。いづくにもかどのなきを吉とす。少も居のなりにゆくべし。頭にははんをいたゞき。亂地亂飛には銅の針を所々にすり立たるごとく岩穴におし。やうたいをつりたるがごとし。目の光村雲の中より明星の見ゆるがごとし。白目は水精の玉のごとし。前には小山をいだき。後には山川を流し。角躰には車を通し。亂しには糸を亂がごとし。目は嘴先をまぼりほろ長く。七つ羽はつさしを立たるがごとし。目は大目の小目也。取手は大取手の小取手也。是を善かたちとする也。

一人鷹に禮有を鞭にて禮を返す事

人禮有ば則馬手にて鞭をぬき。鞭車を使尾羽をかいつくろう。是鷹よりの禮義也。亦坊主山伏禮するは向より手を出す也。能々心得べし。口傳有之。

一鷹を人前にてしづかに居事

鷹とはわせぬ様にあつかふべし。惣じて鷹を荒くあつかへば。主をうとみて肉かたく成故也。

一鷹狂事

拳を有程指出し。鷹に付てやり。鷹少たるみ候時。肘より引請て居る也。鶻は四毛を先に目を付也。大鷹は取手に目を付べし。引様の心持はあい引にひかず。荒馬を鎖鋼にて縻たるごとく掛て。懸とまる如也。

一耳かたくす問敷鷹の事

藥には一大鷹の頭。一女鵐の羽。一からむし

の根。右黒燒等分にして餌皮に包て飼也。同方藥には一黒猫の頭。一鯨の骨。何もさめにておろす。一狐の尾先の毛。黒燒。是ハ鷹の様體によりきざミても。何ゝも等分に合。日に半錢宛飼也。同方藥には一鵜の羽を黒燒にして。一甘草を合。ちしばりの汁にて餌をしめし彼藥を飼也。

一新鷹仕入事附爪觜拵事

先肉を高くし。扨なづけべきと思ふ時。白水をわかし。其中へふとからすの黒燒。茶半服程入煎じて。湯をぬる〳〵として洗べし。上之人の不寄所にて。日に當身油をなでひきさすべし。其後雀を可飼。かい候て則構に繋べし。夜居の時迄すへ出べからず。夜居の時能口餌をかうべし。六七日も餌を不喰時も有り。一日餌を飼様。鷹少なづき脇を見たがる時可飼。又野鳥を見のぞきほしがる時口餌を可飼。常には飼べからず。鷹の機嫌次第可飼。亦人を見牛馬犬などを見て狂そう成とき。能口餌をひかせゆきちがふべし。常に氣遣して鷹の心次第に飼べき事口傳有り。常に朝口餌に鴉の足を壹つ可飼。時によりて半分飼事有。置飼事あらば朝口餌を不飼。八つのさがりにぬ口を以置飼也。ぬ口と云は。生鳥をしめころさずに。胸を明て血を鷹にねぶらせ。人に居させて一間二間の內にて置可飼。鷹の機嫌次第也。しめころし血のたらぬをばぬ口とは不言。血のたるを云也。扨爪觜拵やうは。鷹なづき候て取飼候て。いかにもきれいに見能様にする也。新鷹の時指たる足皮をも其時又指かゆる也。爪拵やう口傳有。

一常に鷹を心に掛る事

肉高く共。鳥を見てほしがる時可合。若鳥なくば丸箸を可飼事肝要也。

一鷹を朝夕居事
我が朝夕居所にて。手の居程に架を結て廡。立居に餌の口につかぬ様に水につけ。一切二切宛細々飼也。扨新心なくば能々吉日を見分。しやくの日を用て朝居夕居すべし。鷹なづきて装束をする也。其後人の出入しげき所にて。朝夕の事は不及申に。晝もしかと居也。夜を通す事有べからず。朝はくらきより居。夕居は其程をはからひて居也。夜晝共に飼〔[illegible]〕を細々置。聲を掛可飼。鷹居なづかぬ間は。口餌を小節の近に見せ。とばいかゝらずばくれべからず。依其ニ鷹心付次第に口餌にかゝる也。扨能かゝり候はゞ。脇よりほのかに見せて。掛り候時可飼。腰を見てかゝらば。其後口餌見せずして置。音を掛。袖斗うごかし。口餌を見す様にしてかゝらせ口餌を飼也。其後は口飼斗にて脇へ出すやうにして。かゝる時は口餌を飼度に足皮を詰る也。又細々鞭水を飼也。扨取飼候間。觜爪をきよむる事本とす。若又しゝは引て鷹新くば。生鳥を飼事是本説也。其鳥を押しづめ切たて。ひや〳〵と鷹の肉によりて飼也。鷹を三日延る也。必肉を引ば鷹荒く候。餌を夢々詰る事なし。此心持を第一にして取飼事本儀也。

一新鷹を夜居する事
鷹初而夜居の時は。必小豆の粥を出す也。口傳。

一鷹拳放間敷事附構に廡間敷事
新鷹をば餌を飼て架につなぐ事有べからず。餌をかい候てつなぎ候へば。鷹架心有て取飼ど野心付物也。故に餌を飼て押さる。先は構につなぐ事なし。外に居により病なし。歌に云く。

外にすゆる鷹に病はよもあらじ藥はなき
によき餌をぞかへ

一餌の積りの事

蒼鷹には雀七つ。雄には五つ。鶚には三つ。鷂雌鷹には貳つ。是は切かひの鷹の積り也。遣鷹に定べからず。是は片餌の飼様也。諸餌は右一倍也。つめ様は堉川のごとく餌を可飼。ひらく鷹はひてりのゑかわのごとく可飼。口傳。

一總而の鷹を居次第の事

足皮をろくに爪を重るごとくに。時々足ぶみをさせ鞭を持て居也。なりを直し尾をふり直し。油斷なく尾のそゝげる所を鞭にて直べし。

一鷹をすへて人に見せ様並鞭當る事

先かほを見せ。手なさき身寄尾助を鞭をかい添見すべし。扨鞭當る事は蒼鷹には右の肩崎より當初る也。雄には左の肩崎より當初る也。爪をも大鷹は右の打爪を上にすべし。雄をば左の打爪を上にすべし。羽崎何れの鷹も同前也。鞭の當數は口傳也。

一鷹は居て人の方へ行事

先門の地幅の本より鞭を手に持て門に入べし。是は鷹の用心のため也。緣に上る時。鞭をば腰に指べし。緣の上にて鷹を能々かひつくろひ居丸め伺公すべし。

一鷹匠を上へしやうずる事並鷹の容體見様の事

先内より鷹匠出て客鷹匠を座敷へしやうじ。請取には鷹の様體を能見定むべし。ゆがけをばさして影に持べし。必胸より尾助下りの毛。息にしたがつてはれ合く〵するは。病大事也と心得べし。兩の肩羽崎四毛へつてとく扣はずば。必知ぬ所に病有と心得べし。

能見定て鷹匠の前にいかにも靜に指寄。諸ひざをつき。一禮して少そばむき。ゆがけを指べし。其時鷹匠ゆがけより脚緒をほごし渡すべし。請取人右の手にて脚緒の先を請取定て。上下しきたい有べし。鷹の打爪の下へ人指ゆびを靜に指入て可請取。扨左の方へひらくべし。ひらきさまに左のひざを立て拳を持すべし。

一出入に氣つかふべき事

座敷に居所をも心を付。鷹の驚かざる様成所に居事肝要也。何時も狂度毎に立とゞまり鷹をひくべし。あゆみながら引事ふせつたり。又内をつきたる時立とゞまり。其内を見べし。見ざる事惡し。鷹匠は兵法遣と同じ如に万端氣を遣也。

一鷹請取渡しの事附猪の目の事

先鷹を渡さぬ以前に餌袋を請取。扨大緒を請取。拳の下より居上。くるわぬ様にすべし。鞭をば鷹より後に請取也。御前に伺公して鷹を御目に懸る。左のひざをひらき。右をついて。鞭持候手を地に付て。細々鞭を當ず。御かをゝ時々見。御目の行所を引むけ御目に掛る也。御覽ぜられずば本のごとく居也。若口餌を飼候へと御諚ならば可飼。左なくば飼事なかれ。いかにも意に入居事肝要也。扨摩げと有時。御前を立。構に向。本折の猪の目より小出緒を指出し見べし。よわきは引ぬきて逃る事有り。是に寄て猪の目なき本折にて摩べからず。

一鷹に添物有て鷹請取渡しの事

太刀其外何にても。鷹より先に請取可渡御狀抔は。鷹より後に可渡口傳有。

一鷹を渡してはやくゆがけをぬく事

指掛ながら禮をする事無禮成べし。指掛ぬ

くべき隙なくば。指掛のたをひを返して禮をすべし。同鷹を請取。一禮して立べし。

一餌袋を渡事附鞭渡事

先餌袋をば鷹に見せずして先に渡べし。餌袋へ入候鳥の頭を請取人の方へして渡也。鞭は鷹拳に有故後に渡す。渡様はひさ〳〵はなを先へして渡也。請取て鷹の毛羽を直す也。當世は鞭當ず共くるしからず。いかにも静にとばわせぬ様に居丸むべし。荒く當り候へば。おづるによりて耳かたく成也。心得べし。

一新鷹請取様の事

則先新鷹の事。渡には脚緒を一筋打出す也。請取人指寄て。打出したる脚緒の先を取て。指掛の緒にとめて。扨殘の緒を禮敷し請取べし。但使鷹ならば打出したる脚緒を。後に請取人の心を見んがために。使鷹を新鷹に渡す事も有。裝束なくば新鷹と心得べし。裝束有共取かわざる鷹かと問分て請取べし。

一伏鷹請取様の事附籠鷹の事

伏鷹請取渡には居たる鷹のごとし。蒼鷹は我が右の方へ頭をして身寄を渡事も有り。雄をば左へ頭をして。手なさきを渡す事も有。籠鷹をば貴人の御目に掛る時。籠に大子木あらば。大子を左の手にてきわを持。右の手にて末木を持。御目に掛べし。籠斗成共。居候鷹の様に籠をむけて御目に掛べし。

一はた綱と云事

脚緒を一筋袖の内へ引入。はた帯に留る也。是は旅などにてころびたる時の用心也。馬上にても如斯常はなし。

一座敷にて鷹居様并内板持て出様の事

御前にて鞭を常の如に不可遣。相うかゞひ遣べし。足ぶみ抔も細々さすべからず。鷹を

第一に居丸むべし。内板持様は鞭をぬき内板に持添。れき〳〵の御前を通り。座敷の程を見ゐなおるべし。余り少片成は見ぐるし。座敷一ぱひに成様に居也。能心得べし。

一貴人兩人御座候時鷹居て出様の事

出ては鷹の頭を兩人の間へむけて御目に可掛。何れをわけがたく賞翫の心也。御一人の時は鷹をむかわせて御目に掛る。其後手なさきを見する也。後をば御望により見せべし。鞭を當る事は前の方のごとく心得て。當ぬもくるしからず也。

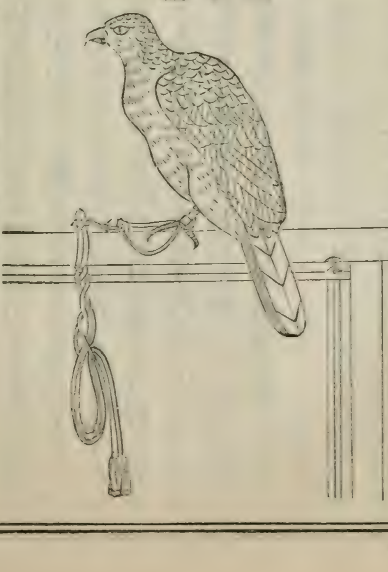
一貴人へ鷹を渡し申事

貴人賞翫に思召。若大緒を先よりいんぎんに請取候はゞ。右の手に持候大緒を。貴人の御手の上を越て。我右の手にて貴人の御手を少指上る様にすべし。是は貴人の敬たる心也。

一座敷へ出す鷹縻様の事

人の所望あらば出すべき鷹つなぎ様。鎖たる大緒を架衣の後へ返して置也。かやうに縻たる鷹をば如斯心得べし。

座敷鷹



一人望共出す間敷鷹の事

鷹の縻様は。大緒をくさりて。構ぎぬのかげへいれて隠すべし。

一鷹に丸箸飼様の事
鴨杯をば物影よりなげ出し。いかにも近して先取飼べし。其にも心つかずば細々可飼。野鳥に取飼時。鳥をひやし。大鳥ならば雀三程。眞鴨ならば可取飼。若黑鴨ならばさしぬき血をひかせ。雀半分程可飼。其うちつき拂候以後土餌を可飼。又雁の丸箸を飼やう。いかにも羽たすき掛。羽動ぬ様に觜をゆひ置。綱を付地をはゝせとらすべし。二度目に引上に可飼。能々肉を當。鷹のとりたる様に可飼也。どん成鷹には細々心付べし。りこん成鷹には細々かうべからず。雄隼このりに不寄。口傳に有之。

一鶴を丸ばしに飼様の事
觜にくだを指。蜘手に置綱を付。田にはわせて。功者成ものにひかせて。鷹合ぎわへ貳間斗に成たる時。眞鴨を指替へ。鶴の上にて可飼也。

一あがけ山歸り取飼事
先新鷹の時口傳有。山歸に候とて。第一に爪ゆるす事大に嫌也。但短命の第一成べし。殊に内持をすかす事度々有べからず。つめ様は若鷹同前成べし。其いかんと云に。取分山がへりは十に八はつよくいれる物也。其故命よわき物也。然間若鷹よりも肉をかゝへて取飼也。いかにも取飼事本とす。扨雛子を一二合物也。鳥に取入ては。山歸に限て雁をうとむ事も有。然共鷹によりてすぐに雁に合事も有。

一鷹合様の事
自分の鷹ならば心次第に合べし。主人の鷹を預りては。主人の御拳を見。よわくばよわき様に。つよきはつよき様に。御拳の如に合也。貴人の御拳にて取候やうに仕入事肝要

也。

一鷹に經緒を指事

よわき鳥に合時。大鷹ならば置綱を指。鶚ならば太き經緒を指べし。大鷹はい鷹隼に不寄。野へ出る朝。ぬ口を可飼。其心少も不忘樣に合すべし。

一鶚鷹野に犬入樣の事

犬かい追鳥をなが聲にかけば。犬當りたると思ひ。聲をきざみ細にかけば。當らざると思ふべし。鷹匠寄鳥をたてよと聲を掛る也。又つかれの鳥をば。犬かい定のつかれと聲を掛ば。鳥見付たりと思ふべし。鷹匠手むき能ば立よと聲を掛べし。定の聲を掛て鳥を立ざるは。犬かいのふかく也。歌に云く。

おう鳥もつかれもたつる犬飼のうちかい袋かろく見へけり

一犬の鈴付る時の事

九月九日より節分迄付る也。付事を掛ると云。又とる事をばはずすと云。口傳也。

一犬の引綱の長さの事

馬上にて引綱は七ひろ也。歩行の時は此半分也。

一鬪の犬と云事並鬪の外の犬の事

鬪の犬と云は泊り犬也。鬪のとの犬と云はとまらぬ犬也。

一雁菱喰取たる時の事

はやく欠付羽組をすべし。是は鷹を打せ間敷ため也。鵠を取候時は。早く頭を後へ折て。羽組を組入べし。是は鷹をつかせざるため也。

一蒼鷹の雁をうとむ事附萬鳥うとむ事

弟鷹雁うとむは二目三目又は五目七目九目十六目也。是迄うとむ也。然間二目の鴈の事。是を能々つゝしむ也。扨鳥を能々ゑらみ

て合事也。初鷹をば其あへ能故に。前後をわきまへず取也。然共二目の鷹をばこわきと思へども。にかたの鷹は必うとむ也。同取飼時はだへの毛を取くるみ〳〵少宛取飼候へば。必鳥をうとまぬ物也。扨又油を取飼事嫌也。頓而居上床敷所あらば。毛吹て見分事本也。頓而かほへ水を吹居しづめ。鷹の振舞を見定。其養生をなす也。若又手をかへ候とて引切られ候て。鷹とび立候はゞ。鞭にて鷹を打とゞむる也。若鷹をくりて取事有ば其心得有べし。若其日取飼事なくば生鳥を飼也。生鳥なくば新敷鳥を作り。竹の筒を切て。上の皮を能けづり。其中へ餌を入。口をふさぎ。ふところに入させ飼也。自然鷹鷹に心をよせずば。なげ鳥をとらする事有り。其をとらずばくるま鷹たてゝ。田の高き所亦草などはへ候所にてひかせ。細鴉杯を生て。鷹しらぬ様に生鷹の様に飼也。扨次日合也。扨追立る鳥なくばとばせて見する也。若心有ばとらず共合て心づかせて。扨ちかき鷹をゑらび合事也。若亦内杯つかへ候て。鷹ねまりは心なき事も有べし。亦なづく様に見へて。荒く鳥心なきも可有。是を能々見分る也。

一鷹鳥を取ずして舞事

まわせぬ薬には一唐干米。一ひつじの米。一狸の黒焼。是等分にして半銭を三包にして飼也。其日舞事なし。同又薬には一かしわの鳥の風切羽黒焼にして。一芦毛馬の爪さめにておろし。等分にして半銭飼也。同又薬には一なまりを少粉にして飼也。

一鷹大き成物を取て其後うとむ事

薬に一ござぜん草根の黒焼。一鷲羽黒焼。等分に合調也。

一鷹鳥を取て放事附放し曲の事

急ぎ野より歸りて。大さいはい餌を飼也。藥には一うわふ黒燒。かしわの女鳥の肉に包半錢飼也。必取也。

一思返しの事

眞蛇の黒燒ナ飼也。亦藥に男女共に七日酒を禁じ。朝毎に檜の鉢に小便をさせて。其水そこに鹽の樣にたまり候を取。甘草をさめにておろし。是を合飼也。亦藥に一あいかけ。一まへびの肝。是合せ飼也。飼樣は以前のごく也。

一急ぎ鷹を拵時の藥の事

芦毛馬の三ヶ月骨おろし。餌に包飼也。

一つよき鷹一夜に拵る事

一夜に拵とらする藥の事。一狐の骨。一猫のした。是を影干にしてさめにておろし。等分にして半錢飼。大秘是也。

一鷹拳初に取飼事同鴈に取飼樣の事

是は四佛を念じ。鳥を押しづめ。先三刀切立て三四取飼也。扨もぎながら爪をきよめ。同かほへ水を吹居しづる也。其後足をふみ又たぶるひをなす也。爰に大に口傳有り。

一人をおづる鷹の事竝水雪をづる事

ひとをおぢてとばゝわんとせば。口餌をくわせ過さるべし。若口餌をも不喰ば。夜取る澤の水。こつぼの水を餌にしめし。金を少おろし。天南星是を餌に包かふ也。其後又餌を飼也。水雪をづるには。れいやうの爪を小便に一夜ひたし。其後取上。影干にしてさめにておろし。常にかうべし。水をおづるは必餌かいを近く飼故也。又そゞろをふかざる鷹は必水をおづる也。又ひへたるも餌を飼候も水を嫌也。きりつぼの水を野にて飼也。鵜の肝を影干にして常に飼也。雪をおづるは右藥飼は同前也。雪の上にて丸箸を取飼。雪

の上へひた物取組せて。そこにて心のまゝに六七度もくわすれば。おのれと雪をおぢぬ物也。口傳有り。

一なつき候て新鷹の様成を使事

藥には一雉子の爪。同背を黒燒にして夕に飼て明日又飼也。夕鷹にげ候はゞ。夜の内に飼事也。大形なつき候はず共。一より二より迄は逃べからず。三寄とは合せぬ也

一新鷹の氣こわくなづかぬ事

左様の時はかみの虫を生ながら五つ餌かわに包かふ也。是大秘也。

一鴫取飼様の事

先一番目には左の目の下をかふべし。二目に取たるは右の目の下をかふべし。三目には左の股。四目に左の羽節の根。五目は右の股の根。六目は右の羽節。七目は頭と首の付ねを可飼。是は鷹に毒成によつて。油に鷹醉候間。くわせ様大事と仕物也。

鴫之飼様



一青鷺夏くわせ様の事

雲雀三つ程切ぬき。つめたき水にて洗。油げなきやうにして。扨取たる青鷺の上にて可飼。丸などは少もかうべからず。ゑをも押内をもつき洗たる時。常のごとくに常の餌を可飼也。

一黒鴨くわせやうの事
余の鳥を指かへ取飼也。但余の鳥なくば。持侯口餌を其上にて可飼。餌もなく新敷鳥もなくば。右の青鷺のごとく取飼也。青鷺よりも少飼也。

一鷹のさげ曲なをす事
生鳥を持て三暮も四暮も能取飼也。

一初て鳥取たる鷹の事
左様の時は鳥をしづめ羽組し。能々毛羽をひかせて。鷹に見せて取飼也。扨力餌をかふ也。藥はかしわ男鳥のひくの血を餌三切にしめしかふ也。必力つよくし。重而大物取てもあます事なし。

一鷹ふきに逢事附取飼之野より歸る事
先食をさせ。其いきにて鷹をふかす心にして。藥にははこべのしんのはをもみて餌に包かふ也。

一同取飼て大緒指事
扨もがざる先に急ぎ大緒を指べし。其後もぎて居立べし。扨爪嘴を鞭にて拵。口をすゝがせ。たぶるいをさせ能々居丸むべし。野よりかへる事。大鷹には置綱を指て。ゆがけの緒にとめ。たもとに納べし。馬にても同事也。是は野より暮て歸る時の事他。

一貴人の御前にて鷹に鳥をとらせたると云事
何にてもとらせたると云言葉遣べからず。御鷹取申たるとは申事也。

一鳥心無鷹の事并取忘の鷹取飼事
黒猫の頭。にわ鳥男鳥の影干。何も粉にして等分に合飼也。亦取忘の藥。りろ村くもの黒燒。等分にしてかふ也。亦大鷹ならば男のうろ子。雄ならば女のうろ子を取て餌に包飼也。

一鷹に歸り足緒と云事

是は足皮斗の鷹居て。鳥に合ざる時は。足かわを指に掛て。足皮先を上へして手の内に持也。是も取迯間敷ため也。合時夢々さやうにすべからず。合時足皮先を引のべ。物にさわらぬ様に拵。拳よりするりとぬくる様にして可合也。

一鷹鳥を取たる時の事

鳥を取ながら鷹を居上。鷹匠に渡さば。先鳥の頭を取かへし。左の羽節を引のし。鳥の身をかへし。羽節の毛をひかせて。左の方を上にして。頭の方を鷹匠に渡すべし。

一鈴の指様の事同鈴あげ様の事

先鈴をば鷹に指と云。又はづす事をば上ると云。野にて鈴を指時は。大緒をとかぬ先に指也。上る事大緒を指て後上る也。

一鈴板付様並鈴板の寸法の事

上尾の鈴隱しの下に付る也。鈴板の寸法は上の廣七分。脇の長一寸貳分。下の廣一寸一分。雄には一分おとりたるべし。鷂は此心得にて計べし。口傳。

一鷹草へ入かぬる事

藥には芦聲毛馬のあかを取て黑燒にして。露草のみ等分に合飼也。

一心能鷹を鷹に取飼事

先送り餌を飼。いかにもくらき架に三日糜。幸はい餌を飼也。同組藥には芦毛馬の爪黑燒。銅をゝろし水添是を用也。是にて組事なくば。古き卒度婆をけづりて黑にして飼也。必是にて取。秘藥也。

一鷹に大物をとらせ度と思ふ事

藥には眞蚰肝を影干にして。さめにておろし飼也。同飼樣朝五つ比に餌をかへば七つ比に飼也。右の生肝取樣は。頭と尾とをふまへ。腹をたゝせて。肝の上り下りを見て。腹

をかきさき取也。此薬を飼て。くらき構に縻。五つかい鷹のいれるを本と飼也。薬を飼て次の朝生雀を一口二口宛薬を飼間かふ也。黒鴨は鷹のために大に嫌也。内もつかゆる。但五臓の腑に寄也。合せんとする時。鷹はう〳〵として可取氣色なくば。もみ雀を二口三口飼也。猶秘也。

一鷹に肉當る事附餌詰る事

先ひすいの毛を付。をい相の毛も付。目の前押こみゑくけ太く成。鳥を見こむ時。縦口餌を見ても心に不入。鳥計情に入時。うき心と思ひ。經緒を指とき合べき也。

一肉色見様の事並内をすかす事

肉色黒紫色は悪し。つや能赤は吉。内をすかすには鹿のしだを影干にして。さめにておろし。一こもうつ木のめ。一かうじの葉を遠火に干。粉にして米程に丸し二粒かふべし。

亦法に夏角茯苓何も粉にして銅を少入合也。大鷹に耳かき三つ。雄に二つ。鶚に一つ可飼也。

一鷹つよく肉引たる時餌おさぬ事

薬には麻のみ粉にして。少甘草を入。耳かき一つ飼也。是にて必押也。又薬に白牡丹を餌皮に包飼也。同薬にはめうばんをおろし。耳かき二つ程飼也。かいて後は頓而口へ水を吹入る也。

一山忘薬の事

鷹によりて飼也。天南星の毒を取て影干にして。さめにてたろし。是を耳かき三つ餌皮に包飼也。扨毒の取やうは田水に入る也。

一女鳥を好鷹の事

男鳥を好ませ度ば。先男鳥見する事なし。扨め女計に向鳥をき鳥をへだてゝ。切はねの鳥是を本とす。能合場の鳥成共。引違て不取

様に合べき也。

一鷹暮にかゝりて取飼事
何の上にも有。左様の時は餌を夜中に押拂はせ度ば。鈴を上ずして其まゝ指べし。夜中に餌押拂て持越事なし。

一鷹肉に當りたる時を見様の事
鳥を能取たる時の肉を指にて能さぐり覺へ。又村をしたる時の肉積りを能々さぐり覺へて。村なき時の肉にする事専一也。

一鶴を取べき鷹のとらざる事
但あつかいに寄て取也。藥には土がまのはい。狐頭の黒燒。是を等分に合半錢飼也。但鷹の心をくせば。五はつ草。をけんこし。たんぱん。等分に合飼也。

一菱喰に組藥の事
一鷹の眼。一生鯛の眼。一れい天かい。是を等分合飼也。必取也。餌をば夕に切餌に飼也。同すかし餌には鴉を違餌に作り。雀一つ程先へかふ也。必内をつき拂也。つきて後は雲雀の黒燒飼也。

一人のあましたる鷹使やうの事
藥には夜取澤の水貳雨かい候て。其後大さいはいの餌を可飼也。一五はつ草。白物。れいやうの骨。是等分に合飼也。

一大鷹の雉子に取入鳫を不取事
三日の内に鳫に入る事は。先野折餌を雀七つ程飼事を本とす。一日一夜に肉上れば。其朝はからみ餌を作り飼事也。同ゑゆを細々飼也。同組藥。芦毛の馬の屎黒燒。鷺のすね。犬のべに肉。是等分に合飼也。若亦肉内はならば。なつなのみを粉にして。女のかみの毛黒燒。是を等分に合半錢飼也。

一蒼鷹使に犬聲掛る事
けふありやおう。此聲まぜ〳〵に可掛。此聲

の心は鷹有ニ鳥立ニ。犬まわれと云心也。犬に掛聲大事是也。

一せこつへ寸尺の事

長五尺貳寸。又鷹匠の日通りに切べし。亦鷹匠の笠のはにも當がへ切也。春はきやうの木を本とす。山櫻の事也。狩つへは長三尺五寸に。木は椿也。

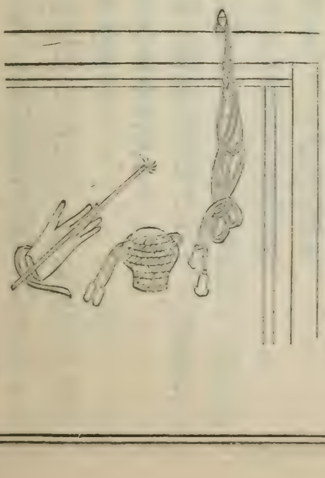
一同せこつへかたぬる事附山言葉の事

勢子つへかたぬる事。鷹のうせたる時かたぬる也。常に努々有べからず。山言葉と云は鷹の追たるをばつかれと云也。鷹の追はずに落たるをばまりと云。又落はまりとも云。又鷹匠せこ行つかずに立たるを留主立と云。男鳥落たる所へ。跡より女鳥の又落たるを娶鳥と云。女鳥の落し處へ男鳥の落たるを聟鳥と云。鷹鳥を草の中へ追込たるを。あなたこなたへ追廻すを草鳥と云。木に居掛り候を木居を取と云。土にいたるを土鯉を助と云也。犬せこの新鳥を追立候を半立と云。鳥をせて見付ても。野にはなしと云を。扨は有と鷹匠心得べし。走り物かつら男といわば。うさぎと心得べし。唯走り物といはゞ狐の事也。澤下りにといはゞ狸としるべし。ほろ〳〵といはゞ雉子二つ有と知べし。

一野へ出る鷹にゆがけと鞭置樣の事

ゆがけを᠎摩たるたかの前に置。鞭を架なり

野出



に指掛の上に繪圖のごとく可置。如斯有ば其日野へ出ると心得べし。

一野すかしの事附足皮とく時事

薬にはかくれにしき黒燒。上野との粉。かみのあか。うつ木のあまはだ。右等分に合。雀に包可飼。同薬に。春馬のたけりしたる下に生出るくさびら成共。又草成共取て黒燒にして。大黄。少女のかみのあか。是を合鳥の身に包。榎み程にして大鷹に五つ。雄に三つ。鶉に二つ。なる瀧の水にてしめし可飼也。並足皮とく時の歌の事。

歸り來む歸りこじとも云がたしさだめし
事の定なければ

此歌は鷹の逃たる時。其鷹の大緒を持て歸り。逃たる鷹の架に大緒縻様に。歌を詠じて縻て置べし。必其鷹出る也。秘也。

一日ふさがりの事附嫌日の事

日ふさがりに野へ出ば。此歌を可詠也。

我が行にあきふさがりはなきものをわれ
になびけよ日めぐりの神

鷹に嫌日の事と云は乙未。戊午。癸酉。戌。此日鷹を人の方へも不出。我方へも不可取。野初にも嫌也。

一鷹にがしてしきふする事

人の上に何れ有共。其時は野より歸り。大緒にてきねの中程をくゝし鳥屋につるし。餌生板に餌ごうしをふせて。餌箸を置。扨心經を一巻よみ。同じゆもんを唱ふ。則じもんに云く。しゆ天てひたい釋。下には四大天王殊には諏訪住吉と七遍唱へ。其後山の神の歌を三遍よむ也。

うかふすのしめし折かけ干花はいくしほ
たれて色をそむらん

是を大に可秘。能々口傳也。

一貴人の先へ鷹居てあゆむ事
少拳を高くし。鷹の頭を我目の上へして。拳をだかせて抱へ。道一ぱいに居なす様にして。貴人を鷹の後にすべからず也。

一鷹野にて貴人馬上御座に鷹上る事 附足皮斗の事
貴人馬上にて脚緒とき給ふ間。脚緒の先馬の頭を打越て。右の鹽手の前にかんにんすべし。是は大緒とく時取はずす事有。大緒ながら直にあがり候へばからまる也。大切也。但貴人の儀に寄べし。足皮計にては脚皮短しとて。足皮の先を出す事尾籠なるべし。脚皮をゑらきわへ取寄て。右の手にて足皮の先を小取返し間を渡すべし。人に寄上下の禮有べし。

一同馬上にて鷹請取事
弓の末筈を指出し置餌を置べし。其時鷹匠置餌を弓の末筈の絃の間にはさみて。此置餌にて置可取。是は使鷹を鷹野にての事也。故に鷹野へは弓を持也。

一鷹に口餌を飼事
すきたるにはきつたてを可飼。是は春可飼。冬うけかい下を可飼也。

一鷹の置聲の沙汰の事
けう／＼と置也。聲數は雄大鷹の位に大小置分る也。間にありやと一聲置べし。さしはもけうの聲也。熊鷹わうの聲也。鶚けうの聲也。口傳。

一置餌を渡事
又逃し取も置餌可指。然に置餌なくば餌袋の引緒をたがみて入請取渡べし。借し取にも如斯。是は昔せいらいしのバ妻を持て。其宿に餌袋に置餌を指て置たりしを。夫のもうけのために彼置餌を肴に擲。夫を待所に。

夫不來してすぐに鷹野へ出るとて。餌袋取に人を遣し時。彼餌袋に一首の歌を書添ておくられけり。

軒端うつ眞白の鷹の餌袋に置餌もさゝで返しつるかな

此歌の心は我をのく心にてよらざりけるか。置餌をさゝで返す心くるしきと云心也。去程に置餌をさゝぬ餌袋をばしのび妻と申也。故に置餌なき餌袋は憚有事にて渡請取ぬ也。たかのつかれを捨て立のくをば軒端うつと云なり。其外鷹言葉は鷹百首條に有之。

一貴人に餌袋付させ申事

後緒を一たかみ〳〵て左に持て。鬼拳を右の手に持て。鞭のうで貫をおに小節の坪に指からみて可付也。

一鷹客人の事附我が鷹と客鷹の事

鷹客人をば如何様成人居たり共。正座へ直するなり。我が鷹と人のたかとすへて座敷に居ならぶには。客人の鷹を我が鷹のたなさきの方に置すべし。

一鷹あまた有時賞翫すべき鷹の事

先我が鷹を本木に繋て。人の鷹を末木に繋がせべし。乍去雄は本木たるべし。

一構の陰陽の次第之事

架をゆふ事。半の月は半にゆふべし。調の月は調にゆふべし。半の月とは正三五七九霜月是也。調の月とは二四六八十極月是也。是陰陽也。

一構のゆひ目の事

春夏は下へ秋冬は上に結ひ。つ緒を構衣に付るは。毛を面にすべし。毛先を木先へして可付。駮かわりの鷹には。毛を面にして。毛先を架に付て。さかさまに付べし。

一構の裏表の事
年の内は竪架より前に可結。春の初には竪架より外に結べし。是は春の初の事也。年を開心也。惣て内にゆふべし。

一若木の構の事附大鷹の架木の事
若木の架とは。鷹野にて春の初に末をきらずして結を若木と云也。笯木の架とは末を切て結ふべし。若木には若鷹。老木には鳥屋鷹可縻。口傳也。

一蒼鷹兄鷹縻べき事附縻樣の事
大鷹のくさりは結て七下二合九。雄には詰て五下二合七。鶻縻くさり詰て三下二合五くさるゝ事。

一染分の事
大緒の縻樣。色々に五色に染分。春は赤く。夏は黄に。上やうに赤く。秋は白く。冬は黑し。是を上へからむべし。赤く青くは春秋は赤を上にからむ也。若鷹は赤を本とすべし。

一構寸尺の事附指架の寸尺の事
高四尺一寸。長七尺五寸。木はくぬ木を本とすべし。桐もくるしからず。余の木ならばわらにて竹の節に可結。々目は雄の架は半。蒼鷹のは調に。末木の方へ結目を下へしてゆふべし。折節何にても取あへず架にする事。末を手なさきへすべし。架を手繩にてつゝむ事。大鷲の架をば右へまくべし。雄の架をば左へいかにも先へ卷べし。架の寸高三尺八寸八分。長六尺。だい架も如斯。雄には高三尺七寸七分也。又長九尺。高三尺八寸。雄には高四尺貳寸七分なり。

一大緒留る露の事并惣而鷹大緒寸尺事
春夏は下へ結留る也。秋冬は上へ留べし。大鷹の大緒は六尺八寸八分。雄は五尺七寸七分。左糸をふさの長短くするふさの長壹寸

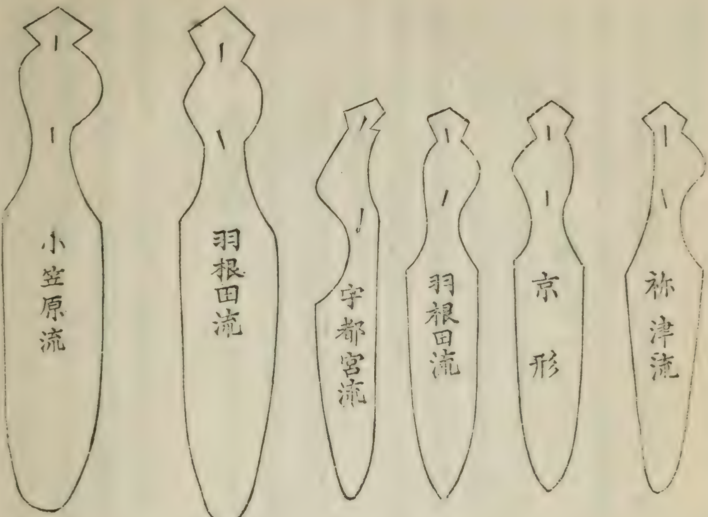
五分たるべし。

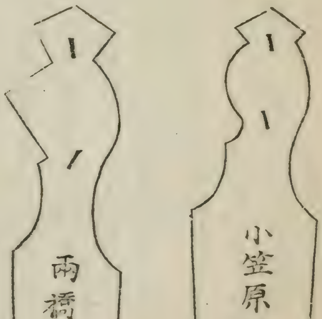
一物而の架またぎの事
大鷹には三寸貳分。雄には二寸八分。打様は糸を七分に分て。毘沙門の眞言を打入る也。打様に口傳あり。

一小つちむすび樣の事
大鷹のは手壹束一かけにする也。雄のは一束にする也。鷂のは是にて積也。結事は竹の節あわびむすびたるべし。

一惣而足皮の寸の事並切やう
大鷹の足皮八寸八分。ほどき一寸四分。但昔の寸は高しとて。二分をとりにする也。雄の足皮は以上七寸七分。ほどきは壹寸貳分。是も二分落しなり。使鷹はひいなかたのけて六寸六分。雄はひいなかたのけて五寸五分也。駿精の脚皮の縫やうは。常に五分高く可縫。紫皮を本とす。







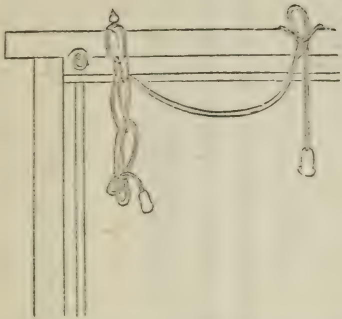
一糸装束の事
先を筆のごとくやにを以てかためべし。惣而先をはうちつめにすべし。若其鷹亂取をする事あらば。其時ねず緒の中を結て。鞭の先をそぎて。其上に鐵緒の先を當て切て亂すべし。蒼鷹に亂装束は。亂取の鷹ならで有べからず。若人亂装束を尋事あらば。鞭の先そぎ目を見せべし。此上に亂装束の鷹には。

鞭の先を一刀そぎて。そぎ目に横さまに刀目を一當して可持。口傳。但小鷹には亂裝束何時もくるしからず。

一白鷹繫鞭置樣並鞭の寸の事

白鷹繫には大緒を一筋くさりさげべし。一筋をば本木に留べし。雄ならば末木に留べし。駿かわり赤鷹同事也。鷹繫て鞭を置事。

白鷹



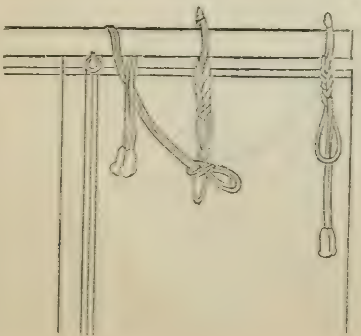
本木の方に架なりに。鞭の先を構なりに。末木の方へして可置也。鞭の寸尺は上分三尺八寸八分。中分貳尺八寸。下分一尺八寸八分。雄には壹寸壹分おとし也。小鷹鞭は三尺五寸也。

一泊鷹繫樣並通り鷹繫樣の事

宿にて泊らずして通るには。くさりたる坪

通り鷹

泊り鷹

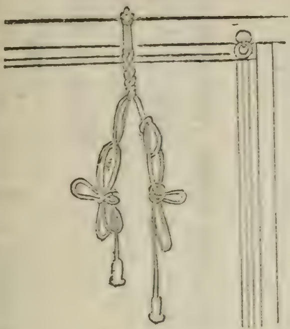


を引通し。大緒先を一つに結て置也。泊宿にてはつぼをとをさずして。大緒先を構に留る也。

一祝言の鷹縻様の事

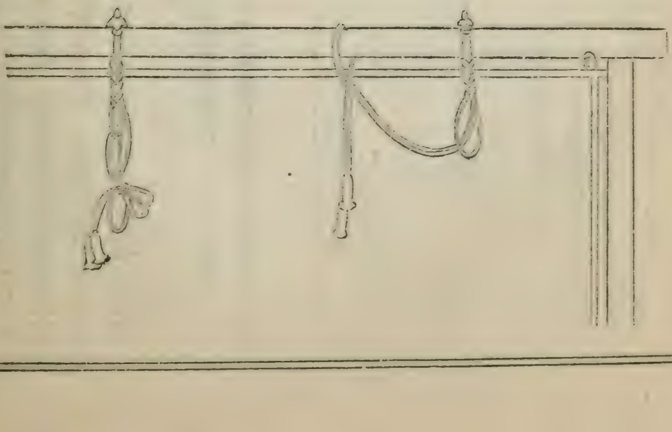
鷹つなぎて諸鎖の事。縻て架ぎわをばくき五鎖三くさりにも鎖て。大緒を二に分て。兩の手に持て別々留也。亦一にも留。是は客人兩人有時。鷹一を二に分て見する心也。

祝言



一構ひとつに鷹幾聴も有時縻様の事

境鷹

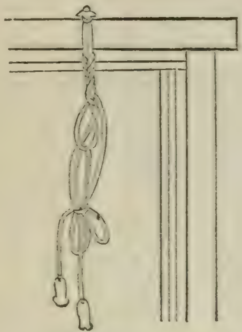


鷹をならべて。鷹匠餘して穈分のくには。我穈たる鷹の本木の方に。大緒留る程のけて。鞭の先を外へして可置。是は人のたかと我が鷹の間を分る意也。

一鷹の位に寄構につなぎ様の事

巣鷹は木先。あがけは本木に穈べし。鳥屋鷹は末木。山歸は本木。若鷹末木。鳥屋鷹本木に穈べし。但鷹のわざによつて有べし。此位を能々心得て可穈者也。

巣鷹本

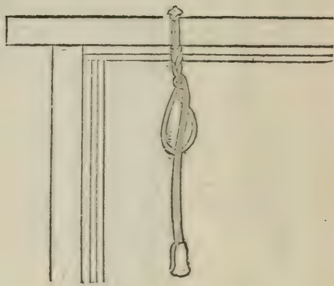


網掛鷹本

鳥屋鷹本



山歸り鷹本



一夜瘵の事
構衣を取て。鷹をつなぎてくさりて。坪へ通さずして。二筋くさりはなして可置。是は用心のため也。殊には外構に如斯也。

一鷹の相かたちの事
黒觜短くば目の前遠が吉也。觜長ば目前近が吉。觜も長目の前も遠ば使にくし。觜短く目の前遠ければ。ましこかをに似也。是も惡し。但心吉。又まびさしの掛り様。くいわれのもやうにより。うけがいくりたらば。へびかをに成。首長く付たる鷹は。ひ骨鷹の相應より少し短が吉。首短ばひ骨の長が吉。とつ尻詰り候が吉也。

一鷹の六豚の事並無病の事附火を燈し見事
目の内毛の立様。內色。矢筈。內の持様。目の色。目よりの如くうれい毛を可立。是を六豚と云也。亦身の毛の立様は。夜水吹て片影より忍て見。痛たる所をば色を遲く立べし。同付る事もおそかるべし。內色は替べし。痛たる鷹はたぶるいなく。いかにも身引をすべし。無病成鷹の矢筈は。餌を持たる時は少開き。不持時はひらかず取覺へべし。又痛たる時は矢筈開き。亦たけのおとりたらば。やはすくいつめ少もあかず候へばたけと心得べし。又內の持様は無病成鷹はいかにもひ骨先に堅く高かるべし。身寄を痛候へば。手先へ寄て持べし。手先を痛候はゞ身寄へよせべし。かみのおち黒燒。栗木皮の黒燒。猪皮黒燒。熊の骨黒燒。人參。甘草。右何も等分に合飼時。朝に一包。晝五包。晩に三包。一包にくじら虫を生きながら一つづゝ入て可飼。能々念を入て。鷹のしらざる様に可飼。同療治。いかにもやはらか成物を以て伏衣を縫。肩寄(騎イ)羽先のちがわぬやうに。羽裏にてぬい

合て。かやの中にはなし置也。其ふせ衣の上より青からしをすりて。火の中にむして。痛たる羽をそろ〳〵とむすべし。二日に一度むす也。治候へばふせ衣を鷹くいやぶる也。其をあいづに伏衣をはづすべし。同療治に。土穴を三尺に堀て。一尺五寸にして五木をたき。古酒を三ひさけ程掛。しきみの葉を是へ入て。彼ほのを丶能ふかせて。あをのけに置て引のべ。次目を直して一日ふせて置也。其暮につめ鳥屋を作りて。はたらかぬ様にして可飼。二七日過て取出すべし。五木とは桑。藤こぶ。桃。いな木。にわと子。是を云也。羽がき鷹にはぬり桶のかわをすみに燒。甘草。桂肉。[心歟]檳榔子。山すげのみ。藤こぶ。せりの根。み山笹。わうばこ。桑木。これ等を能々煎じ餌に付て可飼也。羽かきたるをば則引直し。三火あた丶めよ。同亦藥に猪皮黒燒。古き桶皮と草の節七つ。栗木のはい。かきのから。鯨虫生ながら。右七色等分に合。其内がきがら藥より一ばい入べし。七日に可飼。朝七つ。晝五つ。晩に三つ。同かため藥。熊の骨黒燒。人參。右二色等分。飼様如前。二日飼也。

一股引藥の事附疵藥の事

股痛候鷹は。身寄を痛ば手なさき羽を少持こぼす也。藥には鼠屎。猪油。等分に合。緩々とときて。股の内のきわに付よ。同股しみの藥。かいとうりをすりてうるみ候處に付よ。藥上むすべし。同亦藥万病一藥。熊骨黒燒を三分一入。七五三に可飼。同付藥鼠屎猪油にて。是はあた丶かにして股ねへ付べし。同藥。熊骨黒燒。袖のさね黒燒。土龍黒燒。りうこ錢。何も等分。右能より合可飼。其時のみ虫を一つ宛入て可飼。餌のかいやう。羽がき

の如に七五三に飼也。同亦藥には山の芋をすりて。其中へなべすみを少入て。土りう黒燒少すり合。あたゝめて内股に付。其上杉原をもみて付る也。幷疵藥。天南星。香附子。是二色等分にして。そくゐにてねやして。はこべの汁にてゆる〳〵ときて。疵口に入よ。其上むす也。いきりの藥。土りうの黒燒。かもしゝの角の粉。鹿の角黒燒。あをさしゝの黒燒。是を杉のやにゝて等分にねり合付。其上に紙を張付て置べし。疵藥。しゝの角。かわらけの中へ入て。こはこべの汁をもみ入べし。七度入可燒。其へ土りうの黒燒三分一程入べし。

一足氣の藥の事附羽虫の藥の事

足の腫たるには。天南星水にかわにてときて細々付べし。是にて治らずば。かきの黒燒。小豆の粉。釜の土のやけたると梅干の黒燒。栗の木のすみ。ぢしばり草もみ出し。能酢にて合て。そくゐに押まぜ。右藥等分に合付。上を紙にてはる也。亦足腫候はゞ。鱓魚のとぎを指の股へさし。其上を灸して鳥屋へ入べし。幷羽みその藥の事。きわたの粉。白物二朱。右二色合。いかにも羽をたてゝ。其上に藥をぬり。熊のゐにてとき付候て。其上を銅を燒。鷹の覺へる程やき。其上に藥を付べし。羽虫の藥。たんぽん少。ゆわう少。白物少。右三色熊のゐにてときてあたりへぬり可付。是に朱少加る。根虫の療治。熊のゐ。夏子の屎。ふたん香の油。鱓。是等を合。羽みその見樣。羽節の色赤く成。しるたり候はゞ。うへの養生までにて吉。羽節の色かわらず羽亂れ。羽虫のごとく肉の內より羽ぐきをれ候はゞ。胴より出る羽みそ也。胴の內より藥飼べし。羽虫の藥の事。たくらくるみの

木の皮。桐皮。桃木皮。是を小便にひたして。羽の根へ四五日ぬる也。

一爪ぬけたる時の藥幷かうかと云病事

ぬけたる爪あらば指べし。それなくばつくり成共鵄成共爪を拔て指べし。此藥にはかたつぶりの黑燒。かもしゝの骨の粉。きりん血。虎の爪の黑燒。右等分杉のやにゝてとき付べし。其上をゆやなぎの皮にて包むべし。かうかと云病の事。眼の內より目のごとくうれい毛を立。餌持より上息荒く。鷹身をほそり。しゝ色赤く。肉かたく。內色はひの臟に病の有ごとく赤くあわ立。矢筈ひらき豚早し。內詰て持也。藥にはりうのふ。一朱。茯苓。一朱。くわつろうこん。朱中。ひつち米。朱中。ちんかう。一朱。のすり鹽。朱中。ふくりうかん。朱中。れいてんかい。一朱。金箔。一枚。右粉にして餌に包み。七五三に可飼。水には藥水にて可飼也。

一尾羽をい留りたるを出す藥の事

羽の留りたるを出には。かいての紙にひり付たるを取て。羽ぐきのぬけ候處へ一つ入て。其上に紙を張付て。不出樣にして置べし。羽ぐき落す藥。羽ぐきを切て。其中へかみのしらみを一つ二つ三つ死ぬ樣にかみおちを入。其上に杉にても檜にてもつめを打べし。鷹の羽をい留り候には。夏子のたねを桑のわか生を三にわりて。子たねを一粒はさみ。檜木の釘にぬてを付て指べし。又尾羽を引ぬき候を頓て入る。藥しやれかうべを粉にして白物を合。かつほ草をもみ。其汁にて此藥をとき合。羽の根にぬり。木の穴へ入候て。糸にてゆひ付て可置也。

一煙ながしの藥の事

目にあわ出。鼻より水のたる事有。ところを

きざみ。水にて出し。細々かほにふき。其後ひき餌をさせ。夏子のつばめの黒燒。人參をまぜおろし。等分に合。かうがいの耳二つ可飼。

一口の内に出き物の藥の事附かうねつの病事

口に出き物有ば。黄連おろし。めうばん少。人參少。右雀の血にて丸藥にして。榎み程にして衣に包。水ごきをせぬかみよりにて口を割。其に結付。一夜麼可置。餌もぎ候には不可飼。かうねつの病はむな餌をはみ。うれい毛を立。目の色うすく。内にはあわ立。いかにも息はやく矢筈ひらき。身の肉赤く内持やわらか也。

一三なん一藥の事附し〔た歟〕さり氣の事

三なんはいかにも赤き犬の頭。亦はきも尾別々に燒て三つにして。氣がいなき鷹には。頭と肝をすごして尾を少入て。鴉の渡らぬ先に飼つかふべし。下り氣の藥。くるみのかうの中へはつ一粒宛入。黒燒にして能やけ候時分。こはこべの汁を能もみ入取上て。雀の身所に押丸めて可飼。

一取草の事

大はこべ。湯柳。いのこつち。にわとこの木。つるはこべ。杉の葉。ぐみの木。鹽俵。酒のかす。

一早風見樣の事幷藥の事

鷹ふるい。目の色うすく。うれい毛を立。眼泪ぐみかわき。身の毛を立。やはずひらき。内色青し。うちひらいてどうの内よわくつくべし。内よわく持いるゝ也。藥には檳榔子。萬病一藥。金箔。沈香。せみの黒燒。人參。甘草。右等分合。雀の身に包可飼也。

一小風見樣の事幷餌違見樣附藥事

肉赤く。はしかわき。身の毛ちゞみ。ひすいの毛を立。日こく内をさげ。矢筈くいつめ息はやし。餌違の見様は。鷹かほはれ。よだれをたれ。腰抜息くさし。豚ひらきくろ内みだれ。持たる内手に當らず。藥には梹榔子のこ。　かつほの黒燒。　梨子さね黒燒。　金薄。みそはぎ黒燒にして。何も等分飼。水にはくれ水にて餌をしめし可飼。其中にも金薄をすごすべし。かつほの子三分一入。亦人參も可入。そふ水にてせりをもみ出し。ふち水細々可飼。一藥に雀の身にて包。縦餌を打共。藥のほぐるゝ如くに包。細々可飼。亦鹽けを喰たる鷹も。餌違の見様も。鷹すくみて鼻よりたる水白くして鷹ふるふべし。酒氣も同事。右の藥。土くれ。鳩黒燒加ふべし。亦藥にくづ。あんにん。百草等分に合て。餌皮に包可飼。あんにんをばういすにして取上

て押合べし。亦藥。串鼠をさめにておろし。ほそのを粉にして。かうがいの耳三斗口へ入。みつなをもみ汁を口へしぼり入べし。惣身へも吹掛べし。砂の上へ水を打。其上に鷹を可置也。亦藥に干鰹黒燒。ほそのを。土りう黒燒。梨子のさね。鷹の頭の黒燒。茯苓。かん生。をんじやくかう。ひやくし。梹榔子。何も飼。汁は三節の水。是は竹の切目の水也。亦藥に。七月佛に水を向たるみそはぎの花黒燒。一朱。干鰹黒燒。一朱。梹榔子。一朱。ありのみのさね黒燒。一朱。たうのわうの丸肝とは。人の屎の野にされたるを黒燒也。茯苓かん。一朱。せりの粉。一朱。萬病一藥。一朱。萬病一藥とは人の舌をぬき影干にして。さめにておろし藥に加へ。金薄。十枚。銀薄はいか程も可入也。口傳多し。餌違の見様。内をたら〳〵とつき。腰ぬけかほ腫よだれたる也。又

目を見出したるは療治にかゝわらず。幷餌水の事。田のくれ水を汲寄て。其中へ人參。甘草。檳榔子等分につきざみ入也。せりの汁をもみ入る也。餌を喰ずば。右の餌違の藥を鳥の身にて丸口をわり。其中へ右丸藥を入て。かい汁を中へ絞り入也。鷹の置樣は。土の上にいかにもひゆる所に可置。夜も風の當る所に雨の當らぬ樣に置べし。口傳。

一鹽氣酒氣を喰たる鷹の事

鹽氣酒けを喰たる鷹すくみ。はし白成べし。豚は餌違のごとく也。

一だうけの見樣の事幷藥の事

だうけは矢筈くいつめ內さけ候て。持四毛を立。鷹指うつむき。餌押かいなく。色黑く內たけちかし。同だうけの見樣。矢筈ひらき。內持やわらかに息少見へ。內色あしく打きれしてうちたけちかし。同藥には人參。一兩。甘草。一分。茯苓。一分。かんしつ。少。熊笹の葉。一葉。大ばこ。廿二葉。つばめの左の羽節。一ッ。同藥に人參。萬病一藥。きりん血。右等分に合七五三に。同藥。檳榔子。人參。きりん血。せりの粉。銅せんくづ。金薄。かき。甘草。右八色等分。其內人參金薄多く可入。亦銅せんくづ入口傳。

一鼻毛の事幷うちたけの事

鼻たけの病。煙を喰故也。あかりしやうじ七重へだて。火をたくべしと云り。鼻たけの藥には大根の先を細くけづりて。はなの穴へ入。はなすをくるべし。芦のすを以鼻に當。中皮のろを吹出すべし。夜々架に糜べし。又目の前まきめきらすべし。又鷹の口を明て見ば。內より外のすのとをり。さかひ貳つ有を。くわしんにてあたゝめて。たかなのはをもみ口へ入べし。丁子をも吹入べし。同

藥には丁子せきしやうの根粉にして等分。油を口から鼻の穴へ入。外の穴よりもかみの油を入べし。其後藥吹入べし。其後くはしく目の前の左右を可燒。鼻つまりたらば。も草にて七火八火可燒。同藥にんにくをすりて。朱の粉を衣にして小豆ほどに丸。日に三粒宛餌にまぜて可飼。蒼鷹には五粒可飼なり。幷内たけの事見樣。豚ひらき内持あがりやわらかに。持内たけちかく。うれい毛を立て鷹少そる也。

一せこと云病見樣事

見樣は身の肉やせ落。指の肉こけ。色黑毛こわく成。矢箬くいつめ内持やわらかに鷹ふるう也。

一鷹の中風の事

俄に腰すくみて。腰なへ目の色うすく。矢箬くひつめ。内持さけて持内色靑し。

一胴より出る足氣の事

すねのうちかたに筋有べし。矢箬ひらき。内持かいなく持也。但歌に云く。

あふあしをこゝしをならずとがならず胴より出るむらさきの糸

一毛かりと云病の事並藥の事

毛をかり落毛かれと云は。をのれと毛のしべかれ落。羽筋殘豚開きて鷹熱し内色靑し。藥には熊のゐ。白物。大へきおろし。はこべの汁にてとき。くい切候羽ぐきをぬき捨。間々に打はりをして。右の藥細々可付也。同毛かはりの藥。生子のへその緒。へびの衣黑燒。せみのぬけがら黑燒にして。女のかみのおち黑にして。栗のいが黑にして等分に。だいならばかうがいの耳に七ツ。雄には女子のへそのを。〔雄歟〕第ならば男の吉也。

一わく毛と云病の事幷藥の事

わく毛は脊黒褙にしてこふく成。藥に沈香。朱紙。 白物少。右三色粉にして鷹のかほに當らぬ樣にして煙に當べし。

一ふわと云病の事并藥の事

身と皮の間ふくれ。矢筈くいつめ内持やわらかに。目の色黒。目のきわこく成て。ひすいの毛を立るなり。亦見樣。身の皮ふくれ。かいるの歌袋の樣になる也。物縫針に糸を付て。糸にきわたの粉を付て可引通。

一ふわけと云病の事

身の肉はれ。つぶし候へばあわ出。ふわにはあわ出でず。風斗出る。ふわけはあわ黄色にして。つぶし候へば跡ひかず。目色うすく。うれい毛を立。たぶるいせず。矢筈ひらき内持開き鷹〔か脱〕いそる也。内色青し。是はひへと可心掛。ふわは熱也。ふわくの藥。 あせん藥。きわだ。 熊のゐ。是こはこべの汁にときつぶして以後可付。はり口を張。

一目分けと云病の事并藥の事

口の内にけしの樣成物出來。舌され息くさくうれい毛を立。息相しづかに。矢筈かたかた斗うごき。一方ははたらかず。鷹少けくるわず。時々あくびをして。内色けぶりを喰たる如に肉かたく。朝はふるうべし。藥には人參。 つばめ黒にして。甘草。 檳榔子。 れい天がい。土りう黒にして。先土りうの黒を先にふきこみ。其後右の藥可飼也。

一目わくと云病の事

目の前腫。とばい候時。目の前より淡出て。時々きや〱と云。矢筈ひらき内持やわらかに肉色黒し。是は烟を喰候鷹のごとく。肉色も同事。四毛を立て。たぶるいする樣に身の毛を立たぶるひせず。藥にはなまところをきざみ。其中へせきしやう。りうのふ。少。

ぢやかう。少。右水に出し吹べし。又はぢかみをすりて。水氣のなき物にてときて。かたさきにぬるべし。扨まぼにあわふくれたらば。かたひるに鹽をつけてまぼに可指。すきたうすも吉。

一はしり火の病の事并藥の事

目の前ふくれ。身の毛先ちゞみ。觜爪かわき。身肉赤く成。矢筈常よりしづみてつく。うち黄にして。持内も手に當らず。そゝろを上る時。先さきに水をあぐる也。藥には沉香。大黄。かんしつ。金薄。せりの粉。萬病一藥。右等分に合て。すゞめの身に包て可飼也。

一胴打たる鷹の事

手先を痛候へば。身寄へかたぎ矢筈手崎うごかず。內持も手崎をのけて。身寄へよせて持なり。身寄を痛たるも同事也。

一そりと云病の事并藥の事

鷹あをのき尾をそらし。內を前へ足にかゝるごとくにつき。矢筈手に當らずして。目の色こく成。うれい毛を立べし。

せりの粉。銀薄。一枚。萬病一藥。人參。きりん血。くわつろうこん。甘草。ふわう。かんうち。

右雀の身に包。七五三に可飼。

一身痛たる鷹構にすゆる事

身寄を痛たらば手崎の方をひづむべし。手崎を痛たらば身寄へひづむべし。別足は同事也。

一目の內の病の事附つきめの藥の事

目打藥には墓黑にして。大鷹ならば男子のむちにてときて。雄ならば女子のむちにてときて。痛鷹の羽つむしにぬるなり。又熊のゐをも同物にてときて可付也。つき目打目

の薬の事。はんせき。一両。土りう黒にして。二分。ぢやかう。一朱。能々すり合。くだにて吹入べし。同目つきたる薬。りうのふ。少。熊のゐ。じやかう。少。女のちゝにてとき。羽つむしに付べし。同亦薬には鳥をこそげ。はづにねやして酢にてとき目に入よ。但少こがるゝ程加様にする也。

一尾をしげくひろげる事

是は鷹のと尻つきたる也と心得べし。

一鷹の蜘手に病の有事

蜘手の裏あたゝかなるは其方に病有。両方のあたゝか成は内有と心得べし。同魚の目の事。魚の目を焼候て三日計過して。魚の目をぬき。其上を銅のくわしんにて少當べし。同疵薬には大根をおろして。汁にて疵を洗て。天南星をおろして。疵の上にひねりかけよ大事の疵ならば。伏候て鞭の先にて洗。是も大根の汁にて洗也。扨薬付けべし。

一草替と云煩。蕎の根の毛を立て血屎を可立。薬は紫竹の節をこそげて。はじかみ。甘草。是を粉にして等分。大鷹に小豆ほど三粒。雄には二粒。また山鳥のかつを肉。蟬の影干。小鳥のかつほ肉粉にして等分飼。

一鷹を舞はせぬ薬の事

眞虫の生肝影干にして。もろこしの皮をむかずして。宵より酒にひたし。朝取上てかわかして粉にして餌に付可飼。大鷹には小豆程にして三粒也。雄には二粒。鶻には一粒半可飼。雀鷂には鶻程餌也。其後七日此薬かうまじき也。

一胴氣の薬。甘草。人參。茯苓。はこべ黒にして。をばこの黒。沈香。しゆく地黄。黒ぢやかう少加る。是を飼なり。

一鷹息荒き事幷胸餌を押事

息の鷹には川芎。人參。夏角。是等分にして飼也。亦藥。舌を出し息荒き鷹に。生子のかに屎。あをかいるに合飼也。亦息氣に白牡丹黒にして。柚のさね。川芎。てらつゝきの觜。是を等分に合。鳥の身に押合三包かうべし。常に兩に當べし。亦桑の生木を燒。息に當てふかすべし。常々此養生すれば病おこらず。幷胸餌を重くはむ事も。心むづけたると心得べし。

一血虫藥の事附から子さんの事

血虫の藥には栗木の黒にして。一兩。けんこし。二分。白物。半錢。人參。一兩。甘草。一分。せん大黄。一分。是を調合して可飼也。幷から子散と云藥。猿のゝうを取て板に付干。一兩。人參。一兩。甘草。三分。雀の黒。三分。きりん血。三分。虎肉。一分。鵄頭黒。一分。沉香。一分。ひつぢ米。二分。からす瓜根。一分。大黄。二朱。れい天かい。三朱。せみの黒。二朱。有のみ黒。二朱。しやうべん。二朱。万病一藥。三朱。せりの粉。一朱。茯苓かん。二兩。たうき。朱中。土りう黒。一朱。かき黒。一朱。串柿さね。一分。金薄。五枚。銀薄。五枚。ほわう。一分。かんかち。三分。沉香黒。朱中。鰹黒。朱中。以上。

右いかにも粉にして。其以後能煎じ。こわうゑん程にねりて。なづけべきと思ふ時に。口餌に細々可飼。居事惡し。能口餌の有時に。鷹の機嫌を見て。拳にまだい度と思ふ様にして糜べし。氣の重き鷹には五八草少。たうの王の生肝等分に合加へ可飼。餌かさを飼。外構に糜べし。大き成鳥を取たる時取飼様。ひ骨崎可飼。羽節の根は不可飼。又喰度と思ふ様は丸さきをかい。宿へ歸りて增餌をかい候様に。あちない様に可飼。三邊一ッ藥。いかにも赤き犬の肝をば肝。又頭をば頭。尾

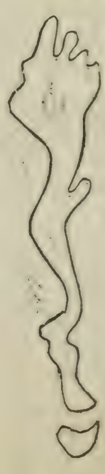
をば尾と別々に焼て。物をとらすべきと思ふ鷹には。いかにも肉を當。大成物に合べきと思ふ朝。鴉の渡らぬ先に。雀の身にて可飼。たうの王の生肝加へて可飼。

一内の見様の事

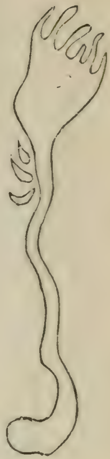
此内吉也



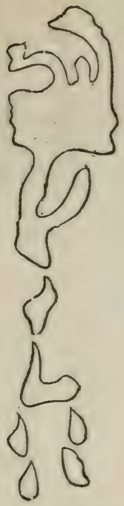
此内は先胴を痛たる内とす。薬には万病一薬。金薄。人參。少。きりん血。少。せりの粉。少。是合可飼也。此内はたけのおへたる鷹つくべし。



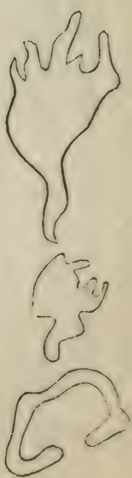
此内はたけのおへたる鷹つくなり。薬には澤蟹の影ぼし粉にして。かた鹽をぐみのさねと右合。またゝびのつるを煎じ。其汁にて餌をしめして飼べきなり。



此内はひの臓の煩。又胴を打候鷹の内色如斯。薬には金薄。甘草。銅のせんくづ。梹榔子粉。かきの黒。人參。大黄合飼。



此内は煙を喰候内色。亦は悪餌を喰候内色如斯。薬には夏子のつばめ黒にして。金薄。梹榔子。等分飼。水田のそふ水にて可飼。



此内は惣の臓に煩有鷹如斯内つく也。薬には人參。甘草。りうこせん。銀のせんくづ。かんうち。右等分にして可飼。息荒くさうがう悪敷は薬不可飼。但見切事大事也。

併内をかすかす薬の事。源氏の薄霜。うつ木の青はだ。かみのあか。かうつけとのこ。少。さいかじの青はだ。茯苓。少。右等分に合可飼。併内をすかす薬の事。苓茯を能茶に合。餌に包飼也。

一古うちつかする事

荏の油を芦のすにて尻に吹いるゝ也。
一萬病一藥の事
少人の舌を切て能水にて洗。細くたちわり。人參。甘草。せり。くれ水にても出し。梹榔子入て此水に掛。七度ひたし。其後影干にして細にして。飼時人參甘草を加へ。見しらざる病に其まゝ飼也。同萬病一藥。雀かくれのあさ。芦毛馬の血にしめしほし候。又山澤架にも萬病藥也。
一內もちつきたる時の藥の事
茯苓かん。少。かんうち。少。金薄。きりん血。くわつろうこん。せりの粉。人參。甘草。右何も等分に可飼也。
一骨續の藥の事并あきれの藥の事
先骨次には熊の骨黑にして。しゝの角のねさめにておろす。古桶かわ黑にして。かみのしらみ生て。右の四色雀の身に包。細々可飼。かい水には女の指合の血あらわて可飼。をれ候上を湯柳の皮にてくつろがぬ樣にして。かもしゝの角を粉にして細々可付。大形付たる時。取草にてゆで可洗。此取草此書物の內に記す者也。同骨續。りうこぜに。芦毛馬の爪。くわん草。是を粉にして合付。檜にてはさみ湯柳にて卷也。同骨續かた。貝がらを黑にして。熊のゐにをしまぜ。かいとをりをもみ。其にくるみて卷候上をも湯柳をもまく也。并あきれの事。藥にはとつ手はれたるにはかんすい石。こもうつ木のもへ。からむしの根黑。猫の頭。是を黑にして能酢にて合付べし。酢無ばはこべの汁にても。又足氣にはたこのふをときて可付也。同亦天南星粉にして猪の油に押まぜ付て。上にかねを少當よ。亦松やにゝ雉子の油を押合付る。是もかねを當よ。口傳。

一鷹に餌をうたする藥の事
馬の尾にて口をわりて置べし。亦せりの藥をもみても可飼。

一手さき打たる鷹の事并後打候鷹の事
手さき打候鷹は。架に糜見るに。幾度も打候方の手袋を引べし。又ふくら毛を立て。痛方へまかりていべし。或は打たる方の目をしげく見る也。料治にはそくせんの穴を灸すべし。身寄の方も如斯也。亦後の筒を打たるは。尾たゝみをよわく。尾を重くあつかいて。鈴ふりをする也。又しとゞ毛を立へずして。頭を常にさげて。目をかけてねむる也。料治にはようせうの穴を灸すべし。

一をへ物の有鷹見様の事
構にいる時曲ている也。押直して見るに。又は磯はみなどして更にすぐにいざるはをへ物有と知べし。身寄の方に有はみよりへそばみ。手崎に有は手さきへそばむ也。又内を持て知事有。是も口傳なくては心へがたけれ共大形記也。内に當りて見るに。ひ骨のはづれより四方へかたく平にして。板杯に當る様成はをへ物有としるべし。内をつくにねばりて幾度にもつきゝらば惡也。

一身を打たる鷹見様の事
そゞろに身の毛を立。肉は有ながら更に病たる鷹の様に見へて。目の見返しことにすぐれたり。又新鷹なれ共。俄静に成てとばう事なし。筒にても頭にても打て病所の毛を立る也。又身引をするに二の躰有。身を痛てする身引は俄にをどろく如し。又新鷹のつよくとばいて後にする身引は唯常の如し。心を能々靜て見べし。

一餌をはやく押さする事
すきたうすを粉にして。鷹の口に一せん許

入て。ぬるみ湯を可飼。亦餌に包ても可飼也。又薬。生成麻のそひを取。其下成皮を餌に包餌也。

一けつしたる鷹の事

料治にはかみの油をくくみ。よしのすを以て吹入よ。余りつよく尻にふかぬ物也。卒度〳〵吹物也。

一いれ薬の事

たかなの葉の銭の大さ成をあぶりもみて。舌をかき添。うすきゑかわに包飼也。又まりこの薬をもみて一ぺん飼。つよくいれらかすには。かきの上に有すゝをかうがいの耳一斗飼也。是は生鳥用意なくば鷹の命有間敷候。生鳥を可持也。

一鷹にうたれたる鷹の事

薬にはかいたうりをもみて。かわにたて頭に吹也。外架に縻也。同薬によて六のはをすりて。上をこぼして。おりをかわに立て鷹に吹也。

一くそたけと云病の事并ゑふと云事

屎たけは鶉の羽をはいに焼て。白物を等分に合。せうがのあぶらにて可飼也。かみ油にてもとき。餌に包ても飼也。同料治に人參。甘草。つばめのかへし合□。鶉の羽黒にして。右合。此うちつばめの屎三分に。人參。甘草。鶉の羽の黒三分一也。并ゑふと云は。鷹を使に出る時。雨風のとき鷹を入る物也。

一鷹のはちかをしげくする事

薬にはうし虫を餌に包て。大ならば一つ。ちいさくば二つ可飼也。

一胴内胴たけしげり氣に飼薬の事

むさうかんとはあちひの木なるいた也。是を取影干にして可飼也。「諸病に可飼薬の事。鮭のひずを影干にして可飼也」万病一

藥也。人參。甘草。茯苓等分に合。持藥に可飼。

一人參散之事

一沉香。一分。　一人參。一兩。
一甘草。三分。　一麒麟血。二分。
一桹榔子。二分。　一くわつろうこん。三分。(ニイ)
一虵骨。一分。　一金薄。十枚。
一土龍黑。一分。　一太鴉の黑。二分。
一四十草。二朱。　一茯苓子。二朱。
一ひとて米。三分。　一沉の黑。一分。
一蘆毛馬爪黑。一分。　一虎肉黑。一分。
一龍腦。少。　一虎舌。少。
一紫檀。一分。　一白檀。朱中。
一銀薄。十枚。　一ヂャ香。一朱。

右何も合蜜にて丸鷹に可飼也。此內源氏のうすずみ。一分。源氏の薄雪。一分。れい天かい。二分。源氏の薄雪とは小便の鹽の事。同うすゞみとはしやれかうべの黑燒也。右の人參に是を入べし。

一血下しの事

一はつさめにておろす。火を取。一大黃。一白物。毒を取少なかへ。

右合○是程に丸。衣に金薄をする也。大鷹に三粒。雄に二粒飼也。そくい水には熊のゐを出してのべよ。

一餌生板之木并寸尺の事

梨子の木。榎も吉。廣八寸。長一尺貳寸也。

一餌の作り樣の次第の事

肉を上べき時はくれめに作也。又ひかせべき時はこざいはいに作也。赤內をくるべき時は大ざいはいに作る也。とうしの餌の作樣。かどを立て四角に鷹の口にはゞかる程に一切れ。大ざいはいの中へ可入。餌かさを飼。餌能しぼらずしなりとして可飼也。

一骨餌を作る次第の事
鷹にそゝり上させ度ば骨餌を可飼。左なくば羽鳥を捺かうべし。鳥の羽を能々細にきざみ。生鳥の血にしめしかきまぜかうべし。

一鞭水飼様の事并餌の洗やうの事
直にぶち水をかふ事わろし。取たる鳥の頭の内へしぼり入て。それをすくわすべし。餌の洗様は使鷹には血の氣なき様にあたゝかにしてかうべし。二つは過たり。三はすくなしと云事。此洗飼の心也。

一鷹に飼問敷餌の事并餌汁の事
鵃。鳶。赤つみ。男鳥。駒をい鳥。惣て又黄なる鳥は何も鷹の毒成と心得べし。餌水と云は。田のくれ水を汲よせて。其中へ人參。甘草。檳榔子。等分にきざみ入て。せりの汁をもみ入る也。餌を食ず候はゞ。右の餌違の藥を鳥の身に丸口をわり。其中へ右の丸め藥を入飼。汁を中へしぼり入べし。鷹の置様は土の上にいかにもひゆる所に置べし。夜も風の當所に雨のあたらぬ様に置也。

一鷹よごす間敷事
二日三日置に水をあびせべし。扨又ひろいを合時は必澁田有物也。左様の時は鷹必ひじに組によりよごるゝ也。能々水をあびせ。田澁を洗をとすべし。

一大鷹伏様の事并ふせ衣の事
大鷹雄抔をば羽を一方宛つゝみ下をも巻也。別の紙にて包。其上をこよりにて女むすびに結べし。尾羽に板をはさむ事は駿かわり計の事也。白鷹をば紙をわちがへにして巻べし。伏衣の寸は肩の廣とぢめ三寸。とぢめより下六寸。長貳はゞにして三尺五寸。雄の伏衣は肩の廣貳寸貳分。本ゆひこよりより。とぢめより下五寸。長二重にして三尺。

一鶚伏様の事附ふせ衣寸法の事
一方宛包。上を結ず。又押からみ別の紙にて包。其上をこよりにて女結にゆふべし。伏衣二重にして。肩の方とぢ目二寸を本と云。こより房のとぢめより下四寸。長二尺五寸也。

一鷹の病を見生死の大事を見知事
鷹の病は色々さま〴〵其數多しといへども。根本身を打たるより病おこると見へたり。されば山野をかける時は。おのれがまゝたるによりて。身を打事なければ。左右なくやむ事なくして長久成るが。人の手に渡り。あみにて打。或は架にて打。又すへ拳のおろか成にて打。痛を請るとみへたり。此病を見知にも口傳有り。餌を能喰物を取共病鷹有べし。是を兼て見知る事は内に當りて推察すべし。此内にあまたの品有といへども紙上に延〔述歟〕がたし。乍去大形しるし置也。先よわき内は病鷹也。つよき内は無病鷹也。縦つよくても一方へよせて持ば。其方に痛有と知べし。心をしづめてさぐるに。指の腹につみわたなどの様に當るは。時日を移さず病付べし。亦さぐりきへとて。當様に覺へてよわくきゆる也。うせつ出きつするは内よう有と知るべし。亦内を上て持下て持は。何も本の所かへて持は病付と知べし。本の内の有所と申は。ひ骨はづれにせめよせて。いかにも堅く持べし。是は無病鷹と知べし。内をつぐ〳〵に餘の品有。縦遠く内つぐ共。内の上にすみたる水のちり廻は惡也。やせたる鷹の内はよわくつぐ物なれ共。紫色にして内たけ近は下り氣の病付と心得べし。當座病鷹とはみへね共。内の不調ば十日廿日或は五十日百日過ても惡餌を喰。亦肉を引たる時俄に病付也。兼て治せずしては大切たるべ

し。生死は息をつくに随て。十二の尾助をゆるがして。長光の毛を引立ば。何と煩共くるしからず。亦息相よわく共。十二の尾助をゆるがさずして。すくみたるごとくにさらりと立は悪かるべし。又さんせんの毛をゆるがさゞるも悪也。但鷹の様體わるく共。内さへ能ば料治すべし。能見分専一也。

一惣而鷹に薬飼様の事

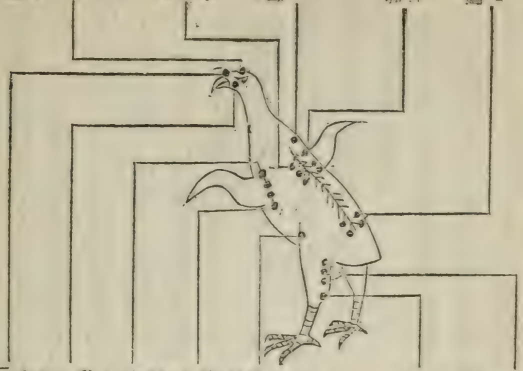
先薬不飼前に。吉餌を二切も三切もくわせて。扨薬入たる餌を後にかうべし。餌かわに薬を能包飼事肝要也。

一鷹の五臓三腑の事

先肝の臓に付たる腑をば膽の腑と云。心の臓に付たる腑をば小腸の腑と云。肺臓に付たる腑をば大腸の腑と云。腎の臓に付たる腑をばぼうくわうの腑といふ。ひの臓に付たるをば胃の腑と云。ぼうくわうの腑と胃の腑たらざる故に五臓三腑と申也。其故は腎の臓のぼうくわうと云字をいばり袋とよむ。脾の藏のいと云字を屎袋とよむ也。然ば鷹はもゝきなき故に。腹にゑを持。腹よりきやして五臓へ渡す也。薬を與る時は。先下へ餌を飼て。上餌に薬を包可飼。餌を消に随て薬を五臓皮肉へ道〔通歟〕也。餌を未喰薬を飼は。内うつけ彌肉やうする也。いばり袋なき故に。水を飲といへ共いばりせず。是により鹽氣をふかくいむ也。諸病に薬當る時。指出して味覺へる物を飼て秘傳有也。味の平成物。或は黒焼薬抔は。如何様に飼てもくるしからず。書まかせに薬をあたへても。其病不見知。くすり毒と成て也。能口傳。

一鷹の灸所の事

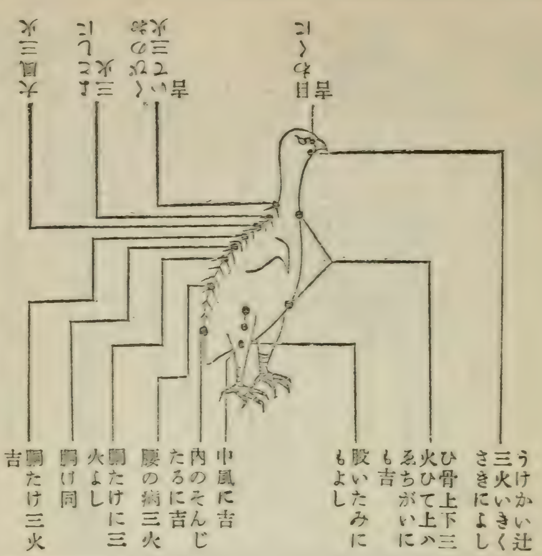
蒼鷹後に四つやいとうの事。せわたをやかぬやうに可燒。せわたの積りはつくりをしめ



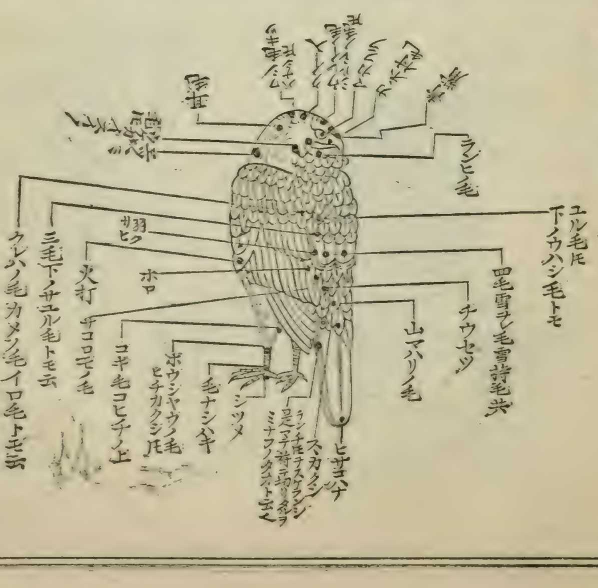
腰三火内たけに吉
脇三火胴けに吉
かた三火胴氣に吉羽持落に吉
かた雨共に物狂に吉
一火まふこいたみ三火鼻に吉
鷲毛三火つかう
股ノ根三火中風吉股ぬけ候に吉
小肘三火雨共中風に吉
下り氣三火くそたけに吉
髆三火胴たけに吉
羽ノ根三火羽かきに吉
亂飛ノ辻三火鼻氣めわくに吉
青觜ノはなれけに吉



耳毛はづれ耳きこへぬに吉
こうれつによし
頭打候によしつかう三火
股ぬけたゝぬ鷹に吉腰かつら
胴けひ骨によし
胴けなどの灸によし
胴たけに吉
うわ風に吉
こせによし


うけかい辻三火いきくさきによし
ひ骨上下三火ひて上ハゑちがいにも吉
股いたみにもよし
中風に吉
内のそんじたるに吉
腰の痛三火
胴たけに三火よし
胴け同
胴たけ三火吉

一鷹之名所之事


ランヒ毛
ユル毛トモ下ノウハシ毛トモ
チウセツ
山マハリノ毛
ヒサコハナ
ホロ
火打
三毛下ノサユル毛トモ云
クルハノ毛カメノ毛イロ毛トモ云
サコロモノ毛
シツメ
毛ナシハギ

ころして引さき。せわたの有所を積りて置。切掛をしてせぼねより可積也。鶉は鳩の積也。このりはひよ鳥の積也。口傳有。

一鷲王神之御事

夫鷹の病は此神のたゝりなり。能々是を祈念すべし。

鷲王神後白



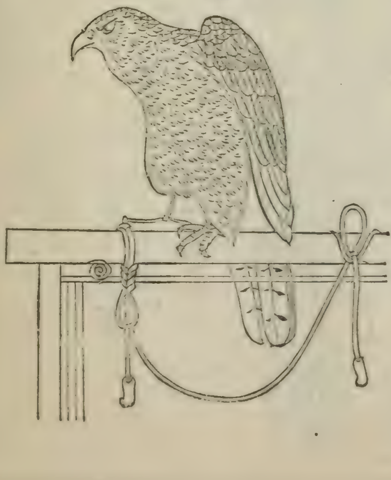
一神前に鷹縻事

架へ寄三度拜して可縻。大緒をくさりて。大鷹ならば木崎へ一筋留るなり。一筋をば其まゝ置て鐘の緒と心得べし。鷹を中おろす時。彼大緒をかねのをとして中おろすなり。鷹斗の時は御にゑ鷹と申也。

一神前に構ゆひ様の事

神の左に可結。御前にも結也。

御にゑ鷹



一神馬鷹の事

鷹に馬を添て參らするを神馬鷹と云也。神の御目に掛る時は。馬引轡をならし。其時鷹匠と馬引と日合して。神に向紋を唱べし。其後鷹を架に繫。本木へ大緒を一筋留る。末木へ一筋留る。如斯兩方へ大緒を留て。本木の方へ三足後さまにあゆみ寄て。鞭を架なりに。ひさくはなを末木へして。本木の方に可置。鷹に鞭を當て押上て。構はつかせて立のくべし。其後申おろす時。本木の大緒をときて申おろすべし。扨末木の大緒をもときて居かゆる也。秘。能々口傳可有也。

一鷹の鳥神へ御にへに上る事

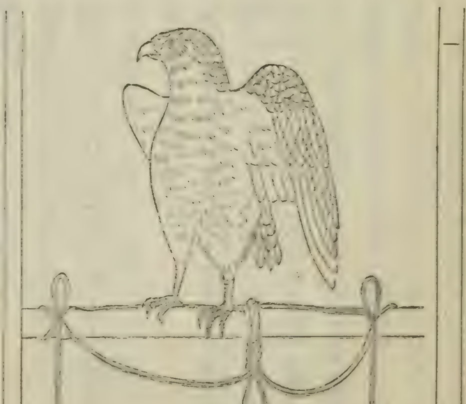
口餌の方を上へして。頭を神の前へ可置也。

一鷹の鳥に網掛樣の事

是は口傳に有。

一鷹の鳥釘に掛やうの事

神馬鷹



かいかたを見せて釘め可掛。

一鷹の鶉雲雀串に挾樣の事

秋冬は上り鶉とて上に上りさまに鋏也。雲雀はねりひばりとて鶉より下に。落雲雀と

て下に鐍也。臺につむ事も如斯。春夏は下り鶉とて下に鐍也。同雲雀は上に鐍也。羽節を引合立て。頭を上へむけて鐍也。加様に鐍て人の方へ分する也。亦鶉を人の方へ參らするに。人物はとつらにて作。あけびの筋を取て煮てかくべし。大さは定らず。鶉の數に寄べし。彼人物作らずば。餌袋にてもひけ子にても遣すべし。共上をとつらにてあわびむすびをして可置。但女鶉を口餌に飼たるを合て包ませて。女鶉をば右の足を。男鶉をば左の足をあつへて。とつらにてゆひて。八分のけて可切。數幾つ成共組鶉を上に置て。其上にあわびむすびをして置べし。鴨の入物あらばあわびむすびむやく也。

一鷹によりて野にて鳥と云事

蒼鷹雄の前にては雉子の事也。鶚鷂雌（コノリ）鷹の前にては鶉の事也。雀鷂差（サシハ）隼の前にては雀也。如斯心得べし。

一鷹構にて死たる時の事

麼ながら足皮をとき取也。といて取はいむ也。

一鷹放時の事

病鷹放には足皮をはゞきのきわより切也。愁有て放には。足皮を中より縫目のきわを切て發也。

一替り鷹見様の事

雪白。白鷹。赤鷹。黒白。眞白。貝譜鷹。雲雀毛鷹。白鷹と云は前に駮なし。後も白してふく輪もなし。唯綿のごとく成べし。赤鷹と云は。前は大黒駮にて後も黒して。白ふくりんを掛たり。眞白と云は。鷹のいしはな毛。かを。首も。鶚の白尾つぐ事。くゞいのきみしらすにて繼也。付様大鷹と同。是も初春には雉子の女鳥にてつぐべし。繼様口傳。白尾は

二繼。紫鷹府毛しほとよむ也。紅葉鷹。一鵃。指鷹。蒼鷹。太鴟。鴟鷲。角鷹白也。取ては唯鷹也。ふく輪はなし。まねふ共長ちのす共云。口傳。貝駮の鷹と云は。貝を伏たる様にて。二重に赤ふくりんを掛。鷹かほはなげ取ては大赤鷹也。雲雀毛の鷹と云は。前の毛は青白譜也。地は少白様なり。ふくりんを掛たり。かほはなげ取ては唯鷹也。其外大白。青白。黒白。ふち鷹。大赤鷹。鴟譜。ふぢふ。赤大鷹にもあらず。雄にもあらずをはしたかと云。又あいす共申也。赤鶻にもあらず。このりにもなきをいし鷹と申也。又はあい のすとも申也。扨雪白見様は九所有。鼻毛。目色。毛筋。面の毛。まわふ。ひしやくはな。とつて。七なみ。是別て白かるべし。青白。赤白。七所見所有り。しほ見様。目色青くうるむべし。前譜はふとくすゞはみふすぼりて有。尾

助は八文字に駮有。かをの毛は小頭より尾のだう迄。紫筋に黒かるべし。ひさしはな有間敷也。本はつみ駮見所成べし。上本のかたは尾助。一方には八文字有り。下にはさけ駮斗有之也。赤鷹見様。凡白の見所也。取て。目の色。かをの毛はねり衣にからすみ掛たる様に上はひかるべし。うわかう迄如斯。尾筋羽筋しつの如し。ひさく鼻ふかく。かを白かるべし。前駮はほう〳〵として。ゑつゝまわりは赤しとゞの胸に似べし。鷹ちさく骨細りかいなかるべし。何も鷹の見所七所成べし。若尾に輪有ば伏てくれは鳥の毛を分て見べし。いろこの様成物うきて有べし。唯鷹には色々可有。鶬に此節有。羽鳶の鷹。鶬の羽の鷹と申事有。[羽鶬]ねとひとはをとび鶉を能取也。鳩羽とははかしの様に羽をさのみひらかず。肩を作りもぢれて。よれかへり〳〵

飛を云儀也。

一尾羽の次第の事附十三尾の沙汰の事

大鷹抔の尾の小鳥尾成をばまし尾と云也。一文字成をば鳶尾と云。しとゞ尾とはしとゞの如く一文字也。ぼだい尾とはけんにうの尾の如く成。十三尾とは手崎にあまる鷹をば嶋ゝ尾と云。身寄をば嶋をと云。鈴の上をば屋形尾と云。又くしの尾共云。ふさ尾共云。かぞへべき事口傳。

一鷹に三長三短の事

首長。ひ骨長。指長。是を三長とは云也。三短と云事。目の前ちかく。毛なしはぎ短く。尾詰り候を三短と云。是六所相たるを三長三短の鷹と云也。じゆんの鷹と云は背より一二三迄ろくに切をばじゆんの鷹と云。其形とひこしく來るをばきれ〳〵の鷹と云也。

一隼の七所の事附はんの鷹の事

隼七の能相とはそりひ骨吉。取手太く長く。大き成吉也。くしのをに駮のなき吉。うけがいに駮の有吉。背背太き吉。鼻ず廣が吉。目の內平にちいさき吉。是七所候はゞ。大鳫菱喰成共のがす事不可有。目に何にてもあれ。目に一つ有をはんのはんと云。二つ有をはんの調と云。兩眼に貳つ宛有を調の調と云。片眼に一つ片眼に二つ有を調の半と云儀也。

一兄鷹を二つ鷹にいるゝ事

藥にはしゆくしや。山すげの根。すいかづらの根。是を等分にして其朝に半錢を二包にして可飼也。

一相子鳥の段の事

馬上にても歩にても合。兩鳫を取と見れば。脇にて目をはなつ。尤二つながら取かためて候共。鷹の方へさわらぬ羽を見分。兩の手を

二つの羽節へかけ。弓手の方の鳫をくるわぬ様にひざにておさゆる也。扨初鳫の羽を組也。亦をさへたる鳫の羽をも組。押ならべて打違に毛ひかする也。若初て鷹を放事有ば。走り寄急ぎ鞭にて打とゞむる也。扨前の如く間をすかさず。二つの鳫を引ならべ。毛をひかせ。其後初鳫の羽を直す也。亦一つの鳫をば以前の如く直すべし。其後我が身を淸る也。水なくば草木の葉をくい切。一切草木皆是佛水と唱へて。九字護身法を高き所にて如斯。同前にて扇か紙を敷。二つ鳥より四佛の鳥を拔也。先初鳫の鳥を二拔上。二つのつのに立る後。鳥の二つの羽をば下二つの角に指立てまつるべし。別ては普賢千手觀音。不動毘沙門。惣而はく〔百濟〕西國。まかだ國。大唐。扨我が朝の諸神諸佛に立。鞭を取脚緒を指。我則四佛と我を念じ。辰巳へ向て鳫

を直し。女鳥男鳥を見分。陰陽に左右を取飼也。若亦同鳥ならば。初鳫を左。後の鳥を右取飼。目をあげ切立。先陽の鳥を二口。陰の鳥を三口。二口の鳥を貳口宛七口取飼。扨二の取飼目を一つになれと押並。打違にあぐる程取飼也。扨初鳫のる〔三字衍〕を半分。後の鳥の丸を半分。二の丸殘り候を一つになして取飼也。取かいながらもぎすへ上げ。かほへ水を打。足緒をふみ直させ。たぶるひもさする也。此時は爪足ををきよむる事なし。其後二の鳥の足を洗。毛羽を直して二の鳥を陰陽にくゝり合。七尺五寸の木の中に掛。二人にかつがせべし。野より歸り。四佛のへいを五色に切て。五本のへいを我共に五佛也。四本のへいをば鳥屋の四方の角に立。取飼様の事。何も常の方を飼。女鳥はあをのけ。男鳥はうつむきに陰陽に取飼也。同掛る事。陰の

鳥をば手先に後向に。陽の鳥前むきに掛る也。余のあつかい共以前の如く也。何も陰陽の心得有といへ共。初の陰〔影〕の取飼也。此段は陰の取かい也。此取飼を知らずして。いみけがれをつゝしみ。三七日の間きんそくをなし。合候鳥の外はび食をもすべからず。是大事の取飼也。もらし候へば則御罰と當事也。扨四本のへいをば四の角に。一本をば鷹縻候上に指か。同くゝりたる鳥をばほぐして。毛羽を直しはな毛緒を付。鳥屋の脇に陰の方をば打（古）むきに。陽の方をば外へむけて掛る也。しめをはへ縻也。縻樣兩方へつりしんのしんに縻也。同鷹を三七日切飼也。扨廿二日には野へ出合也。何鳥成共取飼は常の如也。此時爪觜を淸る也。扨其野歸りに縻事。眞草に結くさる也。口傳有。亦云。相子鳥の佛の御罰と當る事うたがいなし。此口傳なくして相子鳥を合候へば。鷹鳥共に相捨宿に歸る物也。夢々不可有他見。

一鞠のかゝりに構を結事

末木をかゝりに持せ。座敷にむかわせて結ぶべし。かゝりに四節を結分る事。春は櫻。夏柳。秋楓。冬は松也。松は何もくるしからず。殊賞翫たるべし。結目を上に結て。はしをばみぢかく可切。其暮に鞠有べき時は。前に結目をひつときに留也。かゝりの構をひつときに結たるは。必其暮に鞠有と心得べし。

一まびかみ鷹使間敷日の事

正月。九日。酉。　二月。丑。酉。　三月。三日。亥。　四月。未。　五月。寅。卯。　六月。戌。　七月。酉。　八月。十五日。午。　九月。十三日。寅。酉。　十月。十五日。子。寅。　霜月。廿三日。申。　極月。十二日。巳。　右是口傳可秘也。

一長命駁の見樣の事幷短命事

長命駮は尾助に駮を切。四毛に駮なし。ひ骨崎とがりたる鷹陰の鷹也。短命の駮は四毛に駮を切。尾助に駮なし。ひ骨崎引こみたる鷹陽の鷹也。

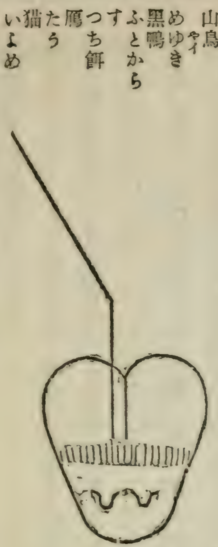
一首長と云事

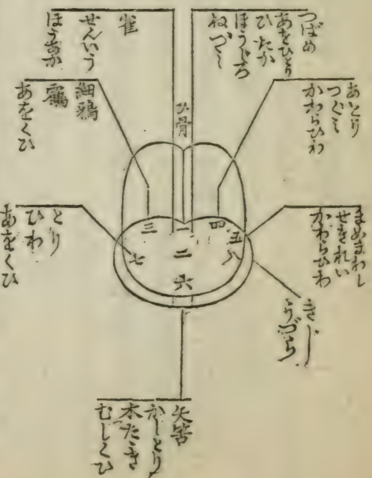
首長付たる鷹は。ひ骨鷹の相應より少短が吉。首短はひ骨の長が吉。戸尻詰り候が吉。

一鷹置たつる時の事

取間敷鳥に合をき。かひ餌を可飼。置餌と鷹の不知やうにすれば。合はなしても渡る也。

一小鳥の内持様。





右何も悪餌。土餌。とうし。何も口傳に有之也。

一鷹の鳥屋入鳥屋出しの事

口傳に有り。

一遠山毛と云事

遠山毛といふは。鳥屋鷹に若毛残し候を。遠山に残したるを云也。

一相木弁とひ相木見様の事
時々きや〳〵と云。鼻より水出。息荒く内持ひらく。矢筈引こみ少上げ。うちたけちかく打ぎれ有べし。といあいき目の色こく成。息音高。目より淡出。藥には萬病一藥。沉香黒にして。せみの黒。何も等分にしてかうがひの耳二つ程入て。日に七五三に可飼也。

一山忘れ八つの口傳の事
第一近架にて鷹を縻事。鷹の心を荒く折間敷ため也。第二ほそむる事は。新鷹の心をうしのふべき故也。第三すかさず鷹を居腰餌を飼事。手うちをくつろげ。また置綱の緒しらせて。鳥心ををしへ立はしらぬがため也。第四飼がんの事は。鷹の肉あわいを知べきため也。第五裝束をなし鼻毛を苅事。山を忘れさせなづけんがため也。第六鷹を詰める事。氣こわの鷹をも飼のべ。日をのべてなづくる事を本とす。むやき鷹をば日を詰餌を詰なづくるを本とす。第七忍立る事は成発の時を習る也。第八丸筈飼事は肉をかゝゆる鷹のため也。亦内を拂ちから餌亦藥を飼。是は鷹の命を延餌也。但鷹の心に寄。此餌かわぬも吉。此八つの山忘を以て心得取飼を本とす。

一鷹に印迦取と云事
鷹を印迦を取程使ては明ふさがり。又罪過何も又不可入也。扨取飼時は人音のなき所の鳥屋に縻。構のとをるを明になし。身の毛を指くつろげ。扨惟數所又病の程。我身隱置て鷹に知られぬ様に。立居に見分事本とす也。扨惟數所有ば如其養生をすべし。亦鷹無相違云告也。

一諏訪のきもんの事
こうしんうちやうすいはうふしやうくしゆ

くにんてんとうせうふつくわ。

一水の異名の事

野上の水とは芋の葉にいる水也。あいきやうの水とは付るかねの事也。夜取澤の水とは小便の事也。しのぶの里の水とは男女のいん也。切つぼの水とは芦を苅たる跡にたまりたるを云。こつぼの水とは榎梨子木ゑんじゆの木のくぼにたまりたる水也。しぶ田の水とはくれ水の事也。切坪は竹の切目水。しげり鼻竹どうけに用て吉。

一鷹犬に子あらさする事

藥にいの子つち。水。金。りろ。是等分飯に能々つきまぜ。三日も五日も可飼也。

一指掛の緒を留る事

先大緒崎を一むすび結べし。常の如に外の方へ二まはして。上より下へ押入てわさに取て。裏のむすびめを一まといにして。わさの方を下より上へ押入る也。

一餌ふごの緒を結様の事

先鬼拳うさぎ耳を本とす。則緒に餌袋鈴袋是等付也。口傳。

一鶚の餌袋に付る道具の事

一番にうちかい袋。二番に鈴袋。三番に經緒。四番に生鳥袋是也。鈴袋の長さ一寸二分。口一寸也。

一雀隼なづけ藥の事

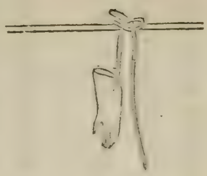
茯苓をかうがいの耳三斗飼也。同組藥。もずの草くきの黒にして。かうがいの耳一分飼也。氣こわくば夏角かう也。いかにも能藥をも飼也。

一隼の藥の事附隼に嫌言葉の事

藥にはとの子。なもみ。うつ木の青み。あざみ。白物。みやうがのみ。是等分餌包飼。嫌言葉はさがりたると云事。落たると云事。是大

に嫌。言葉さま／＼有といへ共。覺へて所にてはやる様につかふべし。

一指掛と鞭と架に掛様の事



一あがけの鷹拵様の事

居なづけ候てなづかぬ間。いかにも能餌をかい候て。其後鹽を日に一たん宛可飼。揉むきけ立候はゞ鳥に可合也。亦獺の肝を影干にして。かうがいの耳五つ。粉にして餌に包可餌也。

一巣鷹拵やうの事

雛子の背と爪とをけづり。ゑにまぜて可飼。

一胴氣の藥の事

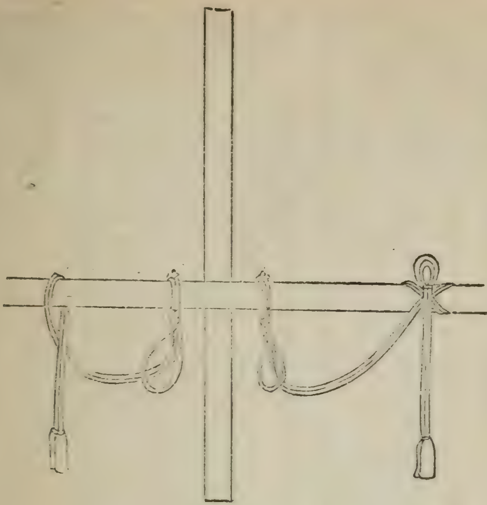
藥には竹の靑み。うつ木の靑み。雀隱しの麻を芦毛馬に七日ふませ。其後粉にして茯苓と銅のすりくずを等分に合可飼。亦人參。甘草。古草の黒にして。銅のすりくず。かまの中の土。何も粉にして等分にして可飼。亦胴を打たるには見様有。たらいに水を入て内をつかせ候へば。胴氣はしづむ也。藥には蟬を干て粉にして餌に掛。紫の汁にてゑを洗かう也。相息にも吉。亦家内に有こけにおんしやくをおろし。甘草に雀の屎。是を取合かう也。亦人參。甘草。茯苓。大黄。夏角。川芎。是等分にして田溝の水にて丸可飼。亦芦毛馬のはらみ子。白朮。はこべの黒。かくれにしき。右梨子の汁にて丸。三包可飼。亦胴打候には麻を芦毛馬にふませ。人參とふなわら黒。かくれにしきを水出て。ゑにかきまぜ

て可飼。
一鷹に虫のわく事
藥にはしやうぶの根をうすく切あぶる也。粉にしてゆわうを添て。鷹をふせてひねりかけよ。其後能天氣に外架につなぐ也。亦白物。ゆわう。くしん。三色粉にして毛を分けてひねりかけよ。亦からすおふぎのね。白物。りろ。何も粉にして酢にて緩々とゝぎ。羽ごとに可付。亦くしん。白物。丁子。ゆわう。しやうぶの根。此五味等分に合。鷹を伏て前後に首股の間。ひき物の間へ能々ひねり可入。しばらくふくさ物に包。しらみをあぐる也。同わくもならば七つ藥指べし。かわらけの粉と沈香可添。必常のしらみには似べからず。新敷かちんをぬらし。二時の内二度鷹を伏て置ば。かちんの香にわくもうつりて皆々ぬくる也。是秘所之料治也。

一鼻氣の藥の事
藥にはしぶき。桂心。何も粉にして芦のすにてはなへ吹入よ。亦たうしみを燒て。かうぶし。何も粉にしてはなの中へ吹入る。亦川芎も吉。
一相木の構の事
末を合て二間。高四尺一寸。二間の間に木なくば。木の合目に木を立べし。是は鷹客人兩人有る時。何も賞翫する時の架也。亦賞翫の人兩人ある時。我が鷹にても二廉有ば合木の架に廉て可見せ。鷹の大緒をば兩の木の本に可留。亦くさりても置也。口傳。
一諏訪の御前に鷹を廉事
昔は白張裝束にて鷹にもしてを切付て參らせたる也。當世は事新敷とてせぬ也。鷹を指上て居。鳥居の木にてすわのもんを七邊唱へ。亦緣のきわにて五邊。神前にて三邊つく

ぼうて可唱。鷹は神の方へ向て可居。鷹二つの時は。神の左右につくぼう也。何も神に向せべし。口傳。

相木の鷹



一早中風の付たる鷹見様事
いかにも静成鷹俄に狂出。内たけちかく。内持やわらかして。矢箬時々うごき息くさく成。られい毛を立。日の色青く成。鷹少も奉の内をしめず。

一惣藥の事
雀をはかりに掛て。其以後わたを抜て。其中へ初のはかり日程人參。甘草を雀一つに一朱入。せり少。きりん血。萬病一藥少。茯苓一分。かくれにしきにて包。かわらけに川水入て黑にして飼時は。一朱はんしん如同可飼。右の人參は雀のわたのおもみ程入る也。

一虫つき打時飼藥の事
藥には檳榔子。一朱。肉果。一朱。白檀。朱中。天南星。同。銅のすりくず。少。ひはづ。少。きりん血。少。金薄。一枚。右何も取合餌に包可飼。

一大風の藥の事

薬には萬病一薬。きりん血。虎皮黒。雀の頭黒。せりの粉。銀のやすりくず。右等分にして雀の身に包可飼。かい水にはまたゝびのつる。もくつう。何も等分に煎じありのみ入。若なくばさね成共可入。ひへたる鷹にはありのみ無用。

一身わけの薬の事

萬病一薬。黒しないの黒にして。芦毛馬の爪の黒。びんろうじ黒。人參。甘草。ふくろつの。何も合。雀の身に包可飼。

一餌うとむ薬の事

萬病一薬。ふくろ角。かもしかの角。うつ木の青はだ。人參。甘草。右雀の身にて包。かい水は子供のゝむ乳にてせりをもみ出し可飼。ねつ有ば外架に繋。あか月がた迄可置也。

一羽虫の薬の事

熊の油。つばめの巣子のくそ。さらんさうぢしはり。是を能すり合せ。虫の上に可付也。

一寒夜の鷹のぬくめ鳥の事

さむき夜のとをのに鷹のぬくゝめとりを
しらぬは人にこそあれ

一大物に組する薬の事

薬にはさいかちの枝。たうき鴉の羽。何も黒にして飼也。亦内七竈の墨。桑の黒水。金。少。何も餌に包て飼也。亦蛐のから黒。芦毛馬の三ヶ月骨に合て可飼。亦鴉の羽と麻白毛黒。丁子。少。添て可飼。亦山すげの黒。余手六のもみの飼も吉。但一粒宛三粒也。亦は梨子の木の東へ指たる枝に。茯苓。蟬。是を黒にして等分に合飼。亦なんもつかう。沉。桂心。等分合飼。亦つばめ巣子の屎に。桐黒にして。獺の肝。是等分にしても飼也。同薬には夏角。茯苓。一ふなわら。是三種を等分に合飼。

秘。

一毛かりと云事

べにざらに下大文字の錢を伏て。其とをりのべにをとり。毛かる所へ可付。同毛かりとはをのれと毛を喰ぬく事有。藥には山鳥のかつほしゝ。つばめの肝を干て。甘草。此三種等分にして飼也。亦つばめ影干にして飼。

一鷹飼を押ぬを押さする藥の事

はこべをしぼりて汁を可飼。亦銅のせんくづも可飼也。

一鶚のすかしの藥の事

鹿の角をこそげて。よいより水にひたし。あさ水をかわかして餌に押合可飼。其後唯餌を可飼。其後山ぶきのずを細にきざみて。餌にまぜて可飼也。亦雄に内をすかす藥の事。雉子のくぼ下を一寸に切て。中のず内に白き油。是をわらのみこにて通せばとる也。能たゝきてそゝろ氣を入。ゆのかんのあつくして飼也。大鷹はかんによいの如斯。同四の内にすかし樣。つきの青葉多をゑに包てかうべし。口傳。

一鷹の足の裏に魚の目の藥事

内外へづばとはれて。物など持ゑすの當りただれてはれたるをば。かなげの針にて指べからず。さいかちの針にてたゞれたる間をそと二三針可指。いかにも血をしぼり出し。其跡にうす色を能々指べし。扱鐵のひばしにて燒べし。かげんは檜に當て見ればくろむくろまぬ程にかんを可指。魚の目の通に二三度も當て。架には竹の上皮をけずりはり架にして。はなし鳥屋に可入。かねのぬるきは魚の目ぬけず。つよきはゆび筋つまる。口傳すべし。二三度鳥やを出し養生すべし。きよつくろひをすべし。血を出して嚔付

いわしのわたを取てそくいに押まぜ。魚の日にも裏にもだぶ／＼と可付。かけはゝきにしてゆびの間引出し。ゆびの間より引出して。鉄爪の上にてゆい可付。亦取手もはれずいたいやうに有は安き也。鹽を等分に合。木わたを煎じ。かの子を可付。ゆびのはらにてよれば。きしはなれて外へぬけ上る也。毛ぬきにて卒度ぬくべき也。其中へ木わたの粉を能ひねり入べき也。如斯料治して七日やすむべし。八日目につかふべし。

一目わくめ事

目腫てあわ立て。目をする事重くせば。藥には鵄の羽黑にして能粉にして酢に入。錢を卅三文燒て入る。腫候方に鶏羽にて可付。をのづから目の内へすり入る也。大方目の前へめわくかゝらば。能々伏て頭をとりて。はこべの汁にて。きわたの粉。こよりのさきにて。目の間に銅の丸ひばしいたまぬ程に指べし。亦くもらばとちをおろして。うこん粉にして女のちゝに入可付　是はこくせきみんにはをとる不可。少年のめわくにはめはじきをすりて肩崎に可付。をのづからすり入るなり。

一鷹使に主をわすれぬ藥の事

甘草。なまみ。茯苓。等分に合可飼也。

一蒼鷹の餌袋に鳥を指様事

男鳥をば左の足を上へ出して。右の足を餌袋の内へ置べし。

一弟鷹の萬の鳥をうとむ藥。れいやうの爪黑にして。ときたうの肝。等分合半錢飼。但れいやう爪さめにておろし。

一あがけ山歸を初心にて取飼時此藥を飼也。鹿の角黑。根なしかづらのみ。等分合半錢かう也。

一鷹大腰の事
腰より股足。惣而胴より下ことく〳〵くなへ目斗はたらく也。是を中風と云也。此煩を請てなをる事かたし。料治には土を七尺堀て。楠。庭床。湯柳。是三をたきて酒を三盃掛。檜の葉をこき入。其はい胴よりすそ斗能々むすべし。其後鹽をつよく煎て。はこべの葉に鹽を包。布をぬらし腰の廻り別足迄能むす也。灸は百ゑ。腰の中。別足のつかい。鐵のくわしんにてかん能比にして當卒度宛灸すべし。扨内藥には萬病圓少程をあはせ。五八草米程一粒添也。大事の病也。能々むすべし。

一疵藥の事
疵藥。亦いたとりの根をたゝき。はこべの汁にてもみ合。疵に付也。

一鷹をさなき心有時の事
鷹をさなき心有ば。山犬のきばさめにておろし。餌かけ飼。

一くれな井の水と云事
くれないの水とは十八より内の女の月水なり。胴氣胴打に吉。

一山中の藥とは山澤かにを云也。萬病に可飼。胴氣に吉。

一鷹の中風見様の事
中風鷹の事見の毛をゆるし。泪をうる〳〵と持也。黒目大くして黄目すくなし。亦は羽たゝみよわく手袋ひかず。とぼう事なし。日面をばよけてくらき方へむく也。大病成時は羽も足も不立してころぶ也。料治にはうてうの穴。こうはくの穴。是を灸して後鷹を細々むすべし。いなりの上に棚をかきて。其下にかなわを置て釜をすへ。桑。そくづ。をばこ。大麥。はこべ。是を能々煎じて。鷹をかちんの布に包て。棚の上に置てむす也。口へ

水をしげく可入。其後新敷餌を少喰て。押込たる時藥可餉。口傳有之也。

一胴打胴たけの藥の事

戸草の節黒燒。との子。等分に合て。藥師草の葉をもみ。其汁にて可飼也。

一あがけ山歸りに常に可飼藥の事

干栗。甘草。山澤かに影干粉にして。一度に茶二包斗つゝみて大に三。雄に二可飼也。

一下り氣の藥の事

人參。わうそくの黒。干栗。是等分にして一度に茶貳包斗程可飼。胴打胴けにも大吉也。

一鷹の鳥喰樣の事

雉子鶉に不寄。燒鳥をば羽を取添いただき。扱々御鷹の鳥とほうびしてたぶる也。但賞翫の人有所にては。正客のほめ候後にほむる也。鶉をば御鷹の鶉とほめ。鷹も何鳥に不寄鳥の名を申てほむる物也。御鷹の鳥とは雉子を云儀也。

一萬病一藥に加減の事

相息には沉香の霜。蟬の霜。是を加る。餌違と見へば。金蒲。檳榔子。鰹の霜を加飼。胴氣にはきりん血。茯苓。金薄。人參。甘草是也。胴たけには澤蟹粉。も草の粉是也。打たけにはれいてんかい。沉香。是を加る。

霧卷

一鷹に胴氣と云事

縦ば人間には虫病の心にて鷹毎に有。善惡是成共。あやまちのためをのぞきて。鷹の煩は先胴氣の心。亦ははなたけ。是は大形鹽けならんや。鹽氣とらんと思ふには。そからゆと云藥也。色うす白してねり藥の樣成。一兩は代五六匁也。是を竹刀にて少取て。湯に出し。能とけ候時鞭にて飼也。鹽氣も取。胴の内の煩おしなべて治也。重藥にはいれいせん

能包てふるいにて餌に包可飼。日本にてはさいしんと云草に似たり。知人多し。是にて治也。灸は頭の付根五つこして。六つの骨の間也。よもぎ候て三火也。にんにくを敷也。亦云。しはろ草を以あたゝむ。但胴氣と知べきには。一には餌を喰得ざる也。日尻少白。日本あか有是也。たてるもつはを頼見そんずる事うたがいなし。二には鷹内赤くしてにほふも胴けと云。三には胴けならば内ねばくして内たけつき得ずして。下りけにもなし。詰りけにもなし。におふ事限りなし。薬にはきわたこくしん一にして焼て。其にかいこうを入る也。うみつぶ共云。日本の内にも有也。亦胴氣の鷹あくびしげくする事有之。第一の薬に琥珀を少粉にしてねりてこし。耳かき一つかへば一度下り。二度かへば二度下。三度は無用。胴の内の病に日本一の妙也。胴氣は内色血をまぢへつく也。薬にはあせんやくも飼也。何病にてもあれ。唯一薬にて治そくすいし。能々粉にして。上皮を取て油取事はずにたがわず。是を粉にして一薬に飼。亦餌をうとむには。からすへびをにわとこのはに包て黒にして。しゆを少入焼てかう也。餌を喰諸病治未見聞。人我に傳へたる也。

一鷹つめとをと云事

あやまちのたぐい也。鴉にうたれ鶴にふまれ。いか成義にて。唯今死を可助薬には。たんにくを影干にして能かみしめして鷹に見すれば。口をあき鷹よろこびとばいかゝる也。其紙しめしたるたんにくを鷹の口に入れば則治する也。是は生物の肝也。

一胴たけの事

薬に梅花を粉にして。蓮の花のしんを粉に

して。〔二字衍歟〕にし死たる鷹のをへ物を取て。此藥を懸て見るに。必きへてうする也。

一胴なりとて胴の内に聲有事

胴なりとて胴の内に聲有て。とばへる度にから／＼と云事有。是胴の内の腑共骨にしたがわず。こも／＼として胴の内煩事專也。藥になつめを煎じさまし。とちうを右の煎汁にて可飼。とちうは唐の木の皮也。猿の肝をさめにておろし。るいその黒燒と等分合て飼也。るいそ能鼠に似て。人のなん產を治す。鷹の胴の中病能治。

一鼻毛と云病の事

鼻毛と云病臓より出る也。內藥にはしやせんしを粉にして。黃蓮少。等分合。餌に包飼也。

一はなやせと云事

はなやせと云病有。たつ頭をさげ。羽をゑませ。惣の毛を立。晝夜共に白鼻をかく事しげし。はなふさがるにあらず。はなの內にのうがこゞりて。目の下にて詰りて鷹息はやし。腊の臓よりの煩也。さうはくひを俄にとりて。土氣を洗煎じ飼て吉。はなみづにも吉。

一しらみ落す藥の事

しらみを落藥。山桃の皮。こせう。丁子。ゆわう。ゑんせう。いしばい。是を粉にして毛を分ひねり掛る也。大小しらみ。わくも。もゝすゝも此藥にて吉。

一鷹の羽留りたるを三鳥草飼事。

鶉の尾。雲雀の尾。つばめの尾。其羽の留候處をぬきてあたふ。三とりそと云草にてかう事三度也。鳥屋の時かへば羽出也。

一鷹に大禁物の事

鳥をとらせ間敷と思ふには。猪の油爪にぬる也。壹年も不取也。殊餌に飼ては惡敷也。

凡此鷹之一卷者。荒井豐前守振秘術書也。緞〔[illegible]〕親子雖爲兄弟。必不可爲見者也。世間雖多荒井流。是秘中之秘藏所是也。

寛文三巳卯年二月吉日　荒井藤七郎

横澤和泉守

享保廿乙卯年五月。借用奥州會津武士木本九郎兵衛勝成而寫之。

北畠具元（花押）

續群書類從卷第五百四十九

總檢校保己一集

男源忠實校

鷹部九

龍山公鷹百首 東求院殿龍山公鷹百首

行幸せし御かりの野べの昔にもとかへる鷹ぞ
世々に絶せぬ

とかへるとは。鷹の毛をかへて。とやより出る事なり。鳥歸とかけり。山歸は山にて毛をするをいふ也。古哥に。はし鷹のとかへる山の椎柴のはかへはすとも君はわすれじ。此哥にてやま歸り聞えたり

名にめでゝ梅の花毛や匂ふらむ鷹の羽風も春
寒き山

梅の花毛は鷹のめのまへにある毛也。

春寒み袖にも雪の殘るかと白尾の鷹ぞ手かへ
りにける

白尾は白鳥の羽にて尾をつぐといひ傳る也。手歸るは鳥を取はづして。空よりすぐに手に歸るをいふなり。なづきたる鷹の體也。

雪かとも霞のうちに手放せる繼尾の鷹のほの
見ゆるなり

又繼尾。春は霞にさだかに見んとのしるべに。尾を白尾につぐとの説もあり。白尾の事。春は巢山の心ありて。鷹うするにより。

また我身に雪残てあるよと思はせんとの兩說なり。昔一條院御時。正親卿鷹功者にて。繼尾は工風をもて繼そめけるとなん。

はしりゆくと跡をとめてかむ犬の鈴の目させる春の鷹狩

と跡は鳥の跡也。かむ犬ははなつけて覺行事也。鈴のめさすとは。つゝじの枝にても。木の枝を折て鈴の目へさし入て。鈴のならぬ樣にする事也。春山鳴鳥につかふ犬也。

もろ口のとまれる犬はすゞばかりさはきなしにやつかふ鷹山

さはきとは藤をたちてつくる也。もろ口とまり逸物の犬にはさはきに不及。鈴斗にてつかふ事也。小鷹犬にはやり繩といふ也。

おちばかりさはぎたてやるふるつかれち山はわかき犬をかはまし

さはきたてやるとは。はなちてやる事なり。ふるつかれは年のよりたるをいふ也。より犬ともいへり。女犬をばえかたといふか。男犬をばおいぬつかれと申ならはし候也。地山とはかり行山の狩さき也。犬をかはましとはつかへと云事也。ふるつかれは。草臥によりて鳥のおち斗をつかへと云事也。惣別ふるつかれをば籠に入になわせて。落ばかりをつかふ事ある也。くたびるれば寄犬はかまぬによる。籠に入て足のおち斗をやる也。

鈴子さしわけのぼりたる山あひに鬪すへ鳥のいづちぬすたつ

此鈴子は鷹の鈴子也。犬には鈴子とは云ごからず。前に注てすゞのめさすと云也。鬪すへたる鳥ぬすたつと也。人のしらぬ樣に。羽音せず草の中を忍び立てかくるゝ鳥也。それをみつけたるをめをつきたると云か。

つかれつゝはしりて草にふす鳥を物もなしと
は見すへたるなり

物なしとは鳥に油斷さする詞也。見つけて有といへば。必うするによりて。あるをなしと云也。

はし鷹の尾上をこゆる鈴の音につかれの鳥や
草にふすらん

見えたる體也。つかれの鳥鈴の音にかゝみたる也。

山ぎはに鷹ぶちかけてあはすれば野べの雉子
ぞとびつかれたる

待かけとて。鳥の立行べき山に。鷹をまち鳥のくたびれてよわくなる時分にあはする事也。田舍にはまち鷹と云。他流の說也。鷹のむちを鷹なぶりと云がごとし。當流には不用之。但其家々に用來事も候か。諏方が家には。鷹の鳥のかけ樣。山の鳥田ものうら表かはる也。哥道にも當流とて二條家を用。又冷泉家一流有之。又は小笠原家弓馬の道を當流と云也。內藤家右之類成べし。付。大壺流有之。當流他流分別可有歟。其外他流の說其品おほし。たとふるに哥道に古注の說といへる同前歟。又田舍の小笠原諏方事外かはりたる事數多あり。それも定て其家々の作法たるべきか。鷹を架につなぐ次第も。若鷹。片鳥屋。諸鳥屋。古鳥屋。野され。山がへり。弟鷹。兄鷹。隼子。はしたい。白鷹以下。其外隼。小鷹。諏方流當流かわりめ有之。又他流多之。前に注すごとく。他流とは哥道など古注の說と同じ。不用之。足革をも足緒とも云へり。ねず緒をもひこの緒共云也。但ひこの緒昔は別に在之樣にしるせり。秘事に云也。みだれ裝束と云事小鷹にあり。大鷹にはなし。口傳に云。とりわき兒鶺鴒にする也。同かし

鳥装束とは。かし鳥の羽くさひに。くるるり色なる毛をとりて鈴付につくる也。又はしたいと云事。當流の秘事と云々。まちかけの事。昔禁野の雉八重羽にして。足も三ありと注之。合する鷹をとりころしける化鳥也。其時まちかけをたくみ出し。彼化鳥をとらせけるとなん。それよりまちかけ始て。あら鷹などのかたいりなるをとりかふには。待かけにあはすれば。やすくとるにより用之。雉の足を別足といひならはす事。禁野の雉よりおこれり。當時あながち足三ッなけれ共。雉の足にかぎり今に別足と云也。同事ながら山鳥の足をば別足と云べからずと也。右の子細は高國朝臣彼諸木抄廿巻の聞書に見へたり。諸木抄は犬追物。笠懸。弓馬。軍陣。かちだち。御前の時宜。禮節仕付方。鷹の道諸道をしるしおかるゝ聞書也。可見之。彼書に禁野の雉の事押紙に被注也。昔仁徳天皇御悩有時に相者云。彼雉のたゝりなりと。占ふに。保昌卿と云人渡唐して。鷹を習て日本へ歸り。此雉をあはするに。彼化鳥三足の別足にて鷹に向ふを。鶻といふ鷹。彼足の三有て羽も八重羽の雉を取かためたるといへり。其鷹はしたいと云也。鶻と書也。此名あまりに秘して。鶻はせうと云鷹也と注之。又云。鶻。ハツ。ハシタイ。共いへり。口傳あり。難注事也。鷹の根元は。天笠摩伽陀國清來と云者唐へ來りて。泰山道の麓にて仕始也。日本にては仁徳天皇の御時に保昌卿仕はじめ。待かけをもたくみ出し。彼化鳥をとらせけるとなん。禁野のきんの字も。近野と昔は書と云也。禁野かた野は同所也。日次の贄を奉るによりて。人の鷹仕事を禁制せられけるより。あらためて禁野とはかゝれしと也。清來も

西來ともかけり。又は政頼とも後には書也。子細秘事也。日本へもわたれる事。鷹の家に秘しおく口傳共あると也。付。禁野かた野の八重羽の雉をとらせられしとて。つき鷹といへる鷹有。政頼が禅禰津神平が鷹と注之。付。放鷹記と云書に。鷹仕様被注之。鷹の起鷹經に見へたり。同相形圖放鷹記に注之。

立鳥のつかれのかずをかりなくゐなとびにもなりておちけり

水鶏とびとは。つかれをしげくうたせ。鳥のくたびれて。くゐなのごとく。くびをながくなし。よは〳〵ととび落るをいふ也。

うちいれて草とる鷹に雉子もや足鳥になる岡のべの森

打入とは鳥を草へうちいるゝ也。草とるとは草をもむとかたる事也。ほめたる鷹の振舞也。空とるといふ詞は空にてとる事也。此草とるは。鳥を草へおひおとし。打入〳〵するにより。鳥足鳥になり。立あがらずはしりつかれて。鷹にとらるゝ事也。足鳥とははしる斗にてとびあがらざるを云也。

から衣あまた雉子の立山はとりまたけして鷹や追らむ

鳥またけとは。たつ鳥にあはせたる跡より。又鳥たつ事あり。まへの追鳥を捨て。後の鳥を追行を云なり。おん鳥にあはせて追行内に。めん鳥たちてめん鳥へ行鷹をばめん鳥すきをするといへり。鷹にぶき事也。但一度などはこれも鳥またけとも云べき歟。二度共めん鳥へ追行ば。めん鳥すき成べし。又山をかりまたくると云事あり。それは狩行跡より鳥のたつ事を云也。付。鳥またけ。他流には別の鳥にあはするをいふ説もあり。

常たかみきとすやたゝきこえねらんほこ羽を

つきてあがるはし鷹

ほこ羽とは。鳥のたちこす山の尾かたを。跡より鷹おくれて追行。山をこゆるとて。一文字にあがりとびこす羽也。逸物の鷹心の聞たる體ほめたる羽也。鳥のたゝきこすと云は。山をすりすらずにこすを云也。鷹にはたゝきこすと云事なし。ほこ羽鳥になき事也。鳥の山遙に空をとぶ事あり。ひよりあがりてとぶなどゝかたるなり。

しげる木の山のあわひはとさけびをしるべばかりに鷹やあはせん

鳥さけびは。鳥のたつを鳥よ／＼と下狩の者共高聲に云事也。鳥の立を鷹は見ね共。山につかひ入。こうのいりたる鷹は。とさけびをすれば。心得てとび出／＼するを。手はなせば則鳥さけびをする所へ飛出鳥を追取也。惣別山をかる物共をせことおし出して云事は。しゝけだ物の狩する者共の事なり。鷹狩の者共をば下狩衆と云べき事本義也。但鷹狩も近來せこ衆などゝ申付來候歟。是も諸木抄にしるしおかるゝ也。鹿猪を狩山をばかり場又は狩倉といふ也。鷹山のよきをば鷹場と云べき歟。鷹によきしろにてあはするなど云は田物の事也。山によきしろといふ事不可有。はい鷹などにも大わさとて鴛小鴨けり／＼などあはせよるもしろなるべし。山を狩にも。しきしやうにはかりこゑ鷹匠よりしそめて。鷹下の者共より次第／＼に云傳て。山の出入(ダシイレ)とて。山をあをのけてかる事。又山をうつぶけてかる事。鷹下をかりまはす時は。野ぎはをふまへ。野ぎはをまはしかる時は。鷹下をふまゆるなり。又野ぎはをさもとゝもいふ也。狩聲も四季に調子かはる也。放鷹記に委注之。ほうゑいとかる本

義也。ほうは鳥と云事也。鷹をこくころもほう〳〵と云は。鳥〳〵とおく心也。をき聲も遠近に心もちあると也。遠く鷹をよびかけおく聲は。ほうといふ聲をながく引となり。近きは常のごし。下狩の者共草をうつ事。狩杖のゆきとつく程に。凡立ならびうつ也。狩様さだまる歟。放鷹記に注之。是は仁徳天皇御時鷹の作法を書たる書也。又鷹狩にも狩場の鳥などゝ哥にも讀也。鷹狩を鷹飼共。延喜御宇などの御時も専申たると聞えたり。伊勢物語にも見えたり。是も當流なり。重疊口傳多在之

とかしらを見うしなひてやはし鷹の木居より出てつきまはす空

鳥頭をとは。鳥をみ失ふ事也。木居は木にゐる鷹也。こゐを取といへり。つきまはすとは。木より上を高くとびまはる事也。他流に輪をつくるといへり。但舞あがるにはあらざりける也。

岡のべの水にうつろふ手放しの鷹や野守の鏡なるらむ

水にうつろふは。鷹のかげのうつる體也。野守の子細不及注之。但他流の説多しといへども。當流には不用之。當流之説には野中なる水をいふ也。昔雄略天皇鷹狩し給けるに御鷹うせけるを。野守をめして尋てまいらせよと勅諚ありければ。御鷹は彼木のうへにありけると申ければ。いかでとて是を叡覽と。奥義抄にも委しるせり。鷹のうせる時。しぎをふせると云事あり。ふせ様おほしといへ共。野守ふせと云事ありとなん。野守しき共云歟。

大空に立まふ鷹のとび尾をば鵙尾になして見まくほしさよ

とび尾とは。とびの尾のごとく。尾のさき一文字にして。殊に中ひくに有やうなるをとび尾といへり。まふ共いへり。それによりうしなふ也。見てもみぐるしき尾也。鵙尾とは。百舌のごとく。上尾ながく次第〳〵にたすけなら尾。ならし羽。大石うち。小石うちへみじかく尾持のあるを。もず尾とはいふ也。是は鷹まふ事もまれにしてほめたる尾持也。され共しゝをへたにあつれば。何たる鷹も舞うしなふ者也。しゝよくて舞鷹まはぬ鷹のとに候歟。又くせにてまふとも候也。惣別是見所有るといひつたふる也。

飛出る羽風も袖にあら鷹のましろの雪は拂ともなし

ましろは眉白也。常の鷹より眉ふとく白を云也。あらき羽風にも。眉白の雪は拂とも見へず白きと云心也。付。眞白と書てしろの鷹をいふと他流に云也。眞白符は當流也。ましらふと云白鷹歟。ましろ眉白也。まぎれたる事也。

かり衣たてる鶉に手放せる跡をさし羽の野べの遠方

手放はうづらにさし羽をあはする體也。鶉はさしはの物也。

かり衣すそごのさし羽青差羽みどりをそふる野べの春草

すそごのさしはとて。尾のすそごなるあり。あをさしは青き符なり。又赤きさしはも有。さしはと云字差羽とかけり。又小隼とも書也。付。他流に字多し。

鷹とばふ羽風に野べの露ちりて分る袂にたつ鶉かな

うづらのとこを小鷹のとばひ出る羽風に驚きたつ體也。野べの露散ては。小鷹狩の心な

るべし。
一よりも渡さぬ小鳥けふとにつみてふ鷹にお
もほえぬ暮
一よりももらさぬ小鳥とは。いくよりもは
づさずとると云事也。けふとには毎日也。つ
みててふはつみと云ふ鷹によそへて云心
也。すゞめ小鳥共おほくとらせ。罪になるべ
きも更におぼぬと云體ばかり也。
鷹にさし犬にかけたる鈴の音ふりすてがたき
鳥の落草
鷹には鈴をさすと云。犬には鈴をかくると
云也。ふり捨がたきは。鈴をふると云を緣に
して。落草の鳥捨がたく思ふ事也。自然鳥た
ゝねば落をうち置事をば落を捨ると云也。
落をばいかにもよく犬をもやりまはして鳥
をたてゝ。鷹にとらする樣にする物也。
さだまれるとつきの山に待かけて手放かへる
たかの鈴聲
定まれる鳥付とは。鳥の立て必行方有物也。
その山の模樣を功者は分別して。その方に
鷹を待と也。
鳥おとすもりのめぐりにもらさじと木居より
出てからむはし鷹
鳥おつると云べき事ながら鳥落すと云も。
鷹飼なるにより。初心の人のためにしるす
也。又おつると云心とおとすと云心すこし
かはる也。おつると云心は。鷹あひも遠に引
ておつる心也。又鷹もつかぬ鳥の遠引てお
つるも同前。落すは鷹きつく鳥を追落す也。
分別すべき歟。木ゐより出てからむとは。森
のめぐりへ鳥はしりぬけ。盗たちぬけては
と鷹心得て。木居より立出〳〵。いくたびも
打まはり〳〵て。高木居に梢を拂ひあがり。
木居下をさしまもり。鳥を心かくる鷹。すぐ

れて氣のきゝたる逸物也。
落草やとをみはづれの鳥ならむおぼえばかり
の野べの犬かひ
落草たしかに見すへぬをおぼえといへり。
とをみはづれは勿論とを見のなき所へ引ま
はしおつる鳥也。鳥つかれたる故。とをくは
引まじきとこそ推量して犬をやる事也。其
をおぼえと云也。
おひはむる小鷹の鳥のむばらくろこもつちこ
えの羽やつかふらむ
こもつちこえとは。いやしき者のこもをあ
むそのあみ様。たがへちがひにもぢりやる
どく。鷹の羽をつかひ。むばらくろ草村を羽
をやすめずはしり。とび出る鳥をとる羽也。
勿論逸物ならではつかはぬ羽也。この羽大
鷹小鷹によるまじき歟。但小鷹は羽きゝ身
かろき故。こもつちこえめづらしからず候
と云説あれども。小鷹も逸物ならではつか
はぬ羽也。然ば大鷹小鷹によるまじき歟。大
鷹もとより一かどすぐれ逸物の羽也。
見鳥するとを山鷹の手放につけなきをして雉
子たつ也
見とりとは。人は見つけね共鷹見る物也。と
をく見てはやるを手放してやるに。鷹打い
れとらんとする時に。つけなきをして立事
也。つけなきとてちけん〳〵と鳴聲を云也。
犬にても又は物におどろきなく時のこゑ
也。知犬と書也。
入あひて草とる鷹の小笹はらのちこをつける
鳥の哀さ
入あふとは。鷹ひつつきて落草へ同じやう
に鳥とひとつに入あふ也。草とるは草にて
とる事也。のちこつくとは。とられてじい
〳〵と鳴聲也。つけなきにはあらず。

追落すしげきの山の鷹の鳥むことりよめとり立かはりけり

むことりは。おんとりを追落すに。疲の鳥たゝず。別のおんとり立かはるを云也。又よめ鳥はめん鳥也。

餌袋におき餌さゝではいかならむ昔も鷹にいむとこそきけ

人に鷹をやるにも。餌袋におき餌入べき事なり。おき餌とは雉の事也。雉なければ鷺鳥小鶉鳩までもくるしからず候。それもあり合なくば。小口餌にても可入事也。小口餌とは小鳥の事也。おき餌をばさすと云也。本歌金葉集に入たり。證歌。のき羽うつ眉白の鷹の餌袋におきゑもさゝでかへしつる哉。此鷹の餌袋におきゑをさゝでつかはしけるに。その鷹そこねたる也。それよりふかくいむ也。鷹の死ぬるをばそこねたる共さかりたる共云也。哥には讀候へ共。のきたるとはいはず候也。山にてさかると云詞をいむも。鷹の死ぬるをそんずる。さかるなどゝ云心に付て忌也。下狩の者共山よりさがれと云詞をばふみおりよと云也。かりそめに見てしとだつを立しのびかたのゝきじののきはうつ也。此哥如願法師哥也。此のき羽は立のく羽也。一様にあらず。

春の野に巣臥て鳥のたゝぬ日はかざむけの毛をたつるはし鷹

巣臥とは。春の末つかたより。眞鳥巣をはなれ兼て立かぬるを巣臥といへり。まとりとは雉の事也。風向の毛は鷹のうしろかまちに白きけのまじりたる所にある毛也。腹を立る時の毛也。

とりかはぬ夕はいとどうれへの毛たつる物からしためにぞなる

愁の毛。氣のわろき時立る毛也。下めになるとはしゝひくる事也。やすると云事也。やするとは云まじきと也。但やせたるといひてもくるしからぬ詞。鷹ときによるか。やせ鷹を飼あぐるなどゝ云時にいへり。ひけ鷹とはいはず。ひけたる鷹とは云也。やせ鷹とはひけつまりたる鷹の事也。ひけつまればやまひおこり煩故に。やせ鷹と云詞常には心持ともあるとなり。馬鷹は不淨まけとて。物あやかりをするにより。あしき詞をば忌也。口傳多之。

力餌や心をそへてかひもせん鷹の尾すけのかはる見ところ

力餌とは。つかふ鷹のよわくならず。肉たかならず。よきしゝにて。終日つかはるゝ様に心をそへかふ餌也。山につかふ鷹よわきと見て。力餌更にたよりにならぬ者也と云傳へたり。扨こそ見所を能見て分別すべしと也。尾すけとは尾のうらに白き毛のあるを云也。尾すけのおほきをよき鷹の相に云り。つかふ鷹の見所。尾すけにも有と也。又尾すけ斗にも限るべからず。多き事なればしるしがたし。

おほ空により羽ちかづく鷹のとり沓を結びてなぐるとぞみる

大空にて鳥をかけておつるを。沓を結びてなぐる様なりと。人にもかたる詞也。空にてとるを中にてとると云者おほし。比興の詞也。中にてかくる程なるは。鷹かけたると云也。高く空にてとりくむをば。大空にてかくると云べき歟。

峯渡すますかきの羽にかりのこすいなばに落る鷹のおひ鳥

ますかきの羽は。谷へいらず一文字に渡す

羽也。逸物也。鳥にはなき羽也。鳥は谷へ入さて嶺をこゆる物也。鷹も鳥のとぶごとく。谷へ入跡に付て追をば。谷入するとて嫌事也。鷹心きかずわろき事也。

しとゞなき鷲なき餌なきひしめかば心をそへよ手放の鷹

しとゞなきとは。鷹ちり〳〵としとゞのなく様に云也。鷲なき。わしのなく様也。ひしめくとはあらき時のこゑ也。其品々を能習ひ見はからひて手はなせと云事也。

かけおつる遠山鳥の草がくれむしりて鷹のぬすみはみする

ぬすみはみとは。人の行つかぬさきにぬすみはむを云也。必のち〳〵には鷹こうゆけば。鈴を木の根岩根きしねなどにしきあて。鈴こゑのせぬ様に盗食也。其を鷹鈴をしきてぬすみはむなど丶語る也。

若鷹の鳥屋出の胸の遠山毛はつとり狩にあはせてやらん

遠山毛とは。毛をかへたる中に。若鷹の毛所々に殘したるを云也。見事なる物也。はつ鳥狩はとやを出し。はじめて山へあげて取飼也。

とや數をふませてつかふはし鷹の耳かたきをばいかにしてまし

鳥屋かずをふまするとは。毎年毛のかずをかさねたる鷹なるべし。古鳥屋也。耳かたきとはおけ共わたらぬ事也。木居をふまゆると人に語る詞也。惣別鳥屋數をふみふるくなれば。惡功ゆきて渡りかぬる物也。田物し丶結句さだまりたる様にあれ共。ゆき〳〵て山鷹のし丶大事と云り。其故はあさより肉能もやすく渡る様にあれば。夕よわくなり。ゆふべし丶よき様なれば。朝は木居をふ

まへ。其間に時刻うつりて物數ならず。昔せいらいとて鷹の名人此餌飼を分別せり。あしたよりしゝよく。暮まで同じ肉心にして。鷹病もなく鳥を取事也。こちくと云女。夫婦の中に秘して不洩。四日の餌飼。付。七日の餌飼。みつ餌。かへるしゝ。順逆の餌かひ。中餌。つめ餌。ひらく餌など大事に云事をも。彼女を心やすく思ひ。是をかくさず。殊に薬飼。灸所。鷹諸病の療治をも女に鷹をうけさせ。朝夕とりあつかひしに哥を書てやる。こちくてふ事かたからば笛竹の一夜のふしも人にかたるな。こちくてふ又とかたにちぎるとも一夜のふしも人にかたらじ。是を鷹の秘哥と云也。付。小壺の水の口傳。梨の木かぶにたまりたる水。又竹のきりかぶ榎木。其外口傳。

む山ふみ歸る麓のくるゝ日に命のがれてなくきゞすかな

む山ふむとは。鷹をつかふに仕合わろく。ひとつもとらせでむなしく歸る事を云也。命のがれては。狩人の歸る跡に雉のなく體也。春山なるべし。

おきかふにえならぬ物は餌鳴して雲井をかける巣子の隼

置かふは。鷹を手はなち。餌を見せておきたつる事也。鷹よぶとはいはず。おくと云也。手に渡るをば勿論わたる又おきとると云也。雲井をかけるは。隼にかぎりかけらするとて。手にわたらむとする時に。おき餌をかくす時。其儘空へあがり雲井をかけりまはる事也。近來鴨鷹とて空へあげつくる也。

隼にあてたとされて白鷺の淺澤水に羽ぶくあはれさ

隼の鷺にあたるをばあておとすと云也。大

鷹はあたりおとすと云也。
隼のこくびをつきて肩をわりあをつ羽風にかりをこそとれ
こくびをつくとは。うなづきて鳥をみる事也。かたをわるとは。鳥をみてちく〳〵とかたをひろぐる體なり。あをつとは。兩方の羽をひろげて。ひら〳〵とあをつ事也。隼にかぎりたる詞也。大鷹にかたをわるとはなき詞也。鳥にとび出〳〵するをばはやるとふなり。是は何れの鷹にも云詞也。
さき鷹のあておとしたる天津鴈あひともしたるあとの隼
さき鷹はさきへあはせやる隼也。二鷹につかふ事也。
あはせみん冬田のかりにふたつ鷹こゝろとりをしてあはぬ隼
ころ取。めん〳〵にひとつづゝ鴈を取を云なり。
むれてゐる田面のしろの天津雁あふことりする鷹のかしこさ
むれてゐるは大むれ也。鷹詞にも大むれとかたる也。多くつれておりゐたる雁也。しろとはよきあはせ所を云也。水もなきかり田の跡はたけなどの事なるべし。
春の日のながしゝになる若鷹はかつほしゝまでとりやかわまし
ながしゝ。ひけつまりたる事也。へたの物也。鷹そこねあやまち有事是多し。餌につめひらきと云事あり。其を分別すべし。かつほしゝ。鳥の胸のひつたれのしゝに。一重かさなりてあるしゝなり。惣別は飼殘す肉也。
さほ姫のましろの鷹のかねつけ毛ほのかに見えて日も莽はとり
さほ姫かへり。春うち落したる鷹也。かねつ

け毛。くれはとり。何も鷹の毛の名也。眉白前に注之。眉の白き鷹也。

鷹山をこえ行鳥にあひあはせうちかさなりて追ぞあやうき

鳥一にあやまりて鷹二もとあはする事也。隼にかはり。大鷹は二あはするとならぬ者也。とりあひ。つめいり。あやまちある事有物也。うちかさなりて追と云も鷹詞也。

しゝたかに人や見るらむひくとりをうけおふ鷹の羽むけあやなし

うけ追とは心にいれずゆる〳〵と追ふ事也。羽むけは。なまじゐに鳥の跡につきて行共。しゝたかなればせんもなきと云事也。

鳥落る尾上の鷹の草とりにすゞはしらせて尋かねけり

鈴はしらするとは。鈴のおちうする事也。草とりは前に注ごとく草をもむ事也。

鳥たてばまづかりぐちをふまへよと犬かひばかりおちに行也

下狩共其儘狩口にふまへ待事也。犬飼ばかりおちにはしり行。いきとりにもせずば。犬にたてさせ鷹にとらせんと。犬飼は落へ行事也。いきとりとは行取也。たちのまゝとるを云也。立のまゝとる共語詞也。

ひだり山眞山にかゝりて鷹人のあをりかけにも草やうつらん

左山はひだりに狩事也。眞山は順にかる事也。右山とはいはず。あをりかけとは。山のうらおもてを一度にかるを云也。馬の泥障にたとへたる狩様也。

狩入て出山に鳥の立ゆくを又あらはむる鷹のふるまい

出山とはおくへかり入。出さまに狩事也。あらはむるは。きつくつよく追はむる鷹の羽

ぶり也。又しきはむると云はすこし心かはるか。是はまぢかく鳥を敷はむる事也。又木などのほそき枝に鷹の有をば。よわ木居に鷹あると云べし。よは木居をとるとは云まじきと也。

鷹あひははるかなれども野ぎはより立のぼる鳥をちかくとる山

たかあひ。鳥との間也。鳥あいとはいはず。野ぎは。さもとゝも云也。ふもとの事をいへり。立のぼり。鷹前へむかふ鳥をば。鷹ほしがりはやりとび出れ共。ひきすへ／＼鳥よこめになる時。あはするにとりはづさず。まぢかく鳥をとらせたる體也。

すゑなれぬとや出の鷹の足ぶみにあしかはひきの羽風身にしむ

足ぶみをさする時。鳥屋出の鷹いまだすへなれず久しくとやの内にてあしかはをもさゝぬにより。とやを出しさしたるにより。むづかしがり足革引をするを云なるべし。足革を引時は。必鷹の羽をひろげ羽風を立る體也。

箸鷹のとりしく鳥をほときかねわけくひをする犬やよくらむ

とりしくとは取かためたる鳥也。ほときかねとは。鳥を放て木居へあがる事也。わけくひは犬鷹を見しりてくはず。鳥をくふをわけくひと云也。かた口とまりたる犬也。付もろ口とまりたる犬と云は。鷹も鳥もくわぬを云也。

よびかけに木居ふるまひを巣鷹とやつかれの鳥のうするともなし

よびかけは。狩人の鳥のはしる方へ鷹をよびかけ。くれば木居をとりかへ／＼高き梢にあがり。木居したをさしまもりて。鳥を心

がくる鷹。逸物比類なきふるまひなるべし。付巣鷹。鳥屋日向鷹なるべし。西國鷹奔走也。西國は大略巣鷹也。綱懸稀也。

のりまはし馬のうへより手放せば亂とりをする鷹の鳥〳〵

鳥によりあはする時は。鳥をまはす様にするにより。馬上にすゑたる鷹を手放せば。あれこれの鳥へかゝり取事也。其をらんとりといへり。

鈴をさし大緒をときつゝはし鷹を山にかさみて鳥やかるらむ

たかを山へかさみあはする時。鈴をさして大緒をとく。大緒をときて鈴さす事有べからざる次第也。

あら鷹も手袋引てくつろけはよつ毛のまはり見ゆるくゞい毛

手袋とは。とつてをにぎりて。腹の毛の中へさし入る事也。四色うしろの毛。くゞい毛。しろき毛。くつろけは見ゆる物也。鷺毛とも云也。

鷹もくさ鳥もはしりて犬はかむみつ物たつと見えたる體也。こつかれになり。鷹鳥犬一度に打入る草をみつ物たつと云也。口のとまりたる犬ならでは。こつかれになりてははなつべからず。こつかれとは。鳥くたびれて。あし鳥になりはしる時をいふ也。

是をいふ也

暮ぬれば鷹の追羽やよわからしたらずかけして山にゐかゝる

たらずかけとは。鳥をとらんとておひより。とつてを出すにとつかずして。鳥のにげのぶるを云也。暮になればしゝもよはくなり。山をこす鳥につきかねて。山にゐかゝるなり。付。字には不足懸。居懸。

立のぼる深谷のきゞすあはすればむかふかけしてあまるはし鷹

立のぼりてまへゝくる鳥をはやくあはすれば。鷹かけあまると也。鷹により力鷹はむかふかけにかけとむる事もあり。むかふかけにかけとめたるなどゝ人にも語る詞也。さもとより鷹前へ立のぼる鳥をば。ひきてよき時分にあはするにはづさぬものなり。前にも注之。山をつけまはす時は。いかにもはやくあはすべしと。功者ども申傳也。

ねりひばりとこはなれ行中空におひ羽のかろくあがるすごもり

ねり雲雀は毛をするひばりの事也。六月土用の內より。七月盆の前後最中なる者也。ねり雲雀はこのりの者也。雪雀毛を如形して。後に尾を一度におとすもの也。それをばしんとう雲雀と云也。しんとうひばり少達者なれ共。これも鷹にとらるゝ也。又尾羽そろひ。四季にかぎらずとぶ雲雀はからひばり也。又八月へかゝり。ほじろ毛をする也。ねりしとゞ共ねり頰白共いふなり。尾羽かため毛をかへぬは。からほじろと是も云也。別の小鳥にはからすゞめなどゝも更に不可申也。からひばり。からほじろと申外には。からと云字そい候小鳥これなく候。からしとゞ共不申候。冬のほじろをばあかしとゞゝは申候歟。付。常にあかしとゞと云人あり。田舍には云歟。冬のを云也。

立て行中に羽風やよはからし女鳥すきする鷹のならひは

めん鳥羽よはきにより。鷹よく見知取よき故に。めん鳥を取たがる者也。それによりめん鳥をとれば。いか程ももぎて。おんとりにとりかふ樣にすると也。とりかふとは。雉の

左のかた胸をたくさんに飼事なり。但法量共日のしゝによるべし。かつほしゝとて飼。口の下に又別にかさなりたる肉あるを云也。鷹のとりとて人につかはす鳥をば。かつほしゝかはぬ者也。鷹の鳥いかにもうつくしく。尾羽をもぬけぬ樣に。鳥きたなくなき樣に飼事。鷹匠の故實也。鷹匠と云字三あり。處により心持有と云事秘事也。鷹匠。鷹將。鷹丞三樣にかけり。口傳有之。付。又鷹師是も匠同前歟。他流に數多在之。

かり衣日をかさねてもかひぞなきまだあら鷹ののき羽うつみゆ

此のき羽はあら鷹の人におそれてたなさきへのく樣にするを云也。たかにより見しらぬめづらしき鷹匠のすゆれば。かほをまもり候を。人にかたるには。たか面嫌をして。かほをのくるなどゝ云也。

空よりもあたりおとしてはし鷹の草とる鳥やのき羽うつらむ

あたりおとす。大鷹に云詞。隼にはあてゝおとす。あつるなどゝ云也。前に注之。草取同前。右に注之也。此のき羽は死する時の羽也。鳥の鷹にとられて死ぬるをばのくと云也。人に語るにも。鳥ははやのきたるよなど云也。死にたるなどいはず。鳥ののき候をなをる共云人あり。前にも注之。古哥に。のき羽うつる哉。鷹そこねたる也。兩說よく分別すべし。

つ眉白の鷹の餌袋におきえもさゝでかへしとぞ。哥にものき羽うつましろの鷹とよみ候得共。鷹詞には鷹の死ぬるをば。そこねたる共さかる共云也。前に註之者也。

あつめたるあかけに野され山がへりもろかたがへり巢鷹巢まはり

あかけは若鷹の事也。されども巢鷹の若鷹な

どをあかけと云べからず。字には網懸と書。又黄毛とも書也。日向鷹の巣鷹若鷹をば日向巣の若鷹と云べきと也。野されには種々の說あれ共。かたかへりほどなるを云歟。山歸りは山にて毛をかへたる鷹也。山歸りにかた歸り。もろ歸り。もろかた歸り。もろ〳〵歸りなどいへり。巣鷹は子飼也。巣廻は巣立を云歟。西國たか東國鷹によらず。双半双こがんぎまさごりんせいと云事鷹の秘事。見所肝心としるし置と也。口傳在之。付。九豚。矢筈豚。とる豚見る豚の大事也。見所の口傳に付て注之也。

はし鷹のさほ姫がへり小山がへり春は色々の名にや立らむ

節分こえて春うちおとしたる鷹は。さほ姫がへり共。小山がへり共春のあらたかを云也。

まへうしろ赤符の中にあかきをばにこのりとたがいひはそめけん

にこのりとは一かどすぐれてあかきを云也。はいたかにはなし。鷂のあかきをばしほといへり。字には紫鷹とも紫鷂共書たるがよきと云也。丹兒鷂と書てもにこのりと讀也。又このりと云字。兒鷂とも兒鷂共書也。おぼえ行犬のかしらに木居づたひつかれの鳥をおしむあか鷹

赤鷹はの符のあかき鷹也。大鷹にある也。あかけの時に云也。赤符とはいふまじきと也。惣別大鷹に赤符黑符の事當流に不用之。他流には申ならはすとみえたり。口傳。付。大黑符は各別也。ウケガイノ下に針ヲスリナラベタルヤウニテ。尾スケサキマデ。符ヲキリツメタルヲ大黑符ト云也。

鷹によりせまち町かたやかた尾にしとゞをま

じる鷺毛くゞい毛
せまち尾。まちかた尾。しとゞ尾。何れもみな尾の符の名也。鷺毛くゞい毛は白き毛の事也。付。尾の符に鷲すり尾よしと云もあり。しとゞ尾に尾よしは似たれ共。すこしかはる也。口傳。

雪じろのしらふまじらふつまじろにあをじろほうじろ舌も白鷹
是はみな白の鷹の類也。首もいづくも常の鷹也共。舌の白き鷹白の内也。白鷹の符なり共。舌白くなくば白にては有まじきと云説あり。これは子細口傳有と也。きた山兄鷹きはめて舌しろきと也。是にて分別すべしとぞ。北山も館によるか。辨慶巣とて目にあざの有心歟。是も所により候と云り。付。初草セイロヲマナイタフチ鷹のよき館也。

鷹の符に黒符黄黒符赤符紫鷂さてはうづら符又は紅葉符
是は鷂にある也。前に注すごとく。紫鷂又は紫鷹何れをもしぼと讀也。他流之説雖多之。當流に用來る趣凡如此歟。付。藤符と云も有歟。鴫符と云もあり。鴫の符のどし。

はし鷹の梢をたかみくるゝまでわたらざりせばひき鳥やせん
引鳥とは。鳥に緒をつけて。わたらぬ鷹に間を遠く置て引事也。ひき鳥にする事は。鷹にくせ出來て嫌事也。され共わたらねば。引鳥又はいけ鳥をもへ緒にて足をゆひてとばせ。なげ鳥などゝて。いけ鳥にかぎらず。口餌にてもなげ出せば。鷹必木居より出て。とりむしるをすゑあぐる也。鷹をすゑあぐる詞にはすゑ取共云也。さしとりと云は。草などへ鳥をしきはめ。小紫にも又は草にも。鷹鳥を心がけつかれをおしむを。静により

てすゑとるをば。鷹をさしとると云也。すゑとる共。すゑあぐる共くるしからね共。大鷹をばさしとると云べし。すゑあぐると云は。鷹のうせたる時。すゑあぐると云によりて。少心持有べき事と。高國朝臣彼〔可尋〕聞書に注し置れ候。すゑとるさしとる不有有巨難候歟。又あら鷹を野山にて鳥さし棹を持てさすをばさしおとすと云也。さしとるは誤也。人の鷹うしなひたるをひろひたると云は。鷹の家の口傳に申とぞ。又うせたるをそらすと云事。隼に云詞也。香川美作守書にも注之。小鷹にはさしはをそらすといへり。大鷹小鷹うせたるなるべし。隼さし羽いにたるをうせたるといはず。それたるそらしたると云事。子細有と注之。あまねく人の不知事となん。され共さゝいべとて隼相傳の家あり。其書にはそらしたる勿論。うしなひたるとも申。其程の越度にはなるまじき歟。され共大鷹鷂などをそれたると云べからず候かと注之。又鷹にゝがしたるにげたると云は。籠に入たる鷹。籠を出す時とりはなちたるを。にげたる共にがしたる共云。あらたかのいまだとりかはずなづかぬ。鷹ほこをもひかせたる程のをにげたるにがしたる成べし。籠鷹あら鷹同前歟。又いにたると云詞は。あしかはなどかりときうするを云也。とやよりにげたるは。とやをくゞりいにたる共にげたる共云べし。

見鳥せば先犬とりてあはせなんとつたてゝゆく方をしらねば

見鳥は前に注之。とつたつるとは。鷹の鳥のある處を見て行とらんとする時。鳥にはづされとりかためず。雉のそのまゝ立て行を跡につき行事也。跡へとつたて追もどらん

も。さきへ追ゆかんもしらねば。犬をとれとなん。

たてば鷹おつれば犬にたへかねてあがる木鳥ぞあはれなりける

見えたる體也。木鳥とは木に雉のあがるを云。鷹も犬も逸物なれば。よく鳥も心得て。功の入たるふるからはぬすたち。葉の茂き木にあがりかくれてあるを。犬はなつけておぼえ。空を高はなにかくるを。犬飼心得て見つけて。うちたてとらする也。雉を鷹詞にもきじとはいわず。但鳥と云べし。おし出して鳥と云は雉の事也。雉をまとりとは。時により山にても云也。山鳥のたつ時。今のは山鳥。いまは眞鳥たちたるなど云也。

狩人のつゑうちぬればかみ捨て山おちしたる犬はあやなし

かみ捨てはかみやむ事也。時により犬心にいれずそせんなるを。犬かひつゑにてやまする事を杖をうつと云也。杖にうたれ腹を立て。山より我方の家へ鈴をさはぎながらかけもどるを。山おちするといへり。付。犬に杖をさすと云事有。鳥の落を杖にてゆびさしするどく犬におしゆる事也。逸物の犬はやがて得て走り行。鳥を追たつる也。但犬による也。まれなる事なり。むかひの山に鳥の落あるを。犬をよびつけて杖にておしゆるを。則おしへ杖といふ也。

あちはなる枯野の中に落はまる日つぎうづらや鷹にあはせん

めつぎうづらとは。鶉のふしたるとこを見つけたるを云也。目つぎうづら鷹にあはする事習ひありと注之。ならひをしらねば。必十文字になげちがふといふなり。小鷹の事也。

朝ごとに外架の鷹に水ふけば手ふるひをして尾そゝりをする

朝毎にとほこへ出し水をふけば。鷹の目の藥。其外心いさみてよきといへり。水をふくに子細あるといへり。秘事に申ならはし候歟。先水をふけば。手ふるひをして尾そゝりをする。手ふるひとは身ぶるひ也。尾そゝりとは。尾をよこさまにゆる〱とふる事也。手ふるひの事。すゑたる鷹の身ぶるひを手ふるひといひ。ほこにつなぎたる鷹の身ぶるひと云事本義也と云々。されども手ふるひと申付來候歟。たとへば鷹を一もとゝ云事。是又ほこにつなぎたるを云也。一居一連何れをも一もとゝよむべし。一居一すゑ共讀人あれ共。一もとゝよみたるがよきといへり。たとへば馬によつ白と云毛をゆきふみ共いふ人あり。同じ心歟。よつ白とは踏雪とかけり。他流の說多之。又籠鷹もすゑたるも一はねと云事本說也。一はねとは一羽と書也。一羽をひと羽と云說もあり。但近來此道不堪の人。何れをも一もとゝ鷹なれば時によらず同じ様に云事如何。たとへば軍陣にて敵のまくをば引たると云。又うたせたると云は。敵にげちり。人數をうたせたると云心也。味方のまくをば。打たるまくをうてなどゝ云。是九万八千の軍神を祝ひいさむる詞也。又船中のまくははしらするといふも。順風に舟をまほにかけはしらせよと。龍神をなだむるいわゐ詞也。處により時により。昔よりあひさだまれる詞をつとめずしては口惜事なるべしと。諸木抄に注之。又隼をば一二などゝ云たるがよきと也。大鷹と云字も多し。角鷹ともかけり。箸鷹。是は他流に大鷹と讀歟。箸鷹。是は子細候て。鷹の惣名に申

と心得べし。箸鷹と云事は。古注（細注之イ）に。盆の聖靈をまつりたるあさがらの箸を取て置。鷹を鳥屋より出す時。たいまつにともして。夜出すによりはし鷹と云也。ある鷹の書に。四月八日に鷹を鳥やへ入。七月十五日に聖靈のはしをたいまつにこしらへて。夜鳥屋より出すと注之。不審の事也。鷹によりはやく毛をして出るもあり。又おそく尾羽そろひ。とやより出るもあり。不定なる者也。然者必盆の十五日の夜。とやより出るにはさだまるべからざる歟。たゞ彼箸を取て置。鷹のとやより出る時。たいまつにこしらへ出すと心得べしと也。又說。天竺の箸國より鷹出るによりはしたかと云。兩說也。西國日向巣の大鷹は毛をはやくする物也。更にさだまるべからずと也。惣別はし鷹とは鷹の惣名と注之。子細たとへば鶯を哥道に百千鳥といへる心なるべし。百千鳥は小鳥の惣名にもいへり。古今集の哥にも。百千鳥さへづる春は物ごとにあらたまれ共我ぞふりゆく。此哥にて聞へたり。分別すべし。又はし鷹は鷂を云との說もあり。唯鷹の惣名と知るべし。

行まはり犬をやとらんつかれたる鳥はしげみにつゞく藪原

犬をやとらんとは。藪しげみなどにては。はなちやらでは犬もかまぬにより放ちやるを。とらへよと云事也。鷹も犬にくわせじと心がけ。又つかれの鳥鷹にとらせんと思ふに。犬おさへはさみてはとゆきまはり〳〵。下かりの者共犬のかみ行 さきをとり 心がけ。犬ちかしと覺へたらむかみふりをよく見て。犬をとれと云事也。犬をとれと云は。さばきをとりひかへよと云義なるべし。

あらはなる小田のすゝきのかたうづらとをばまりして鷹にとらるゝ

遠くおひはめたるを。とをばまりとはいへり。前に注之。大鷹小鷹にかぎらずといふべきといふ歟。小鷹の小鳥うづらは勿論也。大鷹もきじ斗をばとをばまりと云ても。くるしかるまじきかと云說あり。大鷹きじをとおく追落たるは。とをつかれ又は遠くおひつかれをおさめたるなどゝ云べきと也。大鷹にとをばまりおさながましき樣なると。昔もせんさくありと聞えたり。され共越度程には有あじきかと云々。たとへば道かたの詞に。弓に箭をはげてと。常の人の詞也。あやまり程にはなけれ共。弓に矢をはめたると云たるが。同くはよきと。小笠原家の抄にも注置と也。此類ひなるべし。付。かけ鶉とは馬上よりあはせとるを云。

としく〵にとやまさりするはし鷹にたつ空もなき鳥の哀さ

鳥やまさりとは。鳥屋出に猎取乗逸物をする事を云なり。

ひく鳥の端山の木居を取替て梢を拂ふ鷹のかしこさ

木しげき中を鳥の引おつるを。鷹つきてあたりの木居をとりかへく〵。梢をはらひ高くあがりゐて。つかれの鳥を心がくる事也。木ゐ高ければ鳥をうしなはずやすくとる也。逸物は心きゝかしこきと云事也。木居をとると云を。田舍他流には居木といへり。當流には不用之。又鷹のむちを鷹匠腰よりぬきてもつ時。他流にはたゝきたるかたを跡へなし。とがりたるもとの方をさきへなす事。當流に不用也。むちのたゝきたるさきの方を則さきへなし持也。當流他流のかはり

如多之。うけとり渡し。弟鷹兄鷹にあつるむち。足革斗の鷹。又はへをさしたる小鷹大鷹。おき繩同前歟。ふせ鷹。籠鷹。貴人同輩下﨟其品多之。難注之と書物共にも見えたり。又哀傷に鷹をはなつ事習ひ有となん。又彼物語にも候歟。鷹の家に秘て。此鷹は服鷹と名をいへり。服鷹こゝに云がたし。いらざる樣に有ども。古今集を始めて。廿一代集にも哀傷の哥いらでは不叶子細。和哥の道にいへり。哥には云難により。是も鷹の道に秘おくゆへに。いさゝか詞にしるせり。付。服鷹の足皮大緒色白。但足革は其儘也共。大緒は紙にてうつ也。

そことなく木がくれふかき鈴の音しるべばかりの鷹のおきこゑ

見えたる體也。鷹をば見つけね共。木しげき中の鈴のこゑを聞て。其をしるべにおく事也。

水鳥をかけおとしたるみなと川鴨居の鷹のつかふみさご羽

かもゐの鷹とは。鴨のゐずまひの樣にたちのびず。よこ樣に見ゆる鷹を云也。みさご羽とは魚をとるみさごの事也。そらにため羽をつかひてうちこみ魚をとるごとく。鷹も鴨を水へかけおとし。空にみさご羽をつかひ。水より鴨のかしらを出すを見て。うち入とる羽也。

かけはづしかけほぐらかしはし鷹のとりしく鳥や丸をくまゝし

かけはづしはかけそこなひたる事也。かけほぐらかすは。かけもかれいさゝか手のあらき樣なる事歟。又かけつるゝなどゝいふは。かけてのためかたに鳥にくみしなひ樣ておつるを云歟。とりしくはとりかたむる

事也。丸をくまゝしとは。取たる鳥をおさへ。小刀にて鳥の左のわきをさして。丸をとり出し。鷹にかふ事也。丸とはきもの事也。丸をくむ共あぐる共云也。

たゞしくも覺えて見ゆる鳥跡かなさはきたてやる犬のかみふり

たゞしくもおぼえてとは。定と覺え行事也。前にも注之ごとく。さはきをはなちてやる事を。さはき立ると云也。犬のかみふり。かむ體也。鷹の羽ふりといへる心也。犬のかみふり無比類體也。

あら鷹を末野の原にわけいればこくびをつきて鳥やみるらむ

こくびをつくとは。鳥を見つけてうなづく樣にして。鳥を見こうたる體也。見こうたるとは。鷹詞に云は。目をはなたず思ひ入て。鷹の鳥をほしがる事也。鳥を見て目をつけてまはすは見おくると云歟。鳥をほしがりとび出るをば。鳥にはやる共とび出る共かたるべし。見おくると云は。山にて眞鳥のたちひくを見る時。すこしゝ高き時の體也。とをはやりと云は。田物などに鷹をあはせんとてよる時に。とをくより鷹鳥をほしがり。とび出はやるを。とをはやりをするといへり。鴨からすふぜいにても。又雁鶴こうによらずとをはやり嫌事也。但初心なる鷹はとをはやりをする物也。田物につかひ入たる鷹は。後にはなをる物也。不器用なる鷹は何れもおそくなをる也。器用不器用は何れの道にも有ならひ歟。遠はやり。大鷹にもかぎらぬ詞。小鷹にも云歟。

うふたつる巣子の中にも巣がへり毛巣おとゝひにし鷹やまさらん

うふたつるはそだつる事也。巣歸り毛はこ

れは若鷹の毛の中に白き符あるを云。必逸物する也。巣おとゝひは鷹一巣の内のおとゝひの事也。

のり毛よりおろす巣鷹のきはりなば足緒をさしてかはん丸ばし

のり毛は白きわたげ也。わたげ共云歟。きはりとは尾羽かたまりそろふ事也。丸はしはいけ鳥を鷹にとりならはする事也。丸はしと云子細は。巣鷹のはじめは鳥をとる事をしらぬによりて。からすにても又は鷺にても。鼻のあなへかうよりをとほし。した箸にてしかと口をあかぬ様にゆふて。とがりたるはしのさきをまろくきりて。鷹にくひつかす。又つかぬ様にこしらへて鷹にとらする故也。但こしらへ様多し。難注。鷹鳥をとりならふ始めに。くはれつかるればこるゝ故也。からすなどをば。つめをもとがりたるさきを一文字にきり取て。あはせても鷹につめのいらぬ様にこしらゆる事故實也。

物香してのべ行跡もけちがへぬ庭だつ犬ぞさかとりにかむ

物香は鳥のはしりたる跡をはなつけたる事なり。のべ行ははしりたる鳥のごとく。あとをして行かむ犬なるべし。跡をして行と云も鷹詞也。けちがゆるはかみちがへたる事也。庭だつとは。久しくつかはで置たる犬なるにより。かみちがへたると云心也。さかとりははしりたる鳥のどくはかまで。さかさまにかみ行により鳥たゝぬと也。

程ふればもみいれしさへたとふるにかたいりなるはむべもなま鷹

もみいるゝ鷹と云はつかひいるゝ事也。他流田舎などにはせめいるゝと云也。馬をこそせめいるゝとはいへ。鷹には如何と彼諸

木抄に注之。其上に鷹など野さし羽に鳥をつよくをひ。雲雀などを空へまきあげ〳〵するをば。時によりてたか鳥をせめたると云事。是も鷹詞也。鷹鳥をとるは。心いさみて鳥をとりくはむと思ふ樣に。しゝをあてつかふ物なれば。かた〴〵せむると云事非本意也。もみいるゝと云詞當流也。たとふるとは鳥をとりのく事也。手の内をわするゝ鷹也。かたいりはしか〴〵とつかひいれぬ鷹也。なまたかはむざととりかふしほをぬかし。いたづら物になり。しか〳〵鳥をとらぬを云か。とりしらみたる鷹程にはあるまじきと也。とりしらむとははたととらぬ事也。あをさぎをば大鷹に春夏は靑鷺のくわせとてかひ所あるとなり。それをしらねば。鷹によりとりのく也。鷹靑鷺にしらみたるなどゝ語る詞也。鷹雁鶴にしらむは。うたれふまれ。目などはかれいたみこるゝ故なり。靑鷺にしらむはかひ所の故也。鷹の家の秘事にいへり。付。とりしらむ事を他流の說にきれ鷹共云也。

とつ鷹のくもてわかれのあをとつてまびさしあれてかほはつみがほ

とつ鷹は鳥をよくとる逸物の事也。取鷹也。鳥鷹にはあらず。常に人の二物といへる事越度誤也。逸物と云字。一物とかくと心得いへる歟と。高國朝臣申されしと也。二物と人の常に云は。しか〳〵鳥をとらず。すぐれぬ鷹を云と聞えたり。にかたなるといふべしとなん。靑とつてはあをきとつての色なり。これをこのむ也。黃とつては嫌也。くもてわかれとは。ゆびのまた〳〵のわかれ樣也。とつてにみのなきをこのむ。足のあひだをばこひちといへり。ひぢをばこひちとい毛なしはきといへり。

ふなり。こひちの毛をばほうしやうの毛と云也。ほうしやうの毛は長かれといひつたへたり。鷹の名所あまたおほし。難注之。相形圖とて政頼秘藏の書也。みる脉とる脉。鷹のよきあしき。又は諸病灸所までしるし置也。みる脉とる脉の事。秘密の條々をば政頼養性の部とて。藥飼。しゝむけ。餌飼つくる。餌の次第。病の名見わけ樣注之書也。尤重寳也。但口傳多之。かほはつみがほと云事。大鷹のかほはつみと云小鷹のかほのごとく。かしらのうへひらく。まびさしあれ。あをはしふとくて。くびこみふかく。うけかひひらき。こくびぬけあがりたるをこのむ也。うけかひとはしたはしのしたをとがひ也。おとがひとはいわぬ也。つみと云字雀鷂と書なり。ゑつさいとは菩提雀と書也。其外他流に字多之。

はし鷹のとれるうさぎのかひ所べにつけそしと丸にむちうち

うさぎの取飼所おほき事也。以上七ヶ所歟。秘事にいへり。鷹のとるうさぎのかけやうかはる也。惣別うさぎはむづかしきと也。つゑのうさぎとて。下狩の者共杖のさきにて打とめたるにも。かけやうあるとなん。付。犬はさみのうさぎかけやう在之。

朝鷹に鳴鳥きゝて夏くればわすれかひしてとやへいれけり

朝鷹。春は鳴鳥をきゝふせてとらせて。夏四月の比よりわすれかひをして。鳥やへいれよとなんいへる事也。わすれかひとて。とやへいれんと思ふ前に。取飼には女鳥よきといへる子細。いさゝか秘事にいへり。されどもおろかなる鷹は。たゞいく度もおん鳥に取かふ事を用ふる也。わすれかひと云事。人

の不審する事也。わすれずかひにてあるべきと也。是は鳥屋前によく取かふ。鳥やへいるれば。鳥や出によくおぼえ。鳥をとる樣にとの事あまりに秘して云と也。見つけたる鳥を物もなしといへる樣の事歟。又わすれかひにめん鳥をかへと云說多之。先めん鳥は春夏あぢはひよきといへり。おん鳥は春夏味ひわろきにより。おん鳥のあしきあぢをたふ〳〵とかへば。其味をわすれず。とや出にしらみてはと。故實にてめん鳥にとりかふ。めん鳥にておん鳥のにがき味ひ。忘れかひと云子細有と也。又おん鳥は陽也。めん鳥は陰なるにより。陰におさめ陽にむかはんとのいはひ事にて。鷹を鳥やへ入る日は寅申を用也。午未をいむなり。諏方明神へみきなどをそなへ。鳥屋をする〳〵と事なしにかひとつけ。千秋萬歲といはふ事。是鷹の祈禱なり。付。忘飼の事。北へめん鳥をたつる樣にして可取飼と也。口傳在之。

這一冊者。西園寺相國鷹百首。幷中納言藤原定家卿鷹の哥よみ侍りける三百首を見て。わづかにおもひわきまふる事を百首の哥にあらはし書付けり。詠哥大概にも詞以舊可用とありけれど。古人の哥によみならはしける詞。よみならひ侍らぬ詞をもえらび侍らず。初心の人のためばかりにと。かたはし覺えける鷹詞。いさゝかしるし侍り。近代秀哥につゞかぬをつゞくとは。風ふり雪ふくうき風はつ雲などの樣成事を見ぐるしとは申也と。定家卿の書おけるも。さながら此百首なるべし。殊更老耄管見のうへ。すべからく誤以下あるべし。博洽の人よく是をただすべきのみ。

介時天正十七年卯月仲旬　　御判

右鷹百首者。前關白太政大臣准后龍山公之御作也。太閤秀吉公幷內大臣家康公依御懇望之。被染御筆畢。御下書者紹巴法眼申請之拜領。後代之重寶。名譽不可如之趣捧一札。予致在洛節遂伺候。鷹道數年執心之上。御本申出。以惡筆令書寫之。尤怜家之寳物秘藏。云々。

天正十七年六月十七日　田原近江入道紹忍判

右之御本。一品式部卿。六宮。八條樣御所持被成候ヲ申請書寫申也。他見爲上。

右御本日下二部左衛門尉殿所持を書寫畢。尾州名護屋在住之時。寛永三年丙刁正月十三日寫之。

八木德溫（花押）

〔右東求院殿龍山公鷹百首以宮內省圖書寮本校合〕

續群書類從卷第五百五十

總檢校保己一集
男源忠寶校

鷹部十

後普光院殿鷹百韻連歌 二條關白殿

何路

佐保姫の鷹やあがけの山わすれ
かすみわたれば野こそ廣けれ
猶深き雪のしらたかはるさむし
あすの狩場を扱いかにせん
とりかふもまた荒鷹の心にて
はるゝや霧の殘る木のもと
秋の末鷹の比にや成ぬらむ
野にふく風ぞとに身にしむ
鷹飼の山たちこめて降雪に
あしたかいまだくらき横ぐも
鳥もはやとぶさの鷹を引そばめ
とまり狩とやあすをまつらむ
そこともしらぬ雄鷹のおしへ草
交野のゆきの鳥のかたあと
御幸する鷹場の夕歸りかね
君が爲にと鳥柴をぞとる
きり壺の水こそ鷹の藥なれ
柳の糸をよりやとるらむ
箸鷹のかざながれせし花散て
くるゝぞおしき櫻がり人

鷹は猶こゝろをのこす思ひ妻
をきゑをさしてみゆるゑ袋
降はるゝ鷹場の雪の白兎
を聲かけてや犬はなつらむ
あはせつる鷹さへぬしにもとおりて
あとはゆかしき鳥の立かた
つかれぬる雉子や鷹野にしらるらん（歸るらんイ）
うき世にめぐるあはれいつまで
つながるゝ鷹のもとおしとにかくに
物おもふ身のとに夕暮
我ならず人もくるすの小鷹狩
露分こぼすすゞのしの原
たかばよりかへさの野路に月出て
心にいまはちかきふるさと
雲なれやをちとぶ鷹の山がへり
あられのみにてわたる村ざめ
雪ふれば鷹やしらふにまがふらん

葉をかくしたる草の冬がれ
末のこる鷹場の鳥の尋來て
七峯わたるけふのかり人
其すがたはとやの鷹の鈴ならし
戀しき心やはたぐひなき
おりなれてまとはる鷹の藤ばかま
野守のかゞみ五月雨の空
又をちの鷹かひ人はたが子ぞや
またねり雲雀たちぞ兼ぬる
こゐをせし鷹のみどりのうらぶれて
それとばかりの道の遠さよ
ましらふのたかさしとりて急ぐ野に
錦をみする鷹のすゞもち
みかり人ほうし姿に立出て
たか野の薄それやなかぞら
不二はまた霰のうへの朝朗
たかかほる毛も春はくもり日

吹かほる風にそうめの花散て
けしきはいかに紅の鷹
陸奥の名にも忍ぶの忘れ草
かりばの末の道のたてさま
霜をけば草に限りの葉の冇て
毛もゆきすりの鷹のひとすへ
月寒き袖のさ衣夜を重ね
手なれてだにも鷹の野心
逢事も稀なる中をしたふ身は
おもふにも似ぬ鷹のふるまひ
山されば松にや鷹の殘るらむ
たかもゆふべは霜のさゆる毛
雪に竹よるおれけなる音はして
木にはあらざる鷹のなら柴
飛鳥のゆく末暫しかくれせず
ぬすたつ鷹の心にくさよ
分過る野や白浪の花薄

羽は若鷹のおなじうづらふ
犬上やとこの山風秋ふけて
月も夜すゑの鷹のおき繩
戸ざしゝてゆるさぬ關をよも越じ
かたかへりにや鷹のあるらむ
松原のけしき青葉の花盛
しら尾の鷹のそれかあらぬか
山川や流るゝ音を聞すらむ
のりけの鷹のこゝろ淺さよ
武士の駒のあしなみかけうづら
いぬもふしみの野邊の鷹狩
百敷の日次のにえを終夜
たかえだならす山の下柴
露拂ふそでや柳のほろ衣
霧の木末の鷹のとほり羽
古鄉は軒端も月の顯れて
たがすむとなき屋形尾の鷹

佗ぬるやこすげの糸をたのむらん
そばみたかこそちかく見せけれ（わくれイ）
染替て袖色々のかり衣
にれやましろの鷹の逸物
雪よりもこゐの心の積り來て
あはする鷹のつみをしらばや
野も深しまだ見ぬ山の泊狩
あまたの鷹の名をや聞らむ
吹立る木葉斗に（のイ）風見えて
おち草しるき鷹の左り羽
袖かざす乙女の姿たをやかに
諏訪を始の御代の鷹狩

此百員（韻歟）二條良基公也。梵阿之百員（韻歟）と四十二ヶ條合て全錄すべき也。

梵燈菴鷹詞百韻連歌

何木

箸鷹のはじめやわたるから枕　梵燈庵主
こちくる鷹ぞやがて手歸る
あら鷹ををしへてみよや夕月夜
雪まろばしのあとの鷹人
犬知らぬ鷹ばの鳥をふみたてゝ
風早のはしるはたゝく鷹匠
み山かぜあたるや鷹のさゝ衣
あられふりきて鷹のふるまひ
春鷹も繼尾の鈴の籠をさして
かばざくらをば折やたかかかひ
かほる毛の鷹に殘るや花衣
さほひめ鷹やあらけなるらん
月かすむ朝の鷹の遠はまり
山ふかたより鷹の左り羽
車より鷹を御狩のさがのはら

いぬや手つかれのぞくはし鷹
ふし艸をぬす立今日を鷹いみて
こぬけのたかは竹もくゞりつ
心せよあやしき鷹のとやくだけ
秋風ふけばうきぞはみ鷹
夜にかゝるひつぎの鷹は月出て
たかをすゑ野にけふ泊り山
はし鷹のねもせてさぞな思ひ妻
かたみにと見したかの餌袋
退羽打たかをまなぶや人ごゝろ
たかのうらみをしのぶ尾のたか
むかしよりしるきは鷹の白ふにて
尾羽うちからす雪摺の鷹
月うつるはよ鷹はうききひしやく花
鷹は木ゐとるゆふ顔のかげ
巣まはりの鷹は尾をつくゑをうけて
そだてければやたか飼の山

不二颪烈しき鷹のかさなられ
名も隼のとぶぞ聲なる
白鷺も黒符の鷹のそら取て
鴟のたかぞ洲崎にもすむ
魚を食鷹は淵にや望むらむ
河泊をも犬につかふ鷹人
紅のたかのはとりの引かへて
たかやこゝろをそめしたまとり
月のよもはしやの鷹や飛ぬらん
かねはまくらにさゆる毛の鷹
ほこ羽つく鷹のさはるに花ちりて
まろの藤ふの鷹ぞいあがる
紫の大緒の鷹のみすゑ鳥
くさをさしつけかめる鷹犬
駒の足はまるに鷹を引すへて
鷹は身の毛をつむるものなり

一句脱

鷹場にものむ菊のさかづき
鳥屋鷹の後もし口をくはせじと
まづほこつぼは鷹かひの道
一句脱
青さしばこそ春の色なれ
鷹に犬櫻の花毛のくすりあり
一句脱
たかの鳥すゞめがくれのむぎうづら
かすみのふとり鷹もみつけじ
つちかひの鷹は犬にもをそれぬに
鷹匠よりてまづあげよかし
ひをなげつ鷹のとりぬる朝ぼらけ
おどろにこもる鷹のもちわけ
野心の鷹も月みる夜据して
たけのうちなるたはなしの鷹
羽ならしのたかははや〳〵とびぬらむ
つま心みよ行やはし鷹

まさるかたねたむは鷹の組合に
くろをむすぶに重ねはの鷹
はなをふむ鷹の取手のうらはしく
雪をしら尾のたかいたれかし
ひき鳥もみぬ鷹山の夕がすみ
耳かたきこそたかのくせなれ
やせたかは兎のとぶに落あひて
たがうきしきや波走るらむ
舟路にも鷹はのばゆに野は近し
須广のあそびぞ小鷹狩なる
へをたかの草はま柴にもとをれて
鷹のはかぜに動くいとはぎ
すゞもちか鷹のねずほの唐錦
つゞりあしをも鷹の裝束
矢形尾やふき尾のは鷹さま〳〵に
なつくる鷹のきみをおもしろ
いとけなき鷹のそだちしこむきまる

かひこをとりし巣おろしの鷹
ふところに綿毛の鷹をあたゝめて
春のよ鷹も寒きこのごろ
ふかはるの鷹のこゑはにおつれしに
こやまかへりのたかどりのゆき
鷹を見て隠るゝ鳥のをしへ草
くれてぞ鷹のつかれたもろき
日ものこるひき野の月に鷹すへて
たかのそがひにくるや犬飼
鳥叫びの聲きく鷹の谷渡し
ますがきは飛米山のたか
しゐ鷹の向ひの花にうつりきて
野さればたかの小芝くさとる
永日もつき鷹あれば狩くらし
やしばの鷹ぞ名にとまりける
鷹のとく金の鳥もとりかひて
しのぶねがひも陸奥の鷹

箸鷹和歌文字抄

脚革の名は劔形に脛布やま
　餌喰草分手とり械崎
架跨見鷹の大緒は五寸なり
　一文字きりさして好まず
鵅の大緒は四尺五寸なり
　つねは三尺五寸とぞきく
架またぎ四寸なるべし鶚も
　一文字きり見るもうるさし
萬鷹條の文字は大つなぎ
　また鷹緒とも書て能なり
弟鷹は七曜まなぶ七くさり
　または天神七代としれ
小鎖の五ッは五常兄鷹繋ぎ
　または地神の五代ともしれ

小鎖は三つにもつなぐ鶚は
三世をまなぶものと知べし
塒出す鷹は一の羽落しより
四十二日目能ころとしれ
一の羽や二か目三ッめ四ッ五ッ
六ッめ折目とかこふ鷹の羽
鷹の尾は大石打に小石打
なら尾鳴ら羽たすけ鈴付
幾年をふる山鵃見わけんは
打爪の根の節に顯わす
ひさご花年に隨ふやま鵃
白きところのかと增り行
一二塒上爪黑く底赤し
三塒は是にうら表あり
四五の塒上爪赤く底白く
白筋ありとかねて知べし
六七の塒は上爪黑くして

赤筋ありと思ひしるべし
八九塒爪のしらける物ぞかし
心をとめて見分べきなり
十十一底はくろくて上爪の
黃にこそ色の見へ渡るなれ
鷂の目瘤のあらばこゝろせよ
十に七ッはしけつきのもの
かわりぞと人の名付る鷹ならば
爪根石打こゝろして見よ
きみしらず石打爪根かわりなさ
幾年經てもたゞならぬ鷹
懸爪とまた鳥搦そのあいだ
五寸かにあわば弟のはやぶさ
鷹はたゞこめに光りの强くして
爪は小さく指は長かれ
能鷹はいつも毛薄ふ長ふして
餌つぼの廣きことを第一

胴丸く肩股ひろく骨ふとく
　ひほねの長き鷹ぞゆゝしき
箸鷹の請貝よりも尾す毛まで
　赤生はもみぢ大赤生なり
請貝や尾すげくこかの大黒生
　茂生の鷹と是やいふらむ
箸鷹は先はよき餌に第二には
　扱ひ人は灸てすりなり
橋鷹に切飼時の作り餌は
　薄く廣かれ骨も荒かれ
箸鷹の餌は薄廣く骨あらく〔[illegible]〕
　作り飼べしそゝろ能との
はし鷹に細なる餌は好まずよ
　若ひとかゝりあるもしられず
鷹に餌をひらかば開け詰る日は
　哀れ飼せぬものとしるべし
詰もせずひらさも得せぬ鷹ならば
　長肉となるものとしるべし
痩鷹の身の毛をつめる物ならば
　ねつあるものと思ひしるべし
肉高き鷹の身の毛をゆるすこそ
　ひへたるよとは兼てしるべし
内の冷外に熱をはし鷹は
　そゝろを上げぬ物としるべし
洗餌を好て飼や世の中の
　鷹に虫氣のなきは稀成
黄水をやともすればはし鷹の
　あぐるはむし氣有としるべし
箸鷹の餌を打ことは餌〔[illegible]〕違ひか
　また胸に熱有ことしるべし
餌違ひの鷹と思はゞ羽を垂て
　胸の毛こそは三段にたつ
餌違ひの鷹は腰ぬけ息嗅か
　黒うち亂れ羽杖つくなり

箸鷹のいどみ心に見へたらば
　いそぎひき餌に又は活鳥
詰り氣の鷹は小うちに數有て
　架や擧にかゝるとはしれ
箸鷹の虱わくものあるならば
　餌かさ飼とも肉ひくとしれ
黑うちのとけて亂るゝ物ならば
　匂ひもあらん胴熱の鷹
白糞の黄に色替る病ひ鷹
　胴氣胴たけうたがひもなし
箸鷹の白糞とけて黑うちは
　たゞよきころに亂れぬぞよき
うち持のひほねはづれに丸うして
　猶かたよらば病なきたか
はきくもねひき增り行やみ鷹は
　十死一生なるものとしれ
箸鷹の餌にこそよけれいつとても
　籠しめになき雀なりせば
春夏の雲雀は鷹の餌にもよし
　秋飼きうへほしきものなり
靑しとゝ頭をさりて鷹の餌に
　飼は能なり血熱さまして
頭高せつにも同じ鷹の餌に
　能とおもひて悦びてかへ
ほう白やほう赤などの古き餌は
　鷹にあたると氣を付て飼
木つゝきや鵙鶺に小虫喰
　虫氣の鷹の餌にやよからん
鷹の餌にむく鳥おけらまめ廻し
　さして好めものとしるべし
連じやくやあかすひぬかに河原ひば
　あとりもさして鷹に好まず
折としれ鷹餌違ひの有ものは
　あとりほう白つゝみなりけり

ひよどりや赤はらつぐみ鷹の餌に
ふるくは曾て好まざらまし
鷹の餌に尾長かけずば好れじ
血の氣も薄く身こわくも有
鷹の餌に鴫や千鳥は好まれじ
ましてふるくはいらぬ物かは
にうないや阿鳥も同じ時として
鷹の餌違ひ有とこそきく
田雲雀や菊頂やくわつこ鳥
たかに飼なば若や餌違ふ
鷹の餌にきろふとはしれ何鳥の
おのがかたちは替る大小
肉高き鷹に鶉を捉飼は
たてに小刀あてゝ大きれ
肉瘦る鷹に捉飼うづらをば
横に小刀あてゝ小切に
鷹の餌に飼ふまじき物とうの鳩
めわくわうちわづらひとなる
雉子鳩は鷹にはさしてあたらねど
餌押甲斐なく糧たけもなし
白鳩は能餌とはせじむかし人
今は虫氣の鷹にきらへり
箸鷹の餌にこそよけれ細鳥
雀十二に積り置なり
鴈がねや白はら鴈も鷹の餌に
あしくはあらぬ其日一日
白鴈は鷹に捉飼ふ時までや
しげく餌にせば悪らん物
鷹の餌に小鴨はよきと思ひしれ
眞鴨ひ鳥はまして好まず
白鷺や五位青鷺のたぐひをば
丸をば鷹に喰せよとしれ
忘るなよ鷹にかにしほ時鳥
餌違ひせじを度々に見じ

とに角に魚くふ鳥は鷹の餌に
　あしかりなんとかねてしるべし
常に能餌とはいふともはし鷹の
　ふるく見へなば飼まじき物
箸鷹の折餌はかわじ品を替
　異成やうに飼ふ物ぞかし
鷹の餌に土餌の能は白赤や
　いづれなりとも年若き犬
白赤の毛色もわかぬ名なし犬
　鷹の餌にせばあたるとはしれ
鷹の餌にあたる土餌を見分んは
　ちかづくはよし付ざるはいめ
四つ眼てがらかせむしうちこめや
　手負狗こそ鷹にあたる餌
箸鷹のむじなは毛をもみせざらめ
　命ありても鈍に成とや
兎こそ鷹のうちすく能餌なれ
　折かさなれはこゝろ有べし
木火土金水五色や仁義禮智信
　五常五味をも鷹に學べり
觀世音普賢不動に毘沙門は
　鷹をさづくる四佛とはしれ
一つ鷹一居なれや二たつより
　連文子おばもとゝ讀なり
忘るなよ手をもてせまし鷹鵬り
　露にも濡てかわきかねたる
弟鷹は面嫌ひするものなれば
　むかしはしゝを塗りてぞみし
手を嫌ふ物と思はじ鶏の
　毛を吹分て肉もてそみめ
塒鷹は呼渡すなり〔立樂〕新鷹は
　呼廻ども呼置るとも
箸鷹の羽飛といへる文字には
　鳩飛なれや羽翔とも書

若鷹は賞翫にせよ𪀚鷹は
　一度なりともまり渡すべし
弟兄鷹を二度に人に渡しなば
　跡はかならず弟鷹ぞかし
弟鷹に又鶚をさしそへて
　渡さば先に眞鷹ぞかし
鷹の策尺にあはせて見る時は
　ひさく華まで□すに入べし
水總を柄杓花とも書ぬべし
　文字違ひてはいふなたる策
鷹熱條の總も非尺はな
　尺にはいらぬ物ゆへぞかし
箸鷹の尾さきの白き所をば
　拾華とは文字に書なり
箸鷹の亂れ脚結といふことは
　縫はて其まゝさすを云なり

右百首當家の甚秘書たりといへども相傳する物也。末代に至り散亂無之樣可心懸專也。

天正十三年十月三日

淺利兵庫助政義判

津田小八郎殿

以宮内省圖書寮所藏塙氏原本再校了　芝葛盛

大正元年十二月十一日印刷
大正元年十二月十五日發行
昭和十二年八月十五日六版發行
昭和十五年十二月十五日七版發行

發行者　東京市豊島區池袋二丁目一〇〇八
續群書類從完成會代表者
太田藤四郎

印刷者　東京市淀橋區戸塚町一丁目一〇九
永島喜代次郎

印刷所　東京市淀橋區戸塚町一丁目一〇九
新英社印刷所

發行所　東京市豊島區池袋二丁目一〇〇八
續群書類從完成會
振替東京六二六〇七　電話大塚七一一八